THE CENTRAL REVIEW

大正十三年七月廿五日印刷納本
大正十三年八月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論

八月號

第三十九年　第九號　第四百三十八號

文明の沒落

室伏高信著

●文明設落の豫言、●世界の再創造！●然り西洋文明の否定、●亞細亞●靈の目醒め——●自由人の赤き血の滴り、●自由靈の自己創造詩！

これ實に「文明の沒落」であり、また「自由人は斯く語る」の凡てである。著者は世界の最新思想に立脚しつゝしかも自由なる生命の求むるまゝに本著を爲す。西洋文明沒落の魔は、一部の文明病患者のために否定されつゝも、詩人的直觀の凡て、否な歷史の科學的研究それ自身さへも、今や明白確實にそれを豫言しつゝある。人々は尙ほとの事實を知らずして居ることができるか。時代を見よ、時代を見よ、沒落の時がきた！

文明の沒落がエポック・メエキングのものであるとは最早や人のがこれを許すであらう。この押寄する感激の波を見よ。發行後七ヶ月その賣行きは最初と少しも異るなく最高知識階級の出入する神田丸善支店は一軒よく三百冊を賣盡くしたのです。自由人は斯く語るは前者の如く體系的ではないがそれだけに時代精神とその批評として新らしきものへの豫言のより多く側面的なものとして前者の姉妹である。

第廿五版

定價壹圓六拾錢 送料十三錢

東京市大森不入斗（振替東京四五三四六番）

批評社

自由人は斯く語る

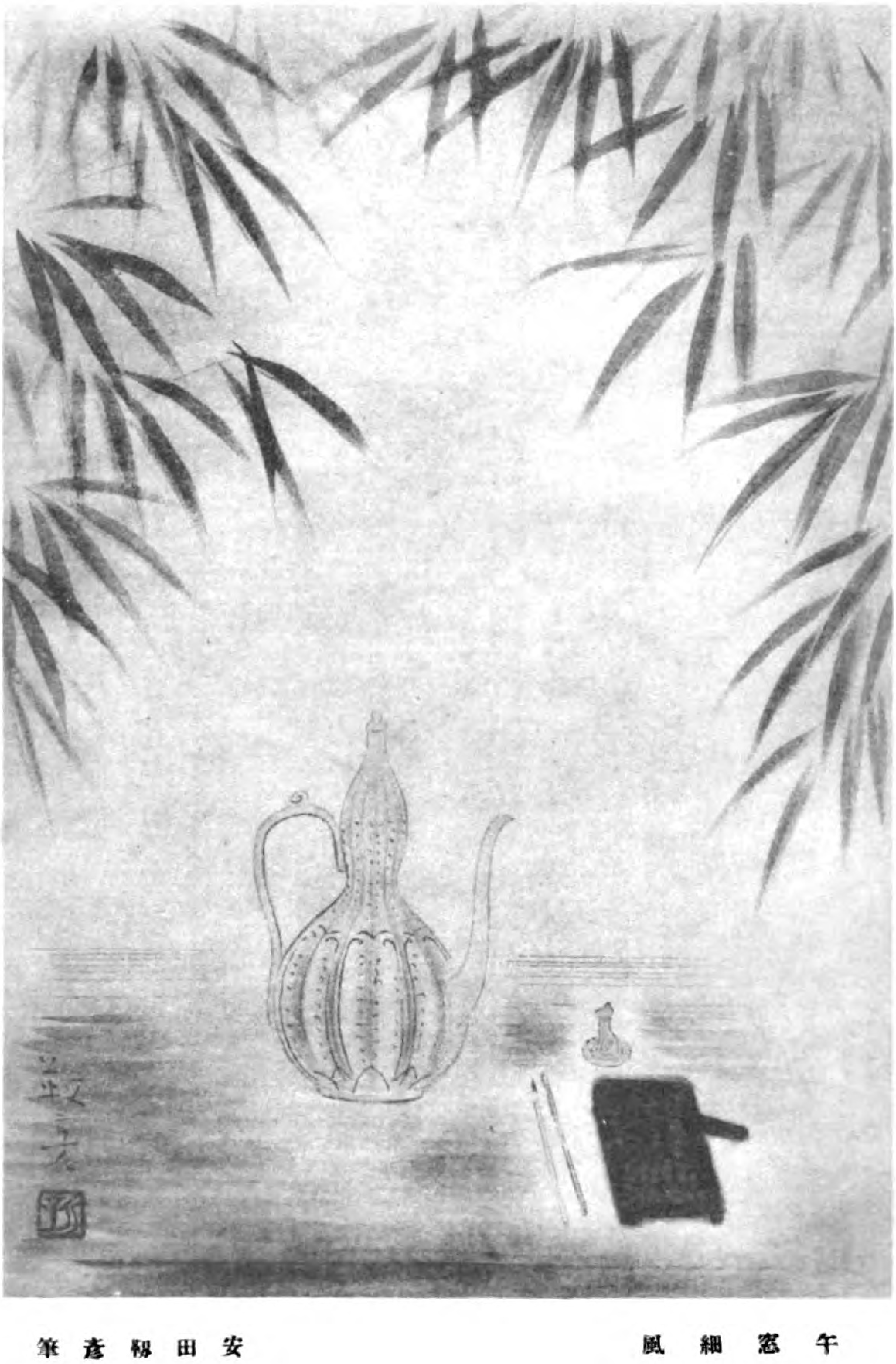
定價壹圓八十錢 送料十五錢

第五版出來

目次‖自由人は斯く語る—地震の後—丸ビル時代—農民よ背け（一）農民よ背け（二）農民よ背け（三）小學校の先生に寄す—尾崎行雄氏への書簡—政治改造の原理—愛國非愛國—汝選むこと勿れ—知識階級の問題—有島武郎氏からの書簡—プロカルト—科學とアナキズム—ガンヂへ—男性智から女性靈へ—制度としての女—肉體文化—肉の解放とエロス—性のユートピア—三越—死について

附錄‖晩年のクロポトキン—ロマン・ロオランは共産主義について斯く語る—レニンのユトピア

卑猥なる廣告の申込は謝絕す　中央公論社



午窓細風　　安田靫彦筆

丸善インキ

萬年筆用

アテナインキ



どこの書店にも文房具店にもあります

大正十三年

中央公論

八月一日發行

八月號

第卅九年第九號

第四百三十八號

最近の問題

政界の耆宿武富時敏君、樞府入りの噂徒らに高くして僅に勅選議員となる。黨界の人にして勅選せられし者に杉田定一氏あり、武富君を以て異數とせず。樞府入りに至つては從來の例に依らざる觀ある。而も他の顧問官と伍して遜色なきは、亦毫も疑を容れない。夫にも拘らずこの噂は遂に實現しなかつた。人あり曰く官歷に乏しと。又曰く黨人なるが故に詮衡に入る能はざりしと。官歷を云々するも滑稽だが、黨人たるが故に樞府の門が開かれずとの風說にして果して眞ならば、吾人は先輩諸公の頑迷に一驚を喫せざるを得ない。政黨は則ち國家を以て任ずる政治家の團體ではないか。之に屬することが陛下最高の顧問官たるに適せずと云ふは結局何事を語るものか。黨人に非されば內閣組織に適せずとの慣行が漸く成立せんとするの今日、黨籍を以て國家全局の利益と相容れずとする謬想の横行するは、吾人の解し能はざる所である。併しこの謬想の横行を許して居るに就て今日の政黨其者にも責任あることは亦言ふを待たぬ。先輩諸公の頑迷を指摘すると共に切にまた政黨者流の猛省を希望する。

× × × × × ×

憲法制定に與れる某老高官の談なるものを或る新聞で見た。貴族院設立の理由を說明して曰ふ、衆議院の議員は多く政黨員を以て占められる、政黨の人々は必ずや黨本位で物事を觀、國家本位であるべき理義を疎にする、だから貴族院を設けて衆議院の偏執を匡すことにしたのだと。斯くて貴族院亦衆議院に倣うて政黨的結束行動を敢てするの非を責むるのはいゝが、政黨は常に本質的に國家本位の立場に立ち得ないとするは、大なる謬妄の言である。政黨はこの誤りに陷り易いといふのはいゝ。陷るべき筈のものだとするは理論に於ても實際に於て、甚しき謬見たることを斷言する。

但し從來の政黨に之を謬見だと敢然言ひ切る資格のないことも、殘念ながら認めない譯には行かない。從來の政黨にして常に其の本領をあやまることなからん乎、下岡君が政務總監になつたとて黨籍を脫するの不合理を敢てしたり又は滿鐵總裁を黨外の人材に物色するの愚を敢てする樣な必要もなかつた筈だ。もう大抵にして政黨も目覺めねばならぬではないか。

同じ樣な非難から貴族院だけが免れ得ると思ふものあらば是亦稀代の大たはけたることを附言しておく。

× × × × ×

貴族院の改革に衆議院の差出口は無用だとする說がある。衆議院に於ける貴族院改革の建議を眼頭に置いての話だらうが、誰が唱へるにしろ斯の如きは以ての外の愚論だ。殊に貴族院そのものゝ一角に斯の說の唱へらるゝに於て然りである。

貴族院の改革は國家的問題である。我々國民に取つて利害休戚の關する所實に大なる問題である。衆議院議員選擧法の改正といふ國家的大問題が貴族院に於て論議せらるゝの妨なきが如く、貴族院の改革は毫も衆議院に於て取扱はるゝに不思議はない。己れの事は己れ獨りでやるといふ割據的抗辯は、寧ろ公器を私するの甚しきものと謂はざるを得ぬ。

人或は曰ふ、貴族院令は貴族院の議決を經ずしては改正增補することが出來ない、之に依て貴族院制度の改革に衆議院の容喙を許さゞる憲法の精神を覗ふことが出來やうと。敢て問ふ、兩議院の議員は現行犯罪又は內亂外患に關る罪を除く外會期中其の院の許諾なくして逮捕せらるゝことなしとの憲法第五十三條の規定は、議員逮捕の獨占權を夫れ〲の議院に附與し全然司直の府の容喙を許さゞるの趣旨なりやと。論理の濫用も茲に至て極れりといふべしだ。

× × × × ×

米國民主黨の大統領候選大會は、百有餘回の投票を重ねてやつとデヴヰスにきまつた。評す家は曰ふ民主黨に人物乏しきの證據だと。又曰ふ三分の二以上といふ定足數が高過ぎると。それもさうだらう。だが我々は斯くまでの面倒を意とせず飽くまで萬民環視の下に正々堂々と爭ふ其の政戰の見事さに恍惚とする。外國なら所謂政界策士の暗中飛躍に依て問題は疾くに陰微の間にきめられたであらう。併し拙速は巧遲に若かず。兎角樂な方法に倚りたがる政界に於て特に然りとする。況んや樂な方法は常に必ず醜汚なる弊害を伴ふの國柄に在てをや。

× × × × ×

先達の議會で暴露した預金部の鮮銀融資ほど近頃不都合極まる怪事はない。預金部の資金融通に付ては從來とても多大の疑惑を向けられて居たが、議會に於ける言明通り、四五兩月に壹千萬宛更に六月十一日の親任式當日別に又一擧參千萬圓を貸し下げたとすれば、吾々は[illegible]田前藏相を國民の公敵とする一部の[illegible]論を[illegible]下に斥くるの勇氣はない。繰言ながらことわつておく、預金部の融資は全く大藏大臣一個のわたくしでどうにでもなるものだと。

國民よ、奮つてこの隱れたる積弊より我が國家を救へ!!

中央公論



第卅九年第九號
八月號
第四百三十八號

帝國の重大時機と國民の國際的常識

法學博士　米田實

一

七月一日米國に於ける排日移民法の實施は、恰も我國民の中に爆彈を投下した如き觀があつた。之と前後して我國民の輿論は鼎沸し、東京大阪を始め全國の各都市は勿論、水村山郭に至るまで抗議的集會は行はれ、大いに國民憤慨の氣焔を揚ぐるに至つたのである。同時に曾ては日本開國の恩人であり、又其後日清戰爭に至るまでの久しき年月に於て、

我國權恢復に至深の同情を表示し、親友の如く兄弟の如く見られて居つた米國は、此事件の勃發と共に、日本國民憤怒の標的となつたのである。這は決して不自然のことではないが、併し翻つて冷靜愼重之によつて生ぜんとする太平洋の新國際形成變動の徵に想到すれば、我國民が極めて重大なる岐路に立つてゐることを念はなければならぬ。此秋に當つて選む所の途正しきを得、行ふ所の措置宜しきを得るとせば、我國の前途には光明ある世界が展開し來るのであるが、之に反して一歩を誤り選む所の途正しからず、執る所の措置當を得ずんば、明治大帝の御代以來日進月歩、東洋の民族中に於て白眉となつた日本の國運は、忽ち轉じて累卵の危きを見るであらう。考ふれば考ふる程、我國今や重大時期に際會して居るのを知るのである、予が茲に現時局に對し一言を加へ以て、國民の公明なる批判に愬えんと欲するものも、亦た眞に衷情止み難きものがあるからである。

今日米國の排日移民法律に對する國民の憤怒が、當然過ぐる程當然であることは云ふまでもない、然も斯く言ふ吾々も、決して米國に、何等外國移民を制限する權利なしと云ひ、又其の移民制限策を不可なりと爲すものでもない。勿論理想より云へば、世界四海兄弟の主義が完全に行はれ、人道博愛の思想が、天下に瀰蔓せんことは吾人の希望して已まぬ所であり、斯る理想の世界が現はれて來たならば、今日人口の乏しき民族が廣き土地を占有して、他民族の總てを排斥し、人口過稠なる民族が狹き土地に制限されて、痛苦的生活を送ると云ふやうな、不公平なる狀態は必ず滿足に除却せらるべきものでなければならぬと思ふ。併しながら人類の道徳は遺憾乍ら未だそこまで進歩して居らぬ、中に宗教家あり理想家あり學者ありて、頻りに人道博愛の思想を說くが、多數の人口を有する國家の政策となると、地平線低下した國民の平均的思想に捉へられて到底さう云ふ理想實現の境涯には達し得られない。其獨立せる地域を所謂主權と稱し少くとも法律的に觀て無限なる權力と見做されて居るものゝ下に置き、以て他の國家と相對峙し且つ之を經營するに自利

を以てする國家的政治の代に在りては、假令自己の領土内に空地を存することあつても、それが些少でも自國民の利益を犠牲に供するとすれば、それに甘んじて迄も國外の他民族の極端なる痛苦を救濟せんとする程の仁心は無いのである。一例を擧ぐれば二百九十萬方哩の面積を有する濠洲の如き、一方哩の人口僅か一人十分ノ八に過ぎないにも拘らず、極めて嚴格に其門戸を封鎖しつゝする現狀ではない乎、從つて近年米國が十九世時代の、移民歡迎方針を一變し步一步移民制限政策に變改し來れることに就ても、吾々は何等の言議を挾むの心が無い。殊に米國の移民政策變改は、決して無理由に行はれたものではない、それは第一國内の人口狀態並に經濟狀態の影響、第二國家としての存立及鞏固保全の政策から起つたのであつた。先づ人口問題から云へば米國は今より百年前、一方哩人口五人しかなかつたが、今日では一方哩三十五人平均を算するに至つた、就中ロードアイランド州は一方哩五百六十人、マサツセツツ州は一方哩四百七十九人を算し、紐育州は一方哩に二百十七人の住民を見、又西部に於ては市俄高を含むイリノイ州が一方哩百十五人を數ふるに至つた、斯の如く人口の增加に伴ひ從來如何に生活苦を見なかつた米國人と雖も、幾分形勢の變化を感ぜずには居られなくなつた。

回顧すれば十九世紀中半南北戰爭終了當時の如き百萬の軍隊が解隊せられ、更らに、歐羅巴よりの移民さへ激增を告げたのであつたが、決して生活の脅威ともならず仕事の減少を見るが如きこともなかつた、國内に土地が有り餘つて居り米國市民は殆ど形式的の金員を納むるのみで、十町步或は二十町步の土地を無償同樣國家より下付せられる狀態であつた。若しも東部中部の經濟狀態が面白くないと見ると、彼等は續々所謂「遙かなる西（ファーウェスト）」へと進みそして新しき土地を開拓し農業其他の事業を試み以て形成を緩和するを得たのであつた。かくて彼等は自からの運命を開拓すると共に、更に歐羅巴其他よりの移民を輸入し、自分の行へる開拓其他の事業を盛んに促進せしめ共々に利益を享受したものであ

つた、然るに近頃は、空地も乏しくなり、唯だ經驗する所は市民たる彼等が、低廉なる賃金を以て勞働する外國移民と競爭しなければならぬ立場に逢着し、動もすれば外國移民の爲め生活程度を低下せしめらるゝことであつた。之に加えて米國の移民政策を刺戟したものは、今次の世界大戰爭の教訓であつた。それは何かと言ふと、今まで米國にては歐羅巴方面より一年間百萬人程度に達するまで、自由に移民を入國せしめ然も移民の米國同化方策に就てはさして注意を拂つて居なかつた。愈大戰爭の開始と共に此欠陷は明確に暴露せられた實際であつた、何となれば最早歸化して米國市民となりたるものゝ間に、未だ英語を十分に解せざるものあり、米國共和の黄色何たるを知らざるものさへあつた、彼等は依然として自己の生れたる本國に忠實ならんことを欲し、米國は唯一時の假りの宿と心得るものも多かつた。斯くて歐洲大戰中、米國より歐羅巴にする軍需品輸送に際し、鐵道鐵橋を爆破し妨害を試むる獨逸系米國市民の現出を見た。又米國の彈藥武器製造工場に放火する墺地利系米國市民の出現を見た、即ち、兎も角も世界大戰爭の經驗は米國人をして其の國民として眞の統一を有せざることを痛感せしめ、從來移民政策の缺陷を反省せしめたのであつた、かくて米人は今後國家の自衛上、同化し得る程度の移民、即ち自己が消化し得るだけの新しき移民數しか吸收してはならぬと考ふるに至つた。而して此國家としての存立問題と前に說いた經濟狀態の變化とは遂に米國をして新移民政策を執らしめたのである、即ち其第一の現れとしては去る大正十年五月議會を通過し、同年七月一日より實施さたる有名な三分人國法律が是れであつた。同法律は明治四十三年（一九一〇年）の在米各國人々口を標準とし、其百分の三を米國内に入國せしめる規定であつて、該法によりどの位各國移民が制限せられたかと云ふに、其前年度に於て八十七萬餘を算したる移民數は翌十一年には突如三十萬人に激減した、而して最も大なる影響を受けたものは伊太利人で、前年度に二十二萬人を入國せしめたものが、同法實施後四萬二千人に著減した、影響の程度割合に少ないと觀られて居る英國人すら、

前年まで十一萬人の入國者を數へて居たものが、七萬人以下に減ぜらるゝことゝなつた。然るに該制限政策は今年に於て一層其歩を進められた、曩に發布されたる制限法律の基礎たる明治四十三年（一九一〇年）の、在米各國人統計に代ふるに、明治二十三年（一八九〇年）即ち二十年前に於ける在米各國人口統計を基礎とし、然かも其標準を曩の三分より更らに苛酷なる二分に改めそれ以下の人數しか入國を許さゞることに變更したのである、之は從前の移民入國狀態に比すれば、實に恐ろしき制限と云はなければならぬ。此新法により外國移民は如何に制限せらるゝか、恐らく總數に於て一ケ年十五萬人以上入國は不可能であらう。即ち從前八十七萬を算したる移民は大正十年の三分入國法によつて三十萬程度に減少せられ、更に今回は其二分の一の十五萬人に減少せらるゝことになる。以て其制限の如何に大なるかを知るに足るのである、然も之によつて最も大なる影響を被る民族は恐らくは伊太利人であらう、一年二十二萬であつた其移民は三分入國法によつて四萬二千に減じ今亦新法の實施と共に一萬人内外に減少せらるゝことゝならう、何となれば同國は明治二十三年頃の在米人數極めて少なく、寧ろ其以後に於て渡航者增加したものの一であるからである。次ぎに波蘭國民の如きは明治二十三年以後移民激增した關係上、今回立法の影響蓋し大なるものあるは想像に難くないのである、而して、斯くの如く歐羅巴諸國に對しても一般的移民制限政策とられ、つゝある米國が、我日本人に對して齊しく制限政策を執るとしても、其政策の大體的傾向に對して吾々は異存を唱ふべき理由はあるまいと思ふ。衷心に於て道徳的にそれが理想的なるや非なるやは別として、兎に角米國が歐羅巴各國民に對して同一に執りつゝある制限政策を、我日本人に適用するとしたならば、吾々は異存を挾むべき立場なきを感ぜざるを得ないのである。此點は我國民が移民問題を考ふる時に於て、餘程注意し考慮せなければならぬ事柄である。

併しながら此米國の移民制限政策を已むを得ずとして承認する吾々も、今回の不能歸化外國人入國禁止の形式を以

て、日本人のみを制限したる一事に對しては、斷乎として其不當を鳴さゞるを得ないのである。何故なれば同法は云ふまでもなく、日本人に對して所謂特殊的差別待遇を意味するものなるが故である。日本人が白人にもあらず阿弗利加人にもあらず、黃色人種なるの點を理由とし、且明治三年米國歸化法が白人並に阿弗利加人のみに歸化權を許容せる事實を利用して、曾て伊太利人佛蘭西人英國人獨逸人露國人白耳義人其他に加へたることなき禁止的規定を、我が日本人にのみ加へたる點に於て、極めて不當なる待遇と云はなければならぬ。殊に實際的に考ふるも今日黃色人種は十億に近き數を示せるが、然も事實上影響を受くるものは我日本人のみではないか。黃色人種中最も多き數量の「四億」を數ふる支那人は、固より其字義に於て法文の影響を受くるものであるが、實際問題より云へば彼等は、既に明治十五年排斥法律制定でその勞働者の渡航を禁止せられ、その後明治十七年、明治二十五年、明治三十五年、明治三十七年等、順次に排斥程度が嚴密となつた、就中、支那國民にあらずとも、苟も支那人の血を帶びたるものは、悉く入國を拒絕せらるゝこととなつて、之が爲め我帝國臣民中三百萬の臺灣人は、支那人の血統あるが故に入國不可能なりと云ふ點にまで、同民族は面倒なる規定に束縛せられて居るのである。翻つて三億三千萬を數ふる印度人は如何と云ふに、是亦大正六年に於て經度緯度による排斥法律、即ち東經五十度より東經百十度に至り、而して北緯五十度の南に位する地帶よりは、米國に入國を許さゞる旨法律によつて規定せられ、完全に禁止が行はれて居る。從つて米國の移民統計に現はれてゐる東洋諸民族中、他は大抵已に十分に排斥せられて居り、實際今回の法律の影響を受くるものが、獨り我日本人たることを知らば、誰か其差別的待遇の益々甚しきを思はざるものがあらう。事情斯の如くなれば、吾々が今回の法律に對し大なる不滿を感ずると共に、維新以來黽勉努力他の諸強國と均等的地位を占め、巴里講和會議に於ても五大國の一となり、華盛頓會議に於ては三大海軍國の一となつた歷史に鑑み、又た努力奮鬪せる記憶に照らし、益々憤懣の度を加へなけれ

ばならぬのは、寧ろ當然である。斯く考へて來ると、吾々は國內に現はれた國民の對米憤慨の念に對しては、之を正當とするも不當とすべき理由を發見しないのである。是れは予が本論を成すに當つて切に明かにしたいと考ふる所である。

併し乍ら義憤其者は問題でないとしても、玆に問題としなければならぬのは、斯の如く對米問題に憤慨せる我國民は今後如何なる行動、如何なる態度を執るべきかと云ふことである。精神上の憤慨は固より當然であるが、其憤慨を行動に現はすべき形式若くは此憤慨より生ずる我國の政策に就ては、我國民中種々なる思想の流れもあらうし、種々なる方策を希望する人々もあらうが、要するに國家的大問題たるを失はぬのである。是れ大に考慮を要する所であらねばならぬ。而して之に就て吾々が大いに憂慮せざるべからざることは、今日まで步一步、大國民たる傾向を作りつゝ、然も大國民たるの過程に立つて居る我民族が、其國際交誼に於ても正當であり、國家發展の上に於ても正當であると言ふ道筋を進む可き、訓練を其政策の上に於ても、之に關ずる國民的言行の上に於て進めんとしつゝあるの時期に於て、其訓練と合致せざるものを生ぜることである。否な寧ろそれに違反するが如き行動を執るもの、續出することである。這は果して國家のために慶すべきことであらうか、例へば大人氣もなく皮相的な對米戰爭を呼號し宣傳するもの、如き其一例である。又た恰も短氣にして智識たらざるものが、憤怒せる際行ふが如き所爲、例へば鐵瓶を投げ窓硝子を打破り或は自己の身邊にある器物を破壞すると同一型である極めて思慮乏しき輕忽にして然も瞬間的線香煙火式怒り方騷ぎ方を爲すもの、現はれつゝあることは、吾々の最も愚劣なりとする所のものである。彼の米國は勿論歐羅巴諸國に於て誤解せられ又少くとも誤解せらるゝ材料となれる帝國ホテル闖入事件等も、闖入者等は大いした事とも思はなかつたであらうが、苟も國際關係を顧念するものから云へば、誠に莫迦々々しき事件であつた。若し夫れ米國大使館構內に於ける國旗引降し事件の如きに於ては、思慮淺薄で且つ有害な行動であつたと云はなければならん、國旗は其國の權威を代表

するもの、大使館等の國旗に於て殊に然りである。今迄に國旗事件として記憶に新たなるは、日支間に起つた南京の日本國旗侮辱事件があり、米國にてはウィルソン大統領當時墨國大統領ウェルタ政府との間に起つたヴェラクルーズに於ける米國々旗侮辱事件がある、此外古い例を擧ぐれば米國に於ても今を去ること三十年前ペンシルヴアニヤ州に於ける佛蘭西國旗引降し事件があつた、之は單に局部的問題に止まり、國民的憤慨に何等關係なかつたに拘らず、相當問題になつたのであつた。又布哇合併後布哇に於て米國軍人の獨逸國旗侮辱事件が起り、國際紛議を釀せることもあつた、日本に於ても刑法第九十二條に於て、外國に對して侮辱を加ふる目的を以て國旗を除去し若くは汚穢したるものは二年以下の懲役二百圓以下の罰金に處すと規定された位である、今回の國旗引降事件の如きは、諸外國間に日本國民の信用を低落せしむる外、何の効も無い所である。併し吾人は斯の如き一々の事件の論評は姑く措き、兎も角焦眉の問題として考へなければならぬことは、云ふまでもなく我國民が米國の排日問題に關聯して如何なる態度に出で如何なる方針を執る可き乎の點である、一部反動派が唱道するやうに我國民は果して急速に米國との衝突に向つて一歩を進むるの措置に出づべきものであるか如何、是れである、又たよしや直接衝突に向つて歩を進めずとも、大體に於て反動派流の極めて古風なる軋轢精神を以て移民問題に處するが正當であらう乎是れである。吾人は遺憾ながら斯くの如き所見に同意することが出來ないのである。

二

予が是等反動主義者に對して問はんと欲する所のものは、戰爭若くは之に近き國際軋轢と云ふものが、果して双方間の係爭的問題を解決し得るかどうかと云ふことである。若し戰爭が二國若くはそれ以上の相互間に於ける問題を處分し、

解決し得るものとするならば、それは時として必要なものだとの議論を爲し得る根據となるかも知れない。併しながら吾々が之を世界の歷史に徵し、之を過去の教訓に照らし來る時に於て、戰爭は決して國際紛爭の解決に適せず、獨り之を解決し得ざるのみならず、一層他の問題を作り出すことを考へなければならない、即ち國際的怨恨を貽すことによつて、更に無限に戰爭を徵發し誘致し、一度解決し得らるべく思はれた問題も永遠に解決し得る能はざることを考へなければならない。此點に就いて吾々が先づ第一に思ひ起さねばならぬは、佛蘭西と獨逸間に橫はるアルサス・ローレン問題三百年の歷史である、一八七一年（明治四年）獨逸が佛蘭西を打破し、面積五千方哩人口百八十七萬のアルサス・ローレンを獲取したる當時に於ては、獨逸人側から云へばアルサス・ローレン問題は一旦解決せられたばかりでなく、獨逸に大なる利益を齎らしたので、戰爭の効果も茲に至つて最も明かにされたる如く思はれたのであつた。此點は其後に於ても一部獨逸人により大に高調せられた所であつた、何となればアルサス・ローレンは人口百八十七萬中、獨逸語を語るもの百六十三萬、佛蘭西語を語るもの二十萬を算し、獨逸語の方が盛んに行はれて居り、人種的言語的立場より云ふも、アルサス・ローレンは當然獨逸に歸屬すべきものと思はれた、從つて獨逸から云へばアルサス・ローレンの奪還は、自己に於て正當なる行動であると信じて居たのであつた、加ふるにアルサス・ローレンはスイツツランドと白耳義の中間に位する極めて狹小なる地帶であつて、そこを獨逸の手に收むることは軍略上からも、頗る有利なる事柄であつた。故に當時講和談判の際にビスマルクの如きは、一八七一年二月二十一日ブッシュとの會見に於て云へるが如く、彼はアルサス・ローレンの獲得を欲せずして、寧ろ他の或種の利益を得んことを希望して居つたにも拘らず、軍閥の中心たるモルトケ將軍が之を主張し、ウイルヘルム皇帝亦モルトケ將軍を支持するに至つて、遂にメッツを中心とするアルサス・ローレン地帶は獨逸の手に歸したのであつた。而して右の軍略的地域は獨逸に歸したるのみならず、其後に於て

盛んに鐵を産出せることによつて、一時獨逸が此地を獲得せることの如何に有利であつたかを示したのであつた。何となれば割讓當時に於けるアルサス・ローレンの鐵年産額は五十萬噸位しか出なかつたのであるが、間もなく採鑛上の發明により急に産額を激増し來り、一九〇三年（明治三十六年）頃には最早獨逸は外國より鐵を輸入する必要なきまでに潤澤なる産出を見た、世界大戰開始前に於けるローレンの鑛鐵産額は實に二千百萬噸てふ巨額に達するに至り、獨逸が世界戰爭に於て大いに戰鬪力を發揮した所以のものは、實に國內に於て二千八百五十萬噸の鑛鐵産額を有せるが爲めであつた、然も其四分ノ三がローレンより産出せる點から觀て、アルサス・ローレンの獲得が獨逸に取り如何に有難いものであつたか、換言すれば吾々は限界を普佛戰爭後四十年間丈けに局限し、其歴史に顧る時、同戰爭の如き光輝々たるものあるを見なかつた。之によつてアルサス・ローレンを手中に收めたる點は、全く獨逸の立派な成功の如くに見られたのであつた。

然れども吾人が記憶せねばならぬのは、之を以てローレン問題は解決したかと云ふことである、アルサス・ローレンを奪はれたる佛蘭西は至深の怨恨を獨逸に含み、之に對して復讐の用意を怠らず、獨逸又佛蘭西に對して備ふる所深く、遂に今回の大戰勃發するや佛蘭西の對獨怨恨は成功し、アルサス・ローレンは再び佛蘭西の手に取返さるゝに至つたでは無い乎、然かもアルサス・ローレン問題は今回佛蘭西の手に渡したるとを以て、最早解決し終つたかと云ふに、必ずしも解決したとは首肯されない。何故ならば今日衰微せる獨逸が又復佛蘭西に怨恨を懷き、他日之が恢復運動を起し來らざることなきを誰か保證しやう。併し這は單に十九世紀より最近に至る事實のみを見たのであるが、翻つて今少しく十七八世紀の古きに亙り、過去三四百年の歴史に遡つて、アルサス・ローレン及び其附近一帶の問題を檢し來ると、吾人は一層至深の感慨を禁じ得ないのである。何ぞや、十七世紀時代に於ても佛獨兩民族はアルサス・ローレン並に其附

近一帶の地を爭奪して居たものである、無論當時獨逸の中心は普魯西でなく今日の墺地利であつて、所謂神聖羅馬國の系統を繼承し來れるハップスブルグ王家及びその勢力下に在るものと、一方は佛蘭西王家との爭ひであつた、其一例を擧ぐればルイ十四世時代、一六七八年に於ては、ナイメーエン條約により佛蘭西は和蘭西班牙を打破せる結果として、ローレンを奪取したのであつた、そしてルイ十四世はローレン獲得によつて、自からはローレン問題は解決せるものと考へて居た、所がそれは決して眞の解決ではなかつた、僅か二十年を經て獨逸皇帝並に諸公は瑞典西班牙其他と聯合し、オーグスブルグ同盟を作り、舊神聖羅馬帝國の安全を圖らんとし、英國又之に後援を與へ相携へて佛蘭西と戰を交へた、其結果ルイ十四世が折角我手中に收めたるローレンは、再び彼等に還付しなければならぬことになつた。斯の如くしてアルサス・ローレンの狹い地域は過去三四百年に亘り、佛蘭西系と獨逸系との間に爭ひを繼續し、然も一旦解決せる如く見えて解決せず、何百年間舊態依然たる有樣である、然かもこは獨りローレンの事のみならず廣く眼を放てば、ライン一帶の地域がさうである。ライン地帶は佛蘭西ルイ十四世時代より、彼等の所謂天然國境論を基調とし、自から之を獲得することを希望して居たのである、此思想は昔もあれば今もある、ルイ十四世は此天然國境論を眞向に振翳し獨逸皇帝其他諸公と爭ひ、佛蘭西領土を擴張せんとした、即ちライン河まで佛領土を擴張し以てライン問題を解決せんとするのは、佛蘭西の傳統的理想であつた。佛國に於ては少くとも國境は山川河海湖沼等の、天然障碍物を以てする權利ありとの思想を固く持した、而して自國の國境を見れば英國とは海を隔てゝ相對し、西班牙とはピレネ山を以て境し、瑞西方面はアルサス山を控えて居る一方、白耳義獨逸方面に於てはライン河を以て他國との國境と爲すのが當然と言ふ考へであつた、之が爲め幾度も戰ひ紛爭絕ゆるなき狀態である。然るに獨逸側にては佛蘭西の此主張を以て無論當然なりとは思惟する筈がない、されば一旦取られても再び奪還することに努めて居た、斯の如く該地帶は過去三百年に

互り獨佛間に取られては取り、取りては取られると云ふ姿で、玆に幾多の戰爭は行はれたのであつた、吾々は恰も之を坊間の野球競技に對比して考へて見る、彼等は優勝旗の取り合ひを試みて居る、前回は一方が取り、次は他方に取られる、取らるれば又他方が大いに奮闘して又取還す、取還さるれば又他の一方が一層努力健闘して取還すと云ふ姿で、恰も取りつ取られつして進むのである。然も野球は遊戯に止まるのであるが、戰爭は遊戯と同一視する譯には行かない。其目的物は互に取りつ取られつ取り還へされて、尚且永遠に解決すべくして解決せず舊態依然たる實情であることは野球其他の競技と戰爭と相同じいけれども、唯戰爭になると、之が爲めに多數の人名を殺傷し多額の金を費し、非常なる苦痛を忍び大いなる犧牲を拂はねばならぬことを記せねばならぬ、然かも其結果何等殘る所ない。吾々は此種問題を實情に照して考へなければならぬことは、國家の外交歷史に觀、國際關係の事實に徵して、單に三十年五十年といふ時間だけを檢する時は、恰も戰爭は問題を解決し得る如く見えもし、解決し終つた如くに見えもする。又それによつて大いに國運膨脹し國家の地位向上したやうに見ゆることもある。併し更に進んで三百年乃至四百年に亙る國際關係史を觀る時になると、戰爭は毫も問題を解決し得ず、怨恨を生じて紛爭を永久化し、唯貽る所は人命の損傷と費用の消耗に止まつて居る、斯う云ふ事實は常に外交史家をして、一度戰爭論者たらしめんとして遂に戰爭論者たらしめず、國際平和主義の重大なることに思ひを致さゞるを得ない事實である。以上はライン地帶ローレン方面につきての所感であるが、事實は之れのみに止まらず、其他に於て吾々は許多の經驗を有するのである。要するに佛獨兩國關係に於て少くとも一方が力を以て他の一方を壓迫し、それによつて領土狀態其他の變化を見るやうになつて來ても、其變化に對し他方が怨恨を貽す場合には、決して問題其物は解決したとは云はれない、戰爭に依つて双方國民中其一方の國民が全然消滅し、世界に存在を殘さなければいざ知らず、さもなくして人民依然として殘る以上、怨恨は之に伴ふて殘り、從つて復讐

となつて現はれざるを得なくなる。現に一轉刻下に於ける佛獨關係を檢してもさう言ふ感じは無からう乎、一九一九年ヴェルサイユ講和會議に於て佛蘭西は極めて峻烈なる條件を獨逸に課した、此爲め佛蘭西に對する獨逸の怨恨は蓋し想像に難くない、而して斯く恨まれて居るが爲めに佛國は一刻も安心が出來なくて居るではないか、今日佛蘭西がルール占領を斷行し、其他獨逸を壓迫しつゝある所以のものも、要するに獨逸人の怨恨を怖れ其復讐來るべきを憂ふるが爲めに外ならぬでは無い乎、佛人は言ふ、佛蘭西の人口三千九百萬に對し、獨逸は六千萬を有し、佛蘭西が年々二十萬の人口減少の傾向を示しつゝあるに反し、獨逸は年々七十萬の人口增加を告げて居る、此現象等が大いに我々の警戒を求むるものであると、然かも斯くの如くに兩國の關係を緊張せしめて居る所以は、是れ皆佛蘭西が獨逸の對佛怨恨を怖るゝが爲めであらう、要之戰爭若くは戰爭にあらざるも、力に依つて他の一方が滿足せざる解決を遂げ、強いて怨恨を貽すやうな遣方は、一旦問題解決の捷路の如く見えても、決して解決では無いのである。

次に一轉、波蘭の問題を見ても同樣の敎訓を見るのである、抑も波蘭は十八世紀の末、普魯西のフレードリッヒ大王の狡猾なる外交手段に飜弄せられ、遂に分割の運命に際會したのであつた。即ち一七七二年フリードリッヒ大王は墺國女帝マリアテレザ、露西亞女帝カタリナを誘ひ、普魯西の行動に參加しない時は分前を失ふべきを說いて、兩女帝を動かし、遂に普魯西はダンチッヒ及びウイヒチュラ河下流一帶の土地を獲り、露西亞は東北波蘭を、墺地利はガリシヤを各奪取した、其後又一七九三年第二回分割を爲し、一七九五年には第三回分割を行ふ等、波蘭は實に慘澹たる運命に陷つたのであつた。當時の此三國の行動なるものは重大なる戰爭に因らず、全く力を以て壓迫したものである、第二回分割後に於て波蘭人は大いに憤慨し、叛旗を揭げたので遂に戰爭も行はるゝに至つたが、其結果は波蘭軍は破れて第三回分割を餘儀なくせらるゝ非運に陷つた、そして波蘭問題は當時誰も解決されたと思つて居、即ち一七九三年後墺露普三國た

の重大なる力の壓迫により、波蘭軍隊は擊破され、愈波蘭問題は一見解決されたと一時思はしめたのであつた。ところが此分割は三國が思惟せる如く永遠的解決ではなかつた、波蘭人に非常なる苦痛を與へた結果は、遂に同國人の怨恨を買ひ、一八三〇年の叛亂となり、越えて一八六三年及び六五年の叛亂計畫となつて現はれた。又日露戰爭最中には在米波蘭人は集會を催し、我國に對して後援をさへ惜まなかつた。而して今回の世界大戰になると、愈々波蘭人の心骨に徹したる恨みは、遺憾なく發揮せられ、露西亞の沒落に對し大なる關係を有せるのみならず、墺太利の分裂にも亦重大なる關係があつた、普魯西領土の削減されたことにも亦無論關係があつた。そこで十八世紀から十九世紀の初年にかけて、武力により解決せられたるかの如く思はれたる波蘭問題は、一切解決せられず、二十世紀の今日に於て全然異れる狀態を現はしたのであつた、然も之を以て未だ吾人は波蘭問題が解決されたとは思はぬ、何となれば波蘭は今や自から獨立したとは云へ、更に歩を進めて自己の民族主義に依る自國の獨立に滿足せず、他の民族主義を犧牲とし、領土を擴張し始めた傾向あることとである。目下波蘭は面積十四萬方哩人口二千七百萬を數ふるが、其中に多數の露西亞人を含めることを考ふる時、彼等亦露西亞人の怨恨を引受けては居らぬか、吾人憂慮なきを得ないのである。

更に轉じて吾人の注意を惹くものは、墺地利と伊太利との關係である、墺地利國は一八一五年維納公會に於て、列强が佛蘭西制肘の手段と考へたことにも起因して居るが、腕力を恃んで伊太利の民族主義を無視し、北伊太利の重大なる部分を獲得したのであつた、之が爲め北伊太利問題は恰も解決せられたる如く觀ぜられて、未だ眞の解決を齎らすに至らなかつた。而して斯く不當に他の民族を自己の統治下に置いたことは、軈て墺地利の禍となり、一八六六年墺地利と普魯西との戰爭に際し、伊太利は遂に普魯西に加擔し、墺國を打破し彼をして慘澹たる運命に陷れて了つた、のみならず今回の世界大戰に於ては、伊太利はやはり墺地利に反對して起ち墺國領土たるツレンチノ、トリエスト一帶を始めと

し、南チロル地方をも伊太利領土に獲得して了つたではないか。殊に伊太利の對墺地利惡感が今回の戰爭により、墺地利を敗北せしむるに與つて力ありし大々的事實は、吾々のどうしても忘るゝ能はざる點である。

斯く考へ來る時、吾人は戰爭又は戰爭にあらずとも戰爭と同じ基礎に立脚して、一方が武力若くは之が威脅に依つて他方の弱きものを壓迫し、一時的に之を屈服せしむるが如き方法が、決して問題を解決するやうに見えて解決せず、爭端を永遠に貽し循環的に世の中を攪亂するのみで、何等解決其物に役立たぬことを、幾多の史實に鑑みて痛感せざるを得ないのである。而して是等の立論から日米問題に想到する時、吾人は果して如何なる敎訓を受けねばならぬであらう乎、吾人は以上の經驗に照すと、たとへ今日、戰爭若くはその他の軋轢策に依つて日米間の紛爭の解決を圖るとし、假りにそれが日本に取つて一時的成功の可能性が皆無でないと假定しても、それは我國民が執るべき賢明なる措置ではなからうと思ふ。

思ふに、佛獨の爭に在りて、獨逸如何に努力すると雖も佛蘭西國民を全滅し能はざるやうに、佛蘭西又如何に奮鬪するも獨逸國民を、歐羅巴より驅逐することは不可能である、日米間の關係も亦然りである。米國如何に努力するも日本帝國内五千七百萬人口を全滅せしむることは到底出來ない（假りに一千七百萬の朝鮮人、三百萬人の臺灣人は之を除くとしても）同時に我日本如何に努力すると雖も、米大陸に在る一億五百萬の米國人を絶滅せしむることは不可能である、双方共一國民が他の一國民を絶滅すること能はざる以上、前に言つたやうに、徒らに双方人民の心中に怨恨を植え付け、一時的葛藤を永遠的葛藤化するの愚は、昭々瞭々たるものではあるまい乎。殊に玆に積ふべきことは移民問題、人種差別待遇問題の場合に在つては他の問題の解決の場合よりも、より以上に國民的感情の融和を大切なる先決條件の一とせねばならぬ點是れである。勿論他の問題の場合も、戰爭による解決は極めて困難であるが、若し日本人が米國への

渡航、入國、旅行及居住に於て均等的好待遇を受けんとし其權利を主張する問題に於ては、日本が米國と戰端を開き戰火を交え、敵愾心と惡感とを助長した後に、良好の解決が望み得らるゝであらう乎、米國に於て我國民が歡待好遇せらるゝことを望み得らるゝであらうか、吾人は頗る疑ひなきを得ないのである。「俺の家の子供や弟妹をお前の家で厚遇せよ」と云ふことが、果して人情に適つた議論であるや否や、識者を待たずして明かなる所である。吾々は根本問題として一切の國際紛議は戰爭によつて解決し得べきものにあらず、否な解決すべからざるものと信ずるが就中、今回の如き人種問題、米國に於ける日本人厚遇問題に關聯し、差別的待遇を除去せしめんとするが如き問題の性質に鑑みる時は、益々双方武力若くは武力に近き爭ひに依る解決策の有害無益なることを想はざるを得ないのである。

三

次に吾々が輕擧妄動者流の注意を喚起したい一事は、假りに日米兩國が移民問題に就て極端なる葛藤を開き、戰爭若くはそれに類する爭端を生じたとすれば、目下の國際關係及び國際形勢に照らして日本は獨り米國のみでなく、面積一億三千萬方哩人口四億四千萬を算する英帝國をも亦敵國若くは少くとも准敵國としなければならぬ可能性多いこと是である。這は必ずしも英米間從來の關係から斯く云ふのではない、無論英米間は極めて親善である、米國は大體に於て英人の血が中心を爲して居る、米國の法律は英法であり、其文學は英文學である、其宗教は主として流を英國に發せるものであり、習慣は固より言語も英語である、兩國民の關係は血は水よりも濃しの譬の如くである。併し之丈けで日米相爭ふ場合、必ずしも英國が米國に味方するものとは云はれないが、玆に最も注意を要すべき點は、日本が移民問題に關係し、人種平等論を提げて戰ふと云ふが如き場合に於て、英國は如何なる態度を執るであらうかと言ふ點である。此點

になると吾人は英國が米國側に同情ある態度を執るを明白と見ねばならぬ、其同情が如何なる程度迄進むか、而して、何なる程度を意味するかは、局面の發展に從つて異なるけれど、大體に於て英米が結托し易いと見るのは自然であらねばならぬ。何となれば英國は移民問題に關して、米國と協同の立場にあるからである。蓋し英國は、濠洲及加奈陀を其領土として居るが、先づ濠洲に於ては今回米國が採りたる日本人移民制限政策と略酷似せる、差別待遇を日本人に加へて居るのである。濠洲は面積二百九十七萬方哩人口五百四十萬で、一方哩一人八分しか居住しない、然も自然の人口增加率は年七八萬內外程度であつて、極めて少ない、英本國より頻りに移民を求めて居るが、割合に成績上らず、從つて國內開發上頗る困難しつゝあるに拘らず、東洋人に對しては極端なる排斥法律を一九〇一年（我明治三十四年）に制定したのである。同法に於ては濠洲官憲が指定したる歐羅巴の言葉五十語を其官吏の面前に於て書きたる外國人でなければ、入國は出來ぬことになつて居る、此法律は一見公平の如くに見られ、之に對しては我國は勿論印度に於ても同意を表したと言はれて居る。（此事は一九〇一年濠洲議會文書第四十一卷に於て明かに記されて居る）所が表面教育資格を移民に課する丈けで頗る公平の如くに見ゆる本法律は、實は日本人支那人及印度人排斥に利用せらるゝに止まり、白人に對しては實際に適用せられて居ない。獨り之のみでない。吾々日本人其他一般東洋人に對しては、法律に「濠洲官憲の指定せる歐羅巴語五十語」とあるのを利用し、移民が入國試驗を受くる場合、其國語は移民自身の選擇せる歐羅巴語にあらずして、官憲が勝手氣儘に選擇する至難なる歐羅巴語である。普通ならば濠洲は英國領土であり英語の行はるゝ國である以上、試驗は無論英語に依るを順序とすべきであるが、實際は然らず、教育あり容易に英語試驗を通過し得られるやうな日本人に對しては、濠洲官憲は故らに希臘語其他日本人の解せざる試驗を課するのである。換言すれば試驗の歐洲語は移民の選擇に依らず移民官の獨斷選擇に依つて居る、從つて落第せざるものなしと云ふ有樣である。誰か

米國の移民制限に於ける差別待遇に、優るとも劣る所なきものと云はぬものがあらう。

然らば加奈陀は如何と云ふに一九〇七年（明治四十年之は一八八五年以來支那人に高き入國税を課し、一九一一年印度人の上陸を禁止して居るが、）に於て日本と協定の上ルミユー協約なるものが結ばれ、日本よりの渡航者中農業勞働者、家内的勞働者の性質を帶べるものは一年四百人以上渡航し得ざる旨協定されて居る、然るに加奈陀は此四百人の制限を以て尙滿足せず、一層嚴密なる制限を加へんとして居る、之に就ては昨年四月加奈陀議會に於て支那人排斥法律提出せられたる際、日本人移民に關する論議を見たるのみでなく、最近に於て加奈陀の對日交渉を誘つて來た、斯く東洋人殊に日本人排斥を爲しつゝある加奈陀及濠洲を領土とせる英國としては、假令其本國は移民制限に關係なしとするも植民地に對する立場から又は植民地を維持し英帝國を保全する立場から見て、英國は移民問題に關し米國と同一の立場に在り、自然之を支持するの態度に出なければならぬことを看取せねばならぬのである、過去に於て此形勢を最も明かに表示したものは昔大正八年（一九一九）巴里講和會議ではなかつた乎、即ち巴里講和會議の際日本は人種平等論を唱道し、種々努力したけれども遂に此問題は失敗に歸し、三月下旬日本が大いに讓歩したる聯盟規約修正論さへも否決され、同時に却つて米國が希望したる移民問題の國際仲裁除外を意味する「聯盟規約第十五條第八項」の採用を見たのであつた。（備考聯盟規約第十五條第八項と云ふのは移民問題を意味する内政問題は之を内政問題として、全然聯盟理事會の處理する事項より除外する規定である）

斯の如く檢して來ると、移民問題に對する吾々の極端なる爭ひは、獨り米國に對するのみにあらずして、歐米諸國を相手とするものとなる、之に反して移民を歡迎し良好なる待遇を與ふるの主義に於て、日本を援助する國は世界の何處に求め得らるゝか、恐らくは各國中移民國として知らるゝ伊太利一國位ゐのみであるまい乎。然かも伊太利は歐羅巴に

在りて然も國力未だ英佛と伯仲せざるのみならず地域歐羅巴に在つて、亞細亞との共鳴の範圍も亦狹いのである、從つて日本の力となり得るとは思はれぬのである。佛蘭西に至つては米國の移民問題に深き關係を有せざると共に、各種の關係上又た此點に於て特に力を入れて日本を支持する立場に居らぬのである。是を以て之を觀ると、日本が移民問題に於ける武力的爭ひの場合に於て、眞に極端なる孤立的地位に立つことと思はなければならぬ。吾々が移民問題に對する武力的爭ひを排除する所以のものは、戰爭其他武力上の問題が、國際紛議を解決するものにあらずと云ふ、根本的教訓を基礎として居るのであるが、然かも刻下の國際關係、その中に立てる日本の地位も亦た反動論者は固より一般國民が齊しく重視しなければならぬ所なるを、切言し度いと思ふのである。

四

然らは則ち今後我が國民は、此米人の不當なる立法に處する策として、如何なる種類の活動を敢てす可きであらう乎、予は以爲らく、第一には差當り直接の對米策として、十分なる隱忍と不斷の努力を以て、一度び進路を誤つた米國人をして反省せしめ、日本人差別待遇の立法の廢棄若くは修正を圖らしむるに在らうが、更らに第二としては今回汚辱の重要原因の一が、日本國及び日本人民の實力足らず地位低きに出づることを看取し、七千萬の同胞、決然一致國富國力の增進を圖つて、眞に經濟的に世界の首班に列し以て白人國をして自利上からも其誤謬を正すの外無き運に至らしむるの覺悟が、最も大切であらう、而して第三には又た今回の人種的差別待遇が一般黃色民族の劣地位に基因するを察知し此等民族に對する從來の冷淡的態度若くは驕傲的態度を放棄し、自ら兄として先達として、此等民族の向上に努力し、此等の共通的成功に依つて、白人國の不當な冷遇を根本的に一掃するの機會を造り出すにあらうと思ふ

而して右の內、第一に擧げたる努力即ち、十分なる陰忍と堅實なる努力を以て、一度方途を誤れる米國人をして反省せしめ、其日本人待遇を改善せしむるの策に至つては、今日又々之を行はんとすること、頗る迂遠なる如くであるが、予は必らずしも左迄悲觀側に立つものでは無い。此點に就て吾々は最近米國上院移民委員會並に、他の上下兩院議員に對する太平洋沿岸排日派マクラッチー及びフエラン其他の運動が、想像以上に虛僞の報告を以て充ち、事情不通の議會移民委員をして、過つて極端的行動に走らしめた痕跡歷々たるを見るに至つて、其の必ずしも望なきものにあらざることを思ふものである。何故なれば從來も屢排日派は虛僞の證言報告を爲し、社會を誤らしめて居たが、吾人の手に到着せる諸文書即ち本年三月十一、十二、十三日に亘り、米國上院移民調査會に出席し陳述したる排日派の報告並に議論等を見るに及んで、其餘りに荒唐無稽なるものあるに驚かざるを得ないのである。蓋し若し排日派の主張と云ふものが的確なる根據があり、僞らざる事實を基礎として行はれて居たものとし、上下兩院議員等も、之を了解し之に動かされて彼の差別的待遇法律を制定したものとすれば、之を改むるの途なきに苦しむのであらうが、然らずして右の如き誣傳により誤られたものとすれば、彼等は何時かは其誣傳なることを發見す可く、而して其過を發見するの日は彼等の態度緩和の日なることを思はねばならぬからである。打ち明けて言ふと、吾々は之迄でも彼等排日派をして燃ゆる中傷讒誣の言議を恣にさせて放任し、若くは陰密に行はれたる言動に對しても速かに其內容を知るの力無く從つて之を匡正し、擊破するの機會を有しなかつた我が官民の粗漏を、甚だ遺憾に思はなければならぬのである。排日派が如何に日本人を中傷しつゝあつたか、試みに一例を擧げて見るに、三月十一日米國上院移民委員會に於ける、加州サクラメント居住マクラッチー氏（サクラメント・ビー新聞の主筆等をやつて名ある人）の日本國籍法第二十四條に對する報告もその適例たるを示して居る。由來日本國籍法は明治三十二年に制定せられたもので、其第二十四條に於ては『十七才以上の男子は海陸軍の現役

を終へた時か若くは兵役の義務なきに至りたる時にあらざれば、日本の國籍を失はず』と規定されてある、之は頗る不備なる規定である。即ち米國出日本人は之が爲めに米國に出生し米國市民となると同時に又日本の臣民ともなれる所謂二重國籍の渦中より脱して米國市民たることが出來ぬのである。何となれば、子供が自ら國籍を選擇し得る年齡即ち其理解力を有する年齡に達しても、國籍を選擇して米國市民となる機會が阻止せられて居るからである、此個條の不可なるは云ふまでもない、是れ現に日本議會に於ても國籍法改正が問題となり論議せられつゝある所以であらう、故にマクラッチー等が此事實と欠陷を指摘するのは正當であるけれど、然かも更に之に乘じて荒唐無稽の說を傳へ、恐ろしく日本政府を中傷して居ることを忘れてはならぬ。その一例を擧ると、彼は述べて曰く『布哇に生れたる日本人の子ヘンリーケー福田なるものあり。日本政府之に徵兵義務を課せんとし、彼其徵兵義務を果さゞるや、日本政府は同人の親戚中原なるものを罰し、五弗の罰金を徵した』云々と、日本に於て其罪に因り親戚を罰すると云ふやうなことは、德川時代には行はれたが、今日は如何なる罪ありとするも、犯罪者其者にあらざる親戚を罰すると云ふが如き制度はない所である。然るにマクラッチ氏は恰かも舊幕時代のやうな非人道的な苛酷なる處罰を敢てしてまでも、日本が米國出生者を如何なる場合に於ても、自己の臣民たらしめんとすると云ふやうな誤れる惡印象を、米議員に與へたのである、而して斯の如き極端なる誤報誣讒は、事情不通の上院議員連中を動かし、今回の法律を作り得たものとすれば、其虛僞の事實判明するに從ひ、彼等の態度も亦比較的自から改め易いではあるまい乎、尤も予も決して此種の企てが容易の事業と云ふのではない。何故なれば米國は日本と異り多數異民族の集合地である。人口に於て最も不統一なる國である現在米國市民一億五百萬人中一千萬は黑人(阿弗利加人)であるが、同時に三千六百萬人は外國出生の移民若くは其移民の子である。今少しく正確に云へば外國出生移民總數は一千三百七十萬を算し、其移民の子供は二千二百六十萬人を數えて居る、殊に內容

は様々であつて最も多きは獨逸人の七千二百六十萬である、又人種的に獨逸と多少密接なる墺地利系は三百十二萬と唱へられて居る。次は愛蘭人四百十三萬を占め露西亞系は多數の波蘭人を含めて三百八十七萬を算せられ、更に伊太利人は三百三十三萬を、洪牙利諾威は各百萬を瑞典は百五十萬人を數えて居るのである、其他佛蘭西人丁抹人白耳義人以下世界の人種、代表せられざるものは殆んど無い。斯の如く其人口不統一で、雜族相對立せる國家、若くは社會では、その人口が統一し、比較的同種なる邦國に比して、より以上に壓制的であり、人種的迫害事件も多きことは殆ど社會學的原則とも言つて善い。のみならず、米人は過去百年間に最早甚しく人種迫害の傳統と習慣とを造り出して居り、自ら之に惱まされて居る位ゐである、日本人排斥の本場たる太平洋沿岸でも東洋人渡航以前には、同じ白人の血ある西班牙系を排斥し、次で佛蘭西人を排斥し、又た黑人（阿弗利加人）を排斥し、東洋人の入來と共に、支那人印度人に及び、更に轉じて日本人に及んだのである。斯く人種迫害の風が浸潤して居る以上、今後米人をして反省せしむることも決して容易の業とは云へないのである、但し從來の如く排日派のみに恣に宣傳せしめ、日本は徒らに宣傳すと云ふが如き虛名だけを得て、何等防禦的說明も辯明も爲さず、許すべからざる中傷を容認し、信ずべからざる虛報を盛に傳へしめて之を放任したる一事は、啻に誤られたる米國立法者の罪のみで無く、日本政府並に國民の罪と觀て差支ないではあるまい乎。我等は今後斯る虛僞を本とせる報道に就て、大に其誤謬を是正し、更らに將來斯の如き虛僞的報告宣傳を行はしめざるの策を執り以て、今回の法律を改めしむると同時に、今後生ずべき新たなる日本人排斥問題を阻止するの手段を講ずべきではあるまい乎。殊に考へねばならぬのは、米國出生日本人の市民權剝奪を目的とする、米國憲法補則第十四條の修正運動が起りつゝあることである。補則第十四條の規定によれば合衆國に生れたる總ての人は、合衆國及其居住する州の市民たりと規定されて居る、即ち人種の別を問はず如何なるものでも、出生に依つて米國市民となり得るのであり、日本

人も同様である。其結果今まで種々なる排斥法律が出來ても。子供が市民權を所有するが故に。在米日本人の事業は根本的に打撃を被るには至らなかつたのであるが。排日派は今や二重國籍制度を可能にして居る欠陥だらけの現行日本國籍法を基礎とし。更に其欠陥を誇說して在米日本人の市民權を剝奪せんと企てゝ居るのではないか。從來の土地所有權禁止法律は多少の不便宜があり。日本人の地位を窮屈にした點もあつたが。事實上根本的打撃を加ふるに至らなかつた。又今回の移民制限問題も多少日本人に有害には相違ないが。然も問題は體面問題が重きを爲して居り。實質的に見ると。一八九〇年（明治二十三年）の人口統計により。百分ノ二を入國せしむると云ふ一般制限法に比しても。日本人の入國率には大なる差違はないのである。けれども若し在米日本人兒童の米國市民權が剝奪さるゝこととなれば、それこそ其影響や恐るべきものがあらう。同時に根本的に慘澹たる運命を在米日本人に齎らすと共に。日米間の惡感を更に増加し、種々なる惡結果を招來するものと見なければならぬのである。從つて之を阻止する上に於ても亦。今日排日派によつて誤られた米國政治家の日本人觀を改めしむる上に於ても深く力を致さゞるを得ない。斯くして多少米人の日本人觀が正路に就き來る時期に於て、始めて將來の日本人迫害に對する不當なる措置も。阻止する道が開かれるものと思ふ。而して現に行はる所の極端なる汚辱的日本人差別待遇制度撤廢の曙光も亦茲に發生して來ることゝ信ずるものである。

五

併し之は唯當面の對米策であつて、我國民として考へなければならぬ根本策は尙外にある。即ち國家として我を尊重せしむるやう、我國の地歩を鞏固にし發揚することが第一義であらねばならぬ。淡白に云へば今回の事件の如きも、根

く入つて其病根を察すれば、結局我國が大國としての空名あつて實力足らず、其大國的資格を具備せざるが爲めに、諸外國の尊重を得て居らなかつたことが、總ての排斥基本になつて居るやうに思はるゝのである。即ち我國の國富は、米國のそれに比して、二十分の一にしか達せず、英國に比しても十分一であり、佛獨に對しても遜色がある、面積狹き島國の位置として、是非國民生活の根柢とせねばならぬと言ふその工業組織を檢して見ると、貧弱を極めて居り、彼の平時各種の生産品山積し、戰時になりては一轉各種軍需品を無限に製造し得可しと言ふ東隣共和國の工業機關に照せば、誰か忸怩たらざるものがあらう、翻つて農業はと見ると單に國民の四分の三の食料を與ふるに止まり、不足分は海外に仰がなければならない、然も右食料の生産に從事する日本の小作人は、世界に於て最も痛苦極まりなき立場に立つて居り、即ち米作によつて生活を營み難く、副業によつて僅かに之を補足しつゝある現狀であり、他方農園を所有する地主の所得は如何と言ふと、金利に見積つて僅かに二三分にしか足らない貧弱振りを示して居る。資源はと言ふと、米國は鐵に於て四千萬噸を有し、佛蘭西又年額四千萬噸を得るの立場にある、英國の如きも二千萬噸を算するに、獨り我日本は僅か百萬噸を産出するに過ぎない。又日本人の衣類に必要なる物資にして平時にも戰時にも欠くべからざる綿毛等も、殆ど外國の供給を仰いで居るのである。石炭は多少産出するとするも、其量少なく、日本の交通機關工業機關が、今日以上に發達した場合には到底之を支ふること困難であらう。然らば我等は境土相近き隣地に於て物資供給の基を造つて居るかと言ふと、西伯利、支那と日本との現在の關係に照し、それも出來て居ないことを認めねばならない、事情斯くの如くであるから、物質文明萬能主義の多數米國人其他泰西人が、自然日本を輕視するは、免れざる數と言はねばならない、されば今日我國民の急務は、一同大に四圍の形勢に鑑み、國内に於て、又た國外に於て、現在の奮勵努力を二倍し三倍し、以て國の經濟力を激增するを圖るにあらねばならない。近年我國内、浮薄輕佻風をなし、緊張味なく、當

を避けて易に就き、國家國民の將來を思ふもの少きに至つたことは、心あるもの丶痛慨措く能はざる所である、今日の最要務は、國民一同覺醒し協力一致以て國力國運の向上を圖るにあらう、之が實行せらるゝに至つて、列國も漸く自然日本を重視し尊重し、同時に日本を憚つて、今日の如き侮蔑的なる差別待遇を敢てし得ぬに至るであらう、而して予は此際之に附帶して現在行詰れる我國の對外關係を改善することの最大要務なるをも指摘せねばならぬ、蓋し目下の日本の國際關係を見るに、悉く四方閉塞の姿にある、換言すれば眞に日本の友國として互助の實を擧げ得る、國家國民あるを見ない。日英同盟は終了し、米國との關係之に伴ふ日英關係彼の如くである上に、我れは露西亞に對しては今以て承認もせねば、通商關係の恢復も圖られて居ない、又支那に對しては二十一ヶ條問題以來隣國らしからざる關係の繼續であるではないか。吾々は今後大に此國際關係を改善し、露西亞に對しては尼港事件の爭ひの如き速かに之を打切り、寧ろ密接なる經濟的關係を結ぶの急務なるを感ずる。何となれば目下原料品の欠乏に苦める日本に對し、鐵石油を始めとし其他原料品の供給を、面積五百萬方哩に亘り未開發にも等しき西伯利に求むることは遠き將來に亘つての我國策であらねばならぬ。日露交渉が其歴史久しくして容易に實現を見ず、既に本年一月公式關係の恢復に於て伊太利に先んぜられ、續いて英國にも先を越された如きは、是れ決して我國の名譽にあらず、又實際政策としても賢明なる措置ではなかつたのである。吾人は切に思ふ、內七千萬の國民就中五千七百萬の日本民族の覺醒、緊張、各、其本分に向つて行ふ努力の集積によつて、國富國力の增進を期し、之を助くるに對露對支經濟的關係改善を以てし、之に依つて眞に我國の大國的存在が確保せらるゝの日こそ、白人諸國をして日本尊重、侮蔑中止に向はしむる時である、此事だに實現したら、今日の排日問題の少くとも一半以上は、その姿を潜むるに至るであらうと。

六

併し乍ら之丈けで東洋人其者に對する白人種の人種的迫害若くは蔑視が終ると見てはならぬ、從つて、我日本民族の使命としては、更らに我等と同じき黃色人種の根本的向上運動に助勢することをも考へなければならない、無論之は黃白人種の聯合的戰爭と言ふ如きことを意味するものでは無い、唯すべての點に於て後進たる黃色諸民族を進步せしめ、文化に於て、社會的存在に於て、白人と對等のところ迄漕ぎ付けしめ、之に依つて現に存する白人の黃色人侮辱を、大體に於て一掃するを期せよと言ふのである。

而して予は此點につきて最も都合好き現象として、近年に於ける黃色人種の覺醒的傾向の著しく現はれて來つたことを指摘せねばならぬ、今一々例證を擧ぐるは其煩に堪えないが、主として例として政治的方面に現はれて居るものを擧げて見やう、從つて其他は讀者の推定に委することゝするが、先づ其中の一を引例すれば、面積三十五萬方哩人口一千二百七十萬を數ふる埃及は、明治十一年頃より佛英の協同管理下に置かれ、明治十五年には英國の勢力下に移され、更に大正三年には英國の保護國となつた、所が今や國民の覺醒により大正十一年英國の埃及保護國制は公式に否認せられ、昨年四月には獨立國としての新らしき憲法を制定した。然も同憲法の內容を檢するに頗る進步せるものがあつた。加ふるに本年一月には多年獨立黨首領として迫害され排斥されて、或はモルタ島に流刑に處せられ、或は印度錫蘭島に流され、又或時はジブラルタルに幽閉せられたる例のザグルールパーシャの如きは、遂に總選擧に於て勝利を得、埃及總理大臣となつたのである、獨立黨が政權を掌握するが如きは從來想像もされなかつた所で、埃及國民覺醒の一端が窺はれるのである。續いて之に近きものは土耳其の覺醒である、土耳其は昨年七月ローザンヌ會議の結果、ゼーヴル條約

によつて一旦希臘國に取られたる、スミルナを始め君府附近のスレシヤを恢復し、領土十七萬方哩人口八百萬に減ぜんとせる國家は、今や面積二十萬方哩人口一千萬の國家として殘存することゝなつた、のみならず一昨年はオスマン王家を排斥し、本年一月には其回々教主たる資格をも廢止し、猛烈に改革運動を進めつゝある、其潑溂たる氣勢は吾々の注意に値ひする所である。轉じて面積六十萬方哩人口九百萬を數ふる隣國波斯は如何と言ふに、一九〇七年及び一九一六年の條約により、獨立國たるの實を損した波斯は、更に一九一九年（大正八年）の條約に於て、英國の政治的支配を可能ならしめる協定さへ作つたのであるが、大正十年には此極端なる條約は廢棄せられ、そして獨立を完うする立場になつて來た。次に面積三十萬方哩人口六百萬を有する阿富汗尼斯坦は、久しく英國の保護國であつたが、一九一九年遂に獨立し、更に大正十年（一九二一年）には印度と條約を結び、益完全なる獨立を確保し、各國と均等なる交際を開始する立場となつた、昨年我國にも使節を派遣し來れることは、未だ世人の記憶に新たなる所であらう。更に再轉して人口三億二千萬即ち世界人口の五分ノ一を占むる印度は、如何と言ふに、何分國内に二億四五千萬のヒンヅー教徒と、七千萬の回教徒との爭ひ絶えざる一方、二千五百と言ふ驚くべき階級があり、互に統一せず久しく相爭ふ姿にあつたので、其政治的覺醒は久しく問題とならなかつた。所が世界大戰の結果覺醒の機運は著しく釀成され、今やヒンヅー系のガンヂーと回教系のマホメット・アリーの提携を見、更らに一般の政治運動も強まつた、而して英國亦之に讓歩せざるを得なくなり、新たに印度人の參政權を擴張したのである、殊にガンヂーの如きは一昨年春、政治上の罪により向ふ六ケ年間の禁錮に處せられたのであつたが、然も未だ二年を經ざる今春に於て放免せられたるが如き、印度人の民論が英國政府に反映せる結果でなくてはならぬ。併し予は此等諸民族の獨立問題を説くのでは無い、唯だ兎も角も其歩一歩政治的に覺醒したことは、要するに彼等自身が大に氣力を復活し來れる證左にして、黄色人種の地位及び勢力向上を翹望し貫

現せんとする徴と觀て宜いと思ふ。形勢既に斯の如し、假令其向上發展には相當の時間を要するとしても、結局、現在の輕侮的低き地位より脫却するの傾向を示せるものではあるまいか。而して斯る傾向に對しては、我日本の如き、兎も角も亞細亞人種中の先覺者として、恰も弟妹の如く後進國を誘導することこそ、當然爲さねばならぬ責務であり、又同時に極めて愉快なる事業ではなからうか。殊に彼等亞細亞系民族の覺醒につきて、日本の近年の向上の事實に刺戟せられたること明かである、彼の印度國民黨が明治三十七年以來急激なる勢ひを以て發達し來つた如き、全く日露戰爭に刺戟せられた結果であるとは、彼等自身の唱ふる所である。又土耳其に於ける愛國者なども日本の進步發達に刺戟せられた影響であるとは、彼等自身の言明する所である。周圍斯の如くである以上吾々は自から顧みて、黃色人種に對する、重大使命を有することを考慮せねばならないのである。然るに今日日本の遣り口と云へば、自からは白人に對して人種的差別待遇を憤り、之を非難しつゝ然も自己が他の黃色人種に對する時には、同じく差別的待遇を行つて居るのではないか。支那人に對し、朝鮮人に對し將亦印度人に對する態皆然りである、決して公平であつたとは云はれない、だから吾々は白人の過誤を責むると共に、自からも大いに反省し、眞實の友情と誠意を吐露し、他の黃色人種共々に向上發展を圖ることに於て、始めて日本自身の過誤を自ら改むることでもあり、同時に更らに亞細亞人を對象とする人種的迫害を現世界より排除する事業を遂行することが出來るであらうと思ふ。斯く云へば、ともすると世間より誤解せられ、或は黃色人種を率ゐて將來白人との人種的紛爭を企つるものなりと解するものないとも限らぬが、其は吾人の考ふる所ではない。吾人は唯黃色人種全體の地位が向上せらるゝ時に至らば、平和の裡に、漸次にその均等待遇の目的が達成せらるゝことを疑はぬものである。

斯くの如くにして、我等は人類社會に於て非白人の地位を確保し、將た國際關係に於て日本の足場を鞏固にし、以て

世界文明が正當なる進路を執ることに貢獻し得るであらうと思ふ。

財政上に於ける當今の要務を論じて當局者に與ふ

法學博士　堀江歸一

財政並に行政の整理は近年我國に於ては、歴代の内閣が殆ど傳統的に宣言して居る所であるに拘はらず、今日まで殆ど其效果を擧げた例を聞かない。何故に財政行政の整理が單に聲言だけに止まつて、實效を齎すを得なかつたかと云へば、兩者の整理を斷行するに就ては、必ず或る方面に犧牲者を生ずる、其犧性者の反對なり、牽制なりが常に整理事業に對する妨碍と爲る。此妨碍を排除し、壓倒して、整理を徹底的に行ふには、相當に威力の備はつた内閣であることを必要とする。然るに近年は斯る威力を備へた内閣は事實に於て、殆ど現はれるに至らなかつた。是れが行政財政整理の行はる可くして、今日まで行はれるを得なかつた所以である。加藤内閣に如何の威力があるかは、今後實際問題に觸れて見なければ、最後の判斷を下すを得ないが、現に所謂護憲三派の聯合は今日まで繼續して居り、衆議

整理實現の可能性

加藤内閣は先づ全體から見て、世間の輿望を荷つて居ると云へるであらう。飽き易く、醒め易いのが日本國民の天性である以上は、此内閣も何れ遠からざる内に、世間の不評を買うであらうし、又之を買うだけの失政を爲すであらう。然し今日までの處では、護憲三派の協調を基礎として居る點に於て、比較的相當の人物を網羅して居る點に於て、聯立ではあるが、政黨内閣の本質を備へて居る點に於て、普通選擧が此内閣の下に、無條件を以つて、即行される望みある點に於て、新内閣に對する好評の嘖々たるは、爭ふ可からざる事實である。此機會に於て、私は加藤内閣に依つて、行政財政の整理の相並んで行はれることを希望して已まない。

院に絶對多數を制しつゝあるは勿論、貴族院にも亦當面の敵手を以つて見る可き強大なる團體もないとすれば、最近去來した三四の內閣に比較して、其礎の鞏固であることは、之を許さなければならない。斯くて此內閣に依つて、行政財政の整理されることを望む者の生じたのも、亦敢て異とするに足らない、少なくとも加藤內閣の下に、三派の聯合の維持される限り、財政行政の整理は此內閣に依つて、行はれる多くの可能性のあるものと考へられるのである。

整理の根本主義如何●

然しながら財政行政を行うに就ては、何を以つて其根本の主義とするものであるか、當初から之を明にしなければならない。從來の整理に於ては、私をして云はしめれば、此點に關して誤解の存することを免がれなかつた。行政を整理するに當つて、必ず行政上の能率を增進するに必要であると稱して、却つて官廳の增設を試みたり、財政を整理すると云つて、單に一方に節約した經費を他方に膨脹するに止まつたりするが如きは、從來の整理に於て、屢々實見する所であつて、斯の如くして鐵道省なるものが何時の間にか組織されたり、農商務省が農務省と商工務省との二省に分立されようとしたりする事實に接するのである。然しながら近年我國に於て財政行政を整理することの希望頗る盛であつて、殆ど國民の輿論と爲つたのは、何故であるかと云へば、其重なる原因は財政が極度に膨脹して、國民を壓迫することの甚だしきものあるからであり、而して財政の膨脹斯の如きに至つたのは、行政の煩雜、其度を失するに至つたからである。現に最近數年間我國の經濟社會は不景氣の狀態に陷り、國民經濟の萎縮したことの著しさは、何人も認める所である。所謂不景氣は世人の日常見聞し、又體驗する事實であつて、其勢の執拗であり、而して次第に深刻と爲ることも、總ての人の知るが如くである。即ち不景氣と共に產業が衰微し、國民所得亦減損したとすれば、國家の財政も亦不景氣並に縮小されなければならない道理であるのに、我國に於ては財政は年年膨脹して、極まる所なく、經費の如き遂に十五億圓を突破するに至つた。此經費は物資と勤勞との二者を需要する爲めに、消費されるものであるとすれば、一方に物資に對する需要を增加して、物價を騰貴せしめ、他の一方に政府に雇傭される勤勞を大にして、給料賃銀を上進せしめるのは、當然であつて、我國に於て不景氣と稱されながら、尙ほ不景氣に作う經濟的現象が充分に現れず隨つて景氣の恢復を促進するに至らざる所以である。殊に今日我國に於て斯の如き巨額に上る歳計を維持するに當

り、財源を調達することは、固より容易でなく、隨つて確實なる方法のみに依つて、財源が得られて居る次第ではない。毎年の豫算に於て、多額の公債を財源とする事業費があり、事業の進行を謀るに就ては、公債を募集しなければならず、之を募集するに就ては、第一公債の條件を國庫に不利なるものとし、殊に其利子を高くしたり、發行價格を低くしたりする爲めに、金融市場を壓迫する、第二日本銀行をして公債を引受さすれば、自然通貨膨脹の端を開くし、第三預金部をして公債の引受に當らしめるとしても、自ら其金額に制限があり、加ふるに他の方面に於ける預金部の活動を妨げざるを得ない。且つ我國の財政に於て、公債政策の行はれるや、一朝夕の事ではなく、原內閣以來連續して積極政策の財源を求める爲めに、短期公債を發行したことは、著明の事實であり而して其短期公債の償還期限は頻々到來し、國庫に償還財源を缺く爲めに、不利の條件を忍んで、借換を行はざる可からざる狀態であり、此點から金融市場に壓迫を加へること少なしとしないのである。

斯の如き弊害は總て財政の膨脹其度を失した結果に外ならないのであり、而して財政の膨脹、斯の如きに至つたのは、行政の濫妄に基くものであるから、今日苟も財政行政の整理に志す以上は、經費の削減、行政事務の縮小を以つて、其眼目としなければならない道理であつて、此眼目を逸したならば、其處に何の整理もないことゝ爲るのである。

行政整理の效果なかりし所以

從來政府に依つて、行政整理の行はれた事例は必ずしも絕無であるとしない。而して整理の後に若干の人員が淘汰されたり一省內の局課が廢合されたりするとはあり、斯くて幾何かの經費が削減されることもある。然しながら其規模にせよ、範圍にせよ頗る狹隘なものであつて何等世人の注目を惹くものでない一方に、幾年か歲月を經過する間には、一旦淘汰された人員も、廢合された局課も、舊態に復して、整理の行はれなかつた時に復する、甚だしきに至つては、一方に罷免された官吏が他の一方に囑託とか、雇とか云ふ名義の下に、依然官廳に關係を繫ぎ、何時の間にか復職する事例の如きも、亦稀なりとしない。何故に斯る馬鹿々々しき事實を生ずるかと云へば、其一原因は官僚其人をして自ら行政整理の事業に當らしめ、又之に關する立案を行はしめるからである。官僚の生命とする所は何であるや、成る可く行政權の行はれる範圍を廣くし、官廳內に於ける行政事務を複雜にし、出來るだけ多數の人員を雇傭し、以て自家の埶勢を張り、威容を盛ならしめるの一事に外ならない。年々豫算

案の編成に際し、各官廳の大臣が所謂豫算の分捕りに專念し、一錢一厘でも多く自己の管掌する官廳の爲めに經費の要求を貫徹しようとするも其官廳に於ける多數官僚の希望を充し、依つて以て自己の權勢を大ならしめる私心に基くのであつて、一官廳の要求する經費が承認されなかつたり又一官廳に屬する行政事務が他の官廳に移されやうとする場合に、關係大臣が管下の屬僚と相率いて、其復活維持の爲めに、懸命の努力を爲すが如き、常に實見する所であつて、此點に於ては、今日の大臣と稱される人々の如き、一個官廳の長官であつて、國務大臣として、國務の全體に着目す可き責任を忘れて居ると評する外はない。斯くの如くにして各官廳の權限爭ひ、勢力爭ひの爲めに、經費の膨脹する勢を馴致して已まざる次第であるのに其經費膨脹の張本人たる官僚其人に行政の整理を命ずる、命ぜられた所に依つて、整理の功業を果すことは、官僚として自己の手足を絕たれ、權勢を狹められ、結局自己の生命すら、脅威する結果を招くものであるとすれば、官僚が行政整理に對して、甚だ冷淡であり、單に世間の手前を繕ふ位の程度を以つて、一時を瞞化し去る態度に出ることも亦怪むに足らない。然らば從來行政整理が斯く整理其のものを嫌忌する官僚に託された結果として、其功業の擧げられなかつた所以も亦明瞭であつて、此點に於て其行ふ所を正しきに就かしめんとするに於ては

第一、行政整理に依つて、削減す可き經費の金額は國務大臣又は其内から選ばれた少數者の間に於て之を決定し所謂天引的に各官廳をして削減された經費を限度として、其限度内に、行政組織の改廢を行はしめるか

第二、英國に於て往年ゲッデス委員會の下に行はれた如く全然官權に關係を有せざる有能の士を拉し來つて、行政整理の基礎計畫を立案せしめ、其結果を取つて、各官廳に於て行政事務を刷新せしむるか

二途の一に出でなければならない。此點に於て當局者の爲す所、從前の如く、單に各官廳の下僚に命じて、調査に從はしめ其調査に依つて、得た所を取纏めて、何事をか爲さんとするが如きものであつたならば、其勞多くして益の伴はざるは、吾人の斷言するに苦まざる所である。

軍事費の整理は如何

第二に從來我國に於て、行政財政の整理が計畫されながら其實效の不充分であつたのは、彼の軍事費なり、軍事行政なりに對して、何等斧鉞の下されるものなきの致す所である。即ち我國の軍事費なるものが一般財政に於て、一個獨立の地位を

占め、軍閥が軍部に蟠居して、軍事行政に對して　他の容喙することを許さず、軍閥獨自の判斷の下に、國家の經濟、又は財政に於ける狀況を度外視して、自由に軍事費を決定し、時に軍部の一方に於て、經費を節約することはあつても、斯くて生じた剩餘を、軍部の他の一方に於て、費消するが如き、誠に我國財政に於ける一病弊であるとしなければならない。國家の經費は其性質上、軍事費、國債費一般行政費の三者に分類され、是等三者の間に、適當の調節を維持して、始めて財政に秩序あらしめるを得ることは、一個の定説であるのに、我國に於ては動もすれば陸海軍經費が經費の大半を占め、然も其の金額は固定して　動かず、財政を壓迫することの甚しきものがある。第一軍備其ものをして生産的のものたらしめることは不可能であるとしても　軍事費の支出をして經濟的のものたらしめるを得ないであらうか、第二人智の進歩と共に、兵卒の服役年限を短縮して　有事の際に要する兵員を經濟的に養成する道はないであらうか、第三國際聯盟の成立、海軍休日の實行等に依つて、國際間の局面の一變した今日に於て、我國の國防方針にも根本的變革の加へられる餘地はないであらうか、共に國民として考ふ可き所であつて、以上の諸點を明かにして、軍事費を整理したならば、我國の財政をしゝ始めて其の安きに就かしめるを得るであらう。

金權者階級の財政に對する羈束

我國の財政には金權者階級の加へる羈束の著しきものがある。從來の如く選擧權が直接納税額に依つて、一部の階級に獨占され、其階級に屬する者の內、比較的金力の豐なる輩が金權者階級を形作つて居る場合に、金權者の勢力が一の團體と爲つて、政治の方針を左右することは、常に起り易い間違である。殊に我國の政黨は其所屬議員の選擧競爭の度毎に要する多額の運動費を補助しなければならない關係上、財源の調達を急とする事情があると見へ、殊に金權者に接近し、其階級の意嚮を迎へんとする傾向の著しきものがある。租税の增徴される場合には、消費税に於て之を爲し、租税の輕減される場合には、直接税に於て、之を爲すが如き、我國に於て常に見る所であるが、實はデモクラシーの思潮に依つて、左右されて居る外國の財政方針に比較して、正反對に動きつゝあるものと見なければならない。現に英國に於て、政權を掌握しつゝある勞働黨が在野時代に租税に關する方針として、世間に公表して居つた所は何であつたかと云へば、所得税や相續税を增率する一方に、所得税の免税點を引上げたり、消費税中の或るものを廢除輕減するこ

とであり、更に土地の自然增價や、其他の不勞利得に對して、苛重の負擔を加へることが多くの機會に於て、披瀝されたのである。最近勞働黨內閣の組織された機運に乘じて、今後果して右の如き政策が租稅制度の上に施されるかどうかは一個の問題に屬するが、現に輸入稅の如きは、改正されて、戰前に行はれた簡單なる狀態に復歸しつゝあることを考へたならば、勞働黨が在野時代に於ける立言に對して、責任を持つものであることを知るを得るのである。

之に比較すれば、我國從來の租稅政策が金權的であり、貴族的であることは、寧ろ吾人の恥る所である。往年原內閣の時代に行はれた所得稅法の改正に於て、從來の源泉課稅法が綜合課稅法と爲り、爲めに資產家や、富豪に對する負擔の聊か重きを加へたことは、政友會內閣の財政策としては、極めて異例に屬する所と見られる。而して金權者階級が其負擔に苦しみ、機會あれば源泉課稅の舊に復せしめようとして、運動を試みつゝあるが如き、注目に値する所であつて、若しも斯る復舊の行はれるが如きことがあつたならば、我國財政策の墮落も亦甚だしと云はなければならない。苟も新內閣にして意を財政の整理に用ゆるものである以上は、斯る僻說に耳を藉さず、租稅制度の改革をして、眞に時代の精神に一致する方針に就かしめることを要する。普通選擧の實行は單に國民の權利を伸暢することのみに於て價値を存するものではない、斯く伸暢された國民の權利が財政を改革し、經濟を刷新するに至つて、始めて大なる效果を奏するのであつて、普選を斷行する現內閣が如何に普選を善用するかは、吾人の注目を怠らざる所である。

更に我國の財政に對して、金權者流の加へる壓迫の一は減債基金の問題であつて、往年桂內閣が公債償還額を五千萬圓に限つた來歷は今日に至つて、遽に動かすことが出來ず、大隈內閣の時代に於て、多少の改正は試みられたものゝ、銀行業者の團體は財政の狀況如何に拘はらず、常に或る定まれる金額の公債元金に投ぜられることを希望し、然も其償還の抽籤償還法に依ることを政府に強要して已まず、政府も亦公債政策の下に、多額の公債を發行したり、又は公債を借換へたりする際に、銀行業者の援助を藉らなければならない關係上、彼等の歡心を繫ぐ必要ありとし、減債基金や、公債償還法の問題に關して、銀行業者の要求に接すれば、之に聽從する結果、遂に我國の財政に一種の瘤に類し、癌に似た邪魔物を作り出したことは、吾人の甚だしく遺憾とする所である。然しながら今や事情は著しく違つて來た。政府自ら非募債政策を行はんとし、本年度に於て先づ公債の一般公募を打切ることを聲明した。更に此聲明をして

意義あり、有效なるものたらしめるには、明年度の豫算案に於ては、出來る限り、公債財源の事業費を節約し、緊縮すると共に、其事情已むを得ざる爲めに、殘存する事業費の財源は之を一般歳計に於ける剩餘に求める方針に出でなければならず、普通財源に此餘裕を生ぜしむるまでに、經費を節約しなければならない。斯の如くして非募債政策は徹底的に行はれる道理であり、此政策の行はれること、期年に及んだならば、其公債市價に良好なる影響を及ぼすは明白の事實であつて、其效果は彼の減債基金法の下に、若干の公債を償還しながら、之に數倍する公債を發行するが如き不徹底なる政策を行うものゝ比ではない。

既に斯の如く政府に於て非募債政策を斷行するもの、また斷行し得るものと方針の定まつたからには、今日の財政狀態に於て、特に減債基金を以つて、公債の償還を續行する必要はない。公債の負擔を輕減し　其市價の騰貴を見るのは、一般國力の發展若くは財政整理に基く信用の增進に待つことゝし、一時減債基金を中止して、之に充てられた財源を普通財源に繰り入れることは、財政策として、行ひ得る所であり、之を行ひ得ないとすれば　政府は依然としゝ銀行業者とか、金融業者とか云ふやうな階級的利害關係に依つて、其財政策を左右されて居るものと評さゞるを得ないのである。

財政策の大本と枝葉

之を要するに我國の財政には其大本として行はれ可き唯一の政策があるのみである　即ち經費に大なる節約を施し　財政の規模を縮小する一事は即ちそれであつて、此一事を除いて、財政整理の要訣は他に何ものをも存しないのである。經費が縮小されて從來物資や勞務に對して　政府の致した需要が減少すれば　物價は必ず低落するであらう。物價が今後引續いて低落する趨勢の現はれた以上は、之に應じて金利歩合は低廉と爲つて、金融緩和の大勢を馴致するであらうし、更に財政計畫に於て公債財源の事業費が削減され、非募債政策が徹底的に行はれるに至つたならば、從來財政を以つて金融を壓迫して居つた弊は除却され、金融の緩和は資金の供給を便利にして、事業の計畫に大なる刺戟を誤まらざる道理である。私が經費の削減、財政規模の縮小を以つて、當面に於ける財政策の大本であるとする所以である。

既に此事を大本とする以上は、此大本にして定まつたならば、他の枝葉の問題は刃を迎へて　解決されるであらう。例へば金輸出解禁問題が昨今世間の一部に於て、議論されて居る。之は從來金輸出の禁止を解決することを主張する點に於て、敢て人

後に落ちなかつたことを信ずる。然しながら金輸出の解禁を爲すには、自ら爲す可きの時期があつた。今日から既往に遡つて考へると、彼の加藤（友三郎）内閣の當時、對米爲替が次第に騰貴して、四十九弗に上り、正に五十弗に近づかうとした際の如き、金輸出の解禁を行ふ可き適當の時期であつたと云へる。斯る際に於てこそ、之を行つて他に著しき支障を及ぼさず、將來に於ける正貨の出入を自由にし、經濟社會をして常態に就かしめるを得る道理である。然らば今日直に金の輸出を解禁したならば、如何なる結果を生ずるであらうか。今日の如く對米爲替相場が四十弗とか四十一弗とか云ふが如き低き所を上下し、一方に輸入超過の大勢の依然たる場合に、金の禁輸を解いたならば、第一に現はれる事相は輸入に對する代金決濟の容易と爲ることとの關係から、輸入品市價の内地市場に於て、低落することでなければならない。而して其低落の程度も昨今の爲替相場に徴して、相當急劇のものである可きは勿論であつて、斯る急劇なる輸入品市價の低落は必ず現に輸入品を買取つたり、又は注文したりした輸入業者の營業に一大打擊を及ぼし、爲に生ずる經濟社會は殆ど測り知るを得ない。斯の如き急劇なる政策は終局の效果に於ては兎に角、目前の結果に於て、經濟社會を安定せしめる所以であるとは考へられない。

此點に於ても私は經濟財政策上の本末を明にしたいと思ふ。即ち前記の如く政府の爲す所が政策上の大本に就き、經濟の縮小に全力を注いだならば、必ず物價の下落と金融の緩和とを併せ來らしめるを得るのであつて、是等兩者の事實に接したならば、自然貿易の逆勢は抑制されて爲替相場亦恢復の緒に就き、金の輸出解禁を行ふに就て、此の支障なきに至るのである。今日四圍の事情如何を顧みずして、直ちに之を行はんとするが如きは、事の大本を定めずして、徒に其枝葉に就かんとするものであつて、效果の見る可からざるは、論を俟たざる所である。

奢侈稅の新設亦然り

政府は奢侈稅を起す計畫であつて、奢侈輸入品に對して、十割の課稅を爲す案が臨時議會に提出されるようである。思ふに本文印刷の頃には、一個の法律として、吾人に適用されて居るかも知れない。然しながら私は奢侈品課稅に對して、之を重要視する價値を認めることに躊躇する。政府が斯る工風を講ずるのは、畢竟第一には貿易の逆勢を匡正し、第二には國民をして堅實の風に就かしめる趣意に出ずるものゝ如くであるが、二者共に奢侈品課稅に依つて、之を果すことは、困難であるとしなければならない。第一に輸入超過の問題に就て考へる。恰も鼓

近發表された本年上半季の貿易表に據れば、上半季の輸入超過は六億六千八十八萬六千圓と計算されて居る。如何にも巨額の入超であつて、其經濟社會を壓迫する力の大なるや、論を俟たざる所であり、如何にして其大勢を匡正するかに就て、世人の頭を惱ましめるのも、亦敢て異とするに足らない。然らば此入超を生ずるに至らしめた輸入貿易十四億六千九百萬圓の內、如何なる物資が比較的其多くを占めて居るかと云ふに、棉花の三億八千五百六十二萬圓、鐵の一億三千六百五十八萬圓を重なるものとし、此外に稍や金額の大なるものとしては、

	千円
米及籾	四〇、三七二
羊毛	五七、七八三
木材	八四、八二九
毛絲	三七、七四七
毛織物	二六、六三四
機械類	七二、九五三

を數へるのである。然らば重要輸入品の何處に奢侈品があるか、毛織物の內に、或は品質の優等なるものがあつて、其れが奢侈品と云へるかも知れないが、其金額は知れたものであらう。一時毛絲の輸入高の多いことを擧げて、恰も無用有害なる物資でも輸入されるが如くに非難した人もあつたが、毛絲が肌衣と爲り、洋裝の上衣と爲り、其他種々の實用品に供されるのは、畢竟我國に於て羅紗の價格の高きに過ぐる結果であつて、毛絲の輸入は或る程度まで、羅紗の價格を調節する效果ありと考へられる。之を以つて絕對の奢侈品とするが如きは、大なる間違ひである。然らば奢侈品は現に輸入されるであらう、其品目は寶石類、洋酒、絹織物を始め十數のものが擧げられるであらうとしても、全體の金額は合せて、幾何に上るであらうか。思ふに一千萬圓とか、二千萬圓とか云ふ數量に上るに過ぎないであらう。果して然らば之に十割の課稅を爲し、全部の輸入が遮斷されたとした所で、貿易の逆勢を匡正するに幾何の資するものがあるであらうか。其得る所の少なきは、論を俟たない。

然らば斯る課稅は國民をして奢侈品の消費を思ひ止まらしめるか。十割の課稅は表面から云へば、輸入品の市價をして二倍の高きに至らしめ、其れだけ消費者の消費力を減殺するに至るやに考へられるけれども、之に對しては種々の拔け道がある。第一奢侈品は多く價格の高い割合に、輕量であるから、稅金の高きに隨つて、密輸入行はれる虞れ極めて大である。第二奢侈品に對する需要は必ずしも價格の高低に依つて、直接に左右されず、價格の高きと共に、却つて需要に對する刺戟を盛ならしめる傾きがある。是等の二點から云つて、輸入稅の加重が如何

なる程度まで奢侈を抑制するに至るか、私は大なる疑問を持つのである。

内國産の奢侈品は如何する

今日我國民に向つて、眞實奢侈的消費を愼ましめよう、質實の風を守らしめようとする以上は單に外國輸入の奢侈品に對して、制限を加へるのみに止まらず、之と相對する內國產の奢侈品にも同樣の制限を加へなければならない。然らずして外國輸入品のみに課稅するに止めたならば、其輸入稅は恰も保護關稅を賦課したと同樣の働きを爲し、國產奢侈品の生產併に消費を不獎勵するに至るからである。既に當局者にして奢侈的消費を不可なりとして、輸入品に課稅する以上は、其趣意を課る爲めに、輸入稅と均衡を保つ程度に於て、輸入品と同種の內國品若しくは輸入品に代用される內國品に總て課稅しなければならないことゝ爲る。輸入稅の賦課は比較的簡單であるに對し、內國稅の賦課は事甚だ煩雜である。絹織物とか、寶石とか、酒類とか、政府の認めて奢侈品とする物質の賣上高に對して、定額の稅金を印稅の形態に於て、納付せしめることゝしても、果して逋脫の恐れなく、又當業者に大なる壓迫を加へる憂なくして、徵收されるかどうかは、一個の疑問たらざるを得ない。

如何にも歐洲戰爭當時我國に起つた經濟社會の好景氣、之に伴つて吹荒んだ成金風は一部の我國を騙つて、不健全なる生活に向はしめ、奢侈的消費を促すことゝ爲つたに相違ない。而して其餘波は今日に至つて、尙ほ底止する所なく、一部階級に奢侈の行はれたること依然たるものがあり、昨年震災火難は一時帝都の人々をして愼む所あらしめたようであつたが、約一年を經過し、當時の記憶の次第に薄らぎつゝある今日に於ては、奢侈の風習の再燃しつゝある勢の侮る可からざるものがある。政府が奢侈品課稅を思ひ立つた所以も亦一理なしとしないのであるが、元來我國に於て不景氣の稱されること、既に久しきに拘はらず、尙ほ社會の一部に奢侈の行はれて已まない。即ち不景氣風の徹底するに至らないのは何故であらうか。之に對しては私は政府が從來濫費を事とし、不景氣時代に於て、尙ほ不景氣風の徹底を妨げるが如き方針を取つたことを擧げなければならない。如何に不景氣があると云つても、政府が年々十數億圓の經費を濫費し、物資や勤勞に對して、大なる需要を致して居れば、一政府に對して物資や勤勞を供給する者が好景氣時代に異ならざる境遇に居り、相當の奢侈を營むのは、必ずしも異とするに足らざる次第である。

故に今日我國民をして眞に質實の民たらしめよう、剛健の風

あらしめようとするならば、必ずしも奢侈税の工風を要しない。政府にして飽くまでも消極政策を以つて、經濟財政を律すれば即ち足れりとするを得るであらう。消極政策は時に萎縮退嬰の嫌あるの故を以て、國民の喜ばざる所であるかしれないが、今日吾人の必要とする所は國民經濟の不振なる狀況と均衡を保たしめるまでに、財政上の方面に於て、緊縮を事とする次第であつて、要するに他日の伸張を謀る爲めに、一時の屈折を忍ばんとするものに外ならない。此事に政府が着眼して、斷乎たる決心の下に、財政上に消極政策を施したならば、此以外に於ける小策は寧ろ巧智に過ぎて、却つて事を煩冗ならしめるの嘆なきを得ない。私は政府が政策上の根本を把握して、事の末節に齷齪せざらんことを希望して、已まざるものである。



現代人の生活信條と奢侈贅澤品課稅問題

贅澤の原則論及び時論

杉森孝次郎

贅澤が正邪善惡の批判を受ける正當可能は、それの本質には存しない。贅澤に對する倫理的批判は、一個人の全生活に於ける贅澤の位置、及び一社會の全生活に於ける贅澤の位置に對する評價としてのみ成り立つ。

贅澤が、欲望の自然的肯定を意味する限り、それは人性に通有の本能的一傾向だ。これを無條件的に否定することは不可能であるがゆゑに無意味であるか、人性にとつて本質的に有害であるがゆゑに惡であるかにきまつてゐる。

一個人の全生活に於ける贅澤の位置が、かれの消費主義を證據立てる性質のものであるならば、それは、その限りにおいて、惡だ。同樣に、一社會の全生活に於ける贅澤の位置が、その贅澤者の消費主義を證據立てる性質のものであるならば、それも、その限りに於いて、惡だ。宋代の一書「鶴林玉露」內の「百姓不レ可ニ一日有ニ此色一(菜色)、士大夫不レ可ニ一日不レ知ニ此味一、余謂百姓之有ニ此色一、正縁ニ士大夫不レ知ニ此味一」の如きは、直接には、この第二の場合に關係ある一考察言だ。

贅澤が、一個人の全生活に於けるそれの位置を、かれの消費主義を證據立てる性質のものとして持つ場合には、それは、直接には、或る個人惡だ。贅澤が、一社會の全生活に於けるそれの位置を、その贅澤者の消費主義を證據立てる性質のものとして持つ場合には、それは、直接には、或る社會惡だ。

贅澤の一特質は、欲望の自然的肯定を意味する或るかたちだが、その「或る」といふ制限の一特質は、「消費的」だ。消費は人性にとつて本質的一必要事だから、贅澤が消費的欲望の自

的肯定をそれの一特質とするものだといふことは、それだけでは、贅澤は或る善ではあるが、なんらの惡でもないといふ意味を構成するにすぎない。

善は、心理學的には、欲望の無條件的滿足を意味する。善は、倫理學的には、欲望の統全的滿足を意味する。倫理學的善は、心理學的善の可能的諸形のうちの或る一形だ。一個人が、かれの欲望を全人格的統全形に於いて滿足させる意志が、かれの善なる意志であり、さうする行爲が、かれの善なる行爲だ。同樣に、一社會が、それの欲望を全社會的統全形に於いて滿足させる意志が、それの善なる意志であり、さうする行爲が、それの善なる行爲だ。倫理的個人善はこの第一の場合を意味するものにほかならず、倫理的社會善は、この第二の場合を意味するものにほかならない。

欲望の滿足でさへあれば、それが一個人の全生活内の現象である場合についていふならば、それがかれの他の欲望との關係に於いてはどんなものであらうとも、個人心理學的には、それはそれだけの個人善だ。同樣に、欲望の滿足でさへあれば、それが一社會の全生活内の現象である場合についていふならば、それがその社會の他の欲望との關係に於いてはどんなものであらうとも、社會心理學的には、それはそれだけの社會善だ。

かくして、たとへば、次ぎの瞬間には、當人自身が顧み、省みて深く悔い、恥ぢ、あゝするんではなかつたと判斷するやうな不節制的行爲でも、その行爲の當瞬間に於いては、それはかれによつて選ばれた位だから、選ばれたのだから、それは、それを選んだ部分によつて代表されるかれの主觀にとつて善かつたにきまつてゐる。その行爲に、わが自由意志によつて機會を與へることが、さうしないことよりも愉かつた、すなはち快かつたにきまつてゐる。たとひその場合にかれの意識内にさうしないことを選ぶ部分があつてさへも、その部分は、さうすることを選ぶ部分に比して、かれの全生活を決定する力に於いてまけてゐたのだ。

消費的欲望を自然的に肯定する意志が贅澤意志であり、さうする行爲が贅澤行爲だ。しかし、「合理的」は「自然的」のうちの一形ではあるが、すべての「自然的」が必らず「合理的」であるとは限らない。贅澤は必らず自然的だが、必らずしも合理的ではない。ここで自然的とは心理的、事實的を意味し、合理的とは倫理的を意味する。

文明人は野蠻人よりも贅澤だといひ、文化生活は原始生活よりも贅澤だといひ、現代生活は古代生活よりも贅澤だといふやうな場合に於いては、その贅澤は、おほむね、倫理的にも善

だ。それは、全人格的に、また全社會的に、欲望の滿足の進步を意味するかたちの贅澤だからだ。その贅澤によつては、一個人の全生活内のいかなる他の部分も、また一社會の全生活内のいかなる他の部分も、犧牲にされることは必らずしも意味されないからだ。それは、かへつて、各人の自由の增大を意味するものにほかならないからだ。現代人にとつては、眞夏に氷を飲むこと位はなんでもない藝だが、冬には暖地を追ひ、夏には低溫地を追うて旅行することも、汽車や汽船が絕無の時代に生きた人にとつてとくらべては、要するに出來ない相談ではなくなつた。これを、現代人は贅澤になつたから、それだけ惡化したのだとは、なに人も知識を缺かずには考へえない。

贅澤は愉快だとは人情の普通の判斷だ。ただ、今日の贅澤が明日の窮乏を原因づけると知られる時、また、社會に於ける一人または一部人の贅澤が、その社會に於ける他人または他部人の窮乏を原因とし、手段とし、機會とし、結果とし、目的とすると知られる時、自己保存、自己大成、同情、愛、責任、義務、正、個人的全幸福、社會的全幸福等の興味からして、その贅澤は非認される。贅澤は愉快だが、もつと愉快なことが、その贅澤を實現するためには不實現される場合がある。その場合に、その贅澤は、一個人の全生活内に於いて、あるひは、一社會の全生活内に於いて、適當に、すなはち、賢明に、位置づけられず、もしくは、關係づけられてゐないゆゑに、その一個人の全生活の興味からして、またはその一社會の全生活の興味からして、大の蟲を生かすための小の蟲として殺されることをあたひするのだ。

一人は諸多の興味の組織的一全體であり、一とつの社會はかくの如き人の多數から成る組織的一全體だ。その組織的一全體の幸福を目的として、贅澤は、あるひは可決され、あるひは否決される。

快樂といへば、多くの場合には、物質の消費を方法としてえられる。したがつて觸、味、嗅、視・聽的特質に代表される種類の欲求の滿足を現代人は意味し、幸福といへば、しばしば、全人格的反省によつて否定されない、したがつて一層精神的または理性的特質に代表される種類の欲求の滿足を現代人は意味する。かくして、磔上のヤソは苦痛ではあつたが幸福だつたといはれ、左團扇で幸福がる親の心が知れぬといはれる。

贅澤は無條件的に惡ではない。左團扇としての贅澤が惡であるのだ。いはゆる搾取階級や搾取者の贅澤、すなはち搾取的贅澤は、この意味に於いて惡だ。そこには同情と愛と責任心とが缺けてゐるからでもある。飯にも有り付かぬ隣人に菓子を生産

させて、飯の上に菓子を食ふかたちの贅澤が、當然、問題とされうるのだ。

贅澤は無條件的に惡ではない。超人を理想としたニーチェに蔑賤された「英國人」の消費主義的愉悦が惡であるのだ。ドイツ語のベハーグリヒカイトや英語のスナッグネスに代表される生活目的が惡であるのだ。深い自己は生産主義によつてのみ現實化されるがゆゑに、深い自己の現實化をさし措いて、ひとへに淺い自己の滿足に耽るかたちの贅澤が惡であるのだ。

雄大なる贅澤であつても、それが搾取的消費を意味するものであつてはならない。安價な、輕易な贅澤であつても、それが生産主義的最深自己に機會を吝しむかたちのものであつてはならない。

贅澤と趣味との間には或る關係がある。しかしながら、趣味の第一要件は、それが完全に藝術意識であることだ。藝術意識の第一要件は、しかるに、自己目的にある。

いまはさすがにすたれた流行らしいが、金の鯱を門頭や棟角に逆立たせてうれしがる如きは、それ自身は、趣味ではない。それは、財力の卓越を誇示するための一手段にほかならない。その家の主人の趣味は財力の卓越を誇示することにあるのだ。一間四方もあるやうな石をわが庭に置き据えて悦ぶ俗習なども、多くの場合に、財力の誇示がそれの第一目的だ。

一とつのものを、それが高價なるがゆゑに愛し、貴み、一とつのものを、それが低價なるがゆゑに愛せず、貴まないことはほとんど通情だが、これは、すべて、財力誇示の趣味がほとんど通情であることを意味する。寶石や黄金屬が貴ばれる第一原因はここにある。

財力誇示の趣味が無くならない限り、一とつのものを、それが高價だから購求し、所有し、消費することを有り難がるかたちの贅澤は、永久にそれの機會を求め、造り、見いだすだらう。

財力は、すくなくとも過去及び現代の通般的事實としては、それだけの自由を意味するがゆゑに、現代人が財力の大を欲することは自然だ。しかしながら、財力の持たれかた、使はれかた、造られかたは、財力以上の目的によつて決定されることが最も自然だ。

費用のかゝる物質的消費が意味する快樂が、その費用が大きいほど、またその物質的消費に於ける物質がそれの種類及び數量に於いて無制限であるほど、そしてその消費しかたがまた無制限的であるほど、したがつて浪費的でもあれば濫費的でもあるほど、贅澤をいよいよ完全に資格づける。

贅澤の一特質が、稀れにのみ可能である物質的消費を意味することは、稀れにのみ可能である支出を最も生命的に意味するものにほかならない。

たとひ物質的消費に限られてはゐても、贅澤が、それの無制限的背景に傾いてゐることは、それだけの事實としては、きはめて人性に自然な、且つ忠實な方法であつて、繰り返して注意するが、それだけの善だ。それは、實に、自由のそれだけの主張にほかならないからだ。

自由は選擇可能を意味する。一とつのものが、それの在りかたを選擇する可能または能力を持つことの有無、大小が、それの自由の有無、大小だ。人の自由が、すなはち人の在りかたの選擇が、もしも物質的消費が意味する快樂の選擇に限られてゐるならば、各人は贅澤を支配目的として生活するに越したことはない。それ以上の善たり、幸福なりをかれは望む資格はない。しかしながら、事實として、人の自由は決してそれに限られてはゐない。こゝに於いてか、人としては、最も自然的に、すなはち理想的に、生活するためには、かれの在りかたのあらゆる選擇可能を比較し、そして最も完全な價値體系をそれに與へる必要がある。しかるに、この必要は、人をして、精神的及び物ゝ的生産が意味する幸福を、かれの生活の支配目的とするほかないことをつひには必ず知らしめる。物質的消費が意味する快樂の如きは、その支配目的に從屬し、奉仕する限りに於てのみかれによつて肯定される本質的位置、本質的關係を固有するものであることが、その必要に依つて結論される。物質的消費が意味する快樂は、これを肯定することは、人性に於ける本能的一傾向ではあるが、人性に於ける本能的全傾向ではない。それは人性に於ける本能的統導傾向でもない。こゝに贅澤の價値の制限が最も合理的に、そして結論としては必然的に、成り立つ根據がある。

もしそれ最近に問題とされつつある贅澤品輸入阻止案について一言するならば、あれは一時の、また一部の攘夷的、鎖國的思想に投じて、徹底と組織と統全とを缺く國民的自給經濟を匂はした細技の觀をいちぢるしく呈する。當局が騒ぐほどの、また吹聽するほどの道徳的效果が期待しえられる性質のものでは決してないと判斷される。それは、なんらいふに足る經濟的、財政的意義あるものでは尙ほ更ら明白にないと知られる。それは、大體に於いて、多少とも國家及び國民の生存を、不利、不自由、損失に導くだけのものではないか。深見と、全觀と、大意とが、勿論現代日本の世相または政府たるものの立ち場からしていふのだが、問題の提案にも、例外なく缺け、且え

る。小細工の愛國振りは、いよ〳〵國步を艱難に導く。現代日本の最要事は、國を擧げて生産主義の深い、まじめな、大きな新信仰に再生するほかにはないが、問題の案の如きは、この雄々しき愛國主義とは兩立しない。それは、どうも、みづから小さくし、みづから狹くし、みづからいやしくするせせこましさに於いて目立つ。それよりか、いな、あんな提案をするひまに、露國と支那にむかつて、眞意ある友人主義の手をきはめて大膽にさし伸べて、したがつて自然に原料と市場を國際的に大きく享用する提案を敢てすることの方が、どれほど愛國的急務であるか測り知られないほどだ。これこそが急務だ。問題の提案の如きは不急務ですらない。それは、要するに、多少ともかなしむべき小國主義的、亡國主義的一現象だ。創造的構想の雄飛に羽打つ質實なる勤勞意志の特徴としてでない單なる節約主義の如きは、現代の日本を救ふ方角とは正反對の方角に頭を向けてゐるものだ。貴族院は、せめてもの在り甲斐にあれを否決するがいい。意地としても、窮厄時には、事實上なんの足しにもならないやうな小利害には目も呉れないで、平然としてゐるか、大きく出て痩せ我慢を張るかすることこそ賢こい。つまらぬところで自國の窮態を廣告したくない。それは、國際的大藝を演ずる上で、むしろ不可測案の邪魔を除く。

日本の政治も、なんとかして、實用新案のまね事見たやうな事ばかりしないで、内外に恥かしからぬ專賣特許式のものに早く變はらないだらうかと、問題の提案を見るにつけても考へさせられる。

或る種類の製品を、國内産と國外産とにかかはらず一律に高く課税する提案ならば、比較的に認容される。贅澤も自然に多少は制限されようし、國内製作の技術の發達、國内的生産組織の改善も、それならば怠る機會を與へられない。勿論、それにしても、その「或る」には、充分なる批判と研究が先きたたねばならん。たとへば、樂器類をまでも容易に贅澤品視するが如きは甚だしい無識だ。それは興國の功利的政治的目的にすらそむく。音樂の文化價値はいまさらいふまでもないとして、また日本の音樂的未發達もいまさらならぬ注意として、現代の日本が、その暁古の難關を内外に突破するためにさへ、意志あり構想ある興國の樂の名を眞に値ひする眞新樂の發明と普及は根本的一必要事ではないか。

勿論、しかしながら、次第に增勢してくる必然がある國民中の大多數の筋勞的生産者にとつては、いはゆる贅澤品に税が課せられようが、課せられまいが、現在の生産組織下において は、それは、直接には、「こちとらは花が咲かうが咲くまいが」の印

象を高々與へうるにすぎない。それがさうであるあひだ、政府としてなすべき仕事が、一層根本的な急要務のかたちにおいて、この方面にも大きく着手されずにあると斷定される。
衆議院は、今回の提案を、否決する意志であるかの如くに言論して可決した。現代日本の衆議院そのもの、政黨そのもの、内閣そのものが、また一とつの不まじめな搾取的、消費主義的群團であるかの如くに、その意味に於いてあはれむべき贅澤仕事團であるかの如くに多少見えること、多少はまた見えるだけの事實もあることを、なに人か知識と研究を條件として否定しえよう。（七、一五）

近代の人の生活信條と奢侈贅澤の意義

千葉龜雄

道德以外の定義

みそさゞえが林に棲んでも、棲むところは一枝に過ぎない。廿日鼠が河に飲んでも、飲むところは満腹に過ぎない。——一枝以外、満腹以外が、いはゆる贅澤であると、莊子流に人間生活を限定して了ふならば、何が贅澤であり、贅澤でないかの差別は直ぐわかる。
また、徳川時代のやうに、機會によつて生れた階級制度を目安として、箇々の生活價値をきめるとする。商人は何々の屋敷を作つてならぬとか、農民は、木綿以上の着物を着てならぬとか、何萬石以下の武士は城池を作つてならぬとか、そして、その點線以上の生活を贅澤とみとめ、法制に問ふといふならば、そこでも贅澤であるか、無いかの差別は直ぐわかる。
かくして、いはゆる奢侈贅澤を禁止するために、どれほど

澤山の道德論と法律が、世界のすべての國々に生れたか知れない。それなのにいわゆる奢侈贅澤なるものは、相かわらず平氣な顔をして、いかなる國家、いかなる時代にも横行をして居る。何故であるか。奢侈贅澤をつくる力そのものが、道德や法律以上に飛び出して行く强い内在力を持つて居るためか。それとも、いわゆる奢侈贅澤を抑へるものが、道德や法律とは全たく違つた、何等かの他の力であるべきものを見落して居るためか。恐らく、多くの理由がその第二の方にある。近代人の社會的發見の一つがまたそこにある。

人類欲望の開展

思ふに、莊子流の「足るを知れ」式の論理觀、若くは德川政府者の、いわゆる「分に過ぎる奢り」を禁止した論理の缺點は、人類生活の現在を固定的なものとし、それより一歩でも上に進出させまいとすることにある。然るに人類生活の目標は、いつも現在に安住せずに、將來の幸福に向つて疾驅するところにある。ホッブスに待たずとも、人類は元來が快樂主義なものである。魚が餌に釣られるように、人類は、將來の光りと悅びを約束されてたゞ先驅する。そして、その疾驅する意志を刺激するものがいつも人類の慾望である。だから大きな進化は、いつもはつらつとして展開された、人類欲望の刺激によらねばならぬ。然るに既成の道德や法律は、かゝる慾望の一歩でもの進出をも、あたまから否定してかゝるのである。その一歩でもの進出を、贅澤であり、奢侈であるとして見るからである。すなわち彼等の見方は、人類の進歩に對して無意識的に反逆をはかるものである。

第二に、人類慾望の開展といふものを、既成道德や組織で束縛しやうとする彼等の愚かさを考へる。それには、多くの社會階級組織そのものが、もともと機會的なものであつて、決して本質的なものでない事から言わねばならぬのであるが、しばらく、それは在るがまゝに肯定するとしてもよい。たゞ人類の欲望は、社會に階級の有る無しにかゝわらず、全く何人にも均等であることを先づ悟らねばならぬ。だから社會階級の性質によつては、慾望の分量を區別しやうとすれば結局失敗に了る。王者や貴族專制の國家が、極端な傲奢によつて、その國家を滅ぼすことに終るのはそのためである。人間の慾望は水のやうなものだ。均等されねば決して流れて止まぬ。故に王者が王者たるの故をもつて勝手に傲奢をして居て、いくら勤儉を民衆に宣傳したところが何にもならぬ。ルイ十四世と朝臣の傲奢をいかつて、フランス革命を起した賤民等の心理は、即ち王者と同じ埀

に持つ彼等の慾望が、王者にのみ偏重されて現はされたのを破壞する心理である。ロオマもまた、王者と貴族の奢侈によつて滅びた帝國である。そこでは何萬人かの金持が、國獸や、大浴室に贅澤を凝す刹那に、何百萬の奴隷と貧民が動物の食ふものを食つて、厩の中に棲んで居た。「ロオマ興亡史」を書いたエドワアド・ギボンが、「奢侈の必要」といふことについて現代のやうな不完成な社會狀態にあつては、たとへ奢侈が、不德や愚行から起るにして――不平等な財産分配を修正し能ふ唯だ一つの方法のやうに見る。たとへば勤勉な機械師や熟練な技藝家などは、現代ではわづかでも、土地を分配してもらうことが出來ぬのだが、たゞ土地の持主から好意の税を受取る。といふのは、その地主達が、機械や技藝の力でもつて、彼等の土地を改良してもらうといふ餘剩享樂を買ふために、利息の意味で機械師等に金をやらうとして居るのだ、といふ意味の皮肉な議論をして居る。が、その機械師や技藝家とても、地主とやはり同じ慾望を持つ人間である以上、いつまで享樂のお餘りに甘んじて居るわけはない。「われ等は軍隊を持つ、また警官を有する」と、威たけ高に肩をそびやかす「成金」と、チベリアス・グラッカス兄弟が、「貧民法」を通過さした貧乏な百姓とが、一緒にされて居たロオマ帝國の運命が、あんな悲惨な目に逢つたのは少しも怪しむに足りない。

奢侈の標準いかん

一體、いわゆる奢侈贅澤が、既成道德や法律で測度することが出來ないとするならば、果して、どんな新しい秤によつて測量すべきであるか。それには先づ、奢侈とは何であるかの探究から始めねばならない。

贅澤品の何であるかについて、或は有用品、必要品、贅澤品と區別し、有用必要以外を贅澤品とする見方もあるが、人類が、箇々によつて性格、肉體を異にする關係の上から、たとへ常識からしても、有用と贅澤の區別は客觀的に容易に分類しがたい。それに一方には時代の進歩がある。わが國ではゴム輪の人力車さへも贅澤だと批難された時代があつたが、今日では、自動車さへも有用であり、或ひは必要品でさへもある。今日蓄音機を、贅澤品であるとして苛重の關税を課したけれども、國民の趣味教育には、蓄音機は缺き得ない有用藝術品である。

次には、箇人、或は團體の收入額以上に、消費することを奢侈或は贅澤であるともいふ。が、もし收入を標準として、奢侈と奢侈でないとを定めるとならば、富豪がどんな飛放れた、馬鹿々々しい奢奢をしたところが、それを當然だと見許さればな

らぬ。富豪者が天下の恨みを一人で背負はねばならぬ理由には、その富を作つた手段の非合理であることが一つであるけれども、より多く、社會が、前に擧げたやうな、奢侈の社會的遜加の心理を平氣で許して居るところにある。河竹默阿彌の鑄かけ松が、侍階級のだらしない遊興を見て、兩國橋の上から鑄かけ道具を抛げ捨て、急に盜賊に變じたきつかけの心機轉換が、幾分でも觀衆の胸にうけ入れられるのはその反抗氣分である。

つぎに、いわゆる奢侈や贅澤氣分の存在が、社會に害毒を流す場合があれば、それの一つはいわゆる奢侈贅澤が容易に流行心理を作り易いところにある。たゞ一人が、贅澤をして居る分では、その關係するところが高々關係的な社會正義の上であるが、奢侈そのものが、必然に流行心理をつくり他人の慾望を刺激して、それと同じ享樂を他人に求めしめ、或ひはその反感を刺激して、社會存在に不安な感情をひき起さするところにその大きな禍根がある。

と、いふのは、奢侈、もしくは贅澤が、もともと一つの占有慾の標示であるからだ。たとへば、富豪が奢侈であるといふ場合には、彼は平生そこらに散つてる有りふれた物貨にはもう見果て、厭き果てた。そこで金にあかして、他人の持たない新らしい、珍らしい物貨を占用しやうとする。それがためには、どこまでも他人の競爭を許さぬために高價でありたい。その内容がまづい物であり、贋せ物であるか、どうかなどは、決して問題ではないのである。なるほどかうした時の氣まぐれに眞の價値のある美術品や、藝術家が、富豪によつて保護されたりする機會もある。けれどもそれは、その美術品や藝術家の價値を知りつくしての上ではなくて、たゞ全たく彼の奢侈心の虛榮を滿足したに止まる。或はまちがつて、好もしい趣味だなどと褒め立てられるけれども、それによつて彼れそのものの奢侈心のつまらなさを差引く何ほどの足しにもならない。

流行心理と贅澤

何でも高價なものである。珍らしいものである。新らしいものである。いや、珍らしく、新らしきが故に高いものである。その高いものを慾望する。けれども、富豪の持つ慾望は、貧乏人だつて同じ量に持つて居る。たゞ同じ富を持たないだけである。こゝに現代資本主義の鋭敏な商人の付け目がある。たとへば、大島紬が物持階級の流行となつた場合に、彼等は、直ぐ無限に珍らしく高價な大島紬を大量生產して、その流行をあをることを忘れぬとともに、他方、まがひ大島を附屬生產することによつて、貧乏人の流行的購買心を滿たすことをも忘れない。

どいつて、何もまがい大島を着なければ、彼等の生活が、何等の影響をもまた何等の効用をも加へるものではない。それだのに、たゞそうした摸倣心理や、流行心理がつき物のやうに彼等の購買心を刺激するのである。そして有用な榮養物を買ふ金をけづつても、それを買はねば承知しない。奢侈贅澤とはそれを云ふのである。

しかし人類が流行に魔睡される心理にも、必ずしも、非難すべきもののみがあるのではない。すなはち流行心理に内在する一つの機能は、人類が本能的に持つところの、愛新性と、求新性である。人類が、つねに古いものを否定して、新らしい何ものかを求めるやうとするところに人類の進歩がある。も一つは、その流行を逸早く採り入れることによつて、時代の敏感を示さうする一つの傲りである。「見て呉れ」である。そしてその占有によつて自己の優勝をほこらうとする。それまではよいとしても、たゞ現代の流行心理の害惡は、それがその機能に對して、正しい内容を與へてくれないところにある。

かくして、一方に、自分の生活に何等の内的價値を加へぬものであるにかゝわらず、單に、珍らしく、新らしく、高價なものである故に、これを占有する優勝感から、そうした物を占有しやうとする富豪階級があり、他方に、夢遊的に、その富豪の持つやうな慾望の型を小規模にでも占有しやうとする貧乏階級がある。それがその社會の生活に、害惡をこそ流せ、少しも利益を與へないのを、萬々知りぬきながら、資本の蓄積のみに鋭意する商人が、ひたすらに富を獲やうとする渇望から、それに需要される不生産的な貨物を無制限に制作する。曰く衣服、服裝、寳石其他、無數の大資本の企業がここに據り、生存して行く。かくしていわゆる奢侈贅澤の本質を醗酵することにおいて恐らくこれ等のやうな商業機關こそは、文明世界における唯一のだにである。それは文明を頽廢させることに最も有力な機關であるが、しかも、現代において、かゝる機關が、一層雪達磨のやうに大きくなつて行く。

富有階級の奢侈

「奢侈は誘惑する享樂である。私生兒のやうな快樂である。口に蜜を含み、心に膽汁をかくし、尾に刺を持つ」と言つたのは、ウヰクトル・ユウゴオであるが、實際において、いわゆる奢侈と贅澤の傍若無人な解放が、有閑階級に與へる害毒はきわめて大きい。彼等はまづ、富にあかして精神と肉體の歡樂を求める。一方に、不生的な生産に、不合理な繁榮の途を與へると共に、他方 自身もしくは家族が、少しも生産に關する注意と

興味を持たない。また生活に參加する生活からは、すつかり足を拔いて了ふ。また一切の社會的正義を、たゞ金によつて換算する。かうして有閑階級や貴族もしくは資本階級なるものが、精神的に、肉體的に變型して、異狀な病理の持ち主となり、その變態的な趣味や、娛樂や、生活が、またますます社會の病的な空氣を醗敗する。バアトランド・ラツセルが現代アメリカ資本主義の將來を論じて「かゝる繁榮のあらゆる源泉が、間もなく、衰へて行くべき」ことを斷論したのがそこである。すなわち彼れは、資本國としてのアメリカの强味が、第一はこの國の自然の利源が、無限に廣いのにかゝわらず、まだまだそれが開拓されてないこと、第二が、現代資本家の精力と才能のすばらしい事であるとして擧げ、しかも數年ならずして、その自然の資源が何ほどでも堀りつくされ、また國土の人口が稠密になる。次に今日の資本家がだんだんと死んで行く。そしてその遺產を嗣ぐ人々が、彼等自身の手と力で、この富を獲た人でなくなる。かうなると、彼等はみな、精力においても、才能においても、前代とはとても比較にならぬ。そして他の三つの理由を併せて、「詮ずる所、合衆國の現代に持つ强味は、いくらか一時的なものと見られねばならぬ」といふのである。

わが國においても、舊時代の殘影たる貴族有閑階級に、かうした頽廢の傾向が著るしいのはあまりに明らかな事實であるが、それを繼ぎ承けた新ブルジョア階級たるところの、資本家階級の生活においても、そうした傾向はもうあまりに大つぴらになつた。もし奢侈にして、贅澤にして忌むべき社會毒があるとすれば、それは、かくの如き、不生產的で、無價値で、末梢的で、廢頽的の階級のそれで無ければならない。

わが國の道德觀

けれども、そうした傾向のものを除いては、われ等は今日において、一口に奢侈品、贅澤品と名ざゝれるもの、もしくは奢侈の生活、贅澤な生活と名ざゝれるものの、必らずしも奢侈でなく、贅澤なものでない事を揚言することを禁じ得ないものである。たとへば、今日では、文化生活とわれ等の云ふもの、またその小規模なもの、或は文化生活といふ眞の意味を缺いた貧弱なものさへも、文化生活とさへいへば、すぐ一つの贅澤な生活と壯稚するやうな類である。それは何を意味するか、文化生活は果してぜい澤であるか。何故にぜい澤であるか。

一體わが國の傳統思想には、一切の宇宙を、たゞ一筋の道德觀念のみで眺める癖がある。昔は星の運行や、山川の移動でさへも、すべてが道德的意義を帶びて意味づけられた。さらば人類

の生活が、少しもその本筋たるべきところの、生物的、進化的に考へられずに、窮屈な實際道德の束縛でおしつめられて居たことは少しも不思議がない。そこでは食物が、いかにその個人を榮養するかが考へられずに、いかに榮養價の乏しい安價な食物に堪へ得るかを、生活の法條とした。そしてそうした生活を道德的だとすぐ命名した。如何に慾望を生長させることによつて、その生活價を豐富にするかが尊ばれずに、いかに慾望を抑へ止めて、植物のやうな忍從の生活に生き得たかが、尊とい生活の到着點であつた。趣味、娛樂、衣食住の一切の空氣が、みなそうした法條を沿ふて養はれて行つたのである。人類の生命の價値が、忠實に認められなかつたのは怪しむに足りない。それは日本が今日まで、生命の雄大をもつて世界に誇り得る藝術品を出さない事にもわかる。藝術こそは國民の生命の充實を證據立てる唯一の價値だからである。然るにそうした反生活的な道德觀が、なほ現代のわが國に容捨なく橫行して居るのである。たとへば新代の民衆にとつて、多くの生の擴充に資するところの大半が、それが目新らしいことの故をもつてすぐ奢侈贅澤だといはれる。生活の內容を豐富にし、生活の享樂を持ち來す凡てのものが、いささか高價であることの故をもつて贅澤だと非難される。然るに現代のわが國には、まだまだ人類生活の目的がわからずに、僧院のやうな非人間な生活をもつて、道德の基調に徹したものと思ふ舊頭腦者が中に多いのである。わがいはゆる文化生活は、まつたくそうした舊思想に反逆せんとするものである。

生產機關の集中

わがいはゆる文化生活とは創造の生活である。それは人類の持つ正しい慾望を決して制抑せぬ。むしろあらゆる豐富な資料をもつてそれを生長し、整理させることとである。正しい慾望とは、自由に憧がれ、自由を擴充する慾望である。靈の自由、肉の自由、その二つの價値の完全な生長において、飛躍によつて、創造の生活が始めて持ち來される。然るに日本在來の一切の敎育と倫理と生活法條は、開き展べるものでなくて、內に押込む敎旨であつた。そういふものが決して創造の生活を作らない。

たとへば議會が提出した一澤品關稅案に揭げた品目は二百九十で、昨十二年中の輸入額が約三千五百萬圓と稱せられる。輸入超加が、國家經濟上の大患たることは云ふまでもないが、單にわが國民生活上の儀容からだけ見れば、そこに數へ上げられた奢侈品の大半は、決して一日に奢侈品と斷定されぬもののみで

ある。現代世界の國際間に立つてもしこれぐらゐの日常生活を日本國民が採れぬとなれば、それは國民生活の內容單位の、相かわらず薄弱であることとさへをも示すものでなければならない。もし、これだけのいわゆる奢侈品でもを使はぬことをもつて、日本國民の生活の常態だと考へるならば、恐らくこの立法者は、現代創造生活の何ものたるかを知らない舊道德人でなければならないのだ。

或ひは一切の生產機關を國家の手中に收めて、國民の必需品だけを生產するやうに組織し、奢侈品を防ぐが唯一の政策だといふものがある。が、國家は國民の生活や思想を監理する機關であるかも知れぬが、決して國民の生活や思想を創造する機關ではない。また有り得ない。そういふものが、どうして勝手に、國民の必要品といなとを制定し得る權利があらうか。創造は、統一されずに、自由に解放し、分裂されるところに、始めてその價値が生れる。

社會正義と分配平等

で、創造人の眼には奢侈といふものが無い。創造人は一切を攝取して生命化する。

もし現代の生活から、夢にでも奢侈贅澤といふ言葉が與へられるものがあるならば、それはいわゆる奢侈贅澤そのものに、奢侈贅澤の生命があるのではない。それを享け入れる當事者の識能が、それを或は創造たらしめ、贅澤たらしめるのである。

その第一は、どつちから考へても、生活內容の豐富と擴充を人類に與へるものでありながら、その分配が不平等なために、贅澤品だと考へられるものが多いことである。たとへば蓄音器によつてよい藝術を紹介するやうなことは、貧兒にも、富兒にも同樣に好もしいものである。洋服を着ることは、また富兒にも、貧兒にも同樣に好もしいものである。然るに蓄音器を買ひ、洋服を買ふやうな階級が、一部の富者階級にあるので、贅澤品と見なすが如きがその一例である。そしてそれは一つの錯覺である。けれどもその錯覺を招がしめるものは、何といつても現代社會階級の不平等と、富の偏倚と分配の不平等そのもので無ければならぬ。文化住宅、文化生活は、わが國民の誰にとつても好もしいものである。然るにたゞ少數の富裕階級が、文化住宅に棲むの故をもつて、文化生活を贅澤だと批難せしめる。人類は誰でも歡楽を欲し、苦痛をにくむ。一人にあつて愉快であるものが、他にあつて愉快でない法はない。そうした生活は誰にでも與へられねばならない。然るに、こゝにそれを持ち得る少數があり、持ち得ぬ多數がある。持ち得ぬ多數の苦痛が大きいからと

て、持つことを贅澤だといふ見方はどこまでも當らぬのである。それは持つことが不正なのではない。持たぬことが不正なのである。持たせぬやうな多數を作るところの、社會組織が正しくないのである。持たぬものの力を搾取して、持つものをして持たせるやうにする組織そのものが徹底的に不正なのである。「現代人生を悲慘ならしめる原因は、人間の勞働と大機械の活動との競爭にある。機械の發明に伴なつた產業社會の革命が、人間を壓迫して奴隷たらしめた。」そこで機械文明否定の叫びが起つたのであるけれども、それは決して、世界を、機械そのものの全く無かつた原始の昔に還元することであつてはならない。そこでロバアト・オオエンが言つたやうに、「これを救濟する策は、主客の位置を全く引きくりかへして人力を結合し、機械の作用をして、人間に服從させるにある。他の言葉をもつて言へば、生產組織をして、人間總體の幸福を目的とする、高尚な主義に服從せしめるにある」のである。かくしてものそのものの內容が、大抵何等かの意味で必要品であるにかゝわらず、一方にそれを持ち得ない階級があり、他方にその効用いかんを問わず、金にあかして無意味な消費慾を必要のない程度まで滿たさうとする。そこにいわゆる奢侈贅澤なるものが起る。

能率を標準とせよ

第二に、われ等は、先に、いわゆる奢侈贅澤の限界を、「身分相應」や、消極的生活に依準する限りは、どこまで行つても解決し得ないものであるべきことを說いた。眞の擴充され、內容ある現在將來の生活體樣は、過去の標準に照して見れば、どんな意味でか、贅澤奢侈と誤まり見られる分子をその中に含んで居るからである。そこで、それはたゞ、民衆生活の進出する內容が、そうした舊い定義によつて縛らるべきでは無く、もつと新らしい意義によつて、整理されることを考ふることにおいて、始めて何が贅澤であり奢侈であるかが正しく差別されるであらう。さらばその新らしい意義準條とは何であるべきであるか。他では無い、それが與へる能率いかんをもつて、その唯一定義、唯一信條とすべきことである。さて、それが與へる能率いかんを測定するには、先づその當面する物質の價値、內容、存立、機能の一切を知り悉さねばならぬ。精確な科學的知識の對立がこゝにおいて最も必要になる。わが國で、奢侈贅澤が絕えず問題になるのは、一にこの科學的探究としての、物象潜入が缺け、或はそれが全然教養されて無いことになる。その價値が、內容が何であるかを知らない。從つてそれを自己に適應す

る時にも、それがどんな能率を發揮するかが少しも念頭にないのである。たゞ珍らしい、新らしい、他人が所有する。それだけの意味で購ふものが、その箇人にとつて、身にも、粉にもならぬのは云ふまでもない話であらう。それは人生の能率をあげることが、人生の目標であることを忘れて、何等意義の無い他の目標に誘惑されて居るからである。大阪の或る統計者の統計では、大阪富有階級の婦人は、平均何千圓といふ着物が、箪笥の中に死藏されて居ると發表される。もしこんな風に衣服の自分に作用する能率が何であるかをちつとも念頭に置かず、はかない所有慾の刺激のみを追ふて行く限りは、無意味な侈奢贅澤は、どこまで行つたつて消滅する時がない。何か能率があるかが思議されずに、たゞ購買慾を滿たすだけのことならば、たとへ舶來品が内地品にかわつても、またそれによつて輸入額は減じても、いわゆる侈奢贅澤の風は決して止まぬであらう。日本の役人や大臣は、科學的文明が進歩して、精神的文明の退歩したのが、日本を退化さして居る理由だなどといふ。まことは、そんな間違つた後れた頭腦をもつて居り、科學的生活を、國民生活に採り入れやうとせぬところに、精神文明の退歩があるのである。なぜなら、いわゆる奢侈贅澤が、決して客觀的に統一されるものではなく、全く純主觀に卽するといふ意味はそれがすなはち各商人のちがつた能率觀からが出發して、それを能率的に適應させるか、いなかに在ることを云ふのである。故にもし國民個々が、純眞な能率生活を目標として起つならば、奢侈や贅澤はもう何等の問題ではない

或るものの能率が、いかに自己に作用するかを正しく知るところに、始めて創造の生活がある。その物象の、内容、價値、存在、機能を知りつくし、それを自由に取扱ひ、適應して、もつて自分の生命の一部を創造する。故に創造は一つの生産であり、消費の一方面でなければならぬ。生産の苦しみを知るものにして、始めて生産されたものの價 がわかる。そしてそこに消費の樂しさがわかる。然るに現代産業世界の大きな禍は、生産者と消費者が、全たく無關係で居ることである。十萬人の勞働者が磨く金剛石も、それを所有し、觀賞するものは全く他の富豪である。貴婦人の一枚の毛皮をつくるために、何百人の職工がたゞそのために勞役する。生産したものを樂しむものが、生産した價値を知らぬところに、生産能率の痛ましい浪費が生れる。

勤儉論の無効

こゝに於いて、現代富有者生活、上流者生活の内容が、どう

考へても病的な病とならざるを得ない。第一に彼等はつとめて生産をさける。そしてその生産の價値に對して、何等の重要さをも置くことを知らない。そしてたゞ消費の自由さだけを享樂する。第二に、彼等が物質を所有することは、嚴密に能率を考へての上ではない。たゞ自分が上流であり、富有であることの優勝を示し、またその優勝欲を甘へさす意義からのみ、自分にとつて、何等の能率もない、高價な珍らしい玩弄品のみを購買する。かうして民衆にとつて太だしい精力徒勞たるところの、生産品の產出を異様に多額にする。彼等はまた、人間をも、また一つの黄金價とする。澤山の使用人によつてこの富を誇る心理がまたそこにある。要するに社會正義の分配をそのまゝにして置き、かうした一階級　病的社會的存在を勝手に許して置いて、いわゆる奢侈贅澤をいくら抑制しやうとしたところが、到底大した利き目があり相はない。ことにわが國のやうに能率の定義によらない人間の慾望が、そうした富豪階級の、病的慾望に平準を求めやうとして、滔々としてその病的なものに模倣するやうになるのは少しも不思議のない話だから。從つてかういふ社會情態をぬきにして、勤儉貯蓄をすゝめることの無効であるのも當然な歸結でなければならない。

婦人と奢侈問題

そこで一つ云ひ殘されたことは、婦人の生活における、奢侈贅澤の意義いかんである。誰れも奢侈贅澤といへば、大ていまづ婦人を擧げる。スペインの作家ブラスコ・イバニエスは、現代婦人の虛榮を指彈して止まない作家であるが、彼の長篇「女の敵」では、虛榮である故に女性を敵とするといふのである。アチリオはそこで說く、「自動車と眞珠の頸飾か、ナポレオン戰爭よりも、より以上の多くの犧牲をつくつた。これ等の二つのものは、女性の晴れ着のやうなものである。もしそれ等のものを與へられずに暮さねばならぬ婦人は、自身を不幸だと思ひ、惡い運命の下に生れたものだと考へる。そしてこの雙生の幻想が、現代處女の空想と、妻たるものの忠實さを悉く打ちくだいた。中流階級の母達は、自分達の生活が、馬鹿々々しい失敗であつたと思ふらしく、額の上に、陰鬱な元氣なさを表はして居る。そして娘達にかう敎へるのである。「もしお前達が結婚するならば、どんな事をしても、自動車と眞珠の首飾だけは持つやうにせねばならぬ。」と、娘達は質素な結婚をした後で、いつまでもこの欲望が殘つて居る。而して母の忠告でその慾望がますます强められる。今や奢侈は民衆化された。今や奢侈はどこで

も手の屆くところにある。金さへ出せば直ぐ獲られる。その金が、もとどんなにして拵られたかについては、匂いも、印しも、跡も少しもわからない、その金さへ出せばし

女性は本能的な消費者であると、或る哲人が極印づけた。けれども、女性はその消費によつて何を購なつたか。曰く裝身具、着物といふ類に過ぎない。かう見て來るとき世界の女性を騙つて大消費者たらしめた罪は、發生的に最も多く男性が負はねばならぬやうだ。何故なら、女性は今日まで、たゞ男性の保護の下に、その美と家庭的奉仕をもつて生活をつないで來た。殊に男性の保護を永遠にするためには、何よりも女性の特色であるところの、美をもつてせねばならなかつた。美によつて男性を把握するのでなければ、むら氣で移り氣な男性を所有して行くことがむづかしかつた。此れが彼等があらゆる消費をもつて、保護色たる美を永久に裝はうとする所以である。すでに他人のためである。見て讃賞されるならばそこで目的が足りる。虚榮がこの心理から起る。虚榮は他人の讃拜に滿足する心理である。自分といふものを持ち得なかつた女性にとつては、だから、これも萬止むを得ない生存術であつたのだ。かくして女性の位置はたゞ一つの男性のペツトである。男性をしてその美に戀せしめ、外に出ては、よく高價な裝身具によつて、優勝慾を同性の間にほこるのが唯一のせめての樂しみである。何萬圓の毛皮、何萬弗の眞珠の首飾……、家庭にあつては、たゞ贅澤で愉快な勞働しない、生活をすればそれでよい、曰く自動車に乘ること、多くの使用人に侍かれること、……、かくて頭から自己の生活といふものを持たぬ彼等には、その生活に適應する能率が何であるか、生産の價値が何であるかに始から注意を拂へる筈がない。しかしかうした病的な、長い間の婦人の寄生生活が、男性生活さへをも段々にデケイさして、病的な近代のブルジョア階級を作つたことは、オリイヴ・シュライネル夫人もひどく痛撃して居る。かくして、その生因が、どんな止み得ない社會體制から生れたにしても、婦人のそうした不生産的で、病的な消費慾が、富豪階級の病的な奢侈贅澤の嗜味と相抱合して、近代世界の社會空氣を酸敗させ、汚毒して居ることは爭へない。そうした社會意識が目ざまされずにいつまでも許されて居るかぎりは、奢侈贅澤の空氣はいつまでだつて眞空になり得る筈がない。

贅澤を必要までに

けれども、今や舊時代の社會幕が、黄昏の脚燈の下に段々と下されつゝ行く、長い間、男性の閨房に愛撫されて居た女性が、

生産と獨立に目ざめて街頭に飛び出して行く。またブルジョア階級の厚い障壁の外には、その退位をせまる民衆の鬨の聲がどよもしつゝある。そして、われ等がこゝににくむものは、かうした既成社會の癌を形成した社會思想が、病的につくり上げた奢侈贅澤の風習である。何が奢侈であり、贅澤であるかを意識せずに、すつかり無意識に、そうした生活に耽溺しきつた生活の雰圍氣である。が、もしそれが平等に分配され、榮養される限りでは、今日のいわゆる奢侈贅澤の內容の程度では、それがまたまた民衆慾望の完全した生長であり、その生活を完成し、幸福にするものだは云はれない。故に政治の、經濟の　そして道德の要諦は、國民のそうした自然で創造的な慾望を、節ちがひの制度や、道德で、むやみと抑止することではなくて、どこまでも能率と文化の法條によつて、それを完全に整理し、統一し、生長させて行くところにある。たとへば國富の程度によつて、國民の慾望を一定の程度に限定する事なども、一應は理痛があるやうに見えても、それは消極的に國民の慾望を抑へるに過ぎない。むしろ民衆をして、いわゆる奢侈贅澤と眺められるものをも、自由な自己を完成させる有用品以下のものとして、自由に使用させるやうに生長させてこそ、始めて積極的な國民の成育と、社會能率の完成が無限大に擴充されるわけにもなる。またかくの如き民衆であつてこそ、たとへそれがどんな高價なものであつても、決してそれに奢侈品としての、贅澤品としての價値を與ふることがなく、みな立派な必用品、有用品としのみ、作用させる能率を知り得るに至るのであらう。

なを、また、近代人の生活が、舊時代のそれと違ふところは、その生活を出來るだけコンフオタブルにすることを能率生活の重要な分子とすることである。單に生存線の上に浮び上るだけでは近代文化生活が意義をなさぬ。必要であるものを得る以上に、さらにコンフオタブルな快味を與へるものであつて、始めて滿足な近代生活の享樂がある。そしてそれは、最も高い能率を擧げる生活である。しかし、これまで一般に、生活の要素を、必要、有要、贅澤とわかつ場合には、このコンフオタブルなものの觀念が、果して必要、有要なものの中にどれほど含まれて居たかは疑はしい。そして、民衆生活の要素の上にこのコンフオタブルな分子を、どれほど缺き得ぬものとして重要視するかの程度によつて、その國々の文化と生活意識の高下を批判することが出來るのであるが、少くともわが國に共通する生活概念などでは、今も昔のやうに例外なく、このコンフオタブルな分子を贅澤の範圍に容捨なく追込んで了つて居る、そしてそうした一切を異端視して居る。わが生活觀念の薄明と、生活

意欲の微弱が、みんなこんな觀念から派生されるのだ。ましてや、能率あるコンフオタブルな生活と贅澤との區別が出來さうもないのは當然な理路である。

江戸の奢侈法度

笹川臨風

近來の日本人は文化病に取憑かれてゐる。獨り赤瓦の流行のみならず、ダンスの盛りのみならず、外國擬ひを無上に有難がつて、文化生活の眞意義を履き違へてゐるもの滔々皆然りで、此風潮は都鄙到る處に横溢してゐる。外國の贅澤品が百貨店頭に顧客の好奇心を煽り、高價ならば何でも善いと云ふ惡傾向が流行してゐるのは國家經濟の上から云つても、國民道徳の上から云つても、洵に寒心すべきことである。昨秋の關東震火災は一時天譴觀を唱へるものさへもあつて、國民に手痛き反省と悔悟とを與へたが、それも一時の現象で、咽喉元過ぐれば熱を忘るゝ習ひ、日本は依然として文化病の流行地である。

如何にして此驕奢な風俗を一掃し、質實なる國民性に復歸せしむべきやは、苟しく識者の思ひ惱む所であるが、誰しも之に對して名案を案出すべきものもなく、まして鐵槌を下すべきものは無論ない。是時に當りて藏相濱口君が奢侈品關稅の引上げを斷行せんとするのは、蓋し大旱時に於ける驟雨沛然たるものがある。

奢侈品關稅引上げの報が傳はると、多くの新聞紙は一樣に痛快を叫んだ。然るに久しからずして本議案が衆議院に上提される前後になると、是非の論が囂しくなつて、先の痛快觀もどこへやら消え失せてしまつた。品目の撰定に杜撰なところがあつたにも因らうが、又相當に反對運動もあつたであらう。然しとにかく國民の弊を矯めようとする經綸に至りては大に買はねばなるまい。歴代の大臣宰相が嘘を吐くのと、胡魔化しおほせるのを以て政治家の能事と心得てゐる間に、濱口君が敢然として

國民の心髓に食ひ入る害毒に向つて、メスを揮はんとする其氣魄と抱負とは洵に壯なりとせねばならぬ。群小黨の紛起は固より蝸牛角上の蚊虻に過ぎぬ。

三十餘年前の昔から濱口君は質朴剛健であつた。今は議政壇上の雄辯家を以て聞えてゐるが、元來無口な沈默家であつた。土佐の郷關を出て、大阪（後に京都に移る）の第三高等中學で僕等と同じ五年間を修めてゐた當時も、大學へ來て、本郷菊坂の同じ下宿に籠城してゐた時代も、いつも濱口君は昔から變らない濱口君であつた。謹嚴な無口な質朴な、誠實の人で誰からも敬意を拂はれる人であつた。時々同窓會で逢つても、又舊友の小集で逢つても、最近江戸川畔で、車を駐めながら話をした時でも、昔の濱口君と少しも變らないと思つた。尤も僕と同じ年齡であるが、鬢髮も髭も大概白くなつてゐる。但し之を苦節十年のお蔭と解するのは間違である。下岡君も同じ三十餘年來の舊友で、同じ年齡であるが、一向白くない。濱口君の白いのは、ありやたちである。

ともかくも濱口君は眞面目である。眞面目であつて、然も其器は大きい。間に合せの特權内閣とやらの大臣連とは段が違つてゐる。濱口君が始めて大臣となつて、先づ國民の根本的改造に向つて一斧鉞を下さんとするのは、世人としては當然の抱負であり、又此人ならでは出來ぬ藝當と思はれる。恐らくは何等場當りを狙らうとする野心もなく、良政治家として當然の職責を盡さうとしての發意であらう。全く憂國の至誠から出てゐる彼の關稅引上げには才もなければ、けれんもない。若し夫れ政友本黨の雜兵に倣つて、とやかくけちをつけようとするが如きは、他人の美をなすに吝なるものである。

然し事の成否になると、實は遺憾ながら疑問と云はねばならぬ。濱口君が當初懷抱してゐるやうな善い結果を齎らし得べきや否やは容易に斷定することが出來ぬ。史家の見地からして江戸時代の奢侈禁止の跡を一瞥し、疑問解決の參考に資さうと思ふ。

天和三年二月五日、五代將軍綱吉治世の初に當りて、衣服の奢侈禁令が發布せられた。時代は石川六兵衞の妻と難波屋十右衞門の内室とが京都東山にて衣裳競べをしたほどに奢侈となつてゐた。六兵衞の妻は平常さや縮緬綸子の類を着し、晴がましい所へは緞子、綸子、金入等を着用してゐた。延寶年間、將軍の代替にて始めて上野へ御成の時、之を拜觀せんとて、黒門前に棧敷をかけさせ、御簾打ちかけ、幕を打たせ、名香を焚き、左右に女の切禿兩人、緋縮緬の大振袖を着せ、六兵衞の妻は今日を晴れと盛裝を凝らし簾を卷いて鹵簿の通行を拜した。將軍

之を顰みて、大名の奥方なるべしとて、尋ねられたので、匆々之を糺すと、之は意外　町人の妻であつた。「畢竟萬事につけ身の分限を忘れ、放埒千萬、愚かなる町人の心なり」とて、町奉行吟味の上、夫婦遠島に處せられた。天和の禁は其結果として發布を見たのである

天和三年二月五日には江戸市中へ衣服の法度が沙汰せられてゐるが、其二月前、即ち同月三日長崎奉行へは「羅紗、猩々緋、其外毛織の類并に金絲并外衣服に用ふべからさる織物、珍禽、奇獸及藥品にあらさる植物、木材、はた器財翫具の類來舶すとも買ふべからす、此よし唐蘭の商人にも曉諭すべしとなり」とありて、關税の引上げどころではなく、非買の厳達が下つた。二月五日、市中への禁令は「金紗、縫物、總鹿子、今より後婦女の衣服に用ゐる事を許さす、すべて新奇の染織を停止すべし、小袖の表一端價二百目限りたるべし」との法度であつた。同月十九日、又進獻の時服に伊達染・紋縮緞子・縮緬を禁じ、同年閏五月四日、婦女の衣裳、繡、金紗放織すといふとも着すべからす、縫紋も用ふべからす」と令し、同年六月十四日、「明日山王の祭祀、ねりものゝ品々並に人形の衣裳あるは其事にあづかりしもの迄も、制限の外華飾すべからす、見にまかる者も是に同じたるべし」と沙汰せられた

さて此禁令は如何ばかり効力があつたであらうか。井原西鶴の本朝二十不孝には、「衣裳の御法度は表向き守り、内證は鹿子類さまざま調へ」と見え、同じ人の男色大鑑には、「思ひ思ひの袖を連ねし、折ふしは衣裳の御法度かたく守り、隨分目立たぬ仕用しなれど」と云へるが如く、陽に質素と見せかけて、内實に相當の贅澤を盡くす不埒者も少からずあつたのである。鹿子は禁ぜられたが、染鹿子は流行した。固より染鹿子は結鹿子のやうな贅澤なものではなかつた。近代世事談に、「貞享の頃、京西洞院四條藤屋善右衛門といふもの染める、結鹿子の如くに、紺屋形を以て染るものなり、今以て帷子など鹿相なるは此鹿子なり」とあるが如く、結鹿子を嫌ふ人心にせめてもの慰めのためと、染鹿子が流行したのである。天和禁令後は縞物流行の世となり、染物全盛の時代となつた。舶來の棧留縞を初め、リキン縞、カピタン縞などの當代文化縞及郡内・八丈・丹後の諸縞物は新奇を好む人心に投じた。御所染、御江戸染、正平染、友禪染、肯厭染、千種染、伊達染、吉長染、沙室染、唐人染、更紗染、吉岡染、遠山染、梅がから染、檳榔子染、加賀染、細染、茶屋染、葛茶染、一陣染、焼叉染、鬱金染、ふすべ染、ゆかた染、玉子色染、太夫染、茜染、百鳥染、百品染、山の端染、小島染、今様染、虹染、段染、染分、梅返し、千種がへし、紺

染、露草分、ぎんすゝだけ、柳すゝだけ、樺染、きはだ染、紅梅、藤色、卯の花、物傳茶、水色、檜皮色、空色、玉蟲色、玉子色、瑠璃紺、菖蒲、櫻色、萌黄色、花色、菊田摺、桑染、紅鹿のふたへ染等の諸染は、此前役に頻出したのであつた。西鶴の胸算用に「一羽二重半疋四十五匁の地絹よりは千種の細染百色がはりの染賃は高く、金子一兩づゝ出して、是れさへのみ人の目に立たぬことに、あつたら金銀を捨てける」と云ひ、榮花咄に「衣裳は目にたゝずして、古代よりも格別にむつかし、惣吉が仕出しの吉なか染さへ世に珍らしく、奢りたるやうに思はれしに、此ほど京にふみ出して、しのぶの細染といふは、片面を六十五匁に出來す、油屋絹の本もち半疋六十匁の地を六十五匁にて染ると、中々身體うすき人のなるまじき小袖なり、せめて其模様が人もそれ程に見て晴着にしたればなり、只紺屋が氣を盡してむづかしきものと粹仲間に知る許ぞかし」とあるが如く、此等の染物の中には、中々容易ならぬものもあつて、素朴と見せかけ、其實贅澤を盡くしてゐたのは、天和法度の反動である。又金紗、縫が禁ぜられたので、切付が流行した。好色五人女の姿の關守中に、「上は玉蟲の色の繻子に孔雀の切付見えすくやうに、其上に唐糸の網を掛け、さても巧し小袖に十二色のたゝみ帶」又は「下に黄無垢、中に紫の地なし鹿の子、上は鼠繻子に百羽雀の切付、段染の幅帶」とあるは、即ち當時切付の流行を物語るものである。

折角の天和儉約令も其當座こそ時代の潮を堰切つたやうであつたが、久しからぬうちに其效力を失ひ、滔々たる世風は驕奢を競ひ、元祿二年には「女の衣類御禁制被仰出候得共、元來の儀に候間、向後縫結構に無之やうに、代銀二百五十限り、縫の衣類賣買可仕候、尤もすぬひの類の美麗なる儀仕るまじく候」と、お上から天和禁令の綱を弛めるやうな仕儀となり、元祿末期の豪華を馴致するに至つたのは、蓋し時勢の力の前には法の權威なきを保證したものであつた。

五代將軍は治世の初に前代の弊を矯め、鋭意治を圖つたのである。天和法度は氣鋭精勵の反映であつた。さればよし其效力は長からぬにもせよ、人心を一新させ、世潮に對して反抗の波を揚げた其努力に至りては讃美の聲を放つて差支ないと思ふ。狂瀾を既倒に囘らすと云ふのは昔から絶大の事業とされてゐる。人力と人智とは時代の力に推流されるを普通とする。天和法度の力薄きを見て、綱吉の無謀を笑ふのは、爲政者の苦心に尊敬を捧ぐることを忘れてゐるものである。

八代將軍吉宗の勤儉政治は終始一貫して、徳川氏中興の實效を擧げた。制禁よりは寧ろ獎勵を先とし、綱紀を振肅し、浮華

を明けて、享保の治は、永ク後代の鑑となつた。然し一張一弛は世運の免れ難いところで、享保の治もやがて明和安永の淫樂時代となつたので、松平定信の寛政改革が現はれた。然し將軍と輔佐役とではそこに權力のけぢめがなくてはならぬ。五代將軍の如き中途で政治に退屈するやうでは、勤儉政治も挫折するが、八代將軍の如く躬踐の徹底的實行は有終の美を濟すことが出來る。白河の樂翁も身將軍であつて、一生勤儉の爲に、力めたなら、寛政の治も一時の現象ではなかつたであらう。然し輔佐役の悲しさは、退職とともに張りつめた紀綱は弛まねばならなかつた。喜三二の文武二道萬石通にて、樂翁を頼朝に擬し、「自今以後夫々に文武の道を學ぶべし、必ずしもぬらくらの心を持つべからず、今にも軍があるならば、ところで軍がなるものか、文とも武ともいつて見ろ」と云へるは、時代の諷刺であるが、文武の奬勵も久しく其力を維持することが出來ず、やがて世は文化文政の江戸全盛の華奢時代となつたのである。

天保度に於ける水越（水野越前守忠邦）の改革は最も徹底的であつた。秋霜烈日の概はあつたが、苛細に失したのと、公平を欠いてゐたのと、人材の登庸が宜しきを得なかつたのと、他の掣肘を受けたのと、經濟界の動搖を來したのと其他諸種の原因が錯綜して、折角の改革も、唯一時の人騒がせのやうな觀があつたのは、如何にも遺憾と云はねばならぬ。

時勢は、革の斷行を要するほどに弛緩し切つてゐたのである。天保十二年十二月、江戸町奉行遠山左衛門尉が商人を召出しての訓示に、「夫故商人はわけて泰平の御恩を難レ有相心得、追々觸出候趣相守り、正路質素儉約を可レ仕の處、段段御國恩を忘却し、奢侈に移り、衣食の分限を辨へず、三百目、五百目の品を用ひ、或は結構の新織物新形杯不絶に手間掛り候物を拵へ、無幅紋、八ッ藤其外高家裝束の紋柄を手拭迄に染出し、湯に入り尻前を拭ひ、七八十文の事足る物迄心を込め、又小道具杯を色々の細工物に金銀へ費し、高價の品を作り、皮杯には武具の威にも可レ致物を應み、鼻緒に致し、以下の外の事、脊は新らしく共冠にもならず、紙入、烟草入杯に細工を込め、其外の品にも右に准じ、金襴、毛類に至る迄異風を好み、其分限を辨へず、贅澤屋杯と家號を唱ふる者有之様相聞え、次に食物賣買の者に申聞け置いたが、四文、八文の鮨も何時頃か二十、三十に相成り、中には殊の外の高價の食物、身の分限を辨へず、高家の食物を食ひ、鮨一枚金一歩のを食ひても飽かずして、又は二歩のを喰ふ。物事段々増長し、誰も蛸か鰯の樣に澤山にあらば賞美はせまい、其樣なる事致し居りながら、段々時節が惡い杯と申し、暖掛けへ多分參り、上へ御苦勞を相掛ける者あり、只

れ時節の悪いにではない、分限を忘るゝ様に相成るは不埒故、諸色高直に相成る」と云へるは、時勢の鳥瞰圖であらう。寛大見聞記に、「予幼少の頃は町家の女子供の前垂と云ふものは、紺紺の木綿へ白絲にて山道にはし縫したるが流行せり、享和の頃より、棧留となり、三布にして、うしろに合せること流行し、價の高きを厭はず、太織紬縮緬の袷など用るもありし、下駄草履の鼻緒も塗革を最上とし、竹の皮にてよりし緒を黑と赤とに塗しなどもありしが、これも享和の頃よりやはた黑と云ふ革鼻緒を用ひ、夫より緒の眞田又は天鵞絨、紋革、唐革などを用る様になりし、享和の頃、女の髷結ひ切れとて、板じめ縮緬を價十六文より百銅ぐらゐにて切て賣りしが、御法度になる、其頃縮緬紙とて、ちゞまりたる紙に、彩色の模様したる美しき紙を驕ひにす、田舎にては雛の幕に用ひける、今は縮緬の鬼絞りなどとて、價百疋の餘もすべし」と時勢の變遷を述べ、伊勢町河岸の米會所、谷中感應寺、目黒不動、湯島天神等を初めとして、江戸市中諸所に興行したる富鬮、八百善の贅澤料理に及び猶「予幼少の頃は、酒の器は鐵銚子塗盃に限りたる様なりしを、いつの頃よりか、銚子は染付の陶器となり、盃は猪口と變じ、酒は土器でなければ呑めぬなどと云ひ、盃洗ひとて丼に水を入れ、猪口數多浮めて詠め樂しみ、蕎麥屋の皿盛りも丼となり、箸の太きは蕎麥屋の様なりと賤しも、いつしか細き杉箸を用ひ、天麩羅蕎麥に霰蕎麥、皆近來の仕出しにて、高物者より工夫して、品の強弱にかゝはらず、只目を喜ばす事ばかりで贅のみ出來るなり」と說き、寄席、芝居、惡所にまで敍述してゐる。

此際に當りて水野越前守は大鐵槌を下したのであるが、殆んど微に入り細に入り、苛察を極むるまでに根本的改革を勵行したのであつた。「萬一觸達の趣相背き候者有之ば、即刻召捕り吟味に及び、所役人迄も咎申付」けると云ふほどに徹底したものであつた。寄場は江戸中に十五軒と其數を定め、娘淨瑠璃、女髮結、地獄の類を禁じ、博奕を嚴禁し、役者絵女絵等の一枚摺、絵本、好色本を禁じ、小兒の手遊は銀一匁錢百文以上の品を賣るを禁じ、庭石、石燈籠、鉢植の草木等は十兩以上の品を造るを禁じ、深川六ケ所、本所三ケ所、其他惡場所ども三十ケ所の取拂を命じ、「儉約質素、正直に家業出精し、賣物の價は正札を附置、諸色の價又地代店賃も値下げをなし、家越しに店振舞といふ事すべからず、家守の者樽代を取べからず、念佛講・題目講、若い者仲間梵天杯、すべて仲間といふ名、株式と云ふ名目立可からず、昔より御制禁ありし金銀細工鼈甲の類、隱し置たるを御取り上げになり、野菜物の類、時節より早く初物と云

ひて賣出すべからず」と令した。京都市民が此改革に對する請書は、改革の要旨を見るべきものである。

一、御公儀樣より先々仰出され候御制禁、御觸書の個條、幷に去る丑六月に仰出され候、享保、寛政度の御觸書の趣、尙又追々御觸達しの御趣意、一々奉ニ承伏ニ候、

一、忠孝第一に相勵むべき事、

一、家業出精、商賣正直に仕るべき事、

一、身分を遜り相辨へ、諸事質素、儉約を相守るべき事、

一、子弟召遣の者へ善行申諭し、憐愍を加へ、和尙をなすべき事、

一、佛事年回の儀は供用の儀に候間、可ニ相勤ニ事に候得共、分限内端に可ニ取縮ニ事、

一、吉凶臨事の事共は、成丈け質素節儉相守るべき事、

一、華美の衣類用ひまじく、官服に相用ひ候地物、綾錦織物、縮緬、羽二重或は唐物類は勿論、總て町家不相應の品柄、幷に髮飾金銀の類鼈甲等、娘、子供に至るまで、縮緬抔の色切を用ふまじき事、

一、娘子供に至るまで、往來に裾をからげ、橫行いたすべからず、既に縮緬其外華美好みの裾除け相用ふまじき事、

一、女髮結を出入致させまじく、娘子供には髮結を習はせ、女の所作を相稽へさせ、幷にあさましき姿態を致さゞる樣、風儀を相稽へさせ申すべき事、

右個條の趣、一々堅く相守り申すべき事、

近來世上の奢りの超過致し分限を辨へず、假初にも華美の衣類を著飾り、高金の道具類を取扱ひ、自然と自業の難儀に及び候族も有之、不便の事に思召され、此度結構有難き御趣意を以て、享保、寛政度の御觸書を以て、古來へ復し、質素儉約を相守り、安らかに渡世相成るべき旨相願ひ候樣、追々仰出され候處、今以て風儀相改めざるは如何の事に候、此度の御下知に依て、御役方樣態々町向へ御出張を以て、町役の者を御呼出なされ、向後心得違ひ致さず、質素儉約の御觸面の御趣意相背かざる樣、一町限りに申諭すべき旨仰渡され候。若し此の上相背く者有レ之に於ては、本人は勿論町役の者迄、用捨なく嚴重に御咎に及ぶべき御沙汰の旨、其の時後悔致さざる樣の厚き御利害に御座候趣、一統承知し奉り候、全く御慈悲有難き此度の御趣意、一々急度相守り、但質素儉約諸事相愼み申べく候。依て承知御受印形の如し。

此改革の鋒先に當りて處罰されたものは少からずあつた。根堀り葉堀り、洗ひざらひに積弊を一掃せんとする、其斷と勇とは眞に敬服すべきものがあつた。少くとも慄然として、改革の

前に不伏させる威力はあつた。尤も洒落な江戸市民のことであるから、地口やちよぼくれ等にて之を諷刺し、八斗の溜飲を下げるもの丶ないではなかつた。然し急激な改革は經濟界に少からぬ動搖を來し、怨嫉、攻撃の矢も夥しく放たれるに至つた。菊池出羽守が、「此度御政事御改革仰出され、有難く承知仕候、追々諸國も質素相守り、風俗も改り有難き事に候へども、此頃諸政事細察に相成り、厳しき御觸等出候に付、下々の者些の小事にて、重き御成敗に成行き候、實に政事を預り候役人の事に候へども、細々成り候へば宜しからずと存じ奉り候」と云へるは、確に此改革の病所を道破した他山の石である。斯くして驚天動地の一場とも見えた天保の改革も龍頭蛇尾に終つて、世は又しても混々たる太平中毒となつた。

事の成敗はとにかく、爲政者が時弊に對して之が改革を試みんとする、識見と勇氣とは尊敬すべきものである。濱口君が奢侈品關税引上は天保の改革のやうな、乃至寛政の改革ほどな大規模のものではないが、文化病の日本に對して一の適切なる對症藥たるに異論はない。之に就いて紛々たる群議を試みんとするは抑も末である。濱口君の大抱負を諒として、表より裏より時弊を匡正するやうにあつて欲しい。奢侈品品目の杜撰を責め、内地奢侈品の保護を疑ふよりか、之を補訂するのが國家を憂ふるもの丶任務であらう。どれほどの功果があらうか、又其成否如何は姑く問はずとして、濱口君の關税引上げの動機に對して敬意を拂ひ、其成功を希望するのは、必ずしも三十餘年來の舊友としての私情のみではない。日本國民として之を期待して已まないのである。

生活美化の立場から所謂奢侈税案を難ず

本間久雄

此度政府が、衆議院に提出して、而も近頃になく物議を醸した贅澤品關税案も、十二日の新聞で見ると、とう／＼原案のまゝで可決され、そして近いうちに實施されるといふことである。

すでにさうなつた以上、今更この問題について、どうのかうのと云つたところで仕方のない話しだが、この案が實施された曉には、一般國民殊に中産階級以下の吾々一般民衆が生活上可なりの打撃を蒙るといふことは、恐らく疑ふ餘地のないところであらう。

このことについては、政府反對の立場にある、議員たちがさま／゛＼の方面から反對したらしい。曰く、奢侈品關税引上案は、内地産の同様奢侈品の粗製濫造の傾向を助長する。曰く物價の騰貴を來す。曰く、諸外國に復報手段を取られる恐れがある。曰く何曰く何と、さま／゛＼の方面から反對したらしい。これらは一國の經濟策の上から、恐らくそれ／゛＼の理由のあるものであらう。經濟問題について門外漢である私は、今これらの問題について別に言を爲さうとするのではない。たゞ年來、提唱してゐる生活美化といふ立場から觀て、この案の實施が、中産階級及びそれ以下の階級を、いかに今日以上に苦しめるかを考へて見ようと思ふ。

私は、本誌の去る四月號の拙文『生活美化論』で、人間は單に生きてゐるといふことだけでは足りない、生きてゐるといふその意義を自覺し、生きてゐるといふことの悦びを享受するのでなければ、本當の生活ではない、といふことから出發して、本當の生活をするためには生活が美化されなければならないといふこと、そして生活美化といふこととの究竟境は、ウイリアム・モリスの所謂新しい「富」の創造であるといふことを論じた。今、この奢侈税案の問題を考へる便宜のため、モリスの所謂「富」を再び左に抜き書きする。

「富」とは「自然」が吾々に與へるものだ。道理のわかつた人が道理の通つた用途にするために、自然の賜物の中から造り出すことの出來るものだ。太陽の光、新鮮なる空氣、汚れざる大地の表面　無くてかなはぬだけの品格ある衣食住、あらゆる種類の知識を蓄ふること、そしてそれをまた捌くだけの力、人間相互のこだはりのない融和を得るの途、藝術品、つまり人間が、最も人間らしくあり、最も精進的で、最も思想に富んでゐるときに造り出す美――すべて、これらは本然の男らしい健全な人々の喜びのよすがとなる。これが富である」

と、

蓋しかういふ「富」を創造するのが生活美化運動の眞諦であるとすれば、この立場から見た今度の奢侈稅案がどういふ意味でまづ批難に値するか。

二

政府の當局が、この奢侈稅案を提出した動機の一つは、これによつて「國民奢侈の弊風を抑制する」にあるといふことであるが、これに對して、吾々の第一に抱く疑問は、今日、國民が、全體的に見て、政府當局が心配するほど、それほど奢侈に流れてゐるかどうかといふことである。第二の疑問は、政府當局の指定した所謂奢侈品目は果して奢侈品だか、それとも日常生活に必要な必要品だかどうかといふことである。もし、當局が考へるほど國民が奢侈に流れてゐなかつたり、當局指定の奢侈品目が實は生活上缺くべからざる必要品であつたりすれば、この奢侈稅案は、全く無意義なものとなることは、云ふまでもない。そして、この二つの疑問を決定するために吾々は、先づ第一に奢侈の意義を明かにして置かなければならない。

奢侈はいふまでもなく、必要以上の浪費である。奢侈品とは、この浪費の對象たる物品の名稱である。しかし、一歩進んで、必要と必要以上とをどうして區別するか、必要と必要以上とを何を標準として區別するかといふ問題となると、人により、時により、所によつて異つて來る。

例へば音樂の研究家や音樂愛好家に取つては、たとひ、どんなに高價なものだらうともピアノは一種の缺くべからざる必要品だが、自分自ら彈けもせず、又彈く興味も持たない連中が、單に自己虛榮心を滿足させるために客間に飾つて置くためのピアノは、云ふまでもなく、贅澤品である。これは主として人の場合について云つたことだが、時と所とによつて、同じ物品が必要品となり贅澤品となることは容易に推察される。だからその物品が贅澤品であるか否かといふことは全く相對的の關係である。

奢侈又は奢侈品といふことを、上のやうに相對的に解釋して、さて今日のわが國民が、當局者の心配するやうに、果してさう贅澤奢侈に流れてゐるかどうかと考へて見ると、事實において彼らは決して贅澤ではない。贅澤なのは特權階級であり、ブルジョア階級であつて、少くも中流階級以下下層階級は贅澤ではない。否、贅澤どころか、必要そのものさへ、充たし得ない狀態にあると云つた方がよい位だ。上のピアノの例で云ふと、ブルジョア階級は、ピアノを彈けても彈けなくても、ピア

ノに對する趣味があらうが なからうが、ピアノを客間に置くことによつて、自己の虚榮心を滿足させてゐる。しかるに、實際ピアノを彈かうとしたり、又彈くことに興味を感じてゐる中流階級――生活を美化し、趣味を向上させる上にピアノを實際必要とするその中流階級又はその以下の階級に取つては、ピアノを求めるといふことは、彼等の經濟狀態から見て、必ずしも容易なことではない。ピアノのやうな高價なものでなくとも、日常の行住坐臥に使用する工藝品でも、その質の優れたものを吟味して使用するいふことは可なりに骨の折れることである。つまりモリスの所謂「なくてかなはぬだけの品格のある衣食住」といふことは今日の中流階級及びその以下の階級に取つては實際得易いことではない。だからこそモリス、カアペンタアその他の生活美化運動が近代において提唱されてゐるわけである。

實際、國民は、全體として云ふと、前に云つたやうに奢侈にも贅澤にもなつてゐない。さうなつてゐるのは、僅かにブルジヨアと呼ばれる一部分の階級に過ぎない。そして、皮肉なことには、さういふブルジヨア階級に取つては、輸入品の關稅が引上げられて、その輸入品の價格が倍加されても、恐らく何等の苦痛をも感じないであらう。しかるに、奢侈どころか、日常の必要をさへ充たし得ない今日の一般民衆に取つて、輸入品の價格の倍加されることは、生活上の恐ろしい脅威である。

とにかく、今日の一般民衆の生活が奢侈に流れてゐると考へるのは、全く事情を知らない迂濶な觀察である。そればかりでなく、この奢侈案の立案者やその贊成者が、この案を、恐らく自分たちの實際生活と、沒交渉なものとして考へてゐるであらうといふことを想像するとき、單に迂濶として彼等を笑つてだけではゐられない。腹立たしさをさへ感じさせられる。

ジヨン・ラスキンは、「贅澤は、國家の場合でも、個人の場合でも、有用なる物と無關係係な勞働によつて支拂はれなければならない。だから、その貧民階級が十分に衣食の道の足るまでは、國民の誰もが贅澤に耽る權利を持たない」と云つたが、さういふヒューマニステックな心持ちを、少しでも今の當局の諸氏が、持つてゐるだらうか。

少し餘談に亙るが、嘗つて德川政府は、始んど歷代、勤儉の勵行を國民に强ひて屢々奢侈禁止令を實施した。その禁止令は、士農工商の一般を對象としたこともあり、又その中のある階級だけを對象としたこともあつたが、要するに國民の奢侈に流れるのを防がうとした動機から起つたものであつた。今、町人階級を對象とした奢侈禁止令の一例を擧げると、これは承應元年の禁止令だといふことだが、次のやうなものがある。

「一、町人召仕絹布着し申間敷事、一、町人羅紗の合羽着し申間敷事、一、町人振舞結構に仕間敷事、一、町人蒔繪の家具拵へ申間敷事、一、町人作事に金銀の箔付間敷事、一、三階仕間敷事、一、町人蒔繪之乘鞍糸鞦仕間敷事、一、乘掛蒲團紬木綿毛氈之外無用之事、一、町人祝言結構に仕間敷事、一、町人かぶきたる體仕間敷事」（瀧本博士「日本經濟史」）

いかにその滑稽なものであるかは改めて贅するまでもない。しかし私は今、こゝでその滑稽さを問題にしようとするのではない。かういう沒常識極まる禁令を下しながら、その禁令の立案者並びに當路の爲政家たちは果して、どんな生活をしてゐたかといふことである。彼等にして、果して、町人に禁じたその絹布を着なかつたり、その羅紗の合羽を着なかつたり、その蒔繪の家具を使はなかつたり、又さうするだけの覺悟があつたであらうか。否そんなことは、問ふだけが愚かである。自分だけは、奢侈禁止令と沒交渉な生活をしてゐるのが實に彼等であつた。

徳川時代の奢侈禁止令と此度の奢侈税案とは無論その性質が違つてゐるから、私はこれを一しように考へようとしてはゐない。私は又、今日の政府當局の諸家が、徳川の封建時代の爲政家と同じ心持ちで奢侈税案を提出したとは考へたくない。又、考へやうとしない。しかし、上司小劍氏が十一日の時事紙上で『笑劇の材料』と題して、この問題を嘲罵した中で、

「今度、リコウものゝ官吏だちが、國民の奢侈贅澤を戒めるとか禁ずるとか、大それた目ろみで、輸入品の關税を滅法高くするさうな。……實際のところ、國民の大多數は贅澤どころか、其日の食糧にも差し支へてゐるのだ。ダイヤモンドの襟飾ピンを挿して、黄金や白金の鎖を胸にかゞやかせた人々の立てた案をば、數萬圓、數十萬圓の金を費して議員になつた人々が、大きな花氷の蔭で評議しやうとするのだから面白い。」

と云つてゐるのは、いかにもこの案の提出者贊成者などの心持ちの上の急所を突いた感があるではないか。奢侈問題の如きは前に擧げるラスキンの所謂、その國の貧民階級が十分に衣食の道の足るまでは、國民の誰れもが贅澤に耽る權利を持つてゐないといふ言葉の意味を、身自ら體得してゐる人にして、始めてその提出する資格もあり、それを主張する權利もある。その他の人には、全然その資格もなく、又その權利もない。

三

さて問題は前にかへつて、政府當局の指定した所謂奢侈品は、果して奢侈品であるか、それとも、日常生活に必要な必要品であるか、といふことを考へて見る。

無論、そこには、どういふ立場から見ても贅澤品がある。眞珠とか珊瑚とかいふものは中流及び中流以下の階級に取つて奢侈品であるばかりでなく、上流の贅澤階級に取つても贅澤品であることは爭はれない。しかしそこには中流階級及びその以下の階級に取つての必要品が可なりに多く含まれてゐる。吾々人間が食ふにも着るにも、住むにも、すべて最少限度の生活に甘んずべきものであるならば問題は自ら別であるが、少くも、モリスの所謂「なくてかなはぬだけの品格のある衣食住」といふ美的生活の立場から云ふならば、現在の吾々一般民衆の衣食住は餘りに貧弱であり低調である。吾々はこの衣食住を出來るだけ品格あるものにするために、努力すべきである。そのためには必ずしも外國品であると內國品であるとの區別は、これを問ふ必要がないのである。この場合、吾々の問ふ必要のあるのは、たゞその品物の質の問題である。質さへよければ それが外國品であらうが內國品であらうが、問題ではない。しかし、大抵の日常品、工藝品は、外國產のものが品質がよく、內國產のものが品質がわるいといふのが定評になつてゐる。だから、價格が多少高くとも質を愛する文化人は、內國品よりも外國品に赴くのである。この質の問題を等閑視して工藝品を考へることは徒らに內製品の産出を助長することであつて、さらでだに、外國品に比べて質的に劣つてゐる內國品が、將來益々その質を低下するのは、容易に想像し得べきことである。猶且藏相は政府の所謂奢侈品は(一)嗜好品、(二)娛樂品、(三)內地品にて間に合ふべき品に限られてゐる、と云つてゐるが、無論見樣によつては、いかなる工藝品も內地品で間に合ふであらう。しかし、政府當局が奢侈品として指定した毛織物やさま〴〵の革類や、テーブルクロースや、窓掛や、紫檀黑檀その他の木材や、さまざまの化粧品や、さま〴〵の運動具や更に寫眞器や蓄音器や、これらのものが藏相の所謂嗜好品であらうが、娛樂品であらうが、將た又、生活必須の必要品であらうが、內國品と比較して質的にはとにかく優れるものの多いことは藏相と雖も認めることに、恐らく吝かではないであらう。

問題は、決して間に合ふか、間に合はないかといふことにあるのではなくて、いかに生活に有效に役立つかどうか、生きてゐるといふ悅びを感じさせることに、いかに力強い動力であるかどうか、その人の衣食住にいかに品格を與へるかどうかといふことにあるのである。間に合ふか否かといふことに力點を置くことは、押しつゞめると、餓ゑ死するかしないかといふ境まで人間の生活を低下させることであつて、さういふ生活を推賞することは、又一種の溫情主義的奴隸道德の讚美と毫も異ると

ころがないのである。

政府の當局は亦、嗜好品、娯樂品であるから、奢侈品として取扱つてもよいといふように考へてゐるらしいが、これも大きな誤りである。殊に娯樂又は遊戯は、それによつて、吾々が勞働のために更に新たな精力を養成する上の更新的數益（リクリエーチブ・ラヒチユア）として、是非なければならないものである。だから新時代の社會改造家は何れも、この點に新たな觀察を向けて、遊戯又は娯樂を善導することによつて、一般民衆の教化を贏ち得ようとするさまぐの所謂遊戯善導（プレーグラウンド）運動をおこしてゐるのである。言葉を換へて云ふと、遊戯とか娯樂とかいふことは、單に在來の「遊び」と異つたものと今日では考へられてゐるのである。

我國の爲政家も、社會經綸といふことを考へる以上、今少し、この點に注意を拂ふべきである。そして些かでもこの點に注意を拂ふ以上、遊戯又は娯樂において、それが又はその材料が、外國的のものであらうと内國的のものであらうと必ずしも問ふことを敢てしないであらう。しかるに不幸にして、此度の奢侈税案は、このことを全く勘定に入れてゐない。その結果は蓄音器やテニス具、野球具、フットボール具等の運動用具にまで重税を課することゝなつたのである。

就中、今日の吾々の娯樂として、吾々の更新的教化の一動力として、吾々の趣味生活の一要具として、蓄音器の如き、最も重大な役目を有するものは、改めて説明するまでもない。而も蓄音器は、その器械から見ても、レコードから見ても、内地製のものでは、到底、吾々の趣味性を滿足させないことも亦改めて説明するまでもない。而もこれらの外國品は現在においても、稍もすれば、吾々一般民衆の經濟上求めることを許されない場合があるのだから、奢侈税案實施の曉には一層求めがたいものとなることも亦云ふまでもない。

これは一例であるが、政府當局の定めた奢侈品目は、要するに、人間の生活を最少限度に引下して、その引下した境地を標準として必要品と奢侈品とを分けるといふ封建時代の道學者どもが考へさうな考へ方から定められたものに過ぎない。奢侈品と必要品とについての現代民衆的立場を全く理解しない結果から定められたものに過ぎない。この案の實施によつて、一番苦しめられるものは、前にも述べた通り、中産階級及びそれ以下の階級である一般民衆である。

此度の奢侈税案は、すでに衆議院で可決され、近く、實施されるといふことだから、今更、どうにもならないことではあらうが、吾々一般民衆が單なる生存の境地から生活の境地に達するために、そして生活の悦びを感ずることによつて、人生にウイリアム・モリスの所謂新しい「富」を創造しようとする現代の生活美化運動のために、私は、此度の奢侈税案が一日も早く撤回されることを望まずにはゐられない。

（七月十三日稿　附、拙著四月發行「生活美化論」が參照されることを望む。）

成功者は何れも熟慮果斷の人！

煙草の害を知りつゝ永年禁煙の出來なかつた人も

一度「カロツト」を口にすれば斷じて再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十二日煙草代用品「カロツト」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロツト」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロツト」を御説明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロツト」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其所で榮川堂主は自身來社せる所意を述べて「カロツト」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、そして先づ一社員の煙草好な方に御試しを願ひました、すると其社員の方は早速「カロツト」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロツト」を口より放して今度は後煙草をお吸ひになりましたが社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に各社員の方が總立ちになつて「カロツト」を取上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて「カロツト」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロツト」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇乞をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奨勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

一　外見人も夜煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを身體に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く

二　煙草に對する嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其

三　他に歩行等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロツト金貳圓（大凡百日分）

パイプ
同　新流行ベークライト　五拾錢
同　象牙製サック入　壹圓五拾錢

パイプは三種の内希望の品御用命願升

送料　内地 十八錢　臺、朝、樺 四十九錢
引替送料　内地 三十錢　臺、朝、樺 五十五錢

御注文に振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京府大森不入斗四五一
榮川堂
振替東京五二九壹壹

東京市京橋區[illegible]山町十三番地
代理店　天下堂

米國の排日立法によつて惹起された
我國民の排外的氣分の批判
對米恥憤の方法

杉森孝次郎

失敗的經驗の第一價値は、それが、その經驗者に、新たなる反省を機會づけるにある。そして、反省の第一價値は、それが、その反省者に、新たなる理想を機會づけるにある。失敗に悟る力の有無、大小によつて、その當の個人なり、國人なりの生き伸びる力は測定される。早く、そして深く悟るものは、それだけ永く、そして大きく生き伸びる必然がある。

最近の日米關係が、すくなくとも瞬間的に、且つ部分的に、日本の失敗的經驗を意味するものであることは、それだけの形式的判斷としては、なに人によつても否定されない。それが日本にむかつていかなる反省と、したがつていかなる理想とを新たに機會づけるかは、その失敗的經驗の「なに」に對する判斷と、それの原因に對する判斷と、最後に、しかし結論的に、それの價値に對する判斷とが現代日本人の間に多少種々であるがゆゑに、その種々の評價または意志の合成力が測知される限りにおいてのみ測知される。

われら日本人は、全體として、過去において遠き慮りを缺いたゆゑに、近い憂ひを昨今しきりに見つゝある。過去十年間の顯著なる外政史上の出來事だけを顧みても、近憂の種を蒔く遠慮不足の行爲が通則的にいちじるしい。たとへば一九一四年八月におけるわが輕匆參戰は、いひかへるならば自重不足の參戰は、英のその後における對日的内心憎惡を原因づける性質を帶んでゐなかつたか。對獨宣戰のわが動機及び形式が、英との間

係において、あまりに沈馬式であり、阿附的であつたことは、國力國位を國際社會に眞に高める方法ではなかつた。それは、國力を内に養成する方法でもなかつた。あのやうな動機及び形式に於いて參戰した結果として、五大國の一になつたり、三大國の一になつたりすることは、最初から、眞に大國たる、もしくは、大國となる志あるもの丶すべきことではなかつた。日本の歐洲戰參加は、それの方法に於いて、また目的に於いて、あまりに自己をいやしめ、輕んじ、小さくする性質のものであつた。それの結果がその方法と目的に相當したものであることはいまさらの驚悲を値ひしない。

またたとへばシベリア出兵にしても、それの最初の方法に於いて、殊にアメリカとの關係に於いて、あまりに被決定的であり、追隨的であり、受命的であつたことは、米の對日蔑情をいよいよ助成する性質のものであつた。

さらにまたたとへば華府會議への召命的招請に對するわが最初の方法にしても、一般國際問題と特殊東亞問題との混雜を適當に識別せず、もしくは適當に扱ひわけずに、先方からの通告通りに鵜呑みにして匆遽として馳せ趨むいた點において、すでに米及び環視列國のわれに對する侮蔑を多少とも新たに原因づける性質のものであつた。

國際聯盟にしても、わが國はどれほどの知識ある確信をもつてそれに參加したのか。英米からの誘發があつたから參加したといふのが、わが國の國際聯盟參加の主要事情ではなかつたか。米について英が手を引いたら、わが國は急いで手を引かないだらうか。けれども、英米のための國際聯盟でなく、世界のため、人類のため、道德のための國際聯盟であるなら、そん事は出來ない筈だ。もと〳〵、あの程度の發明は、それが眞に世界人類のために善いものであるならば、わが國からでも自發的に考へだす事位は出來さうな事柄ではなかつたか。英米から誘發さるれば、格別の修正意見もなく、根本的批判などはなほさらなく、當然、必然とばかりに、ほとんど反射運動的に參加する。原則意識にもとづいての參加ではないから、獨や露を除外しようが、包攝しようが、理性や良心の問題とはならない。英米や米英の後影を踏んであるきさへすれば正であり、善であり、賢であり、さうしないことは邪であり、惡であり、愚であるといふ一般的習性の、あれも、一發現にほかならなかつたのではないか。

けれども、かやうな心と行なひとは、現代の一國として現代の諸外國の信や敬愛を招く方法には背馳した性質のものだつた。ともかくも。それは、わるい意味に於いての[illegible]のものだつた。

英米や米英に阿附し、盲從する行爲を、まのあたりに、立てつづけに見せられては、支那にしても、ロシヤにしても、國内の被征服系にしても、日本から威張られることをそれだけ餘計に意識せざるをえない。笑つて見せる氣持ちにも自然なる。實に、最近代の日本の外政が實示した如き樣式と程度とに於いて現代の一國が、現代の諸外國のうちの或るものに對しては好んで屈從し、他の或るものに對しては好んで壓制することは、國際的客觀眼から見れば、自己を滑稽化する醜態だ。それがその行爲の事情と動機を察するにしたがつてその感はいよいよ完成する。そして、この場合に、その客觀眼は狂つてはゐない。

大震火直後、アメリカからの同情的及び救助的行爲に對して、わが國が表示した言論的感激と感謝とは、また甚だ調子はづれではなかつたか。當時の新聞と、いはゆる排日問題勃發以後の新聞とを對比して見て、なに人か日本の聰明と偉大を全然否定しないまでも、深く疑はないことが出來やう。

故大統領ホルソン氏の外盟的全盛當時に、わが國の多くの識者群がかれに獻げた評價の如きものも、現代日本の識力を、それは淺いものだと正視させる一とつの材料ではなかつたか。

左傾、右傾、中正、それらのいづれもが、最近の露とか、伊とか、英米とかいふ外國のどれかによつて指標され、權威づけられて見える現代日本の社會思想の如きものも、客觀眼には、浮游日本のそれだけの證據として映ずる。見えるだけなら問題は淺いが、精査するにしたがつていよいよさうだとわかれば、深い同情者から見た日本の最深問題の一を、日本人は發見するだけの能力を持たないといふ判斷も成り立つ。ついでながらに注意するが、日本の哲學界は、ドイツのそれの誇大された影ではないか。

米貨排斥は、一時的行爲としては、事情と目的次第ではかならずしもわるくない。しかし、つひに禁慾を意味する消費制限の如きは亡國民の方法だ。發明と生産にむかふ明確なる意志によつて　したがつて實現の可能に關する知識を備へた目的によつて、條件づけられてゐない外製品不輸入ならば、それは不完全な憤激だ。日本が米國を必要とする現實的及び近い將來に於ける可能的事實があるかないか。あるといふならばこれはなにか、なに／＼か。米國が日本を必要とする同樣の事實があるかないか。あるといふならばそれはなにか、なに／＼か。部分的排貨は、國交斷絶による總般的、徹底的排貨を知識ある確信によつて豫測する原則的意志の部分的發表としてでなくては、輕卒だ。それは不聰明であると同時に不まじめでもある。部分的排貨は、「ゆゝしき結果」を言ひ放つに似た性質を帶んで居る。

日本の或る有名なる公人は、清浦内閣當時に、外相は無論、内閣全體が辭職でもするでなくては、「ゆゝしき結果」が空言に終はると、或る新聞によれば、批評したさうだが、そんな事は、すこしも「ゆゝしき結果」を證據立てる資格あるものでないことは多言を要しない。米貨排斥も、發作的や、暴動的にでなく、組織的、統一的意志と方法とに於いてそれが企てられるならば、それは、この際、かならずしも愛國價値を有しないではない。さうでない米貨排斥は　自國を傷つけるかたちに於いて多少とも有害であるか　世間の淺い好奇心を滿足させるかたちに於いて無害無益であるかにきまつてゐる。それは、大國意志ある國家なり、國民なりのすべき事では勿論ない。

日本は、すくなくとも今後十年間、製品のかたちに於いても、原料のかたちに於いても、米貨をば絶對に入國させずにすますといふ明確なる意志、及び日本は、同じ條件つきで、日貨をば絶對に米國に賣らずにすますといふ明確なる意志、これは、この際、日本が、いかに部分的にたりとも、米貨を排斥するためには、さうする前に、持つことこそ愛國的であり、持たぬこそ非愛國的である最低限用意の或る部分だと、日本の今後の成長を信仰し、愛欲するすべての人々の立ち場からしては、つひにかならず斷定される。

「ゆゝしき結果」は、相手の非違に對する手嚴き制裁行爲を意味せねばならぬ如くに、米貨排斥も、當方の最後の勝利　先方の最後の敗北を豫示する深い決意の一とつの現はれとしてのみ向上心ある日本の行爲らしい。その深い決意には、全たい知識と、純なる道義心とが條件として必要だ。純なる道義心は、人種的價値意識よりも遙かに、限りもなく遙かに、深い、大きい、統全的な價値意識だ。それは、實に、原則的價値意識だ。

敵や賊にむかつて放つ言葉としての「ゆゝしき結果」は、當方に起こる禍害や不幸を意味するものであつては勿論ならん。それは、勿論、先方に起こるそれらを意味するものでなくてはならん。且つ、その起こりかたは、感覺的、知覺的、科學的、數學的にきはめて明確、直接、切實でなくてはならん。それは、説明や辯證を待つて始めて理解されるやうな似而非哲學的なものであつてはならん。それは悲鳴であつては勿論ならず、哀求であつてもならず、から威張り、こけおどし、おためごかしであつてさへもならん。それは率直に、簡明に、先方の不正意志にむかつて絶大の反對的强制を與へることを意味するものでなくてはならん。先方に强くでられて、聲として消えうせるやうな、はかないものであつてはならん。先方の「ならば」が實現されて、當方の「だらう」が實現されないことは、現代に於ける

一獨立國が、他の一獨立國にむかつて自發的になした言の場合に於いて、一とつの甚だしい自瀆を意味する。

しかしながら、發作的、衝動的、私刑的形式に於ける制裁、報復、自己主張は、たとひその行爲者の主觀は至純的愛國乃至愛正になつてゐる場合でさへも、客觀的には、及び結果に於いては、その反對を證據立てる必然がある。知識なき善意は、この場合に於いても不如意に終はる。

國際關係を、再び新たに有機化する努力を、わが國民は、依然として揮はないではないか。對支關係を充分に有機化する努力をも、わが國民は今尚ほ始めないではないか。全アジア族に國際的成長の新路を發興する自他相違の意義ある努力をも、わが國民は、實質的には、すこしも開始しないではないか。政治組織、經濟組織、教育組織、道德觀念、常識、科學、技術、哲學のどの一方面にむかつても、わが國民は、日本が國際に伸びるために必要な反省と改正を、今尚ほひとへに恐れ、吝しみ、怠り、問題として意識することをすら、要するに、いまだに始めない實狀にあるではないか。

對米知識、對米憤激は、それが充分に愛國、愛正の意義あるものであるためには、これらの眼前須急の、そして比較的に根本的な、したがつてまた大衆的、遠謀的な國家的、國民的努力、反省、改正にむかつて、それの動力にむかつて、沛然として旱田にむかふ膏雨の如くに方向づけられべきではないか。

對米恥憤の最も有意義な在りかたは、それの方法に於いては必然、きはめて靜かだ。それは、たとひそれの結果に於いてはきはめて驚天動地的であらうとも。

方法に於いてやかましく、結果に於いて靜かであることは、今回の問題の場合に限らず、淺識、小智の誇張だ。方法に於いて物情騷然式であり、結果に於いて泰山鳴動して鼠一匹出づる式であることは、或る意味に解したる「ゆゝしき結果」の二の舞を舞ふ不名譽だ。そんな事では「ゆゝしき結果」は、逃げだした鼠一匹の身の上話にすぎぬ笑話となる。

對米恥憤は、國民生活の深化、大化を明確に目的とし、また結果として意識しうる性質のものに限つて國家的、國民的に有價値だ。それには、なによりも先きに、知識が必要だ。

現代日本のどの一とつの問題を考へて見ても、先きだつものは、自明の一公理を具體的に再認するかたちに於いて、そのことはの最も正しい使ひかたにしたがうての知識だ。

對米恥憤も、要するに、國民的啓蒙の新意志として發達し、再生するほかに、それの代表的使命を持たない。他を啓蒙するものは、先づ自分が啓蒙されてゐることを順序とする。

彼を知り、己れを高めよ

文學博士　三宅雪嶺

米國上下兩院で排日移民法案を可決したのに對し、日本國民の感情の新聞に現はれたに就いて、多少の遺憾を感ぜずには居れぬ。新聞は一時の刺戟を先にし、國民の心の奥底に潜む所を發表する事が少いにせよ、一時の刺戟も今少しく練磨した性質を帶びて欲しい。何處でも國民一般の知識が高いと云へず、歐米で日本と支那との事情を混同するのが珍らしくなく、印度をも混同したりするが、大體に於て國際知識のいくらか練磨して居るのを認める。日本も前に比べて確かに練磨して居り、たゞ今一層練磨して居るべき筈であつて、さう行かぬのは何の爲めか。普通教育が行き屆き、高等教育が盛んになりながら、肝腎な知識が割合に高まつて居らぬ。教育を編制してから半世紀を越え、他にも知識啓發の設備の著しく增しながら、他の國々との關係が何の狀態に成つて居るか、歐米の形勢が如何に變じて來つたか、殆ど之を度外に措いて居る形がある。ペリー提督の黑船を率ゐて下田に到着した時、內地に種々の動搖が起り、國政の一變するに至つたが、初め米國を如何に見、中頃之を如何に見、今日之を如何に見るか。前に正義人道を以て立ち、後に不正義不人道に偏したかに思ふのは、果して事の當を得るか。前に正義人道があつたならば、今日とても之が無いと云へず、今日不正義不人道があるならば、前にもその形跡があり、今更ら遽かに怪むべきでない。

法案の通過が穩かでなく、之に對して適當の處置を取るを要し、其の爲めに騷ぎ立てねばならぬと云ふのは、聞えて居る。反對の意志を示すのはよい。法案に對して日本が反對すべきは當然である。然し戰爭氣分を示すが如き、米國を知らぬ事も甚だしく、米の手に乘ると云つても差支へがない。總じて白人は戰爭好きであり、若し好きでなければ戰爭を多くするを餘儀なくされて居る。亞細亞に相應の戰役數があり、成吉思汗、タメルランなど到る處を征服し、白人の企てたよりも大きな帝國を建設したけれど、年數に割り合てて戰役は少く、戰爭も猛烈

でない。日本の德川時代、支那の清朝の如き久しい泰平は大西洋の兩岸に見出す事が出來ぬ。米國は戰役の必要ないやうで、種々の戰役を經來つて居る。平和の國であつて戰爭と聞き若干をふるふと思ふは大間違ひであり、何とか戰役の機會が無いかと待ち設ける傾向がある。彼のルーズベルトは或る機會を得、馬上に功名を建てたくて仕方がなかつた。强い弱いは別として永く平和にして居るに堪へず事あれかしに望む者と見ねばならぬ。希臘羅馬以來の歷史で、幾多の戰爭話しをし、勞して功ない事も多く、戰爭なしに一層好い結果を得るの方法ないかと考へ、永遠の平和案を建てたりする。米國人は新世界の戰亂多きを劣等とし、天國を地上に建てようと試みたけれど、彼が新世界の出であつて初代大統領も、劍を持つて位置を得たのである。戰役で功を建てた者が大統領に當選し易かつた。大艦隊を以つて世界を一周した時、途中で水兵の逃げ出すのがいろいろあり、軍紀の紊亂を察するに足ると云はれたが、米人は義務で軍務に服するよりも、面白半分に服し、厭になつて飛び出してしまふ。面白半分、寧ろ面白味のみで戰爭に出るのがある。世界戰役に出掛けたのは、義務の爲めか面白味の爲めか、之を云ふに難く、さういふ兵で、到底獨逸の兵に當り得ないと思はれ、佛國で之を戰線に出すに躊躇したが、米兵は何とか戰線に出して貰ひたいと云ひ出し、試みに出して見たところ、初めの程は間誤ついたものの、慣れると共に、相當の戰ひ振りを發揮した。彼等は獵りに出る心算で戰ふやうな所があり、餘計な事を好むと云はば云へ、さういふ僻あるを打消してはならぬ。民兵で國家を維持しようと考へ、維持し得ると信じたのも、自ら恃む所あるによる。バイブルを開き、平和とか四海兄弟とか云ふので戰爭嫌ひとするのは、事を簡單に見すぎて居る。經驗上、利害上、又道德上、世界の平和を促すに力を盡くすのがあるとて戰爭に臆病なる爲めと見てはならぬ。臆病なのもあるけれど、臆病者扱ひする程、早まつてはならぬ。戰爭風を吹かせても何程に感ぜず冷かに嘲るのを慮らねばならぬ。

日本で米國と開戰するの已を得ずんば、固より戰はねばならず、又優に戰ひ得るに相違なきも戰役に訴へさへせば事が落着するかに考へる程幼稚なものでないと云ふを明かにするの必要がある。米國の母國なる英國は、印度及び其他で自ら無理をして他の戰爭熱を煽り、戰爭になつた所で利益を占めるに極つて居つた。米國が墨其哥の領土を削り取り、西班牙の植民地を奪つたのも、其の手段に於いてして居る。日本は決してその下に來らず、開戰してもむざむざ負ける方ではなけれど、例ひ米國

人、半開人の下手な辭を出すと思はれるのも面白くない。何の事情よりしても、世界五大國の一に居り、三大國の一つに居り、世界の平和に關係あるを知つて、それ相應の思慮なくてならぬ。日本も支那、印度と變りなく、亞細亞人は一山百文で取扱ふべしとするに至るは世界の爲めにも不利益である。

日本では彼等が普通に亞細亞人として侮る處に出でず、成程日本は白人に一歩もひけを取らぬと云ふを明かにするに若くはない。實は排日法案が問題になるに先んじ、適當な用意する所あつて然るべきであつた。早晩かの法案の如きの通過し、通過しなくても事實上に通過したと同樣になるのを察し、之れに對するの方法を考ふべきであつた。何と云ふても日本人が米國人に劣らぬ理由を明かにするのが肝要である。日本人は米國人と議論して勝つか負けるか、大使館の國旗を奪ふが如き、輕業師でちに成し遂げ得られるが、排日法案を駁擊するのは、それ程容易でなく、更に深く論據を築き上げるを要し、相應の知識判斷及び勞力なくてはならぬ。根本に於いて土地所有權問題と國際正義問題が込み合つて居る。土地所有權を如何に解するか、全く新たなる解釋を下し、國內及び國外一般の同意を求めるか、限りある地球の所有權を定め、後に生れる者が權利所有者の爲すが儘に從ひ、從はねば生存し得ないものと認めねばならぬか。

人口が多くて領土が狹いのがあり、人口が少くて領土が廣いのがあり、何が故に其の差別が出來たかと云へば、深い理由があるとも云へず、勢の然らしめたと共に、實力即ち權利であるといふので通つて居る。國內で之を當然とし、國外で不當とすべきか何うか。土地所有權は從來のままとし、或る國で他の若干國を平等扱ひにし、更に若干國を不平等扱ひにするのが違つて居るとするか。國家社會に種類があり、悉く平等扱ひにするわけに行かぬと云ふのは、如何に破るべきか。國內で制限選擧を普通選擧にし、更に男女を平等にした如く、世界に於ける國家と國家との關係も、平等にすべきものとすべしとの一點張りで進むべきか。之等は、何處でも十分に論據が定まつて居らず、議論を練りに練つて進めば、何程か歐米人を動かすに足る。一通りの考へでは、又例の議論として見離されるが、從來歐米人の考へたよりも、より以上に議論を進めれば、少くとも日本人の能力が白人に劣らぬのを證明するに足る。

國民が勇氣あると云ふのはよけど、それよりも戰役に特殊の機械を使用するを得、實に侮るべからざる國民であると知らるるを有效とする。飛行機で卓越してゐるとか、不思議な潛水艦を造つたとか、或る光線で遠方の軍艦を動かすとか云ふことか、

最も重きを爲すべき事になつて居る。世界戰役で阿弗利加黑人が勇敢に戰ひ、白人が感謝せねばならず、感謝すると稱したが、其後其儘になつて黑人が不平を唱へるのは、勇敢に戰つた外、特別に能力を示さぬに外ならない。白人は勇氣などで感服させることが出來ず、種々の能力で、同等以上であるを示し、それでやうやく說得させるに及ぶ。我が日本人は米國人に輕んぜられるのに不快を感ずるのが尤もであると同時に、彼に比べて能力が劣らぬか何うか、劣るならば、奮勵努力、劣らぬやうにするに心掛くべきである。彼に比べて體格が何うか、忍耐力、勉强力が何うか。歐米の文明が眞の文明でなく、更に憧憬すべき文明文化あると云へぬでなく、從來の文明の缺陷を見遁してならぬが、歐米人よりも働かず、能率を低くし、それで歐米の文明を咀ひ、彼の如き人が人間たるの價値ないとして打ち過ぎるのが得策であるか何うか。」支那にも印度にも好い所があり、波斯にも土耳古にも好い所があり、其のよい所を得て安んずべきか。現代の文明に虛僞が多いにせよ、其の文明に堪へ得ない能力で更に優れる文明を造り出すの可能性があると云へるか。全く言へぬ事ないとし、楊子江やガンヂス附近に居住すると同樣の狀態で滿足すべきものとするか。之れで滿足し得ないとならば、歐米人に優るとも劣らぬやうにすべきであり、特に米國を目標とせねばならぬ。米國人が世界戰役後に意氣益盛り、何でも世界一と心得、日本を壓迫し來つた所、日本の奮發を促すものとし、此處で思ひ切つて奮發し、生れ替つたやうに努力すべきである。早くも努力が生命の本質でないとし、之を避けようとするのは、一般亞細亞並みにならうとする所であつて、深く警むべきでないか。易い事は何時でも學び得られる。先づ難しいと思ふ事を學ぶべきであつて、日本は幾回も試練され、幾回も成功したが、今は前に優つて困難なる問題に出逢ひ、之を解釋するに力を注がねばならなくなつて居る。

日本人丈けで生きてゆく覺悟

菊池寛

排日問題も結局仕方のない事であらう。米國を脅迫して、排日の墻塀を破棄させるほど、日本は強くないのであるから、止むを得ないと思ふ。正義人道を呼號して、米國の反省を促すとしたところで、日本の正義人道も世界のあらゆる國の正義人道のごとく、政略的である以上、それほどの效力はないだらう。朝鮮滿洲へは帝國主義的に殖民し、米國丈へは、正義人道で殖民しようとするのは無理である。米國の正義人道が同じく政略的である以上、自分の都合の惡いとき正義人道的である筈はないのである。その點で、日本の實力が現在の狀態である以上、排日に對して現在以上の手段にないだらう。たゞこの際日本國民の態度丈が問題であるが、私の希望では、變に感情的に走しることは止して貰ひたい。國民として、センチメンタルなのは、弱々しく見えていけない。感情などは、抑制してどつしりと落着いてゐたいと思ふ。そして、一時の感情を洩すために、排外運動などと云ふ何等の大志も伴はない小運動などをしないで、日本の國力を充分に認識し、あるがまゝの弱さや、缺陷をハッキリとみとめて、隱忍自重、自彊を計るべきである。とにかく、センチメタルな芝居的な行動もいやである。排日を憤つて、粗暴な行爲に出るなどは、小國民らしくていけない。それかと云つて、變な武士道を發揮して、米國の飛行機を歡迎したり、ウッヅ大使を喝采したりするのも、センチメンタルでいやである。英國民のやうに、鈍重で、恨みなら恨みを、ぐつと腹の底で抑へて、靜然と收まつてゐたい。その方が、どれ丈凄味があつて、相手を氣味わるがらせるか分らない。

そして、外國と云ふものは、結局頼りにならないものであることを痛感し、日本人は日本人丈で、生きてゆく覺悟の臍を固め、そして政策的にはなるべく外國と親善を裝ふて、外國を利用して、自分の國をだん〳〵強くしたい。かうした覺悟は、むろんあらゆる國の本心であらうが、國民全體が、かうした機會を利用して、その本心を固めたいと思ふ。

異人種の共同生活は結局兩損

安部磯雄

日米問題に關聯して近來大分國民の感情が昂まつて來たやうに思はれる。それは畢竟するに日米問題に對する國民の見方如何に依る結果であるとも云へる。我々は何故に日米問題に對して憤慨するのであらうか。又或者は此問題に對して極めて冷靜なる態度をとるのであらうか。それは孰れも問題の見方に依つて定るのであるから、斯ういふ感情的な空氣の漲ることの善いか悪いかを判斷する爲には、一應日米問題夫れ自身に就いて我々の立場を考へて見る必要がある。

私は從來、十年もそれ以上にも溯つて、日米問題に對しては常に一貫した考を抱いて居る。日米問題に限つたことではないか、大體總ての問題は二つの異つた點から見ることが出來るやうに思ふ。一は法律的と云はうか、政治的と云はうか、さういふ方面からも見ることが出來るし、一は正義とか人道とかいふ立場からも見ることが出來る。法律問題としての日米問題は比較的簡單である。現在は世界の何處に於ても殆んど土地は私有財産になつて居る。而も其私有財産權は嚴重で、殆んど絶對的といふことが出來る。只一の例外として國家が自身で土地を要求する場合には、若くは社會公共の爲め必要と考へる場合には個人から土地を收用することもあつて、例へば鐵道敷設の爲めとか、市區改整の爲めには國家の力で土地を取り上げることが一般に認められて居る。乍然それを除いた他の場合に於ては個人の土地所有權は絶對である。例へば或人が土地を借りて居るとして、地主が自分に必用と認めた時には其土地を取戻すことが出來る。無論今日に於ては其の手續は面倒になり、借地人は法律上種々な點で保護を受けて居るか、然し結局は地主の意志通りに土地は地主の手に返ることになるのである。昔はさういふ例は殊に極端であつて、英國などの地主は田舍に持つ自己の廣大な土地を、遊獵地として之れを用ひやうといふことになると、小作人全部を土地から追ひ出して了ふといふやうな苛酷な權利を持つて居た。で、小作人の中の何千人、何萬人が職を

つて、或者は餓死し、或者は止むなく米國に移住することになつた。斯くの如く個人の土地の所有權が絕對的であるならば、勿論國家が其土地の所有權を持つことは當然である。此一點から考へても米國が今年七月以後日本の勞働者の入國を禁ずることを決定したからとて、我々は法律上之れに抗議することは出來ぬ。何故ならば個人たる地主が自分の土地に何人も入ることを許さぬと頑張ることが出來るならば、國家も亦自分の繩張の中に外國の勞働者を入れぬと主張することが出來るからである。若しそれが不都合ならば、日本の內地に於て、高い塀を築き垣根を作つて、嚴重な繩張をして他人を入れないやうにして居るのも不都合であると云はねばならぬ。從つて此點から米國人が日本人を排斥するからと云つて憤慨するには當らない。勿論我々は決してこれを快くは思はぬが、既に法律がさうなつて居る以上どうすることも出來ないのである。併し中には斯う云ふ人もある。米國は廣い土地を持つて居るが、日本の土地は狹い。其土地が狹い爲めに困つて居る國の人民は、有り餘る土地を持つ國に出かけて行くことは無理でない。それを拒絕することが惡いといふ議論である。然しそれも法律上から見れば大した議論ではない。何故ならば東京の下谷、淺草などの所謂貧民窟には狹い場所に大勢の人間が群居して居る。一方東京市內に於ても、郊外に於ても、一萬坪、二萬坪の廣大な坪數を持つ貴族や富豪がある。さういふ人々の廣い邸宅に對して狹い貧民窟に居住する人達が開放を要求しても、今日の如く土地所有權、財產權の嚴然として存して居る間は、それは到底容れられない要求である。それを無理に主張することになれば法律違反である。無論先方の好意に依つて邸宅に入れて貰ふことは差支ないが、若し拒絕されたらそれまでのことで、土地を持たないものは引下るより外に途はないのである。

然るに其他の點に於て今度の排日問題に就いて、日本人に不快を感ぜしめると思はれるものがある。それは人種差別の問題で、米國は現在ヨーロッパの移住民は自國に入るのを許して居ながら、一方に於て日本人並にアジヤ人を排斥するのは、平常正義、人道を唱へる米國に似合はぬ態度であつて、斯くの如き差別的待遇は日本を侮辱するものであるといふのが、米國に對する我國民の憤慨の原因となつて居ると思ふ。乍然之れも土地所有權の問題の上から見れば何でもない事柄である。地主が借地人を選擇する時には選擇權は地主にある。甲の人間は或土地を借りることが出來るが、乙の人間はそれが出來ないといふ場合は有り得ることである。乙から云へば地主の態度は不公平であるかも知れぬが、地主の立場から云へば、なるべく正直に地

代を拂ひさうな人には土地を借せるか、地代を拂ふかどうかを懸念されるやうな人には之れを拒絶するのが當然である。要するに地主は借他人を選擇する權利がある。然らば米國がヨーロッパ人を入れてアジヤ人を排斥するのも、土地所有權が認められて居る間は、現在に於てはそれは如何ともしがたい事である。

私共は虚心平氣に日米問題を考へる時に、躍起となつて米國人を攻撃する氣になれない。といふのは決して私共は此問題に對して不快に思はぬといふ意味ではないが、如何せん斯くの如き問題は我々日本人の間に於ても起り得る事柄であつて、現在地主といふものゝ存在を許して居る間は、日本に於ても排斥の事實は行はれて居るのであるから、我々は米國に對して不平を云ふ前に、國內に於ける土地私有制度に對して不平を鳴らさなければならない譯である。

然るに今日米國に對する我國人の憤慨は、法律上の問題としてゞはなく、主に人道問題に起因して居るやうである。勿論道徳とか、人道とかいふ立場から見たならば、此度の排日問題は悲しむべき事柄である。乍然茲にも我々日本人は大に反省しなければならない點がある。若し人道問題を以て米國人に抗議をするならば、同時に又我々は同じ立場から我々自身を非難しなければならぬ結果となるであらう。要するに己の慾せざる所は人に施すこと勿れといふ道德書の教訓が正しいならば、我々は米國人のみを責めることは出來なくなる。我々は平素支那人に對してどういふ態度を執つて居るであらうか。日本人は支那の勞働者がどし／＼日本の內地に入つて來るといふことを好まぬ。支那人排斥の聲こそ餘り盛ではなく、我々も之れに氣付いて居ないかも知れぬが、若し支那人が毎年、五萬人、十萬人と入つて來て、日本の鑛山とか、鐵道工事とかの事業に從事することになれば、それは日本にとつて由々敷問題である。其時日本は必ず支那人排斥の法律を作り、彼等が國內に入ることを拒絶するに相違ない。否、現在の如き少數の支那勞働者が入つて來るのに對してさへ之れを排斥する方針を執つて居るのである。三四年前に支那人の勞働者といふよりも行商人が、主に瀨戸物の毀れ物を修繕するために、續々と日本の內地へ入つて來た時に、政府は一擧にして百七十何人かの支那人を歸國せしめたことがあつた。日本が既に外國人に對してさういふ態度をとつて居る間は、正義、人道の立場から米國人のみを責める資格はない。若し米國人が日本人を排斥することが正義、人道に反するならば、日本人が支那人を排斥することも亦正義、人道に反すると云はなければならない。從つて斯くの如き立場から考へる

と、今日米國人のやつて居る行爲を攻撃することは出來なくなる。それは米國人の行爲が決して正義、人道に戻らぬ行爲であるといふのではない。乍然我々も亦同時に同じやうな行爲をやつて居るのであるから、米國人丈けを責めることは出來ないのである。

我々はもつと廣い立場に立つて日米問題を考へなければならない。私は現在の人類の進歩の程度に於ては、人種の違つた者や、言語、風俗、習慣の異つた人間が、同じ國の内に住居するのは好い事ではないと思つて居る。それが原因となつて國際紛議も生ずることがあるのであるから、國内に於て異つた人種が共同生活を營むことはなるべく之れを避けた方が好いといふのが私の考である。勿論旅行、商業の目的で一時其國に入る事は差支ないが、其國に十年、二十年と永住する目的で、外國の人間が日本に來り住ひ、日本人が又米國に行き住ふといふことは、双方の國にとつて決して利益ではない。早い話が一家族の中に常に客が出入することは家庭生活を妨害しないが、假令親戚でも、友人でも其家庭内に五年なり十年なり一緒に住ふことになると、大概の家庭は利益よりも不利益を受けることになる。親戚や友人は何と云つても異分子であつて、一家族に於ける夫婦、親子の關係と異る。一週間、二週間の滞在は双方の幸福である場合もあるが、永い期間の共同生活は不和の原因である。東京市内には其處此處に貧民窟があり、其中に住む人達は多少言語、風俗、習慣を異にするが左程不快には感じない。然し東京の内に言語、風俗、習慣の異つた、而も下流の不衛生な支那人の一部落があつたと假定したらどうであらうか。彼等の生活狀態の相違から、其處を通る時に我々は異臭を嗅ぐこともあらうし、不快な光景を見ることもあるであらう。それが都會生活に愉快なことであるか、不快なことであるかは誰れにも分ることである。日本人が米國に行つて生活をするのは矢張りそれと同じことであつて、桑港などの日本人の部落も決して立派な所とは云へないので、米國人の眼には快くない團體として映つて居るに違ひない。さうなると外國人が米國に行つて永住するといふ事が間違ひでありはしないか。日本には支那の純粋の勞働者が來て永住することは決して好ましいことではない。日本の幸福の爲めには支那人が來ない方が好いし、又それが支那人の爲めにも利益である。これと同じ理由で、日本人も米國に行かない方が結局日本人個人の爲めにも幸福であるし、又國際上から見ても都合がいゝと思ふ。米國に於ける黒人は、米國人の祖先がアフリカから連れて來て奴隷として使つた黒人の子孫であつて、其數は現在に於て二百萬乃至三百萬に及んで居る。正直に云へば黒

人と一緒に生活するといふことは果して愉快であるかどうかは問題である。無論道徳の上から、人道の上から云つてさういふことを考へるのは間違つたことであるに違ひない。自然彼も人、我も人といふ同胞の觀念を以てしても我々の感情は之れを僞ることは出來ない。例外はあるとしても黑人以外の者が黑人と結婚するといふことは大體に於て有り得べからざることである。米國人は黑人を見て不快に感じて居るに違ないが、米國人にとつてはそれは腐れ緣で、彼等の祖先が黑人を奴隷として連れて來た時以來の行がかりであるから止む得ない。黑人から云はせれば米國で侮辱されて居るよりも、アフリカで自分の國を建てた方がどれ丈け幸福であつたか知れないのであるが、米國人としては彼等の祖先の過ちから今日不快を忍ばなければならない因緣があるのである。斯くの如く考へて來ると日本にも亦朝鮮人の問題がある。近來朝鮮の勞働者にして日本内地に入つて來る者の數は非常に增加した。昨年七月朝鮮に行つた時に得た其年の一月から六月までの統計に依ると、釜山を出て内地に行つた鮮人、平均一ヶ月間に一萬人の莫大な數に及んで居る。そして現在彼等の多くは鐵道工事とか、水力電氣の工事とか、鑛山の仕事に從事して居るのであるが、四五年前に於てすら群馬縣の桐生に於て、織物工場に鮮人の女子を試驗的に使つて居たこともあつた。今日、日本に來て働らいて居る鮮人の數は非常に多いと思ふが、大阪附近だけでも三萬の鮮人が居るといふことである。斯くの如き現象は將來我國の勞働問題の上から甚だ重要視さるべきであつて、さなきだに失業問題の聲の盛たる時に當つて鮮人の内地移住は重大なる問題であるが、支那人と異なつて、自國民である朝鮮人を排斥することは出來ない。今迄は多少の制限はあつたが、現在では鮮人の入國にそれはないのであるから、日本人が米國に行くのとは違つて、將來益々鮮人の内地に來る者の數は多くなるであらう。殊に彼等の生活程度の相違から、内地に於て一二圓の賃銀を得ることが有利な條件となつて愈々鮮人勞働者の入國の形勢を助長するに至るに違ひない。日本は最初朝鮮を併合して植民地としやうとしたが、其結果は反つて朝鮮に於ける日本人の發展とならずに、逆輸入的に鮮人の内地移住となつたのは、日本の植民政策に對して疑を抱かせるものであるが、それは暫く措いて、鮮人が日本に來て生活するやうになることは、米國に於ける黑人と之れを比較するは妥當ではないが、矢張り、言語、風俗、習慣の相違は、彼等に對して我々が不快を感ずるに至るのが當然である。斯かる意味から、甚だ反動的な意見のやうではあるが、今日の世界人類の道徳的標準から云へば、異人種が一國の内に共に生活を

して幸福を得るといふ時代ではないので、其處には當然誤解や爭が生じ、遂には國際問題を惹起する惧れが伏在すると見なければならない。

斯くの如く考へ來れば、我々が排日問題に對する態度は餘程變つて來はしないであらうか。此度の排日問題は日本人の支那人排斥に比較すると寛大である。何故ならば米國は從來居住して居る日本人は其儘米國に留ることを許して居るのであつて、本年七月一日以後の日本人の入國は禁じて居るのであるが、結婚の爲めに歸國した日本人に對しては七月一日までに歸米すれば其妻の入國をも許して居るからである。然し米國の排日問題は恐らくは之れに止まらないであらう。日本人の米國に於ける繁殖は、將來遂に日本人の本國送還となる時機が來るかも知れない。それにしても日本は支那人を日本に入れて、日本人を米國に送るよりも、支那人は支那に返し、日本人は米國から歸る方法を執る方が遙かに賢明である。私共は總ての人類に對して同胞の觀念を持つことは必要であるが、總ての外國人を無制限に自國に引入れて永住せしめる必要はない。それは恰も我々が友人と親切な交際をすることは好いが、我々の家庭に友人を引入れて共同生活を營むのは自ら別問題であるのと同樣である。將來の國際問題として、此事は國民が愼重なる態度を以て誤りなき方策を期すべきであるか、現在は要するに我々が米國に對して徒らに憤慨するよりも、冷靜に自己の立場を反省すべき時期であつて、結局は日本人も米國から引上げしめると同時に、一方に於て支那人、朝鮮人の入國を斷る方針を執る事が、日本國民としても幸福であるのみならず、國際關係を圓滑ならしめる上からも必要であると考へる。

排日立法の爲めに醸成された排外的氣分の批判

法學博士　堀江歸一

米國の排日立法は條約國に對する行動として、國際間の通議に外れたものであると云ふ點に於て、甚だしく我國民の感情を

刺戟したことは、當然の事實である。吾人をして若しも一片の感情の動く儘に、行動せしめたならば、米國に對する報復の意味で、排外的氣分即ち米國人を我國から排斥しようとか、米國人の職業なり、營業なりを脅かさうと云ふ氣分の釀成されることは、人情として免かれ難き所であるかも知れない。然しながら國民の行動は單に一片の感情のみに依つて、支配され可きものではない。利害も考へなければならず。條理も斟酌しなければならない。

米國が日本を排斥するから、日本でも亦米國人を排斥しよう、然し彼等を排斥す可き適當の口實がないから、彼等に一種の示威的行動を試みようと云ふ考へが日本人の內に起つて居りはしないであらうか。果して然らば此事たる米國立法部に蟠居する排日派の議員等の爲した所業に對して、全然之に關係なき日本駐在の米國人に或る責任を負はしめるが如きは、謂れなき事であつて、文明國民の爲す可き所ではない。一時日本に駐在する米國の宣教師に向つて、歸國を促したらよからうと云ふ說もあつた。若しも米國宣教師が本國人の爲した所業の神の旨に反するものであることを恥ぢて、歸國すると云ふのならば、別に之を留める必要もないのであらうが、我國から彼等に歸國を迫ると云ふのは、條理に適つた話ではない。日本人として條理ある行動に出でようとするならば、寧ろ此際日本人の宗教家なり、識者なりが進んで渡米し、米國人に向つて、神の旨を敎へる位の氣概を持つ可きである。七八十年前米國は日本に向つて、開國を勸めたが、其米國が今や一種の鎖國を行うとして居るではないか。假令ひ其れが加利福尼とか、華盛頓とか云ふような狹隘なる領土だけの經濟上の利害から立論したならば、道理ある所業であるとしても、廣く世界の富源をあらゆる人々の爲めに開放し、彼等の生活を向上せしめよう。斯くて天の與へた利益を四民の間に頒たう。又斯の如くして世界の平和を確保しようと云ふ趣意から云へば、排日の如きは、忌む可き所業であることを米國人殊に加州民に力說すると云ふ態度を取るならば兎に角一部の米國人の爲す排日的所業を學んで、日本人亦內地に於て、米國人苛めを爲すが如き所謂暴に報ゆるに暴を以つてすることは、日本人の爲す可からざる所である。蓋し國として爲す暴の最も大なるものは、戰爭である。唯其れが許されて居つたのは、戰爭に依つて、多數民衆の利益を保護すると云ふ事あるが故であつた。米國の暴を懲す爲めに、我國に於ても、亦國としての暴を以つてすると云ふことは、一の議論に爲るかも知れないが、個人の暴を以つて、之に當らんとするに至つては、何としても議論の正しきを認めるを得ない。

日本が外國に對して　國を開いて以來、年を經ること、甚だ久しい、國と國との交際は行はれて居るが、個人と個人との間に於ける内外の交際に至つては、必ずしも密接であると云ふを得ない。言語が互に通じなかつたり、社交の方式が違つたりすることが斯く私人間の交際を妨げる原因と爲つて居るのであつて、日本人其ものが米國人に依つて理解されて居らない如くに、日本人の米國人を理解して居る程度も亦覺束ないものではなからうかと思はれる。即ち日本人の米國人を見るや、其或る者は極度の崇拜を事とすると同時に、他の或る者は不當の程度まで、蔑視の眼を向ける。本來米國の如き百五六十年前までは、一個の殖民地であつて、其土地に伏在する富源に吸引されて、世界諸國の人々が移住し來つて、一つの國を成し、其後に於ても、諸國民の移住する者相踵ぐの有様であつて、其間に國民性の醇化されたものもなく、國民的精神の完全に發達したものもなく、其擁する資源の豐富なるに乘じて、偶々國際間に或る威力を張るや、威力の盛なるに任せて、横暴なる行動に出づるのは、米國民の有する野性の然らしめる所と云はなければならない。東部殊にマッサチユーセッツ州を始めニユー、イングランド諸州を歴遊して居れば、如何にも文化の中心の此處に在ることを感じられるに反し、太平洋沿岸の諸州に足を踏ずれば、何人も到る所で不快を覺へざるを得ざるが如き、要す米國か文化の點に於て、異種異樣のものであるかを語る資料と爲るのであり、我國民が一概に米國人であるの故を以つて　彼等を崇拜したり、又は排斥したりすることの如何に愚であるかは、米國の國情を一瞥した際に、明に之を看取するを得るのである。

米國の排日立法以來、我國に於て在留米國人の生活に危害を加へるような極端なる所業には至らないとしても、尚ほ米國的風習を一掃しようとか、米國の物資を排斥しようと云ふ運動の試みられるのは、即ち排外的氣分の現はれたものと認められる。此際を機會として、米國の習俗の好ましからざるものを我國から排斥するのは、恰も米國に於て　所謂望ましからざる外國人の入國を排斥するのと同樣である。然しながら日本人が米國の習俗中の何を排斥して、何を存置するか、米國の物資中の何には非買を行うが、何には之を行はないと云ふことを決定する場合には、一に國民の理性の示す所に從はなければならない。從來日本の國運が發達して、今日までに至つたに就ては、外國人との接觸と云ふことが與つて力あること、論を俟たざる所であり、日本產の物資にした所で、外國物資の競爭に促されて　其品質を改良した事實の掩ふ可からざるものがある。抑性

に基かず、一時の感情に刺戟されて、排外的氣分を横溢せしめることは、自ら無差別の外國人排斥と外國物資排斥とを並び行はれしめ、我國をして何ものゝ益する所なきに終らしめるは、論を俟たざる所である。

米國が日本に對して侮辱を加へたからには、日本も米國に何等か報復を試みよう、之を試みなければ、日本人としての氣が濟まないと云ふが今日我國民に懷かれて居る感情の一端であるかも知れない。然しながら米國人の暴に對して、日本人は必ずしも之に報ゆるに同一の暴を以つてすることを要しない。日本を立派な國に盛り立て、外國に移住民を送遣する必要なき狀態に至らせるを得れば、其れで總ての目的は達しられるのである。排外的氣分の下に、激昂するが如きは、大國民を以つて居る者の態度ではない。

叡智と聰明に缺けたる舊き愛國主義の迷夢

千葉龜雄

一切の國民の幸福を保障し、生長させるものは、たゞその國民の聰明である。叡智である。斷じてそれ以外のものでは無い。これだけのことは、少くとも、現代では安心して斷言し得られる。

叡智、或は聰明を一つの示標とするならば、そこにはたゞ二つの差別のみが求められる。それは叡智をもたぬものと、叡智を持つものとの差別である。そして、それが叡智を持つか、また持たぬかの目安は、それが人類究極の眞理を信じ、かつ行ふか、然らざるかの一線にある。けれども、聰明と叡智とを示標とするものから見れば、叡智を持つものが、叡智を持たぬものに當面した場合は、たゞ憐れむことを知つて居る。けれども憎むことを知らない。叡智なものが、叡智でないものに對し、それを憎み、それと闘かうには、あまり自己の價値を信じて居るからだ。またあまりに自己を高く持して居るからだ。そんな非叡

智なものが、非叡智であることの理由をもつて、叡智なものが向きになつて、齒をむき出して格鬪し合ふことは、叡智なるもの自身の價値を、自分から引き下げて、その非叡智であるものと同等な地位にまで降つて行くことだからである。そこで日本が排日問題に面して、アメリカを憎むか、またアメリカを憐れむかは、一に日本の叡智が、どこまで徹底して居るか否かの標準計になる。

○

全アメリカ人のみの資本主義團結、もしくは、全アメリカ人のみのアメリカ國完成、そのいづれにしても、アメリカ人の排日問題は、一つのアメリカ愛國主義の結晶だとして眺めることが出來る。カナダ、濠州のそれにおいても、また同じ事情が云へる。われ等がアメリカその他を憎むよりも、なほあわれむのは、彼等が、原始以來の愛國主義の舊意識をそのまゝに押し守つて、少しでもその非叡智を悟らないところにある。なぜならかうした愛國主義は、少しも近代思想の洗禮を受けないものであり、今日まで世界人類の幸福を生長せしめない多分の禍根が一にそうした愛國主義の上にのみ存在して居るものだからである、たゞ自國民族の結合を意識にすることのみによつて、自國を他國の上にいつまでも優勝しやうとする。他國の利害がどうであらうと、それは問ふところではない。いな、自國の優勝のみを誇らうとするところに、他國を犠牲とする意志が充分に像感される。だからその愛國主義は、十九世紀以前に溯るところの、帝國主義とその質を同じうするものでなければならぬ。もし世界すべての民族が、たゞかゝる民族意識のみによつて、その既得した權利に割據するとする。しかも世界の限りある土地は、それぞれ限られた民族によつてすでに占有されて居る。そしてそれ等の民族意識が、本能として自己の民族の、他に對しての優勝を、或は領土の上に、或は富の上に傲らうとする場合には、そこに必然として起つて來るものは何であらうか、云ふまでもなく、それは何等かの民族的闘爭以外に何ものもないではないか。帝國主義の開展の外、何ものも無いではないか。これが廿世紀初頭の、世界大戰を惹き起した重な根據である。しかるにアメリカの、今度のやうな傍若無人な無知の態度は、明らかに、十年前のその帝國主義を、少しも修正されずに表現して居るものでは無いか。そしてそれは資本的帝國主義侵略の前拂ひとしての、小手調べの一種ではないか。しかもそれの惡いことは、現代のやうに、世界主義、人道思潮を主潮とする世界において、それに背を向けて、平氣ですまして居るその非聰明

である。もつともそれは、アメリカが、一九一八年において、大統領ウヰルソンの創意した國際聯盟までを、平氣で蹴飛ばして居る心理にもいくらかわかるのではあるが。

○

かつてその創立の始めにおいて自由の國であり、その後紀においてデモクラシイの發源地であつたアメリカは、今や資本的帝國主義の泥靴によつて、すつかり自分の顏をふみにじられて了つたのである。といつて、われ等は、日本人が新たに排斥されたゝめに、アメリカを改めて指彈するほどの胸の狹いものではない。アメリカの國民が殊に現代において、自分の資本的勢力の享樂に悉く耽溺し、その勢力を利用して、一切の欲望を世界に向けやうとする無知と暴虐に公憤するのである。そしてさういふ帝國主義を裝飾するところの、愛國主義の本質を侮蔑するのである。

○

アメリカの愛國主義とその他の愛國主義を問はず、今日までのいはゆる愛國主義の禍は、それがいつも理知と叡智から派生されずに、少しも理知に反應しないところの、反射的感情からのみ出發することにある。たゞ反射的感情である。それが敵國の存在によつてひき起された場合には、當然に極端な憎惡感となり、その結果、戰爭そのものに落付く。いな、多くの愛國心なるものは、假裝敵國の存在を必然にするところに多くの效用と禍が含まれる。そしてその憎惡の觀念が强ければ强いほど、なほ愛國心が盛んな證據であると思はれる。で、すべての國家に、それ〴〵强烈な愛國心を與へるとすると、その結果は、互に相搏つて、お互ひが絶滅するところへ落ちて行かねばならぬ。それは現代の人類が、お互ひを押立て行くために、お互ひを愛して行く教養と、全く背中合せの上に立つものでなければならぬ。

けれども現代までのかうした愛國主義が成り立つには、またそれを成り立たせる必然の理由があつたのである。即ち、これまでの戰爭といふものは、多く王者や資本家が、帝國主義の領土慾望や貨物販路を擴める必要から、無理にも戰爭をせねばならぬ。けれども、それは一般民衆にとつては、決して好ましい利益を與へるものでないから、どうしても戰爭の發動者は、まづ民衆の叡智と判斷を奪ひ、しやにむに、その敵愾心をあをり立てゝ、戰線へおどり込ませねばならぬ。あらゆる刺激、あらゆる煽動をもつて、その憎惡心をいやが上にもあをり立てねば

ならぬ。敵を愛するといひ、殊に戰ふ場合のフエヤ・プレエといふ如き觀念さへもを悉く封じて、たゞ、敵に向ふに敵、目に向ふに目を以てせしめる。飽までも殘忍であらしめる。さういふものを愛國心の美名をもつて、かざり、彼等を目がくして兵器を採らしめた。

○

なるほど現代では、民衆の幾部分は、長い間のさうした特權者の魔藥から目覺めた。もう笛を吹いても容易に踊らない。けれども、また、まだまだその魔醉から醒めない多數がそこにある　絶えず假裝敵國を夢想に作り上げては、しきりにその憎惡心をすり磨いて居る。そして一寸した暗示さへ與へられれば、周圍の一切の事情をかへり見ずに、夢遊者のやうに無考へな封建式行動に移つて行く。これはどこの國にもある。そしてすこしでも聰明がそこへくゞり入る隙が無いのだ。たとへば、少くとも現代では、すべての民衆意志感情の發表が言論にある。もしそれが外國に關することならば、言論と共に、外交的方法にある。決して野蠻な實際的行動にはない。なぜなら現代は一切合法の時代である。個人個々の意志による實際行動は、決して民衆意志の合法な表現ではない筈だからである。またそれは、憎惡的感情の直接な發現ではなく、どこまでも合法な、合理的な理論によつて解決さるべき筈だからである。少くとも、實際行動を含む一切の暴力は、野獸群居時代の意志表現でなければならぬ。然るに今日は、人類が、人類意識をもつて生存する時代である。

バアナアド・ボサンケ教授が、かつてイギリス國民の合理的機能を論じてかういつて居る。歐州人の意見によれば、イギリス國民といふものの教養には、缺點がある。ことにそれが、論理的機能において根本的に缺けて居ると云ふのだ。それと、もう一つは、イギリスでは政治と、教化の間に、殆んど本質的關係を持つて居ないといふのだが、これは少くとも、イギリスの學問家には全部承認されて居るものであると。

○

われ等は排日問題に反應してわが國に起つたところの、いはゆるわが國民の諸種の愛國的行動において、果してボサンケ教授の説いたやうなイギリス國民の缺點が、わが國にも起らなかつたと斷言し得るであらうか。殘念ながら、われ等にはそれを否定するほどの根據が無かつたのである。

それは即ち前世紀的愛國主義の殘影である。一體現代にあつ

ては、愛國主義すらも、一切が合理性の展望によつて妨害されねばならぬ。少しも理性を反應しないところの、センテイメンタルな感情の放射は、その感情者の犠牲さへも無駄に終らしめるばかりか、結果に重大な害毒を残す。ことにさうした感情の持主が、正直であるが、それだけ幼稚で單純であるために、その感情を表現する方法が、いかにも時代錯誤な、幼稚極まつた場合が最も多いからである。排米の行動に對してもまたさういふ種類の興奮が決して少いとは云へなかつた。

○

いわゆる憤死者の續出したことも、どこまでも賞賛されない流行であつたと思ふ。われ等は、いかなる場合にも、死よりも生を採ぶ。「一つの主義の爲に死ぬことは、もとより惡いことでないかも知れぬ。しかし、恐らくは、一つの主義の爲に、その上にも生きて働かうとするのが猶尊とい」、かういふ歐洲の、哲學者の揚言の方に自分はやはり心から團扇を揚げたい。死ほど強いものは無いといふが、われ等は、やはり生がより強いことを感ずる。第一今日は、一人數人の憤死によつて目ざまさねば、民衆が、物の不正不義に氣が付かないほどの亂暴な時代ではない。むしろ死んでもらう刺激よりも、生きて努力してもらふ方の刺激を忠實に強く享け入れるのだ。一體、人類が感情的に興奮して、死をすぐさま連想する事實は、いくらかその國民の神經衰弱を示すものである。もとより憤死の思想は、東洋にあつては、西洋思想とちがう歴史的倫理觀によるものであるけれども、それにしても、その倫理觀が、すでに幾分の世紀末觀念を指示するものでなければならぬ。われ等が、どんな自殺に對しても、容易に共鳴し得られぬのはその爲めである。もし日本を大きくしやうとするならば、それが爲めに死なうとするほどの情熱を持つほどの人が、生きて奉仕することがなほ大切になるからである。

○

米貨排斥にしてもまた同様なことが言へる。米貨のみを單に排斥することが、何故に奢侈の風俗を防ぎ止め得るといふのであるか。さらば排日問題が起つて、始めて奢侈の事實があつたのであるか。單に米貨のみ防いで、イギリス、ドイツ、フランスのそれが輸入されても同じ奢侈が生れぬといふのであるか。もともと奢侈と排米とは、箇々別々な理由から起つたものである。その國民生活から起る根深い奢侈の問題を、偶然の排米觀念に結びつけやうとする。そこに叡智の缺乏がある。その結果

が當然、米國の非議を判定する正しい土台を、悉くぐらつかして了ふ。そしてその當面の奢侈をも、また排米の目的をも、悉く正しい批判の下からのがれさせて了ふことになる。感情の混雜である。またアメリカ映畫の非藝術なことは、排日があつて始まつた話ではない。自分は思ふ、アメリカの活動寫眞ほど、アメリカ人の荒つぽい大ざつぱな性格をよく現はしたものはないと。が、今まで始めて目が覺めたやうに、米畫を排斥するといつても、今日までそれを米の飯のやうに見て居た、わが國民の觀賞心の本質をちつとも塗り消す材料にはならないではないか。ガンヂのやうな立場とか、奢侈禁止もしくは國產奬勵といふやうな、經濟上國家上の論標を別とする。有無相通ずる公理を持つ交通貿易の今日のやうな時代に、輸出入を單なる小感情の發作で左右しようとする見解はどうしても幼稚であることを免かれない。

○

詮ずるに、アメリカの問題に對しては、誰でもが重大な問題だと唱へる。もしそれが重大であるならば、なぜそれを重大な本質として、何よりも重大な、緊切と、全局の上から考へぬのであるか、たゞ反噬的な小センテイメンタリズムや、末梢な小感情の放縱な發動だけにうち任して、それほど重大と思はれることの事件の收穫が果して收められ得るものと考へるのであるか。それはアメリカの正義不正義が問題とされることよりも、むしろ、日本國民そのものが、どれほどの貫目を持つかを試驗される答案であつたのである。その意味では、憤死者や、耳隱し排斥や、ダンス劍舞から始まつた感情が、國旗奪走に終幕したのは極めて當然な話である。然るにさうした悲喜劇の終幕までを、少しも怪しますに、自然の國民感情の迸出であるとして眺め、それを痛快として喝采して居たところの、一般社會感覺にも、また自慢されない、何等かの頭腦の不透明さを感じるのであるが、しかし、現代の國民が悉くかうした無邪氣な考察を持つ人々のみであるとは、自分はどうしても考へたくない。

少くとも、かうした感情發露を、國民の國際意志として代表するものだといふやうな史實は、もうこれだけで打ち止めにしてもらいたい。日本國民の感情は、もう單純から深刻なものに移るべき時期だからである。もし、外交多難な日本が、今までのやうに、アメリカ、ロシア、ドイツ、支那、と刻々に、つぎつぎに起つて來る對敵感情にのみ引づられ、交渉的にのみ日本を考へて居た日には、いつまで經つても、日本が生長する機會がない。かへつて神經のいらだちのみによつて興奮されて、遂には

神經衰弱でしんで了ふ外はないであらう、またアメリカなどに、實質的に報復しやうなどといふのは、アメリカの野蠻さまでに、日本を野蠻の地位に引き下して行く事である。要するに他國の意志を主とし、自國の生存を客として居る限りは、いつまでゞもこの境涯を脱し得ない。それでわれ等の云はうとするのは、日本人は、日本が何であるか、いかにあるべきかを主として考へよ、日本に還れと云ふことである。先づ日本自己をよく見よ、たゞ一切の立場を日本に置き、そしてそれを至局的な叡知と聰明と眞理の基調から照せといふことである。またその國その國の、刻々の氣分や事情に即する機會主義を蔑視し宇宙の永久に通ずる理法から、一切の世界を監視し、批判し是正して行けといふ事でもある。

大國民たる愼重の態度

法學博士　渡邊鐵藏

排日法案も愈々七月一日から實施されることになつたが、排日問題は多年の懸案であつて、米國が遂に今回のやうな決定的方法を執るに至つたことは種々の原因もあらうが、第一には人種的の偏見、殊に米國に於ける日本人の社會的及び個人的生活の方法が、米國人の氣風に染まないことが最も深い根柢を爲して居るのであらう。第二には西部亞米利加殊にカリフオルニアに於ける日本人の經濟的發展は、單に米國の勞働者の反感及び嫉妬を强めたのみならず、一般に米國に於ける日本の經濟的勢力の增進を恐れたにも依るであらう。第三には之等の事情に依つて將來政治上の紛爭を生ずることを惧れて、我移民の移住地に於ける利害關係が、日本の政治上の活動を決定せしめる程重要のものとならない中に之れを阻止せんとする途に出でたのであらう。震災後突然之れを決行したことは、震災の損害の甚大なる爲に、我國力が疲弊して居り、且つ國民が復興に忙殺されて居る故に、此間に此難問題を解決することは、米國としては最も好機會と考へたのであらう。事實排日案の傳へられた時

も、政治家は政爭と、選擧の準備のみに熱中し、帝都の市民は又復興問題に沒頭して居る有樣であつて、此重大問題に對しても意外に冷淡な樣子であつた。併し時を經てぼつ〳〵と諸方に對米批難の聲が起つたが、排日案は議會を通過して、將に實施せられんとする時機になつて、諸々に外見熱烈なやうな排米の火の手が上つた。諸方に催された日米問題に關する演說會の如きは、固より輿論の現れであらうが、言論を外にして、正義人道の觀念より排日案に對して戰ふに非ずして、單に感情に驅られ、日本人特前の敵愾心を發揮して、小さな滿足を買はうとするものゝ現れたのは遺憾である。

彼の帝國ホテルに於ける侵入事件の如きは些々たる事であるが、英米には重大な反響を起して、我國人か外國人に對して非常な暴行を加へたやうに傳へられたとのことである。國旗掠奪事件の如きも、固より甚しい惡感情を抱かしめたに相違ない。抑々外交の問題は纖微の中に重大なる轉回を爲すものであるから、外交關係の沿革、目前の問題の重要の程度、及び國交關係の變化か國の經濟、政治、殊に國の運命に及ぼす影響等を熟知する地位にない者、若くは之等の點を考慮する能力のない者が輕擧盲動する時は、寧ろ意外の惡結果を生ずる恐れがある。今回の問題の如きも、一時の輕忽な、侮劣な報復手段を執つて、一時的な感情の滿足を買つて済むやうな易しい問題ではない。併し國交關係は屢々小事か大事となるのであつて、心狹き、世間を理解せず、國狀をも、自己の行爲の結果の善惡をも判斷する力なく、且つ自己の一時の激情をさへ抑へる力のない者が盲動したゝめに重大な問題を惹起して、國家に禍を及ぼした例は我國にも目前に橫はつて居る。近來外交は官僚のものに非ず、國民外交でなければならぬといふ說が行はれるが、正義と國家に基いた輿論こそ國民外交であるが、或る個々の國民か自己の感情に任せて報復的直接行動を執ることは、寧ろ屢々國民に對する大なる反逆者となる結果を生ずる。內外の情勢に通ずる有識者の愛國的行動は、場合に依つて必要であり、又それか火の如く炎ゆることに依つて國家か救はれ、國運の進展した例は歷史にもあるが、言葉は甚だ惡いか、市井の匹夫か輕擧盲動することは百害あつて一利なきものと云はねばならぬ。

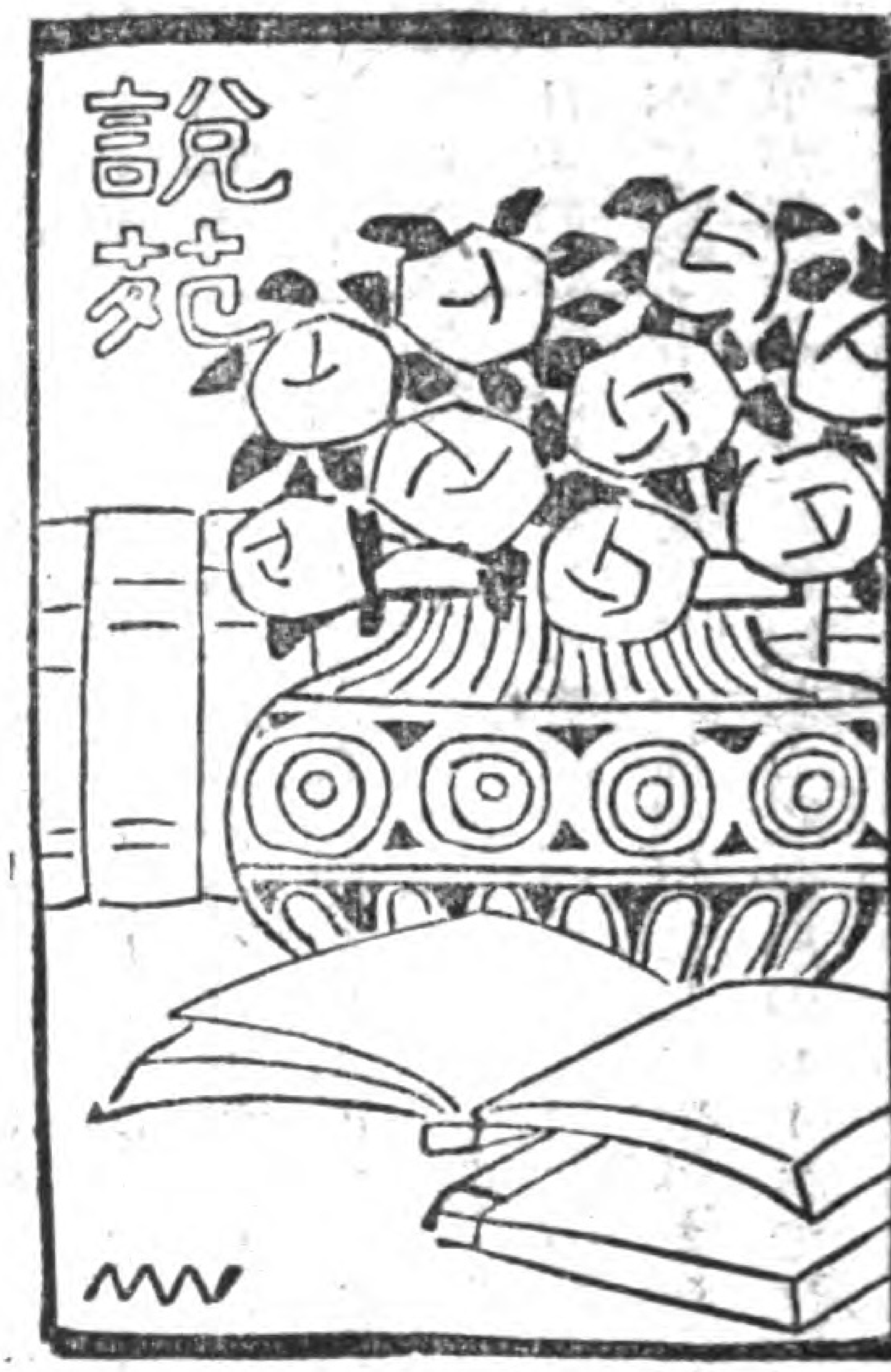
既に排日案の實施の決定した後に於て、排米運動を起すとなれば、經濟戰を行ふか、砲彈戰を行ふか、二者孰れかの決心を定めた上でなければ、盲動することはならぬ。彼の米國製フィルムの映寫に反對し、米貨ボイコットを主張する者は、果して米國に對して經濟戰を遂行する決心を有するか。僅少の米貨排斥を行つて、米國かこに對して生糸のボイコットを行つたら何

とするか。我國が棉花を米國より買ふことを止めても決して米國は驚かぬ。寧ろ我國の紡績業の受ける打撃の方が甚大である。敵の小指を切つて自ら兩手、兩足を切られるやうな愚は學ぶことが出來ない。一般貿易に於て、米國が最も重要な相手國であることは何人も知つて居る筈である。殊に經濟戰を行ふことは、結局之れを實戰に導く結果となるのであるが、今回の問題は果して國運を賭して爭ふべき事であらうか。或は米國と實戰に相見えることを厭はない者もあるかも知れぬが、勝敗の決は別として、經濟戰をするのさへ十分の熟慮を要するのであるから、遼東の野に戰ふと異り、太平洋を隔つると雖も、直接に世界の最大強國と我國とが、眞に雌雄を決せんとする一大戰爭を行ふとなれば、固より輕々に決斷し得べきことではない。彼の帝國ホテルに紛れ込んだ者や、婦女子の髮にまで反感を持つた者は、對米問題に對してどれ程熟慮し、如何なる決心をしたのであるか。小供の喧嘩のやうに理屈もなく腹立まぎれに相手に唾を引つかけるやうな行動を爲すことは、國家を重大問題に面して寔にはしたないことではないか。男子は動くべき時には動き、然らざれば冷靜でなければならぬ。國家の大事に當つてはそれが猶更必要である。國家は有機體である。其腦髓が働かないのに、手足や指先が勝手な働きをしたのでは、之れを人間に譬へれば、國家が夢遊病に罹つたやうなものであつて、何處へ行つて溝や河に陷入るか知れぬ。甚だ危險千萬である。併し幸に我國は腦髓が健全であると思ふから、指先や爪が一寸躍いても別に何んの影響もなく、又再び態度堂々として大きな舞臺を歩むことであらう。

今回の問題は無事に終熄しても、我國の人口問題は當然何等かの形に於て解決を要求する必至の事實となつて現れるに相違ない。或は工業、貿易、海運の三つの經濟的解決方法に依つて國民經濟の需要を充し、增加する人口を國内に於て養ひ得べしと考慮する者があるかも知れぬが、如何に此方針に努力しても固より之れを完全に遂行することは、日本の富源、科學の力、資本力、國民の能力等を考へて其目的を達し得べしとも思はれない。或時期に於て當然人口問題の解決を要する時機は來るものと思はねばならぬ。經濟的海外發展、移民等は我國の必然の運命である。併し白人濠洲、米國の排日の強調される今日、我國民が最も抵抗の弱い方面(リースト・レジスタンス)に溢れ出ることは止むを得ないことである。固より各國、各人種の現在の秩序及び利害は勿論、第一に尊重せねばならぬが、或國民が經濟的、政治的に現在支配して居る地域は、現狀を以て絶對的正義に合するものとは必しも斷定し得ない。將來神意に副ふために、余りに富みたる者、

惠まれたる者が、惠まれざる者、苦しめる者に妥當な讓歩をなし、便宜を與へねば收まらぬやうな機會が生ずることは、丁度資本主義に對して社會主義の思想が對抗したやうに、國際間に於ても免れぬことであらう。或國家が余りに自國の利益のみを無限に主張して、他の利害を顧みねば、何人が見ても人類共榮の正義に反するやうな方策を執るならば、惠まれざるものは、譬へ弱しと雖も力を以て之れに對抗するやうに至るかも知れぬ。諺に背に腹はかへられぬと云ふ。他人が自己の利益を擁護するに飽き足らず、更に弱き者の咽喉を扼せんとする如きことがあれば、固より何時までも冷靜であることは出來ないかも知れぬ。今回の米國の執つた手段は自衛手段と云ひ得るであらう。併し將來我國民の生活問題より他の方面に適當な經濟的發展を求めんとするに當つて、若し米國が之れを防害するやうなことがあれば、我國民は必しも冷靜であることを得まいが、今回の排日案に對しては、之れを國運を賭すべき重大事とも思はれぬ。又それにしても前に述べたやうに無知年少の徒が區々に盲動をなすべきではなく、國民は宜しく帝國議會、政府の言動並びに內外の事情に通曉せる識者及び重要なる言論機關の言動に聽從すべきである。





涼扇雜俎

竹内大三位

一、透かし扇

歐米で廣く用ゐられてる夜會扇には薄地の羽二重、又は更に薄地なるシフオンなどを地絹としたものが少くない、之等は輕く翳(かざ)した時、朧氣乍ら其れと或る物を認め得るだけに透かして見える事は勿論である。別に花鳥や唐草模様などを透かして仕立てたレースの類がある、それには美しい小粒のミットを巧みに飾り附けたものも有る。こんな種類の扇は涼風を招致するばかりが目的で無く、既に冬の扇と名に呼ばれて、眞の目的は別にあるだけ、風は普通の扇の半分、或は三分の一位しか出ない事も亦復た勿論であつた。

日本でも古くは冬の扇と名に負ふものが有つた。其れは後に書く事として、寛永、正保の頃には、お國歌舞伎を見る時や、遊里に這入る時などに、編笠でも外が充分見える様に、目の所へ二つの小穴を明けたのが一しきり流行した。元來編笠は笠と言へど萱笠や傘とは少しく形も異つて、寧ろ帽子に近く、雨降りには身體は勿論、頭一つさへ濡らさずには濟まされないのだから、まア一種の帽子と見るのが穩當であると思ふ、更に一歩を進めて頑固な翳と考へる事も出來るのである。

昔支那の貴人達が使つた大形の團扇には、中央の所に鶴の卵程な大さの穴を明けたものが有つた。今日東京に於ても美術品としての龍宮の美姫が携へてる團扇などに、此種の穴の有るの

を見受けるのである。あの團扇は翳の柄が短く成つたまでの、一種の日光避け團扇であり、顏隱し團扇であり、又今日お年賀に携帯する白扇の様に輕い儀式的意味を持つた裝飾品で有つたらう。日本の檜扇も或る時代には確かに顏隱し用として婦人間に使用されたである。セクスピヤの『ロミオとジユリエット』で第二幕目の第四場では、ジユリエット姫の乳母がロミオと話する時、大形の團扇で顏を程よく隱したり爲やうとするのを、横合ひからマーキユシオに冷やかされる所がある。即ち英國でもそんな風習が行つたのである。近年は日本でもちよい〳〵見受ける假裝舞踏會は、歐米では隨分盛んなものらしいが、あの時使用する目かづらも寛永正保頃の穴明き編笠も、殆んど同じい様な意味合ひのものである。透かしだらけなレースの扇も時と場合に依つては一種の目かづらと成ること言ふまでも無い。支那で古く『便面』といふ團扇が有つて、それは顏を蔽ふための扇であると説明してあるから、即ち日本の穴明き編笠と同じい譯のものであつた。

日本の普通の扇にしても地紙から下は、其の骨の五本にせよ十本にせよ廿本にせよ、一種簡單にして素朴な透かし模様と見る事が出來る。之れに對して夜會扇のレースで造つた透かし多いものは、地紙から下の骨は檜扇の樣に隙間無く並んで居る。之れは人間自然の要求とでも言ふのか、一寸注目に價する事と思ふ。

昔、平清盛がまだ少壯無賴の時の事である。晴天の日でも、細鼻緒の高足駄で都大路を横行濶歩したので、口さがなき京童共は之れを冷笑して『高平太』と仇名を付けた。流石強情な平太の清盛も之れには少々閉口したものと見え、それからは他に顏を餘り見られぬ樣に、路行く時は必ず扇を開いて顏を隱して居た。然るにその扇の骨の間から人一倍立派な鼻が時々小端を出して居るので、京童共は再び『鼻平太』と仇名を改め、相傳へて一斉冷笑したといふ話がある。しかも此の扇を以て彼は後日、海に沈むべき入り日を招き上げたといふのだから面白い。

歐米に於ける夜會は冬期の夜の長い頃に行はれる。絹レースの透かし扇は、そんな時逢ひたく無い人と擦れ違ふ際などに一寸翳したり、又はストーブの火の熱きに過ぎる時、一寸顏の前へ出したりする位のもので、風を招く事には大小幾つものモータフアンが有るから關係が極めて少いのである。

日本で冬の扇といふ言葉は古くから有つた。暑い夏の日には實用向きとして輕便に造られてる紙扇即ち其の頃の『かはほり』なんどを略式的に使用したに對して、冬の間は本式に重い大製な檜扇や杉扇を使用したから、之等の板扇を指して冬の扇と

言つたのである。『大鏡』には「冬の扇を數に取りて云々」とあり、『枕草紙』には「冬の扇は、あかいろのそめはぎ、からぞめ、または白きにつくりしもよし。つらぬきざまはむかし」などゝあるし、『嬉遊笑覽』には「冬にも女の扇持つは顏を隱す料なり」とある。それから支那にも冬の扇が有つたらしい。『西京雜記』には「天子夏設羽扇。冬則設絹扇。」とある。それで今日自分共の耳には一寸不思議な樣にも聞かれるほどの冬の扇が、和漢洋とも有つたといふ事は、扇の或物は、涼風を招致するを以て專ら目的とするに非ざる事を明白に説明して居るものである。自分共は習慣として、扇と言へば直ぐ、涼風を出す器具と想ふのであるが、それよりも、優美なる女性的の裝身具と考へれば善いのである。龍宮の美姫にしても、あの大團扇で顏を隱すと共に時々はその中央の穴から覗き見をしたものとも思はれるのである。

杉扇の事を透扇と書いてる古書もあるから、檜扇や杉扇が進步して、扇面に裝飾的な一種の透かし模樣が出來たものらしく思はれる。或は紙扇の骨に當る所に隙間を造つたのかも知れない。あの邊は風を出す事には殆んど無關係だからである。五節の舞姫の顏が、扇から透いて見えてる圖が有つたと書いてる本が昔に在り、『嬉遊笑覽』には「板を彫り透かしてすゞし（絹の一種）など張りたりとぞ」ともあれど、其後製造法に於ても時代に於ても不透明な處が多いのである。斯くて今日の日本に透かし入りの扇の殆んと全く跡を絶つてるのは言ふまでも無いが、その原因としては、一般に風を招くためにのみ眞面目に扇を持つことと、又一つには扇の骨と骨との間が頃合の透かしを爲してるものなのだからではあるまいか。

翻つて海外の各國を見れば、そんな透かし扇は少しも珍らしくは無かつた。扇と言へば透かしの物がやがて半數位も有るとさへ思はれる歐米の事は申すに及はず。ジャワの水牛扇は水牛の皮を張つて水牛の角を柄としたものだが、之れも針の樣な小さな穴の連續で一種の模樣を現はしてるし、印度の白檀扇は白檀の細根を簾か穗竹の垣根の樣に揃えて、籐の椽と柄を付けて團扇としたのだから、動搖と共に白檀の香りは充分に出るが、風は普通の扇の半分位しか出ないものである。安南の竹扇といふものも、竹を薄く削つて網代に組んだ目毎に丸藥の通る程な小さな穴が出來て居る。又支那には頗る薄い絹地で張られた團扇が數種ある。之は一面に清風を求むると共に他の一面に於て蚊蝱や蒼蠅の樣な飛虫を拂ふの意味をも持つて居たものと考へられる。十六羅漢の内の跋陀羅尊者の團扇が、中央部たる芭蕉の渦卷きから上下左右へ粗らに孔雀の尾羽を『相事』の如

く出してある所を見れば、正に風を招く事よりは飛虫を拂ふ事に重きを置いた團扇である事が知られるのである。

東京に於ても昨年あたりから杉木の骨に羽二重を張り、光澤美しい象牙の親骨には彫刻が施してある扇がぽつ〳〵流行しかけて來た。それは草花などの模樣の有るなしに係はらず、岐阜提燈の樣に半透明に透かして見える。即ち清風といふものには少々不忠實な扇だが、扇その物の感觸から直ちに凉爽の氣分を求めてるもので、從つて贅澤なものと言はねばならぬ。いづれ尚ほその上にフランス扇の樣に、骨の全部に曲折を附けたり彫刻を施したりするなどの贅澤事も遠からず見習ふことであらう。若しそれそんな扇に肉筆の繪でも描けば、一本百圓から四五百圓の扇が其所ら邊の華奢な女どもが持ち歩く樣にも成るであらう。

二、東洋扇の歐洲輸入

ペルシバル氏の『ゼ・フアン・ブツク』は千九百二十年ロンドンに於ての出版であるから、扇に關しては世界を通じて恐らく最新の著述であらうと思はれるし、日本へも最近本が到着したばかりであるから、その中から東洋の扇が始めて歐洲へ輸入された時の話を少しく爰にお取次ぎして見たい。以下即ちそれである。

この二百五十年が間歐洲扇の大部分は半圓形で有つた。之等は支那から輸入された事は確かである。それは支那は扇の故鄕即ち發生地原産地であつて、ポルトガル人に依つて十六世紀の始め頃に歐洲へ輸入されたのである。當時の航海はアフリカの希望峰を迂回するので、甚だしく長く又頗る危險なものであつた。がそれでも多大の利益有る事が充分明白に成つたので、エマンニエル王が自分の艦隊の内の八艘を護衛として其使節を北京政府へ送り、而して或る制限の下に通商の許可を得たのである。其の結果として廣東が葡國の爲めに開港された、が英國へは當時尚ほ未だ支那と直接の貿易を爲すに到らなかつたのである。

その頃は襞に依つて折り疊まれる東洋の扇に中々高價で、且つ稀に在る贅澤品として貴族や富豪の間に珍重された。チヤールス二世の時、皇后はポルトガル人だつた關係上、比較的容易に支那の漆器や飾り棚や壁紙などの技巧と言ひ色彩と言ひ光澤と言ひ眞に奇妙といふより外無いほど珍らしい物をも少からず手に入れる事が出來た。而して其れらは當時に於ける貴重なる流行品と成つた。扇も勿論其の中の一つであつた。

一千六百六十四年にエヴエリンが巴里のゼスヰット信者達から、東印度の船に依つて運ばれたる珍らしい品物を、どんなに

苦心して集めやうとしたかを詳しく語つて居る。其中に出て居る扇は、現今英國婦人達の使用してゐるものと略ぼ同じくて今少し柄が長いのである。當時之等の品は英國へは僅少の輸入があるばかりだつた。二つの東印度貿易會社の結合に依つて、支英兩國の間に直接の通商が出來たのは漸く千七百三十五年から始まつて居る。

それから千八百三十四年まで約一百年間は旭日昇天の勢ひを以て英支貿易は、重に廣東を通じて盛大に行はれた。歐洲で扇が上流の社會に流行するにつれ、東印度船會社は顧客の喜び相な、極東製の玩具、裝飾品など專ら仕入れて來た。茶、磁器の偶像、茶卓、それに附隨する諸道具。又印度からも紙や扇が來た。それらの品々は殆んど皆が即坐に賣り切れたほどだつた、それで居て大體頗る高價な品で有つたけれども、好奇心やら東洋研究熱やら、種々の事情も手傳つて、上流社會から盛んに流行し、扇其他は種々の儀式の時にさへ使用されるに至つた。ただ然し宮廷に於て用ゐる事だけは正しい事とは認められなかつた。

くだ／＼しい直譯めいた眞似は之れ位な所で打切つて、當時の支那扇は品質や裝飾などの精巧緻密なもので有つたが、それが藝術として幾何の價値あるか、又東洋に於て美術品として幾何の價値を有するかは、歐洲に於ては買ふ者にも賣るものにも殆んとわからなくて、屢々にして支那人の鑑定家へ持ち込まれたらしい。其れは貿易が盛んになるにつれ、輸出向專門に製造された扇は、唯だ徒らに緻密な細工や不必要と認めらるゝ手數をかけたものが多く、最初に歐洲へ輸入された物とは、其間に品質にも氣品にも大差の有る事が追々に購買者の間に發見されて來たからであつた。色彩の鮮麗なる所謂マンダーレンファンでも象牙骨の上に畫かれてる顏の數に依つて價が高かつたり安かつたりしたといふことである。

十八世紀に輸入された扇は屢々刷毛を使つてインキで下繪を描き、繪の具でそれを塗りこめてあつた。又銅版で印刷して必要な外輪だけを取り、次ぎに手で彩色してあるものが有つた。此の銅版印刷はゼスキットの傳道師が支那人に教へた技術に依るもので有つた。それは勿論立派な出來の物では無かつたらうけれども、繼續して今日まで發展するに至らず、何時消滅したかさへわからないのだから甚だ殘念である。

三、扇合せ

扇合せの遊びは昔八月初秋に行はれた、今日扇の展覽會や陳列會が六月早々開催されるのは、賣るのが目的だからでも有ら

う、それでも維新當時の志士や徳川時代の學者の筆蹟など、時々珍らしいものを見せるのは惡く無い。昔のはお互に持ち寄つたもので優劣を定める事、蟲合はせや香合はせなど〻同様である。勿論各自が自慢の所を持ち出すのだが、圓融帝の頃から始まつたらしい。扇面の極彩色たるは言ふまでも無く、或は唐渡りの羅を張り、或は漢手歌繪に繡をなし、或は又螺鈿や金銀金具の美々しい小筥に入れるなど、華麗と贅澤の限りを競つたのである。此遊びが專ら流行したのは藤原氏の盛時から平氏滅亡の頃まで〻あるらしく、鎌倉以後は、秀吉が一度催せし事を傳へ、徳川時代へ下つてからは天明年中江戸墨田堤の茶舍に、開催された事を聞く位に過ぎない。曾て日本三能筆の一人として知られた藤原行成卿は、人皆が扇を、金銀珠玉の麗美に飽かして出すが中に、黒塗り細骨に、黄也の香紙の下繪ほのかに見ゆるを張り、樂譜の一節を眞と草とで書いて出した事がある。所が天皇は其の扇を最優勝のものとして、深く叡感あらせられ、手づから御文庫に納められたと傳へるのであるから、當時の扇合せは華美の極を盡して反つて質素が喜ばれるに至つたものらしく思ふ。

扇切りは武人の技藝、扇引きは、十露盤引き枕引きと異り、甲の掌の扇を、乙が引き取つて其の掌を打つ、外づるれば乙は甲と代はるのである。扇流しの遊びは足利の初め頃に稍や盛んで行つたらしい、將軍が嵯峨の天龍寺に御成りの時、一人の小姓が誤つて扇を落したのが、風に翻つて大堰川の波に揉まれつつ流れ行くのを風情ありとして、我も〱と面白がつて同行の人々が扇を流したのが其の始まりであるといふ。或時は曲水の宴の如く詩歌をも詠んだらしい。徳川時代に這入つてからは紀國屋文左衛門なども、之れを行つたと花柳界には傳へて居る。將軍の御成りには必ず扇流しの屏風を吉例として立てたのだがそれは曾て五山で行つて以來一種の慣例と成つてるのだといふ。

謠曲には扇拍子。『拍子扇』小春髪結の段には、シテ黒髪の亂れて今のうき思ひ、ツレ身には泣かねど氣につかへ、胸の涙の玉くしげ、向ふ鏡はくもらねど云々とある。芝居の囃子の張扇は鼓に合はせて打ち、落語家の張扇は口から出まかせに嘘八百も眞事しやかに叩き出す、古人は繪そらごと〻言ひたれど繪師よりは文士に此事の多く文士よりも口舌の人には更に多い、瓢簞より駒を出し、吐月峰より龍を出せども、此の張扇は風を出さず。手品師の扇は元より形一定せず、驛路の茶屋に、手品師とも知らぬ男と饅頭の喰ひ比べして、六つ目位から扇を使ひ乍ら數十を喰はれて悉く降參したといふ話は昔から各地方にちよ

いく〳〵開く。手取扇は一方へ開けば四五片に切れ、更に他方へ開けば又元の一枚の扇として風を出すに宜し。小供の玩具として徳川の中頃より世間に有るらしい。

染模様には扇尾染め、徳川家重の時代に江戸市中は貴賤を通じての大流行を見た。紬地に模様は最近また流行しかけて來たが尙侯爵家の寳物中に琉球紬の美服がある。琉球で織つた白地に、三百年前明國へ送つて時の名工某に紋樣を置かせたものである。それは扇と極樂鳥と雲と花の模樣で、壯麗な感じに滿ちた逸品である。曾て池田侯爵家で見た能衣裳は、厚板白茶地に靑海波模樣へ扇の散らしで有つた、扇には一一秋草や紋所などを描いて華麗優雅を極めたもので有つた。貝には扇貝、蟶即ちあげまきの事も、海扇の事も、車渠の事をも名を扇貝といふは形の似たるに依る。草には扇かづら。團扇かづらは一名を軍配藤顔とも言つて、琉球、臺灣、南支那・印度等の沙濱に生じ長さ六十尺に達するものがある。

鳥取縣には扇ノ山、海拔四千五百尺、近海航行者に好個の目標とされてゐる。伊豫の松山には形の似た所から名とする扇茄子がある。團扇茄子は御馳走の名にて、丸く太りたる茄子を縱に切りて料理したるもの。書院の扇棚は、床の間四十八棚の一、無論扇形である。横濱市には扇町　東京深川區には扇、扇橋、東扇橋の三町。神田區には末廣町。末廣町は町の發展と商賣繁昌を願つての命名とて函館を始め全國の各都市に二十ケ所以上も有る見込み。秋田仙北郡には三本扇村、之れは丸くとの願ひであらうか。日本北アルプスの黑部溪谷には扇澤。專ら茶室で使用される尺扇は地紙六寸、骨の所四寸など定めありて物差しを代用し、能樂舞臺用扇は五流共一尺一寸と定まつて居る。

扇の室は京都島原長松樓すみ屋のもの古くより有名、古名士の扇面書畫を澤山に集めてある。そのかみ徳川の大奥にも有つたのが燒失したといふ。扇子　は芭蕉の異名、有るか無きかの微風にゆらり、そよろと動ける所如何にも春氣に見ゆるより名づけたであらう。東京驛、上野驛其他、及び市中電車の内へ忘れ物の扇と麥帽子は毎年小山を築くのだが、扇は凡そ二千本、中には隨分美しいものがあるといふ。

陸前の扇谷は多門山、大隅の森、富山と共に松島灣の四大觀と言はれる。正岡子規は「海は扇松島は其綱なりけり」と詠んでゐる。鎌倉の扇ケ谷には鹽を以て最も味として滿座の智將を敬服せしめ、一轉最不味として天晴れ男子ならば一方の好大將たるべきにと、再び一同から激賞された、家康の愛妾お梶の局が建立した英勝寺が在る。此扇谷は初めて江戸城を築いた太田

道灌が家宰であつた上杉定正の館が有つて有名だが、刀工として名人の綱廣も此所の人である。『うつし繪の扇ケ谷やこれならん月は海原雪は富士のね』と『回國雜記』にもあるやうに景色も悪くないのである。團扇提燈苔は、その美しい深緑を廣く北半球の各地に分布して、日本では日光、箱根、北海道などに在る。軍配蜻蛉はとうしみとんぼの一種で、中後の四足共に白色の葉狀帯を上足部に持つてゐる、東京府井の頭公園附近にのみ産する。熱帶の扇芭蕉は丁度扇の形にその枝葉を廣げてゐる。

團扇太鼓は南無妙法蓮華經のかけ聲勇ましきにつけても日蓮上人の剛健なる主張と人格とが思ひやられ。日扇上人は文化十四年京都に産れて、一言一句必ず實行した特色の多い革命的高僧であつた。團扇鮫は日本沿岸の海底に住み。團扇河豚は特に腹の皮の能く膨れる魚で、日本近海と印度洋に獲れる。軍書に依れば山鹿流の築城には、堀を扇形に造りて其の要に當る所へ櫓を置く。

最も多く、最も上手に團扇に繪を畫いたのは、昔は光琳、今は栖鳳だ相だが、宗達や文晁や抱一も少くない。浮世繪の濃艶な所では、豐國、國貞、春信、春章なども見受けられるが、春章には春扇といふ弟子、扇里といふ孫弟子も有つた。尚ほ春章が明和七年に出版した『繪本舞臺扇』の插畫を描いたら忽ち賣り切れとなり、版元では酒樓に祝宴を開いた。それは當時としては極めて珍しい事であつた。神社の建築には扇棰。上棟式には扇車を御坐机の後に立てる。船には扇枚。袋物には扇蔓仕立ての開閉自由なのを重寶とする。團扇鯛は又の名を饗笠子とも言ひ。六月には檜扇草花咲き。七月には扇茶の味最も善し。八月より九月へかけては御綿草が花を開く、雌雄異株にして薯蕷科の多年生である。大正十一年九月二十九日の大暴風雨で、北見國沿岸漁村の海扇採りの船三百五十艘が出漁中殆んど悉く難破した。十二年十一月中旬、內田汽船の大國丸が廣東邊で海賊に襲はれた時、之れが救助に赴いたのが扇揚丸であつた。栃には團扇栃があり。海老には團扇海老がある。

四、佐竹侯と雷魚

扇を紋所とする佐竹侯が水戸在府の時からその海に雷魚が獲れた。お國替へと成つて、久保田と稱した秋田市へ行かれた時雷魚もお伴して秋田の海で獲れるやうに成り、同時に水戸の方では獲れなくなつた。雷魚のさゝめの骨即ち頰骨は、佐竹侯の紋所たる扇の形を爲てゐる。

佐竹侯が國に居られる時は、雷魚に於て頰骨の扇形の、要と兩尖端とが三本鎗の如く成つてるのが體內の方へ向ひて居て、

お國の内の泰平無事を表示して居る。が參觀交替で殿樣が江戸へ行つて居て御不在の時は、頰骨の三本鎗が反對に外の方へ向き直つて──長さ一寸二三分はある──殿に御留守を護衛して居る形に見える。

此魚の漁獲期は十一月へ這入つてからであるが、獲れる時には其の前ふれとして必ず沖鳴りがする。如何に晴天の日でも沖合ひに當つて遠雷のやうな、不思議な音響が聞えるのである。『はた〱神樣が鳴つたから、もう雷魚が獲れるぞ』と漁師の女房や小供達が噂をする、と其の翌日には最早その魚が濱へ積み上げられるのだが。その雷鳴は遠い沖合に當つて聞えるのだから、空とも、水面とも海底ともはつきり分からぬのである。兎に角、必ず雷鳴を伴ふので、古來はた〱といふ字に雷魚と書くか又は鰰と書く。言ふまでもなく鳴る神の魚の意である。

雷魚の卵は秋田地方では『ぶりこ』といふ、麻種よりは少し大きい位な粒で、二錢銅貨ほどの大さの玉と成つて中間に藻などが一寸這入つてゐる。此の玉を珠數繫ぎにして乾燥して、翌年の夏近くまで、時折りの食用にする。喰べる時には一寸鹽水へ入れて、後に柔かく煮るのだが、之れを喰ふ時ばり〱と盛んな音がする、鮭の數の子を嚙む時よりも遙かに大きい音で、小供などは此の音を喜んでぶりこを喰ふ。秋田の人達は此音が獲れる時の雷鳴と何等かの關係有るもの丶如く考へてゐるから面白い。其れは二三十間離れて喰つて居るのでも聞えるほど不思議な音である。又可笑しい事には、五七人も一緒に之れを喰ふ時は、同じ室内での話ですら一寸分からなくなる事がある。で、地方の人達は寄席などで下手な藝人が出た時、横向きに成つて此のぶりこを盛んに喰ふ、七八人も一緒に喰べれば義太夫などは大事な所で邪魔が這入り、飛んだ惡落ちがしてめちや〱に成る事もある。

それから雷魚の陰乾しは、昔から地方で燈火の代りに使用されたものである、喰つて見れば其れほどの脂肪氣も認められないのであるが、丁度蠟燭のやうに又松明のやうに、具合能く燃えて行くのである。又雷魚を喰へば三年前の古傷でもおできが再發すると傳へられてるが、一つには可也に美味しい魚なのだから喰ひ過ぎる爲めでもあらう。

雷魚は秋田の外に津輕の西海岸からも獲れる、それは佐竹侯と津輕侯とは隨分仲善しで有つた爲め、或時津輕侯から領地の一部を交換する事と、同時に雷魚の分配をも乞ふて來た。佐竹侯が其れを快諾したに依つて、雷魚も其の領地に附いて行つて交換されたのだといふ。それから津輕領と成つた海から獲れる雷魚は、扇形の頰骨の眞中が下へ潰れて、その形を二つ寄せ

れば津輕侯の紋所たる杏葉牡丹の丸と成る。

以上は秋田の人の話なのだが、昔の本にも、禽獸草木も其領主なり國王なりの個に馴れて、其形や色を變更するに至るものとしてその實例を少からず擧げてるものも有る事を爰に一寸附記して置く。

五、團扇と其扇

今から丁度百年前の文政六年に長崎へ來たオランダの醫師シーボルトには、當時日本の青年俊才が悉く其門に集つたほど、彼は人格者でもあり、醫術以外にも眞面目なる學者であり、殊に植物に對しては熱心なる研究者で有つた。

此のシーボルトの愛妾團扇は、長崎丸山遊廓の遊女であつたのを身受けしたもので有つた。當時の丸山は江戸の吉原にも負けない程盛んな遊廓で、澤山の美しい遊女達は、其の頃日本で唯だ一つの外國貿易の港たり市場たる長崎の一面を飾るにふさはしいものであつた。當時に於ては非常に珍重された、高價な舶來ビラウド、ラシヤ、桟留、更沙などに、金糸銀糸をつけたりした綺麗な裲襠に、目も醒めるやうな寶石やビードロや象牙などを綴つた衣裳に、新奇と艶美と華麗を競ひ、髮には唐渡りの鼈甲や玉などを飾り、そのハイカラ振りには江戸や京大阪から來る紳商も高官も俊才も、皆等しく驚嘆させられたのもので
あつた。

それで月に唐館に入つては九連環の歌を唄ひ、看々踊りを舞ひ、花にオランダ屋舗へ行つては珍陀の香りに醉ひ、蘭語や唐語を巧みにあやつりながら、人を品し戀を論じた。多錢能く散じ長袖能く舞ふと言つた様な當時の丸山のすばらしさは、今日東京の新橋でも柳橋でも一寸想像し難いほどのものが有つたといふ。團扇がそれらの多數美姫才媛の間に在つて一段と優れたものなことは申すまでもないのである。その頃團扇は十九歳でシーボルトは三十歳とあるから、女は女盛り男は男盛りといふ所で有つたらう。

シーボルトの居た出島といふ所は、形の似た所から文人墨客から扇嶼と呼ばれて、我國に於ける最初の、外國人居留地である。普通にはオランダ屋敷と稱して、其の頃には珍らしい西洋風の建築が二三十も並んで在つた。此の島まで橋をかけて規則として貿易商と遊女に限りその出入を許してあつた。今日はすつかり廢れて、僅かに二三の舊屋と扇面形の石垣とが、ありし昔の名殘りを止めて居るばかり。

一說に團扇は元、細川侯の側室であつたのを、シーボルトが診察の功に依つて賜はつたものだと傳へるし。又其扇と書いて

る本もある。

投扇興は寛政の頃から文政あたりにかけて益々盛んに行はれた遊戯である。元は安永年中に江戸の遊び人（或は幇間）にして其扇なる者が、一日午睡から目醒めれは、一羽の蝶が自分の枕邊近く飛んで來て舞ふて居るのが不圖見つかつたので、乃ち戯れに傍に在つた扇の開いたまゝなのを取つて投げつけた、丁度打ち落し得たと思ふたが、蝶は巧みに身をかはして飛び去つた。其の形態の優美なりし所から思ひつき。昔は漢土の投壺の矢の兎角意の如く落ちないといふ事などを聯想して、彼れ是れ取捨折衷の上、造り上げた新案の室内遊戯であつた。高さ一尺位な優美な小形の臺の上に、銀杏の葉を立てた様な枕蝶を載せ置き、一定の席法に依つて定まれる距離から、扇を投げてそれを打ち落とすのである。始めは專ら酒席の遊びで有つたらしいが間も無く廣く家庭に於て行はれるやうに成り、維新前後に一度は廢れて仕舞つたのであるが、明治三十五六年頃から溫泉宿などから閑つぶしに始まつて、比較的上流社會に流行し、今日は日本橋や神田の雜貨店にも其の器具がショウキンドウに見られるやうに成つた。投扇興は畢竟關東で產れた遊戯だが、如何にも關西式なものであり、及江戸時代に出來て居ながら寧ろ桃山式とか藤原式とか言ひたい様な遊戯である。前世紀のクロツクかピンポンの類と見て善からう。

それから面白いことには此の遊びは昔から八月の遊戯となつて居る。即ち暑さもそろそろ去つて、可也に汚れのはえて來た扇に大分飽々が來て、最早無用といふ程でもないが、投げ飛ばしても打ち砕いても餘り惜氣の無い時期であるなどは一寸考へたものである——式亭三馬の狂歌に「此の扇ほしくはやらふ夏過ぎて秋風立ちて雪の降る頃」とあつたのを思ひ起させる——こうした點では昔の人は經濟思想が現代の日本人よりは遙かに發達して居た。それに昔は扇も團扇も日常使用のものは輕便一點ばりの安價品が多く、それらの使用は總てその年一杯に限られて居た事は丁度今日の麥稈帽子のやうな具合で有つた。

「石山の石より白し秋の風」と芭蕉が咏んだ加賀國の古刹那谷寺には、東京の萩寺の萩よりも澤山に椿が在る、それは充分花を見て、後に又其の種子から油を取るといふ坊さんの用意からで有つた。丁度投扇興の扇に似て、今日の麥帽の洗濯も染め返しも利かぬ不經濟なのと甚だ異る所に『國恥』などの原因の小さな一つが潜みはしないかを注意して見たいとも思ふ。

六　武者扇

那須與一の扇の的の話は小供にも大人にも面白く、菊五郎の

舞踊に依つて『襟裾落し』の中へ出れば一層面白い

涼風や與一を招く女なし　其角

我れを招く玉虫出でよ涼み舟　井華

玉虫が扇の的を出しゝ平家の舟の美人の名である事は申すまでもないが、此の名がまた美しくて涼しいものである。昔の本にはこう書いて居る。袖笠がつげる十八九ばかりなる女房の、柳の五つ衣に紅の袴着たりけるが云々、だから其の姿が水に寫つて更に美しかつたであらう。

若し夫れ射損んじたらば、武士の面目にかけても、即坐に腹かき切つて相果つべき覺悟を以て弓を引いてるから思ひ殘す所も無く、南無や八幡大菩薩と念じて矢を放つに於ては、例令それが的に當らなくて其場に切腹したとしても、武士としては決して不面目な死ではなからう。

源氏に弓あらば之れ射て見よ、と出て來た腹の中は「此所までおいで甘酒進上」と平家の軍船が揶揄してゐるので有つて、それが見事に射當てゝ「皆紅に日輪を描き出したりける面扇」は、風の木の葉と翻りつゝ波上に落ちた。敵も味方も、舷を打ち鼓を叩いてやんやと喝采すること暫時がほどは鳴りも止まさりきとある。

馬上の與一は「二十歳ばかりの若武者にて色白く小髭生へ、弓の取りやう、馬の乘り貌、優なる男にぞ見えたりける」と盛衰記にあるから恐らく當時のハイカラ式好男子といふ類で有つたらう。顧て玉虫が平家一族の婦女子の内で、すぐれた美人であつたらう事は亦復た勿論である。

此の與一より更に涼しい話は最後の敦盛であらう。熊谷は老年に近い關東の荒武者、敦盛は都育ちの白面年少の貴公子、それが馬を波間に乘り入れて一丁ばかり落ち延びてる所を、白波さわぐ渚から日の丸の扇を上げて呼び戻すなども、如何にも尋常で涼しい。呼ばれて神妙に戻つて來る敦盛の心事に至つては更に涼しい。禪學か何かで悟り切つてる人の樣にきび／＼した爽やかさがある。光風霽月の韻ひがある。

京都の有名な扇屋御影堂は、敦盛未亡人の創始にして今も其の後裔であると傳へられ、文耕堂と千四と合作の演劇『扇屋熊谷』も其の邊から材料を採つて居るが、古い所を調べて見れば無官の太夫敦盛卿の未亡人玉織姫が後の御影堂たる新善光寺といふに遁入つて尼と成り、傍ら折りし所の扇に、天皇の御惱に際し消伏毒害陀羅尼神呪を淨寫し、祈願を罩めて奉獻したところ、御惱は間も無く平癒したので、天皇もすつかりお喜びに成り、其の扇に『久壽扇』と命名せられ、金襴の筒守に納めさせて再び下し賜ふた。とある。爾來端午の薬玉に準じて水無月に

は御影堂の扇を几帳に懸ける事が、宮中から貴族と順次一般の風習と成つたといふ。

それは後鳥羽帝の建久年間の事だつたが、其の久壽扇は今に御影堂に家寶として秘藏して居る。それを見た人の話に、長さ三尺の三色の絹紐三筋を附けた、十七本骨で花染め平絹の片張り卽ち裏面は骨が露はれて居るので——昔は片張りの扇が多かつたのである。今日朝鮮製の扇に片張りの少からず見受けられるのは、昔日本から敎はつたまゝ尙ほ引き續き改めないものが多いからと考へられる——檜扇や杉扇の僅かに一步を進めて輕便と成りしばかりのものである。藤原時代の扇は大體に於てそんな程度のもので有つたらしい。

此の話に關して奇拔なのは、ギリシヤ神話で有名なツロイ大戰の始めに、勇將アキレウスが婦女の姿に身をやつしてスキロス島のリコメイデス宮廷で、多數の宮女達の間に隱れて居たのを、ユリセイズが發見するのは、丁度敦盛が女の姿で扇屋に隱れてゐるのを熊谷が發見したのと殆んど同じ行き方である事は何人も異議は無いが、スキロスなる地名は『扇折り』を意味するので、ギリシヤ神話のアキレウスやユリセイズが日本へ來て熊谷と敦盛に成つて居るといふ說である。之れは高天ケ原を小亞細亞邊と斷定する木村鷹太郎君の新發見である、ユリセイズ君や熊谷君以上の發見と言ひたい。

も一つ涼しい話は阿部豐後守である。隅田川の大洪水に際し將軍家光以下が並み居る前、衆目環視の中で、見ん事濁流滔々たる隅田川を馬上にして乘り切つた時、將軍家の御機嫌中々に斜めならず、天晴れ出來したり出來したりと、扇を揚げて何度も賞められた。お傍に居た大久保彥左衞門までが嬉しさの餘り頻りに扇を揚げて振り廻はしたから、旣に對岸に居た豐後守は、再び馬上にて泳ぎ歸れとの上意と解釋した。一度こそ運能く乘り切つたれ、最早馬もいたく勞れて出水は益々甚だしいから、再びは叶ふまじ、命は最早無きものと覺悟の上、いさぎよく馬首をめぐらして、濁流奔馬の如き中へ、又もやさんぶと乘り入れた。對岸ではあれよ〳〵と唯だ騷いで居る。

七、笑ひ話

銀座街のとある路次、車も這入らぬ奥に糊喉廳の末席といふが在る、大正十一年十月某日、帝國議會の彌次と貧乏で知られた佐々木蒙古が松永ニコ〳〵なる者と相並んで且つ飲み且つ語る。政談あり、當代名士の人物評あり、美人論あり、支那論あり、俗世間の俗事醜事に至るまで議論風發の勢ひで、皮肉あり、滑稽あり、滿堂の酒客皆耳を傾たてゝ聞き、屢々にして失笑して

は密かに娯樂とし、尻を落ち附けて銚子の一二本は追ひ注文するやうな有様だつた。勿論蒙古を始め一同は禁酒節約を金看板とせる加藤友三郎内閣が頭上に在る事を知らないものゝやうだつた。而して寄席で杯を擧げながら話家を聞いてるつもり、又は酒席へ落語家でもが來て御機嫌を伺つてるかの心持ちで皆が居た。

之れを見て取つた末廣の亭主は蒙古の快談を徳として旁た御機嫌を伺ふべくその室に掲ぐる扁額として其の筆蹟を乞ふた。蒙古は得意滿面の態で、卽時筆を執つて墨痕淋漓たる『揚扇呼酒』の四大字を書いた。それは惡筆といふほどでも無いが彼が雞次ぶりに比べて見劣り、彼が本所に鹿を獲、小石川を獲損んじた怪腕に比すれば一層見劣るものであつた。

永田東京市長が市長就任のまだほや／＼で助役の人選に汗だらけと成つて居た昨年六月六日、日本クラブで大河内正敏子爵を會長とする陶器の研究會『彩壺會』から壺形の扇子を祝はれた。喜んでそれを開いて見ると丈の高い花婿に對して花嫁が見上げてゐる漫畫が描かれ、其の傍らに、扇を紋所とする大河內子爵の狂句が『江戸屋では番頭婿に直りけり』と墨痕鮮やか。市長微苦笑。

一口話。或る老人、大橋を渡り行くに、その中ほどにて橋板の小穴へ杖の先端陷りて、はつと思ふ間も無く杖はするりと河中に落ちて、ずん／＼流れ去つた。老人立ち止つたまま、悠々として腰より扇子を拔き取り、その小穴より河中へ扇子を落し「ははアこんな具合だつたかナ」と。之れこそ落し話。

八、汗の人と愛の人

正金銀行から勸業銀行の總裁に轉じた梶原仲治君は、如何に暑くて汗だら／＼でも扇やハンカチは使はぬことだといふ、而して其の言ふことが善い『いくら拭いたつて出る汗は出るので、それを拭くのは無駄な事です』と、いづれ梶原君は傘無しの時でも大雨の中を自若又は悠然として徒歩するであらう。いくら走つたつて其の先きも同じく降つてるのだから。

遠山立雲翁も扇を持たぬことを以て普通とする。持てば必ず忘れて歸るからである。時計も滅多に持たぬ、稀に持てば屹度時計が休んで居る。龍頭を捲く事を忘れるからである。翁の日ふには『僕は一體無精者でね』と。無精なのと忘れつぽいのと違ふけれども、其の邊若干、翁の脫俗的な面目が窺はれる。自分は昨年の夏中、試驗的に扇を持たないで通して見た。隨分苦しかつた事も少くなかつた、でも意地張つてとう／＼やり通した。物數奇だねと笑ふ人も有るか知らねど、自分としては寳

めて貰ひたい氣持ちなのである。梶原君あたりは熱風砂塵を渦卷く河原の様な東京の悪路も、潜航艇が水中を行く如く自動車を快走させる。屋内に居れば大廈高樓自ら涼氣を湛えてゐるが上に、頭上からも横合ひからも、モーターファンが微風を頃合ひに送るであらう。それなのに未だ暑いと言つて海や山へ避暑もするであらう。から拭くほどの汗が夏百日の間に、指折り數へて何度出るものか、それを拭かなくとも何程の事でも無からうでは無かい。頭山翁に至つては避暑に行つた噂はまだ聞かないが、大隱は市に隱ると言つた類で、胸中は何時も閑雲野鶴を友とするが如きものは必ず有るであらうし、又午前八時から午後四時まで勤務するでも有るまいから、扇が無くとも或は過せるであらう。けれども、普通として俗務に追はれてる一般の俗人は、濕氣の多い炎熱の東京に於て、扇無しで一夏通すことは決して容易でない。自分の昨年は稀に機扇の下に坐つてしみしみモーターファンの有難さを味ふ事も有つたが、今年は扇を二三本づゝポケットへ入れて置いて、忘れた人にも貸して上げたいと思ふ。川柳子は

本性をたがへず扇二本差し

と冷笑してるけれども日本ではまだまだ劇場其他多數會合の席などでは、決してそれが無駄で無い場合が多いと思ふ、實際携帯の團扇で、すつかり、助かる事が少くない以上、遠足に携帯した魔法ビンの冷たい麥湯を人にも分けて上げる程度に無用でないと思ふ。一體自分達は『汗と愛』といふ事を口癖の様に言つてるが、自分達の様に兎角過勞勝ちな者は汗の方の人で、梶原君遠山君それから藝妓などは他(ひと)を愛して行くべき身分即ち愛の方の人かと思ふ。汗の方の人はタオルの大きいので拭くが、愛の方の人は扇もハンカチも持たなくて宜い、持てば唯だ單に形式的に玩具的に持つなどは極めて自然な事であらうと思ふ。

九、一味清風

相撲の軍配團扇に書かれてある『一味清風』といふ文字には少からぬ涼爽味を覺える。龍虎相撲つて勝と敗との分かる時であり所であるだけに、一味の清風とは痛快な位能く當て篏まつた好句だと思ふ。之れと好一對の好句は淺草觀音堂の正面に高く揭げられたる扁額の文字の『施無畏』である、あの額は文字も結構であるが辭句が一層結構である。畏れ無きを施すと頭で一二度思ふだけでも、其所に自分は無限の涼爽味を覺えるのであつた。而してふいと觀音堂を出て、其所に地を這り行く癩病の乞食親爺に逢ても、百年の親友の様な懷かしさを以て見る事が出來るのであつた。此の三字を河野磐州翁に書いて貰つた

扇を、昨年の震災で燒き、翁も亦既に地下の客と成つた。

大きな城の石垣が曲線を爲して地に垂れてるのは地震國たる日本に限る事で、支那にも西洋にも無く、全く理想的の耐震構造であるといふ。古書に依れば此の石垣の積み方は扇勾配と稱して、初め一間の高さに對して法を一尺とし、次の一間は二尺その又次の一間は三尺とする。斯くて石垣は拋物線を畫き、どんな強震にも崩れさうなことは無い。昔の日本に地震は有つてもセメントなどは無かつたから、形狀それ自身で耐震的安定を與へるやうに自然に進歩したのである。江戸城や熊本城の石垣は扇勾配の方程では無いが、やゝ此の形式に近いものである。

島も通はぬと唄はれた八丈が島のまだ先きの小笠原では、一ケ月唯だ一回の便船有るばかり故、島人が命の綱の食料も、戀しき父母朋友からの雁信も、久しぶりにて歸る人も、永久の別れの行く人も、皆悉く此の船に依るのだから、海岸は毎度、出迎へ見送り其他で人が一ぱいに成る。その時一隻のカノー舟が、定期船目がけて扇浦を漕ぎ出で再び扇浦へ歸る。衆目悉く之れに集るから人は強い様でも弱いものである。

雨の暗夜を旅人が焚捨て去りし野宿火ほの見ゆる扇野は攝津國。長門の阿武郡には扇子落しの瀧、高さ五十尺巾三十尺。扇ケ井は鎌倉十井の一として水殊に美しく。扇河岸は埼玉縣高村にあり、松平伊豆守が川越城主たる時伊佐沼に發して荒川に注ぐ新河岸の水路を修めて、江戸表へ十四里が間の船の發着所とせるもの。羽後の山本郡には扇淵村と扇田驛と相並び。同名扇田町は其の隣郡北秋田にもあり、天正年中淺利兵部の居城にして古戰場、且つ戊辰の役には南賊官兵の戰ひし所。要田村は磐城の田村郡。河内國には扇山。扇川は尾張の愛知郡を流れ其他扇谷、扇池などは全國各地に少くない様だが皆其の形が、圓の三分一又は地紙な所から名づけられる。けれども、支那で扇形と言へば日本の半月形即ち半圓である。

「大空に入日招くや扇紙鳶」（末廣集）左右に三角の小さな袂有つて且つ風を盈む。北陸に多く東京に見ず。扇包みは今日明らかならず『乳母草』に「扇包みに包みて、うすやうは時に依り梅重ね紅梅重ね云々」とある。扇面は兩の頬の突き出でたる顏、男にも女にも美形の方にはあらず。扇を自由に使ひ得る操り人形の手は扇手『嬉遊笑覽』に「扇てんごう」とある扇の遊戯は今知る者無し。扇柄は日本家屋の建築に柄の横斷面が扇形をなせる所。扇垣は袖垣の優しきに比べて稍や奇を好むに近く。長唄の『吉原雀』に「客は扇の垣根より初心かあゆく前渡り」とあるは少しく意味を異にす。

扇網は一人で使ふ小形の漁具『涼しさや河邊を使ふ扇あみ』(犬子集)。城砦は山林に據りて飲料水に特に注意するが故に『扇の繩の水の手』は築城設計の一大事。はうちはかへでは楓の一種。日比谷公園にも此の木在り。團扇サボテン草は九州、小笠原、琉球、池中海、アドリヤ海に産する海草。末廣鰯は鰯を開きて味淋漬けとせるもの。稚鰈を乾して地紙形に並べたる末廣かれひと共にビールの肴として宜し。團扇苔。過藍菜。軍配虫は樹皮に住み。兒女が喜んでふうふと吹き鳴らす軍配漿酸は海草に住む長螺といふ虫の卵嚢である。

東京の電話帳にて扇屋又は末廣亭など稱するものは、旅館、雜貨店、料理屋、待合等十幾つあれど、扇を賣つてる者は一軒も無い、僅に一軒が紙や鉛筆と共に扇を夏だけ副業的に店に置に過ぎない。勿論その元は大部分扇を賣つたであらう。それから東京市中の扇を賣る家は百軒内外も有らうか、それで扇屋と名のるものが一軒も無いらしいのと好一對である。團扇屋と稱するものは團扇河岸にも無く。末廣を名とするもの末廣を昔も今も商ふ者の一軒も無い事は勿論である。

人の姓氏に扇氏扇子氏三扇氏扇山氏扇谷氏などある。富士山頂石室旅館の主人が扇山氏なるは偶然の一奇である。俳優で大阪の扇雀は一流ならねど中々達者、扇太郎は活動に於て松之助と並び稱せられ、女優歌扇は仁木彈正を當り藝として一方の旗頭。落語の方には扇三其他、料理屋には築地に金扇。長唄の方には拍扇會がある。

輪奐の美、世界の第何位とか一時噂された帝國劇場の紋は、末廣に能の翁の面を描いてるが、其の倂前社長澁澤子爵に似ると傳へられ。知られたる大會社にして扇をマークとする者、資本金數千萬圓の東洋汽船。日本製粉の外尙ほ三四あり。日本第一の菓子屋風月堂のマークは扇に三ケ月。今は尾羽打ち枯らした大華洋行の扇海丸は揚子江の最上流を航行したる日本最初の汽船であつた。原敬が殺されて政友會が百糸亂れる最大原因の一つと見るべき阿片問題に、古賀が森上卯平に政府黨へ十萬圓出せと迫つた時の密會所は、法廷の豫審調書に依れば大連港の待合扇屋であつた。

十、宮本武藏と大雅堂

九州小倉城中御の馬場に於て。一方は文武の達人として海内無雙の宮本武藏、左劍を振りかぶり右劍を上段にかまへた。他方は鎗術にかけては天下の名人たる笹野權三郎、九尺柄の水も滴り相な鎗を中段に構へて居る。南面の棧敷には、城主小笠原左近將監以下多數の智謀勇將がずらりと居並んで見物し居る。

宮本は既に白髪の老人、笹野は若年で珍らしい好男子。行司の役は鎗で古今獨歩といはれる高田又兵衛その人であつた。

又兵衛社杯に扇子といふ出てたちで兩雄の間に控へる。數千の將士は皆息を殺してぢつと見て居る。宮本と笹野は睨み合ふ事稍や小半時。笹野の鉢卷きから汗の玉がぽたり／＼と落ちる。こうして天地たゞ死せるが如き中に笹野の髮の元結ひがパチリと一筋切れる。――太刀も鎗も寸分動かないのに――と又兵衛は高らかに、勝負あり、と呼はつつて、日の丸の扇さつと開き『笹野が負けましてござる』と言葉を續けた。その時の又兵衛の姿は、正に英姿颯爽の文字通りで、其所に一味の淸風が有つた。

勝つた宮本二天先生に艶つぽい話がある。寛永十四年、宮本が未だ若くて江戸に居た時のこと、丁度島原の亂が起つた、之れを耳にした宮本は、君侯に强ひて願つて出征する事を許された。

それで或夜宮本は吉原の嬌妓桂木といふのへ、別れを告ぐべく逢ひに行き、最後の歡趣を盡たのである。桂木は名殘りを惜み餞として所持する愛扇を贈つた、いづれは華麗に非ざれば濃艶でその上にも佳香を漂はす扇で有つたらうが。宮本は其れを受け取つてパチリ／＼と開閉する事數次にして

ものゝふの音新らしき扇かな

と口吟して曉近く去つたが、別に桂木の緋の抱帶を乞ひ受けて、二本の竹刀を之れに入れ、肩にかけて勇ましく出發したといふ。女持ちの扇子に一句書くに當り、優美で無く、高尙で無く、又元より愛情の事でも無い、音新らしきと書くに及んで、宮本二天の俊秀潑剌たる青年時代の非凡さが其所にその片鱗を現はせる。

武士たる宮本武藏の話は中々景氣の善いものであるに引き換えて、文士たる池大雅堂の話は頗る不景氣なものである。

大雅堂は書畫共に能くして實に天下の名人と呼ばれた。それは後の事、始めは扇屋を業とした。從つて時々は自ら繪や詩歌を書いて賣り歩いたりした。其の家紋も亦三つ扇で有つた。彼れは篆刻も亦實に上手であつたが、或る年の暮れに當つて旅先きから歸宅せぬ事が有つた、元より餘裕も無い平常の生活であつたから、其の妻は仕方なく大雅に代はつて賣りかけ代金を集めやうと思ひ、賣上帳を開いて見ると悉く篆書で記してあるため一字も讀めるのが無かつた、依つて妻は大雅の友人に賴み込み辛うじて其の幾分を判讀し集金して、とんだ貧しい正月を迎へたといふ。

又或る時自分の書いた扇を賣りに出たが如何したものか其日

は少しも賣れなかつた。大雅は閉口の極、瀬田の橋の上から『龍王に賽す』と言つて其の扇を悉く河の中へ捨てた、而して飄然として寂しい自宅に歸り、カーライルにも增した清貧の生活を、更に赤貧に向つて一歩進めた。

十一、扇の漢詩と川柳

漢詩にして扇といふ字を含んで居るものは必ずしも少くない。けれども日本人が謂ふ所の扇子の意味を爲してるものは可也に少いのである、今その少い中から成るたけ涼しそうなもの二三を拾ふ。

白羽扇。　白樂天

素是自然色。　圓因裁製功。
颯如松起籟。　飄似鶴翻空。
盛夏不銷雪。　終年無盡風。
引秋生手裏。　藏月入懷中。
麈尾斑非疋。　蒲葵陋不同。
何人稱相對。　清瘦白鬚翁。

夏夜西亭即事。　耿緯

高亭賓客散。　暑夜最相和。
細汗凝衣集。　微涼待扇過。
風邊池色定。　月晚樹陰多。
遙想隨行者。　珊々動曉珂。

王建

銀燭秋光冷畫屏。　輕羅小扇撲流螢。
玉階夜色涼如水。　臥見牽牛織女星。

元遺山

禁裏蒼龍啓九關。　殿前鸂鶒喚新斑。
沈々綠樹輕陰遠。　嫋々薰風扇影閑。

晚池汎舟遇景。　白樂天

岸淺橋平池面寬。　飄然輕棹汎澄瀾。
風宜扇引開懷入。　樹愛舟行仰臥看。
（下半略）

西宮愁怨　王昌齡

芙蓉不及美人粧。　水殿風來珠翠香。
卻恨含情掩秋扇。　空懸明月待君王。

奉和初春幸太平公主南莊應制　李嶠

傳聞銀漢支機石。　復見金輿出紫微。
織女橋邊烏鵲起。　仙人樓上鳳凰飛。
流風入座飄歌扇。　瀑水當階濺舞衣。

今日遥同犯二斗牛。　乘槎共泛海潮歸。

李嶠の詩は筏に乘つて織女星の居る天の川に到り海へ出て歸るなど中々涼しい。之れと一寸似たものに禪學の方の『無門關』第四十八則、乾峰一路に

乾峰和尙因に僧問ふ。十方薄伽梵。一路涅槃門。未審し。路頭甚麽の處にか在る。峰。拄杖を拈起して劃一劃して云く。者裏に在り。後に僧雲門に請益す。門。扇子を拈起して云く。扇子跨跳して三十三天に上がり帝釋の鼻孔に築着す。東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨は盆を傾くるに似たり。

とある。鯉は淡水魚族であるから東海に住むべきでないなどの理窟は此所に通らぬ。扇子が舞ひ上がつたり、鯉が昇天して豪雨を降らしたりは涼しい上に面白い。

川柳はなるたけ古い所で拾つて見る

涼まうと尻べたあふぎ〳〵出る
熊谷は扇をさして太刀を拔き
燒香うちはを讀んで叱られる
三味線が止むると扇を鼻へあて
暑氣見舞枕とうちは持つて逃げ
笏で突けば檜扇で叩き
扇宮鳴らして見てはのしを附け
團扇では思ふやうには叩かれず
野かけ道頭へ扇くくしつけ
團扇ばかり見て娘返事せず
眞中の扇ざとうの忘れたの
放つては扇子を拾ふ野懸路
打入りは明晩といふ張扇
おしやくから扇を借りて立上がり

次手に俳句も涼しさうな所を少しばかり昔の人から拾つて見る

西山や扇落しに行く月夜　一茶
松蔭や扇で招く千兩雨　同
巻々の中に吹かるる扇哉　園女
たそかれの物とや團扇單帶　なか
秋帆岩城へ赴くに
かやり火に挾箱から團扇哉　其角
たま〳〵に團扇持つ日を我身哉　蘆陰
面頰を外して將の扇哉　春泥
褌に團扇さしたる亭主哉　蕪村
有りと見えて扇の裏繪覺束な　同
目圖の友にさし行く扇哉　太祇

大井川襟の團扇を落しけり　失名

ひら〳〵と歩く扇や雲の峰　芭蕉

思ふ人と風を通はす扇哉　留譚

月に柄をさしたらば好き團扇哉　宗鑑

戯れに扇流さん星迎　暁臺

出迎へて扇に移す螢哉　闌更

開かねば扇は風の噂哉　也有

居ない〳〵バアと顔出す團扇哉　麥人

十二、江戸團扇と京團扇

岐阜にしても丸龜にしても名古屋にしても團扇の産地としては有名であるけれども、東京のものや京都のものに比べては、品質の優良なことと數量の豐富なことと其他到底比較にならぬのである。大阪で安いものは丸龜から骨を取り、廣東や上海から白檀とか象牙とか上物の骨の來るのは殆んど皆扇で團扇の柄がそんなもので造られる事は極めて稀である。

京團扇よりは三四十年遲れて、今から三百餘年前の寛永頃に、ほんの粗末な割竹に白紙を張つたのが、江戸團扇又はあづま團扇と稱するものゝ最初で有つた。それから五十年ほと經て、墨や赤や漆で繪が描かれたものを散見した。元祿年間には鳥居清信が歌舞伎狂言の俳優似顔繪を描いて大流行と成つた。それに倒卵形で奈　團扇と呼はれて俳優のせりふなど書いたものも行はれた。その後更に百年ほどの寛政三年には、幕府から令を下して、團扇に俳優は勿論、男女の風俗を畫いたり、華美な飾りを施すことが禁ぜられた。その頃の團扇張りは武家のお邸者が内職にするのが大部分であつた。

當時關東小大名の高頭で有つた川越城主の松平大和守——前城主の松平伊豆守は川越近郊に扇河岸を築造した人である——の邸内でも、士族の子弟は盛んに團扇を張つた、貧乏大和と呼ばれて、貧乏が看板の殿様だつた相だが、德川の血統であるだけに萬事が華美であつた。然るに蠟燭の産地たる會津の殿様は三百諸侯の内でも指折りの質素な人だつたので、此の兩大名の行列が稀に行逢ふ事があつたりすると。そんな時には一方は愈よ引き立つて美々しく見え、一方は反對に益々穢くばかり見えたので、口さがなき京童は一會津蠟燭の火が大和團扇に吹き消された」と笑つたものだと傳へられてる。

幕府の禁令前三十年程が間は、浮世繪の全盛と共に、當時の畫家達の力作が三四色刷で、美々しく賑やかに賣り出された。それが一轉して山水畫となり、遂にいくらか禁令も緩んで、美人畫のものもぼつ〳〵出る樣になつた。歌麿、豐國、國政、

國貞なども相競ふ様に盛に畫いて、而して愈よ美麗や清新を爭ふの姿を現はした。その頃の發賣元としては金花堂といふのが有名だつたが、今日では何といふても榛原に限るやうな姿である。

慶安年中には團扇商が江戸に十九軒あつた。正徳の頃には十六の團扇商組合が出來て居た、團扇屋が軒を並べてゐる團扇河岸と名のつく所も自然と出來た。其所は今日でも日本橋堀江町に、竹河岸などゝ同様辛うじて存在を認められてゐるが、團扇河岸の老舗伊場屋には、當時の組合が武家方と協定した約定書などを傳へてゐる。之等の團扇商は夏だけしか仕事が無いので、秋から冬春の三期は燒諸や駄菓子などを賣つてゐたのが明治の中頃まではまだ見受けられた。

それで關東で團扇と言へば江戸團扇に限られ、江戸で團扇と言へば日本橋の團扇河岸に限られて居た。今日も尚ほ未だ殆んど全く同様の狀態だが。面白い事には關東の團扇は關西に行かず、關西の團扇は關東に來なかつた、近年は行つたり來たりするけれども、それとても甚だ少數たるに過ぎないで大體は關東も關西も自給自足の姿である。

元來渝團扇の趣味も氣品も手刷りの所にあつたのを、此の三十年來安価物は總て機械で印刷する事となり、僅かに榛原位が手刷りを續けてゐるに過ぎない。それも善い職工を得られなくて——他の機械工業のやうな收入の多い方へ取られる爲め——何時も閉口してゐるさうな。

次手に竹の事を一寸記して置く。元は竹も東京の近郊に相當產出したので事足りてゐたが、四五十年前から房州に求める事となつた、種類は篠竹、大名竹、苦竹などを冬期に方て切り取つて置くので、冬に切らないと竹が變色するのである。然るに近年は山の深くない房州でも不足を來し、其幾分を伊豆に求め加工して東京へ轉送して居たが、最近はそれでも不足と成つて、關西からも東京へ移入する様に成つた。それも最早七八年此の方である。

竹としての伊豆物は白く上がつて善いけれども、光澤が少なくて其の上に若干の變色は免れないといふ欠點を持つ。

房州では唯一の家庭的副業として、立派な家の奥様やお嬢様でも、あの細い竹を更に六十本位に割つて行く團扇の内職は、恥かしいなどゝ思はず喜んでやつてゐる。

江戸團扇の善いものは瀟楚と言つた風に、すつきりとかさつぱりとかしたものに出來てゐる。が京團扇は第一優美であつて、上品で華やかに出來てゐる。江戸のは大體色が淡くて地味で、其所に一味の涼しさを湛えてゐる。京の茂團扇その物に涼

味を求めるよりも美しくて目立つ事を願つてゐる様である。總じて團扇としては使ふ時、腰に力ありて先端が頃合ひに撓ひ、京團扇の特色と江戸團扇の特色とを兼ね備へた外に尚ほ丈夫でなければ上等の品とは言へない。それから團扇に丸柄と平柄と差し柄の三通りある事は此所に說明するまでもあるまい。

京團扇といふけれども都團扇と呼ぶ方がわかり善いのである。其の起原は、日本で一番古い奈良團扇に次いで遠く天正の初め頃、洛外深草の者か奈良のを摸造して、深草團扇といふのを賣り出したに始まつてゐる。それが都團扇と呼ばれて、近畿は勿論中國にも關東にも賞用さるるに至つたのはヶ正の末の頃からの事らしい。下つて寛文の頃には深草の元政が一種の風かはりを創製して元政團扇と呼ばれ、安政頃から大改良を加へて絹透し入り、金銀地、絹張り、彩色繪畫、紅白や紫白の切り繼ぎなどと美しい物上等の物が出來るやうになつた。從つて柄も赤黒塗りから蒔繪ものまで進歩した、で一層有名なものとなり京土産として盛んに地方へ持ち出された。文政頃には數寄屋團扇といふ點茶用のが現はれ、大德寺好み十牛團扇といふのも茶人達から喜ばれてゐる。

都團扇の竹は嵯峨か山科、遠くも近江から取り寄せ、紙は越前又は伊豫の奉書なのだが、近年は西洋紙も少からず使用される。それから二三十年前には澤山で無いが海外へ輸出したことも有つた、けれども携帶に不便な爲であらう其の後注文が來なくなつた。江戸團扇の方は帝國ホテルの客のトランクの中へ這入つて五本十本の少數だが每度海外へ旅立つといふ。

十三、黑シヤツ首相と歌劇

伊太利の黑シヤツで有名な首相ムツソリニ君は先頃奇拔な命令を下した。即ち國粹宣傳用の新作喜歌劇『扇』を此のほどローマ市で上演させて間も無く、外國人の作曲に成る喜歌劇は一切その上演を禁止した事である。之れは從來の伊太利の喜歌劇は、殆んど悉くウヰンナの作曲家の手に依つて出來たものであり、そのため此國から墺國へ支拂はれる版權料は年々少からぬ金額となるので、それを喰ひ止める策で有つた。日本から米國へ支拂ふ活動のフヰルム代などはどんなものか。

ルヰ十四世からルヰ十六世頃のフランスでは宮中を始めとして隨分と扇が婦人の間に使用されたのである。ベンジヤミン・フランクリンが絕大の名譽を以て佛國宮廷から招待され、マイ・アントアネットやルヰ十六世以下多數花の如き貴婦人や宮女達に取り圍まれた時、それらの婦人は殆んど悉くが扇を持つて居た。それは餘り大形でない優美な。如何にもフランスのも

のらしい繪扇であつた。ルヰ十六世が愛用したといふ恐ろしく贅澤に出來てる扇がある。形は廣げて半圓より心持ち狹くて、銀地に極彩色で三つの風俗畫が可也緻密に描かれてある。全體で十六本骨であるが此の骨に四通り有つて、親骨は勿論四通り共人物から模樣から夫れ〳〵實に結構な彫刻が施してある。骨に曲折のある上に或る骨は骨一本で獨立した透かし模樣のあるものも有り、內五本だけは全然黃金の骨で、全體を通じて精巧を極めたものであるといふ。

一國の富を傾けて尙は且つ足りないとした舊ロシヤ帝室の寳物は數少いものではなかつた、それを今日勞農政府が保管してゐるその內に、ツアールの使用した扇がある。十三本骨で骨には一寸した飾りがあつて、親骨には特に精巧らしい彫刻がある。扇のやうなものが縱橫に在る一種の風景畫が全面に描かれ、非常に高價な品であるだけはわかつてゐるが、それ以上は少しもわからない。

南滿洲の怪傑張作霖も平常好んで、扇を持つ、それは多くは白扇だといふ。彼が巾狹の白扇で長さ一尺一二寸の大物を使つてる寫眞を見ると支那人の顏と、その服裝とは扇に充分調和してゐるものと思ふ。

二週間天下の張勳が北京宮殿の池に蓮花綻る民國六年の七月二日、宣統帝を擁して復辟を斷行した、ヒユウ〳〵と身邊に飛來する銃丸に、流石はびくともせず、玄關前の椅子に腰を下ろし、扇を使ひ乍ら諸兵を指揮した。支那四千年の歷史に對して清朝二百年の繁榮は殆んど一夜の夢に過ぎなかつた、張勳が天下の二週日は、うたゝねの結びもあえぬ夢とでもいふべきであつたらう。

信長曾て七合入りの杯を柴田勝家に與へ續いて光秀に與へた、光秀はそれだけの酒量無くして不可能なる旨を答へて辭退した、と信長は刀を拔いて詰めて『汝酒を飮むか刀を呑むか』と叫つたので、光秀は止むなく其の杯を受けたといふ。又曾て光秀が稻葉一鐵の家人たりし和泉守を扶持好遇した時、一鐵から信長へ、光秀が私の臣下を奪つたと訴へたので、信長直ちに立腹して光秀の髮を摑み引き伏せて血が出た。光秀平伏して辯明するには『臣平常大封を受け居りて有爲の士を養ふのも皆君の爲めに外ならぬ』と言つた。然し信長は之れに答へて『予今身に刀を帶びず、故に汝幸に頭あるを得たり』と放言した。

天正十年五月に家康は安土へ行つて信長と會見した。その時信長は、久しく勘氣を蒙つて閉門の姿だつた光秀に命じてこう言つた『曾て濱松に居た時、家康の私に對する待遇は慇懃を極めたのである、予は今日それに酬ひねばならぬ、から汝特に努

めて接待せよ」と、で光秀は大喜びで家康の旅館たる大寶寺に善美盡した設備をした。家康の來る前の日、信長が鷹狩りの歸り路にして大寶寺を過ぎると、鳥や魚の醒い匂ひがした。信長之れを不都合として、土足のまゝ光秀の修めた美席を蹂躙し器具を破碎し、待童數名に命じて、恐縮平伏してゐる光秀を扇子で打たしめた。森蘭丸踊躍して鐵扇を以て光秀の額を割り赤い血がだら／＼と顏へ流れた。とある。

それから松前鐵之助の鐵扇で、ハテ怪しやなピシリ、と額を割られた鼠の仁木彈正もあつた。

大正十三年四月久邇宮智子女王が大谷光暢師に御降嫁の際、東本願寺で門末一同に分配した記念の扇は百四十萬本、此の重量が一萬一千二百貫、日本全國で生産する扇の七割に當る。從來最も澤山造つたレコードは日露戰役の際陸軍恤兵部から滿洲にゐる軍隊へ贈つた、カーキー色の扇五十萬本といふので其の製造に三ケ月を費したものだつた。

近年アメリカやフランス邊で流行するヒーチ、アンブレラーは柄の長さ二間位、傘の直經も二間近い、言はゞ頗る大きな日傘なのだが、海水浴の際脫衣場に立てたり、日除け蟲除け塵除けとして、山間の旅行にも携えられては、夜は骨の先端毎にほうづき灯燈をともし下げたりして、其の下でお茶を飲んだりするといふ、一寸便利らしくて華やかであるから珍らしい物好き眞似好きの日本人には、遠からず使用されるであらう。之れを現代の翳と見て宜しい『翳。以自隱蔽者』と支那の本にも書いてるから。

岩崎男爵家所藏の扇面ばかりを集めた『天然間氣』と題する一冊は、可也金に飽かせて佳作を集めてゐるが、その中に章干(淸國康熙二十七年)の山水圖がある、風景畫として上乘の物たるのみならず、圖中に二頭の大猿が活動してゐるので一層面白いものである、普通山水の圖畫に於ける動物は單に點景とするので決して活動させない、活動させれば必ずその圖をぶちこわすのである。然るに章干の山水のみは巧みに其の邊に調和の取れてる珍らしい傑作である。

まだ岩崎家には有名なる光琳の團扇屛風がある、團扇の表も裏も見られる樣に屛風を一一切り拔いて嵌め込んだものなのである。頗る珍らしい品である。それから抱一も彼の趣味から見て團扇繪を必ずや相當描いてゐるであらう、東京では不幸にして未だ見ないが、それは乾度有る筈で、有れば必ず善いものであるに違ひないと、或る畫家が言つて居たが、自分は富山縣入善町の舊家米澤氏がそれを所有してるのを見た、圖は彩色の秋で頗る善い出來のものである。

『舞扇園生梅』は文化二年十一月市村座で長唄の所作事ものとして初めて上演された。今日も尙ほ行はれてるものだが、作曲は初世杵屋正次郎。清盛と佛御前の事を作詞してある。

初世杵屋作、西川扇藏振付の『白酒賣』は天明五年一月桐座で初めて上演された。『觀世水扇楓』は賴兼が髙尾丸で髙尾を吊し切りにする所を、文化十年三月、中村座で初めて上演した。

今日も尙ほ盛んに行はれてる『若美鳥末廣がり』は安政元年三月、中村座で上演されたもの、能狂言の『末廣』から取つた簡單なものだが『傘をさすなら春日やんま』といふ小唄も有つて狂言らしい所作である。地は長唄。作詞は三世櫻田治助。作曲杵屋三郎助。振付藤間勘十郎。

（一四、六、八）

七面山より駒ヶ嶽へ

大町桂月

一、『ち』『づ』を發音する國民

御嶽の國、水晶の國、雨畑石の國、實業界の傑物の輩出する國とのみにては、未だ甲州を盡さず。甲州は實に山の國也、而かも其山は雄偉を極む。中央線にて信州より甲州に入らむとすれば、右に九千七百八十六尺の駒ヶ嶽骨立し、左に九千五百六十八尺の八ヶ嶽磅礴し、前に八面玲瓏美觀世界に冠たる富士山を望む。天下に其比を見ざる壯觀也。駒ヶ嶽は東に連りて、鳳凰の連山となる。稍低けれども九千尺を下らず。八ヶ嶽より裾野を隔てゝ東に金峯、朝日、國師、甲武信の諸峯崛起す。これも稍低けれども、なほ八千尺を下らず。鳳凰連山の南、野呂の溪谷を隔てゝ、白根連山發峙す。その北嶽は一萬八百六十五尺、臺灣を除きては、富士山に亞ぐ高山也。甲府盆地より顧眄するに、双脚自ら躍る。心は山の上に飛べども、數日間、甲府に滯留して、多くの甲州人士に接せり。甲府に入るや、先づ若尾金造氏に迎へられて、有志の人々と共に八百竹に飲めり。去らむ

とするや、若尾氏に招かれて、登山したる人々と共に若奥に飲めり。若尾氏はなほ甲府のおもだちたる人々と共に發起して、開峡樓に歡迎會を開けり。三十餘年ぶりに、同窓の高橋貞碩圖手に逢ひて、其家に飲めり。講演もしたり。揮毫もしたり。多くの甲州人士に接するにつれて、先づ感じたるは、發音の正確なること也。國によりては、『い』と『え』、『し』と『す』、『ひ』と『し』を混同す。殊に日本中殆んどみな『ぢ』『づ』を發音する能はず。一二の例を舉ぐれば、地震（ぢしん）自信（じしん）を區別する能はず。これは時節柄、大に困る也。見ず（みず）水（みづ）を區別する能はず。これも大に滑稽也。然るに甲州人士は『じ』と『ぢ』、『ず』と『づ』を區別して發音し、その他、一切の混同なくして、發音にかけては、模範國民也。本居宣長は其著『玉勝間』に

土佐の人の言にしとちとすとづとの濁り聲、自から能く分れて、まがふ事無し。されば、僅かにいろは文字を書く程の童と雖も、此假字をば書き誤る事なしと、彼國人語れり。

と記せり。彼國人とは、寺石正路氏の『土佐遺聞錄』によれば今村虎成にて、その楠瀨大枝に寄する書に、京都にて本居宣長の旅寓を訪ひ、與せる宣長といろ〳〵筆談したることを記して、

ちじずづの四音は、京あたりは、中々に亂れたるを、我土佐の國には、古歌の格の傳はりて、露程も違ふ事なし。そは音韻の中に能く分れば、耳に聞く儘を文樣に寫すに、難波津習ふ童とても、書き誤る事なしと有けるを、翁の見給ひて、膝を進めて言へらく、面白い哉、日本廣しと雖も、外の國は皆々亂れたるを、土佐の國に限りて、古歌の格の亂れざるは、いと尊し。こは我が玉勝間に書き入るべしと褒め

たる由を云へり。『ぢ』『づ』を發音するは土佐人のみならざるが、極めて少數也。伊勢の產にして國文學史上の偉人なる宣長すら、『ぢ』『づ』を發音すること能はざりきと見えたり。今日の國語教育にては、之を正さむとせず。正さむとするも、殆んど日本人の全部が普に『ぢ』『ず』を發音する能はざるのみならず、之を聞き分くる耳の機能を有せざれば、耳の改造より始めねばならず大震後の帝都復興よりも、ずつと難儀也。

長禪寺に寓しけるが、甲府の市街を北に離れて、愛宕山の麓に接し、寺や壯大に、境や靜寂也。山腰直ちに築山となり、清泉巖隙より涌きて、池を成す。百二十疊の大廣間を獨占して、身も心も自ら伸びやかか也。欄に倚れば、梧桐我が爲めに清陰を横たへ、蓮花我に向つて笑ふ。この寺は禪宗にて、甲府五山

（長禪、東光、法泉、圓光、能成）の一也。もと鮎澤にありしが、天文二十年、武田信玄こゝに移し、岐秀和尙を準開山とし、就いて禪を學び、剃髮して機山といふ法諱を受け、天文二十二年、生母大井氏死して、この寺に葬れり。その墓今なほ存す。四百年の昔、信玄來つて香火を手向けたりけむ。寺に信玄の書簡を藏し、信玄の同母弟なる武田逍遙軒の描ける大井氏の畫像をも藏す。この寺今は若尾家の菩提寺也。逸平氏の墓あり。その子民造氏の墓もあり。山徑一つ隔てゝ園池を成せる處に、逸平氏の銅像立ち、民造氏の遺德碑も立てり。園を尙蔣園といふ。番人に逸平氏の身長を問ひしに、短小なりきと云へり。

市塵不レ到古香嵓
溪水靜従二巖隙一來
梵唄聲中天欲レ曉
倚レ欄見盡白蓮開

二、山は富士、人は信玄

陰霖霽れたる日也。中村条吉氏と共に、甲府の市街を見物し、甲府城址に登りて、恩賜林記念碑を仰ぎ、轉じて尙蔣園の上なる甲府水道配水事務所に至り、貯水池を見るに、地下に在り。隧道に入りても、上水來りて一方の井戸に入り、一方の井戸より出で行くを見るのみにて、池は見えず。萬斛の凉味身に浸みしが、出づれば、夏の天地也。雨霽れて家々洗濯するは好ければど、栓を拔き放しにして水を濫用するを以て、晴天續けば、貯水忽ち缺乏す。公德心のなきは困りたるものなりと、番人こぼす。心は上水と共に澄めるかと思ひの外、不平の氣なほ附纏ひて、こゝも浮世也。さきに仰ぎたる記念碑、今や脚下に在り。甲府市の全體も見えて、甲府盆地前に開く。甲州は狹くして、甲府は廣い哉。御坂連山の上に富士見え、鳳凰連山の奧に白根連山見ゆ。駒ケ嶽も雄姿を現す。後の山々の上に尖れるは、何山にやと、中村氏に問へば、金峯山ならむと云へり。足に任せての散步とて、一旦不動堂を經て西に下りけるが、松林の中に祠あるを見て、また登りて、愛宕山の頂上に達す。路あるまゝに、頂上を北に進み、下りて岩窟といふ處に至れば、老松に擁せられ、鐵柵に圍まれて、武田信玄の墓立てり。こゝは信玄を火浴せし處也。三年の間、かりに葬りて、喪を秘し、喪を發すると共に、骨を分ちて、惠林寺に葬れりと傳ふ。松籟颯々として三年間も喪を秘せざるを得ざりし當年の苦心を語る。山と山との間を進みて、圓光院に至る。これも甲府五山の一にして、信玄の夫人三條氏を葬りたる處なるが、荒廢して、雜草路を封ず。本堂なくして、庫裡のみ存す。住持は村役場に出勤して、

母なる八老病に臥す。住持の妻に延かれて、信玄陣中の守本尊なりし刀八毘沙門　同勝軍地藏を拜し、信玄の短刀、夫人の鏡などを覽る。本堂は織田氏の爲めに兵燹に罹りたるが、庫裡は古の儘なりと、住持の妻いひ、中村氏は床柱を指して、南天なりといふ。見るにつけ、聞くにつけ、一として懷古の涙を誘はざるは無し。出でゝ信玄夫人の墓を拜す。その側に十字の新しき墓標立てり。寺に基督敎徒の墓あるは如何にと問へば、共同墓地に空地なく、何處の寺にても葬るを許さず、漸くこの寺に乞ひて葬れるなりといふ。魂は天國に行くにしても、死體の行くべき天國なくては困る事なるべし。後、數日、圓光院の住持、村役場よりの歸りがけなりとて、余を長禪寺に訪ふ。四五歲の幼女を伴へり。御幼女は何處よりと問へば、余の後を慕ふがまゝに、村役場へ伴ひ居りしなりと云へり。

圓光院を去りて後、別路を取り、信玄の墓の松林を左方に見て山腰に沿うて行く。中村氏つと一農家に入りしが、鷄卵四つばかり持ち來りて、余に分つ。午食に充つる也。路傍木標に敎へられて、龍華山永慶寺の跡を知る。柳澤吉保の建てし寺にて、龍華八景の勝もありけるが、柳澤家の移封と共に廢れける也。右手の山盡きて、武田神社に至る。武田信玄を祀る。大正八年の創立にて、縣社に列す。こゝは躑躅ケ岡館の跡にて、信虎、信玄、勝賴三代六十三年間住まひし處也。石垣あれども低く、堀あれども狹し。南北二町に足らず、東西も三町に足らず。天下に雄飛せし信玄の館としても小也。況して城としてをや。『人は城人は石垣人は堀なさけは味方あだは敵なり』と歌ひて、信玄は別に城らしきものを構へざりき。勝賴に至りては、七里岩の上に新府とて、城らしきものを構へけるが、移りて僅に二箇月にして亡びたり。諸將士の邸跡は、田となれり。それが漸々東に低くして、十町の末に、甲府城址の記念碑を見る。信玄世を去つて三百年、武田館址は武田神社となれり。古來偉人多けれども、信玄ほどに永く其國人に慕はるゝものなし。又甲州人士ほどに其國の偉人を慕ふものもなし。これを信玄が善政を布きたる遺德に基づくとのみ解しては、未だ盡さず。なほ立ち入りて、信玄の人と爲りと甲州人士の人と爲りとを見ざるべからず。信玄は文武を兼ねて、智勇絕倫、雄志世を蓋ひ、飽くまでも進取的にして、山中の小天地に雌伏せず。『疾如レ風。徐如レ林。侵掠如レ火。不レ動如レ山』の旗を山おろしに翻し、出でゝ信州を略し、上野を略し、武藏を略し、駿河を略し、三河を略し、進んで中原を衡かむとしたりしに、惜しや世を早うして、雄志空しく一抔の土に歸す。信玄の一生は千古の下なほ人をして感激措く能はざらしむ。況んや甲州人士をや。その早世も千古の下なほ人

をして悲涙に堪へざらしむ。況んや甲州人士をや。信玄は甲州の生める最大偉人なると共に、最も能く甲州人士を代表して、其粹を鍾めたり。信玄の氣象は甲州人上の氣象也。甲州人士の性格は信玄の性格也。信玄は甲州人士の結晶也。甲州人士は信玄の分身也。信玄と甲州人士とは二にして一、一にして二、分つべからず。甲州人は豪强也。勝氣に富めり。獨立心に富めり。俠氣にも富めり。信玄が天下に雄飛する進取の氣象に富めり。信玄一人の力のみに非ず。信玄の下に幾千萬の小信玄ありたるに由る也。『花は櫻木人は武士』の世は既に去りけるが、『山は富士人は信玄』の世は、萬古甲峽の天地に傳はるべき也。

父を追ひて自立したる信玄は不孝の子なりとは、古來よく議せられたる所なるが、當時の事情を考ふるに、信虎殘虐にして國人離叛す。そのまゝにしては、武田家の滅亡は勝賴を待つまでもなし。信玄止むを得ず、父を追ひたる將士に擁立せられし也。

八面玲瓏聳二嶽連一
群峰競起欲レ衝レ天
秀麗氣化甲州士
師表千秋有二信玄一

三、山中の別天地

甲州の奈良田は、肥後の五家庄也。一萬尺の白根連山を西にし、六千尺內外の高山、丸山、源氏山の連山を東にしたる早川溪谷中、膚寸の地、海拔二千七百三十尺の別天地也。下一里にして、西山溫泉あり。鹽類泉にして奇効を奏す。靑柳より西山溫泉へ七里、奈良田へ八里、甲府盆地はざつと海拔九百尺內外なるが、靑柳は八百十四尺也と稱す。

若尾金造氏東道の主人となりて、寫眞機を携へたり。一行七人、甲府より靑柳まで四里、自動車にて四十分かゝれり。一酒店に休息し、荷物を運び行く一人夫に、一行の中の荷物をも托して、奈良田に向ひ、春米といふ小部落を經て、山に入る。路は溪流に沿ふ。身忽ち嵐氣を感じたるが、炎日に照されて、口乾く。路傍より出づる淸泉を掬して、蘇生の思を爲す。一行の中、最も多く水を飮むものは、長谷川檢事と余とも也。而してこの二人のみが上戸也。杉木立淸蔭を橫たへ、淸泉滾々として流る。未だ疲れざれど、休息せざるを得ず。淸泉を掬せざるを得ず。午前九時十五分なるが、一同午前四時前後に蓐食したることゝて、腹減りたり。握飯を食ふ。五味庄二郎氏は信仰を兼ねたる登山家也。先達總取締にて、大進數といふ肩書を有す。下

戸なるも、梅酒を持ち來り、自からは飲まずして、飲める口に分つ。仁者なる哉。長谷川檢事舌皷を打ち、余も之に和す。一人の老夫の、脊負梯子を脊にし、その梯子より頭の上へ日除けの蓆をかけたるが、とぼ／＼と登り來れりと見る程に、我等と同じく休息せり。我等と同じく淸泉を掬せり。辨當箱取り出して、我等と同じく食へり。人の心に變りは無しと微笑す。

淸水わく木蔭にいこひ物くへば人もまた來て物をくひけり

見返へれば、富士見ゆるやうになりて、いと懷し。楮島とて戸數はほんの五六戸に過ぎざるが、一段高き處に、祠あり。部落の割にしては大也。神國なる哉。

五六戸の村に鎭守の宮居あり杉木立あり山中にして

しばし隱れし富士又見ゆ。甲府盆地、殊に笛吹、釜無の二川合して富士川となるあたり。手に取るやう也。上り／＼て路平らかになるかと思へば、山路には珍らしく大なる石の鳥居あり。宮は見えず。路傍に小祠あるは、支社なるべし。宮まで達せざるうちに左折してゆくに、富士また見ゆ。入道雲その頂より立つ。噴火に似たりと、余の後の一行の中にて言ふものあれば、前に牛馬を伴へる牧夫の中にも、噴火に似たりといふものあり。人の心に變りは無しと又微笑す。さきほどより消路の曲折と木立の具合とにて、富士見えては隱れ、隱れては見ゆ。而して益高く登るにつれて、富士益高く見ゆるに、英雄、英雄を知るとはこれにやと、長谷川檢事感慨をもらす。余顧みて、然り／＼と合槌うつ。『田子の浦ゆ打出でゝ見れば眞白にぞ富士の高根に雪はふりけり』と赤人は詠みけるが、これ歌としては、千古の絕唱也。されど未だ眞に富士を味はゝざる也。眞に富士山を味はゝむには、山の上より見ざるべからず。平地より見ては、富士は高き割に高く見えざる也。

我が登る山路の高くなるにつれいよ／＼高く見ゆる富士かな

池の峠にて、登路盡きたり。海拔五千六百四十三尺、高山、丸山、源氏山の連山上の一凹處也。二十間四方の小池あり。もと茶店ありしが、今は無し。少し行きて、左すれば西山溫泉に至るべく、右すれば奈良田に至るべし。右して丸山の東の側面をめぐり、且つ下る。下り路となりてより、一行は喘がぬやうになりて、話聲多くなれり。路南に轉じて、白根連山の間の嶽、農鳥嶽、赤石連山の小河內嶽、鹽見嶽など、一萬尺內外の高嶽面に當る。下りて、天地は北湯川の溪谷に限られたるが、又上りて早川の溪谷を見下す、小河內、鹽見は隱れて、間の嶽。農鳥嶽の二山、僅に頭を露はす。益下りて、奈良田を見下す。マッチ箱を二三十寄せ集めたるやう也。

奈良田に入りて、先づ御符水と稱する清泉に迎へられたり。次に法皇祠に迎へられたり。横二間奥行三間ばかりの小堂也額に『法皇尊』とあり。奉納の幟に『奈良法皇尊大神』とあり。孝謙天皇を祀るといふ。天皇は七年間この地に住み給ひたりと云ひ傳ふ。奈良田の名は天皇が住めば此處も奈良だと云ひ給ひしより出でたりとも云ひ傳ふ。祠前には、松、杉、欅、檜などの老木立てり。大正十一年七月二十一日朝香宮殿下の參拜記念として植え給ひたる五葉松の若木、殊に人の目を惹く。いよいよ人家に取りつけば、小學校に迎へられたり。五六歳乃至十五六歳の男女集り來りて一行を見入る。中には子を負へるものあり。講舍の外、別に新聞雜誌縱覽所あり。その中に足の付かぬ恭盤一つ備へたり。揭示によりて、人家五十二軒、みな深澤姓なるを知れり〃敎員一人、生徒三十一人なるをも知れり。先生は何處に居る。生徒の中にて、男生徒何人、女生何人など問へど、答ふるものなし。四十歳ばかりの男來り、之に問ひて、敎員は夏休の間家に歸り居ることを知れり。男生徒何人、女生徒何人は、この男も知らず。この男に導かれ。總本家さして行く。男生徒女生徒ぞろぞろ附き來る。路の左右に人家あり。本路の左右に支路ありて、その左右にも人家あり。家はみなこけら葺にて、屋根に石を置けるが、多くは少しづゝ離れて、其間に畑あり。花豆、唐もろこしなどをうゑたり。總本家に至りて寶物を見むことを請ひけるに、主人諾して座敷に出づ。六十歳餘の老人にて、白鬚生へたり。孫にや、子にや、十歳ばかりの男子、傍に正坐す。一行は緣に腰かけ、餘れるは立てり。其後には尾し來れる男女の生徒のみならず、大人の男女もまじれり。主人は一同を見渡して、聲もおごそかに、『大切の寶物なれども、折角の賴みゆゑ、見せてやる』と切り口上の後、眾塗の長き箱を開きて、一つの卷物を取り出し、これは孝謙天皇の御宸筆なりとて、讀みあぐ。

難波潟かすまぬ浪もかすみけりうつるもくもる朧月夜に

鎌倉時代の新古今集に、源具親の作として載せられたる歌也。筆蹟も後世の御家流也。次に武田信玄の文書と稱するものを見るに、孝謙天皇御治世十年、天平勝寶巳丑七月、法恭尼と號し給ひ、當國山代郡奈良田へ御遷幸の由緒あるを以て、其土地の山林畑民戶諸役を免ずる由を記せり。その他、武田家の文書と稱するもの三つ四つあり。寶物と稱するは、唯これだけ也。深澤の一家、即ち一村は、いづれ上國より來り潜みたる人の子孫なるべし。武田家にとりても、以後の國主にとりても、化外の民にて、近き頃までは他との交通なかりき。いろいろ異りたる風俗ありしなるべけれども、今日にては、外見上、何等

の異なる所もなし。唯一體に色白く、垢拔けして、秀麗也。背秀才の身代りの候補者は、いくらも見受く。これ山家としては異數也。

人家の盡くる處に、日蓮宗の寺あるが、住持は居らず。人家は總て早川の左岸にあり。田は人家より下に開たり。對岸に畑もあり。奈良田の七不思議とて世に聞ゆ。他に稀なるを云ふ也。一に曰く、鹽の池。山中の池にて鹽を含めるは、他に稀れなる也。昔、北條、徳川、織田など海道の豪傑、兵力にては信玄に敵すること能はず、一つ苦しめてやらむとて、商人に命じて、鹽を甲州に送ることを禁ず。果して甲州は苦しめり。越後の上杉謙信之を聞きて、卑怯千萬なる哉、兵力にてこそ戰ふべけれ、甲州の蒼生を苦しむべきに非ずとて、商人に命じて、鹽を甲州に送らしめたりといふ事實を想ひ起さずんばあらず。今日にては、山鹽といふ事は、中學の少年もみな知れり。何にも不思議にあらざれども、明治以前にありては不思議なりし也。奈良田には、鹽の池あるを以て、山中に孤立しても、生活に不足なかりし也。鹽井はなほ野呂川の下、西山溫泉にもありて、もとは盛に鹽を製して賣り出したりと聞く。早川の溪谷は、人間の住むべく、天惠ある處也。七不思議の二に曰く、洗濯の池。この池の水は鑛泉也。石鹼や、曹達を用ゐずとも、この水にて洗濯すれば、直に衣服の垢は消え失する也。翁は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯にとは、御伽噺にて、日本國民一般に知れる所なるが、その實況は今の世、內地にては見難し。然るに朝鮮に行けば、今もなほ年が年中、男は山に柴を刈り、女は川に洗濯し居る也。朝鮮にては、一般に男も女も白衣を着るを以て、殊に洗濯の必要あり。女といふ〻は、年が年中、洗濯に忙殺せらるゝ也。手にて揉みては、間に合はず、數十百の女人、川邊に相並びて、砧を打つが如く、衣服を石に當てゝ、棒にてたゝく也。その勞想ふべし。然るに、奈良田にては、洗濯池にて、ちよこ〳〵と洗へば、直に垢落つ。いよ〳〵天惠也。三に曰く、御符水。淸水中の淸水也。飲料として、最良なるのみならず、萬病を治す。御符水の名空しからず。世には如何はしき水を御符水と稱して、病人に飲する例もありて、御符水といふことは、今の知識ある人達の容易に首肯せざる所なれどもこれ平地の水道の水や井戸の水にて推す也。一知半解也。山より出づる水には、一種の鑛泉もある也、奈良田には、この鑛泉あり。益天惠也。四に曰く、びんらうし。一種の染草にて、衣服を染む。これも天惠ならずとせず。五に曰く、片葉の蘆。六に曰く、二羽の鴉。七に曰く、奈良田の七田。田が七段になり居る也。越後の七不思議、遠州の七不思議、鹽原の七不思議な

ど、世には七不思議少なからざるが、奈良田の七不思議最も奇拔にして、且つ最も人間の生活に適切なる也。

山の井に鹽さへ湧きて奈良田村心淸くも幾代すみけむ

四　夜の山路

日暮れむとする頃、西山溫泉にたどりつく。北湯川、南湯川と合して湯川となり、早川に合せむとして、なほ一町ばかり餘す處、橋あつて架る。目、溪流を追うて峭壁を見上ぐれば、下に一樓、上に一樓、下なるを古湯と云ひ、上なるを新湯といふ。世にも奇拔なる溫泉哉。仙宮にやとも思はれ、南畫を目のあたり見る心地もしたり。一行におくれて、余ひとり見物す。

古湯は直に湯川に接す。新湯は上に離れたるが、支溪仙樂を奏して、樓後を流れ落つ。その支溪に沿ひて、新湯の客は下り古湯の客は上りて、相互に新古二湯に浴するを得べきやうに、路も通ず。中間に物賣る店ありて憩ふべし。古湯には、普通の浴槽の外、自然の岩槽もあり。一行は新湯に投じたるが、十六夜にて、空晴れたり。淸風我を吹き、明月我を照らし、前峯默々として、我に揖す。我もこの世の人ならざる也。

靈泉浴罷迎二淸風一
樓倚二峭崖一氣更雄
一萬八千溪水偈
半宵聽盡月明中

酒井宗吉氏は居殘ることゝなりて、一行は六人となれり。奈良田の男一人、加はりて荷持となる。早川の左岸を下ること半里にして、對岸に上湯島の部落を見る。又半里にして下湯島の部落に達す。釣橋を渡りて右岸に移りて、幾度も山坂を上下し、又釣橋にて左岸に戻り、新倉の部落を經て早川の部落に至れば、山と山との間稍開けたり。ゆく手に七面山の雄姿を仰ぐ。部落盡きて、釣橋を渡る。釣橋を渡ること、これにて三度なるが、この釣橋最も偉大なれば、試に步數を測りたるに、二百八十步ありき。長い哉。左右を顧眄して、我れながら步處の仙也。されど足の下を見れば、目がまひさう也。釣橋はすべて四本の鋼線を合せて釣れるにて、幅は三尺もあらむ。中央に二枚若しくは三枚の板を縱に敷けり。左右に鋼線並行して、欄干の代りを爲せるが、低くして手之に及ばず。身を屈すれば、兩手とも之に及べど、身を屈しては步かれず。手を鋼線に觸れずに立ちて步けば、橋は左右に動搖し、上下にも動搖して身動もすれば、中心點を失はむとす。足の下は數丈の高さありて、急湍流る。落つれば一命なし。慣れたる山間の民は、平氣にて、さつさと步けど、慣れざるものは、平氣になれず。否、戰慄す

是に至つて、杖大に用を爲す。杖を右の手にもち、その先の方にて、右の一線を壓しながら歩けば、身體の中心も取れて、よしや平氣には成れずとも、戰慄するほどの事は無き也。この日なほ釣橋を渡ること、三回ありき。習慣の力は大なる哉。慣れては、杖の必要も無くなれり。僅か一日にして、早や釣橋渡りを卒業しける也。

西之宮、白石の部落を過ぎて、保といふ部落に至るに、部落は部落なれども、物賣る家、立並びて、この山間に於ける都會也。望月傳十郎氏を訪ひしに、若尾氏と相識れることゝて、喜びて一行を延き、午食を饗し、飲める口に酒を饗す。酒食終りて、一同午睡す。覺むれは、日早や西に傾きたりき。大島に至りし時は、日將に暮れむとす、今夜の宿は七面山上と定めたり。而して夜の山路を覺悟したることなれば、保にてもゆる／＼午睡せり。大島にてもあせらずして、物賣る家に腰をおろす。

七面山に登るものは、多く身延山よりす。これ表道也。角瀬よりも登る路あり。これ裏道也。一行はその裏道を取らむとするものなるが、角瀬まで、なほ半里の程あり。角瀬まで行かずとも、捷路ありと聞き、案内者を求めむとするに、同じく休み居りたる村長、歸路の序なれば、入口まで案内せむといふ。年は六十に餘りて、短小の人なるが、白髮丹顏、快濶にして、辯く談ず。その村長に導かれて雨畑川を渡り、間もなく角瀬道と[illegible]る。これにて十分なりといへど、なほ二三町は山路を登り、これよりは紛れなしとて、なつかしき白髮丹顏、夜色の中に消えゆく。提燈に導かれ、羊腸の小路を四五町登りて、角瀬よりの道に合せり。合すると共に、道の幅廣くなれり。凡そ一町、屈曲多きか、傾斜は急ならず。晝間の暑さも減りたり。唯一行渴を覺ゆること甚し。清水は出て居らぬかといふ聲、しば／＼洩るれど、如何せむ、道は峯稜に通ずることゝて、清水を得べき見込もなし。十七夜の月出でたるが、木立繁くして、その光樹下に及ばず。されど、空何となく晴れやか也。をり／＼樹枝缺けて、月を見る。その月は又をり／＼雲に入りて、一山暗黑となる。而して暗黑となる毎に、こつこうと木兎の啼くを聞く、

夜半までも歩かされば、頂上に達するを得ざるべく、從つて水を得ざるべしと、一同悲觀せしが、思ひがけずも午後九時頃近く燈光を見る。その燈光先づ一同の渴を減じたり。燈光に就くより早く、一同がぶ／＼水を飲みたり。安住坊とて、裏道唯一の小寺にて、晝間は休息所となり、夜間は旅店ともなる。一同水を得て勇氣を生ぜり。脚も弱りつくせるに非ず。登らむか。こゝに宿せむか。今夜中に登つて置かむとする目的は、頂上にて日の出を見ること也。頂上の日の出に間に合ふやうに、

こゝを早く發すれば可なりとて、一宿することゝなれり。持ち來りたる握飯を粥にして貰ふに、一時間もかゝれり。待ちかねて、多くは佛前に眠れり。疲れては食氣よりも睡氣也。粥出來て起したるに、起きざるもあり。午前二時發と定めて、朝食の用意を賴みたれば、氣の毒にも菴主夫婦は眠らざる也。

羊腸山路夜三更
一歩一喘扶レ杖行
明月入レ雲天地黑
林中唯聽怪禽聲

五　七面山の富士

午前二時に起され、辟食して、午前三時二十分に發足す。豫定より一時二十分おくれたり。宿するにおそかりき。發するに早し。依然として、夜行の連續也。一行中の若き人達には、なほ夢の國なるべし。仰いて明月を見る。をり〱木兎の聲を聞く。安住坊のある處は、角瀬より十九丁目也。三十二丁目にて雨畑よりの小路來り合す。雨畑は雨畑石の名硯の出づる處也。

三十三丁目に至りしは、午前四時也。左方なぎ落ちて、東の眺望開けたり。空も白めり。日出づるに間もなかるべしとて休息するほどに、日出でたり。されど、惜しや、東天に雲ありき。その雲の下部赤くなり、上部黃になりたるだけにて、日の本體は見えざりき。昨夜來の希望、畫餅に歸して、嗚呼々々と歎息す。

四十丁目にて、奧院に達す。七面大明神の堂南に面し、僧坊東に面す。堂前に影向石とて、七五三繩を帶びこる巨石立てり。一座讀經す。音吐朗々、朝の山一層清らかなるを覺ゆ。鼓聲加はりて、山更に雄也。これより本堂までは、さばかりの高低なし。この本堂も身延山に取りては奧院也。身延の本堂には比すべくもあらざれども、五千六百七尺の山上としては、偉大を感ず。本坊も偉大也。樓門も偉大也。本坊に茶を請ひ、絕頂へとて本堂の後にまはれば、周圍三町ばかりの池ありて、舟浮べり。池を右に見て急坂を登ること數町、左方偉大なる絕壁となりて、富士山露はる。嗚呼壯にして美なる哉。今の世の登山家は、山上より富士を見ることを解す。乙女峠の富士、最も有名也。近年その峠より少し南の長尾峠に國道開け、小田原より自動車通じ、御殿場よりも通ず。峠に茶屋あり。御殿場より二里、勾配緩にして、歩きても、らくなる道也。富士山を誇る日本國民は、少くとも長尾峠に登らざるべけむや。甲州は別に富士見三景を有す。曰く御坂峠、曰く西行坂、曰く花水坂、これ也。御坂峠は甲州より相模に通ずる道に當り、川口湖を隔てゝ

富士を望む。湖水の美加はりて、長尾峠よりも優れり。西行坂は甲州より富士川に沿うて駿河に通ずる舊街道に當る。兩山相並びて、谷が富士形を成せる處に、富士の上部見ゆ。その頂上は中央少し高く、左右同じ高さにて、少し低し。よく繪に見る三峯並立の正形也。田子の浦あたりにて見る富士の頂上は左端高く、右端へかけて、一直線に低くなりて、形美ならず。又駿河方面には往々、寶永山の瘤、富士の美觀を殺ぐ。西行坂方面より見れば、その瘤なく、且つ富士の正形を味はふことを得る也。花水坂は甲州より信濃に出づる街道に接す。名にし負ふ七里岩と釜無川とが更に趣を添ふる也。余は昨日思ひがけずも、富士山の高くなる奈良田に赴く途中、山路高くなるにつれて、富士山の高くなることを味はひたるが、今日又思ひがけずも、七面山上にて、富士の偉容に打たる。『來て見れば聞くより低し富士の山釋迦も孔子も斯くやあるらむ』と歌ひたるは、平地より富士山を見たる也。又凡眼にて偉人を見たる也。三千七百八十八尺の身延山は脚下に俯す。富士川の流域まで直徑凡そ二里、又二里にして五千尺内外の雨嶽連山あるも、少しも邪魔にならず。その先四里半、富士山裾野まで露はして、巍然として天を衝く。直徑都合八里半、丁度見頃也。

又數町にして、方丈の小庵あり。伊東普大といふ人孤棲す、

米國に行きて、基督教に身を投じたるが、基督教にては甘心する能はず、轉じて日蓮宗に歸し、こゝに孤棲して、日蓮宗を研究すること、十五年の久しきに及べりと聞く。伊東氏は余に向つて、日蓮の偉大を說きけるが、惜むらくは、登山の途中、前程を急ぐを以て、精しく其說を聞く時間を有せざりき。世には又日蓮宗より耶蘇教に轉じたるものあり。宗教も應病與藥的也。余が旅行して感じたるは、富士の山麓を始めとし、日蓮宗が富士山の見ゆる處に榮ゆること」也。日蓮宗徒に取りては、日蓮は富士山なるべく、富士山は日蓮なるべし。天台、眞言、禪、淨土、眞、日蓮の六宗は、今の日本の佛教に於ける六大宗なるが、天台は叡山を根據とし、眞言は高野山を根據とし、日蓮宗は富士山を根據とす。山の寺は、概してみな眞言也、時に日宗を見る。天台、日蓮も稀れ也。淨土、眞は平地の宗教なること基督教と同じき也。

伊東氏の庵より、ほんの數十歩にして、七面山の絶頂に達す。海拔六千五百四十一尺、平らかになり居りて、唐松さへ生ひたれば、眺望なし。唯わづかに西方のみ開けたり。八千六百七十六尺の笊ケ嶽近く我を壓す。その右手の奥に赤石、聖見、白根三峰の一萬尺級の高山控へたり。亦一種の壯觀也。

六　早川下り

本堂まで下り、少し上りて樓門を過ぐれば、富士又見ゆ。これより表道を下るに、道の幅廣し。而して富士絶えず我眸に入る。下るは惜しけれど、下らさるを得ず。終に杉並木に入りて富士と別る。坊にして茶店なるもの四つ五つあり。五十丁の急坂つきて、春木川の清溪流る。羽衣橋の上に立ちて、顧みれば急峻雄偉にして、全山鬱蒼たり。白根の北嶽も見え、間の嶽も見ゆ。白糸といふ一瀑の高さ十丈ばかりなるが、橋の袂に落ちて、春木川に合す。七面山はます／＼別れ難き山哉。

羽衣橋より春木川に沿うて下ること半里にして、赤澤といふ部落に達す。旅館二つ、一を江戸屋といひ、一を大阪屋といふ。小日本を山中に見る心地す。取りつきの大阪屋に投じて午食し、又午睡す。これより身延山を越えて、身延に赴く豫定なりしが、斯くては今日の中に甲府に歸れず。舟にて早川の急流を下ることに變更し、春木川に沿ひて下ること半里にして、角瀬に至る。こゝは春木川の早川に合する處也。飯富とて、早川の富士川に合する處まで三里、旅客專用の舟はなけれど、炭俵を運搬する舟あるを以て、これに乘せてもらう也。待つこと一時半にして、炭舟下り來る。乞ひて乘る。舳と艫と中央とに、舟夫控へ居りて舟を操る。急湍又急湍、一瀉數町を下る。左右の峯高くして、直に川を壓す。仙宮送り、飛泉迎ふ。造化はこゝに幾百千幅の畫圖を描けり。目、應接に遑あらず。雲獺飛動して、南畫活躍す。一箇所あまりに急にして一行をおそしたる處あり。前年舟轉覆して死傷ありたるは、此處かと問へば、然らずといふ。こゝが轉覆したる處なりと指すを見れば、巖壁直立して、川身左に轉ず。前車の覆るは、後車の戒と云へり。車のみならず、舟にもあり。前年の轉覆は永く後人の誡となりて、早川には舟の轉覆なかるべしと、犠牲者に感謝す。駿河街道に架れる長橋の少し下にて上陸す。四十分かゝりたるが、途中一行の下ることなかりせば、三十分以内にて達すべかりし也。早い哉。早川の名も空しからず。今や富士川下りの舟は絶えたり。富士川はさまで急ならず。且つ濁れり。風景も奇ならず。富士川下りの舟絶えても、山水を愛するものにとりて、惜しくはあらず。早川下りは富士川下りなどの比に非ず。眞にこれ急流也。水も清し。左右の風致も奇拔也。早川を下らば、急流下りを語るを得べし。身延は日蓮の靈地にして、山水の勝區に非ず。時間の都合にて、豫定の身延を閑却して、早川を下ることゝなりたるは、余にとりて天裕なるを感ぜずんばあらざる也。飯富より馬車に乘り、鰍ケ澤にて自動車に乘換へむとせし

に、飯沼、篠原の二青年だけ乘り、あとの四人は警察署に呼び入れらる。拘引を喰ひたるに非ず。歡迎を受けたる也。この地の有志井上慈郎氏來り、酒を饗し、蒲燒を饗し、『にがり』といふ甲州の名物を饗す。干鮑を醬油に漬けたるものにて、頗る珍味也。井上氏は如意を取り出し、余等をして手にて撫せしめ、帳面に署名せしむ。十萬人の手に觸れしめて一々署名を得むと發念し大正六年より始めて、今日までに二萬人に達せりと云へり。

七　精進ケ瀧

世上の登山家、甲州の白根連山より赤石連山へかけて登攀する者少なからざるが、之に接する鳳凰連山に登るものは極めて稀れにして、鳳凰連山の奇勝未だ世に知られざるは惜むべき哉。この連山は白根赤石の二連山よりは低けれども、九千尺を下らず。鳳凰連山の最北なる藥師嶽より、觀音嶽、地藏嶽、高嶽朝世嶽を經て駒ケ嶽に至るまで、凡そ五里、自然の一大屏風となつて、釜無川の流域の右側に立つ。山下の韮崎は海拔一千一百五十七尺、濁ケ原あたりは一千九百三尺まで高まれども、二千尺には達せず。正味八九千尺の、而かも傾斜の急なる連山を仰ぐ也。これだけにても世に稀れなる壯觀なるが、この連山には瀑布多し。地藏嶽より出づる石空川には、精進ケ瀧あり。高さ六十丈と稱す。觀音嶽より出づる小武川の上流なる後川は、梯子、白糸、五色など、瀑布連續す。横に連續するに非ず。縱に連續する也。溪流即ち瀑布也。駒ケ嶽より出づる尾白川の上流に至つては、本溪のみに瀑布の數三十もありて、天下の奇觀を極む。なほ一つ瀑布の奇觀あり。鳳凰連山の上より南を見れば、野呂の溪谷を隔てゝ、近く白根の北嶽を望む。その北嶽の頂上近き處より一線白く山を裂きて、野呂の溪流に合す。長さ凡そ二里、丈にすれば、二千五百九十二丈、天下無双の長瀑也。その瀑は北嶽にあるが、鳳凰連山に非ずんば、之を眺むるを得ず。余は鳳凰連山を目して、瀧の山と云はむとする也。

若尾金造氏が東道の主人也。五味庄二郎氏が幹事役也。日歸りの事とて、必ずしも脚の健なるものを擇ばず。同行すべて十三人、日野春驛に下車し、釜無川を渡りて、山高の實相寺に至り、名たゝる神代櫻を見る。周圍六丈、高さ九丈と稱す。嗚呼偉大なる哉。その偉大なること天下一也。一幹直上し、他の支幹横に延ぶ。下の方は苔さへ發して、木か岩かと疑はるゝばかり也。祇園の夜櫻を櫻の美人とすれば、こは櫻の豪傑也。瀧の山に、この大櫻を添ふ。甲州の山水いよ〳〵奇拔也。

寺は日蓮宗に屬す。住持喜びて一行を迎へ、座に請ぜむとするも、草鞋の拔き穿きが手數なれば、辭して玄關に腰を掛け、

コーヒーを飲みて立去る。山路を行くこと凡そ二里、もじり峠に至れば、脚底に石空川の溪谷開け、一軒屋寂しげに立てり。溪谷の彼方には、燕頭山屹立して、瀧の山こゝに始めて奇也。草の上に腰を卸して煙草を呑む。清風天外より來つて、滿身の汗も收まる。白雲右の方より來るかと思へば、忽ち燕頭山を沒了す。沒了するかと思へば、又吐き出す。一度山姿を見たる後には、隱見して、その全形を見る能はざるが、却つて面白きもの也。一軒屋に午食して、石空の溪谷に就き、數町右岸を行き丸木橋にて左岸に移る。丸木橋より落ちたるものあり。全身水を被りたるが、怪我はせざりき。

　左に溪壁を開きながら、崖腹を上下するほどに、路盡きて、巨巖重りあふ。溪谷も行きつまりて、瀧となる。高さ十數丈、水は段を成して、巖をつたふ。その奥二町ばかり隔てゝ、一條の長瀑天より落つ。嗚呼これ精進ヶ瀧也。巖頭に踞して暫し眺望しけるが、なほ進んで溪を渡り、崖腹をつたひて行けば、溪谷また行きつまりて十數丈の瀑布懸る。長瀑はなほその奥にあり。又溪を渡り、巖をよぢて、始めて長瀑を仰ぎ、深淵に俯す。落つる水の音は萬雷の轟くが如く、飛沫一溪に瀰蔓して、一町四方は年が年中雨天也。瀑布は白龍となつて、雲烟の中に飛躍す。瀧壺より起る風に、草みな靡き、樹みな戰く。凄氣身に逼り、殊に冷氣骨に徹して、久しく居るべからず。精進の一瀑、靈にして、且つ怪なる哉。

　歸路、燕頭山を經て地藏嶽に登る路を少し行きて、魚止の瀧を見る。高さ數丈、一觀の價なしとせざるも、如何せむ、大牢の後の粗食也。この瀧は未だ精進ヶ瀧を見ざる前に見るべかりし也。一軒屋の主人は鈴木總作といふ。本宅は息子に讓り、夫婦にてこの一軒屋に住み、二三町の畑を開き、十八年を經たりといふ。この頃は夫婦とも養蠶の手傳ひに村に下り居れるが、一行の來ることを聞き、わざ〳〵夫婦とも一足さきに登り來れり。數人の村人も手傳ひて、一行の歸路を待ちうけて、手打の蕎麥を饗し、酒をも饗せり。實相寺に立寄りしに、又酒を饗せらる。汽車の都合にて早く引上げしが、ほんの數分の差にて、乘りおくれたり。次の發車を待つ間に、日野春鑛泉に浴し、樓上に清風を迎へて、且つ飲み、且つ食ふ。余手帳を出して、一行の姓名を問ひ、ついでに年齢を問ひ、職業を問ひ、なほ趣味を問ひしに、酒と女と將棋と云ひたるは、さきに丸木橋より落ちたる人にて、年は五十四歳也。原籍は甲州ならで、信州也。寫眞といふものあり、音樂といふものあり、文章といふものあり。旅行といふものあり。いろ〳〵ありたるが、五味庄二郎、田村九萬治、平林長十郎の三氏は、人の世話と云へり。世にも

結構な趣味なる哉、

八　雲宿の二夜

いよく瀧の山に徹底せむとて、健脚者を擇べり。曰く若尾金造氏、曰く五味庄三郎氏、曰く田村九萬治氏、曰く飯沼彰氏余を加へて五人、甲府驛を發して、韮崎驛に下車し、穴觀音を拜す。七里岩の末端、上に寺ありて巨鐘懸り、隧道横に貫き、崖腹横に凹みて、觀音堂あり。伯耆の美徳山の投入堂は眞の投入堂に非ず。この觀音堂が眞に投入堂也。甲州には奇拔な寺もあるもの哉。

韮崎より柳本經武、佐々猛秀、植松輝吉の三氏加はれり。船山に登りて富士を眺め、釜無川を渡り、小徑を取りて田間を行くに、清水流れて、タモの一木清蔭を布けり。休息して、五味氏の梅酒を乞ひて飮む。タモはノリウツギともいふ。切れば汁出づるを以て、泣蟲の木ともいふ。大木は無きものなるが、この泣蟲の木は一抱もあり。泣蟲の木としては、天下無双也。武田といふ部落を過ぐ。こゝは武田氏發祥の地也。七里岩の上に新府城址さへ見えて、人をして懷古の情に堪へさらしむ。靑木といふ部落に至り、常光寺に小憩し、清哲村青年團の諸氏に迎へられて、茶菓を饗せらる。村長の石井德道氏、書記の内藤友秋氏も加はり、人夫は三人、一行にぎやかになりて、靑澤より山路を登る。坂に名ありやと村長に問ふに、無しといふ。地藏觀音、藥師の諸峰へ登る道なれば、佛坂とも名づけむか。

もろともに、勇みて登る佛坂鶯さへも法華經と鳴く

山上に思ひがけずも三四の農家あり。周圍二町ばかりの沼もあり。鷹田と稱す。鳥居峠に達せし頃は、日既に沈みて、夕燒の雲、世にも見事也。夜に入りて、靑木鑛泉に投ず。山中の一軒屋にて、後川に接す。酒を呼ぶ。植松氏美音にて善く歌ふ。主人來りて、我妻義太夫を善くすといふ。その妻を呼ぶ。素語りにて、朝顏を語れり。

谷音は大井川かと思はれて朝顏を聞く山の湯の宿

山林巡視の巡査も加はりて、朝早く發す。雨至る。『朝の雨と女の腕まくり』といふものあり。何の意味かと問へば、『恐るゝに足らず』といふ。小武川砂防工營所の小屋に休息する程に、果して霽れたり。なるほど朝の雨は恐るゝに足らざる也。藥師山の巖壁天に沖するを見て、覺えず快と呼ぶ。路より左折すること數十步にして、梯子瀧に至る。脚下に一瀑、頭上に四瀑、いづれも數十丈の高さにて、數町の間に連る。長き飛泉なる哉。

この梯子の一瀑のみにても奇拔なるに、又も白糸瀧あり。こ

れも數十丈の瀑五つ相連る。最も上なるは、支流の瀧と相對して瀧壺を同じうす。風致梯子瀧よりも勝れり。ます〱奇拔なる哉。なほこの上にも瀧ありと聞きて、心自ら勇む。名の無き瀑の上に午食して行くに、數町の間、絶えず左方に瀑聲を聞く。こゝにも梯子、白糸と同型の瀑布あるべしと思はる。最後に五色瀧を仰ぐ。豎大に、淵深く、數十丈の飛泉一條となりて直下す。いよ〱奇拔の極也。後川の一流は瀑布に富める哉。要するにこれ鳳凰の一山、高くして且つ急なる也。

頂上に至れば、白砂地に滿ちて、唐檜偃蹇す。巨巖二つ相接して、高く天を衝く。こゝは鳳凰の一峯なる地藏嶽也。東南に觀音嶽あり。その先きに藥師嶽あり。總稱して鳳凰山といふ。美しき名哉。三峯天半に並んで、鳳凰の翼を張れるが如き也。中央の觀音嶽最も高くして、海拔九千三百七十五尺、地藏嶽も藥師嶽も少し低し。石龕あり。祠かと思へば、中に箱あり。箱の中に帳面あり。登攀者は義務として記名せざるべからざる也。一同記名して後、内藤氏を除きて、青木より加はれるものは、皆下れり。余等は路を駒ヶ嶽に取りて、鳳凰連山の上を縱走せむとする也。高嶽に登りて、野呂川の溪谷を見下し、白根の北嶽に對す。北嶽はこの方面に金字形を成して雄大也。その全體より仙丈嶽へかけて唐檜の純林、綠りも繁りたり。天下の美林也。北嶽の頂上近き處より二里の長瀑、眞直に落ちて、野呂川に入る。天地の間に一大丁字を白書せるが如し。造化の奇を弄するも、亦甚しい哉。

村長等は今夜も鑛泉に浴して護太夫を聽くたらむ。余等は唐檜の林中に露宿す。敷くに毛布なく、蔽ふに天幕なし。眞にこれ幕天席地也。火を焚いて暖を取り、餅を燒いて晩食に充つ。余には別に酒ありき。水を得るに由なく、水筒や魔法瓶の水にて、翌朝米を炊がむとす。若尾氏令を下して、水を飲むべからずといふ。一同之に服す。余ひとり服せず、我れは晩酌の當番あり。從つて又醉覺の水の當番あり。願くは我れに一口の醉覺の水を許されよやと云へば、若尾氏頷く。醉覺の水に起きて驚けり。飛火散つて、余のしやつを丸燒けにせり。巻ゲートルの一つを半燒けにて、消し止めたり。余起きずんば、巻ゲートル全く燒かるゝのみならず、余の風呂敷包も全く燒かるべかりし也。

朝、米を炊ぐだけの水はありたるが、食後の茶に充つべき水は無し。無しと思へば、意地惡くも、渇念來り襲ふ。炎日に照られて益渇す。嶮路を上下して、なほ一層渇す。ほんの一町ばかり左に下れば水ありと聞きたる時は、數分の後思ふ存分水を飲みたる時よりも、却つて一入嬉しかりき。米さへ炊ぎて、腹も張

りたり。朝世嶽の最高峯に立ちて、今日ら白書の丁字を味へり。富士さへ見えて、いと懐し。同じ朝日嶽の他の一峯の上に三人の人影を認む。直徑五町もあらむ。手拭を振りて、おういと叫べば、彼方にても手拭を振りて、おういと叫ぶ。この方に來るかと思ひしに來らず。その峯に至れば、人は居らざりき。駒ヶ嶽を經て仙水峠に下り、こゝまで登りて仙水峠に引返し、仙丈嶽を經て白根連山に行けるならむと想像せしが、後日、島長代氏の手紙にて、想像の當れることを知れり。呼びあひし三人は、島氏と其子と人夫となるをも知れり。如何にして知りたるぞといふに、島氏は白根連山を蹈破したる後、鳳凰山に登り、石龜の帳面を見て、朝世嶽上の一行の余等なることを知りて、余に報じける也。余は石龜の功德を感謝せざるを得ず。島氏は四條畷中學校の教師なるが、健脚にして登山を好む。余と同郷にして、且つ同好也。十人が十人まで、仙水峠より直に仙丈嶽に向ひ、白根の連山を攀ぢたる後は西山溫泉に向つて去るが、島氏はわざ〳〵朝世嶽に登り、又鳳凰山に登れり。縱走せずとも、これにて鳳凰連山の要を得たりと敬服す。若しも島氏朝世嶽に登ること十分おそく、余十分早からば、互に手を握つて雲表の奇遇を喜ぶべかりし也。さるにても僅か五町を隔てゝ、相對しながら、それと相知らず。人間の視力は果敢なきもの哉。

朝世嶽の數峯、みな骨を露はして儼然と聳えたり。將に仙水峠に下らむとして、北方を見れば、谷底より駒ヶ嶽の絕頂へかけて、一大巖壁直立す。四五千尺もあらむ。驚嘆せざるを得ず。余は未だ曾て斯かる偉大なる巖壁を見たることなき也。嶽雀駒鳥と和鳴して、一層の興を覺えぬ。この夜仙水峠より二十町ばかり下りたる處に露宿す。水はありたり。されど醉を得るだけの酒なし。我慢して臥したるが、腹の蟲不平を起して、余眠る能はず。習慣は恐しきもの哉。夜半起きて火に對す。若尾氏も起きて火に對しけるが、ふと思ひ出したるやうにて、登山袋よりウヰスキーの小瓶を出して余に與れたり。氏は下戸也。藥用のつもりにてウヰスキーを携へしなるべきが、露宿も今夜限りにて、藥用の必要もなしと思ひ定めて、余に與れたるものと見えたり。梅酒の五味氏と共に、余にとりての仁者也。うれしや若尾氏のお蔭にて醉ひたり。醉ひたれば眠らるゝ筈なるに、腹の蟲昂奮し過ぎて、徹宵眠る能はざりき。折り〳〵目を開きて明月を見る。始めは頭上にありしが、次第々々に西に傾きて、終に余の足先まで下れり。仰臥して足先に月を見るも、高山の上、而かも露宿の賜物也。

行暮れて高根の上に寢轉べば頭に近く[illegible][illegible]たく
夜もすがら高根の上に焚火してねながらに見る月の影

かな

野宿して高根の上に目さむれば我足さきにかゝる月かな

嶽雀囀きそめて、嬉しや、夜明けたり。朝食を終へて仙水峠まで戻り、後黒戸嶽の急坂を攀ぢ、近く駒ケ嶽の頂上を仰ぐ。峯脈續けど　突起して骨立す。一寸見れば、登れさうにもなし。左は絶壁にて、見下せば目眩す。偃松地に偃して、路もなし。左へ轉ばぬやうに、恐る〳〵偃松を踏みて、駒ケ嶽に取りつき足よりも多く手を用ゐて、漸く絶頂に達す。菅原村青年團長白砂隆志氏迎ひに來り居りて、挨拶するより早く、ビールを饗す。立ちながら一杯一杯又一杯、微醺を帶びて岩に腰をおろす。駒ケ嶽の上部は、唯是れ花崗石の一大巖塊也。絶頂尖りて四面の眺望開く。余は先づ富士の偉容に打たる。七面山上にて見るよりも一層偉大也。そは四方に見ゆる白根連山、赤石連山金峯連山、信濃側の連山、槍ケ嶽の連山など、日本中の高山といふ高山との對比よりも生ずる也。朝世嶽や、地藏嶽や、觀音嶽や、藥師嶽や、みな脚下に俯す。南の仙丈嶽、北の八ケ嶽、近く接して我と雄を爭はむとす。甲斐の一國孤掌に歸して、東西南北さても山多き哉。

絶頂より少し下りたる處に、駒ケ嶽神社あり。又少し下りたる處に、七丈とて、小屋あり。清水十三郎、名執武三郎諸氏迎ひに來り居りて、又もビールを饗せられ、午食をも饗せらる。駒ケ嶽の登山道は峯稜に通じて、世にも峻險也。昨年に至りて、菅原村の有志別に路を尾白川に沿うて開けり。これ尾白川に連續せる瀑布を現はさむとて也。尾白本流の瀑布三十に下らずとは、げに瀧の山なる哉。屛風岩まで下り、前黒戸嶽を越えずに溪谷に下り、宿の如き高峯を仰ぎ、瀑は十二三も見たるが惜しや、日暮れむとす。夜に入りては危險なりとて、新道に後し、鶴屋主人の提燈に迎へられ、駒ケ嶽神社にて村長の淺川照鎭氏始め有志の人々に迎へられ、社務所にては祠官の伊藤齊閑氏に酒を饗せられ、馬上に明月を負ひて、臺ケ原に到りし時は、既に午後十一時を過ぎたり。こゝの小學校にて、有志の饗應を受けて、鶴屋に宿じ、翌日甲府に引上げたり。尾白溪の瀧を見ること、共半にも遂せず。余は未だ駒ケ嶽の奇勝を盡さずを明年を期して再遊せむとする也。白根赤石の高嶺を閑却せしは、登るを欲せざるに非ず。氣を長くして、今年は先づ手前の鳳凰連山を窮め、然る後、奥の白根赤石に及ばむとする也。

甲府を去るに臨みて、石川豐七氏偉大なる雨畑石の硯を贈らる。文人に硯は、西行法師の銀猫の比にあらざる也。

金も名も命もほしくなき身にもこの硯はと思ひける哉

（完）

太虚庵を環りて

笹川臨風

一

洛西今宮にあぶり餅と云ふのがある。いはゆる紫野名物あぶり餅と云ふのは即ち之れである。或書に「小團餅といふ、一名勝の餅と云ふ、これを食せば疫病を除き、運強く長壽を保つなり、昔は禁裡の内を茶褐色の衣を着て、あぶり餅と稱して賣り歩きしとかや、女童その着たる衣の茶褐なるを以てかちんと呼びしなり」とあるさうだが、孫引きであるから、其の或書が、何であるかは確かでない。又かちんの語原が果して此に出たかどうかは疑はしいが、此書の記事を實なりとすると、往時は禁裡にまで行商したと見える。それほど高名であつたあぶり餅も今日では京の人で知らぬものが隨分ある。然し依然としてあぶり餅は舊形と原始的香味とを有して、古りし京の名殘を留めてゐる。油濃い味や强烈な香がもてはやされる世の中に、さりとは殊勝な昔ながらの香味を有することよ。

京の先斗町に竹村屋橋と云ふ小やかな假橋があつた。狭斜の巷に風情を添へて、之れも亦洛中の一名物であつたが、いつの間にやら取拂はれて、春雨の情調も時雨の景色も索然として興味を殺いでしまつた。今では此あぶり餅を山端の平八よりも、大市のすつぽんよりも京らしくて善いと思つてゐるが、やがてそれも昔語りとなる時節が到來するであらう。

今宮の社頭の兩側に並ぶあぶり餅屋の前をすうつと行くと高峯に出る。鷹ケ峰に程近い。鷹ケ峰は寛永の昔、本阿彌光悦が住んでゐたところである。其頃にあぶり餅があつたとすると、光悦は筇を駐めて茶を啜りながらぼつり〳〵と此淡素の妙を味はつたであらう。時にはお題目が濟んでから左右の人達と串の先から抓んで嚙みしめたこともあらう。

光悦は極めて質素の人であつた。彼ほどに世にときめき、人に重んぜられたにも似ず、二十歳計りの青年時代から八十歳の老齢にて身まかるまで、召仕ふものとては唯一人の小者と一人

の飯焚とであつたと云ふことである。然も彼が常に用ひた夜着蒲團は木綿であつた。簡素質樸は彼の一生を貫いてゐる。淡素は茶の味で又あぶり餅の特色である。彼が鷹ケ峰に居を轉ずる折に、家財調度のよきものは識く之を親戚故舊に頒ち與へ、已れは麁末なもの丶みを携へて、茶を樂んだ。或人何が故ぞと問へば、さればさ、良い品は損ふまいと苦勞する故面白くない、粗末なものを翫ぶは何と氣樂なことではないかと。故に其住宅も小やかなるを好み、一所に長く留まることなく、いづくにも二疊敷三疊敷の茶室を建てゝ、茶を樂んだのであつた。彼は自然の茶人であつて、當然あぶり餅の好き者であらねばならなかつた。

あぶり餅は淡素の裡に藝術味が饒かである。其芳ぐはしい香は藝術の香であつた。又今宮のやすらひ祭が疫癘を除くが如く、あぶり餅も邪氣を拂ひ、疫病を去り、長壽を保つものだと云ふ。迷信と一概に云つてのければ、それもさることながら、又一種の信仰であつた。

光悅の曾祖父本光(光悅の父光二、光二の養父光心、光心の父は即ち本光)は本阿彌家の中興で、冠鍋日親の法弟であつた。本光と日親と師弟の契りを結んだのは獄中であつたが、一は熱烈なる法華經の傑僧で、一は刀劍の鑑定・磨礪・淨拭を世業とする清廉の高士。此二人者が、時を同うして囹圄の裡に相見て、血を沸かすやうな化導を授受したのであるから、其信仰の白熱的であつたことは當然である。されば本阿彌家は日親を開祖とする本法寺の大檀那で、天正年間、本法寺が今の地に移轉した時は、光悅の父光二は專ら其工事を監督し、又本堂の番神施主であつた。光心の女で、光二の配偶であり、又光悅の母であつた妙秀は、聰明利發の性で、男優りの氣象であつたが、同時に情け深く、慈悲忍辱の心淺からずあつた。法華經の信者として、佛菩薩の教訓を體得して、日常茶飯事にも之を實現することを忘れなかつた。一族子孫多ければ、いづれも田舍の土產時服などを時々に贈りこしたるを、妙秀は裁切りて、或は帶に襟に、或は頭巾に帛紗に作るやうにして之を數多の人に取らせた。小袖を贈りても妙秀は身につけざれば、それもよしなしとて錢を贈るに一しほ悅びて、其錢にてさま〴〵のものを買ひ調へ家を持ちたる者には箒塵取火打箱火箸などを取らせ、六尺草履取には草鞋、金剛杖、女には糸綿、鼻紙、手拭を與へ、又厚紙を求めて、手づから能く揉み、茶實・乞食、非人を招きて、寒き時節には之を背にあてよとて分け與へた。又何の辨へもなき者共に對しては、親を大事にせよ、親に苦勞をかけるな、嘘僞りを云ふな、冥加があらうぞよと教訓した。然かも自ら奉ずる

こと薄く、九十歲の長壽を保ちて身まかつた時には斑縞の單物一つ、帷子の袷二枚、浴衣、手拭、紙子の夜着、木綿の蒲團、布の枕ばかりで、其外には何ものも無かつたと云ふほどに質素であつた。經に曰く、「無智の人の中にして、此の經を說くこと莫れ、若し利根にして智慧明了に、多聞强識にして、佛道を求むるものあらん、是くの如きの人に乃ち爲に說くべし、若し人曾て億百千の佛を見奉りて、もろ〳〵の善本を植ゑ、深心堅固ならん、是くの如きの人に乃ち爲に說くべし、若し人精進して常に慈心を修し、身命を惜まざらんに、乃ち爲に說くべし、若し人恭敬して、異心あることなく、もろ〳〵の凡愚を離れて、獨り山澤に處せん、是くの如きの人に、乃ち爲に說くべし、又舍利佛、若し人ありて、惡知識を捨てゝ、善友に親近するを見ん、是くの如きの人に乃ち爲に說くべし、若し佛子の持戒清潔にして、淨明珠の如くにして、大乘經を求むるを見ん、是くの如きの人に、乃ち爲に說くべし、若し人瞋無く、質直柔軟にして、常に一切を愍み、諸佛を恭敬せん、是くの如きの人に、乃ち爲に說くべし、また佛子の、大衆の中に於て、清淨の心を以て、種種の因緣、譬喩の言辭をもつて、說法すること無礙なるあらん、是くの如きの人に、乃ち爲に說くべし、若し比丘の、一切智の爲に、四方に法を求めて、合掌し頂受し、たゞ樂ひて大乘經典を受持して、乃至、餘經の一偈も受けざるあらん、是くの如きの人に、乃ち爲に說くべし、人の至心に、佛舍利を求むるが如く、是くの如く經を求め、得已りて頂受せん、其人また餘經を志求せず、亦未だ曾て外道の典籍を念ぜざらん、是くの如きの人に、乃ち爲に說くべし」と。妙秀の如きは卽ち爲めに說くべき是くの如き人であつた。

光悅は父として法華經の熱烈なる信者光二を有し、母としては才德兼備せる法華經の淨心信敬者を有してゐたのである。殊に母の感化は偉大であつた。光悅は殆んど其母に依りて作り爲されたと云つても過言ではあるまい。

奈良朝の佛教藝術は姑らく措いて、平安朝に入りては眞言藝術となり、淨土藝術となつたが、東山前後に於ては禪宗藝術となつた。然るに藝術が一たび禪僧の手を離れて、在家の手に歸するや、狩野氏は先づ法華宗信徒として藝術界に覇を稱し、光悅出でゝ藝術の上に其熱烈なる信仰の態度を示し、尾形光琳之れについで起り、英一蝶現はれて、東西に法華經藝術家の對立を見るに至つた。恰かも是れ法華經の行者日蓮が一旃陀羅の子として、妙法蓮華經の題目を獅子吼し、忍辱の鎧を着て妙教の劍を提げ、一部八卷、肝心妙法五字の旗を指上げて、未顯眞實の弓を張り、正直捨權の箭をはげて、權門をかつぱと破り、八宗十

宗の敵人を相手として、渾身の力を盡くし、宗教界に革新の雄叫びをなしたるが如き藝術界の革新であつた。然も光悦に至りては、藝術と信仰との一致を具體化したものであつた。

光悦が書寫した觀心本尊得意抄、法華題目抄、如説修行抄各一卷は本法寺に傳へ、立正安國論、始聞佛乘義各一卷は妙蓮寺に、始聞佛乘義一卷は本滿寺の藏する所となつてゐる。寛永四年元旦には、南無多寶如來、南無妙法蓮華經、南無釋迦如來、南無本化四菩薩、南無天台大師、南無妙樂大師、南無傳教大師、南無日蓮大士、南無六老僧、南無日本國中上人、南無中山開山上人、南無代々上人、南無本法寺開山上人、南無代々上人天下一同佛法流布、臨命終正念即身成佛と揮毫して、新年の劈頭に佛法流布を祈願した。彼れ嘗て云ふ「私式の信心は、只國恩を忘れず正直に惡魔のさゝぬ樣にと信心仕居候」と。其の云ふ所は他奇なきが如くなれど、惡魔のさゝぬ樣にと云ふは、人間第一の難事である。政治家に此心があつたならば、綱紀の弛緩政治の頽廢を憂ふる必要はない。政黨者流に此心があつたならば、國民は安んじて其選良を信ずることが出來る。教育家に此心があつたならば、精神作興の事實は當然擧がるべきである。坊主も神主も教化屋も言ふ所は尤もらしいが、果して惡魔のさゝぬものがあらうか。法華經信仰の在家たる本阿彌光悦の信心は、頗る簡明であつて、其功は千言萬語よりも優つてゐる。彼の藝術、此上に立脚してゐる。彼の趣味も彼の生活も彼の道徳も之より出發してゐるのである。

邪推と云ひ、嫉妬と云ひ、猜忌と云ひ、私利私欲と云ひ、盡く之れ惡魔の影である。妄念妄執、賣名衒惑、一に惡魔のさゝぬものはない。光悦の信心は之を打破すべき爲であつた。當體義鈔に云はずや「正直に方便を捨て、たゞ法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人は、煩惱業苦の三道法身般若解脱の三德と轉じて、三觀三諦即ち一心に顯はれ、其人の所在の處は常寂光土なり」と。光悦の太虚庵を環れる鷹ケ峯藝術郷は信心即藝術の常寂光土であつた。

二

本阿彌家は世々足利氏に仕へて、刀劍の事を業としたが、光悦の父光二は分家して後、今川義元・織田信長の殊遇を受けた。徳川家康がまだ竹千代と稱して駿府の今川氏に質となつてゐた時代から、光二は刀劍の用を勤め、屢々其食膳の相伴を受けてゐた。此關係は光悦まで引き續いて、兩者の間は密接であつたのである。されば家康も時には其東下をほのめかしたこともあつたと見えるが、光悦は京都つ子ではあり、大の勤王家であつ

たから、無下に之を退けたらしく、猶又其子孫にも訓戒を垂れて「江戸表へ引越の義はゆめ〳〵あるべからず、日本國中は神の御末にて皆々禁裏様のものなり」と云ひ遺してゐる。大阪の役畢りて後、家康は卒爾として京所司代板倉伊賀守勝重に打向ひ「本阿彌光悅は如何して居るぞ」と尋ねた。勝重は存命の由答へ、且つ言を添へて「異風者にて京都にも居飽きましたればどこか邊土に住居仕りたきよしを申し居りまする」と言上した。「おうさやうの儀にてあるか。さらば近江丹波などから京都への道にて用心あしく、辻切追剝も出沒するやうな所もあらう、其様な所を屋敷と取らせよ、又在所をも取立てやれよ」との仰せであつたので、伊賀守より命ありて鷹ケ峰の麓東西二百間餘、南北七町の原を賜はることゝなつた。蓋し光悅と板倉勝重とは相識の間柄であつたから、何かの話の序に此やうな希望も出たことがあつたらうと思はれるし、勝重は家康が何氣なく光悅のことを尋ねたを機會とし、光悅平素の希望を取次ぎ、此に鷹ケ峰經營の基を開いたのであらう。時は恰も元和元年のことで、光悅五十八歳のことにかゝる。

光悅の鷹ケ峰經營は普通の文人墨客緇徒隱者の閑居とは異る。光悅は此に信仰を土臺とする藝術郷を建設したのである。石川丈山が詩仙堂に隱れ、松花堂昭乘が瀧本坊に窟を拓いたのとは其選を異にしてゐる、

鷹ケ峰の地たる、「東加茂山、比叡山、如意ケ嶽、北は鞍馬、貴船、鷹ケ峯」とあるやうに、眼界開けて、洛中洛外より・東山三十六峰・我たつ杣、北山一帶は畫圖を披くが如く展望の裡に入つて來る。「西に當て、纔に二町計り隔り、麓に紙屋川水音清く都の內にも住まされりと思ふ計也」「深々たる一溪の水音は木の下闇に聞えて、谷幽に境清く、其末流れて北野の祠後を洗つて遠く大堰川と合するいはゆる紙屋川である。「そばづたひの細道は山かつの通ひ路なり。行はゆき、とまればとまる、月影の猶白き川ぞひの水とよめる。」「樵路鳥徑、道危うして見る目も側だれる。鏡石と呼べる竪横二丈餘りの巖ありて、立寄る人の影を映す。「南に近きは平野、北野、菅家の御廟、木の間にきらめき、いと貴し」「今宮から大德寺、平野も北野も近くあつた。衣笠山も手に取る如く、双ケ岡にも程遠くない。蓋し洛西の好佳處である。更に眸を南に馳すれば「鳥羽田の川浪に淀の川船を泛べ、男山のあなたに生駒ケ嶽、金剛山、三笠山」も目睫の間に在る。「殊に面白きは朝まだき、空は綠に打晴て心にかゝるくまもなきに、目の及ぶ限り霧の海となる、しげりたる森は嶋のごとし、木々の梢は船に似たり、一條の金城、九條の塔、海上に浮みて雲をつらぬく。」とあるは、洵に水蒸氣の多い京の

特色であつた。木屋町三本木あたりの曉、欄に倚りて、東山を望んだ時には烟嵐の變化倏忽なるに興がることも少くない。況して鷹ケ峰あたりの高處に依りて遠山近郊が曉霧の間に出沒隱見し、忽にして嵐氣浮動するにつれて、塔現はれ甍聳ゆるの光景は又なく壯觀たるを失はぬ。「昔は高き草もなき原にて、前關白秀次公、遠目あてをうたせられし所なり、利休居士の御供に參りしに、日本無双の地なりとて、竹の柱にて御茶屋をしつらひ、いつも御茶を召上られける」とあるを見ても、洛外形勝の地であつたことは知られるのである。「不足谷といふ處は、屏風を疊みたる如く、竪横三十丈餘りの岩あり、其下に廣さ二丈計にて、二丈餘に落來る瀧あり、峰の山吹、岩間の躑躅流を染る川の紅葉」四季折々の風景は實にも妙であつた。猶林羅山は此境の清閑なるを叙して、「若し夫れ離外に梅を看れば則ち林を隔て彷彿として背廟の暗香を聞く、況んや又長松に鴻啼くは若耶の風物を移すに似たり、霜後に楓を愛すれば、則ち薄晩に雄峰の秋色に寄するを想像し、しかのみならず脩竹に雪飛ぶは、鐘阜の景氣を借るが如し、此れ則ち鷹峰の四時なり、林泉朝に開け山氣夕に佳に、花は午牖を穿ちて月は紗窓に入る、此れ乃ち鷹峰の朝暮晝夜なり、且つ夫れ樵蘇路に唱へ、耕牧野に遊び、行旅坂に憩ひ、鳥集りて驚かず、獸馴れて畏れず、洛外に在りて人遠からず、市中に非ずして徑に碤あり、江湖ならずして川流あり、此れ乃ち鷹峰の境致なり、境に依りて以て人を思ふ、光悅叟は蓋し其人か」と推賞し措かないのであつた。光悅心閑かなる薄莽に逍遙して心に思ふやう、如何なる故に斯の如き大なる野山を拜領申し、何思ふこともなく過し暮すことの忝さ、今生一世の事にはよもあらじと、ふと若年の折に母妙秀の語り聞かせしことを思ひ出し、「あゝこれ疑もなく我が親の善根の報ではあるわい」と肝に銘して感謝の念措く能はざるものがあつた。

鷹ケ峰の藝術郷即ち光悅町は東西約二百間、南北七町の地にして、東は愛宕郡大宮村字三筑を限り、西は紙屋川を境とし、南は土手に至り、北は愛宕山下の谷を界とした。もと〳〵荒蕪の地を開拓して此に理想の藝術郷を實現したので、此れ一光悅の太虚庵を環りて數十戸の一門及藝術家が集つたのである。邸宅地の間口は光悅の六十間を始とし、土田宗澤の二十六間之に次ぎ、本阿彌宗家光徳の二子光榮、光樂、土田了左衛門、光悅の義子光瑳、彌市、光悅の弟宗知、本阿彌又次郎、尾形宗伯、茶屋四郎次郎、本阿彌三郎兵衛は各々二十間、久保常清、本阿彌一郎兵衛は各々十八間、光瑳の子光甫、宗家光徳の弟光味の子光伯、宗仁、筆屋妙喜、そたに宗右衛門、喜三郎、宗球、あいあみ道有、喜十郎、秋ば多兵衛、大文字屋久右衛門、各々十五間

本阿彌十郎兵衛は各々十二間、宗壽は十二間、たいあみ八郎左衛門、新介は各々十間、孫右衛門、蓮池常有、かめ光榮は各々九間、甚は八間、次郎三郎、伊右衛門、次兵衛、久右衛門、仁兵衛、かめ道賀、次兵衛は各々六間、助右衛門、與右衛門、喜助、仁左衛門　孫助、六兵衛、與兵衛は各々五間、九郎右衛門は四間、此他に間口の記入なきもの、むめたに道安、源兵衛助右衛門、平兵衛、與右衛門がある。尾形宗伯は、光琳　乾山の祖父で、其母は光悅の姉法秀であつた。一門の外には筆屋妙喜あり、紙屋宗仁あり、幕府の御用商人にして分限者であつた茶屋四郎次郎あり、其他の諸氏は多く工藝家であつたらしい。

光悅町は法華信仰を標榜した。即ち法華の鎭所たる常照寺はいはゆる鷹ケ峯の檀林である。「京關東に名を得たる智識を請じ、能化と定む、數百人の諸化たゆることとなし」とあるもので寂照院日乾上人が其開山である。光悅の母妙秀の歿後には妙秀寺の建立あり、又光悅が靜に其餘生を送りたる太虛庵の側には一宇の佛堂をしつくらひ、本法寺の日達上人を請ひて、其開祖としたが、光悅逝いて後に、太虛山光悅寺となつた。

日達は「いかにいわうや佛教をならはん者父母師匠國恩を忘るべしや」と云つた。されば「峯によつてわかめや生ひたると見候へば、さにてはなくして蕨のみ並ひ立ちたり、谷に下つてあま海苔や生ひたると尋ぬれば、あやまりてみるらん岸のみ茂り伏したり、古郷の事適に思ひ忘れて候つるに、今此のあま海苔を見候てよしなき心思ひ出でて憂くつらし、片海市川小湊の磯のほとりにて昔し見しあまいりあり、色形味も渝らず、など我父母かはらせ給ひけんと、方違なる恨めしさ、淚抑へ難し」と、新尼御前の贈りたる海苔に對して風樹の嘆息を漏らしたのであつた。上野殿の消息には佛教の四恩を說いて、父母の恩、國主の恩、一切衆生の恩、三寶の恩に就いて縷々述べる所があつた。

光悅の母妙秀は、嘗て其長女を尾形道柏に嫁したるに、殊の外貧乏であつたので、父なる光二が之を悔んだ時に「貧なるは苦しからず、富貴なる人は慳貪にて疎く成つるやらんと心元なし此聟の親正直正路にて親に孝行の者なり、此事慥に聞及びし故に心に思ひて遣したり、先祖の善心なるに增りたる寶のあるべきか」と云つて之を慰めた。又或時云ふやう、「分に過ぎて親の讓を受けたる人々は猶孝を盡すべし、親死して後、富貴の身として、是ぞといふ程の佛事もなさず、一生の恩を忘れて其忌日計にさせる問えもなき僧唯ひとり二人請じて弔ひ申分は不足なり、自ら香花を供養し、慇懃に給仕をもすべし、又親が借金負たるは子に讓るべき者をゆたかに遣ひたる故なり、又親の苦に拵たる借状をさき捨たる子は、佛神の御惠背て天命に叶ひた

るを數々見たり、かへすぐ＼慾深く貯へ置たる金銀を譲りに請る事は恐しき事なり」と、先祖の善根、之に酬ふる子の心掛は妙秀の日頃に於ける敎訓であつた。光悅は親の恩を深く身にしみて感銘した人である。又ゆめ／＼禁裏の御用を疎末に思ふべからず、日本國中は神の御末にて、皆々禁裏様の物たり、これをあらはに申せば禁裏様の御先代の事まで恐れ多くも罷出詮なき事也、只我等子孫のものは、これを心に忘るべからず、殊に先祖代々墓地も王城にあればこれを自然江戸表へ引越し候得ば麁末になり申すべし、是非引越被仰付候はば、嫡家は御斷、別家の衆一兩人引越可被申哉、同じくは是も好まぬ事なり」と其子孫に遺訓したほどに國主の恩を痛切に感じた人である。彼の信仰は先祖の善根に酬ひんが爲に、親の恩に報ぜんが爲に、國主の恩を返さんが爲に熱烈となつたのである。常照寺の建立と云ひ、妙秀寺の創建と云ひ、いづれも其信仰の發現であつた。

世の日蓮を説くもの、多く折伏の日蓮を崇めて、懺悔滅罪の日蓮に及ばざるは何が故ぞ。佐前の日蓮に歸依して、佐後の日蓮を忘れ、身延の日蓮を遺つるは何が故ぞ。懺悔滅罪の日蓮、佐後の日蓮、身延の日蓮を説かないではないが、其學ぶ所の迹は、折伏の日蓮、佐前の日蓮であつて、眞の日蓮を認めてゐない。彼等に云はせれば大に認めてゐると云ふであらうが、其言のあとから、美事に裏切つてゐるではないか。「日蓮を不便と申しぬる弟子どもをも助け難からん事こそ嘆かはしくは覺え候へ、いかなる事も出來候はゞ是へ御渡りあるべし見參らん、山中にて共に餓死し候はん」（乙御前へ消息）と云ひ送つた日蓮、「實に佛になる道は師に仕ふるには過ぎず」、「世間の人の有様を見るに、口には信心深き事を云ふといへども、實に神にそむる人は千萬人に一人もなし」「たのしくして若干の財を布施すとも、信心弱くば佛に成らん事叶ひ難し、縦ひ貧なりとも信心強うして志深からんは佛に成らん事疑あるべからず」、「此等をさまぐ＼思ひつゞけて觀念の牀の上に夢を結べば、妻戀ふ鹿の聲に目をさまし、我身の内に三諦即一一心三觀の月曇り無く澄みけるを無明深重の雲引覆ひつゝ、昔より今に至るまで生死の九界に輪廻する事此砌に知られつつ自らかくぞ思ひつゞけける。立わたる身の浮雲も晴れぬべし、絶えぬ御法の鷲の山風」（身延山御書）と述懐した日蓮、「たゞ女房と酒打ち飲みて南無妙法蓮華經と唱へ給へ、苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思ひ合せて南無妙法蓮華經と唱へゐさせ給へ、これ豈自受法樂に非ずや、いよ／＼強盛の信力を致し給へ」と打寛ろいだ日蓮は、風雨一過の後の春日遲々たる如きものであつた。

光悅の建設した、いはゆる光悅町は信仰を土臺として、藝術を樂む平和の文化村であつた。光悅を環れる多くの人は、いづれも藝術にいそしむ人、若くは趣味に生きる一門同志の人々であつて、皆是れ法華題目の信徒であつた。鷹ヶ谷塚原の祖述者でなくして、身延の閑居を慕ふ歸依者であつた。固より身延は山深く谷幽なる險阻の地であつた。「哀を催す秋の暮には草の庵に露深く簷にすがくさゝかにの糸玉を連ぬき、紅葉いつしか色深うしてたえだえに傳ふ懸樋の水に影を移せば、名にしおふ龍田の河水上もかくやと疑はれぬ、又後ろには峨々たる深山聳へ、梢に一乘の果を結び、下枝に鳴く蟬の聲滋く、前には湯々たる流水湛へ、實相眞如の月浮び、無明深重の闇晴れて、法性の空に雲もなし」、かゝる砌なれば、庵の內には晝は終日に一乘妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲のみす」と云へる光景と境涯とであつた。鷹ヶ峰峙ち、紙屋川流れ、人里離れた新開地ではあつたが、京洛を去ること遠からず、露霽るれば、帝都は碁石の如く魚鱗の如く、白堊碧瓦は其前に展開されゐる地であつた。一門同志の人々は其周圍に聚りて、和氣融々たる別天地であつた。質素淡泊の生活ではあつたものの、何不足とてはなき裕かな暮しであつた。光悅の境遇は日蓮のそれとは全然異つてゐる。然し光悅は又日蓮の遺訓を奉じて、法華の熱烈なる歸依者であり、國恩を忘れずして、心に惡魔の影のさゝぬやうにと、偏に信心怠らずあつたのである。彼の周圍の人も亦同樣の信心者であつた。日蓮が「在家の御身はたゞ餘念なく南無妙法蓮華經と御唱へありて僧をも供養し給ふが肝心にて候なり」と教へ「樊噲張良もよしなし、唯心こそ大切なれ、如何に日蓮祈り申すとも不信ならば濡れたるほくちに火を打掛るが如くなるべし、勵みをなして强盛に信力を出し給ふべし」と勵まし「花は開いて果(このみ)となり、月は出でて必ず滿ち、燈は油をさせば光を增し、草木は雨降れば榮ふ、人は善根をなせば必ず榮ふ」と諭したる其訓誡を堅く守りて、平和を樂み、念々に信仰を怠らなかつたのであつた。

三

本阿彌家は世々刀劍の鑑定・磨礪・淨拭を家業としてゐたので、文藝の家ではなかつた。世襲的に技藝の人を出したが、藝術家を出すことはなかつた。然るに光悅に至りては燦然たる一個の巨匠で、いはゆる光悅流を開き、宗達光琳の先驅者として、藝術界に革命の炎を擧げたのであつた。足利時代以後萎靡して振はなかつた土佐派は、彼に依りて此に新生命を賦與せられ、狩野派全盛の世に清新なる裝飾畫風を開いたのである。

光悦は多技多藝であつたが、未だ畫家を以て自ら居る人ではなかつた。嘗て松花堂があら壁に現はれた繪姿を寫せるを見て、「我も繪は少しはかく事を得たりと雖も、中々其妙に至らざればあら壁の模樣をよき繪の手本とも知らず、勿論古來よりあら壁に繪の姿あると申すことは、聞傳ふるといへども、まのあたり惺々翁のかきとられしにて疑もはれ、何事も上達せざれば、其奥義をとられぬものと、今更の樣に思ひぬ」と云へるは、多少、謙遜の意味もあらうなれど、光悅の畫技は未だ其堂室に上るものではなく、其畫蹟とても多くは傳はらず、其の存するものは裝飾的意義を持ちて得意の書風と調和する一種の圖案であつた。されば彼は髹漆の技にも之を應用して非凡の腕前を見せてゐる。之を宗達に比し、之を光琳に比すると、彼の畫技は未だ多く云ふに足らないが、宗達を起し、光琳乾山を作つたものは此圖案であつた。

光悅は狩野永徳に學びたりとも云ひ、又海北友松に學びたりとも云ふ。其のいづれにしても、時代が時代だけに、桃山期の豪華な藝術の系統を承け繼いでゐる。松花堂は同じく桃山期の山樂より畫を學んだと云ふことであるが、牧溪因陀羅の風を慕ひて水墨に淡雅輕妙の趣を見せた。光悅は土佐に着眼し、桃山の豪華を土佐の渾厚に加味し、彼の淡素の風格を以て之を豪放にして高雅のものと醇化したのである。

然し彼は唯に創設者に過ぎなかつた。其技巧は猶未だ洗錬の境に到つたものとは云へない。多くは金銀泥を以て大膽なる手法を圖案樣に試みたものであつた。されば彼が之を以て髹漆の上に現はし、之を製陶の上に表はす時に雅味横溢して逸宕の趣云ふべからざるものがあつた。猶靜に考ふる時は彼の畫法は髹漆より發明した所があつたかも知れぬ。然しそれだけ彼の畫は大規模のものではなかつた。

光悅に依りて創められた清新の畫風は、宗達の優れた意匠と秀でた力量とに依りて畫界を吹き捲くる大運動となつたのである。宗達は其手法を大畫面に試みて、不調和の裡に調和を求め非法非式の間に法式を示し、色彩、諧調と物象の交響樂とを畫圖の上に頗る快く、力強く、魅するが如くに發表したのであつた。更に之を集大成して技巧の鮮やかさを見せたのは光琳であつた。裝飾畫は是に至りて其最高潮に達したのである。

光悅の祖父光心は光悅の父光二を養子として後に實子光刹を生んだ。即ち本阿彌家の嫡流である。光悅は光刹の女を迎へて室としたと云ふことであるし、光刹の一女は宗達に嫁したとも云はれてゐる。此ことに關しては猶史料が乏しいのであるから明確に何かと斷言することは出來ないが、若し如上の說を眞な

りとすれば、光悦と宗達とは親しい姻戚であつたのである。宗達の一生は光悦のそれとは異りて、何等の文献が備はつてゐない。かほどの巨匠でありながら、畫史中に載錄するものは、いづれも貧弱なる史料で、僅に雲間に片鱗を認むるに過ぎぬ。光悦と彼との間柄さへ畫風の共通を外にしては、何等根據とすべき材料がないのである。彼の墓碑さへも不明である。現に彼の墓碑として傳へられてゐる金澤市寶圓寺のものは全く信用するに足らない。光悦と宗達の姻戚關係も果して事實なりや否、頗る疑はしい。

光琳と光悦との血族關係は宗達のに比すると、甚だ確かである。光悦の伯母法秀は前にも云つた如く尾形道柏に嫁してゐる道柏の子宗伯は光悦町の住人であつた。宗伯の子は宗謙、宗謙の子は即ち光琳及び乾山である。宗謙は少時光悦の書風を學び、光琳は親しく光悦に師事するに及ばなかつたが、書と蒔漆とに於て光悦を祖述し、乾山は書と製陶とに於て光悦に私淑し、いづれも之を大成したのである。又宗達と光悦との姻戚關係は確かでないにしろ、藝術に於て宗達が光悦より得る所のあつたことは疑ふ餘地がないのである。此三人者は光悦の泉から流れ出て瀬をなし淵をなし、各々急灘大江となつたのである。

宗達の信仰に就いては固より詳かでない。尾形家一門が法華の信者であつたことは又云ふを須たぬ。光悦町の住人尾形宗伯は法華の熱烈なる信者であつたに相違ない。其子孫も之に歸依して、いづれも法華の信者であつた。藝術界に新しい門閥を作りて大族となつた狩野氏が法華信者たりしとともに、藝術界の革命兒本阿彌光悦も尾形光琳も法華の信者であつた。光悦が作つた信仰の町藝術の鄕は又此に藝術の革命氣運を促進したる偉大なる光琳を育成したのであつた。日蓮曰く「此經文(法華經)は一切經に勝れたり、地走る者の王たり、獅子王の如し、空飛ぶ者の王たり、鷲の如し」と。日蓮が獅子王、鷲の如かりしと同じく、元信・探幽も獅子王・鷲の如くあつた。光悦、光琳も亦之れ地走る者の王たり、空飛ぶ者の王であつた。

多技多藝であつた光悦の最も自ら得たりとしたのは、書であつた。其師事する所は確かでなく、或は近衞三藐院と云ひ、近衞龍山と云ひ、若しくは尊朝法親王、素眼法師なりと稱し、說く所の師傳は一樣でないが、思ふに其初めいづれにか、師事する所のあつたであらうが、尊朝法親王は正に恐らく其人に違ひない。「靑蓮院御門主の御弟子近衞應山公、瀧本坊、私(光悦)三人は筆道の御傳を請候節、御門主被仰候趣は、今日筆道の傳不殘濟候上は、三人共自分の流儀を被建可然候」とあるが如く、靑蓮院門跡即ち御家流の本家尊朝法親王は光悦に筆道を傳授した

のであつた。光悦は之を以て滿てりとするものではない。法親王が自家の流儀を建てよとの敎に從ひ、空海を學び道風に倣つたであらうが、猶筆道の源泉に遡りて專ら王羲之を稽古したことゝ思はれる。光悦の書風は和樣の羲之とも見るべきものがある。其の蘭亭記を評して、「王羲之が筆、一生の出來物なり、鼠の鬚の筆にて書し、二十八行三百二十四字あり、同じ文字は別體を書く中のも、之の字多し、二十許さまぐに變じて、其體同じからず、されば、論者其筆勢を稱して、遊雲の若く、驚龍の若しと、この遊雲、驚龍の詞、手蹟の活法なり、世上筆法を沙汰するにいくつ書いても字形のかはらざるよしを思ふ、このかはらぬ筆格は遊雲にあらず、驚龍にあらず、皆死筆なり」と云つてゐるが、王羲之が古今の筆道の第一人者たることは、光悦夙に之を知了してゐる。臨池の技に遊ぶもの、誰しも此源泉を汲まぬものはなからう。奈良朝の筆蹟を見ても、平安朝に入りて、嵯峨帝を初め、空海・道風・佐理・行成・澂勢の徒皆之に出入せざるものはない。嘗ては正倉院の勅封倉に、多くの羲之献之の眞蹟を傳へてゐたが、いつの世にか人間界に出て、其蹤跡を失つた。或は嵯峨帝あたりが好書の餘、之を勅封倉より借り出で給ひ、禁裡に留めて置かれたのが、類火とゝもに、燒亡したのではあるまいか。今日間々羲之の筆蹟として什襲の奇寶とし推賞し措かざるものも、雙鉤塡墨であつて、眞の筆蹟ではない。雙鉤と雖も固より珍寶たるには相違ないが、永く其眞蹟を観るに由なくなつたのは、藝苑の一大恨事と云はねばならぬ。然し其拓本刻本に就いて之を見るも、優に第一の巨匠たることは疑ひない。光悦が直に此源泉に遡つて其甘露水を掬したことは殆んど斷定して憚らざる所である。但し世間に流布する光悦の筆蹟なるものは、多く魚目名珠に混じて、いはゆる光悦流の書は取りて盡く之を彼が直筆と見做されてゐるが、このいづれを眞筆なりとするやに就いては、固より嚴格なる批判を待たねばならぬ。

畫に就いては甚だ謙遜してゐた光悦も書に於ては得々として當代第一を以て自ら任じてゐた。五月雨の晴間に、前栽の池のほとりなる熊笹から點滴の落つるを眺めて、筆意を工夫したと云ふ挿話は、事實かどうかは明かでないが、名家の刻意鏤心には往々このやうな逸話も傳はるものである。とにかく彼は諸名家の筆蹟を研究し、最後に王右軍の堂奧を窺ひ、遂に光悦流なる一流を建てたのである。先づさて、次は君、次は八幡の坊なりと云つて、當時三筆の一筆であつた近衞三藐院と松花堂昭乘とを眼下に見たところに、彼の自信の深さが偲ばれるのである。後世に珍寶視せらるゝはさる事ながら、其の當時に於ても

いたく賞美せられ、「人求むるもの多く、繊素戸に盈つ、獲るあるもの什珍襲す」る勢であつた。「花鳥風雲之を心に得て後、倭字漢字之を手に應ず、故に心、筆の前にあり自ら一家の法を成す」とは彼の宣言であつたほどに彼は心織筆耕したのである。而して彼　畫技に要するに昔の背景に過ぎなかつたのである。

彼の髹漆に至りては　其の畫と同じく豪放にしてしかも韻致に豐に、意匠の非凡と風格の高雅と相待ちて髹漆界に異彩を放つてゐる。桃山の豪華は光悦の風流に依りて此に洗錬せられた趣味を生じたのである。光琳亦之を學んで目覺しきものを作り出したが、光悦と光琳とが其人を異にするが如く、寛永と元祿とが其時代を異にするが如く、兩者の間には又多少の相違がある。其餘技たる製陶に雅趣横溢せるは、彼が茶道趣味の深き所以である。彼れ自ら云ふ、「予製陶に於ては松花堂に倣りたるも固より家業に非ず、たゞ鷹ケ峯の良土を見て時に作るあるのみ、強ゐて名を製陶にて揚げんとする念更に無し」と。既に名譽を求むるの意なく、匠氣衒氣を絶つて行雲流水、心に任せて作り出したところに彼の陶器の味は存するのである。

四

北山時雨のはら〳〵と降れる日、本法寺に光悦作の三巴の庭を見た。庭は一種の謎であつた。處々に奇石を構へ配するに樹木と石燈籠とを以てしてゐる。東に立てるは瀑布と見立てたもので、石燈籠は北に峙ち、西に奇石の組み合せがあり、各々一角の巴狀を形づくるところから、之を三巴の庭と云ふとのことである。中央に長方形の切石八本を幷んで、一泓の池に象り、内に杜若を植ゑて、之を八ツ橋と稱してゐる。然も庭中一水の流るゝなく、一泉の迸るものもない。此種の庭には龍安寺のと大仙院大德寺方丈のとがあるが、三巴が最も難解である。

龍安寺にあるは滄溟波濤の間に點々たる島嶼を象つたもので、大仙院のは溪流急灘を現はしてゐる。大德寺方丈のものは叡山東山洛陽の大觀を一眸の裡に收めたところに意匠の慘澹たるものがある。本法寺の林泉は奇を求めずして奇に、法を離れて法を得たと云ふ點に其卓拔の意匠が窺はれる。初めて之を見た時は一種の謎とも見られたのであるが、次第に之を見もて行く時に、謎は瞭然と解かれるのである。

總べて是れ彼が畫と髹漆との如きものである。之を象徴主義の庭と云つても差支はあるまい。然もそこには狩野派と土佐風との調和があつた。佐野の舟橋硯箱、子の日の桐に於ける髹漆の意匠と技倆、和歌卷物に於ける繪畫の品致雅味とは、又三巴の庭に於ても遺憾なく現はれてゐる。「北は鷹峯山と申して、天に

はしだし南はたかとりと申して鷄足山の如し、西はなゝいたがれと申して鉄門に似たり、東は天子がたけと申して富士の御山にたいしたり、四ッの山は屏風の如し、北に大河あり、早河と名づく、早き事箭を射るが如し．南に河あり、波木井河と名づく、大石を木の葉の如く流す、東には富士河北より南へ流れたり、千の鉾をつくが如し、内に瀧あり、身延の瀧と申す、白布を天より引くが如し、此内にいさゝかの地あり、日蓮が庵室なり、深山なれば晝も日を見奉らず、夜も月を詠むる事なし、峯には巴峡の猿かまびすしく、谷には波の下る音鼓を打つが如し、地には敷かざれども大石多く、山には石礫より外に物もなし、國主は惡み給ふ、萬民は訪はず、冬は雪道を塞ぎ、夏は草をひしげり、鹿の遠音うらめしく〱蟬の鳴く聲かまびすし」（妙法尼御返事）とある、身延を象つたものではないが、本法寺の方丈に結伽趺座して靜に高祖が懺悔滅罪の修行を思ふ時は、前栽の泉石盡く鳴り、樹木皆蹉ひて、四山環抱し、急湍駛流するかの感を起すであらう。麻衣着つゝ馴れにし昔男のみやび姿は土佐繪の好畫題であつた。庭前の八ッ橋は宛然たる髹漆圖案である。之に對するときは詩趣畫味旺然として一泓の裡から迸るであらう。

然し林泉は固より身延を摸したものではなく、唯彼が茶道趣味から出た意匠である。そこには北畫式の峻嶮たるところはなくして、流暢なる軟かな味があつた。大膽ではあつたが、聱牙ではなかつた。しかも此林泉には更に局促たる所がない、煩瑣たる所がない。孤蓬庵の林泉は、美は美であるが、餘りに煩瑣であるし、高臺寺の林泉は巧は巧であるが、どこやらに局促たる所が見える。光悦には型がなかつた、形式に囚はれる所がなかつた。

光悦は茶の湯に深く趣味を有し、自から茶を立てて生涯の慰みとした。茶道の賊は先づ千利休に初まり、遠州に至りて其弊百出してゐる。利休が茶道の賊なるは光悦既に之を喝破して、利休の教への惡しきを説き、「此度の餘毒今に絶え申さず。名人の上にてもケ様な誤これあり候。茶を好むとも珍器にかゝはるべからず、道具はあるに任せ、若しや手前餘ある人は其身相應に道具を遣ふべしと紹鷗は敎へ申され候由」と訓へてゐる。此道を執し申さば行住坐臥皆茶湯なるべきである。されば光悦は鷹ケ峯に太虚庵を建てゝ、都にはまだ知らざる初雪の朝は心面白ければ寒さを忘れて自ら水汲み釜しかけ、程なく煮え音づるに興がり、都の方を打ながめて、問ひ來る人もがなと、松の梢の雪の朝風に吹き拂はれて木の下蔭にしばし殘るを惜んだのであつた。

當時流行した茶道に多く茶道の賊の茶道であつた。光悦は之

を苦々しく思ひ、「是も殊の外物の入る數にて」と冷笑したのである。風流恬淡にして簡素を喜び、高雅を好んだ藝術味の深かつた彼からゝ世の茶人を見たならば、いづれも茶道魔であつたに違ひない。若し彼を再生させて、光悦會を見せ、鷹ケ峯の古藝術郷に競つて建てた、茶道魔の茶室を見せたならば、果して何と見たであらうか。薄翠の手水鉢は木石の身の固よりそれと言はず語らずであるが、若し靈あらば定めしありし世を戀しくなつかしむだであらう。苔も蒸さず、草も刈り取られ、落葉も掃き清められた太虚庵の跡には、あれでも風流の意義があらうか。

三巴の庭は彼が鑿技髹漆技から出たすさびであらうが、茶道趣味に基いたことは云ふまでもない。鑿と云ひ、髹漆と云ひ製陶と云ひ、一に是れ茶道趣味の發露に非ざるものはない。時雨は茶の湯趣味である。時雨の降り濺ぐ三巴の庭は一木一石盡く之れ茶道趣味であつた。

土佐繪には茶道趣味が無かつたが光悦は土佐繪を茶道化した。昔男の業平は茶と緣が無かつた。然し八橋も斯う切石で塑まれると茶道化する。日蓮は濃い油のやうな酒の味を知つてゐたが苦い茶の味は知らなかつた。恐らく呑ませたところが厭だと云つたに違ひない。然し身延の庵室は茶道趣味である。懺悔滅罪の修行は茶道趣味と脉々たる脊信が通ずる。光悦の法華信仰は信仰の茶道化である。そこには藝術味があり、光悦の藝術があり、國民趣味の藝術がある。

松籟の太虚庵裡から起るは、之れ茶鐺に湯のたぎる音であつた。水は固より清冽、水晶の如き寒泉から汲み來つたものである。沸々として大珠小珠の鐺中に立ち上るを靜に茶杓に受けて手づくりの樂燒茶碗に移す。茶道の名人が帛紗捌き、茶筅の働きは美事であつた。無數の蟹のやうな泡には新綠の色を泛べてさつと香氣が迸る。光悦はと見から見、其色と其香とにしんみりと見入つてゐる。其色には趣味の洗錬さが漂ひ、其香には藝術味の匂が高くあつた。光悦は押戴いて之を啜した。一口又二口、趣味と藝術味とは五臟六腑に浸み入つて、心境は更に清爽なるを覺える。王右軍の書容海道風の筆は幻の如く彼が眼前を徂徠する。東山の風韻桃山の品藻は電の如く彼が腦裏に反映する。彼は莞爾として會心の笑を漏らしたのであつた。暫くして彼は坐を離れて庵側の佛堂に入つた。正面には妙法の曼陀羅が燈火に映じて光明赫灼として耀いてゐる。「此曼荼羅は文は五字七字に候へども、三世の諸佛の御師、一切の女人の成佛の印文」であつた。「冥途にはともしびとなり、死出の山にては良馬となり、天には日月の如し、地には須彌山の如し、生死河の船なり

成佛得道の導師」であつた。光悦は恭しく額づいて題目を唱へ初めた。「題目とは二意あり、いはゆる正像と末法となり、正法には天親菩薩、龍樹菩薩題目を唱へさせ給ひしかども、自行ばかりにしてさて止みぬ、像法には南岳天台また題目ばかり南無妙蓮華經と唱へ給ひて自行の爲めにして廣く他の爲めに說かず、是れ理行の題目なり、末法に入りて今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異り、自行化他に亙りての南無妙法蓮華經なり、名體宗用教の五重玄の五字な」る其題目であつた。其聲は堂內の空氣を震はせて、常照寺に響き妙秀寺に響き、光悦町全體に響き、鷹ケ峰に反響し紙屋川に反響する聲であつた。皆一同に唱ふる題目の聲であつた。「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙蓮華經は萬年の外未來までも流るべし」（報恩鈔）との宣言は徒爾でなかつた。日蓮又云ふ、「故に一度妙法蓮華經と唱ふれば、一切の佛一切の法一切の菩薩一切の聲聞、一切の梵王帝釋閻魔法王日月衆星天神地神乃至地獄餓鬼畜生修羅人天、一切衆生の心中の佛性を、唯一聲に喚び顯し奉る功德無量無邊なり、我が己心の佛性南無妙法蓮華經とよびよばれて顯はれ給ふ處を佛とは云ふなり譬へば籠の中の鳥なれば、空飛ぶ鳥の呼ばれて集るが如し、空飛ぶ鳥の集まれば、籠の中の鳥も出でんとするが如し、口に妙法を呼び奉れば我身の佛性も呼ばれて必ず顯れ給ふ。梵王帝釋の佛性は呼ばれて我等を守り給ふ。」（法華初心成佛鈔）と。光悦が唱へ、光悦町の人々が唱ふる所の題目は佛性を呼び起す聲であつた。惡魔の影のさゝぬ佛性を呼び起す聲であつた。此心を以て藝術に對するのであるから、其藝術は眞實の藝術で虛僞の藝術ではなかつた。名の爲に利の爲に、邪推嫉妬の爲に、怨嫉爭鬪の爲にする似而非藝術ではなかつた。茶の湯で心の澄み渡つて藝術味の橫溢した光悦は題目で一切の妄念妄執を去りて、心のゆく儘に其緊張した創作力を、作品の上に現はしたのである。光悦町の人々の上には平和な祝福があつたとともに其中心なる太虛庵には眞實の藝術が輝いたのである。茶道と題目とは彼に取りて一にして二でなく、彼の藝術は其裡から油然として生れ出でたのである。

五

光悦死してより八十年を過ぎ、光瑳、光甫、光傳を經て光通の世に至り、彼の遺訓は空しく、江戶移轉となりて、光悦町は全くの廢墟となつた。之より先、光傳の時、延寶七年領地返納となつたのであるから、當時既に其實を失つてゐたに違ひなく、江戶移轉は畢竟其餘波に過ぎなかつた。鷹ケ峰松林も光悦寺も今は往時を偲ぶよすがに外ならない。近年光悦會の起るま

では、荒れ果てた廢墟と化したのである。よし其保存の法に異義ありとするも、光悅寺の再興を見たのは光悅會の力と云はねばならぬ。

光悅町の廢墟に一點の紅を永く留めたのは名妓吉野の墓である。日は落ち、雲暮れかゝり、洛中の町々には燈火が點々と隠見して、山紫に薄靄に包まれんとする頃、常照寺の殘礎廢宇のあたりをさまよひて、寒煙荒草の間に吉野の墓を弔つたことがあつた。其後吉野墓石修理の擧があつて茶會の催しもありしとは聞いたが、予が尋ねたのは、其の以前であつた。灰屋紹益との情事を以て知られた名妓は其一生の短かつたにせよ、艶名は永く朽ちなかつた。其の死するや、紹益は都をば花なき里となしたと嗟嘆し、情人の遺體を灰として之を酒とともに呑み畢つたと云ふ。俚諺子の「灰に粉にして酒で呑む」を實現したもので、之を事實とすると、纏綿たる情事はまことに一驚を喫すべきものがある。紹益果して灰を盡く呑んだとすると、此埋香塚には一體何を埋めたものか知れねど、まさかに全體を呑み盡したのではあるまい。紹益は風流の道數々明るく、最も善く光悅に親炙してゐて、其相思の情人吉野を嫡室に迎へたのも、光悅の肝煎であつたと云ふ。光悅は流石に藝術家で酸いも甘いも嚙み分けた大通であつた。紹益が吉野の墓を常照寺裡に建てたのを見ると、彼も亦法華信仰の人であつたらう。少くとも吉野は法華信徒として其芳魂を鷹ケ峰樹林に留めたのである。「内典の佛法に入りて、五千七千餘卷の小乘大乘は女人成佛かたければ悲母の恩報じがたし、小乘は女人成佛一向に許されず、大乘經は或は成佛或は往生を許したるやうなれども、佛の假言にて實事なし　但法華經計りこそ女人成佛悲母の恩を報ずる實の報恩經にて候へと見候しかば、悲母の恩を報ぜんために此經の題目を一切の女人に唱へさせん」と日蓮は願したのであつた。「法華經と申すは、星の中の月ぞかし、人の中の王ぞかし、山の中の須彌山水の中の大海の如し、是れほどいみじき御經に女人佛になると說かれぬれば、一切經に嫌はれたるに何が苦しかるべき」と日蓮は女人の爲に力づけてゐるのである。光悅町に葬られた吉野の成佛は固より疑ひない。法秀妙秀の優婆夷と關係の深い光悅町は、又此國色無雙の名花に依りて詩化されたのである。

光悅の姉妙光は光德に嫁して一女を生んだ。即ち光瑳の妻となつた妙山である。妙秀は光悅を生んで、此信仰ある藝術家を育て上げたが、其孫妙山は名人空中齋光甫と高僧日允とを生んで之を訓育したのである。妙山は七十八歲の老齡に至るまで一生の内、嗔恚することなく、召仕ふ女童の惡しきことあるも、憎

しと云ふほどの詞を云ひ出したことはない。奉公人出替りの時はいづかたも不自由するに、妙山の家ばかりは男女あまた並び居て、女は縫ひ物洗濯し、男は家の内外を掃除して頗る賑やかであつた。蓋し妙山が情け深き故、もと奉公したものどもの新主人を求め得ざるは、皆此家に尋ね來て此を宿としたからだと云ふ。夫光瑳のみまかりて後は、日に一萬遍の題目を唱へ、人の袈裟かけよと云ふものあるも、勿體ないとて一生白衣にて暮した。其死はまことに大往生にて、死相は二十歳のいかにも氣高き男子の如くに見え、色白く身の和かなること生時に勝つてゐた。名僧ども之を見て今まで見たことのない死相である、是れひとへに一生の間腹立ちしことなく、誠の菩提心深く、行狀よき故のことであらう、美しいことであると、いづれも合掌して感涙を催したと云ふ。日遊は妙法尼が其夫の臨終のさまを報じて、妙法蓮華を夜晝唱へまいらせ、既に近くなりて二聲高聲に唱へ、乃至生きて候ひし時よりも猶色白く形も損せずと云ひ越したに對して、「天台大師御臨終の記に云く、色白し、玄奘三藏御臨終を記して云く色白し、一代聖教を定むる名目に云く、黒業は六道にとどまり白業は四聖となる、此等の文證と現證をもて考へて候に、此人は天に生ぜるか、はた又法華經の名號を二反唱ふと云々、白粉の力は漆を變じて雪の如く白くなす、須彌山に近く衆色は皆金色なり、法華經の名號を持つ人は一生乃至過去遠々劫の黒業の漆變じて白業の大善となる、いわうや無始の善根者變じて金色となる業となり」と云つてゐる。光悅一家が信仰の篤きは、又日允々出して九族大に歸る功德を遂げたのである。

大虛庵を環りての空氣と天地とはまことに平和で、靜穏で、融々たるものがあつた。優秀に教へられ、信仰に育てられた光悅は、平和の中心として最もふさはしくあつた。然も其に流れた共通の潮は藝術であつて、彼等光悅町の人々はいづれも之に捧したのである。斯る美しい團結は將來はとにかく過去の日本に於ては極めて異數な現象であつた。信仰に依りて藝術をり出したものは多々ある。藝術を中心として文人の會合は少からずある。然し信仰に立脚して藝術を樂んだ一門同志の結合した文化村に至りては全く他に比類がないと云つて差支がない。しかも此團結は六十年ほどの久しい間繼續したのであつた。

光悅歿して光悅町は其中心を失つた。しかし太虛庵は光悅寺となり、光悅の子光瑳孫空中庵光甫は光悅の素志を繼承して敢て渝らなかつた。曾孫光傳の世に至り、明曆年間、由信登韻の二沙門あり、常照寺にゐて題目を唱へた。其後二人相議して太虛庵の地にて常唱題の行を修めんことを請ひ、光傳は境内の地を喜捨して、此に常題目堂の建立を見るに至り、二六時中唱題

の聲綿々として絶えず、晝夜退轉せず讀誦の行を作したのである。深草の元政、爲に太虚庵記を作りて、「夫れ末法の要路は唱題に過ぐるなし、一門のいはゆる本化薩埵直に靈山に於て親しく此法を承く、乃ち衆生の大本諸佛の達道なり、其の圓融と曰ひ、中道と曰ひ、實相と曰ひ、一相無相と曰ふは、皆此法を詮ずるの詞のみ、其の所詮の如きは、是れ妙法蓮華名外無體、體外無名なり、若し文を以て之を覓め、義を以て之を取れば、則ち其のいはゆる妙法に非ざるなり、吾祖曰く今末法に至りて餘經法華倶に用なし、惟此唱題のみ、此れ徹上徹下の語にして、乃ち行者の頂門鍼なり」と題目の有難さを唱道してゐる。光悦町は依然として信仰の地であつた。然し光悦甫去りて藝術味は索然として失はれたのである。

藝術味が缺けて信仰のみがのこつたのでは、光悦町の存在はさほどもう必要でなかつた。蒲眾の手水鉢も茶味を失つて抹香臭い唯の阿伽井となつては、そこに悦光町の價値はない。光悦町が解散するのは當然である。然し信仰のない藝術本位だけだつたならば、其解散は或は猶より早くあつたかも知れぬ。信仰のない藝術團體の離合聚散は常ならないものである。とにかく光悦の時まで太虚庵を環りての鷹ヶ峰新開地が維持されたのは、信仰の力と云はねばならぬ。然し藝術を失つた光悦町となつては、よし信仰に依りて繋がれしとは云へ、さほど推稱すべきものではなからう。

今の太虚庵の舊蹟には信仰もなければ藝術もない。信仰の古跡で藝術の過ぎ去りし香をかぐべきだけだ。唯鷹ヶ峰と紙屋川とが、其昔觀を留めてゐるばかりである。蒲墨の手水鉢と、光悦光甫の墓石のみが、ありし世を雄辯に物語つてゐる。

光悦町は信仰と藝術との諧調を表はしたもので、光悦の理想を具體化した者であつた。斯くして宗達も光悦も世に顯はれた

藝術家が黨を結び社を立つるは藝術界にさして貢獻すべきものとは云はれない。まして黨同伐異に至りては具紛々として近づくべからざるものがある。然し光悦町の如く信仰に立脚して藝術を味ひ平和を樂む團結に至りては、人寰の最も美しい羨しい境遇ではないか。別に天地人間に非ざる理想郷ではないか。

地は帝都を去ること遠からず、一望開豁で、眼界は廣く、山あり水あり、物は饒かに、生活難を離れ、人は信仰に依りて心に惡魔のかげのさゝざるを誓ひ、國恩・師恩・父母の恩を忘れず、拘束繋縛の煩累もなく、怨嫉邪念の諸悪を遠け、茶の湯趣味を樂み、藝術の本義を靜に味つて、人生の洋々たる幾十の春を送る。古今東西にかほど理想的な藝術味のある團結が果して如何ほどあつたらうか。方に是れ藝術史上の一異觀である。

病的文明の苦熱を救ふべき老荘哲學の涼味

高須芳次郎

病文明の焦熱地獄

暑い、非常に暑い。身も暑い、心も暑い、靈魂も亦暑い。どうしたら宜いか。海にゆくか、山にゆくか、湖畔にゆくか、森の中へゆくか。無論、海も宜からう、山も宜からう、湖畔や森の中も一層宜からう。それらの淸凉世界へゆけば、多少身に感ずる苦熱を忘れることが出來よう。が、心の暑さ、靈魂の暑さをどうするか。「心頭涼しければ火も亦涼し。」とか、「熱時には熱殺す。」とか禪家者流は心の機微を直下に掴んだやうなことをいふが、私のやうな凡人は、さう簡單に「火も亦涼し。」と片附けてしもふわけにゆかない。

恥をいはぬとわからぬが、曾て私は、野狐禪にかぶれたことがあつた。賴い生活を送る私のことだから、禪寺へ出かけて、和尙に參禪するなどいふ月並式は素より好まなかつた。それに鈍機、鈍根だから、千萬の棒喝を喰つたところが一氣悟了の境地に飛びこめさうもなかつた。それで私は二三の禪書を退屈しのぎに讀んで見たに過ぎなかつた。そしてその感得したところは、ほんの皮相にすぎなかつた。が、不知々々、野狐禪にかぶれてゐた。

「夏が暑い！そんなことでどうするか。それは夏が暑いのではなくて心が暑いのだ。心が涼しければ、印度や南洋の極暑でも物の數ではない。夏がくると、狼狽したやうにして避暑に出かけるやうな人間は、心の苦熱を追ひ拂ふことが出來ないのだ。塵埃にまみれて、大都の眞中にゐても、心の苦熱を去る方法さへ考へ付けば、大都も亦山中のやうに涼しい。どうだ、この工夫に思ひ及ぶなら、涼味千萬年さ。」

私はこんなことを友人に話して、要領を得たやうな、得ぬやうな顏をしてゐたことがあつた。それから私はまた「熱時に熱殺す。」といふことについても、經驗したことを述べた。

「夏になると、誰れも氷塊を嚙んだり、冷めたいものをほ

しがる。それは一時凌ぎの自家欺瞞だ。そんなことで徹底した涼味は得られない。そこで私は考へた。熱時には熱殺するに限る。それは故らに暑苦しい場所へゆくのだ。そしてそこで成るべく暑いものを飲食するのだね。例へば、淺草駒形の鰌汁屋へ出かけて見ると、そこは大抵滿いに近い。十七八人のプロレタリアが、汗を流しながら、眞赤な顏をして鰌鍋をつゝき、熱燗で一杯やつてゐる。一寸見た丈で、もう暑い。けれどもかうした暑い空氣の中へ這入つて、あぐらをかきながら、鰌鍋、鰌汁、鯨の味噌汁などで、あつい酒を飲むと面白い。汗が全身をぬらして、頭や額からは湯氣がぽつぽつと立ちあがる。それを我慢して一時間ばかり飲食してから、駒形河岸へ出た時の涼しさ、颯と吹いてくる川風が汗を氷化して了ふやうだ。寒いといふと語弊があるが、涼味の頂點を味ふことが出來る。つまり、熱時に熱殺した結果だ。」

私は一時、かうした方法で暑さを忘れることが出來た。けれどもやはり眼前口頭の忘暑にすぎなかつた。それは一時間乃至二時間、清涼境を逍遙するやうな快味を與へるだけであつた。その期間が過ぎると、まるで催眠藥から醒めきつたやうに苦熱の意識がよみがえつた。さうすると、徹底涼味は何處にもとめねばならぬか。

正直にいふと、私は年中、心の暑さに苦んでゐる。靈魂さへも燒かるゝやうに暑い。夏に限つて特に暑いのではない。夏季山にゆくとか、海にゆくとかとすれば、身はいくらか涼しいけれども、心や靈魂は依然として暑いやうに思はれる。それはひとり私にのみ限られたことであらうか。

今日は電話によつて、自分の愛する女の涼しい聲を直ぐに聞くことが出來る。蓄音機によつて、涼しい歌澤や、端唄なども聞くことが出來る。冷藏庫、扇風機、氷柱なども自由に用ふることが出來る。人間界を涼しくする設備が次第に進歩してゆくのに、私の心は暑さに喘ぎ、私の靈魂は暑さに呻吟しつゝある。それは私にのみ限られたことであらうか。

私はさうは思はぬ。それは萬人共通の暑さである。文明が今の形の儘で進めば進むほど、文化が現在の方式で發達すればするほど、心の苦熱、靈魂の苦熱は益々加はつてゆくのみであらう。たとひ、私らが千百の氷柱に圍まれやうとも、無數の扇風機を据えつけたところにゐやうとも、雪を戴く山上に起ち、神秘の溪谷にわけ入らうとも、依然として心の苦熱は解け去らぬであらう、靈魂の燒かるゝやうな苦みをのぞき得ぬであらう。それほどにその暑さは執念深い暑さだ。嚴酷な苛辣な暑さだ、魂に

喰ひ入つた暑さだ、心に焼き付いた暑さだ。それは近代から現代にけて大なる勢力を占めた欧米文化の爛熟、頽廃が醸した一種の文明的熱病である。その熱病は欧米一體にひろがつて、今は日本をも惱ましつゝある。深酷に惱ましつゝある。私らがこの文明的熱病を一掃し得ぬ限り、避暑も納涼も忘暑も一架空方便にすぎない。現代は世界を擧げて文明の焦熱地獄のうちに喘ぎつゝあるのだ。そして何人もそれから逃れようとしつゝある。けれどもそれは極めてむづかしい。

病文明の熱苦を救濟する聲

文明の焦熱地獄は、一見、花やかで虹のやうに美しい。そこには蜴蜥(とかげ)の背に見るやうな妖艶な魅惑がある。またそこには孔雀の羽に見るやうな燦爛たる光彩がある。人々はその外面の姿に魅せられて、不知々々のうちに地獄の穴に落ちる。が、仔細にその眞相を見つめると、そこには人生を硬化させ、機械化せしめる大きな罠がある。個々人の生命を枯渇させ、互ゐに背離せしめようとする落し穴がある。

勿論、文明そのものは決して咒咀すべきものでない。文化そのものも敵的視すべきものではない。本來、文明、文化の使命は人類の共存共榮を目的として進歩の過程を辿り來つたのである。それがまだ爛熟、頽廃の域に達しないで、清新、溌溂た勢を持續してゐた頃は寧ろ感謝すべき多くの寄與を人間に致した。つまり、それが本質的、積極的、流動的であつた時代には、人生に對し、個々人に對して新生命を與へ、新希望新光明を投げかけたのである。ところが、それが末梢的、消極的、固定的となるに及んで、人生に對し、個々人に對して、機械化、形式化、硬化を强ゐるやうになつてしまつた。現下の文明が即ちそれである。欧米文化、殊にヨオロッパ文化は今日、全く行詰つたのみならず、それが新たな再生乃至新生の時代に到達するまでは文明的熱病の源泉が容易に枯れさうもない。

近代から現代にかけて見る欧米文化の特徴は政治的にデモクラシイ思想の發展であり、他に於ては、科學の組織、機械の發明、分業の發達であつたと思ふ。科學の組織は、天地及び人生に於ける秘奥の一部を闡明した。その知識が實地に應用せらるゝに及んで、各種の機械發明を生んで、半ば自然を征服するやうになつた。そして機械による分業の派生と發達とは、産業上の能率を非常に増した。が、それらの利益に併行して、他面では、いろいろの弊害を醸し出した。科學は多くの便益を創造したに代りに人間を機械化し物化する動力となつた。科學そのものには罪はない。けれども、その活用が機械の發明となつて、人

生のための機械といふよりも、機械のための人生といふことになつた。そしてさうした人生に於ける分業の進步は、產業上に資した代りに世界各國に於ける通商、貿易の競爭を促がし、勞資爭鬪の源泉を作つた。それは貧富の隔絕、人間の黃金化、あらゆる物慾追求の精神などを惹起すところの動因ともなつた。そしてそれらの影響は、やがて萬人をして感覺本位の享樂生活に沒頭せしめる罠を生ずるに至らしめた。

物はすべて極端に傾くと有害となる。宇宙、萬有の秘奥をあばくと同時に人間の知識を形作り、組織立てようとした科學は、それが極端に尊重せらるゝに及んで、人間を物化するやうな弊を生んだ。生活の利便と快樂とのために、創造せられた機械は、それが過度に亂用せらるゝやうになつて、人間を機械化する一大害を醸した。個々の技術を深く鍛錬させ、仕事を敏活に捗取らせようとして起つた分業は賃金勞働者の群を生じてそれが多くなればなるほど、生活難と勞働苦とを惹起すの餘儀なきに立至つた。かうなると人間は勢ひ一齊に物質慾を中心として動くやうになる 靈魂の問題、生命創造の事、意義ある藝術の事などは、すべて第二義以下に取扱はれて、唯物慾の人生、感覺本位の人生が展開せられる。物慾には限度がない。從つてその追求について、人々は最期まで自らあせり、互ひに爭ふ。感覺本位の生活には、どうしても皮相的享樂が附纏ふために、何人も刺戟から刺戟を追うてやまない。そのいづれも、強く押しつめられると、自己破滅に終るのである。それが個々人の上にひろがると、一國の破滅になる、更にもつとひろがると、人類の破滅となる。かうした狀態が私の所謂「文明の焦熱地獄」である。

そこには、意義ある創造がなくて咀ふべき停滯がある。新生の喜びがなくて厭ふべき頽唐がある。力ある統合なくて精致な分析のみがある。意志透徹の生活がなくて、感情放恣の生活がある。靈魂の目ざめがなくて、物質追求の盲動がある。友愛や協同がなくて爭鬪と貪慾のみがある。眞實と自然味がなくて虛僞と形式のみがある。かうした人生は、いかにも退屈だ 單調だ、索漠だ、不安だ、動搖し易く、くづれ勝ちだ、すべてがばらばらだ。機械化し物化して些の靈動がない。すべての人々が利己に傾いて、天眞を失ひ、わが儘になり、爭ひ好きになる。心がいらいらして均衡を失ひ、靈魂が慾に燃えて苦みもがく。咀ふべきは文明の焦熱地獄である。

かうして文明的熱病の流行を防いで、人々を焦熱地獄から救ひ出さうとして、覺醒の叫びをあげたのは、モリス、カアペタア、ラツセルらである。マルクス、クロポトキンなども物的方面から人生を救濟し、文明の弊を排除しようとした。ウエル

ズ、エレン・ケイ、パルピエスらも文明的熱病をはらひのけようとする叫びを起した。カアペンタアが生活の簡化及び産業ご勞働の藝術化を唱へ、ラツセルが所有慾を斥けて創造の衝動を力說したことなどは、文明的熱病救濟の一方便として、深く共鳴すべき點がある。それらは、心の苦惱、靈魂の苦悶の上に少からぬ涼味をもたらすものである。

が、文明的熱病の救濟については、夙に東洋に於て先聲をあげた哲人があつた。それは支那の老子、莊子及び列子などである。それらの哲人が周末文化の頽廢を救ふべく、新しい發聲をしたことは、啻に當時の弊害に適切たばかりではなかつた。今日の文明的熱苦を救ふ上にも矢張適切なところを多く持つてゐる。西方の哲人から餘り多く聞き過ぎた人々は、翻つて東方の哲人から、もつと聞かねばならぬ時が來た。無論、私は東方の聲が、すべてに於て西方に優つてゐるとは思はない。が、在來東方の聲には耳をふさいでゐたものが少くなかつた。「光は東方より」といはれたけれども、東方の文藝、哲學は日本に於て、一般閑却せられてゐた。東方の聲はそれほど貧しいのであらうか、時代に縁遠いのであらうか、弱々しすぎるのだらうか。私はさうは思はない。東方の聲は、思想の上で西方の聲よりも、もつと深味がある、力強い線がある、超越味がある、直觀的鋭さがある。この點で東方の聲は西方の聲よりも遙かにすぐれてゐる。西方の聲を愛する人たちは、より多く東方の聲を愛すべき筈である。それほど、東方の聲には際立つた特性が漲つてゐる。それで私は兹に老子を說き、莊子を語り、更に列子に言及しようと思ふ。

彼等の思想は、東洋の特徴を最も鮮かに示してゐる。それは分析や解剖や推理を超越してしまつて、直下に物の精髓に味到しようとする傾向である、形相や差別を離れて、瞑想的に宇宙の本體を直觀しようとする趣致である。そこには演繹から歸納へゆくのではなくて、歸納から多少演繹にゆかうとする風が見える。また組織や體系や分類などを輕く見て、感得したところをその儘、端的に投げ出して見せる。これを繪などの上で見ると、一層、東洋乃至支那の特色がはつきりしてくる。一個の油繪と一幅の墨畫とを對照すると、油繪の線條はいかにも緻密で、色彩が濃厚だ。物の形を規張面に寫し出して、迫眞の趣を見せようとしてゐる。ところが、墨繪になると、線條などに頓着しないで、色彩が淡泊で、物の精髓を摑み、形相の裏に縹渺として漂ふ神韻を捕へようとしてゐる。かうした內容上の差別が西方の聲、東方の聲に現はれてゐる。私はかうした特色ある東方の聲を最も愛する。

正直にいふと、私は歐米文化の進展に對して、依然深い注意を拂ふことを怠らぬけれども、その頽唐、爛熟の色には漸く厭嫌を感じないでをられない。少くとも、それに新しい希望を見出すことが出來ない。また西洋の哲學、科學に對しては相當の尊敬を拂ふけれども、それらのうちに於て、最早左程の關心を感じないものが往々ある。殊にその哲學は、二三の代表哲人の述作を除くと、多く尊重すべきものを見出さぬ。それよりもこの點では、東洋の哲學、殊に支那哲學のうちに本質的にすぐれたものを比較的に多く見出すのである。老子、莊子、列子の如きは、いづれも文明的に苦熱の救濟者として最も卓越してゐる。そしてその本流となり、先驅となつたのは老子である。

病文明に反抗した先驅者

老子とは一體、どんな人物か。架空の人か實在の人か、印度人か支那人か、支那人としたら、北人か南人か。實は正確な事實にもとづいて考證をしたものが一つもないのである。穩健な支那學者の說によると、老子は支那の人で、今の河南省歸德府の出身だとしてゐる。それで彼れは北方黄河流域に育つたのであるから、一部の文學者が思想上から老子を南人としたのは當らぬこととなる。老子は北人で思想上、南人らしい傾向を持つたのである。先づ以上のやうな解釋が、今日正しいと見られてゐる。が、それは比較的に正しいので、それとても正確かどうか、はつきり斷じ難い。

老子には、いろいろの傳說がある。彼れは長い間、母の胎内にゐたので、生れ出た時からすつかり白髮であつたとか、耳が大きかつたとかいはれてゐる。ラツセル氏はそれを穿きちがへて、老ひた哲人だから、老子といつたと書いてゐる。フランスのラフイツト氏は老子の思想は支那本來のものでなくて、印度思想の影響を受けてゐると見た。ラクウペリイ氏はそれより一步を進めて、老子は印度の人で支那へ移住したのだと斷定した。いづれも單なる推測ではあるが、老子の思想に印度哲學の影がいくらか現はれてゐるのは事實である。その出世間的なところ、寂滅なところ、唯心的なところなどは、どうしても、印度的である。支那本來の思想ではない。西洋の學者が往々、老子を印度人だと解釋したがるのは無理でない。司馬遷は、老子の思想を黄帝にもとづくのだとしたが、確證あるわけではない。が、老子以前に老子のやうな考へ方をしたものが多少あつたことは事實らしい。すくなくとも、老子の思想は悉く彼れが編み出したものではなくて、先人の思想を繼承して、それを取纏めたのでないかと思はれる。老子の前に黄帝、許由、老萊

子、鷄子などをはじめ原壤、長沮、桀溺、荷篠などの人々がゐていづれも虚無、恬淡主義を執つたといはれてゐる。

老子は孔子と略ぼ同じ時代に生活したといふ說が多い。そしていくらか孔子よりも先輩で、圖書館員の職をつとめてゐたらしい。「史記」には、老子が孔子の訪問を受けて、禮について教へたといふ記事があるが、それは虚說かも知れない。ひとしく、周末の頽廃文化を見て、人心の壞亂を嘆き、救世の念願を起した思想上の二巨人が對面したといふことは、いかにも、興味ある挿話にはちがいないが、當時孔子は可なりに禮に通じてゐたので、老子の教へを請ふ必要がなかつた。が、假りにそれを事實とすると、孔子は正面から禮の意を說いて、積極的に世を救ふべき心を明かにしたのであらう。ところが、老子はそれを嘲つて「禮などの形式に拘泥するやうなことでは駄目だ。君は過古人の朽ちた言葉を頼りにかついだり、取るに足らぬ昔の人物を昇ぎあげるが、そんなことでこの亂麻のやうな末世が救へるものか。既に禮といふと、非禮を豫想しなければならぬ。さうした差別相を飛び越えなければ意義を爲さぬ。もつと第一義的のことを御考へなさい。」といつたであらうと察せられる。

傳說によると、老子は最初いくらか現世的に思想宣傳をしようと考へたらしいが、利己主義、個人主義の諸侯が、到底彼れの進言を採用しないことを知つたので、ひどく絶望して「これでは、どんなに叫んで見ても何の反響がない」とあきらめた。それで彼れは圖書館員の職をやめて、絶望の色を顏に浮べながら、函谷關を出て西方へ去らうとした。ところが關の令、尹喜が老子の袖にすがつて「貴下は世を逃れて、靜かな生活をなさるさうですが、せめて思想だけは取纏めて、私らのためにお殘し下さいませんか。何卒曲げて私の願を御ゆるし下さい。」といつた。老子の氣象では、當時の病文明人に向つて何もいひたくないと思つたらうが、尹喜が切に勸めてやまぬので、

「では暫く關内に留つて、要點だけ書いて置から。」

と考へたらしい。そして彼れは章などを分たないで、頭の中に閃めいた考へをその儘、簡潔に紙へ書き付けた。それが五千餘言となつた。

「これは君に示すだけのものだ。他の人間に私の思想などはわかる筈がない。」

といつたかどうか。老子は著述を終ると、飄然として關を出て西方に去つた。それ以後彼れは世外に超脱して、靜かに漂泊の生涯を續け、百六十餘歳で死んだとも、二百餘歳の長壽を保つたともいはれてゐる。が、實際は九十餘歳であらうと推定せられてゐる。年齢はわからぬが、彼れが長命したことは確かであ

らう。

私の想像によると、老子は餘程風變りの人物で、一種の拗ね者であつたと思はれる。最初、若い時は幾分の熱情を抱いて、正面から道義を主張しようと考へたであらう。けれども次第に頽廢した世相や亂脈の社會や形式萬能の風習や繁文縟禮主義の横行などを見ると、次第に反抗的になつて皮肉な考へ方をするやうになつたらしい。

「周末の文明は虚僞の文明だ。その道徳や制度や律法などは不自然に人間を束縛するものだ。徒らに技巧を弄して、自然の法則に戻るやうなことをしては駄目だ。民衆に向つて重税を課したり、不當な壓迫を加へたりするのはよろしくない。今、戰亂が多く、盜賊が横行してやまないのは、つまり人々が虚僞の文明、技巧本位の文明に禍せられた結果だ。私は今の文明を呪ふ、今の人心をも厭ふ。私は反文明主義だ、文明否定主義だ。」

老子はかういふ考へ方をするやうになつて一切の文化、一切の文明を否定することに傾いた。それは技巧に偏した文化、人爲に囚はれた文明を排する意味で、非技巧の文化、非人爲の文明までも否定しようといふのではなかつた。作爲を加へない文化、自然の旨に協つた文明によつては、老子もそれを拒もうとはしなかつた。老子は原始、自然の文明的狀態を愛した。彼れは曾てルソオが十八世紀末の偏智文明を咀つて「自然に皈れ。」といつたやうに周末文化を排して「嬰兒に皈れ。」と叫んだ。

「今の文明は病的だ。腐爛し澁滯してゐる。徒らに煩瑣になり、複雜になつて、眞實味もなく、自然味もなく、溌溂たる生命もない。今の文明は一度すつかり出直す必要がある。更生すべき必然の狀態にゐる。それには、すべての人間が嬰兒の心持に皈らねばならぬ。人々は單純で素直で無慾で無私で非技巧的、非人爲的であらねばならぬ。つまり原始自然の旨に一致しなければならぬ。禮儀三千、威儀三百といつたやうな末梢的形式主義は一排すべきである。人爲の政治、人爲の道徳、人爲の律法、制度なども、すつかり改めねばならぬ。」

老子は以上のやうに自ら目ざめた。それによつて、當時の文明がいかに行詰つてゐたか、そして「仁」や「忠恕」などが說かれても、いかに生命なきものであつたかがわかる。そしてすべての人間が利慾中心、名利本位に動いて、爛れきつた社會の汚氣の中に無自覺的に妄動してゐた有樣が察せられる。老子はさうした狀態をひどく憤つて、反抗の度を增し、結局、文明否定の態

無思想に到達すると共に一種のユウトピアといふべき原始自然の生活に憧憬を寄せるに至つたのである。

老子の胸に描いたユウトピア

老子と對立した孔子は思索から活動へ、活動から思索への生涯を送つた。今の言葉でもつと新しくいへば、書齋から街頭へ街頭から書齋への生を續けた。その晩年は、多く書齋生活に終始したが、一時は四方 遊説して、その所信を天下に實現しようと力めた。孔子は學者でもあり、思想家でもあり、教育家でもあつたが、また政治家を兼ねてゐた。ところが、老子は學者、思想家としての單純生活を送つて、活動よりも瞑想を愛した、街頭よりも書齋を愛した。四方に遊説して高く叫ぶよりも。寧ろ默つて、その行くべき道を考へた。

老子には、何となく深いところがある。孔子が現象を現象として、その奥に潜む神秘の意義について、突込んで考へようとしなかつたのにくらべると、餘程超絶的である。老子は紛々たる差別相を飛び越えて、絕體唯一の根本生命にぶつゝからうとした。彼れは玆に突き入るために、瞑想に瞑想をかさね、沈思に沈思を加へてやまなかつたらしい。そこに哲學者的な趣がよく出てゐる。

老子はその病的文明の否定、原始、自然の生活肯定を裏付けるために、それについての根本原理を說破しなければ、自ら滿足することが出來なかつた。それで彼れはこの現象界を支配し、差別相を統一するところの根本生命ともいふべき幽玄な「道」の思想を捻出した。老子はそれを「大道」ともいつた。が、本來の旨意は、「道」とも「大道」ともいへない無名の根本方則であり、絕對原理である。

「道とか、大道とかいふと、もう私の心持を本當にいひ現はしたとはいへない。が、無名といふだけでは、他人にわからぬので、假りに道や大道の名稱を附したわけだ。正直にいふと、言詮を絕したものだ。」

老子は恐らく、かういふにちがひないと思はれる。それで老子は「道の道とすべきは常の道でない、名の名とすべきは常の名でない。」といつた。「俺の道は、世間の奴らが始終口にしてゐるやうな道でないのだ。」と喝破したわけである。それは老子の瞑想の所産で、神秘的、靈的なものである。彼れの言葉を借りていふと、玄の又玄、衆妙の門である。

老子の「道」と稱する根本原理、根本生命は宇宙創造の時と共にあるのだ、無始にして無終なものである、形があるかと思ふと形がない、形がないかと思ふと何だか形があるらしい幽微、

玄妙なものである、虛無に似て虛無だといひきれないやうなところがある、空寂らしいが空寂ともいひきれない。そして一見靜的だが、その働きには動的な靈妙さがある。老子はこの有様を形容して「道の物たる惟だ恍、惟だ惚。恍たり惚たり、其中象あり、恍たり惚たり、其中物あり、窈たり、冥たり、其中精あり。」といつた。

道は萬物を創造し、派生すると共に、萬物は又道に還元する。道は萬物の母であり、根であり、故郷である。老子はこの事について「道一を生じ、一、二を生じ、二、三を生じ、萬物を生ず。」といつてゐる。一は本體のことである。二は陰陽二氣のことである、三は陰陽及び沖和の氣を意味するのであらうと思はれる。靈的、靜的な本體から陰陽を派生し、陰陽と沖氣を和して萬物を生ずる。そして本體そのものは何の目的もなく、何の意思もなく、唯自然で無爲で、而もその靈妙、不可思議の作用を實現して、何等誤るところがない。既に萬物の根本生命たる道が無爲、自然で是非や善惡や欲望を絕した單純、無雜のものであるとすれば、道を母とし、故郷とし、道から派生した人間も亦當然無爲であるべきだ、自然であるべきだ。善惡を絕し、是非を離れ、欲望を超越すべきである。手短かにいふと、朴素で純一で自然の儘、原始の儘の單一さであらねばならぬ。老子はかう考へた。

老子の文明病救濟は、右のやうな宇宙觀を起點として、說かれてゐるのである。彼れの胸に描かれたユウトピアは、太古原始の純朴生活であつた。彼れは、その事を第八十章のうちに說いてゐる。それは「小國寡民、什佰の器ありとも而も用ひざらしむ。民をして死を重んじて而して遠く徙らさらしむ。舟輿ありと雖、之に乘る所なく、甲兵ありと雖、之を陳するところなし。人をして復た繩を結んで而して之を用ひしめ、其食を甘んじ、其服を美とし、其居に安んじ、其俗を樂み、隣國相望み、鷄犬の聲相聞ゆるも、民は老死に至るまで相往來せず。」といふのである。いかにも無爲、自然の樂地である。太古に行はれた單純な結繩の政で一鄕が何事もなく治まつて、名を求めるものなく、利を獵るものなく、戰ひや爭ひを起すものもない。そして人々は質素な飲食、服裝、住居を樂んで、陶然として美酒にでも醉ふたやうな和易を覺へる。そのユウトピアの特色が老子の面目をよく表示してゐる。

が、老子は素よりさうしたユウトピアの實現が可能であるとは信じなかつた。要するにそれは彼れの美しい夢であつたかも知れぬ。虛僞、文明に囚はれたもの、人爲的不自然の生活に中毒したものなどには、到底、老子の美しい夢がわからぬであら

うことを彼れも知つてゐたであらう

「俺はこんなユウトピアを夢想してゐるのだが、利慾に眼がくらんだ周末の人間にそれを聞かせて見ても、恐らく豚に眞珠を投げ與へるやうなものだらう。が、それにしても、俺はこの儘、打捨てゝ置わけにはゆかない。俺は多少でも、彼等の昏睡と中毒とを打破らねばならぬ。勿論聞かぬ奴は聞いてくれずとも宜い。唯俺は俺の内心の要求によつて、それを說くのだ。」

老子はかう思つたらしい。それで彼れは人々に向つて、原始自然の生活理想に達すべき道程を敎へた。それに於て、老子は破壞と建設との兩面を說いた。彼れは在來の凡俗道德――自然に逆らつて人工を加味した道德に向つては鋭く挑戰して、破壞の鐵槌を振つた。

「大道廢れて仁義あり、智慧出でて大僞あり、六親和せずして孝慈あり、國家昏亂して忠臣あり。」といつて、凡俗道德の無生命を罵つた。また彼れは當時の煩瑣な制度、律法が却て人民を毒することを非難して「天下忌諱多くして民彌々貧し、民利器多くして國家滋々(ますます)昏し。人に技巧多くして奇物滋々起る。法令滋々彰(あら)はれて盜賊多くあり。」と痛刺した。そして形式の末術を追ふところの禮についても亦「禮は忠信の薄にして亂の首なり。」と喝破した。かうして老子は、頽唐文化の病源だと彼れが見做した一切の思想、制度に向つて手強い反抗の叫を上げた。この點に於て彼れは何處までも破壞的で、周末の病文明を否定した。そこにニヒリズムの影が濃くさしてゐた。

が、老子は一面に於て、彼れが提唱した新道德を建設して人々を病文明の苦熱から救ひ出さうと力めた。それについて老子は彼れの新道德を當時の凡俗道德と混同せられないように「上德」といつた。そして「上德は無爲にして以て爲す無し」と說いた。雲が自然に湧き水が低い方へ流れるやうに彼れは無爲を尙んだ。それと共に彼れは恬淡を重んじた。無慾、謙遜、柔和、虛無といふようなことを必要だとした。周末の病文明は、技巧が多くて所有慾を煽り立て、爭鬪、排擠を挑撥してやまないので、老子はそれ等の病源を根本から一掃しようとしたのである。人間はすべて眼の前に見る大自然のやうに、無爲で、恬淡で無慾で謙遜で柔和で虛無であらねばならぬといふことを敎へた。

聖人は無爲の事に處り、不言の敎を行ふ。萬物作つて辭せず、生じて有せず、爲して恃まず、功成つて居らず。夫唯々居らず、これを以て去らず。

老子の道德說は、以上の言葉に盡きてゐる感がある。いかにも

悠揚として、こせ付かない、齷齪しない、技巧を用ゐない。つまらぬ小刀細工をしたり用もない冗辯を出したりしない。大自然が道德を超越して、而も道德の根本に合致し、生々發展の作用を無言のうちに示して、而も謙虛なやうに、聖人は無爲で而も有爲である。老子は何人をもこの境地に到達せしめようと志した。

無爲自然の大道

病文明の要素として人間を毒するのはその慾心である。文明がまだ進まないで、原始的に素朴であつた時代には、人間を誘惑すべき聲色も香味も黄金もなかつた。が、文明が進むと、人工的に人間の欲望を挑撥すべきいろいろのものが出來る。色情慾、黄金慾、名譽慾、飮食物、あらゆる所有慾が旺んに人心を支配する。人間が自己の生を終らない限り、それらの慾心は影を消すことがない。五色は人の目を眩まさねばやまない、五音は人の耳を聾しなければやまない。五味は人の口を誤る、そして人々が諸方を驅け歩いて、遊獵をするやうなことは人心を狂はせる、またいろいろの貴重な物品が人を誘惑して惡心を惹起させねばやまない。老子はかういふ風に人生を悲觀して、慾心の害毒を指摘した。

それと共に老子は慾心の淨化を說いた。淨化といふよりも、寧ろそれを斷滅すべきことを勸めた。それには物事に對して恬淡であらねばならぬとした。自己の肉體の存在を否定する心持で、執着を去り、名利を離れて、淡然とした水のやうな心持であつてほしいと老子は敎へた。そして外界の刺戟に應じて妄動しないやうに、清く靜かな心的狀態を持續すべきことを必要とした。かうした純一な禁慾感、淡泊な非執着的な心持を高調することは、やがて病文明の一要素を排することとなる。この考へ方は西洋哲學にもいくらか見えるが、大體に於て、より多く東洋的なものである。

次ぎに病文明の要素として人間を毒するのは、ともすると大自然の方則に戻らうとする小智、小才である、人智が進むと、生活が漸く複雜となるので、その間にいろいろの問題が起る、その整理と統制とのために、またいろいろの小刀細工が用ゐられる、超人の眼から見ると、寧ろなくとも宜いと思はれるやうな道德が作られる。制度が設けられる、法律が定められる。これが最初は簡朴であつても、次第に小智、小才を加へて、人工的度合が濃厚になる。それと共に、道德の假面を着けて不德を行ふものや制度を利用して惡事をするものや法網を潛つて罪を犯すやうなものが續々出來る。人爲的に技巧を亂用して作られた虛僞の文明

は、やはり人爲的に技巧を弄する人間のために擾亂される。そしてそこに爭ひが起り、不安が生ずる。周末の時代に、仁義の說が高調せられたのは大道が行はれぬ證據だ、禮のことがやかましく唱へられたのは、虛僞を飾り立てようとするものが多いためだ、それを知らないで、仁義によつて人を救ふことが出來ると思ふのは大きい誤りである。そんなことで末世の人間は救はれない。また禮を保持すれば、社會の秩序や平和が保たれると思ふのは皮相の考へ方だ。禮法の末節などで、小さかしくなつた頽廢人を救ふわけにゆかない。老子はかういふ風に當時の人間を見た。文明を見た。それで老子は叫んだ。

「小さかしい人間の小智、小才を去れ！人爲一切をも去れ！

唯自然であり、無爲であれ。それは宇宙の大道に合致する所以である。」

この老子の考へは、病文明を一排して、もつと健全な文明狀態を志向したところから來てゐる。彼れは「嬰兒に皈れ。」といつたほかに「智を絕つてしまへ。」「學問などするな、それは憂ひの原因だ。」といふやうなことを、逆說的に激語した。

蓋し老子は社會的にも、政治的にも、人間的にも干渉がましいことを一切好まなかつたのである。それと共に、彼れは誠實に根ざした自然的自由を心から愛したのである。小さかしい智巧を加味したいろいろの干渉は、却て社會を毒し。人間を害ふ。

それがために面倒が起つて、社會が動搖する、人の心がすさむ。周末に於ける爲政家や思想家の態度や言說には確かにさうした缺陷が現はれてゐた。それで老子は、それらの干渉がましい一切を去つて、身も心ものびのびするやうな自然的自由――意義ある無爲を高調したのである。

誰れもが人生に執してゐると、老子の心持はわからない。が、心胸をひろくして、自然に對すると、老子の心持がはつきりわかつて、紛然として生命感に觸れる。私らがぢつと自然の運行を見てゐると、一日のうちに晴日、風雨、曇天などの變化があつても、その間に自然の秩序があり、統一がある。高樓にのぼつて、雲を見てゐると、くづれてはむくむくと湧き、湧いてはまたくづれる。いづれかへ雲が散つたと思ふとあつまり、あつまつたかと思ふともう消えてゐる。そこには、變化がいろいろに行はれる。而もその變化のうちに秩序があり、統一がある。それは飽くまで自然で無爲で細工一つせずに生命感に充實してゐる。老子は人間の心が、かういふ風に自然に無爲に隨順するであらうことを望んだのである。

私らが太陽の姿を仰ぐとき、無爲、自然の偉大さを感ずる。太陽は何もしない、自然の儘に運行してゐる。そして太陽は私ら

に朝の元氣を與へ、夕の希望を與へ、光りを惠み、暖味を賦つ。而も太陽はそれについて誇るところもなければ、恃むところもない。かうした無爲、自然が老子の理想であつた。そこには善惡もなければ、是非もない。貧富もなければ强弱もない。盛衰もなければ上下もない。それらの一切を超越し、差別相を絕して、一躍、宇宙の大道に合致するのである。

今日の文明を見ると、老子の言が私らの胸に痛切に響く。それは人爲集中の機械文明である、自然の美を破壞し、人間の本然的な靈性を傷害する文明である。技巧に技巧を加へ、細工に細工を加へて底止するところを知らぬ僞文明である。あらゆる虛飾、あらゆる虛僞、あらゆる虛構の上に築かれた文明の假面が跋扈してゐる。そこには、何等天眞の流露を見ることが出來ない。のびのびした自然味を見ることが出來ない。

さうした影は人の上にも、社會の上にも、國家の上にも、また政治、宗教、教育、文藝などの上にも、歷々と現はれてゐる。老子がそれを見たとしたら「何たる不自然な人爲の多い醜文明であるか。」と嘆息するにちがひない。人工、人爲で固められた僞政治、僞宗教、僞教育、僞文藝の多いことは、老子を昏倒せしむるかも知れないほどである。有りの儘の自然へ、細工を絕した無爲へ、すべて急がねばならぬ。少くとも內的自省の上に於て――更にもう一つ病的文明の要素として、人間を蕩するのは、双互に人を押しのけて進もうとする我慢の心である。病的文明人は爭氣に燃え、貪り求める感情が高まつてゐて、それを自制し得ない。すこしでも功があれば、それを誇張して人に話さうとする、すこしの隙があれば、相手の友人を乘り越えて、よりよき地位を占めようとする、僅かばかりの利でも、率先してそれを攫もうとする。それがために他を犧牲とすることを何とも思はない。老子はさうした心的傾向をひどく叱つた。

もし以上のやうな徵候をもつと押し進めゆくと、人は互ゐに敵視しなければならぬ。のみならず、いくら多くの利を得ても、名を得ても滿足する機がない。人間と人間とが嚙み合つて、結局双方の自滅に瀕する。老子は如上の害毒を除くために「長生久視の道」を說いた。そして「此道を保つものは盈を欲せず」といつた。また「持つて之を盈つるは、それ已むに如かず、揣つて之を銳うするは長く保つべからず。金玉堂に滿るも、之を能く守ることなし。富貴にして驕るは自ら其咎を遺すなり。功成り名遂げて身を退くは天の道なり。」ともいつた。

それで老子は、謙虛、自省といふことを重く見た。それには、自己を空しうしなければならぬ、力めて本能的衝動を抑へ付け

なければならぬ。傲慢と放縦とを謹まねばならぬ。柔和で控へ目で分に安んずることを知らねばならぬ。和光同塵の意義に徹しなければならぬ。老子は謙虚の徳について「江海の能く百谷の王たる所以のものは、其善く之に下るを以てなり。故に能く百谷の王と爲る。これを以て民に上たらんと欲すれば。必ず言を以てこれに下る。民に先んぜんと欲せば、必ず身を以に之に後る。これを以て、聖人は上に處て而して民重んぜず。前に處て而して民害せず。これを以て天下推すことを樂んで厭はず、其爭はざるを以てす。故に天下能く爭ふことなし。」といつた。

老子のいふところは、いかにも平凡である。が、當時我慢の心に囚はれて、本能的衝動のまゝに動いたものに向つては盛暑に一塊の氷片を與へる以上の淸涼味となつたにちがひない。現代における國と國との爭ひ、人と人との爭ひは、多く我慢の心がその動因となつてゐることが少くない。自我に執する心、利己に偏した心、我儘を押通さうとする心、自家吹聽の心、さうした心が、どの位、病文明を助長してゐるかを知ると、老子の平凡な言も一概に輕く見ることが出來ない。

要するに、老子の文明病救治は、人間の有慾に對して恬淡、無慾を敎へ、人工的虛僞の文明に對して無爲、自然、虛無を敎へ、我執、我慢の心に對して謙虛、柔和を敎へたのである。が、結局は以上の修養によつて、有限、差別の上にある人間が無限、絶對の生命であるところの宇宙の根本——道に合體して、不死、不朽の旨を得るにあつた。老子は、この感得境の妙味について、罪惡の塊ともいふべき肉體の所有者も、道の根本生命に觸れるやうになると、猛虎もその人を害することが出來ない、また刄難をも加ふることが出來ない、鷲が來ても、その人を捕たない、毒蛇もその人を覗はない。永遠に死地を脫して、無限の壽を得るといふ意を述べた。それは無論、形容にすぎぬけれども、凡そこれほど、快適な自由な不拘束なのびのびした境地はないのである。莊子の神人の思想などは、老子の影響から生れたものだ。

以上老子の文明病救治について述べたが、尙ほ序にすこしいつて置きたいのは、老子のニヒリズム、アナアキズムの思想である。彼れのニヒリズムは絶對的なものではない。老子は在來行はれ、或は說かれて來た道德を否定したけれども、上德とか三德（三寶）とかいふやうなことを說いてゐる。また周末文明をすつかり否定はしたが、彼れのユウトピアに見るやうな文明を否定しなかつた。次ぎにそのアナアキズムも、權力否定の上に於て、絶對的な心持を示したのではなかつた。それに彼れは王の存在を是認して「道大、天大、地大、王亦大。域中四大

あり、而して王は其一に居る。」といつてゐる。西洋のアナアキズムは、王の存在を認めない。無論、政府の存在をも否定する。ところが、老子は必ずしもさうでなかつた。王を四大の一に數へる以上は、政府の存在をも認めないではなかつた。「小國寡民」と稱してゐるのを見ると、ヨオロツパのアナアキズムに見るやうに、國家を否定したのではなかつた。この點に於て、老子は空想的傾向の上に現實的傾向を明かに加味してゐた。かうした點に於て老子は印度人といふよりもやはり、支那人らしい。

莊子と髑髏との對話

すこし話が暑苦しくなつてしまつた。そこで私は茲に卒然として一挿話を引く。それは老子の思想を祖述した莊子が髑髏と對話したことである。怪談めいてすこし涼しいかも知れぬ。老子流にいふと、涼しいと口外すればもう涼しさを失つてしもふかも知れないが、兎も角、ある時、莊子の前に一個の髑髏が現はれた。「これは面白い。」と莊子は思つた。そして「一體お前の樂みは何だ。」と聞いた。

「私の樂みは死です。死が一番樂しい。南面して天下の王となるにも優つた樂みです。」

髑髏はから答へた。そこで莊子が髑髏を揶揄するつもりで、

「どうだ、君に元の通り肉を附け、元の血を注入して、立派な若者として蘇生させ、君の父母、兄弟、朋友などをも、すつかり元のやうによみがえらせたら宜からう。」

といふと、髑髏は顏をしかめた。

「それは嫌です。私はこの儘でゐたい。」

と答へた。

それは莊子の寓言であるが、莊子の行き方は概して興味ある話のうちに、彼は一流の哲學思想を寓して居る。ラッセル氏は「莊子はその師（老子）よりも興味が多いといつて宜い位だ。」といつた。私もやはりさうした感が深い。莊子の書を讀むと、私は直ぐにニイチエの『ツアラトウストラ』を思ひ出す。寓話が多い點に於て、よく似てゐるのみならず、ニイチエの超人と莊子の神人とは、ある點に於て、いくらか趣を同じうしてゐるのである。それにニイチエが世紀末の頽廢文明に反抗した叫びをあげ、莊子が老子の意を祖述して、病文明救濟の福音を說いた點にも亦相似た傾向が見える。單にその行き方についていふと、莊子は支那のニイチエである。その文章の妙味に至つては、ニイチエに優つてゐるかも知れない。

莊子の生　は老子と同樣、はつきりわからない。彼れは河南省歸德府の出身で　漆園の吏　勤めた、そして孟子と略ぼ同じ

時代にゐた。莊子についての傳說を見ると、彼れの超越的な哲學者風が略ぼわかる。無論、莊子とても、最初から悟り済ましてゐたのではなからうけれども、その修養の結果、次第に自由境に達したのであらう。

彼の態度は、いかにも磊落で、死生の外に身を置いて、世間の榮華などを冷かに見てゐた。ある時、楚の威王が莊子の賢明なことを聞いて、重く用ゐようと思つた。それで威王は使者を莊子の許に送つて、恭しく禮をつくし、卿相の位置を彼に與へようといふ意を傳へた。普通人なら、威王の厚い志に感激して、その聘に應ずるにちがひない。ところが莊子は平生、官吏生活を好まないで、漆園の吏をやめて、浪人生活を長く續けたばかりでなく、深く悟りきつてゐるので、威王の招聘を斷つてしまつた。その時、莊子は使者に向つて「千金は重利、卿相は尊位であることは私もよくしつてをります。威王の思召は誠に有難い。けれども私は不本意ながら、今回の御招聘を辭退いたしたい。といつた丈では、理由がわからぬから、それを申さう。貴君はあの郊祭に用ふる犧（いけにへ）の牛を御覽になつたことがあるでせう。その牛は平生、立派な御馳走を當てがわれて、美しい飾を付け、ひどく結構に見えます。が、愈よ御祭がくると犧にせられて、その命を取られてしまひます。その期に臨んで、どうもならぬ。宰相の位は結構ですが、一朝何か大事が起ると、やはり犧の牛と同じ運命に殉じなければならぬのです。だから、私は宰相となりたくない。どうぞ私の意を酌んで早く御歸り下さい。私は溝の中にゐる泥鰌と同じやうに、寧ろ汚瀆のうちに優遊してゐる方が餘程快適だ。」といつた。莊子の眼から見ると、世人の羨望する卿相の位も全く無價値であつた。

莊子は世上の榮擧を白眼に見たのみならず、生死一如の悟道を得てゐた。莊子が死に瀕した時、その弟子らは、平生の師恩に厚く酬ゐようと思つて、彼れのために立派な葬儀をしようとした。ところが、莊子は「君らの志は嬉しいが、そんなことをするに及ばぬ。」といつた。その理由は「俺は天地を棺槨としてゐるのだから、故らに葬具などを整へるに及ばない。」といふのであつた。また少し奇矯ではあるが、莊子の妻が死んだ時、すこしも悲まないで「死生一如だ。」といふわけから、愉快さうに歌つたさうである。

莊子にはかういふ風に餘程超越的なところがある。彼れの思想は大體に於て、老子以外に出てゐないが、更にその意を強め深めて、それに組織と根據とを與へた。これを消極的に見ると、現世を厭離して、一切の煩惱・一切の繋縛を絕ち、虛無寂滅の境に入らうとするものである。これを積極的に見ると、字

宙の根本生命たる道に合體して、永遠の至樂境に入り、不老、不死の絶對生命を得ようとするものである。いひ換へると、有限から無限へ、差別から超差別へ、生死の巷から超生死の世界へ、繋縛たる境界から自由無碍の至境に向つて、一氣に飛びこもうといふのが莊子の希望であり意圖であり、理想である。さうした考へは、病文明の苦熱にうめきつゝある人々に多量の冷水を浴びせかけるものだ。

所有慾の斷滅

病文明に囚はれた現代人には、執着が多い、迷想が多い、雜念が多い、爭氣、覇心が多い。それがために外物に累せられ易い。毀譽に心を動かし易い。その病根となつてゐるのは限りなくひろがり、絶え間なく動くところの情慾である。それは誰れもが明かに意識してゐることだ。けれどもさうした情慾を抑へたり、制限したり、進んでそれを斷滅しようといふことになると、誰れもそれを容易く實現し得ない。のみならず、物質文化が進んで、それに伴ふ人間の要求が大きくなり、高まつてゆくほど、情慾も亦大きくなり、高まつてゆくやうに思はれる。

この情慾をどうするか。積極的に考へると、結局、情慾を無理に抑へ付けたり、斷滅したりするよりも、寧ろそのあるが儘にして置いて、それを淨化し整理するよりほかはない。大乘佛教の旨意も亦茲を出ない。が、小乘教に於ては、情慾の斷滅を教へる。莊子の考へ方なども、大體小乘教的である。

莊子は鬪爭の止む時がない亂世に生活した爲めに、情慾の園埧ともいふべき生をひどく厭つた。そのために自分の心がかき亂されて、平靜を失ふことを力めて避けようとした。それで彼れは情慾の斷滅を必要とした。どうして斷ち切り難い情慾を斷つか、それについて、莊子は老子と同樣に無慾説を高調した。そして莊子は「名利の念を斷つてしまへ。」といつた。その事について、莊子は一つの寓話を示した。

ある時、ある場所で、一匹の螳螂が蟬を餌にしようと思つて、ぢつと覗ひを付けてゐた。ところが、その螳螂のあとには鵲が何處からともなく飛んで來て、螳螂を自分の餌にしようと嘴を鋭くしてゐた。その鵲のあとへは人が來て、弓を張つて、一氣に鵲を射落さうとしてゐた。螳螂は蟬に向つて優越者であるが、鵲のために自分が犧牲とされようとしてゐることを知らない。また鵲は螳螂に對して優越者であるが、人間が鵲を取らうとするのを知らない。そのいづれもが利を得ようとして自分の危いことを知らぬ人間の行動を連想せしめる。莊子は以上のやうな寓話によつて、無慾の必要を教へた。

が、莊子はそれだけで滿足しなかつた。更に情慾を斷滅すべき方法として、心齋、坐忘といふことをも說いた。心齋とは心の物忌みである。一切の雜念を拂つて、虛心、坦懷を旨とすることである。座忘とは禪定式に忘身滅我によつて、自己の肉體を忘れ、の平靜純一を保つことである。莊子は心齋について「仲尼曰く、若ち志を一にせよ、これを聽くに耳を以てすることなくして、而してこれを聽くに心を以てし、これを聽くに心を以てすることなくして、これを聽くに氣を以てせよ。聽は耳に止り、心は符に止る。氣は虛にして物を待つものなり。唯道は虛に集る、虛なるものは心齋なり。」といつた。平たくいへば、それは一種の座禪である。物の音を聽くのに氣息を以て聽くといふのは、他に累せられずに虛心を保つためである。心を落付けて、不動の姿を維持しようとするものである。

莊子は座忘といふことについて、巧みな話し方をしてゐる。それは顏回と仲尼の問答に假托したものだ。ある日、顏回が仲尼を訪うて「私は最近修養上、進益するところがございました」といつた。仲尼は「それはどんなことか。」と問ふた。回は「仁義を忘れたのです。」と答へた。「成程、それは宜いことだ。けれどもまだそれだけでは物足らないね。」と仲尼がいつた。それで回はいくらか出鼻をくじかけられた形で歸つた。

ところが、その後、回が仲尼の許へくると「私は進益するところがございました。」といつた。「それはどんなことか。」と仲尼が問ふと「禮儀を忘れたのです。」と答へた。仲尼は「それは結構だ。然しまだもう一息だ。」といつた。それから三ケ月目に回が仲尼を訪うて、はじめて座忘のことを話すと、仲尼は蹴然として、いかにも我意を得たといふ風で「座忘とはどんなことか。」と尋ねた。回は「わが身を忘れ、聰明を斥け、形を離れ、知を去けて大道に合致することでございます。」とはつきりいつた。その時、仲尼は嘆賞の聲をあげて「實に驚き入つた進み方だ。萬化を遺忘することについて、そこ迄到達したとすると、師匠たる私よりも、お前の方が遙かにえらい。爾後私はお前の弟子にならう。」といつた。莊子は以上の寓話によつて、座忘の意義を闡明したのである。それは心海の波瀾を捲き起し易い小知小見を斥けて、情慾の塊となつてゐるわが肉體の存在を忘れ、一心に宇宙の根本生命に參ずることである。それは無慾に至る大道である。

莊子は右のやうな教へを示したが、尙進んで情慾の對照となつてゐる五官の樂みを否定した。莊子はそれについて「それ天下の尊ぶところのものは富貴、壽善なり、樂むところのものは、身安くして厚味、美服、好色、音聲なり。下とするところのものは貧賤夭惡なり。苦むところのものは身、安逸を得ず、口厚

味を得ず、形、美服を得ず、目、好色を見ず、耳、音聲を得ことざるなり。もし得ざる時は大に憂へて懼る。それ形のためにすること亦愚なるかな。それ富めるものは身を苦めて疾に作し、多く財を積んで盡く用ゆることを得ず、それ形のためにすること亦外なり。それ貴きものは夜以て日に繼で善否を思慮す、それ形のためにすること亦疏し。人の生るゝや憂と倶に生ず、壽きもの（いのちなが）は惛々として久しく憂へて死せず、何をか苦めるや、それ形のためにすること亦遠し。」といつた。彼れは厭世的傾向のうちに五官の樂みのはかないことを說いて、情慾の斷滅を高調したのである。そして莊子は「至樂は樂なし。」と喝破した。その言說は消極的、逃避的、高踏的ではあるが、情慾の熱氣に浸潤してゐるものを冷却する力は確かにある。莊子が「成心を去れ！」といつたことも、是非得喪の念を絕つことで、間接には、情慾を斷ち切るといふ意にほかならぬ。それは所有狂の病徵を有する病文明人に對して、大なる清涼劑である。

現代人のうちには、不正當な不合理な所有慾を無限に延長しようとするものが少くない。それが極少數人に限られてゐるならば、個々人に迷執も起らないし、双互間に鬪爭をも生じないであらう。けれどもそれが多數人となると、迷執が深くなり、鬪爭が烈しくなる。日々の新聞紙には、さうした病徵を反映してゐる。今は所有狂の跋扈する時代だ。それがどの位、この人生を殺風景なものにしてゐるか知れない。それは人生によき味、をもたらさないで、わるい味、索漠な味を附け加へる。そしてあらゆる悲慘の種を蒔き、不安の洪水を起す。莊子の立場から、それを見ると、つまり情慾を斷滅しないためである。情慾を斷ち切らぬために現世の繫縛を排し得ない。既に繫縛に囚はれてゐるとすると、所有狂はいつまでも流行して、底止するところを知らぬ。それで私らは、莊子のいふところについて、深く反省しなければならぬ。

生死超越の妙境

一面から考へると、情慾が人間を支配して所有狂たらしめ、あらゆる迷ひと爭ひの禍因を作るのは、生の執着によるところが多い。誰れも成るべく長く生きて、出來るだけ、多く享樂したいと考へるので、自然に情慾が煽揚されるのである。もし生の執着がなければ、情慾も自らうすらいで、所有狂を多く生じないで濟む。が、世上稀有の例外があらうとも、萬人がすべて死を呪咀し、生に執することは抑へ難い本能的要求である。また生を尊重し、死を憎惡することは合理的である。けれども茲に考へねばならぬのは、過度に生を愛し、生に執して、それが

ために煩惱に囚はれ、情慾の奴隷となる弊害が多い點である。莊子は、さうした上に考へ及んで、生死一如の思想を說いた。死生を超越する福音を述べた。

莊子は最初、可なりに死生の問題に行きなやんだらしい。生死一如の觀想に到達するまでに、彼れも亦强く死を呪ひ、生に執した時代があつた。が、いろいろの體驗を得て、悟道に達したのである。そして彼れは、一般人と反對に死を讚美して、生を呪咀するやうな口吻さへ洩らすやうになつた。莊子の見解によると、人生は一つの大なる夢だ。個々人の生はその夢の一斷片だ。人の一生は畢竟短い一睡の夢にすぎない。莊子の寓話としてよく知られてゐることであるが、莊周夢に胡蝶となるといふ一節がある。莊周が蝶になりすまして、ひらひら愉快さうに飛ながら、花園をあさり廻つてゐるときは、まるで莊周であるのを忘れてゐた。ところがその夢がさめて見ると、蝶でなくて莊周であることを自覺した。が、それは莊周が夢で胡蝶となつたのか、それとも蝶が夢に莊周となつたのか、わからないやうな氣がしてならなかつた。かういふ寓話である。それと同じく人間が生を營んでゐるのを大觀すると、夢の人生に各自を夢みてゐるのではなからうか。各自は醒めてゐるつもりでゐるかも知れないが、實に夢の一斷片にすぎぬ。また人は死を永久の眠りだと見てゐるが、それは夢から醒めるのである。それは永劫の覺醒である。醒めてゐると思ふ生が夢で、夢だと思うてゐる死が醒めてゐることである。死は大覺である所以だ。莊子はかういふ風に考へた。

莊子は尙ほその宇宙觀から發展して、死を讚美し、生を輕く見る思想に到達した。莊子は死こそ人間の故鄕だ、生は人間の假りの宿にすぎぬと解釋した。なぜかういふことを述べたかといふと、莊子の考へでは、萬物すべて宇宙の根本生命たる道から派生せられ、道によつて創造せられてゐる以上、人間の生は道からの派生であると同時に、人間の死は道へ還元することだといふのである。死によつて人間が元出てきたところへ歸るのである。そして無始無終の生命に合體するのである。紛々たる差別相を離れて統一せられた絕對に歸するのだ。この意味から見ると、死は人間の故鄕である。そして死の歡喜がそこにある。

それについて、莊子はいろいろの寓話を書いてゐる。茲に弱年の時故鄕を離れて他鄕に流浪したものがある。最初、彼れはその故鄕を思うて、頻りに淋しがつてゐた。ところが長い間、流浪を續けてゐるうちに、他鄕に親みが出來て、終に現住を故鄕のやうに思ふ有樣になつた。もう彼れは故鄕のことなど忘れ

てしまつて、歸省するのを面倒だとして厭ふやうになつた。莊子は死を恐れ、生に執するものは、恰度以上の寓話的人物と同じだといふのである。死は人間の故鄕である。けれども人間が生に親み、生に執すると、生そのものを自分の故鄕だと思つて、死を厭嫌し、死を咀ふ。ところが、それは本末を誤つてゐる。生は他鄕に於ける流浪のやうなものだ。單なる寓にすぎない。死は故鄕の家のやうなもので永久の住家だ。この理を悟らないで、人間は頻りに死を恐れる、死を憎む、死を征服しようとする。けれども一度死んだら、どうして死を恐れたかわからぬと思ふにちがひない。生の擾々を離れて、死の安息に親みを感ずるにちがひない。

元來、生は一つの瘤にひとしい。瘤がある間、誰れも煩累から解放されない。けれども生の瘤を死によつて取り去ると、はじめて煩累から全く解放される。から考へると死は咀ふべきものではない、當然讃美して宜い。が、もつと一歩進んで考へると、人間が生死にこだわつてゐる間は、眞の解脱を得たものではない。生死を超越してこそ、解脱の大旨を得るのである。死に對しても恐れぬ、生に對しても別段喜ばぬ。また生をわづらはしいとも思はねば死を宜いとも思はぬ。生死についてその關心から離れ、生死を飛び越えて、死生一如の妙境に達すべきである。それは宇宙の本體なる道を意識し、道に一如して、永遠の生命に浸徹しなければならぬ。玆に至ると、最早生死の間、がない。すつかりさうしたことから超脫してしまふからである。莊子の所謂神人——至人とも、眞人ともいふ——は眞智にてよつ、さうした妙境に逍遙することが出來る。

莊子は生死について、以上のやうな悟道を教へて、人間が生の迷執から離れるよう、その救濟の意を明かにした。人々が生を喜び、死を憎む間は凡俗的喜憂から脫することが出來ない。始終、生死の問題について脅かされる。それにつれて迷執も亦强い。情慾の炎が旺んに燃えて、盛夏、炎の中にゐるよりも尙ほ暑苦しい。かうした境界にうろついてゐる限り、誰れもが所有狂となる。が、一歩を進めて、生よりも寧ろ死の價値を認め、死が人生の故鄕であることを意識するやうになると、迷執が漸くうすらぐ、情慾も亦弱くなる。が、また反對、差別の境地で、死の讃美に傾く弊がある。今一つ進んで、死生を超越すると眼中死もなく、生もなく、また迷執もなく、情慾もない。唯玆まで味到することは、餘程むづかしい。けれども玆に悟入するのが莊子の極意である。それでこそ盛夏、千萬年の涼味を掬するような快味に逢著することが出來る。心の苦熱、魂の苦悶を千萬里の外にすつかり流してしまふことが出來る。もつと端的

にいふと、この心境には、暑もない、寒もない。寒暑を超越してゐる。どんな暑さに逢つても、それを暑いとしない。どんな寒さに逢つても、それを寒いと感じない。寒暑一如だ、暑は寒の如く、寒は暑の如しか。否、寒も暑も心頭にない。

すこし話が禪家の談義めいて來た。それではまた暑苦しいかも知れぬ。そこで一つ莊子が永生を得る道を說いたことを述べて見よう。それは死生を超越した神人には、素より不必要のことである。けれども一般人には、相應興味の深いことだ。莊子の意によると、人間長生の道は、身心の清靜、恬淡を主とするにある。清い心身、靜かな心身の保持が永生を萬人に惠むのである。それには外界の物や形に累せられないので澹然たる純一無雜の心境に住することが必要だ。莊子はそれについて「至道の精は窈窈冥冥たり、至道の極は昏昏默默たり。視ること無く、聽くこと無く、神を抱いて以て靜かなれば、形將に正しからんとす。神必ず靜に必ず淸し、汝が形を勞するなかれ、汝が精を搖ふことなかれ。乃ち以て長生すべし。」といつた。また莊子は、田園にゐて、釣魚を樂むとか、深呼吸法のやうなことを續けるとかするのも長生術の一種ではあるが、それ丈ではまだ徹底しない。それで「意を刻せずして高く、仁義なくして脩め、功名なくして治り、江海なくして閒かに、導引せずして壽く、忘れずといふことなく、有せずといふことなく、澹然無極にして衆美これに從ふは、これ天地の道、聖人の德なり。」といつた。それは唯心的長生法である。顯的永生の道である。禪定の心持を持續して、無爲、自然を旨とした心の攝養法でもある。道教の人々の末梢的、形式的な長生法とは餘程趣を異にしてゐる。が、長生といふことは死生超越の福音を說いた莊子に於ては、さう重きを置いたのではなかつた。それは本文でなくて小さた附錄のやうなものだ。

莊子及び列子が憧憬したユウトピア

現代の病的文明世界には、いろいろの暗影が伴つてゐる。そこには脅威がある。拘束がある、壓迫がある、危險がある、恐怖がある、動搖がある、不安がある。ところが、莊子のユウトピアに遊ぶと、さうしたものがまるでない。悠々自適して平靜と安易とのうちに逍遙遊することが出來る。私らは文明的苦熱から逃れるために暫く莊子に從うて、そのユウトピアを見よう。

莊子は先づ私らに向つて、左の如く語るであらう。

「北冥（北海）に魚がある。その名を鯤といつた。鯤の大いさはといふと幾千里だかわからない。ところが、その鯤が

忽ち姿を變へて鳥となつてしまつた。それを鵬といふ。鵬の大いさも亦幾千里だかわからぬ。それが怒んで飛ぶと、その翼が垂天の雲のやうだ。」

いかにも莊子のいひ方が大きい。鵬は心鳥である、自由無碍の心の象徴である。莊子は鵬を借りて、自分の悟道的心境を闡明し、暗示しようとしたのである。それで彼れは「鵬の南冥に徒るや、水に擊つこと三千里、扶搖に摶つて上ること九萬里、去つて六月を以て息ふものなり。」といつた。單に表面の事象を想像するだけでも、濶然たる心持がするではないか。

以上のやうに自由無碍な心を鳥の上に象徴した莊子は更にこれを人の上に象徴した。それが所謂神人である。この神人の話は、いかにも興味が深い。それによると、世間から大分遠ざかつた姑射といふ山に神人がゐた。その人の皮膚は雪白で氷のやうに潔かつた。その人の有様は極にこやかで温柔で處女のやうだ。平生普通人のやうに五穀を喰べないで、空中を吹きわたる風を吸ひ、夜間靜かに落ちゝ露を飲んで生活してゐた。その人は神通自在で雲に乘り、變幻極まりのない飛龍に跨つて、四海、六合の外にまで思ひの儘に遊行することを常とした。その神魂は凝つて靜かに萬物を毀つたり、傷けたりすることがなかつた。そして毎年の五穀成熟の功を現はした。かういふ話である。

それは至道を體達したものが、心の靈妙を現はし、外物に累せられないで、世を益する狀態を表示したのである。が、その想像が詩的で、象徴が適切である。

列子も亦略ぼ同樣のことを記してゐる。唯表現がもつと散文的だ。そして神人のことについて「心は淵泉の如く、形は處女の如し。偎せず、愛せず、仙聖はこれが臣となる。畏れず、怒らず、愿愨はこれが使となる。施さず、惠まず、而も物は自ら足る。聚めず、斂めず、而も己れ缺るところなし。陰陽常に調ひ、日月常に明かに、四時常に順ふ。風雨常に均しく、鳥獸の生育も常に時あり、年穀常に豐なり。」といつてゐる。このユウトピアには、疾病の類がない、わか死するものもない。流行の妖教とか、はやり神とかいふものも亦ない。列子は神人に治められてゐる世界が平和で淨潔で幸福に滿ちてゐることを描いてゐる。莊子と同趣ではあるが、莊子よりも散文的であるだけに旨意が一段明かになつてゐる。莊子も列子も、彼等の信ずる大道が實行さるゝならば、當然このユトピアが地上に現はれるであらう可能を想像したのである。

列子はこのほかに黄帝の夢に托して、華胥の國を說いてゐる。それは絶對平和のユウトピアである。この國には師長などいふものはない。唯自然に治つて行く。またその國の民衆は物

ほしい心をすこしも持たぬ、自然の儘の心持である。彼等は生きてゐるのを嬉しいとは思はぬ、が、死を厭ふ風もない。生死に拘泥しないから、わか死するものが一人もない。また他人とか一族とかいふ區別を立てないので憎むことも、愛することもない。つまり、彼等は愛憎を超越してゐる。のみならず、彼等は順逆や向背などを知らぬから、勝手、不勝手もない。物を愛し惜むこともなければ、畏れいやがることもない。それはいかにも無爲、自然の樂土である。權力の要不要を考へることすらいらぬ平和の常寂光土である。華胥の國に遊ぶことを得るものは幸ひである。

かうしたユウトピアは、現代人の夢想だもしないところである。また今日のやうに傷けられ、ゆがめられ、蹂みあらされ、掻き亂されてしまつた心では、誰れもかうした境界は思ひ及ぶ餘裕も、また可能性もない。けれども列子の話によつて、今それを胸の上に描き出して見てさへも、何となく、心の涼しさを感ずる。黄帝のやうにそれを夢みたとしたら、その夢はどんなに涼しかつであらうかと思はれる。なやましい夢、恐ろしい夢、不快な夢に脅かされて、心的苦熱を感じつゝある私らは、せめて夢だけでも涼しくしたいものだ。

要するに、莊子や列子の說くユウトピアは、虛無の極樂である。絕對平等の世界である。そこには支配するものもなければ、支配さるゝものもない。そこには貴賤もない。貧富もない。愛憎もない。善惡もない。是非もない。盛衰もない。つまり、階級とか差別とかいふことがまるでない。それは美妙、靈妙、至善至純の大道が行はれてゐるためである。そしてそれらのユウトピアの人たちは、自然を尙び、無爲を旨として、恬淡、無慾、淸靜、淨潔であるから、さうした絕對平等の世界が作られる。が、莊子、列子らの夢想は、今日に至るまで實現されたことが一度もなかつた。恐らく、今後とても同じであらう。そして病文明が今より一段惡化したら、最早、列莊の夢を涼しい、さばさばしたものだとして味うて見るものすらなくなるか知れない。

玆に莊子のユウトピアを理解する鍵として一言しなければならぬのは、その平等觀と運命論とである。彼れの平等觀は至極徹底したものである。それは彼れの運命論と一脈相通ずるところがある。莊子は人間の境遇、地位、幸不幸などすつかり天命だと解する。それは老子の無爲、自然を尙ぶ心を極度に押しつめた結果である。老子にあつては、そこまで消極的になつてゐなかつた。ところが莊子は無爲、自然、重く見すぎて、一切の事は宇宙創造者の意に隨順せねばならぬとした。そこで幸福も

天命、不幸も亦天命、賢愚も強弱も貧富も優劣もすつかり天命に歸した。天命に向つて人爲的反抗をしてはならぬ。たとひどんな禍に逢つても、どんな不幸に沈んでも、天命を甘受して、「これは天の致すところである。」とする。それについて不滿も不平も起さない、反抗もしない、憤然も感じない。かういふのが莊子の運命論である。

それについて、莊子は一篇の寓話を示した。ある男が一方の足を斬り取られて、片足で歩いてゐる。それを見たものが驚いて「一體それは君の生れ付きですか、それとも人のために怪我でもしたのですか。」と問ふた。一本足の男は「實はすこし理由があつて切られたのですが、これも天命で致方がありませぬ。」といつた。人爲によつて片足を失つた悲みを悲みとはしない。天の致すところだとしてしまつて甘心してゐる。それは無爲、自然の心の絕對化である。

莊子の平等觀にも亦天命の意がある。人間はすべて他の動物よりも立優つてゐると思ふけれども、それは誤つてゐる。宇宙創造者は人間と他の動物との間に差別や階級を設けてゐるわけではない。萬物平等に見てゐるのである。人間を作つたのも偶然である、他の動物を作つたのも偶然である。それは天の致すところである。鳥獸や虫魚も宇宙創造者は人間と同じやうに見てゐるのだ。唯人間が人爲的に一種の差等を附したにすぎない。ところが人間は差等に拘泥して、すべての物が一體であり、自他の區別、上下の等級を附してはならぬといふことを解しない。小我、小智に囚はれて萬物一體の眞理を透見し得ない。もつと濶大な眼を睜ひて達觀するところがなければならぬ。子輿といふ者の言に「もし造物者が私の左の腕を鷄にしてしまつたら、私は鷄の心を以て、時を告げよう、もし造物者がまた私の右の腕を弓にしてしまつたら、私は鴞鳥を取つて炙り物にしよう。そして造物者がもし私の尻を車の輪としたら、私は心を馬にして、造化によつて作られた車輪と馬とを乘りものとしよう。」といつた。これも莊子の寓話であるが、萬物平等の意を暗示してその旨を達觀すべきことを敎へたのである。

病文明人の熱苦を救ふ最大の涼味

以上、莊子の思想は、その大旨を紹介した。彼のいふところには、確かにニヒリズム、アナアキズムの色合がある、それは列子にもある。けれどもこれを近代ヨーロッパの有力な社會主義者のアナアキズム、ニヒリズムなどにくらべると詩的で空想的で、また消極的である。どうもそこに實現を豫想するやうな力強さがない。

殊に列子は逃避的であると同時に瞑想的な味が深い、彼れは人生解脱の道について、獨自の見解を把持してゐた。それは、やはり老莊の思想と同じく無爲自然を基調としたものである。ある點に於て、それは莊子の坐忘の意義に似通つたところがあつた。列子の人生解脱の旨は卽身絕對といふことである。佛教の卽身成佛に似たところがないでもない。有限に囚はれつゝ差別に執する人間がどうして絕對、無限の生命を摑むかといふことは、手輕に解き難いことである。

が、列子はこの問題を比較的に無造作に解決した。列子の見解によると、人間はその成心を去つて、自他、内外の別を忘れると、差別を絕し、有限を越えて、絕對の根本生命に合致するといふのである。それは莊子の虛心、清靜の意味に徹して、忘我の世界に投入するの心であらう。それについて、列子は一つの寓話を記してゐる。ある男が健忘症に罹つて、すべてのことを忘れてしまつた。そして蕩々として天地の有無さへも、はつきり意識しないほどで、何事をも忘れた、覺えて置かねばならぬ肝心のことをも忘れた。それがひどいときは、自分の生死をも分別しないほどであつた。かうなると、いろいろのことに差支えるので、健忘症治療に力めて、すつかり全癒した。彼れはひどく喜んで、その記憶力の恢復を誇つた。が、その喜びも誇りも長くは續かなかつた。刻々に得喪について憂ひ、毀譽の感じについて自ら惱んで、どうにも仕樣がなかつた。彼れは玆に至つて、健忘症の時代を戀しく思つた。列子はかういふ寓話によつて忘我の必要を暗示した。

自他、内外の一切を忘れるといふことは、新文明に中毒して自己意識が鋭くなつてゐるものにはひどくむづかしい。けれども私らは、常に不必要のことをも數多く覺えてゐて、それがために惱んだり、苦しんだりして心内の熱氣に堪えられぬ場合が少くない。かうしたことから考へると、忘れるといふことは無意義でない。自己を忘れる、他を忘れる、内を忘れる、外を忘れる、憂ひを忘れる、怒りを忘れる、不快を忘れる、あらゆる一切を忘れる。さうした時、私らは差別を絕して、一躍、絕對界の根本生命のうちに飛び込み得よう。卽身絕對の眞意識に觸れることが出來よう。

また列子は無心無爲の必要を說いた。それは虛心坦懷の意味でもある、そして自然と冥合することだ。ある漁夫の話によると、彼れが無心無爲の心的狀態で舟を海に浮べてゐると、何處からともなく、鷗が群つて來て、快く遊ぶ。ところが、彼れが不圖鷗を捕へて見ようといふ氣分になると、鷗は一羽去り、二羽去り、三羽去つて、すつかり何處へかいつてしまふ。蓋し鷗

夫の害心を直覺した爲めであらう。列子はかういふ寓話を記して無心、無爲の尊いことを敎へた。そしてそれがやがて即身絶對の旨を得べき道であることを暗示した。

列子は以上の如き修養を重ねると、何人も神仙のやうになつて、自由無碍の妙力が得られる。火に逢つてもあつくない、水のうちに飛び込んでも溺れない、風に御し、雲に乘つて、心耳洞然として明かだ。そして彼我、内外の區別を超絶するといふ。つまり、それは即身絶對の樂地だ。情慾の塊ともいふべき汚れた身が考へ方や工夫によつて、淨化せられて、絶對の根本生命に合致するのである。

「一切を忘れよ！そして無意、無心であれ。」

といふことは、神經過敏の現代人に取つて有力な福音にちがひない。利害や得喪といふことについて最も敏感な病文明人は、一切を忘れて、心熱を涼しく吹きさますことが必要だ、有爲、有心で、少しの間も、寢てゐる時さへも心の休む暇がない病文明人は暫く無心、無爲の境を彷徨して、心的平和に安住することが何よりも望ましい。病文明人は餘り疲勞し、衰退し、困憊してゐるのである。その心が尖りすぎ、爛れすぎてゐるのである。

私は自己の心の暑さ、靈魂の暑さに苦しんだので、それらを治癒すべき心的淸涼味について、餘りに多く喋りすぎたかも知れぬ。そしてそれが却て讀者諸氏の心持を暑苦しくしたかも知れぬ。けれども私の片言隻語のうちには稀れに幾片かの氷塊を飽喫したやうな冷涼さを諸氏に頒ち得たところがあるかも知れない。少なくとも、私は茲まで書いて來て「心頭涼しければ火も亦涼し。」の妙機に少しでも觸れ得たやうな心持がせぬでもない。否、私の心はもう暑さを絶し、夏を絶し、病文明の苦熱を絶して、また忘暑を說くの必要を見ない。夏は何處へか飛んでいつてしまつた。淸涼正に秋の如しだ。

波にゆられて

松川二郎

海へ出よ、海へ出よ。ひろびろとした海へ出よ。そして海を見よ、島を見よ！。

海を見よ、島を見よ

この頃の山岳全盛を羨むわけでもなく、呪ふわけでもないが、同時に、皆がもつと海へ遊びに出かけ、もつと海と親しむやうにしたいと私はおもふのである。常住不斷に「四面環海」を口にする日本に、とんと海上旅行がおこなはれず、一冊の「船の旅」案内すら無いことを、私は不思議にもおもひ、遺憾ともする。高山、高山といふがタカが三千メートルの問題で、四キロの高距をもつ山は日本内地には無いではないか。富士山を五萬分地形圖で觀ると、四枚に亘つてひろがり、素晴らしい山容を呈してゐるが、それを粘土細工でつくれば高さは僅かに二寸五分にしかならない。日本アルプスなどは凡て二寸内外である。その二寸のうちで麓の高さが已に一寸あるから、日本アルプスの縱走・横斷と云ふも、要するに一寸の凹の昇り降りである。とまあ斯うも云へるのである。

「山」に山の雄大と面白味あるがごとく、「海」には海の雄大と面白味がある。山岳旅行のいよいよ旺盛なることを望むとゝもに、少しは海へも出かけて貰ひたい、海の趣味を味はつてもらひたいのだ。日本アルプスを踏破してその健脚を誇る勇者が、湖水のやうな瀬戸内海ぐらゐで、蟹のやうに船室に逼込んで、嘔吐をはいてゐるやうでは、甚だなさけないではないか。此の春頃、何かの雑誌で竹越三叉氏が「海魂」を説かれてゐるのを見た。——讀んだのではないが、昔から熱心な北守南進論者であり、南國遊記の著者である三叉氏の所論は、讀まなくても大凡わかつてゐるやうな氣がする。「海魂を養へ。」「もつと海へ出ろ」と説いてあるに相違ない。海魂てふ語がちよつと珍らしいが、想ふに、昔の日本魂は即ち海魂であつた、とでも云ふのであらう。海魂を養ふ爲には、海に遊び、海と親しむことが、先

が何よりも必要なことである。

◆

海魂であつた日本魂を潮から引揚げて、狭い壺中に投じ、アルコール漬のやうにしてしまつたものは　徳川三百年の鎖國政策であつたことは言ふ迄もない。大船の建造を禁ぜられ、海外貿易を禁ぜられた結果は、旅客は中國から讃岐の多度津あたりへ渡る内海航路を一大冒險のごとく怖れ、本職の舟子すら志州鳥羽から豆州下田に至る航路を以て、非常の難關と思ふまでに墮落したのであつた。おかげで折角發達しかけた「海洋文學」の如きも、我が文學史上からは跡かたなく影を潛めるに至つたのである。海國日本に海洋文學の無いことに就て、ずつと昔、幸田露伴氏の長嘆したことがあつた。こんな場合に利用しようとおもつて、其の一節を摘錄しておいたのを掲げると、――

例へば潮來たり潮去る面白さを詠める歌、又は晴れたる日の親しむべき風立てる日の恐るべき海原の樣をしるしゝ文、或は又波の端より昇る日の美はしさ、八山の彼方に落つる月のあはれさなどを寫しゝもの勇ましき舟子が上を傳へたる小說などは、我邦の文學にいと多く見ゆべき筈ならずや、

さ　に事實は甚く此に反せり。所謂和歌といふものには、海に關するもの甚少し、たまたま無之に非ずと雖も、多くは海を怖れ海を厭へるが如きものにして、海中に立てる國民の歌としては想應しからぬ事とや謂はん……萬里の海を我路にして八方の風を驅使する舟人の意氣を詠める歌、又は千尋の波の底より呑舟の大魚を得て舷頭に獨り嘯く漁夫の樂みを描ける歌いくばくかあらん。小說は源氏物語、うつぼ物語の昔より海とし云へば恐るべきもののやうに描けるが多し。風にあひて船の破るゝことと又は思はぬ方に吹流さるゝことなどは、好みて描けることとなるが、其の物は大方皆机の上にて作者が作に對する自己の恐怖心より捻り出したるもののみ。……海員の生活上の經驗の眞情などを書きあらはしゝものゝ如きは、いくばくかあらん。予は僅に或一章にすら海に關する記事の稍注目を値すべきものを含めるを指示する能はざるなり……。

今日と雖も同樣の嘆がある。萬葉の　兎とワニの話があり、浦島傳說があり、詩歌には山上憶良の遣唐使を送る歌などがあつて、ずつと昔の日本人は確かに海に親しみ海洋文學を有し、海魂を有してゐたやうである。萬葉集などには、さすがに海の歌が多い。

熟田津に船のりせむと月まてば潮もかなひぬ今は漕ぎ出な

月よみの光をきよみ夕なぎに水手の聲よび浦まこぐかも

妹が家もちかくありせば見れど飽かぬ麻里布の浦を見せま

しものを
かく湖に親しみ、船の旅をよろこび歌へる多くの歌を、見出すことができる。國民がもつと海に親しむなら、自然とそこに海の文學も生れてくるであらう。——私が多くの文學者、又は文學者たらんとする人を讀者に有つ「中央公論」誌上で、少しく海上旅行を宣傳して見ようと思ひ立つたのも、目的の一つはこゝらにある。

◇

海上旅行の頗ぶる振るはないのは、海の旅行案内の缺如してをることが、原因の一つだと云へる。鐵道の方は、鐵道省が一生懸命に宣傳をやつてゐる爲に、極く詰らぬ片田舍の名所舊蹟までも、今は廣く知れ渡つて來てゐるのに、海上のことゝなると、世人は案外に事情に暗い。伊豆の大島などは近年大分、人が出かけるやうになつた爲、比較的知られて來たが、八丈島とくると甚だあやしくなる。

『八丈島へ行くつて云つてたが、止めたのかい。』

『行つて來たよ、昨日歸つたばかりだ。』

『だつて、君に會つたのはつい五六日前だつたぢやないか。』

『左樣さ、往復四日あれば八丈島は充分觀て來られるのだよ。』

『へえ？、そんな近いところかい、八丈島は。』

『君の頭には鳥も通はぬといふ歌の文句がこびりついてるね。鳥も通はなかつた八丈島には、來年から電燈がともるよ。』

これは一箇月ほど以前、實際に行はれた會話で、對手は社會の木鐸新聞記者である。他は推して知るべきのみである。東京八丈島間には月五回の定期船があつて、十六七時間で到着することができる、それに此の船は朝早く八丈島に着き、大抵はそこに一泊して翌日の午後に出帆するから、往つた船で歸るとすれば、中二日あればいゝことになる。それで又島の風景も生活も、大略は知ることが出來るのであつた。

隱岐は毎朝九時、東廻りと西廻りの汽船が、同時に堺港を出發して、翌日午前四時、また同時に堺に歸つてくる。主都西郷港までは僅かに七時間である。島前に一日、島後に一日を遊ぶとして、二泊三日あれば足りるのであるし、島後の方には短距離ではあるが主要道路には乘合自動車が通じてゐる。佐渡は新潟—夷港間及び寺泊—小木間いづれも四時間で達し、ともに一日一往復をやつてゐる、そして島内には縱橫に自動車が通じてゐるから、これも先づ二泊三日あれば、充分見物することができるのである。

飛島は大正もすでに十三年の今日尚ほ物々交換などの行はれてゐる、おそろしく古色蒼然たる小孤島で、是非諸君を遊の一

お勸めしたい島の一つであるが、これとて夏季の間は、酒田から毎日「日がへり遊覽船」が出てゐる、一泊二日を費すつもりなら、三ぺんぐらゐ島内を巡ることができる。それこそ眞實に彈丸黑子のごとき小島ではあるが、旅館も一軒あるし、普通の民家でも喜んで客を泊めてくれる。日本海といふと直ぐ「波が荒い」ことを連想するけれど、それは冬季のことで、夏の日本海と來たら、極めて平穩無事なのである。

その他、壹岐・對島、將た五島列島・伊豆七島、何處だつても、二三日乃至四五日の行程であつて、案外なほど簡單に、行つてくることができる。それに船も十年前に較べたら、殆んど隔世の感ある程に、いづれも改善せられてゐて、以上の諸航路に目下使用せられてゐるものは、小さくて二百五六十噸、大きいのは四五百噸もあるから、多少の風波に會してもさうひどく搖れるやうなことはないし、又夏の海上は、何處でも、平穩であるから、滅多に船暈に惱まされるやうなこともない。船に弱い人も二三度押して乘れば、すぐ馴れて、醉はなくなることを請合ふ。胃腸の弱い人が、一番船には醉ひ易い。私は元來非常に胃腸が弱く、船暈にかけては「名人」の方で、船にさへ乘つたら屹度醉つたものである。『今晩船に乘る』といふ日は、朝から已に氣持がわるく吐き氣を催した人間である。むかし、横濱へ洋行歸りの友人を迎へに行つて、彼の港内で、本船へゆくランチの上で醉つた人間である。或る冬、二百七十噸の小汽船で樺太へ渡つたときの如きは、血まで吐いて、四十八時間飲まず食はず、死んだやうな氣でベツトに横つてゐた人間であつた。それが今日は、汽車の旅よりも船の旅を喜ぶ人間となつた。どんなに船に弱い人であらうとも、恐らく「昔の私」ほどに、船に弱い人は此世の中にあるものではない。

實際に、かけ値なく、船の旅は氣樂に、愉快である。私は毎年一度は南房の布良。根本あたりに遊ぶが、近年全く汽車で行つたことはない。夏になると東京灣汽船が東京――館山間に「日がへり遊覽船」を運航するので、それを利用することにしてゐる。その船は「さくら丸」又は「たちばな丸」で、大さは五百噸内外であるが、遊覽用につくつた鋼鐵船だから、食堂や娛樂の設備がとゝのひ、アツパーデツキの設けもあつて、東京灣の遊覽船としては丁度手頃のものである。甲板で新聞を讀んだり、蓄音器をきいたり、小供等にまじつて輪投げをしたり、それにも飽きたら食堂へ行つて、四邊の風景を眺めながら麥酒でも飲んで居れば、知らぬ間に目的地に着いてしまふ。船は如何に混んだところで、寢そべる位の餘地はあるし、外にひろびろとした甲板といふものがある。東京から館山迄四時間、時間

に於て汽車と大差なく、賃金は却つて廉い。

『房州へゆくのに汽車などに乘る奴は大莫迦者さ。』

私は誰にもさう云つてゐる。夏の房總線と來たら、その混雜は實際言語道斷で、狹い箱の中へ、身うごきのならぬくらゐ壽司詰にされた旅客は鼻の孔を眞黑にして、タラタラ汗を流して唸つてゐる。それを觀ると氣の毒でもあり、滑稽にも感ずるのである。

◇

私が若し金持であつたら、責めて此「たちばな丸」くらゐの船を、夏の間だけチヤアターして、一家を擧げて此に住みこんで、呑氣に、悠長に、心のまゝに、瀨戸內海あたりを遊んであるいたであらう。小さな島の一つ一つに船を寄せて、その島の生活を觀てあるく、漁夫も雇入れておいて、魚などは行く先々の海で、漁をやらせて食料に供し、野菜や果物も土地の名物としてゐるものを購入して、變つた料理をつくらせる。或る夏は千島に遊び、或る夏はまた支那の沿岸までも出かけたい。——英國あたりの富豪には、よく斯ういふ生活を樂む者あると云ふ話である。日本の金持と云つたら何うだ？、一代議士たるに十萬廿萬といふ莫大な金を投じたり、途方もない宏大な妾宅を構へたりする者は、多々あらうけれど、未だ一人の、かうした風流生活を試みた者あるを聞かない。

小中學校生徒の爲に行はるゝ、夏季の林間學校や高原のキヤンプ生活も結構だが、一面には又海に親しましめ、海魂を養ふ爲に、小汽船を借受くるなり建造するなりして「海上生活」の試みも、あつて然る可しとおもふのである。子供の折から海に親しませ、馴れしめると云ふことは特に必要である。

さて、理窟や希望は拔きとして、海の旅の案內を兼ねて、變つた「島の生活」や、その歷史・傳說などの興味あるものを、少しばかり紹介して見よう。——海の旅のおもしろ味の一半は、言ふ迄もなく「島」を觀ることゝである。田山花袋氏は多年憧がれてゐた島の影を、初めて荒海の沸返る波の中に望んだとき『何だかなつかしい人の肩でもあるやうに』思はれたと云つてるが、私はいふ「島は古き酒甕のごとし、その中には、純眞な「人」と「生活」とが、恰かも芳醇の如く盛られてゐるのを、到る處でつねに観たのである。——かくて我が讀者の中から、たとへ五人でも十人でも、「海の旅」へ送り出すことが出來れば、私の望みは足りるのである。

瀨戸內海

日本近海の「船の旅」では、何と云つても瀨戸內海に越すと

ころはない。内海の風光は、その名聲すでに世界的であつて、觀光外人の印象を語るもの、先づ富士山と此の内海の美を嘆賞せぬ者はない。日本全國の隅々までも歩きまはつて、天下の絶景や奇勝には食傷してをる者でも、此の内海の風光だけは、眞實うつくしいと感ぜぬ譯にゆかないやうである。然しその美しさは、寒霞溪とか、仙醉島とか、或ひは宮島とか、或る秀れた名勝の一つ一つを指すのでなく、それを引くるめた大きな「瀬戸内海」そのものである。

瀬戸内海と稱する、東は淡路島を界とし、西は關門・豐豫の二海峽を以て界せる内海の中には、抑もいくつの島嶼があるのか？　私は曾てそれを陸地測量部の二十萬分地形圖に據つて、五百幾つかまでを數へたが、今慥かなる數を記憶してをらぬ。無論それは島たるの形を具へ、立派に「島」といふ名の冠せられたもののみを數へたのであつて、若し彼の鹽松勝譜が、松島灣内に於てよく二百四十九島をかぞへたる流儀に倣つたなら、恐らくそれは、一千に近い數に上るであらう。内海とは云ひ條東西百里に亘る廣大な海であつて、その間には播磨灘、燧灘、伊豫灘、周防灘のごとき、島の少い海面をも見るけれども、鹽飽群島や藝豫諸島の如きは、實に大小無數の島嶼の密集場たるかの觀がある。内海五百餘島中、三百餘島は即ち此間に排布してをるのである。是等の島々の中には、隨分風景に富んだのがあり、又特殊なカラアを有つたのがある。それは後で云ふとして、此の内海旅行に有名な「むらさき丸」といふ船がある、「むらさき丸」は、「くれなひ丸」に代つて大阪――別府航路に就いてゐる船で、曩のくれなひ丸（千三百噸）よりも更に三百噸ばかり大型で、内部の装飾や設備は一層進歩したものであるが、歐洲航路の汽船の型を、只少しく小さくしたにすぎない。僚船屋島丸とゝもに、毎日一回大阪を午後二時、神戸を同三時半に出帆して、神戸別府間十八時間で達する。汽車に據るときは、神戸別府間は特急を利用しても十六時間半を要し、賃金は汽船の一等と汽車の一等と略ぼ等しい、と云ひたいのだが實は船の二等の方が尙ほ二圓ほど安いのである。それでゐながら未だに、むらさき丸が乘客雜踏のため沈没したといふ噂もきかないから、世の中は不思議だとおもふ。

繪のやうな須磨・明石の海岸を右舷に見て、明石海峽を過ぎる頃は、夏であれば日は未だ高い。

『城が見える！。姫路の白鷺城ですねあれは。』さう云つて船中の一人は、遙かに斜陽を受けてキラキラと輝やく、小さな白い物を指すであらう。月は淡路島の上にのぼる。暫らくは唯だ月と水との世界である。どんな夏の眞中でも、

浴衣一枚で甲板に立つては居られぬ程に涼しい。やがて右舷に小豆島が月光に淡く、模糊として浮き出てくる。左舷にもぼうと、何か淡い影があらはれる。夢のやうな光景である。然しすぐに高松の市街の灯が、正面にちらちらと美しく輝やきはじめる。

夏の夜は、高濱港を出るとすぐに明けて、右には周防の大島が横はり、左には石槌山が豫土國境の連嶺を率ゐて立てる雄大な姿を見る。伊豫灘を通過するときは、こんな船でも少しは搖れる。やがて鶴見岳を眞正面に仰ぎつゝ船は菡萏灣に入るのであつた。

然しながら、むらさき丸の船路は專ら四國の海岸に沿ふてをり、且つその航路中でも最も變化と眺望に富んだ高松―高濱の間を、往復ともに夜間に通過してしまふので、內海觀光の旅としては、決して策を得たものと云へない。蓋し瀬戸內海のセニツク・ルートとも稱すべきは、東は備後の鞆津から西は周防岩國に至る間であつて、此の間を一巡しなければ、眞に瀬戸內海の勝を觀たとは云へないとおもふ。此の區域を、丁度お誂向きに晝間通過するものに、大阪商船の山陽航路がある。

その航路に就いてるのは、利根川丸、天龍川丸、大井川丸などと何れも五百六七十噸級の船で、夕刻大阪（天保山）を出て小豆島の坂手、四國の高松・多度津などに寄港し、それから內海を横斷して朝の七時半頃備後の鞆へやつてくるのであつた。福山から鞆鐵に乘換えて鞆に到り、阿伏兎觀音を觀て仙醉島に泊して、翌朝此の船に乘込んで宮島へ、或ひは岩國あたり迄行つて見ると好い。宮島へは午後四時半頃、岩國へは五時半頃に着く。賃金は鞆から宮島まで、一等で五圓ぐらゐだつたと記憶する。

鞆を出るとすぐ口無瀬戸にかゝり、昨日參詣した阿伏兎觀音を右舷に高く仰いで見る。この感じは一寸わるくない。一時間半ばかりで尾の道に着くが、此の間右に沼隈半島、左に田島、横島、百島などを送迎して、海光島影を描くが如しである。殊に半島の一端滿越から戸崎島の高松へ架した長橋などは、畫中のものと云つてよい。尾ノ道水道は海といふ感じは更に起らないで、まるで隅田川だ。川でも利根川などは此の四五倍もある。右に、山の斜面に攀つて大きく擴がつた尾ノ道の市街、左に向島の部落を觀て、すうと水の上を辷つてゆくのは、莫迦にいゝ心持だつた。

「アヽ、千光寺が見えるぞ。彼の上の巓が古城址の千疊敷だ、彼處から俯瞰した市街の夕映は、何とも云へぬ美しいものだつたけ。」

など〻、私はその眺望の美しさと大きさとを想ひ出さずには居られなかつた。

尾ノ道から宇品に至る間は、又特に島の數が多い、一島を送つて一島を迎へる、一島を去らざるに更に一島來たり、二島三島四島群がり來たる。餘りに島の數が多く、餘りに連續的である爲に、もし豫め此の多島海の地形的概念が頭の中に無いと、我々の不完全な肉眼は、すぐ錯雜した島々の遠近の度を曖昧にして、一の長大な陸地の横はつてゐるにすぎない如くに、見せるかも知れない。徒らに安閑とした島嶼と、徒らに靜平な海とは、或ひは些か諸君に倦怠を感ぜしめるかも知れない。

が、間もなく音戸の瀬戸がやつてくる。船頭可愛や一丈五尺の櫓がしはるの俗謠に依て名高いところである。もと接續した地峽であつたのを、平清盛が安藝守であつた時代に、開鑿して船舶を通ずるやうにしたもので、幅僅かに五十間、右は吳市の海警固屋町、左は倉橋島で、潮流の激しい迫戸で、帆船などは餘程順調の時でなければ通過ができない。汽船でも老齡の貨物船などは、盛んな苦闘をやつてゐる。そいつを煙草をくはへ乍ら見物するのは、なか〳〵好い氣持のものである。瀬戸の入口などは、全部が大きな一つの渦卷を成して、くるくると舞つてゐる。何といふ美しい澄徹した水の色だ！。私が詩　だと、この渦卷をたねに、ポオが諾威の「メールストローム」を描いた以上の大叙述を試みて、一つ讀者の心臓を寒からしめる處なのだが、生憎く『瀬戸内海には二十尋以上の深さのところは無い』といふ觀念が、頭の中にこびり付いてるので、迚もものにはなり相にない。

「え？、彼れですか、あれは清盛公を祀つてある塔です。」海の中に、お臺場のやうに築かれた石垣の一廓を指して、ボーイはさう答へた。彼れの遺功を記念する五輪の塔は、その臺場の黑い松の中にちらりと望まれる。日輪の沒するを惜つて、扇をあげて招きかへしたといふ。かれの生涯中一番劇的なシーンは、この迫門開鑿當時の出來事なのださうである。音戸の開鑿――嚴島神社の造營――福原遷都、から考へてくると、彼れを一個の「土木宰相」と稱するに不可ないやうである。

音戸の瀬戸を出れば卽ち右が吳軍港で、左舷には近く、手を伸ばせば屆きさうに、江田島の海軍兵學校が見える。太田川のデルタの先きに、一面の海苔篊を望みつゝ船は宇品港に入る。それから安　の宮島を、東岸から南岸をよぎつて西岸へ、ぐるりと半周する時が、此行に於ける最後の景勝である。

播山過盡備山青　十幅征帆二日程
歸思猶嫌風力軟　篷窓穿眼廣州城

三十六峰外史にこんな吟があつた。

◇

内海を横斷して、四國と中國地方とを結付けてゐる航路には、宇野高松間（最短距離）の鐵道省連絡船の外に

備前牛窓から小豆島の土ノ庄を經て高松に至る線

同味野町から多度津に至る線

備中笠岡から神島、北木島、眞鍋、佐柳の各島を經て多度津に至る線

同玉島町から廣島（島名）を經て丸龜に至る線

尾ノ道から因の島、弓削島、四坂島を經て伊豫今治港に至る線

同、因ノ島、弓削、岩城、伯方、大島の各島をめぐつて今治に至る線

同、大三島、大崎上島下島を經て伊豫三津濱に至る線

備後竹原町から大崎上島を經て今治に至る線

宇品から音戸の瀬戸を通過し上下蒲刈島、大崎下島を經て今治に至る線

同、音戸の瀬戸を經て三津濱へ直航する線など主なるものゝみを擧げても、十線ばかりあつて、各線いづれも一日一回、多きは二回の往復をやつてをる。この外廣島と別府間にも、一日一回の便船があつて、夜の八時に宇品を出れば翌朝六時、寢てゐる間に別府まで運ばれてゆく。汽車だと、特急に乘つても別府迄は矢張り十時間かゝるのである。

かうした横斷航路によつて、内海の島々の生活を見あるくのは、單なる風景を賞翫してあるくよりも、寧ろはるかに興の多い旅であつた。少くとも、私の趣味から云へば、さうなのである。内海は我國文化東漸の航路に當つて、古く交通が開け、産業も發達してゐた處だから、人口も比較的稠密で、とてもそれは太平洋の眞中や、日本海に浮かんでゐる小さな島々に於て見らるゝやうな、古色蒼然たる趣きは味ひ難いけれど、開けてをれば開けてをるままに、皆それ〴〵特有のカラアを有つてゐて、その面白味は何うしてなかなか忘れられない。かく開けた島々の間に、全たくの無人島が、幾つも横はつてゐるのも、甚だ面白いとおもふ。或る友人は『君が島の生活を觀てあるくといふのは、丁度骨董好きが、骨董をさがしてあるくやうな、氣分ぢやないのかね』と云つた。私の趣味は決して古いものばかりを喜ぶのではないが、幾分さう云つた氣分も有るやうではある。

多くの島々の中でも、特に大崎五島の木ノ江などは、おもしろいカラアを有つた町であつた。それは竹原町の正南に横つて

ゐる、周圍十二里程のちよつと大きな島で、木ノ江といふ町は其の東岸の中央にある。無論それは此の島の首府、木造船の大工場があり、數百の造船職工によつて榮えてゐるところで、尾ノ道から一時間半ほどで達する。そこは全く女と酒によつて組織された『歡樂の街』である。大阪天王寺の新世界、或は舊淺草の十二階下の一部を移轉したやうな光景を、此の海上の一角に見出したことは、私に取つては確かに一の驚異であつた。

『こいつあ、少しひらけすぎてる。』

とも思つた。だが、更に面白いのは、此町の遊女であつた。人口四千に足らぬ小さな町だが、百五六十人の遊女がゐて、それ等の女は多く日々こゝに入込む和船や小蒸汽の船乘を相手にして、生きて行く人間なのである。實にや此の港は、一日の出船入船五十艘を下らぬといふ繁昌振りで、日が暮れると、その女等は小舟に乘つて、一齊に沖の船を目がけて漕ぎ出すのであつた。漕ぎ出す女と、陸の者との間には、ブーブーといふ豆腐屋の喇叭みたやうな合圖が交換せられる。それは正しく、曾て語傳へにきいた鳥羽の名物「ハシリガネ」を連想せしめるやうな光景であつた。

内海には斯うした溫柔鄕が、まだところどころ殘つてゐるやうである。私は未だ行つては見ないが、周防國室津半島の南端室津、及び室津とは狹い瀨戶を挾んで相對してをる、長島の上ノ關なども、かうした情調の頗ぶる濃厚な港町だといふことである。——無論此の室津は、播磨の室の津とは、同名異地であつて前記大阪商船の山陽航路によれば、岩國から約三時間で達する位置に在る。

◇

「能地浦の浮鯛」は、内海の一奇觀として知られてゐる。能地浦は糸崎の西南海上五浬、『八十八夜の前後鯛魚波上に浮びて醉へるごとく流る』と鐵道旅行案内にも出てゐて、わざわざ見物に行く人もあるが、前記山陽航路の船は、矢張りこゝを通過してゆくのである。能地と宇和島の中間なる佐江崎には、鯛を祀つた浮鯛神社があり、社前の沙洲には俎板石といふ石などがあつて、面白い傳說を作つてゐる。

三韓征伐の砌、この能地の沖に軍船を浮べて酒宴を催した。その時或る者が醉餘の戲れに、酒を海に流すと鯛がそれを飮んで醉拂つた。そこで其の醉つた鯛を捕へて、俎板石の上で料理して。更に酒宴をつゞけた。すると鯛の女王はその慘忍をうらんで、みめ美はしき女と化して現はれ、軍兵中一番美しい若武者に懸想せるごとく見せかけて引留め、遂にその精根を奪つて復讐したといふ、優しいやうな凄いやうな一のローマンスなの

である。

浮鯛神社は古松うつ然として、頗ぶる展望の美に富んでゐる。

然し、瀬戸内海の浮鯛は、能地の浦にのみ特有の現象ではなく、八十八夜の前後に内海を旅行する者は、往々此の「浮鯛」の現象を目撃することがある。それは丁度其頃は鯛の産卵期に當るので、かれ等は豊豫海峡・鳴戸海峡などを越えて瀬戸内海に入り、砂礫の多い淺海を求めて、藝豫叢島或ひは鹽飽群島を指して集まり、水面近く浮游する。その群集の有様は頗ぶる盛んなもので、遠く望めば宛ら一大珊瑚礁のごとく、或る時は一里平方ぐらゐにも、ひろがつて見える相である。昔から内海の漁夫、これを鯛の金比羅参りと呼んでゐた。水面の上に鯛が盛り上つて見えることもある。それを「鯛島」と稱し、又思はぬ收入を得るところから「金山」とも呼ぶ由である。

尾ノ道名産「さくら鯛」とて、櫻花咲く頃こゝから貨車に積んで輸送せらるゝ鯛は二百車以上に及ぶが、それは凡て此のホーネイムーンにやつて來た鯛である。鯛の女子が、慘忍だと憤つて復讐を企てたのも、さらさら無理はないやうにおもはれる。

白石蒼松潮又潮　碣州靜過畫圖間
東南一髪知増浦　霜氣稜々万劍山

これは成島柳北の詩で、多分離雄島附近に船をうかべて、悠遊した時の作であらう。白石蒼松も、潮又潮も、碣州靜過畫圖間といふも、凡て是れ實況であつて、漢詩人お得意の白髪三千丈式の形容詞は一も交つてゐない、甚珍らしい詩である。元來瀬戸内海は陸地の陥没した處へ、海水が浸入してできた水であるから、その地質は概して深造岩たる花崗岩から成つてゐる。故に岩あれば即ち花崗岩、砂あれば即ち花崗岩の粗粒である。岩あり松あれば即白石蒼松、砂あり松あれば即白沙青松、これは間違ひのないところである、奇勝「寒霞溪」を有する小豆島が、有名なみかげ石の産地であることは、世人の熟知する所であるが、小豆島以西の眞島群島、鹽飽諸島等に屬する大小の島嶼が悉く花崗岩より成り、渺たる白石・北木の二島からのみでも、年々一百萬圓のみかげ石が伐出されてゐることは、恐らく知らないであらう。内海の風光の明媚なる所以は、半ば此の花崗岩のおかげである。

内海の諸島、農作物の豐産なるも亦、この花崗岩のおかげである。――花崗岩が長き年月風水の腐蝕を受けて生じた土壤の、耕土として最も良質であることは、土壤學者の說く所である。

る。

白石島・北木島などいふ島は、笠岡――多度津航路の上にある小さな島々で、その航路も私は一度行つて見たことがあつた。利洲丸といふ六十五六噸の小蒸汽ではあつたが、二三等の區別もあり、浴室等の設備もある、ちよつと氣の利いた船であつた。眞直ぐに渡れば多度津まで三時間半だが、一日一往復の航海だから、途中の島々に降りると、どうしても二三日はかゝる、尤も此の小蒸汽の外に、發動機船は可なり頻繁に各島の間を巡航してゐるのだつた。第一番に神島の瀬戸につく、この神島は周囲六七里ほどもあつて、内村外村の二村に分れてゐる。昔から「神島八十八箇所」と稱して、四國八十八箇所を縮刷した巡拜所（延長七里八町とか）のあるので、名高い所なので、從つて旅館なども比較的に多い。島の景色は内浦の東方島の天神から見崎の松原へかけて、最もすぐれてゐて、

御手洗の水にもしろく波立つや
みさきの濱の雲のまつはら（讀人しらず）

ほんとうに此れは文字通りの野の松原、須磨舞子ものかはの佳景である。横島といふ所に猿田彦を祀つた道祖神社がある。神威宏大にして、舊暦六月と十一月各十二日の例祭には、數萬の參詣者が此の一島に群集するさうである。島の名は此神社から起つたものらしい。三月の中旬であつたが、旅館で新らしい甘藷を食はせたのは、珍らしかつた。

神島の女は、外出するとき必ず手拭をもつて頬冠りをする。殆んど笠岡町とは接續したやうな島でも、島となるとかうこんな風習があるのだから、島は面白いと感ぜずには居られない。

白石島は神島の南三浬、間に高島外七八の小群島を隔てゝゐる。周囲二里半位、三里には足りないやうな島であるが、島内蜂の巣のごとく、五十餘箇所の花崗岩採堀場がある。弘法大師の法修の舊地といふ弘法山開龍寺は、近縣にきこえた名刹で、神島八十八箇所の奥の院、老松古杉枝を交へて伽藍をおほひ、山岳四邊に重疊して、これが迚も周圍三里に足らぬ島内とは思へぬほど幽邃である。四時參詣者の多いことは、弘法丸といふ特有の發動機船によつて、笠岡港との間に直接信者の送迎を行つて居ることに依つても、略ぼ推知せらるゝであらう。信者は無論山内の院坊に宿泊するのである。

名物は「白石イリ」と云つて、此島で漁るイリ（魚）は味がよく、專ら阪神地方へ送られてゐる相である、年額五萬圓ぐらゐに達する相である。

「一月に碗豆や蕨がとれます、それがまあ此の島の名物ですね。」

と、島の學校の先生が附け加へた。南伊豆と丁度同じやうな暖かさだと見える。

西浦は雪白の長汀で海水浴によく、遠くほのかに柄の仙醉島が浮かび、福山市街の煤烟をいのぞむことができる。夏はそこに貸間もあるそうだ。

島の口の海岸には、岡山の三好花壇の別莊があつた。

島の北、高島との間の海中に、ぽつりと大きな白い岩が突立つてゐる。それが「沖の白石」である。いづれ何とか何とかで沖の白石と云ふやうな、歌が澤山詠まれたことであらう。その岩壁には西山拙齋の自から彫刻せる、

浪海之上　維石峙鮹　以灘以曝　皓之鱗鱗
惟堅惟白　不緇不磷　壁立千古　擬君子人
嗚石雖舊　石亢益新　勒銘者誰　山陽逸民

と云ふ詩がある相である。

白石島の東南に横はる、北木島は、周回六里、戸數も殆んど千に垂ん、花崗岩（年額五六十萬圓）を主なる産物として、尙ほ百五十町歩といふ廣面積に、專ら除虫菊を栽培し、之に由つて一年約十五六萬圓を擧げてゐる。貧千鶴と甘藷の味は自慢ださうだが、ともに舌の幸が無かつた。

私がこの島に一泊した夜、夜中急かに騷音が起こり、多數の人が口々に何事か罵りながら馳けて行くので、火事でもあるのかと、雨戸を明けてのぞいたが火は見えぬ、たゞ跫音だが遠く闇の中を走つてゆく。手を叩くと女將が來た、今の騷ぎは何かときくと、

『あ、あれは何でも御座いません、裸參りでございます。』といふ。

『裸參りつて、何處へお參をするのですか。』

『あれは島の名物、といふのも可笑しうござんすが、昔から此の島では、重い病人ができますと、親類の人や隣近所の人々が寄集まつて、濱へ出て水垢離をとつて、大勢であゝいふ風に、隊を組んで寶藏樣へお參りをして、病氣平癒を祈るので御座います。』

『寶藏樣つていふのは、あの山の裾にある寶藏坊といふ寺のことですか。』

『左樣でございます。』

『何か各自にガヤガヤ言つてたのは、あれは何を云つてるのですか。』

『ガヤガヤ、あゝ彼れは不動の眞言を唱へるので御座います。』

翌朝學校を訪問すると、先生から島民は頗る神佛に對する

崇敬の念の厚いこと、毎朝必らず氏神と先祖の墓に參詣をすること、などの話を聽いて、成る程とうなづかれたのであつた。

廣島などいふ島にも行つて見た。それは又白石と北木とを併せた程の大さの島で、部落も六箇所ほどに散在し、人口も二千七八百はあるらしかつた。矢張り全島花崗岩で、特に「青木石」なる名稱のもとに、年々十萬立方尺内外を阪神地方に輸出してをる。島の南部に聳立せる大戸山は高距三百十六メートル、備讃海上に於ける最高點で、その山頂に立つときは、四國中國十里四方の風光は双眸に集まるの概があつた。島の位置も、鹽飽群島のほゞ中心點を占めてゐる。

然しながら、瀨戸内海の島嶼は五百餘島、かく島の一つ一つに就て叙述してゐたら、殆んど其の極まる所を知らずである。「瀨戸内海」は他日單行本によつて、その詳細を世に傳へるべく期してゐる。

三河灣口の島島

近年、公認汽車旅行案内に「伊勢參宮の近道」と題して、廣告をしてをる汽船航路がある。それは東海道線の蒲郡から、三河灣及び伊勢海を横斷して二見・鳥羽に直航する船で、わづかに三時間半で達することができる。之れを汽車に據るときは蒲郡から伊勢山田までは、どうしても六時間を要し、賃金は汽車の三等と汽船の特等とが、丁度匹敵するやうになつてをる。一度は此の航路なども行つて見ることだ。私はお勧めする。有名な「篠島」はその途上、近く右舷に眺められるが、篠島へゆくには別に、蒲郡から渥美半島の福江港を經て、篠島に寄り、知多半島の師崎・豐濱方面へゆく汽船がある。又師崎から篠島へは、一日數回發動機船の便があり、武豐から師崎へは乘合自動車があつて、蒲郡・武豐いづれから行つても、二時間乃至二時間半あれば、篠島に達し得られるのである。

然しそこには、篠島といふ島が、唯だひとつ在る譯ではない。東海の松島などとは誰が言ひそめけむ、現に今は其の島の人達も自から斯く呼びならはしてゐる。尾張の知多半島と三河の渥美半島とが、左右から突き出て伊勢海と遠州灘の海波を遮つて、恰かも兩腕で掻き抱くやうに抱擁された三河灣口には、所謂東海の松島なる日間賀、鼠島、築見、中手、小磯、篠島、野島、松島、戸甌、廣甌、木島、佐久、大島、辨天島、此の外湖の干滿によつて見え隱れする岩礁までも算へ立つれば、大凡二十指に餘らう。佐久島は最も大きく、篠、日間賀の二島之れに次ぎ、此三島はいづれも人が住んで、各一島一村を成してをるが、他は悉く彈丸黑子の無人島である。が、人は住んでも住ま

ないでも、鬱蒼たる黑松は、是等大小の島嶼を蔽ふて茂り、三河灣頭に無限の風致を添へてゐる。

三河地方の俚謠に曰く、

佐久の辨天切石ただみ
根から生えたか浮島か。

と、佐久島は周山三里弱、全島を形成せる第三紀の水成岩、岸邊に屹立して斷層をつくり、その狀さながら壘を積み重ねたる如く、その上にばらばら松を駢べて、奇觀まづ甲板上より旅客を欣ばしめる。島の西岸に一色、南岸に里といふ二つの部落があつて、相距ること僅に十二三町、旅館も三軒ばかりある。

この島にも、弘法大師八十八箇所があつて、島外からわざわざ其を巡る爲にやつて來る信者も、少くないやうであつた。夏の海水浴、冬の避寒、ともに好適地である。但佐久島へゆくには、岡崎から西尾鐵道に乘換え、終點吉良吉田驛で降りて、佐久行の發動機船に乘る方が便利である、四海里四町一時間で達する。

日間賀島は東西十六町南北五町、佐久の半分にも足らぬ小島であるが、東端に大里、西端に西里の二部落があつて人口二千四五百ある。なかなか開けた島である。水成岩の上に潮風にもまれた黑松が茂つて、佐久島によく似た風光だが、何れかと云へば日間賀の方がすぐれてゐる。

この島の自慢は、赤穗義士の一人で而も「風流義士」の名を恣にした俳人子葉―大高源吾を出したことである。大高氏は本島の豪族で代々新兵衞を稱し、天正十一年日間賀の大高新兵衞の娘が、篠島の名族辻三太夫の家へ嫁入した話が、篠島の古文書に殘つてゐる。源吾は次男であつたので、年少志を立てゝ島を出で、赤穗侯に仕へて中小姓を勤めてゐた。朝に夕に、此の島に鳴り渡る安樂寺の梵鐘は、元祿九年源吾の寄進したものださうである。かれ（源吾）が江戸出府後商人を裝ふて、吳服屋新兵衞と稱してゐた點などから考へると、正に事實らしくも推測されるが、可惜しいのは小野寺幸右衞門に就て、何の傳說も口碑も傳へられて居らないことである。何故ならば？、義士親類書に依ると、幸右衞門は源吾の實弟で、源吾の母は小野寺十内の姉だからである。だが、その樣な詮議はどうでもよい。日間賀へ行つたら、日間賀蛸でも食つてくれ給へ、豐橋附近の泥海で養殖された蛸とは、大分味がちがふ筈である。

内紫と云ふ大蛸。味も大味であるが、何しろ直徑三寸といふ大蛸は、世に珍らしい。旅館は東岸西岸各二軒ある。風景は鼠島の落日を第一に推す、次は呑海院の月、呑海院は齊藤家の名刹で、有名な「齒大師」を安置し、これ在るが故に四時島外參拜

者の跡を絶たず、機船會社は大分御利益を享けてゐる。安樂寺の青磁燈の觀音樣も、日本でタツタ三體の中の一つださうである。

夏季の間は香海院や長心寺などいふ寺々が、座敷を開放して、避暑客の便宜を計つてゐる。

◇

篠島は日間賀の南二海里にある。三河灣口の殆ど正中央に位置を占め、廣袤は南北十三町東西二町乃至六町、ほぼ日間賀島と匹敵せる小島であるが、戸數は四百四十、人口二千七百餘、古くから海上交通の要路に當つてゐた爲か、餘程婆娑くさい匂ひがする。萱葺き家などは極めて稀れで、三州瓦で美しく葺いた屋根が、日光を反射してキラキラと光つてゐるのが、先づ旅客の眼を驚ろかせる。

哺乳動物には、犬、猫、鼠、鼬、兎。

鳥類には烏、雀、雲雀、頬白、鶏、家鴨。

「何だそんなもの、莫迦々々しい」と云ふかもしれないが、海上の小島めぐりをした人は知つてる。是れだけ人間の生活に親しみをもつた鳥獸の揃つてゐる島といふは、滅多にあるものではないのだ。

「私は蛙の鳴き聲が好きでしてね、あのごろ、ごろごろつて聲をきいてゐるのは、何とも云へぬ好い心持なものです。島へ來るとそれが聽かれません。蛙の聲を想ふと國（内地のこと）が戀しくなります。」

東京から八丈島へ行つて、學校教師をしてゐる人が、つくづくとさう云つた。彼のやうな大きな島で、ひろびろと水田の開けてゐる島でも、そこには一匹の蛙も住まないのであつた。蛙のゐない田圃の無趣味と悲哀！、成る程長く島にでも住んだ人でなければ、味はへない心持ちであらう。

犬、猫、烏、雀。そんな動物が居ると云ふ事だけでも、篠島の古くから開けた島であることはわかるのである。植物は、黒松が最もおほく、伸び伸びと繁茂し、松に次いでは篠竹が、あちこちの荒蕪地や畦畔に叢がりはびこつてゐる。篠島の名もこゝから起つたのであらう。

島の誇りの第一は、昔、伊勢　廟に屬する神領地であつたことである。皇太神宮は丹後から伊勢に遷座すると同時に、篠島は御饌御料所と定められて、天照皇太神の荒御魂を祀り、次で光仁天皇のとき神宮内にある土宮をこゝに遷座せられた。で、むかし伊勢大神大廟に參拜する者は、宮めぐりと稱して、伊勢の大湊から篠島の兩社に參したものださうである。風波はげしく上に航海のできない場合は、二見ケ浦の遙拜所から拜々

で歸つた、——今は、二見ヶ浦に日の出を拜むところと思つてゐる人が多いやうだが、かく篠島に鎭座まします天照大神の荒御魂を遙拜したのが、その起因といふことである。

後尾張國に屬し、德川時代には尾張侯の領地となつたけれども、神宮御幣鯛調進のことは、今日も依然繼續せられてゐる。每年六月十日には、新造の屋形船に五百二十四尾の御幣鯛を積んで、太一御用の旗を立て、夜半二時島を發して同日正午までに、神宮司廳に納めることになつてゐる。

『島は神宮領である。我々は天照皇大神の氏子である』といふ觀念は、島民の心持を淸淨にし崇高にした。心の穢れた者は島には置かぬ、といふ不文律が古來行はれてゐた、無論滅多に追放を受けるやうな、不心得ものも無かつたが、唯〻一つ、その不文律の適用を受けた哀話がのこつてゐる。それは明治維新の頃、一人の盲目の少年があつて、如何なる呪ひを受けしか、天性盜癖を有つてゐた。固より子供ではあり盲目ではあり、たいした物を盜む譯ではない、不具者に特有の「趣味」或は一種の「遊戲」として、島民はむしろ憐れみの眼をもつて眺めてゐるにすぎなかつたが、此事が家の人の耳に入ると、をやぢは非常に激怒し、島民が慰め止むるをも肯かず少年を小舟に乘せて、自ら漕ぎ、渥美半島の西ノ濱へもつて行つて捨つた。近隣の人々は涙を呑んで、その船を渚邊に見送つたとい話である。

「火の氣替」といふ事が、此島には今日も行はれてゐる。それは每月一回、一切の什器を洗滌し鹽を振かけて淨むるのである。心を淨くすると共に、身の廻りをも淸く保つ古風がのこつてゐるのである。

敬神崇佛の念は頗ぶる厚く、或る時代には此の狹い島内に無慮十七ヶの寺院があつたといふ。從つて遠州秋葉山の開祖として有名な可睡齋等膳のごとき傑僧を出した。彼れは此島に生れ篠島一の名刹と云はれた妙見齋の和尙だつたのである。彼れと德川家康との間に、極めて劇的な挿話のあることは、世人のよく知れる所で、駿府城に人質として囚はれてゐた家康を、夜陰ひそかに葛籠に入れて盜み出し、淸水港から篠島に還つて妙見齋に匿まひ、後ち岡崎へ送り返した。家康は後日彼れを遇するに、大名の格式をもつてしたと傳へられてゐる。——數年前から此島にも基督敎の宣敎師が住んで、神よ父よイエスよと頻りに宣傳してゐるが、まだ一人も洗禮など受けた者はないと。島民は威張つてゐる。行政區劃は變つても、彼等は依然として天照皇大神の氏子だからである。

後醍醐帝の延元三年八月、北畠親房の子顯信鎭守府將軍に任ぜられ、東國綏撫の命を受けて、義良親王を奉じ、伊勢大湊を

發して東航の途上伊良湖水道附近で難船して、親王と共に此の篠島に漂着したことは、史上に有名な事實で、親王の掘らしめられたといふ「帝の井」には、今も滾々と清水が湧いて、島民の飲料水となつてをる。義良親王は後の後村上天皇である。その外古來此島に足跡を印した歴史上の人物を舉ぐれば、篠島王、坂上田村麿、源頼朝、西行法師、烏丸大納言、徳川家康、加藤清正、尾州藩侯、徳川義直などがあつて、何れも何等かの形式に於て、それぞれ島内に遺跡をのこし、歴史的には最も興味深い島である。私は出村鉦氏から共著「篠島史蹟」を贈られて讀み、彌よその興味の深さを感じた。出村翁は同島の教育事業に從ふること四十年、屢ば表彰を受け、且つ島の歴史に通曉し、曾て賀陽宮殿下の御前に篠島史を講演した名譽者である。――以下揭ぐる篠島配流史の一節は、專ら氏の著書に由つたことを、玆に明記しておく。

◇

伊勢大廟の神領であつた篠島も、尾州藩に移屬して以來、何時とはなく罪人の配流處と化した。島民は定めて憤慨したことであらう?。尤も神領たりし時代にも一度、内宮の長官檜垣某が流されて來たことがある相で、或る古文書に、

古伊勢内宮の神主に檜垣何某とかいへる人有り、此人佛像を作ることを好めり。故に篠島へながしけり。其後神前へ餘多くあつまり、神前の戸に一首の歌を書けり

朝夕にこひしくおもふ檜垣をば
なにへだつらん宗がきのうち

とありし故急ぎて島より呼かへし、元の如く神職也。今に津のこふ(國府)の彌陀佛は右の檜垣氏の作のよし云々

神官のくせに佛像を刻むとは不都合だといふ廉で罰せられたのらしい。寛永年間にも熱田神宮の神官但馬某が流されて來たが、此人には五人扶持がついてゐた。なかなか贅澤な罪人である。もつと贅澤なのが居た。

鍵屋善左衛門　名古屋京町の米商にして富豪なり、殊に茶道に通じ貴顯に出入す、田安侯の入城を憚ばず大手の門扉に瓜を描き其の側に「つぶすかたやすか」と書きたる紙を貼附す。其事顯はれて遂に流さる。此人島に在ても豪奢を極め、應擧三幅對の千羽鶴の軸を掛け、島民に茶を振舞ひたり、其茶菓子の料年々三十餘兩に達す。後赦に遇ひて歸參す。

私は昔の遠島といふ刑は、頗ぶる面白い、文明的な制度だつたとおもふ。おもに國事犯に適用されてゐたやうだが、今日の死刑・無期など野蠻な所刑は全廢して、「島流し」を復活し、重い

罪人は何處か無人島へでも送つて、勞た島の開墾をやらせれば兩得だ。「配所の月」なんかは、大體頗ぶるぶる詩的で好いし、蛭ケ小島を、絕海孤島とでも勘ちがへたか、源家の嫡子賴朝を、多年源氏の勢力を扶植した關東の溫泉鄉へ遠島したんかは甚だ振るつてた。篠島の妙見齋(寺)の跡に、「難波潟あしの一夜のなごりかな阿彌陀の秋の月はすむとも」いふ一首の歌を刻した石碑がある、是は幕府に上書した罪で本島に流され、天明二年遂に此地に果てた名古屋の豪商小刀屋藤左衞門の辭世の歌であるが、この藤左衞門が「島にて月を見てよめる」歌にかういふのがある。

武藏の守淡路島守及ばじな
篠島ありを照らす月かげ。

豪商だつたと云ふから、いづれ贅澤三昧をして、別莊生活ぐらゐに心得てゐたであらう、辭世の歌の記念碑が建つやうでは、島民大分餘德を蒙つたらしいからな。

彦城金藏　名古屋藩重役にして貞享五年二月廿二日鯨船二艘にて島着、五月迄一人扶持にして十月、家屋買入代金拾兩下渡さる。元祿二年三月より兩人に四人扶持、及年々金子七兩下渡され、時々衣類・蚊帳・上下帶等渡さる云々。

小者を隨へて流されて來たらしく犯罪人でも年功を經るに從つて昇給したやうな態である。

林　善吾　人の罪に坐して配流せらる。維新後赦に遇ふも還らず土着して村役場に入りて永く書記を務め遂に島に死す。

丹羽八十郎　狂歌に巧なり。赦に遇ふも還らず、土着し其子今尚存して漁業に從事す。

之に由ても遠島の刑の成績のいゝことがわかる。差當り免囚保護などいふ下らぬ商賣は飯の食上げである。

處で、烏と鳥が流罪になつたといふ珍事件がある。

一、烏島　元祿十二年三月十四日二十一羽篠島の内つぐみ島へ遠島
同四月六日に烏九羽鳥三十六羽都合四十五羽遠島。內烏鳥十羽ほど落ち候
同五月烏鳥十一羽、內三羽をち申候云々

烏や鳥が何の罪に座して遠島申付けられたか理由はわからない相だが、昔の刑法や、司法官たるお奉行樣のやり口を咀嚼めてみると、頗ぶる旨味のあるものだ。此事件なども或ひは、大岡越前守もどきに、鳥を罪に落として人を助けた例かも知れない。それとも烏と鳥は平素仲が惡いから。喧嘩兩成敗の原則に照らして所刑されたかな。

その後又豚が三頭、羚羊が一頭流されて來た。また猿を放つたものがあつて、それが成長し猩々の如くなり。島人に危害を加ふるので、銃殺したことがあつたと。明治八九年頃半田富豪小栗某なる者、豚數十頭を本島に放ち、數箇月にして全島殆ど青色を見ざるに至り、次で豚も亦餓死したと云ふやうな事件もあつた。何が迷惑だと云つて、島へ鳥獸を放たれることゝ島から石を持去られることぐらゐ、島民に取つて迷惑なことはなかつたのである。

此島から篠島石を持出した巨魁は、誰あらう加藤肥後守清正で、名古屋築城の當時天守閣造營の受持ちであつた彼は、親しく本島に來たつて踏査した結果、どしどし巨大の堅岩を伐出したのであつた。今尙は海岸の岩石には、多く當時の鑿痕を遺し、又「清正の枕石」などい記念の巨石も殘つてゐる。清正が築用として、篠島石を伐出したのには抑も理由がある。

篠・日間賀・佐久の諸島は、誰が眼にも一連の群島のやうに見えるけれども、佐久・日間賀の諸島は第三期水成岩より成り、篠島を中心とせる一群は古代火成岩たる花崗岩で、地質學上全たく異つた島なのである。此の深造岩脈は本州では紀州大峯山群に起り、篠島を經て三河に渡り、尙進んで赤石山脈となつて高く抽出してゐる。尾州に生れ且つ築城の大家であつた清正が、篠島の一大花崗岩塊であることを知つてゐたのに不思議はなく、花崗岩の採堀を海上運搬の便ある篠島に求めたためのは、寧ろ甚だ當然と云はねばならぬ。とは云へ、限りある島の石や土を、島外へ運び出さることは、我が身の骨肉を削られる程にも、島民に取ては辛い。曾て、熱田神宮造營の折礎石として若干を献納したのと、明治四十三年名古屋市に關西聯合共進會の開かれたとき、公園用として島石十數箇を移出したる外は、島民が家を建てるにも島の石は用ゐないで、對岸の三河から幡豆石（花崗岩）を輸入してゐるのである。こゝらの氣分は、島の石を賣つて生活してゐる瀨戸內海の島民とは、大分徑庭がある。

白い花崗岩の上に黑松の茂つた篠島の風光は、此の群島の中では、群放れて美くしい。殊に神風ケ濱の長汀曲浦は、下駄や靴であるくのは氣の引ける程うつくしい。その濱の後ろの山は、昔燈臺のあつた燈明堂山で、海面を拔くこと百五十尺、無人島たる野島の頂きを除けば、兎に角本群島中に於ける最高望樓であつて、所謂東海の松島の全景は、パノラマ的に脚下に展開し、遠く十州の連山双眸に落つと云つた壯快な趣きがある。——篠島に就ては日本海の飛島、粟島等と共に、昨夏ちよつと「讀賣」に書いたことがあるが、今又茲に補正して掲げた。

伊豆七島となると、またまた興味の程度がちがふ。人情風俗にも特殊のカラアがあり、南國情調に富み、女などにも實際に美くしいのが多かつた。

伊豆十島

伊豆列島といふは大島、利島、新島、神津島、三宅島、御藏島、八丈島の七島に式根島・八丈小島・青ケ島の各屬島及その他の無人島若干を加へたもので、略ぼ南北に亘り一列につらなつてゐる。島の大きから云へば大島と八丈島は殆んど伯仲し、三宅島は第三位にあり、新島はぐつと小さくなり、他の三島は更に小さい。然し文化の程度から言へば八丈島最も開け、次で三宅島が開け、大島は一番東京に近いに拘らず比較的古色に富み、內地を隔たること遠く、南へ行くに從つて文化の進でゐる態であるが、大島は（一部分であるが）すでに、他島に魁けて電燈をつけてゐるから、それも一概には云へない。人情の純に風俗の優しいのは新島を以て最として、利島の老人たちは未だに「候ふ言葉」を使用してゐる。傳說によれば、伊豆の半島及び列島は大國主命の嫡子事代主命によつて開拓せられたもので、かれは父の命の下問に對して『恐し、此國は天つ神の御子に奉りたまへ』と言ひて、乃ち其の船を踏傾け、天逆手を青柴垣に打成して隱りまし、たる後、はるばる海を渡つて伊豆へやつて來たものらしい。此傳說の當否は知らぬが、私の研究に由ると、日本の美人系に屬する地方は、多く出雲民族の血統を引いて居る。故坪井博士に由つて伊豆七島から石器時代の遺物の發見せられてゐること、美人の多いこと、その美人の容貌は出雲型に屬すること等の諸點を綜合して、私は伊豆七島の島民の體內には、天孫種ならぬ我が先住民族の血が、可なり濃厚に傳はつてゐることを信ずるものである。顏が美くしく、體格の立派な島の女を觀ると、私は日本美人の原型を觀るやうな感じがする。

人情・風俗・習慣、七島共通の點が甚だ多く、いづれも大同小異である。その小異は漂流者があつたり配流者があたりして、一部分に異た發達を見るに至つたものであらう。時の記錄である歷史は、往々にして、かけはなれた海上の島々の上に、突間的に不面的に生きたまゝ展開されてをるのを見る。私が「島を觀よ」といふはこれが爲である。

目下七島の航通を司つてをるものは「東京灣汽船」で、その航路には、

（一）東京－大島間。約十時間、月八回。

（二）大島各港を經て利島、新島、式根島、神津島を巡るもの。

往復三泊四日、月三回。

(三)大島・利島・新島を經て三宅島各港をめぐるもの。往復四泊五日、月一回。

(四)三宅島各港を巡つて御藏島までゆくもの、往復四泊五日。月二回。

(五)八丈島直航。往復二泊三日或は三泊四日、月五回。

等の便がある。此の外大島へは下田港から隔日一日郵便船があり、伊東溫泉からも月三回(十日、廿日、卅日)の定期船があつて、僅かに二時間で達することができる。又八丈島へは、年十六回小笠原通ひの弘濟丸(近海郵船)が寄港する、これは二千四五百噸もあつて、近海航路には珍らしい大きな船だから、どんなに船に弱い人でも心配はない。東京灣汽船の方は大島から神津島迄は二百七八十噸の木造船、三宅島以南八丈島通ひは「ことしろ丸」「八丈丸」といふ三百五十噸鋼製の姉妹船が就航してゐる。御藏島以南は例の黒潮が通過してゐるので、此の程度の船では何うしても一寸揺れるが、夏季は何たいしたことはない。

さて、是より七島各論に入る譯だが、到底紙數が許さぬから、七島の代表權を八丈島に讓つて、八丈の風光と生活とを說かう。但それも遺憾ながら極めて簡單に、斷片的に。

「大島は遠くから。——伊豆半島の熱川溫泉あたりから望んだ感じが一番いゝが、八丈は近寄つてからの感じが好いな。此の優しい、なだらかな、大きな裾を引いた富士(八丈富士)の麓には、いかにも髮の長い美くしい女の住んで居さうな氣がする。どうだい彼の檳榔の木の茂りは!どす黑い、鬼が亂杭齒をむき出したやうに屹立してゐる海岸は、いかにも火山島の標本だが、あの眞青な、綠苔を積みかさねたやうな樹木の茂りは、とても火山島とは思はれないぞ。」

八丈の第一印象。私は八丈丸の甲板に起つて、艀を待ちつゝ、つくづく斯う感じたのであつた。埠頭、——と云つても何の設備もない。其處には眞黑な巨巖が亂雜に突出つてゐるばかりだが、その岩々の上には、まるで砂糖の塊りに蟻がたかつたやうに、島の人が群集して、六日目に一度は必らず入てくる此の船を、さもさも懷しさうな眼で迎へてゐるのを見た。その眼を見ると、私は始めて自分の內地を遠く離れて來てゐることに氣が付いた。

八丈島は周回十四五里、西に富士、東に三原山が聳えて、此の兩山の裾合せ谷が平地となつて中央に横はり、其處に水田がひらけてゐる。北部に三根(みつね)、南部に大賀鄉(おほかがう)の二村がある。三根

に神港大賀郷に八重根港があつて、船は互み代りに此の兩港に着くのだ。兩村の間は一里足らず。坦々たる三間道路が通じて、道の兩側には如何にも伸び伸びとした氣持で、木が、草が、茂り合つてゐる。

『まるで、大きな公園でも歩いてるやうな、氣分だな。平地のやうな感じもするし、開けた山の中のやうな感じもする、何と云ふ不思議な氣持なのだらう。』

八丈の第二印象。私は神港から三根村へ、三根の村の中を、三根から大賀郷への道を、長い間の旅行生活にも未だ曾て感じなかつた、かうした新らしい氣持で歩いて行つた。

道路の左右に茂る植物のうち最も眼につくのは黒松・椎、樫、椿、橡、蘇鐵、龍舌蘭、松葉蘭、それから恰も内地に於ける芝生の如くに、路傍と云はず、林間と云はず、一面に生ひ茂つてゐる「ヘゴ」と稱する羊齒科の植物などである。或る處はまた「マグサ」と呼ばれる八丈茅が淋しく風にそよいでゐる。そして自動車も人力車をも有たない島民は、牛に乘つて、その廣い道を悠々と練つてくる。どうも馬鹿に伸んびりした、好い氣持だ。

家はまだ殆ど茅葺で、その勾配は既に此頃の文化住宅以上の急斜角度をもつて、低く軒をおほふてゐる。詰り八丈の家屋は完全な二等邊三角形で、全體の四分の三は屋根である。從つて屋内は暗い。周圍には素晴らしい石の城壁を繞らし、之に椿又は龍舌蘭が植込んである。蘇鐵の植ゑてあるのは、中流階級以上の家ださうである。現に角屋敷の構えは風流でそして厳重である。この厳重は無論泥棒除でなくて防風の爲である。

『島にはたいして金持もない代り、たいした貧乏人も居ませぬ』と、島司の日向氏だつたか三根の郵便局長だつたかが云つた。金持は可なり居るやうだが、中以下の經濟狀態は大凡一定してゐるらしい。普通その石垣の圍ひの中には、本宅と隱居屋と倉庫と牛小屋と厠と、五棟の小さな建物がある。隱居は、息子に世を讓れば老父婦は必ず本宅を出て別居する習慣がある爲である。結婚は昔から、男女相互の自由選擇に任じ、親同士で取極めたり、干渉したりすることはない。八丈島は二千年來、此の新らしい思想を傳統して來たのである。内地の若い婦人達よ『八丈島でさへ……！』とやれ。

一體八丈島の老人くらゐ、物わかりの好い老人は、世に少からう。彼等は家督とともに、財産をも若夫婦に讓るが、決して若い者の仕送を受けない。死ぬ迄自分で働いて生きるのである。

歳とりて働く見ればあるとせに
わかき翁と誰か知らまし（讀人しらず）

八丈の老人の悲哀を歌つたものである。

『此島の年寄達はほんとうに氣の毒ですよ、若い連中は閑でごろ／＼遊んでゐる時でも、年寄の働くのを小氣に眺めてるんですからね。面あ憎いですよ。で妾はときどき田圃へ出て、年寄達の手傳ひをしてやるんですが、そりやほんとに喜びます。だから島のあんちやん達は妾のことを變り者だつて言つてます。此島の女はみんな情け者です。新島の女は優しくて、老人孝行ですね、妾は新島の女が一番好きですよ、言葉からして何ともいへぬ優しさですね、』

島から島を巡り歩く女の一人である。望洋館のお民さんは、大變しんみりした調子で這那ことを云つた。

◇

八丈島の旅館は、すべて料理店を兼ねてゐる。三根に八軒、大賀郷に五軒、中ノ郷に一軒、都合十四軒のさうした家がある。そして其處には一人か二人か、必らず、天民君もまだ知らないやうな「淪落」の女が居るのだ。お民さんは伊東溫泉の西「冷川峠」の麓に生れ、幼時詳かならず長じて大島を振出しに、新島、三宅島とめぐつて遙々小笠原島に渡り、最後に八丈島へとやつて來た女である。『八丈島も飽きたら、大東島へ行かうとおもつてゐる』女である。賀川豐彥を論じ未來派の締を語る女である。

『望洋館のお民。あいつ生意氣だ。』と、島のあんちやんの氣受は餘りよくないらしい。然もさうず島の兄ちやん、「未來派」のメンタルテストを受けちや、ドギマギせざるを得まいからな。私だつて、八丈島へ行つて「あなた未來派お好き?」などゝやられた時は、全くヂグス見たやうな顏をして、頭の上へ「?」の記號を飛ばせざるを得なかつたからね。――尤も此の望洋館といふ家がすでに、周圍を抑えおるやうな人造石の門柱を建てゝ異彩を放つてる現代式の旅館だから、こゝに未來派の女あることも怪しむに足らぬが、隣りは三根郵便局で局長の茂手木氏はショメ節に堪能で、其の夫人（八丈ツ兒）は鰌すくひ（安來節）の名人ぢやさうな、望洋館と茂手木氏は親類だ、そこでちよつと珍談が起つた。と云ても何も鰌すくひとは關係のない話なのである。

お民さんが八丈へ來て未だ間もない頃、珍らしい菓子を貰つたので、それを子供に與へて『食つて御覧』と云つた相だ、すると茂手木夫人びつくりして、『お民さんは、うちの旦那のお妾になつて貰はふと思つてゐたのだが、そんな恐ろしいことを云ふ女は眞つ平だ。』と、沙汰止みになつてしまつた。お民笑つて嘆ずらく、

『島では食へといふことを噛めと云ふのです。菓子を噛め。噛めめなんて方が餘つ程こわいわね』と。

實にどうも神韻縹渺たる話で、何れに團扇をあげていゝやら、見當さへつかない。

ひとり八丈のみならず伊豆七島には、何處にもかうした「島から島を渡り歩く」一種の女がゐた。

「今年は莫迦に天草が當つたて話だから、一絞り絞りに來たのさ」

「また文鰩魚の金をしぼりに來たよ」

傲然さういふことを放言しつゝ、時季を忘れず年毎のごとく現れてくる女もあるといふ話である。八丈名物焼酎は一升五十錢か六十錢のものだが、麥酒は一本七十五錢する。かうした女を擁して、一本七十五錢の麥酒を飲むことは、島の若者に取て最上無二の娯みなのである。多年焼酎できたえた腹だ、麥酒の一ダース位あけるのは尋常茶飯のことゝされてゐる。

◇

八丈の「女」と「唄」と「酒」。固より一言なかるべからず。

大賀郷村字大里に「優婆夷寶明神社」といふ延喜式内の古社がある。島内唯一の御社で、事代主命の八妃の一人優婆夷大明神、及び王子古寶丸とを合祀してある。これが本島開發の祖神だ。島内でも特に大賀郷に美人の多いことも、詳しく研究したら、理由が發見せられさうに思へる。島民に「との筋」「てゝ筋」の二系統あつて、毛髪長く容姿の美くしいのは「との筋」に多く、「てゝ筋」の女は毛髪疎にして短かく、品格も卑しいと云はれてゐる。さう聞けば確かに、女の顏にも、明らかに二つの型のあることが認められた。島の女が悉く美しい譯ではない。

八丈は昔「女護島」と稱し、女ばかりが住んでゐたやうに傳說されてゐる。それは彼の徐福が秦の始皇の命に依て東海に不老不死の藥をもとめた時、童男童女金銀財寶穀類を積んで巡りめぐつて八丈島に渡航し、童女を此島に、童男を青ケ島に置いて去つたといふ小說から來てゐるらしく。本島の祖神古寶丸はすでに男だつたから、こいつは問題にならない。八丈は昔から女尊男卑で、女の勢力を張つてゐた島だから、或ひは「女御島」の訛傳であるかもしれない。現に角北條五代記にはかく云つてゐる――

女は色白く髪黑くして長く艶容比ひなく、心さまいとやさし。上等の絹を重ね着て、立居振舞悠々たり。世間の女は紅粉を塗り翠黛を飾り媚るといへども、此島のならはしにて、生れつきの姿にて粧點することなし。女の業としては絹を織ること日夜暇なし……。

八丈の女は昔から織機りを本職とし、殆んど屋外勞働に出なか

つた。大島や新島の女の、働き蟻とは趣きがちがつてゐた。だから姿容にもどこか雅びたところがある。七島の中では大島と八丈と、兩端の二島に美人が多いが、皮膚の美しさは大島が優り、姿の美しさは八丈が勝つてると思ふ。若い女のことを、大島は「アンコ」、八丈では「メナラベ」と呼んでゐる。八丈が大島よりも開けてゐるが如くに、メナラベはアンコよりもひらけてゐる。寫眞のレンズを向けると逃げるが、大島の女は兎もすればをこる。

大島に「御神火」——ハイノ節あるごとく、八丈には八丈特有の「ショメ」節がある。

よ…………
木股なぶして袖ひつちかめいて
お前はわぞどうか此の雨に、ショメショメ、

「わぞどう」かは又「わじやるか」ともうたふやうである。

よ…………
お前が何ンかも我が大くなろに
甘諸の尻尾でも賜ぼじやなし、ショメショメ。

島の人殊に女は早口に物をいふが、唄をうたふ時は頗ぶる悠暢に、歌ひ出しのヨーの如きは、先づ私などは三度息氣を繼ぐくいゝ引張つてゐる。

沖で見た時は鬼島と見たが
來て見りや八丈はなさけ島。
沖の青島鳩子の島よ
南風そよそよ女護ヶ島。
見やれ水鑑黃八丈の衣織
わたしや頭も濡らしやせぬ。
五尺丈けなす緑の髮に
椿はたちる八丈島。
花がもえたつ椿のしたで
八丈娘は髮けづる。
八丈八重根のばらばら松は
枯れて落ちても二人づれ。
妾のこゝろと護身の門は
他にきはないまつばかり。
わしのこゝろと垂土の濱は
戀しく〳〵(小石々々)で果てがない。

これらの唄は、些か八丈情調を味ふに足らうか、と思つて揭げた。三根・大賀郷を併せて坂下と稱し、東山(三原山)の南麓から東麓にかけて散在せる樫立、中の郷、末吉の三村を坂上と呼んでゐるが、坂上は山手であるだけに坂下ほどに開けず、「ショ

メ節」も樫立が本場で、眞正古風の「ショメ節」が聽きたくば樫立へ行けといふことである。樫立の盆踊（陰暦）は八丈名物となつてゐる。

新島の盆踊も名高いもので、若衆一同周圍に赤い布を垂れたをかぶつて、楕圓形を描いて廻りながら踊る、歌の文句も新島のは優にやさしく。

枝垂柳の葉の露落ちて
池になるまで御身と添はば
御身おもへば關東坂を
かちやはだしで一夜でしのぶ
月の若さよ、場をひろめ〳〵。

など唄ふのである。

八丈の屬島靑ケ島も面白いところだ相である、山島の中腹に百戸ばかりの部落があつて、今も甘藷を常食とし、「他火」と稱して經婦及び姙婦を山奥に別居せしむる古風な習慣も、行はれてゐるといふ。その靑ケ島には「ヤトトン節」といふのがある。

我がなとう樣は靑ケ島に御座る、ソラ、
わしは八丈で思はれる
ソラ、ヤトトン、トリコメ。

但し私は八丈できいたのである。

八丈特有の「ヤプサメ」と云ふは、琉球の泡盛に似た諸燒酎で、ちよつと臭氣があるが、決して頭へこず、飲んだ後の心持がよい。然し近年「八丈正宗」が漸次勢力を得て、諸燒酎はやゝ頽勢のかたちである。八丈正宗は小米から取つた燒酎で、島で「一寸飲む男」と云はれる男は、大抵この燒酎一升を傾けるのである。

◇

『八丈島第一の産物は何ですか』
と問ふたら、日向さん（島司）は、
『木炭です。年々百萬貫、金にして三十萬圓を移出してゐます。』
と答へた。之を若し島を觀る前に東京で聽いたら、私は乾度「え、何ですつて？」と、私の耳を疑があつたに相違なかつた。水産物は總計四十五六圓で、その半額以上は文鰩魚で占めてゐる。とび魚の干物はその風味頗ぶる上等、新島の「くさや」（鮮鯵）とともに、伊豆七島水産の双璧と云つてよからう、値も相當高い。牛の糞も八文名物の一つ、島内に約二千頭の牛が放牧されてゐる。野牛禮にならはず、彼奴を前景に取入れて寫眞を撮らうとしたら、猛然として襲撃して來た、私は驚いて逃げんとして、彼崖の急斜面を非常な勢ひで轉落した。然し彼奴の

傭に引擦るよりは、何程か増しだつたに相違ない。歸りの船で事務長の土井氏に此話をすると、きやつきやつと笑つたが、

『いや時々性のわるい奴が居ますよ。私も實は、牛が居ると遠廻りをするやうにしてゐるのです』

と、矢張り私と同類項のやうな顔をしてゐた。島民と森永製菓とが共同で、昨年から煉乳製造をはじめた。煉乳にすればバタトの三倍の收入がある相である。

百萬貫の木炭の出るのも、牛が野放しでよく育つのも、魚族の豐富なのも、みんな黑潮のおかげである。八丈島が黑潮の流れの中央にあつて、氣候が暖かく、雨量と濕氣が多く、草木の發育の盛んなおかげである。飲料水に不自由せぬどころか、三原山中には多くの溪流があり、瀑布があり、その水を利用して水力電氣を起し、來年から島内に電燈を點けようと計畫してゐるのも、矢張り黑潮の賜ものである。緯度から云へば、八丈島は肥前佐世保と略ぼ同一線上にあるのだが、同溫線からいへば薩南種子島と同一線上にある。伊豆七島中特に南國氣分に富んでゐる所以も、矢張り同じ理由からである。

然し、昔千石船時代に『島も通はぬ八丈ヶ島』と歌はれて、八丈島通ひは舟子も之を厭ふたのは、黑潮の急流の爲であつた。此の黑潮はよく唐人や南洋人の難破船を、はるばる八丈島まで運んで來たりした。島内到る處に『唐人山』などいふお墓森林があり、島言葉の中に薩摩言葉の交つてをるのも、さうした事情からであるらしい。

『八丈近海の海の色は、實際何とも云へない程印象的だね。何といふ澄明な、しかも沈痛な色だらう。あれは陸岸近くではとても見られない色だね。』

誰でも一度八丈島へ行つた人は、こんな風にその海の色を激賞した。

『僕は田澤湖で丁度あんな水の色を觀た。』

或る友人はさうも云つた。

『へえ、そんなに印象的な海の色が、あるものなのかね？』詰りそれが文字通り黑潮の特色なのだね？』とでも云はふもの、私は遠慮なく、

『さうとも。彼の海の色を見るだけでも、八丈島へは一度行く必要があるよ。』

位のことを云つて嗾しかけた。——水色を測るには御承知の如く『フオレル氏標準液』を以て比較するのであるが、日光中禪寺湖はその標準液第四號に、十和田湖は三號に、菅沼は二號に相當し、第一號液に相當するのは、湖水では田澤湖ぐらゐのものである。黑潮も亦第一號に相當してゐる。瑠璃紺と稱するめ

は、實に此色のことであらう。

八丈島の水田に蛙の居ないことは前に述べたが島には螢もゐない、東京へ遊學に出た青年が、はじめて螢の飛んでゐるのを見て、常非に驚ろいたといふ挿話がある。虫類も青大將や縞蛇の類は居らず、「トカゲ」と「マムシ」が居る。「マムシ」と云つてるが實は小型の「ハブ」ださうである、毒は蝮よりも却つて薄いと聴いてゐたが、始めて其のにょろにょろたる偉影に接した時は胸がどきつとした私は末だ臺灣を知らないので「ハブ」屬に對しては蝮ほどの親みも持つてゐないからであらう。大さは？、君問ふこと勿れ僅かに一尺さ。

麥雜水と甘藷(かん)の潮ふかしは、八丈島の二名物である。麥雜水は八丈特產シタダシ貝或はヒラメ貝と共に煮た麥粥で、甘藷の潮ふかしは名に負へるごとく、海水でふかした甘藷で、中流以下の島民は今も一日の中一食は此「ふかし諸」を常用してをるのである。黒潮は鹽分が強く、この潮水でふかした諸の味は、實際に特別うまいと内地から行つた人が云つてゐた。島の女は毎日一回隊列を組んで、諸をふかす潮水を汲み、水桶を頭上に載せて運ぶ。こいつは確かに寫眞になる。

氣持のいゝのは墓地である。どこの墓地にも極まつて大きな蘇古蘭と、丈の低い蘇鐵が萬年供華的に植込まれて、隅々までよく掃除が行屆いてゐる。新らしい墓標の前には、一家親族がずらりと座りこんで、カーンカーンと呑氣さうに鉦を叩いてゐる。二時間でも、三時間でも……。納棺（棺といふが實は甕である）の時には近親一同佛を取卷いて、如何しようどーなわァ／＼わァ／＼」と號泣する儀式があり、お通夜には各自飲食物を持寄り、飲且歌ひ、ハメを外して騒ぐ儀式があるさうである。暖國の人は、羨ましい程呑氣な氣分を持合せてゐる。

墓といへば、關ヶ原戰役後こゝに流されて、こゝで死んだ浮田秀家の（墓無銘の五輪塔が）、大賀郷は大字岡重の共同墓地の榕の木のかげに、理想的な古色蒼然たる姿で、風雨に晒されて建つてゐた。

共產制の島島

熱海の初島(はじま)は、「一世に珍らしき共產村」として、昨夏「報知」紙上六七回に亘つて紹介せられてから、俄かに有名になつた、私も「讀賣」にちよつと書いたし、茅原華山氏も曾て或る雜誌上でその共產制に就て論じたことがあると聴いた。初島は共產制度よりも、むしろ島の少女の戀のロマンスに由て名高い島で、熱海・伊豆山或は伊東邊の温泉に遊んだ人は、海上はるかに「珊瑚礁上の青螺」其ものの如き姿で横はる島影を望みつゝ、その

哀れな戀物語を聴いたに相違ない。

島の直徑は廣いところで十町、狹い處は六七町、ぐるりと一巡りしても一里には足りない離れ小島で、行政區は熱海町に屬し、郵便は網代局の所管で、何方から行つても海上三里である。熱海からはモーターボートを雇ふてゆくので、三十圓内外もかゝるが、網代には初島の石油發動機船や郵便船（モーターボート）が絶えずやつて來るから、それらの歸航に際して便乘すれば、僅少の心付で、島に渡ることができる。

島には昔から、四十二戸の家があつた。永い間――少くも德川中世紀の頃から、其の戸數は増加もしなければ、減少もしない。増加しない理由は、一定面積の土地、殊にかゝる孤島の上に、無制限に人口の増加することは、直ちに共喰ひの生活を脅威する結果となる處から、古來一の不文律に由て、嚴重な分家制限及び人口制限の行はれて來た爲で、減少しない理由は、不時の災厄又は病氣等にて衰滅せんとする家があれば、全戸擧つて之を救濟し、貧窮な者には特に商店を經營せしめて收入の増加を圖つてやる。畑十五町二反歩山林十八町歩、今も昔も増減なく、各戸に割當てゝ一戸宛宅地二畝、畑三反六畝、山林四反三畝餘と定め家屋の構造から大さまでが殆ど一定して、富豪もなければ貧乏人もなく、生業は漁七分農三分の割合で從事し、恰も武陵桃源のやうな呑氣な生活を營んでゐる。無論そこには搾取者たる資本家の有らう筈もなく、島民の全部が一列の勞働者なのである。

實に理想的生活だ！。茅原華山氏は「原始的家族制度の上に立てる共産村」と評し、餘り賞揚はしなかつた模樣であるが、我はおもふに、彼等がたゞ祖先の遺制を、傳統的に踏襲してをるにすぎない、何等自覺的概念の下に行はれてをるものないといふ理由からであつたらう。然し傳統的に、半本能的にかういふ制度の行はれてゐる所に、却つて妙味があり、値打でもあるのではないかな？。成る程彼等は無智であり、低級であり、總るび付の新聞すら讀み得る者は、幾人も居ないであらうけれど、彼等の世界は、生れながらの共産生活なのである、もし新聞を讀み、雜誌をよみ本をよんで、所謂社會主義者の理想論などを知つたなら、「おや／＼」と、今更國者（内地人）の頭の古いのにびつくりするであらう。

とは云ふものの矢張り、文字を知ると同時に、彼等は間もなく、その美くしい理想生活を棄てるかもしれない。

初島を訪ふには、紅い椿と白い水咲の花とが美くしく上下を掩映して、島を擧げて一大花苑のごとき觀がある二月の末頃から四月にかけての間か、或ひは七月下旬初木神社の祭禮に名物

「鹿島踊り」の行はれる日などがよい。初木神社の祭禮は、一年間に於ける最大の歡樂日で、この小さな島に神輿が渡る、山車が出る、若衆は白衣に角帶を締め、白足袋に麻裏草履といふ派手な姿で、手に手に白い御幣や、或は金銀紙を貼つた「黄金柄杓」なるものを持つて、圓くなつたり角になつたり。唄は、

　千早振る——神々も勇むなれば
　彌勒なれば彌勒踊れ、芽出度いな
　　ハンヤー、ハアハアハア。
　十七が、澤に下りてヨホホイ
　黄金びしやくで水を汲む
　　ソコナレ、ハアハア。

などうたひつゝ、拍子揃へて踊りまはるのであつた。祭禮と盆踊を一緒にしたやうなものである。女は見物するのみで、踊子には加はらない。

　動物は鼠と蛇が居るだけ、それも青大將と縞蛇のみで、山カガシは居ない。兎、鼬、犬、猫等は全たく居ない。飲料水は島中四箇所から湧出し、如何なる旱魃にも曾て斷水したことがないと云つてる。旅館は無いが宿泊の求めに應ずる家は、兩三軒ある。島は昨年の地震で六七尺隆起した。

◇

　しかしながら此種の共産生活は、海上の孤島には珍かしらぬ例で、ひとり初島に獨特の制度ではない。伊豆七島中の御藏島にも、古來類似の生活が行はれ來たり、今尙ほ行はれつゝある。

　御藏島は三宅島と八丈島との中間にある小島で、東西・南北ともに各一里十二町。全島是れ山といつた姿で海上にとんがつてゐる。島嶼村制を敷かれて御藏島村なる一島一村を成してをるが、戶數約八十戶人口は三百內外である。古來二男三男の分家を許さず、又嚴重な産兒制限（或は育兒制限）の行はれて來たのは、一定の土地上に一定人員の生活を保護する爲で、二男三男と生れた中には妻を娶ることができず終生獨身で終つたやうな者もあつた。今日は剩員は島外に出るから、そのやうな悲劇は全く跡を斷つて、後には、唯だ理想的な共同生活のみが殘つた。此島は全く『無税の國』である。

　此島は八丈島とひとしく黑潮圏內に位置してゐる爲に、森林欝蒼として全島を掩ひ、從つて溪水に富み、船木山の中腹に湧出する淸水を、約半里の間竹樋で引いて部落各戶の飲料水に供してゐる。八丈島と共に「水の苦み」を知らぬ惠まれた島である。殊に山中には珍らしい「黄楊」の原生純林があつて、材質の堅緻なること日本一と云はれてゐる。その山林は島の所有で

もない、島民の共有物である、春季に採伐して東京に移出し、賣上金の中から先づ一切の税金と村費を控除し、殘金はすべて島民に分配するといふ制度である。丁度その配當額で一箇年の米と鹽とが、購入し得られる程度だといふ。卽ち彼れ等は、御藏島に生れたといふだけで、最低限度の生活は保證せられて居る譯である。もし山林が或る個人の所有に屬してゐた場合は、左樣はゆかない、島民はたゞ伐木、運搬の勞働に對して、僅少な賃金を支拂はれるのみで、今日村費と全部と全島民の食糧費とを支辨してをる金額は、すべて山林所有者の富として蓄積されたに相違ない。そして共處に事實上の御藏島王と、それに隷屬する島民との世界が生れてゐたであらう。

私はまだ行つては見ないが、玄海洋の中にある小呂島（福岡縣糸島郡西浦から海上十三里）も、矢張りさうした共產島の一つだと聽いてゐる。今より二百五六十年前の正保の頃、藩命によつて西浦の孫右衛門。吉左衛門。三左衛門など云ふ五人の漁夫が妻子を率ゐて移住し、その子孫連綿として、今は百餘の人口となつたが、戶口は二十六戶と限つて增加せず、おもしろい共同生活が行はれてゐると云ふことである。

此種の共產生活については、他日、も少し纏まつた御報告をなし得る機會があらうとおもふ。

議會日記

石川半山

衆議院は僕に取て、決して珍らしい者ではない、實は明治二十三年帝國議會が始めて開けた第壹回から、其の門をくゞつて之を傍聽したる一人で有る、衆議院議員としては今回始めて、此の院に入つたが、傍聽人としては、僕の如きは、先づ故參として第一人者の方だ、明治二十三年は、僕が十九歲で、始めて傍聽席から此の議席を眺めた時から、他日壹度は必ず此の議席に着いて見たいと望んだ者だが、それが五十三歲の本年に至て、漸く其の三十餘年の宿望を達したのだ、考へて見ると、如

何にも馬鹿々々しい事で、定めし識者の笑ひを招くで有らうと思ふ、例せば十八九歳の頃に、想を懸けたる美人と、五十歳以上になつて、夫婦になつた様な者だ、昔は艶麗なる美人で有つた者が、それが惨風悲雨、三十年の歳月に、さん〴〵の苦労をして、朝野の不良政治家の玩弄物となつて、色は衰へ、香は失せて仕舞ふて居るのだ、いよ〳〵議席に着いて見て、オヤオヤとあきれることばかりだ、然かし兎に角、三十餘年の想ひを懸けたる議席を得たのだから、特に日記を書いて見ようと思ふ、實は當選した時以來の日記にすると、面白い事も多いのだが議會日記と云ふ題にしたから、六月二十五日から始める、

六月二十五日（水曜日）

午前八時に下澁谷の宅を發した、衆議院議員として、初めて登院するのだから、自動車を用ふ可しとの意見が、友人の間から起つたが、選擧費の支拂ひ殘額が、尙多い際、左樣なる奢侈は戒しめざる可らずと言て、人力車を雇うた、實は人力車でも無用の失費と考へたが、初登院と云ふ理由を以て、一歩を讓て、人力車とした、八時四十分衆議院の玄關を上ると、先づ當選證書を出した、すると胸に飾る議員の標章と種々の書類を與れた、此の時官吏の中に『石川先生の御案內』と呼ぶ者が有つた、この聲に應じてボーイが僕を先づ帽子をかける所へ案內しそれから二階の憲政會の『關東東海』室へ案內した、此の室は、多年政友會が占領した所で、近年のあらゆる惡事は、此の室に於て開催する代議士會に依て決せられたので有る、今度は憲政會が多數となつて、代議士會を此の室に開くのだから、善政を行ひたい者だ、僕よりも先きに着いて居た人が、兩三人有つたが、その中に太田信治郞君は當選證書を忘れたと有て、僕に保證人たらんことを求めた、お安い御用と、印を捺したが、或る新聞には、誤つて僕をも證書を忘れた人の如くに報道した

正副議長の選擧

今日は正副議長の選擧を行ふ日で有る、振鈴が鳴ると議場に入つた、僕の議席は、百七十七番で有つた、憲政會は中央で、議長席に對し、形勝の地で有る、僕は此の議席に着いて、左右を見廻はして、感慨無量で有つた、曾て星亨君があの邊で、傲慢なる態度を示して居た、田中正造君はあのあたりで怒號して居た、田口卯吉先生はあのあたりに居られた、昨年迄は島田三郎先生も議席に居られたに、今は先生も河野廣中君も故人となつた、こんなことを考へて居る內に、中村書記官長が假議長となりて、議長選擧が始まつた、粕谷義三君を再選すべしとは、僕

の望む所で有つた、議長席に向つて、左方の階段を上つて、投票を終了して、向ふの階段に降下すると、そこに高木益太郎君が居る、ヤアお目出度うと言て手を握る、このあたりには安藤正純君も居れば、町野武馬君も居る、ヤア〱と言つた調子で立話をした。

大岡育造先生

不圖大岡育造先生の議席は、何處ならんと見廻はすと、先生は投票を終了して、座席に落いて居られる、僕は其の前に往て、

僕「先生、御無沙汰を致しました、石川です

大「ヤア石川君か、哲學者の樣な風采になられたのう

僕は先生の大患が、意外に良好に恢復されたことを喜んだが、然かし現在の先生を往年の元氣潑剌たりし勇姿に比して、眞に涙なきを得なかつた。

副議長小泉又次郎君

議長候補としては、粕谷君の外、降旗元太郎、西村丹次郎兩君を、一所に書いて出した、それは政友本黨が粕谷君には同意するけれど、外二名は陣、櫻內兩君を記すことが分かれて居るので、我等は三派の三名を書いても、誤て降旗、西村兩君が粕谷君を凌駕する心配がないからだ、然かし小泉君の時には、本黨に於て、政友會の岩崎幸次郎君、中正の增田義一君の內を書いて、小泉君を落すかも知れぬと云ふ噂が立つたので、最初は唯小泉君ばかりを書いて出した、そこで小泉君だけは當選したが、殘餘の二名は、決選投票と云ふことになつた、實に厄介なことで、又もや階段を上下して投票した。

候補三名の愚劣

全體議長や副議長の候補を三名選定すると云ふは、此上もない愚劣なる制度で有る、必要なる數は、一名で有るから一名だけ選んで良いではないか、今日迄天皇陛下が十分に民意を尊重させ給ひ、其の最高點の者を御任命になつて居るから、何等の問題も起らなかつたが、若し今後或る時期に於て、大權の發動で、三名の內、次點又は三番目の候補者を御任命になつたなら、それこそ大問題を惹起すではないか、今回の如きも、粕谷小泉兩君が正副議長に任命になつたから、何人も異議はないが、若しも大權の發動で、西村丹次郎君を議長に、增田義一君を副議長に御任命になつたら、どんな者だ、必ず國論の沸騰することで有らう、それで僕はこんな馬鹿氣たる、而して危險を含

な所の形式的議院法第三條は速かに改めて、議長副議長各壹名を選むことにしたいと思ふ、又此の形式的に附けられる正副議長候補者に選定される人物は、如何にも氣の毒な事だ、降旗君にしても西村君にしても、議長たるの資格は、十分に有る男だから、之を議長として出すのなら、敢て異議を言はないが、形式的候補にしたのは、誠に人物を玩弄した者で有る、選擧の時に落選に定まつて居る所へ、地盤擁護の爲めに、候補者を出すことが有が世人は之を稱して犧牲候補と云ふ、此の方は運動の方法に依て、時として番狂はせを生ずることも有る、彼の議長選擧には、全く番狂はせなく、必ず落選するのだから、これこそ眞の犧牲候補と謂ふべき者で有る、それを現代の政黨は、その人に名譽の或る役割でも與へたるが如く取扱ひ、世人亦此等の犧牲候補に對して、何等の同情を拂はざるは、我が憲法政治の幼稚なる所以で有る。

午餐は燕樂軒のスキ燒

午餐を取るべく院內の燕樂軒食堂に入る、若宮貞夫君と岡田忠彦君と相對して、牛肉のスキ燒を試みて居る、僕も其の隣席でスキ燒を取つて居ると、麹町で壯士に叩かれて當選した本田義成君が來た、始めて此の人を見たが、噂に違はず、拔け目のない顔をして居る、隨分色々切り廻はしさうな人だ。

六月二十六日（木曜日）

議會休會
本部の幹部室にて、佐久間秀逸君が進行係の練習をなすを見る、小泉新副議長の議長振りと共に、頗る巧妙、此の分ならば、立派にやつて往けることを、我等見物一同が保證した
午後五時橫山、淺賀、太田、佐久間四代議士と若槻內相を其の官邸に訪問した、要件は災害地復舊の件に關する交渉で有つた。

六月二十七日（金曜日）

朝九時登院、議席が變更した、僕は二百七十七番となつた、前の所よりも、一段高くて形勝の地で有る、右隣は懲罰委員長橫山金太郎君で、左隣は建部遯吾博士だ、此日のプログラムは正副議長の挨拶が重もで有つた、粕谷議長の挨拶は、流石に手に入つた者で、立派で有つた、小泉君のは如何やと心配して居ると、意想外に立派で、欣喜に堪へず、大に拍手した、どうして彼れは決して野人ではない、何でも出來る男だ、控室へ來てから、「どうも法規典例に通じないのでことゝ遲延するので、僕は「議

段は決して法規典例では務まらない、度胸が第一だ、君は幸ひに度胸が良いので、屹度名議長になる」と言つた。

此の日、各部屬を定め、部長理事の選擧を行ふ、此の部屬制と云ふ者も、未だ政黨の發達せざりし時の遺物で、今日では全く無用の者だ、直ちに廢止して少しも、差支のないもので有る。

此の部長は、其の部の年長者、理事は年少者を選定することになつて居るが、大岡育造、元田肇、野田卯太郎、加藤政之郎、大津淳一郎諸名士、皆年長の故を以て部長となられた、議會の名士も、段々老いて來て部長となり、高橋、犬養、箕浦、尾崎諸先生は、其の部に少しの差の年長者を有することに依て僅かに免かれられた。

六月二十八日（土曜日）

今日は開院式で有る、僕は是迄開院式へも度々參列するの榮を得たが、然かし議員としては初めてだ、登院して見ると、我が憲政會の關東及東海室では、蜷川將軍のフルドレスが、一番輝いて居る、勳三等も大分多い、僕の白耳義王冠勳章は珍らしいので、問題にはなつたが、餘り振はなかつた。

定刻に貴族院の式場へ往く。

式は滯りなく行はれたが、攝政宮殿下が加藤首相の恭しく捧呈した勅語書を取り、徐ろに之を披らかせ給うて後、『勅語』と一語高く呼ばせ給ひたる御聲は、滿院に響き渡り、一齊に電氣に打たれる如く、靜かになつた、其の凛々たる玉音は、如何にも壯嚴で、僕は『難有いことだ』と感激した

六月二十九日（日曜日）

議會休會

六月三十日（月曜日）

午前九時登院

全院委員長の選擧、此の全院委員長は島田三郎君が第一回議會に任ぜられた時は、議長副議長に次ぐの有力なる地位で、島田君が委員長として全院委員會を開いたことも有つたが、爾來全く無用の長物となつて居る、衆議院制度の改革を行ふ時には恐らく先づ廢止すべきものだ、されば此の委員長と云ふ有用なる地位に割り當てられたる人は、頗る不幸な人と謂ふべき者だ、全く議會から馬鹿にされて居る樣なものだ、若尾璋八君は果して之を不名譽の任として擧受けたか、又は通俗に之を名譽として受けたのか。

七月一日（火曜日）

午後登院

今日迄は儀式ばかりで、眞に國事を議した者ではない、眞の議會は本日から始まるのだ。

加藤首相、幣原外相、濱口藏相三大臣が、施政方針の演說が有つた、何れも良く出來た、若しも僕に甲乙を附せよと言ふなら、濱口君が第一で有つた、然かし幣原君の演說も、堂々たる者で、能く滿堂を傾向せしめた、首相の演說は、聲が低いので、本黨あたりが少し騷いだ。

元田肇君の質問

國務大臣の演說が終ると、質問演說が始まつた、第一に元田肇君が登壇したが、其の態度と云ひ、辯論と云ひ、論旨と云ひ、全く成つて居らなかつた、議場の四隅から大分猛烈なる野次が飛んだので、誠に氣の毒で有つた、多くの人は、彼れの老耄せる結果に歸したが、僕は之を辯護した、或は論者の言ふが如き、老耄せる結果かも知れぬが、本來彼れは第一回議會以來三十餘年、終始一貫したる御用黨である、大隈內閣の時に、少しく生殺るい反對を試みたことが有るが、其の時にも「老齡の大隈さんの顏を見ては、思ひ切つて反對は出來ない」と言つた位で有る、特に最近淸浦內閣の御用黨を組織した時に、天下に向て、「大權の發動に依て成立したる內閣に對して、反對するは忠良なる臣民のなすべき事でない」と論じて居た、彼れは此の意見を以て、各地に護憲三派を攻擊した者で有る、大權の發動に依て、成立した內閣に盲從するは、臣子の本分なりと、彼れは確信して居るのだ、是れ彼れが三十餘年一日の如く御用黨に屬したる所以で有る、然るに今や加藤內閣も亦同じく大權の發動に依て、成立したる內閣で有る、之に反對するは、彼れの忍びざる所だ、彼れが政友會の多數に推されて、壇上には立つた者の右を顧み、左を眺め、「エー其の何で御座います」などと吶へながら、ボツリ〳〵と不徹底を極めたる質問を試みたのも、全く其の良心が咎めて止まない爲めではない乎、大權の發動に依て成立したる加藤內閣に、弓を引くは、叛逆者の行爲で、陛下に對し奉りて、不忠不義になりはせぬかと云ふ心が、始終彼れの顏面神經に現はれて居るので、演說は少しも緊張しないので有る、僕は彼れの好人物なるを知つて居る、彼れが現在に於ての良心に於て、甚しい惱みの有ることを思ふと、寧ろ同情に堪へない、多分近日再び盛岡へ往つて、原敬の墓前で、流涕號泣して胸の苦しさを訴へることになるで有らう。

松田源治君の演説

元田君の降壇に次で、松田源治君が現はれた、其の辯舌は、元田君に比すれば、頗る優れたる點が有つた、遥かに辛辣で有つた、唯其の演説中に、容易ならぬ一語が有つた、それは『政友會に綱紀紊亂の人が殘つてゐる』と明言したことで有る、僕は『誰れだ〳〵』と連呼して問ふて見た、僕ばかりではない諸方から同じ問ひが起つたが、松田君は之に答へずして降壇した、此の時に若し動議を起して、彼れに問ふたなら、彼れは果して其の人を指名したか、どうだか。

臺ゴロワン辯、ニコチン、タバコ

松田君に次で、中村啓次郎と云ふ人が、陣頭に立つた、中村君は未だ能く知らないが、此人の實兄の巽孝之丞君は、倫敦で交際を得た、巽君は溫良恭謙の君子で有る、紳士の典型とも謂ふべき人格で、英國に永く滯留し、英國人からも多大の尊敬を拂はれて居る人だ。此の巽君の令弟で有ると云ふので、中村君の演説にも、敬意を拂うて謹聽したが、野次が騷がしくて聞えなかつた、特に彼れの演説中に、奇妙な野次が飛んだ、曰く臺ゴロ、曰く、ワン辯、曰くニコチン、曰くタバコ、僕にはそれが何を意味するかを知らないが、壇上の中村君が、此等の奇語を聞く毎に、論旨が攪か亂れた所を見ると、何か之には彼の胸を刺すべき意義の含まれて居ることかも知れない、

各相の答辯振り

此等の質問に對して、加藤、高橋、犬養、宇垣、若槻、濱口各相が答辯をしたが、濱口君が鄭重懇切に説明したのは、一番良かつた、犬養遞相の演壇に立たれた は、滿場水を打つたる如く、終始野次が現はれなかつた、高橋農相の飄逸にして、ニコ〳〵笑ひながら、松田君を子供扱ひにしたのは、滿堂を笑はせた、が加藤首相は原敬氏と同じく、常に攻勢防禦の法に出で、元田、松田諸氏の質問に對して、何か敵を一本參らせてやらうと云ふ意氣が現はれて居た爲めに、政友本黨が頻りに騷いだ。

對米決議

此の日、對米決議が有つた、國務大臣の施政方針演説と、その質問の始まる前に、全院一致で決議したが、其の文は左の如きものだ

決議

衆議院は米國新移民法中に於て、日本國民に對し、差別的條項を設定せるは、啻に國際間に於ける正義公平の原則に背反するのみならず、日米兩國七十年間の親交を阻礙する者として、強硬なる反對の意思を表明す

帝國政府は之に對して速かに適當なる措置を執らんことを望む

右決議す

此の文章を見た時に、僕は眉を顰めた、之れでは文になつて居らない、『衆議院は』と『強硬なる反對の意思を表明す』との間に馬鹿に長い文句を入れた爲めに、文意が變になつて居る、文章の上から見ると、衆議院が米國新移民法中に於て、何か不都合な條項を設定した様にも讀める、第二項の『帝國政府は』として『望む』とおいて居るから、文の上から見れば、政府が希望して居ることになる、衆議院から政府に向て望む意味ならばこの文では良くない、然かし兎に角、これが全院一致の決議で有る以上、僕が一人修正動議を出した所が行はれることでない、依て其儘とした、近來各地の宣言決議に無茶苦茶の文章が多いが、衆議院からして、かゝる惡い手本を示しては、これからはいよ／＼亂れることで有らう、

此の決議文に對しては、望月小太郎君の演說だけは、聽くことが出來たが、其の他の代表演說は、ヒドい者で有つた様だ、僕は望月君の演說が濟んで、川原茂輔君の登壇と共に、失敬して喫茶に出かけたが、議席に歸つた時には、兒玉右二君が盛に野次と戰ひつゝ將さに降壇する所で有つた、どうか此の決議文も、英文に譯する時は、意味の分かる様に作り、演說も望月君のを代表として送りたい、拙劣なる決議文に、愚かなる演說を添へては、彼等の輕蔑を買ふに過ぎないで有らう。

此の日一壯士が米國旗を引き下した事件が起つたので、下岡忠治君が質問を起し、若槻内相が之に關する報告をした時は、議場が暫らく緊張して居た、岡崎邦輔君に喫茶室で會したら、『困まつたことが出來た』と言つて、眉を顰めて居られた。

七月二日（水曜日）

午後一時開議、今日は日程が終ると、昨日に引續きて、質問演說が始まつた

質問演說の第一に立つたのは、坂東幸太郎君で有つた、年齒は尙若い様で有るが、能辯で有る、其の內容も有り、辯力も有り、將來必ず議會の雄辯家となるべき人と思はれた、それから武藤山治君の質問演說は、その調子に、牧師の說敎の如き所が有て、それが聽衆の耳に、良い響を與へなかつたが、內容は

貧弱でもなかつた様だ

一陣木下、二陣吉植

高橋内閣を動揺させ、遂に政友會大分裂迄の狂言を書いたのは木下謙次郎君と吉植庄一郎君で有る、此の兩人は共に僕は昔から知て居る、彼等は壇上に立ちて、辯舌を揮うよりも、帷幄にか在て、策略を考へる方が適任で有る、所謂智謀の士で有る、岡崎邦輔君あたりと同じタイプに往くべきで、共に悧巧な男だ、一を聞て百を知らなくても、五十位は確かに知る、一片の俠骨が有て、苟くも彼れに依頼すれば、善悪共に、ウムと引受ける意氣を持つて居る、特に吉植の方は、欣然として引受ける、決して賢明なる君子人ではないが、又平凡なる小人ではない、若し彼等を小人なりとしても、小人中に傑出したる者だ、而して本日の議場に、此の兩人が、轡を聯べて、驅け出して來たのは、彼等の失策で有る、彼等は壇上の雄者となるには、餘りに其の身に手傷を負ひ過ぎて居る、それ故に木下君が演壇に上ると、『僞造投票』と云ふ聲がかゝり、吉植君が現はれると『蝙蝠安』と言はれた、僕は其の何故なるやを知らないが、共に決して名譽ある代名詞では有るまい、僕は彼等が何故に、床次竹二郎君を陣頭に立てざるやを怪しまざるを得ない。床次君も亦何故に自ら奮つて、演壇に現はれないのか、新に總裁の地位に就いたからと云ふて、氣取つて控へて居るのは、僕が彼れの爲めに取らざる所だ、床次君ならば、人格と云ひ、識見と云ひ、『僞造投票』や『蝙蝠安』とは、大に違ふ様に思はれる、我が議會を緊張させる爲めにも、床次君の奮發を望まざるを得ない、木下や吉植は、芝居で言へば、黒幕の中の、道具方だ、道具方が舞臺へ出でて、踊つた所が、見物は承知しないわけだ。

横田に當ること猛烈

昨日から政友本黨の質問振りを見ると憲政會に對しては勿論猛烈に突貫するが、それよりも政友會に當る方が、深酷に往く様だ、政友會でも高橋首相よりも、横田法相に強く當る様だ、昨日松田君が『綱紀紊亂の人が政友會に殘つて居る』と言つたが、若し動議を起して、それを誰れだと問ふたなら、多分横田君の名を指摘したで有らう、木下君は其の演説中に、盛に横田君を攻撃し、『綱紀紊亂の張本人たる横田君を内閣に入れたのは憲政會が横田君の膝下に降服した者で有る』と言つた、此の一語満場の怒を買ひ、憲政會院内幹事の一人工藤鐵男君の如きは、之を懲罰に附するの意見で、僕の隣席の懲罰委員長横山金

太郎君に相談に來た、僕は乃ち猛然として、『木下、早く取消せ』と大聲で注意した、實は彼れを懲罰から救ふ意で有つた、議長も彼れに失言の注意をしたので、彼れは早速之を取消したが、要するに木下君でも、吉植君でも演説はしない方が良い、吉植君の方は、木下君よりも辯舌は少しく優れて居る樣だが、然かし頻りに皮肉を連發するのは良くない癖だ、當人は或は他人の演説の揚足を取つたり、或は痛快なる皮肉を飛ばす所に無上の興味を持ち、之を得意として居るのかも知れぬが、それは少壯時代のことだ、既に一黨の領袖と云ふ地位に上つた以上、戰をなすには正々堂々でなくてはならぬ、然かし持つて生れた病がなをらぬとすれば　先づ自ら制して、岡崎式になることだ、成るべく人の前に出でないことだ、人形にならず人形使ひになることだ、吉植君が中橋人形を使ひ、木下君が元田人形を使ふて居る間は、面白い芝居が見られた、同じ時代の高橋人形を使ふた横田君が、法相になつたからと云ふて、何も急にそんなにヤキモキして、舞臺へ躍り出すにも及ぶまい、人形使ひが人形を持たずに、自分で躍り出したのでは、滑稽に落ちて、大なる損失だ、やはり彼等は其の天分に從て、床次人形を操いで居る方が少しも無難で有らう

井上君の演説

それから此日は井上孝哉君も質問演説をやつた、彼れも僕の熟知で有るが、此の演説は彼れのために考へて、やらぬ方が良かつた、水野前内相との關係上、一言せねばならぬ破目に陷つたのかも知れぬが、シドロモドロで、誠に氣の毒で有つた、僕は井上君を罵倒する人々に向て『アレは演説が下手なので、人物はあれ程物の分らない男ではない』と辯護して置いた

七月三日（木曜日）

朝九時に登院して、正直に第二委員室に往て見る、震災地借地の地租免除等に關する法律案の委員となつたから、其の委員會に臨んだのだ、然るに委員九名の中、神谷君と小島君が來たばかりで、外の人は來ない、委員長や理事は、三派交渉會で決定して、委員長は政友會の磯部尙君、理事は憲政會の平沼亮三君と定まつて居たが、兩君共になか／＼來らない、其の中に、磯部君だけ來て、四名になつたが、それで委員長と理事の選擧を行うた、それは年長者の小島君を假委員長にして、神谷君から委員長理事を小島君の指名としたのだ、それから磯部委員長は其の席に着して、議を進めた、大藏省から黑田政府委員が

諄々として説明し、質問應答あり、僕は後日に譲て忽ち散會した。

午後一時から本會議、日程は少なかつたが、之に次で例の質問演説に恐れ入る、本日は政友本黨の方でも、人物の種切れになつて、三流、五流乃至八流が現はれる、議場は悄氣滿々で、誰れも眞面目に聽く者はない、僕も途中から失敬して、喫茶に出かけた、歸つて來たら、横田法相が何か演壇で大聲を發し、喝采を浴びて居た

多くの質問演説者の中で、安藤正純君の東洋大學紛擾事件を持ち出して、岡田文相を攻撃したのは、頗る痛烈で有つた、文相の答辯も、相當に緊張して居た。

政友本黨は本日迄、三日間死力を盡して、新内閣を攻めて見たが、其の矢は悉く刎ね返へされて、内閣を傷け得た者を見なかつた、蓋し政友本黨の攻める方針も、成つて居なかつた、『普通選擧案を何故に本議會に提出せざるや』と云ふのが、彼等が放ちたる矢の一で有るが、これは普通選擧を希望する者にして始めて放ち得べき者だ、普通選擧に反對せる『彼等』から何故に即行せざるや』と言ふのは、滑稽で有る、綱紀粛正に付て、數百言を費やして、攻め立て、加藤首相の例の珍品問題迄も擔ぎ出したが、其の其の攻め立てる方が、綱紀紊亂の本家で、賄賂の發賣所と來て居るから、トント力がない、せめて演壇に床次君でも立つなら、尙幾分か之を言ふ資格がないでもないが、出る顔も出る顔も、所謂利權屋で有る、綱紀紊亂屋で有る、清浦内閣の足輕になつて居れば、何かの利權が取れると云ふので、政友本黨に走しつたる雜兵共が、今や反對黨となりて、泣言を並べるのだから、其の苦いこと此上もない、院外が九十度の時は院内は九十五度以上だ、兎ても四隅に立てられたる氷柱位で追ひ附く話ではない、議員たることも亦苦しいかなだ。

七月四日（金曜日）

本會議休會、委員會へは出席せず

七月五日（土曜日）

議院内の[illegible]樂軒で、午餐を取る時、偶然卓を同じうしたる永井柳太郎、内ケ崎作三郎兩君と語る、與黨では氣焔が吐けないと云ふ話になつて、遂に『同盟罷口』の事に及ぶ、『罷工』ではなくて、『罷口』で有る、僕はどうでも良いが、我黨中には永井内ケ崎兩君の外にも中野正剛、關和知兩君を始めとして、天下に名高い雄辯家が多い、此等が皆與黨の故を以て、其の雄辯を發せさるは、全く議會の損失である、此の日の如き重大なる議事

は、松方公の國葬と云ふ一件だ、僕は勿論之に不平で有る、僕ばかりではない、四百八十餘の代議士、多數は不平で有る、然かし既に仰せ出されたる以上、之を否決するわけにも往くまい、本案に反對の代議士が二人現はれた、其の言論は決して雄辯ではなかつたが、僕は此の兩君が能く思ひ切つてやつて與れたと思ふた、誰れも何とも言はないで、國葬だ〳〵と云て、國費を濫費するのは困まる、苟くも國葬と云ふ程の者は、大に選まなくてはならぬ、ハルピンで殺されたる伊藤公一人は、僕も異存はない、大山公でも山縣公でも、國葬にする資格はない、松方公は選擧干渉の罪と、第十一議會解散の罪が有る、此の二個の大罪は、彼れの少しばかりの功を打ち消し、尙罪の方が重いといふのだ、今迄藏いて居た勳位顯爵さへ過ぎて居るのだ、山縣公の國葬の時にも、無所屬から異議が出でたが、かう云ふ時は無所屬と云ふ者も必要なものだ、唯本日の猪野毛君のも田淵君のも、其の演説に、謹嚴と莊重とを缺き、其の論鋒が如何にも弱かつた、然かし弱くても何でも、サムシング、イズ、ベター、ザン、ナツシングだ、考へて見ると閥族共は、勝手た眞似をする者だ、伊藤、山縣、大山、松方の四人、卽ち薩長から兩人宛を國葬にして、我が大隈侯の國葬には反對した、怪しからぬ話でないか、田淵君が「貧乏人でも葬式が出來ない者は國葬にしたい」と言つたのは、天才の聲だ、面白い、唯貧乏人の方は自治體で引受けて葬むつて貰ひたい、國葬は最大の名譽の葬式にして、眞に國家に功勞の有つた人ばかりにしたい、閥族の釣合などで決定されては民心が滿足しない、又此の國葬と云ふことを、政治家ばかりに限るのは良くないことだ、パンテオンの如くに各方面の英雄を網羅しなくてはならぬ、苟くも國家に大功の有つたる人物なら、畫家、彫刻家、俳優、學者、建築家其他總べてを國葬にする必要が有る

御土産案

本議會は會期が短かいので、頻りに議員の御土産案が現はれ始めた、見ても悉く謹聽して居られるわけの者ではない、此の御土産案なる者の現はれる時、議會は名所古蹟の如くなり、田舍議員が、何か買うて持て歸らねばならぬと焦燥氣分になるを免かれない、是に於て、國士の集會とか云ふ意氣が乏しくならざるを得ない

田淵君の失言

田淵豐吉君はどう云ふわけか知らぬが、無暗にシヤベリたがる、本日も度々登壇したが、其の發言は、自分が田中涌逸君

に叩かれた顛末で有る、而して其の辯論の餘波が粕谷議長の攻撃となり『厚顔無恥』と罵しつた、謹厚の君子人たる粕谷君に對してかゝる暴言を吐いては、何人も之を怒らざるを得ない、忽ち政友會から懲罰の動議が出でた、然かし何しろ犯人が小供の様な田淵君と來て居るので、憲政會の野村嘉六君から本人に取消させては如何との仲裁說が出でたが、本人は田中萬逸君の辯明中に頭を掻きつゝ逃げ出したので、議席に居らなかつたから、其の儘議長の手許に保留する事となつた、田淵君の頻りにシャベりたがるのは、或は病的かも知れない、其の辯論も、無節制の放言が多くて、自ら傷くる者だ、

國籍法中改正案

本日國籍法中改正案が上程された、前原悅二郎君が提出した者で、重國籍問題を解決するものだ、前原君は之れが說明をなすに當り二重國籍が排日の重もなる原因をなせる所以を說き、マクラチーの言をも引用して、速かに之を解決せんことを要求した、僕は此の前原君の提案の理由を面白く思はなかつた、特にマクラチーなどの云ふ所を引用するのは怪しからぬことだ、僕は先年サクラメントに往つた時、マクラチーにも逢ひ、又彼れの新聞ビー社の社員の訪問をも受けたが、此のビー社の連中と來たら多くは熱心なる排日黨で、無法な質問を發する男が多い、日本は何故に共和制を速かに行はないかと問ふたりした、マクラチーの如きは、排日が商賣で有て、其の動機も目的も不純で有る、マクラチーとかフキランとか、インマンなどの說を聽いて、之を眞面目に受取るのは間違ひで有る、彼等は排日に依て、人氣を釣つて居るのだ、中央政府からカリフォルニア州へ軍備費を取る目的も有るのだ、彼等が日本人を攻撃することは、日本帝國が北米合衆國の一テリトリーとなる迄は、決して之を止める者でない、或ひは日本人の皮膚の色が白くなり、頭髪が黄金色になる迄は、之を止めないかも知れぬ、彼等は我等と全く相容れざる徒輩で有る、彼れの新聞はビーと云ふ、ビーの飜譯は蜜蜂で有る、彼等は米國人に對しては、或は蜜蜂かも知れぬが、日本に對しては、唯刺すばかりで、決して蜜を與れる者ではない、マクラチー一派の徒輩は、モスキトー即ち蚊で有ることを記憶しなくてはならぬ。

七月六日（日曜日）

休會

七月七日

朝登院

此日僕の臨席を要する集會は、隨分多かつた、同じ午前十時頃に、衆議院内に於て、開いた者のみでも、三種有つた、僕は先づ更新會の世話人として、院内控室に赴き、次で國籍法中改正案の委員會に臨んだ、三派交渉會に於て、此の法案の委員長を植原悦二郎君、理事を飯村五郎君に内定して居たが、此の兩君が來會しなかつたのは、如何なる差支が有つた爲めか分らない、集まつた委員だけで、委員長と理事を互擧すべし、交渉會からの指定の人々とは言ひながら、最初の會へ出席もしない樣な不熱心な男は排斥せよとの意見も有つたが、委員會の役員を爭ふた樣に見えても良くないから、僕が假委員長に推され、委員長と理事の選定は假委員長の指名に一任されたるを幸ひに、交渉會の豫定通り、委員長に植原君理事に飯村君を指名して、此の日の委員會を閉ぢた、全體植原君は此の法案の提出者で、自ら委員長を以て任じて居る癖に、かゝる怠慢無責任は僕の理解に苦む所で有る、然かも其の翌日になつて、僕に廊下で逢ふと

植原「君も國籍法案の委員だつたね」

僕「さうだ」

植原「勉強して、出席して吳れなくては困るよ」

僕「何を言ふのだ、君こそ最初の委員會に出席しなかつたではないか」

これは植原君に限らない、現代政界に於て少しく名を成して居る程の男は、大概此の如く勝手な、我儘な、ヅウ〳〵しい、無作法な者で、默して居れば、何をするか分らない、彼等は自分の責任は、勝手に怠り、唯人を責めて傲然たらんとする者で有る、植原君の如きは、其の性質は善人の方で、多少紳士の敎育も受けて居る筈だが、政界の悪風に感染して、コンな者だ

國籍法中改正案委員會を終りて、急いで請願委員會の第一分科會に飛び込む、時しも永井柳太郎君が、金鵄勳章年金增加に付て、紹介議員として其の雄辯を揮ひつゝ有る所だ、然かし此の一代の雄辯家も、本案に對しては、『エー其の』や『ウーンそれで』と云ふ樣な言葉が多かつた、勿論餘り得意の問題ではなかつたのだ、そこへ川淵豐吉君が來て、同じ年金增加案に付て一辯を揮ひたいと望んだが、主査の川崎安之助君は、頑として許さないので、川淵君大に怒り、卓を叩いて騷いだ、委員中には彼れの發言を許すべしとの說も有つたが、主査は許否を滿場に問うた、僕は彼れを憎むべき男とは思はない、至て無邪氣な面白い男で、學問も相當に有るから、彼れの演說を聽いても良いとは思ふたが、何分にも炎熱九十度だ、それに同じ問題で、永井君に中野寅吉君に、何數名やつた後だから、此上あの凹凸にやり

れては堪まらない、時は正午に近く、腹もすいて居るから、やらせぬ方に起立した、彼れはブン〳〵怒つて、何か怨言を吐きながら去つた、無遠慮に自分の都合ばかりを考へ、我儘勝手をしながら、憤慨するのは田淵だ、古來獨身者には能くコンなのが居る、僕は此の時も、誰れか一人、相應な嫁を彼れに世話してやりたいと思ふた

請願委員會の案頭に上る者は、十中八九迄所謂御土産案ならざるはない、其の中には途方もない馬鹿氣たものも有るが、紹介議員が選擧區の都合で、之を持ち出したる苦衷を察すると、反對は出來なくなり、採擇は出來ない迄も、少くも參考送附位にせざるを得なくなる、請願委員會は單に無思慮に其の目次を見ると、愚案劣案、惡案乃至滑稽案が多くて、お話にならぬが其の各案の内容と、其の關係者の話を聞くと、各案の文字には血と涙が滲んで居る、請願者は何れも眞面目で多くは生命がけだ、こんないらない案件は、國士の意を傾ける價値がないなどと云ふのは、以ての外の不心得で有る、僕は請願委員の一人となつて、此の委員會に多大の興味を感じた、

此の日は本會議なし

七月八日（火曜日）

午前十時登院、震災被害地の地租等免除に關する法案委員會に臨む、

本日の本會議は、復興債券案と、奢侈品輸入稅案が現はれた、濱口藏相の說明、及び諸種の質問に對する答辯は、少しも危ふい所がなかつた、濱口君は其の人格と識見と、其の熱誠と雄辯に於て眞に國の寶で有る、相變らず政友本黨の雜兵共が名を質問に借りて、多少の矢を放つたが、見ても立つべき餘地はなかつた、唯武藤山治君の質問は、多少耳を傾くべき者も有つたが、何分にも其の句調に、一種アーメン式の所が有るので、どうも冷評を免かれなかつた。

田淵君懲罰

田淵豐吉君懲罰の問題が、五日から此の日へ持ち越して居た、議長は彼れに取消すや否やを問ふと、彼は登壇して、分らぬ事を言つて居た、男らしく取消もせず、グヅ〳〵言つて居る内、冷評の野次が飛ぶと、急に赫として取消さないと言つたので、懲罰委員に附される事となつた

七月九日（水曜日）

朝は請願委員會と國籍法の委員會に出席、國籍法改正案は種

原案の外、政府から本日提出することになつて居るので、僕の發議で、それと一所に質問討議をするに決定して散會、請願委員會の方へ往くと、神田正雄君が來て居るので、何の用かと思ふたら、栃木縣の鐵道の件で有る、これは神田君に取ては、確かに支那問題以上に、緊切必要な重要案件に違ひない、

本日の本會議の日程には最も重要なる十二年度追加豫算案が有つた、片岡直温君が委員長として、滔々數萬言、本黨から松田源治君が政務次官の設置に反對の聲を掲げた。全體松田君は自ら內務の勅參になつた男ではないか、それが頻りに政務次官の設置に反對するのは良くない、たとへ其の言ふ所が良くても、發言に權威がない、道樂者が他人の放蕩を責めて、其の非を說く樣な者だ、松田君や吉植君の如き、勅參になつた、男は政務次官に反對する權威はないのだ、贊成論者として町田忠治君が眞摯なる口吻で、良い演說をした、人格の良い人は、雄辯でなくても其の所論は、人を傾聽せしめる者だ、東武君の贊成演說は、壯快で有つたが、時々脫線しかけて、本黨からも喝采を受ける樣な所が有つた、大勢は、已でに決定し、如何なる辯論も、投票に影響する所なく、豫算案は大多數で通過した。

七月十日（火曜日）

朝登院、國籍法中改正案委員會に臨む、これは政府提出案と植原案と一括して審議を始めたので有る、植原案は國籍法の第二十四條を削除すると云ふので、政府案よりも廣汎で有る、政府案は米國に生れたる日本人で、米國の市民となつた者は、日本の國籍から離脫することの出來ることにするばかりで有る、植原案は青年が他國へ歸化すれば、忽ち徵兵の義務を免かれ得る道を開かんとするものだ、種々の質問應答が有つたが、外務省から佐分利、赤松、陸軍省から津野、內務省から湯淺、其他の政府委員が出席した、然るに質問の中には、單純なる質問でなくて、所謂名を質問に借りて、頻りに議論を試むる者が有つた、特に委員長植原君が、自分の案を固執せんと欲して政府委員と論戰を交ふること數回に及び實にうるさくて堪らない、第一委員長が其の席を下らずして、委員長席に坐しながら、頻りに發言論議するのは違法で有る、それに名を質問に借りて、論難攻擊をなすは、不都合で有る、僕は此點を植原君に注意すると、これが慣例だと言て、抗辯をした、慣例でも惡るいのは改めるべきだ、舊るい代議士が、不正の慣例を振り廻はす時、之を矯正するのが、新代議士の任務であるから、僕の聲は少しく高かつた、考へて見れば、植原君の如き善人を相手に、甚だ大人氣ないことで有つた、

七月十一日（金曜日）

此の日も國籍法の委員會に臨む、いよ〳〵質問を終り、討論に入り、僕は政府案維持の說を述べる、本黨の中村嘉壽君が反對論を唱へた、採決すると、政府案が多數で可決した、然る上は當然植原案は採決の必要なしと云ふことになつた、而して午後の本會議に於て、植原君が委員長として、此の經過を報告した、そこで僕は終始一貫政府案の支持者として、簡單に一言したが、僕は日米問題の紛糾せる今日、本案は日本が彼等排日黨に讓歩する意味を以て發せられたるに非ず、日本が自發的に、米國に生れたる日本人の二重國籍問題を解決したるに過ぎざることを述べて置いた、これは日本國民に告げるばかりでなく、米國人に言つて置く必要があるのだ、即ち太平洋沿岸の排日黨が、之を日本の讓歩の如くに誤解して、一層其の氣勢を昂進するかも知れないからだ、

此の日森田金藏君提出の營業稅全廢案で、提出者に質問すべく、清瀨一郎君が雄辯を揮ふた、それから贅澤品の輸入稅案で大紛擾が持ち上がつた、同案の討議中、政友會の岩崎勲君から休憩の動議が現はれ、二時間半も休憩した、其の間に憲政會代議士會は度々開かれ、院内役員に對する攻擊は、猛烈で有つた、箕浦勝人君が院内總務として、熱心に辯明が有つたので、何人も其の德望に服し、又安達謙藏君から幹部一任を提唱したので、忽ち靜肅に一決したが、休憩中の代議士會の一時の騷ぎは、非常な者で有つた、要するに失態で有る、其の責任が、何人に歸すべきやは知らないが、三派交涉の宜しきを得て居らなかつたことは爭ふことは出來ない、政友會から橫車を押し出したのは山本条太郎君ださうだが、山條君などに對する時は、餘程良く突き止めて、相談をして置かなくてはならぬことだ、二時間半協議の末、漸く成案が出來て、之を議場へ持ち出し、漸く鳧は附いた樣な者の、如何にも醜劣なことで有つた。

山條案が議場に出てゝ後、大口喜六君が頗る良い演說をした、大口君は眞面目な男と見える、少し長かつたが、あれ位に熱誠の溢れた演說なら、長くても良かつた、

採決に臨み、起立で明かに大多數の者を政友本黨が『異議あり〳〵』と騷ぐ者だから、度々堂々廻りをやらされた、議席にボタンを設けて、それを押すと、議長の前に、贊否が分かる設備は歐米に有る、日本でも新議事堂には此の設備が有るさうだ、堂々廻りは、時間がかゝつて堪まらない、お蔭で今夜は九時近かゝつた。

七月十二日（土曜日）

此日、本會議で、復興債務案で、八木、川崎、鶴見君の演說が有つた、中にも川崎克君のは尾崎張りで、なか／＼巧妙で有つた、西岡竹次郎君は普選案を提出して、其の說明を始めたが、大體論だけにして置けば良いのに、委員會や第一讀會でやるべき細目、並べ立てた爲め、議場の反感を買ふた、其の雄辯で野次を押し切らうとしたが、成功しなかつた。

それから武藤山治君が議院法中改正案を提出して、其の理由を述べる内『現代の日本で、最も能率が上がらぬ者は、帝國會で有る』と云つたので、それが大問題となり、議場混亂した爲めに、議長は休憩を宣告した、休憩中三派の交渉會で、武藤君を懲罰に附することになつた　僕は隣席の懲罰委員長横山勝太郎君を顧みて『お店御繁昌』と云ふと、横山君は大笑した、田淵君は僕に向て云つた『横山君に言つて呉れ玉へ、いつ迄も僕の處分をしないでは困まる、僕はモウ首をのべて待つて居るよ』然かし議會に懲罰の犯の多くなるは困まつた者だ、どうも議員が、兎角無用の辯を振ひたがる樣だ、賣名　選擧區への御土產や、或は病的にシヤベりたがるのが有る、不必要の演說を無理にやる時に、失言となる者が多い、本黨や無所屬や中正にはそれが多い、三派にも必ず其の類の人の有ることだらうが三派には黨としての節制が有るので、餘り失言者を出さない、政黨の節制は、やはり必要なことだ、

此の日武藤君は演壇に立つて居る内に、休憩を宣告されて大に憤り、演壇を降らないことを主張して居た、三派の人々は、大多數立ち去つたが、政友本黨だけは武藤君に加勢をして去らずに居た、然かるに五分立つても十分立つても、議長が歸つて來らない、演壇を占領して去らない例は、佐々木蒙古が開いたが、あんなことは蒙古にして始めて出　ることだ、彼れは前人未踏の山野をも跋涉し太陽直射の砂漠の中にも快眠を取り得る男だ　議場の演壇に半日でも一日でも立つ位は平氣で有る、然かしそれは武藤君には出來得ないと思ふて居ると果せるかな、十分ばかりでスゴ／＼降壇した、折角力を入れたる政友本黨も、張合が拔けて、チリ／＼バラ／＼になつたのは、滑稽で有つた、三派も三派だが、武藤君も失言が過ぎる、之を助けたる本黨も本黨だ、要するに愚劣の共進會だ、

夏の夜の感じ

夏の夜の話

近松秋江

夏の夜の樂みは數々あるが、緣日の夜の草花などを漁りながら、多勢の人込みに揉まれつゝ街をそゞろ歩きしてゐることなど殊にも興が深い。

私には、もう、今となつては少年時代の故郷の思ひ出でなどよりも、むしろ、二十年ばかり前の東京生活のことゞもが一入懐しく思ひ出でられるのである。少年時代のことは、既に餘りに遠ざかり過ぎてゐる。

二十年ばかり前に私は、小石川の小日向臺町の方の高臺に住んでゐた。そこは今日でも住宅地として好ましい處であるが、その頃は今よりも一層閑靜な處であつた。緣日は東京の街の到る處にあつて、その土地々々に住む人達の懐　みの場處となつてゐるのであるが、私には、その住んでゐた處の關係や、丁度過ぎにし昔しを思ひ出でるには好い加減の年所を經てゐるせゐか、何となく今ではその小石川の小日向臺町の下にある大日阪の大日樣の緣日のことが一番に忍ばれて來る。

私はその頃大日阪のすぐ上の處に住んでゐた。借家の庭が割合に廣かつたので、そこへ、夏草を植えたりして樂んでゐた。緣日の晩には必ず大日阪へ下りていつて、いろんな緣日物の草木を買つて來た。

桔梗や女郎花の七草を寄せ植えにしたものや、白萩のすが〳〵しい青葉の茂つたもの。それから紅芙蓉に、早い秋の待たるゝ木犀の稚木など、

さういふものを買つて來ては庭に小い花壇を造つて植えた。

それは明治三十七年の夏であつたことを忘れない。今は明治に

して勝算すると五十七年になるのだから丁度それから二十年になる。けれども、その二十年が、思ひやうによつては案外早かつたやうにも思はれる。實際經過せぬ前に思つて見るのと、それが過ぎてから後を回顧して見るのとは、主觀的に違ふものである、その二十年の間が私には殆ど浪費された歳月であつたことを惜まずにはゐられない。その二十年は私の二十から五十年に至るまでの、人生に於て最も有効に用ゐられなければならぬ歳月であるが、それが自分には殆ど無意義に費されたやうな氣持ちがしてゐるのである。

それで、その頃は、いふまでもなく恰も日露戰爭の始まつた歳であつたが、戰爭は戰ふごとに日本の勝利で、國民の意氣大ひに昂がつてゐた。私共は戰爭によつて大して影響せられる所がなかつたのも、日本が戰勝國であつたお蔭でもあつたらうか。

併し文學は尚ほ、今日の如き商賣としては盛況ではなかつたので、私などは特に一己の立場から、まだ物になつてゐないばかりでなく、一般の文筆の爲事は外觀的にあまり振つてはゐなかつた。けれども、それにも係はらず、何だかその頃の文學の方が今よりも懐しみが多いやうな氣がしないこともない。それは習質的の考へではないかも知れぬ。たゞ二十年の星霜を閲して歴史の蒼い帷の彼方に眺めるからさう思はれるのであるかも知れぬ。

否なその頃にあつては、その當時よりも、まだ史に過去の方が懐しく思はれたのであつた。何となれば、それは明治の三十七年のことで、一葉女史は二十九年に死んでゐたし、四十一年に死んだ國木獨歩の名聲はまだ十分文壇的のものとはなつてゐなかつたが、尾崎紅葉氏はその前の年の十一月かに死んだ。即ち紅葉の全盛期も過ぎ、一葉の夕顔の如く敢果ない生命も約一と昔前の語り草となつてゐた頃なのであつた。

今、夏の夜の星降る蒼空を高く見上げながら、二階の縁側に端居して涼しい風に吹かれてゐると、此等の死んだ人の事や、遠く返へらぬ過去のページに繰入れられた記憶が悲しげに、又甘い追懐となつて浮んで來るのである。

今宵は恰もうら盆の草市の立つ夜である。幼少の頃まだ故郷にゐる時分の古い習慣から、魂祭りの夜には必ず十五夜の月を何よりもの景物としてゐたなつかしい聯想を忘れることが出來ぬのである。月のないお盆くらゐ無趣味で寂しいものはない。亡き魂を祭つるには月はなくてはならぬものゝやうに思つてゐた。月とお盆とは何かしら深い關係のあるものだといふことが私の幼少の頃の頭に深く印象されてゐた。月と亡き魂の祭りと

の關係は科學的に考へると無慘といふほど沒交渉なのであるが、しかし人生は半ば詩趣を沒却するわけにいかない。人間の主觀によつて月と亡き魂との關係が夢想的に詩化されてゐるのも不思議である。殊に西行の歌などを讀むとさういふ氣がするのである。西洋の詩にもそれが少くない筈である。月光(ムーンライト)といふことは昔から最も美しい詩想を醸製してゐる。

今年の新暦七月十五日は、恰も太陰暦の六月十四日に相當るから、新暦でするお盆にも滿月が眺められる譯である。二階の緣側に端居して、やがて滿月に近い月を仰いでゐるのが、私のこの二三日來の每晩の何よりの樂みである。借家の庭に植えた竹が今年は六七本の新竹を生じて、今まさに嫩葉を開きかけたその竹が明月の影に淸風に揺らいでゐる。銀杏も、楓も、梅もどれも去年移植したにも係はらず、今年(ことし)はよく生育して日中は日光を遮ぎりて庭に綠の蔭を爲し、夜は月光を浴びて凉しく光いてゐる。たゞそれだけの眺めにも箇中に人生の消息を感ずるやうな氣がするのである。人生の悠久といふやうなことが考へられる。

今は此の邊も東京人の郊外住宅地となつて、古くからの武藏野であつた田畑や山林も開拓されて人家が倍々繁く立ち並んでゐるが、それでもまだ欅の巨樹や杉檜の老木が到る處に鬱蒼たる森を形造つてゐる。私は、今二階の緣に端居して滴るばかりの凉しい月の色を仰いでゐると、水の如く凉しい風につれて何となく、古い武藏野のそれ等の深い森陰が何となく懷しくてたらぬ。そこには私にとつて何等の因緣もあるのではないが、たゞ何ゆゑとなく懷しいものに思はれるのである、思つてみるのに多分それは、自然といふ物に對する、私の本能の中に具はつてゐる先天的の感情ではあるまいかと思ふ。人類は如何に勝ち誇つたやうなことをいつてゐても、決して自然なくしては生き得られるものではない。かうして、玲瓏たる月色を眺め、古い武藏野を渡つて來る風に肌を吹かれてゐると、何事を爲すこともなくとも、夏の夜の淸興は無限に湧いて來るのである。さうだ、何にもせずとも可い、何物をも見ずともよい。却つて喧騷の巷に出でゝ人工的な娛樂などを見てゐると、淸興を妨げられる。かうして夏の夜の月の色、歲を經た古樹の綠葉を眺め天外の淸風に面を吹かれてゐることが人生そのものゝ總勘定であるかのやうにも思はれるのである。いろ／＼な昔が偲ばれるのも、さういふ瞬間である。

西行法師の歌の中に、私の、最も幽邃の韻の通ふと思ふのは

ともすれば月すむ空にあくがるゝ心のはてをしるよしもがな

といふのがある。この歌の意味は茫漠としてゐる、如何やう

も汲み取ることが出來るのであるが、私には、此の歌が何となく私の心の中をそのまゝにいつてゐるやうな氣がする。本當にともすればである。ともすれば月の澄む空を憧れ見てゐるが、その憧るゝ心の果ては何うさまよふてゐるのか、それを知るすべもない。私の心は、空間的には何處までいつても、時間的には何時になつても、心の最後の安定する時は來ないやうな氣がしてゐるのである。さうかといつて、今必ずしも不安動搖に惱まされてゐるといふのでもない。つまり人生の窮極が到底不可解であるといふのである。併し不可解は不可解であつても、當座だけでも今心は落着いてゐる。さうして靜に月を眺めながら悠久たる人生を考へるともなく考へてゐる。又西行の歌に、

ながむるになぐさむことはなけれども月を友にと明すころかな

といふのがある。まさしくそのとほりである。かうして今夏の夜の、清い空に蒼白く冴へてゐる月の影を追ふてゐると、水のやうな冷い風が座敷に滿ちて、殆ど夜の更くるを知らない。折柄に五位鷺か何かゞ怪しい鳴く音を立てゝ、遠く大空を渡つていつた。（七月十三日夜）

夏の夜の散歩

豊島與志雄

夏の夜は、家の中にぢつと引籠つてゐる時ではない。浴衣がけか何かの輕裝で、ふらふらと出歩いて享樂する時である。

田舍のことに通じてる人は、川の魚類が夏の一夜を如何に享樂するかを知つてゐる。晝間の炎熱を水深い藻の間に避けてる。類は、夕映の光が次第に薄れて宵闇が地上を包む頃になると、水面近く泳ぎ出して、僅かな水の流れを逆つて彷徨する。小さな水口から淺い田の中にはいり込んで、泳げる限りの範圍を冒險したり、または川の淺瀬へ淺瀬へと志して、片泳ぎをしながら躍りはねる。そして樂しい饗宴の一夜の後、黎明の光が東の空を染める頃になると、みな一齊に川の深みへ戻つてゆ

く。そしてそれは、單に川の魚類ばかりではない。海の魚類も同様である。否、魚類ばかりではない。叢間に、籔の中に隱れてる螢は、夜になると光を放ちながら飛び廻る。いろんな羽蟲は人家の燈火をしたつて飛んでくる。毛蟲は盛んに青葉を食ひ荒す。そして地下深く潜んでる土龍までが、地面へむくむくとはひ出てくる。蝙蝠が飛ぶ、梟が鳴く。犬が物影をうそうそと嗅ぎ廻り、猫が屋根の上で戯れ、鼠が天井裏で騷ぎ立てる。鬼火までがふわりふわりと飛ぶ。そしてこの夏の夜を、自分の巣の中にぢつと引籠つてゐなければならないのは、夜に眼が見えない動物――人間其他――ばかりである。もし彼等が夜も眼が見えるやうになつたら、夏には恐らく、晝間が休息の時となり夜が活動の時となるかも知れない。

それほどに、夏の夜は何かしら蠱惑的で、生き物の心を唆い大氣の中へと誘ひ出す。

その誘ひに身を任して、私は友人と一緒に、都會の一夜を彷徨したことがある。變に人なつかしい爽かな氣持だつた。私達は先づ或る日本料理店で夕食をして、一二本の酒に陶然となつて、それから氣の向くまゝに歩き出した。歩いてるうちに、何處へでも知らない家へ飛び込みたくなつた。見當り次第の撞球場へ立寄つて、初對面の人達と冗談口を利き合ひながら、一時間ばかり遊んだ。次には非會所へ寄つて、また一時間ばかり遊んだ。喉が渇いたので、カフエーに寄つて冷いビールを飲んだ。飲んでるうちに、友人は變な微笑を浮べて懐を叩きながら今日は金があるぞといふことを私に知らした。私は首肯いた。それからまた出かけていつて、新たに日本酒を飲み直した。が客相手専門の妓達ではさつぱり面白くなかつた。いゝ加減に切り上げて、さてこれからどうしたものかと街路に佇んだのである。

「どうだい、實際變挺な氣持ぢやないか。滿ち足つたやうなまた滿ち足りないやうな、嬉しいやうなまた悲しいやうな、丁度擽つたい夢をみてるやうな感じぢやないか。つまり、きちんとした折目正しい社會をぬぎすてゝ、裸一つになつたやうなものだね。……實際不思議だ、星の光つてる暗い夏の夜と、いゝ加減廻つた酒の醉とは、かうも人の心を和げるものかしら。何だかかう大きな群集、人間の群、さういつたものにぴつたり寄りかゝつて、下らない見榮や羞恥を振ひ落したやうな心地だね。今晩はと通りすがる人に一々挨拶をしたくなり、如何です、と一軒一軒立寄つて、お茶の馳走にでもなりたい、さういふ廣やかな和らいだ親しい氣持ぢやないか。」

そんなことを話し合ひながら、私達は或る廣い四辻に出たの

だつた。何處もこゝも隅々まで明るく華かだつた。店々の飾窓がきらきら輝いてゐた。大勢の人が、實に大勢の男女が通つてゐた。その街路の地面を見渡して、私は實に聲を立てんばかりに驚いたのである。一面にアスフアルトで平らに堅められた街路の上に、輝く水を撒かれて拭き浄められてる街路の上に、何と無數の人の素足が咲き出してることだらう。貝殼のやうな爪、死んで黒ずんでるのや、生々しい赤味を見せてるのや、眞白に磨き立てられてるのや、それらがみな貝殼特有の光に輝いてゐる。それを先の方にちよこんなんとつけて、五本の指が、大さいのから順々に、小さいのほどくるりと彎曲して、綺麗に並んでゐる。そして背後には、まんまるい踵が、くりくりした滑かさを見せてゐる。それらの素足が、すつすつと街路の上を踊りはねて進んでゆく。何といふ綺麗な足の亂舞だらう！……氣がついてみると、若い女の白い足が多かつた。

それにしても、不思議なことには、その時私は田舍の景色を思ひ出したのだつた。遠い山奥から何千年もかゝつて流れ下りてきて、まん圓く綺麗に磨かれ洗はれた拳大の石が、白く一面に並んでる間に、月見草の花が見渡す限り咲いてゐる。或はまた、永劫にくり返される波の戯れに洗はれた、白いさらさらとした眞砂の上に、一面に月見草の花が咲いてゐる。一寸した心の持ちやうで、川原になつたり砂濱になつたりするけれど、月見草の花だけは眼の屆く限りをその黄色で埋めてゐる。

「ねえ君、都會の街路には女の白い素足の花が咲くし、田舍の川原や砂濱には月見草の黄色い花が咲く。白い素足と黄色い花とは、夏の夜の名物だね。」

そんなことを云ひながら私達は歩き續けた。喉が渇くとカフエーに寄つて冷いものを飲んだ。夜が更けて電車も人通りも無くなつたが、しつとりとした夜氣は爽かだつたし、星はきらきら頭の上に光つてゐたし、なかなか家へ歸る氣になれなかつた。ふらりふらりと歩いてゐると、巡査が變な眼付で見送るのだつた。

「おい、何處でもいゝから、知らない家を叩き起して、どうしてさう早く寢るんですかと聞いてやりたいね。外はいゝ氣持ですよ、全く、寢るのは惜しいくらゐにいゝ氣持ですよ、お茶でも一杯飲んで、出かけようぢやありませんか、とそんな風にね。……考へてみると、夏の晩に泥棒なぞをやる人の氣が知れない。夜更けの街路をかうして歩いてゐると、泥棒なんかする氣にはとてもなれないぢやないか。知らない人の家へむやみに飛び込んでみたくはなるが、それも物を盗むためにぢやなくて、今晩は、と聲をかけるためになんだ。」

―その壁が、しいんとした街路につきぬけて、何處へともなく見えなくなつてしまふ。星がまたゝいて、少し冷々とする空氣が流れだして、物影がむくむくと動き出してきさうだつた。何か怪しい不氣味なものが、人に代つて夜半の街路を彷徨し初める頃だつた。

「夏の夜のお化は、お化のうちでも一番開化した善良な奴に違ひないよ。」

そして私達はなほ歩き續けたのである。

夏の夜の思出

宇野浩二

數年前の或夏、寄席でのことであるが、小南であつたか、右女助であつたか、大阪出の落語家が、話の枕で、暑い暑いといつても東京の夏は大阪の夏から思ふと極樂だ、東京では、暑い暑い、暑くて今夜は眠られないといふ晩は、夏中合はしてせい〴〵一週間ぐらゐなものだ、大阪では、その反對に、今晩は少し樂かなと思ふ日が、一週間あるなしだ、といふやうな話をしたことがある。如何にも落語家らしい言ひ方だが、實際、大阪で一夏暮したものは必ずこの言葉に同感するに違ひない。まして、私などのやうに、二十年近く大阪の夏に遭つて來たものには、東京で夏の時候に不平をいふことは出來ないやうな氣さへする。それにつけても餘程大阪の夏が身に沁みて苦しかつたと見えるのである。

いつも思ふことであるが、寒暖計の感じ方と人間の感じ方とでは、屢々大變違ふことがある。現に、毎日の新聞の各地濕度表といふのを見ると、大阪と東京とではそんなに變らないやうに見える。實際、一方が晴天で、一方が雨天といふやうな違ひがない限り、同日同刻の東京と大阪との寒暖計の目盛は殆ど同じに違ひない。それが一方が比較的しのぎよく、他方が暑苦しく感じられるのは、大方風のあるなしに拘るのだらう。現に、私は去年の夏も、今年の夏も、或三階建の下宿屋の一間を借り

て暮してゐるのであるが、私の部屋はその家の一番階下にあつて、外に私の友人がそれ〲同じ家の二階とか、三階とかの部屋に住んでゐるので、或時退屈なまゝに三個の寒暖計を買つて來て、初はそれ等を一つの部屋において見て、それの感じ方が正確に平均されて居るのを確めてから、一階、二階、三階、とそれ〲友人の部屋に配つて見た。といふのは、元來私の部屋といふのが、これまで冬は寒い上に、殊に夏の暑さが堪らないといふので、一週間と居附いた住み手がないといふ位、暑苦しいので定評のあるものだつた。それに引きかへ二階の友人のそれは、彼が何ケ月かそれの空くのを待ち兼ねて、やうやく籤を引當てるやうにして得たほど、涼しいといふので、特別扱ひされてゐたものである。が、その部屋は涼しいといふことの外に床の間の立派さとか、窓の具合とか、位置とかが上等でもあるからだが、もう一人の友人の三階の部屋といふのは、位置が少し不便なのと、疊數が六疊半といふやうな端數でもあり、押入などの具合も惡いので、二階の友人のそれ程上等ではないのだが、高い場所の東南の角になつて居るので、どういふ方角の風でも窓から窓に吹き抜けるために、涼しいといふ點では家中で第一等といふことになつてゐた。――それ等の三つの部屋にそれ〲寒暖計を置いてためして見たところが、その違ひの等級は一度、一度半、二度といふ差で、私の部屋が一番溫度が低くて次が三階、一番高いのが二階であることを發見した。

それは、そんな風にして、二三日つゞけて試驗をして見たのであるが、先にいつた順序はいつの時でも變らなかつたに拘らず感じからいふと、私たちばかりでなく、私たちの部屋に出入する客たちにしても、或は宿の女中たちにしても、みながみな、やつぱり私の部屋が一番暑いといふことには意見が一致するのであつた。もつとも、その部屋の主人である私だけは、―いや、それは感じは暑く感じるとしても、本當は寒暖計の示す通り、僕の部屋の方が溫度が低いといふ感じはあるぢやあないか。つまり諸君の部屋はそれが風の訪問でまぎらされてゐるだけなんだよ、僕はやつぱり僕の部屋が一番住み心地がいゝね、と負惜みをいふことは徹回しないのである。

大阪と東京との夏の暑さの違ひから、小學生のやうな寒暖計の話に陷ちたが、兎に角、東京の暑熱を柔げるものは風であることだけは間違ひないだらうと思ふ。まつたく、東京は日中でさへ風のない日は珍しい。そこへ行くと、大阪は日中はおろか夕方になつても風に見舞はれることはない。それどころか、感じからいふと、夕方になると晝中の暑さが悉く地上に沈潜して町全體を釜の中に入つたやうな蒸し暑さに陷れてしまふ。殊ら

町中に堀割があつたとしても、それ等の堀割の橋の上に立つても、殆ど微風さへ感じられないのだからたまらない。私の子供の頃には、それ等の橋の上には、欄干に沿つて腰掛を並いて、橋の中央に屋臺店を張つて、氷屋が出て居た。浴衣がけで、團扇などを手にして通る人を、水色の法被を着た氷屋の小僧が、「氷氷」と呼びながら「まあ、お掛けやす、お掛けやす」と呼んでゐた。多分、あんなものは往來の邪魔になるので、その後禁止になつたのだらうが、大阪のやうな、あゝいふ暑い町では、あゝいふ氷屋の存在は、何とか都合して許してやつたらよからうと思ふ。

こんな風にはいふものゝ、そんな暑苦しい大阪にゐる時から私はそんなら夏の間もつと涼しい田舍へでも行きたいと思つたかといふに、先づさう思つたことはなかつた。といふのは、私にとつて夏の田舍生活で最も閉口するのは、蚊といふ虫である。日が暮れて、あの虫が身邊に飛び廻つて來ると、私は少々涼しくても我慢がならない。私はそれが自分の我儘の出來るところなら、早速蚊帳をつつてその中にもぐり込む外に方法を知らない。大阪市内にも蚊のゐるところはあるだらうが、私が住んでゐた宗右衛門町邊にはゐなかつたので、私はあそこに住んでゐた間、あの暑苦しい町の夏を不平なしに送つた。私にはあれよりも涼しいところへ行つたら卽ち蚊がゐると考へたからだ。どんなに暑苦しさとでも、私には蚊と交換すること、出來ない。(今、私の家のある上野櫻木町邊には大分ゐるやうであるが、私はそこへ寢て歸るだけだから、餘り苦しめられた覺えはない。)

蚊ばかりではない。私のやうな氣質のものには、田舍の夏の夜など、その退屈さ—どんな風に過ごされるものだか、想像がつかない。前にいつたやうに、私だと蚊のために、日が暮れると蚊帳の中にもぐり込む外にする事を知らないから、さてその上は本でも讀むか、物でも書くか、今一つは寢るかしか手がない。もつとも、そんなことは、何も蚊の出る夏に限つたことはなく、秋でも冬でも同じではあるだらうが、何れにしても都會の夏の夜の素晴らしさは言葉の外である。

さつき大阪の夕凪のことを話したが、夕凪で驚いたのは長崎のそれである。もつとも、大阪ではそれが名物とまではなつてゐないやうだが、長崎ではそれが特別の名物ださうである。それは多分あの町の地勢に依るのだらう。まつたく、ちよつと見ても、三方山に圍まれたあの町の恰好は盆の底のやうである。三方ではない、殆んど四方山といつていゝだらう、海に通じてゐる港に外海から川のやうに屈折して入り込んでゐるだけだか

ら。それは三四年前のことになるが、五六人の友人と、外國通ひの船が橫濱から長崎までの間だけの遊覽客を募集したことがあつて、それに團體旅行のやうにして出かけた時のこと、船が長崎の港を入つたのは日の暮の頃であつた。急に蒸されるやうに暑くなつたので、私たちは驚いた。しかし、それは今まで大海の上を相當な速力を出して走つてゐた船が、次第に速力を緩めて、而もかういふ川のやうな狹苦しい港の中に入つたので、急に暑さを感じ出したので、少し落着いたらそれ程でもないだらうと思つてゐた。船の欄干にもたれて、初めて見る港町の方を眺めると、人も知る如く、あの町は海岸に迫つた山に圍まれてゐるので、丁度家々が雛段のやうに重なつて見える。だからその全體は、まるで途方もない大きさを持つた、三十階も五十階もの家のやうにも見える。そしてそれ等の家々の部屋といふ部屋が、悉く戶障子を開け放つてあるので、それ等の部屋々々に點つてゐる電燈が、海の上からしても裸で見える。(後になつて考へて見ると、それ等のどこの家の部屋といふ部屋も、悉くお茶屋かなぞのやうに開け放してあつたのは、卽ち異常な夕風の暑さのためだつたのだ。)だが、その眺めは素晴らしく美しい。殊に無味な海を渡つて入つて來た船の客たちの目には、その景色は一段と美しく見えるのだが、それを見て喜んでゐる私たちは、いつの間にか身體中汗びつしよりになつてゐた。

無論、船から上つた町の中の暑さは一層だつた。これはとても大阪あたりの夕凪の比ではない。眞に言葉通り釜の底で蒸されてゐるやうな暑さだ。けれども、そんな暑さの中でも、遊廓のある邊の夜の雜踏の美しさは中々愉快だつた。それにしても、この町は南國だけに、晝間の暑さも又格別であつた。日の色さへ東京などとは違ふやうな氣がした。が、晝間は大阪などと違つて、海からの風が吹いて來るので、夜分よりもずつと凌ぎよかつたやうに思ふ。よくは知らないが、夕方になると、この町では陸上の溫度と海上の溫度とが平均してしまつて、風がぱつたり止まつてしまふとかいふ話を聞いた。まつたく、夏の長崎には腐り腐りした。

話が又大阪に戾るが、今から十年餘り前の夏、私はまる一と夏大阪で暮したことがあつた。學生の時分で、暑さなどそんなに苦にしなかつた。もつとも、私は今でもそんなに暑さを苦にしないが、その頃のことで、今でも覺えてゐるのは夜のカフェーのことである。その時分、晝間はどうして暮してゐたのか、今は殆ど記憶にないが、夜になるのを待ち兼ねて表に飛び出した。カフェーといふものが未だ珍しい時分で、そこの扉を入るものは、一部分の學生とか、藝術家とかに限られてゐるといつ

てよかつた。殊に大阪のやうな土地であつて見ると、尚一層カフエー向きの客といふのは少なかつた。稀に物珍しさうに入つて來ても、珈琲でなしに、「ミルクがおますか？」などと、あたりを憚るやうに女給に聞いてゐるやうな種類のものだ。だから私などは、こゝこそ自分たちのために出來たものゝやうな氣がして、一杯か二杯の珈琲で、二時間も三時間も一つの卓子を占領してゐるのが自慢であつた。

そんな風だつたから、晝間のうちからそこに坐つてゐたことも珍しくない。珈琲ばかり飲んでゐたから、食事時間が來ても腹が空かなかつた。カフエーの廣間の正面に、大きな掛時計がなかつたら、恐らく何時であるかさへも知らずに暮したたらう。が、たとへばそこに晝間から坐つてゐる時だとすると、夕方になると、それの知らせのやうに、突然音も何もしないで咲つと電燈がともる。電燈のつくのに音のしないのは當然だが、さういふ盛夏の午後五時か、六時頃か、ほんの少しだが濕度も下り、往來に打水をする氣配がし、女給たちが思ひ思ひに化粧して彼等の溜りに顏をそろへる頃合に、何かの合圖のやうに、ぱつと電燈のつく快さは、形容の言葉の外である。何でもその夏七十日ほどの間、私は一日も缺かさずそのカフエーに出かけたものだつた。即ちそのカフエーが大阪最初のカフエーであつたから、私は大阪最初のカフエーの常連であつた譯だ。

そのカフエーは如何にも大阪流だつたことには、徹夜營業であつた。私は屢々そこで徹夜したことがある。晝間とか、宵のうちとかなら、卓子を挾んで退屈な私の話相手になつてくれる友人を得ることは容易だつたが、夜の十二時が過ぎると、それはあきらめなければならなかつた。いふ迄もなく、一番賑はふのは宵の九時から十時の間で、十二時近くになると、目に立つて客足が少なくなる。そして十二時の合圖で、大勢の女給たちの八分まで姿を消してしまつて、後は當番の三人の女給たちとそして客は私の外に、それでも二三組が殘される。それが一時になると、女給は二人になつて、客は大抵私一人になる。すると、その二人の女給は退屈と眠氣を防ぐために、料理場の方からフオークとナイフの類を持ち出して來て、それを磨き粉で磨く仕事を始める。私も退屈と眠氣を防ぐためにそれを手傳ふのである。そして、いつの時でも私が最も多くのフオークとナイフとを磨き上げた。二人の女給のを合はしても五十本とすると、私一人で八十本位の割合で……。

すると、二時頃になると、必ず申し合はしたやうに十二三組の男女の客が別々に入つて來るのが常であつた。それはそのカフエーの位置が色町に近かつたので、それ等の家々の客と女た

ちとが、暑い大阪の夏の晩を、眠り兼ねてやつて來るものに違ひなかつた。そして、それ等の客の姿が消えて、やがて二時半の聲を聞くと、それから朝までは、先づ一組の客もなかつた。しかし、さすがの大阪の夏も、この時刻になると爽かなほど涼しくなるのである。ところで、私がそんなづぼらな夏の夜を送つてゐた時、この二時半以後に二三度そのカフェーの扉を開けて入つて來て、私初め、居眠りしてゐる女給を驚かした人間が、あつた。それはK——といふ日本畫家だつた。彼の方から私に話しかけて、「あなたは變つてますね、」といつた。けれども私より彼の方がより變つてゐるのは、その服裝であつた。彼は畫家流に長く延ばした髮の毛の上に、西洋婦人の帽子を被つてゐた。その帽子のリボンは紅色で、その端にどういふしやれだか、二三箇の人形の首が結びつけてあつた「どうしてゞす?」と私が聞くと、「だつて、朝から晩まで、といひたいが、こんな夜中まで、いつでも同じ所に坐つてるなんて、えらいですなア、まつたく。」「しかし、今時分このカフヱに入つて來るお客といふのも君だけですよ。」「いや、お互に時間を潰すのに困る連中ですな、」といつて彼は笑つた。私も苦笑した。

彼がいふには、「どこへ行くのも退屈だし、暑いし、眠れないし、——あなたはこゝでよく徹夜するさうですな、——僕は電車で徹夜するのが好きですよ。」

「電車の徹夜乘りは驚いたな、」と私は叫んだ。「なる程、大阪には徹夜電車があつたんですね。」

「電車の窓で夜明けを迎へると、ちよつと長旅をしたやうな氣になりますよ。」

そんな話をしてゐる時、ふと表の通を牛乳屋の車の走る音がしたので、私たちは何の意味もなく、その方を見ると、カフエーの籐張りの扉の外の往來が、ほんのり白んで見えた。夏の夜が明けて來たのだ。

「あゝ、夜明けの話をしてゐたら、もう夜が明けましたね、」といつて、私はK——と一緒に用もないのに往來に出て、東の空を眺めた。實にいゝ氣持だつた。——

だが、こんな風に書いて來ると、小說の領分に入るので、擱筆する。(七、十)

夏の夜

正宗白鳥

讀書や執筆には秋の夜がいゝ。冬の夜もいゝ。しかし夏の夜はいけない。遊ぶためにも私は夏の夜を好まない。晝間は海水浴でも出來るからいゝが、夜は田舎ではどうしようもない。夏の夜の銀座の散歩はいゝことに私もかつて極めてゐたが、それも空想裡の興味で、實際はさほど面白くはなかつたのである。夜の色で誤魔化された埃つぽい汗くさい街上をうろついて、あちらこちらのカツフエーで、ソーダ水やアイスクリームを飲んで腹を冷して翌日の食慾が減殺されるのを例としてゐた。

私が夏を嫌ふのは暑氣のためよりも、蠅と蚊がゐるためである。昔の東京には蚊が殆んどゐなかつたから、その點は田舎よりも暮しよかつた。大磯の蚊はたまらない。晝は蠅のために午睡を妨げられ、夜は蚊のために惱まされる。こんな所へ避暑に來る人の氣が知れない。私は一夏輕井澤の高原で暮して、四圍の風物を喜んだのであつたが、たゞ牧場があるためか蠅の夥しいのと、夜は明りを慕ふいろんな蟲に襲はれて窓が明けられないくらゐなのに閉口した。

今年は震災によつて土地が汚されたゝめか、大磯の蚊の多いこと恐るべきものである。これにつけても、私は故鄕の夏が思ひやれる。少年の頃、釣ランプの下に大勢の家族が膳を並べて、蚊遣火で家ぢゆうを煙らせて食事をしてゐたことが思出される。軒先には蚊が物凄い群をなして唸つてゐる。納涼臺を出して隣人が寄合つて世間話をするとか、七夕祭盂蘭盆會など風流な年中行事があるとか云つても、夏のわが故鄕は住みいゝ所ではない。

牛込の矢來や天神町に住んでゐた頃は、中央公論の秋季附錄號に、可成り長い物を書くのが、私の暑中の重大な仕事であつた。身體も今よりは弱かつたので、暑中の執筆の苦しさと云つたらなかつた。一杯の牛乳一椀の飯くらゐで露命をつないで、この苦役に從事してゐた。そして、夕方からブラ／＼神樂坂あたりへ散歩に出掛けるのを例としてゐたが、その頃は、氣

持のいゝカッフエーなどはなかつたので、たゞのミルクホールで、冷たい牛乳か、味も香もない紅茶ぐらゐを飲んで、夜店などを覗いて歸るだけで、さしたる興味もなかつた。仕事が濟むとガツカリして胃腸の病氣に罹るのを毎年の例としてゐた。

牛込時代の夏さういふ苦しい仕事をしてゐる間に、多少、疲れた心の慰藉になつたものは、神樂坂の散歩よりも小川未明訪問であつた。未明君はその頃私の近所に住んでゐた。私は風通しの惡い平家を借りてゐたが、彼れは、家は粗末でも、二階を書齋としてゐたので、そこからは小石川の方を見渡されて空氣の流通がよくつて涼しかつた。私は、自から夏の自然を樂む心は薄かつたが、彼れは都會の陋巷に住してゐながら、天上の星を語つたり北國の山川を追懷して、感興に耽つてゐた。すると不意にまた文壇を罵倒し、書肆や雜誌社を罵倒して止まないことがあつた。私はいつも快く聽いて相槌を打つてゐた。そして、いくらか胸がすいて頭が輕くなつたやうな氣持で家へ歸るのであつた。近年の未明君の書いたものを讀むと暑くるしい感じがするやうだが、あの頃の彼れは涼しかつた。先日、ふと早稻田文學を開けて、「河水の話」といふのを讀んで、私は久振りに、昔の未明君に接したやうな氣がして、懷かしさを感じ涼しさを覺えたのだか、今、わが過去の夏の夜を思出すにつけ、あの天神町未明舊宅の二階が、わがための避暑地だつたことが思出された。

夏の夜です

佐藤春夫

おもちやのやうな物干へ出て、花散りうせた薔薇の鉢を、もつと夜露のかかるところへ置きかへたのです。
薔薇は皆蒼白色の夜開花種でなくては駄目です。

蓄音機に新内の明烏をかけ
男なみだをはらりとながし

といふところを二へん開くのです。
アメリカ人のバカ。
緣側の甲板椅子のうへで、ぼんやりと、女をつれてゴンドラへ乘つてみたいと思つてゐる男がゐます。
堀口大學の研究報告だと、
　銀河は裸でねころんだ天女です
といふことです。
裸でねころんだ地女を鏡のなかに見たいといふは誰か子ぞ。
夏の夜だけ生きて歌ひに來る蟲は、ひよとすると人間より悧巧かもしれません。
セクスピアはまことの詩人です。だから「眞夏の夜の夢」を書いたのです。

緣日

長田秀雄

「今夜はお富士さまの緣日で御座います。」と、云はれたとき、私は、ふと幼年時代の事を思出した。
神田で生れて、富士見町飯田町と麹町の裾野の方を引越して歩いてゐた私の幼年時代には、中坂の緣日、神樂坂の毘沙門さまの緣日、二七の不動、五十の稻荷と、每月緣日の夜を樂しんだものであつた。
烏兎匆々、それから三十年の月日が、知らぬ間に流れて、私も何時か中年の男になつてしまつた。每朝鏡に向ふと、鬢に白い毛が二三本宛見付かるのである。
青年になつて、ちつとも緣日なんかに出かけなくなつてゐる内に、時勢は刻々に移つて、緣日そのものも、何時か段々さびれてしまつた。殊に昨年の大震災以來、さう云ふ舊時代の面影

は、一時に影をひそめてしまつたやうである。たまたま、芝とか、牛込の奧とか、今度、私が引移つてきた駒込あたりに來ると、まだまだ、緣日と云ふやうな舊い江戶の情景が、物淋しく殘つてゐる。

小供の時分、母につれられて見に行つた芝居の記憶の中に、「春で朧ろで御緣日。」と云ふせりふの文句があつた。それが妙に頭に殘つてゐる。

成程、春の朧夜の緣日も、情趣の深かい物ではあつたが、然し、私は緣日は何となく夏の夜の物と云ふ氣がしてならない——晝間の苦熱を忘れて、カンテラの油煙の毒々しく立上る露店の前に立止る涼みがてらの老若男女の浴衣姿が、幼時の記憶の中にハツキリと現はれてくるのである。

東京の夏の夜くらゐ、凡そ、情趣に富んだ物はあるまい。行水をしまつて、アツサリと化粧した娘たちや、若い夫婦が、尺八の音の澄み切たる街の通りを、ぞろぞろと出歩く。兩側の店先からは、明るい電氣の光が、太い縞のやうに街の闇へ映してゐる。駒下駄の響、露店商人の物賣る叫び、人々の笑ひごえ——さう云つた物が雜然として、一種の律をきさんでゐる。この頃の銀座や、人形町あたりの夏の夜の賑はしさは、昔の緣日の夜のやうである。

たゞ、緣日にあつたもので、今、夏の夜のそゞろ歩きに見る事の出來ない物は、小屋掛の見世物である。

ろくろ首の娘の見世物や、大蛇や、一寸法師や、さう云つたたぐひの物が、よく緣日の夜を賑はしてゐた。今思へば、その荒唐な江戶人の趣味すら、なつかしいきはみである。

私が駒込に引越してきたのは、丁度、五月の末であつた。六月に入つてからの晴れた日の事であつた。私の家の女中が、夕方、

「今日はお富士さまの緣日ださうで御座います。」と云つた。

「緣日とは珍らしいね。」と答へた私は、はじめに書いたやうに幼年時代の事をなつかしく思出したのであつた。丁度その晩は暇だつたので、つひ行つてみる氣になつた。

ぶらりと家を出て駒込橋行きの電車通りをまたぐと、すぐお富士さまだつた。

大きな月が、もう上つてゐた。

お富士さまの境内から往來にかけて、貧しい露店が、一パイに店をならべてゐた。カンテラの赤黑い光が、空に仄つと映つてゐた。

はうづき屋、金魚屋、植木屋、川賣りと云ふやうに、そこに並んだ露店のまわりには、人が一パイ立つて、てゐた。

境内へ入ると、そこにも人が一パイ往來してゐた。お富士さまと云ふからには、淺間神社であらうなどゝ考へながら、神前へ行つてみると、つつましやかに合掌して、何か口のなかで祈念を凝らしてゐる四十あまりの丸髷の女が、高い響をたてゝ銅貨を賽錢箱の内に投げた。

晴れた空は、水のやうに澄んでゐた。仰いでみると、星が大きく瞬いて、銀河が、斜めに仄白く流れてゐる——私はしみじみとした氣持になつた。

表通りをけたゝましく通る電車や自働車の響もこの樹立の多いお富士さまの境内からきくと、何となく他國の聲のやうである。

默々として歩いてゐた私は、何時か、境内から出て、立並ぶ夜店の間をぶらぶらしてゐた。

私は自分の少年時代の回想の中へ入つてゆくやうな不思議な氣持で、少時の間、夏の夜の緣日の情趣を味はつた。

かうした舊時代の面影を忍ばせてくれる物も、やがては全たく見えなくなつてしまふであらう。そして、新らしい東京は段々鮮明に、その石と金屬と電燈の光線とで飾られたカツチリした姿を現はしてくるであらう。

刺青夜曲

竹久夢二

「夏痩とばかりにつつむ涙かな」といふのは、彼の方から見た夏の夜の情景で、彼がむくつけき男であればあるほど好い。

ぼくはいま病後の床のうへでこの文章を書いてゐる。

「たいへんお痩せになりましたよ」と病氣の最初の日にたまたま訪ねてきた人に言はれて、あわてて頬を撫でながら、うつかり「夏痩です」と言ひさうな自分を憫みたのは、その人達が若くして美しかつたのに因るのだが、むくつけくしてむさくるしきぼくが夏痩をしたと書いても夏の姿にはなりかねる。思ふに夏

は、わけても彼は、野蠻で强健であるべきだと思ふのです。

芝居の福岡貢にしても、優男でありながらなほかつ原始人の勇氣を持つてゐる。

ここまで書いてきて、やつとこの文章に何を書くかに思ついた。病氣の最初の日などの因緣をつけて、お客樣まで引張り出したわけは、その折はづんだ、盆踊の話をここへ書く下心だつたのです。

夏の雜誌のメンタルテストの答案として「世界諸國の踊」のことなど面白くはないでせうかと、雜誌に關係してゐる人でもあつたので、その方に言つたものです。

四五人に月落ちかかる踊りかな

といふ古風な地方の風俗畫をちよつと書いて見たい氣がしたのですが、福岡貢だとか、鈴の樋三だとか、「夏祭宵宮賑」の白瀧佐吉、「夏祭」の團七とかいふ人物がおもしろくなつたわけです。

夏になると人間が野蠻になつたり、原始へのノスタルジイを持つのが愉快です。芝居で見ると、彼女の方は兇惡であつたり、草木の精であつたり、美しいくせに妖艶かぎりないのも、夏で好い。

五月六月の夕方は、ほの青くやさしいが、八月九月となると、爆發せずにはゐたいやうなものがいたるところに感じられる。

明るい方へ、灯の方へ、群集の中へ、みんなよつてくる。

せせらぎの水よりも瀑布。靜かな太古の淵よりも、ゴホのタッチのやうにぎらぎら狂氣じみた海の方へ。湯島天神の高臺よりは富士山、富士よりはアルプスへと、人間は引かれてゆく。

自殺や殺害の多いのもこの二月だといふが、夏の喧嘩を見てゐると、石だたみの浴衣を七三に三尺で前結びにした輕快ないでたちに拘らず

「やい喧嘩か」言つたかとおもふと、御苦勞にも左膽はおろか、すぐ眞裸體になつて威勢を示すのも夏の景色だ。彼の二の腕に、命(いのち)・「(かぎ)・●(わん)・おみき、と刺靑してあるのを見る。强きものとやさしきものとがいみじき諧調をなしてゐるのも夏の音色だ。文化と野蠻とが調和しないでゐるのも面白い。ハルモニイよりも、コントラスト、夏はすべて縞目が荒いほど美しい。

暗か光か、火か水か、黑か白か、善か惡か、添ふか切れるか、殺すか生すか。

ついついついとのぼりつめ、はつと亂れて散つて、果敢なく消えても、はかないとも何とも思はない花火のいさぎよさも夏だ。

さあ、とりとめのない自由詩の如きものになつてしまひました、これは。

「夏祭浪花鑑、長町裏の殺し場」を一幕見たくなりました。

平舞臺奥一杯に祭燈の幟など立てる町家の書割。上手に釣井戸。下手舞臺端に泥池、祭禮の鳴物にて幕あく。獄六の義平次猾のあとより大急ぎでついて出る。吉右衛門の團七九郎兵衛、柿色の大格子の蕎附にて追かけて來て「親父様この女子は歸つての通り大事な預人、それを連れてゆかうとは。また惡侍にたのまれて惡企さつしやるな」と諫めにかかるが「琴浦をちよろまかしたは、惚れてゐる佐賀衛門に渡して大金にする氣ぢや」と言つて總の女を渡さない。團七が石塊を懐へ忍ばせて金と見せかけて女を取戻す、欺れたのに氣がついて義平次は團七の額を雪駄で割る。右の指先をあててみると血がついてゐるので、ぶつとなでふき「こりやこれ男の」で右足をふみだし「頭を割つたな」「割つたが何とした、何だ、刀をぬいておれを切るのか、親ぢやぞよ親ぢやぞよ。」「親ときいて團七が二三歩飛び下ると「さあ切れさあ切れ、切つて貰はう親ぢやぞ」

おりおりと油の煮へるやうな、しかし寂とした眞夏の書だ。

もみ合つてゐるうち、義平次が刀をぬいたので團七が、危い危いと止めやうとして親父の肩先を過つて切る。「人殺しだ親殺しだ！」と四山にわめくとこへ、祭の鳴物が近づいてきて、團七の心臓を不安と暑さの絶頂にふくらませる。ふくれ上つたものがつひに破裂すると、執拗な陰慘なしかし實に呼吸を殺したひそやかな眞夏の風景だ。泥と血にまみれた二つの動物がぬたくたと匍ひまわる奸い插景だ。舞臺も見物も、暑さを忘れてうつとりとしてゐるところへ、また祭の鳴物をきつかけに遠見の花車が練つてくる。後から神輿がやつてくる。

「わつしよ、わつしよ」

ぐつたりした團七の心臓がまたふくれだす。

「わつしよい、わつしよい」

團七は親爺の死骸を池の中へ投げこんで、大勢の中へ交つて

「わつしよい、わつしよい」

と行かうとすると、池の中へ片足すべらすと、どうと本釣が鳴る。中をのぞいて

「惡い人でも舅は親、親父様、ゆるしてくだんせ」さう言つて團七はまた大勢のあとから、

「わつしよい、わつしよい」と手拍子をとりながら、よろめきながらゆく。（幕）

八月の夜の空

小川未明

すべての物が、流轉し、生滅するうちにも、人生を、思へばまことに頼りがたいのを感じます。一年のうちで、樂しみの多かつた、夏も、やがて逝かうとするのでした。圃には野菜が實り、花が咲いて、どこを見ても、葉や、枝が、活々としてゐたのも、全く、夢であつた。落る時の近きを感ずるのであります。

蟬は、頻りに林に鳴いて、日毎に、野を越えて、西方の地平線に、燃えながら沈み行く夕日を戀ふるが如く、惜しむが如くきかれ、また、蜻蛉や、蝙蝠は、夕空に、飛びまはつて、昨日の眺めと、少しの變りはなくとも、夜に入れば、獸々の間に、遊星の今宵はすでに遠く場處を換へてめぐつたのに氣付くことがあるのでした。

八月の夜の空は、一年の中で、私に、一番感慨の深さを覺えさせるのであります。

すべてが夢であるといふ、なかにも、二三年前の夏までは、生きてゐられた祖母が、もう、この世界の何處にもゐなくなり、また、一昨年の夏の頃は、いつしよに蜻蛉を釣つたり、夕暮方、かくれんぼなどをして遊んだ、仲のよかつた友達が、僅かに一夜病んで亡くなつてしまつた。そして、それ等の人々の魂が、雲に乘つて、淨土から、遠く、歸つてゐるといふのは、またこの月であつたのでした。

なんといふ、悲しい、また、なつかしいことでありましたでせう。

お精靈樣が來られるといふので、私達は、圃になつた、一番大きな南瓜や、胡瓜や、また紫色の茄子まで、初なりのいゝのは、殘して置きました。それ等は、佛壇に飾る、佛の乘つて來られるといふまた、お伴をするともいふ、牛や、馬を造るために、もう一つには、煮て供へるためでもあつたのです。

もろこしや、ほゝづきや、盆花なども、盆の前から、なるたけいゝのを取つて置きました。田舍は、一月おくれの、八月に盆祭りをするのでした。ほゝづきは、もう赤く色づいてゐまし

た。

いよいよ明日は、お精霊様がお出なさるといふ十三日の朝は、星の輝く、まだうす暗い暁から起きたものです。そして、太陽の出ないうちに先祖代々の墓がある、山の麓の墓地へ迎へに行つたのでした。

稲の花の香りが、露つぽい小道を歩るいて行く時に、白く霧のかゝつた中から流れて來ました。小川には、水の面に、淡く、さめかゝつたやうに、高い空の清い星の影が映つてゐます。そして、五月雨前の鬱陶しかつた頃の、びろうどのやうな、なまめかしい、暗い夜に燐の火のやうに、點つた、可愛らしい螢は、もう見られないのでした。

お精霊様が、おゐでなさるからと言ふので、私達は、できるだけ行儀よく、おとなしくしてゐました。けれど、もう靈魂となつてしまつては、あのように、私達を可愛がつて下された、祖母も、何一言も、話しかけてくれないのを、不思議のことに、また、あつけない悲しいことに思つて、蠟燭の火影がちらちらと位牌に映つてゐる佛壇の奥をぢつと眺めてゐるばかりでした。

十五日の夜には、お精霊様は、胡瓜で造つた馬や、茄子で造つた牛などと共に、莚に包まれて、河に流されるのでした。

私達は、その日をどんなに、怨めしく、また、名殘惜しく思つたでせう。

青笹のついてゐる竿の先に、燈籠を結んで、それをてんでに翳しながら、村の小道を、家々の前を、みんなは、聲を揃へて、

　夏の終りの
　お精靈まつり
　今年ながれて、
　また、來年ございの
　灘ボイ、
　ヤレ、ヤレ――

幾たびも、幾たびも、同じ唄を繰りかへして、呼きながら、歩るくのでした。

小さな田楽燈籠の天地は、淡紅で、ぼかしてあるのでした。晝間から、それを持つて歩るいてゐる、子供の群は、夜になると、それに、火をともしました。

この時、圃に繁つてゐる、豆や、紫蘇の葉陰で、蟲が鳴いてゐました。なかには、西瓜や、胡瓜を剝つて、その空洞に蠟燭を點したのをいれて、青さめた上へ、顔を描いたり、幽靈を描いたりして、道を行く人を嚇かさうとするいたづらな者もありました。

もはや、提燈をかざした、小供の群は、あちらへ遠ざかつて行きました。

　夏の終りの
　お精靈まつり
　今年ながれて、
　また、來年ございの……

橋を渡つて、町の方まで、行つたやうでした。そして、あまり、夜の更けきらないうちに、いつとなしに、子供等の影は、一人消え、二人消えてしまつたのでした。

後には、しんとした森の影と、黒い野菜圃が、ほのぼのと浮き渡つた夜の空の下に、浮き出てゐました。

「まだ、お休みになりませんか」と、老人が、團扇をはたくさしながら、暗がりから出て來ます。こちらは、獨り、涼臺の上に横になつて、星を仰いでゐた男が、身を起しながら、

「天の川が、大分白くなりましたな」と、言ひました。この男は、役所の書記をつとめてゐるのでした。

「何といつても、もう土用が過ぎると、一雨毎に涼しくなります。暑い、暑いといつてゐるうちが、まだいゝのです」と、老人は、涼臺の端に、腰をかけました。

今にして、この時の光景を思へば、人生また、斯の如しと、私は感ずるのであります。

八月の落日と、その夜の空とは、私に、最も、思慕と悲哀とを誘ふのでした。斯の如くにして、考へれば、懊悩し、苦闘し、はた哀樂の多かつた人生に、何人か終に別れざるものがありませうか。

――二四、七――

星と音樂

上司小劍

夏の夜は星と音樂と。」

田舍、殊に山間の夏の夜の感じと、都會殊に盛り場の夏の夜

の感じとは、まるでちがふ。同じ夏とは思ひぬまでにちがふ。このちがつた二つを、繋ぎとめて、一つの人生をつくり出すものは、天なる星、地の音樂。

去年の夏、日光の中禪寺にゐて、折柄の滿月を華厳の瀑布の上に見た。晝でも凄いあの直下數十丈の水に、夜の氣がこもるとまるでこの世のものとは思はれぬまでに、身の毛のよだつをおぼえる。夜霧に包まれて、溪谷に雷のやうな瀑布の音ばかりを聞くのも物凄いが、すツかり晴れた夜に、白く光る大瀑布が、面を滿月に向けてゐる凄さは、とてもたとひやうがない。夏の月は丁どあの瀑布の落つる溪谷の眞正面から昇るのだ。わけてもまんまるい月が、徐々に昇つて來る初夏の凄さ、恐しさ。すべてのもの皆死して、瀑布と月と我れとのみ、この深山に生きてゐるのだと思ふと、いよ〱たまらぬ。四五丁あなたに自分の宿があつて、柔かい夜のものに、眞夏も丁度都會の晩秋のやうな冷やかさを包んで、安らかに眠るのだと思つてゐればこそ、この物凄い光景を前にして、突ツ立つてもゐられるのであるけれど、昔しこの山のまだ開かれなかつた頃、一人でこゝまで登つて、この瀑布、この月に對したら、どんな心もちになつたであらう。月は昔のまゝに輝き、瀑布は昔しのまゝに落ちてゐるのだ。到底長く居るにはたえない。瀑布を見下す懸崖の上を去つて、月をもまた千古斧を入れぬ深山のかなたに隱し去り、獨りでブラ〱、白樺の林の小徑を辿つて宿の方へ歸つて來ると、いづこよりともなく、響く尺八の音、あゝ我れは生きてゐたのだ。この世には都會もあるのだ。仰げば高い木々の梢に、星の數が二つ三つ。實にや、都會と田舍との夏の夜の感じを結びつくるものは音樂である。

銀座の夜のそゞろ歩きほど、夏の夜の感じをそゝるものはない。一夜にして燒け亡びた銀座は、半歳にして、ほゞもとの形に回復した。バラツクながらも新銀座は感じにおいて舊銀座にまさつてゐる。殊に夏の夜の感じにおいてさうだ。これからほんとうの銀座が三年五年の後に、美しく造り出された時、そこにはいかなる夏の夜の感じが漂ふであらう。

私の今も忘れ得ぬ夏の夜の都會の感じは、二十幾年前の大阪の橋の上である。夜になるとそこの兩側へ、一列に茶店、氷店が出て、納涼の客は橋の上に集つた。大川の橋といふ橋は皆さうであつた。夏の大阪の夜は橋の上にのみあつたのだ。しかし今はもうその情趣の跡かたもなくなつて、橋の上にうつかり佇めば、警吏に追はれる。燒けた銀座は半歳にして回復したけれど、大阪の橋の上の夏の情趣は、永久に亡びたまゝである

中の島の夜氣閣に、豐國祠畔で螢の飛び交ふを見た目だ、一轉して浪華橋上の夕涼みの賑かさに移り、仰げば玉鏡天邊の月、俯すれば絃歌を載せた珠簾の舟と言つたやうた夏の感じは、今の大阪が全く失つてしまつた大切な情趣である。

夏の夜の涼味

德田秋聲

野口米次郎君は、西洋人は窓のなかで椅子にかけてゐるから自然の腰以上を見ることとなるので、坐つて自然の腰以下を見てゐる日本人のやうに、自然の細いところに氣がつかないと言つたやうな意味のことを、何かで書いてゐられたが、さうかも知れないと思ふ。それもさうだが、自然その物も、島國である日本の方が大陸よりも遙かにデリケートな感じで、風物の移りかはりも、ずゐぶん複雜なんであらうと思ふ。日本人の季題生活がそこから初まつてゐるのは勿論で、俳句は最も端的にそれを表現してゐる。建築でも衣裝でも料理でも、それからもつと內面的な思想感情でも、總て日本人の生活が、季題であると言つてもいゝくらゐで、この意味で季題が民衆文藝であるところの俳句の生命、若しくは全部であることは、私も何かのをりに時々言つたことだが、人間的文明の創造は、次第に生活を自然から切離してくるので、さう言つた原始味も段々に滅びるやうである。今年の夏などは――大分前からさうであつたが、今年は殊に自然界の約束がちがふやうで、ずゐぶん例年にない暑い日もあつたけれど、そんな日でも、朝晩は山から流れてくるやうな冷かな風に惠まれて、割合ひ凌ぎやすいやうである。今年の陽氣の不順は太陽に黑點が出たからだといふ科學者の說もあるが、單にそれだけだとは思へない。それはそれとして、私にはやはりこの古い季題趣味が附まとふてゐて、陽氣の加減に微細な感覺が、とかく動きがちである。

夏は特に自然界と兩接し易い。都會生活は東京などでは寧ろ冬向きで、夏にもつと[illegible]に自然と[illegible]接したいと、誰でも思ふ

であらう。だから鐵筋コンクレートや煉瓦造りの建物の高い窓よりも、木造家屋の縁側にでも跪坐して、月を見るとか、蟲を聞くとかいふことの方が、ほんとうの日本の夏らしい感じである。下町のづゐぶん建物の込合つたなかにすら、少しばかりの庭があつて、そこに石をおくとか竹を植ゑるとか、又は出窓に朝顔の一鉢を用意するとか、釣荵を下げるとか、金魚を飼ふとか、大抵は夏の朝晩の涼しい感じを樂しもうとしてゐる。しかしそれらは個人々々の仕切られた自然を、僅かに享樂しうるだけのもので、都會生活の營みが大きく複雜になつて行くにつれて、そんな俳趣味も次第に移りがわるくなつてくる。

それゆゑ東京のやうな大きな都會では、夏の凉味といふことについても、もつと公衆的な大規模の設備をする必要がある。東京附近の大自然を國家の公園式に作るといふ大きな計畫が、地震前にはあつたやうだが、これらは寧ろ今の場合不急の土木を興すものであるのみならず、下手にやられると、立派な自然の公園であるところの日本の美しい自然を打壞すにすぎないことになりはしないかと思ふ。勿論或る程度の設備も、自然に對しては必要であるに違ひないが、遣りそこなつてもらつては取返しのつかない事になるのである。差當り東京のやうな大都會では、大規模の泉石が必要である。隅田川を利用するとか、玉川を巧く人工化するとかいふことが、若し出來るなら、東京の夏もづゐぶん暮しやすいであらうと思はれる。輕井澤や箱根などの避暑地へ行く機會のない人々のために、泉石の幽邃境を作るとか、船遊びや水泳の設備をすることは、さほど困難なことでもなささうに思へる。一番水の必要な夏になると、節約々々とやかましく言はれる水道の水だけで、暑い夏を砂埃のなかに暮してゐるのは、これからの東京人には益〻遣切れないことになるであらう。


充分よく映画を
御鑑賞遊ばすには
是非東キネへ
東キネへ
増築落成
東洋キネマ
經營者　徳川夢聲



花輪をおくる

室生犀星

秀子が亡くなつた。――わたしは花輪を送らなければならない。あの人のことだから喜んで粗末な花輪を受けてくれるだらう。或ひはいまになつてそんなものはいらないと言ふかも知れない。ともあれわたしだけの心として花輪をあげやうと思つてゐる。――

いまから七八年くらゐ前のことである。秀子は始めてわたしが結びにくがつてゐる襟飾をきつちりと締めて呉れた。

「お苦しくはないでせうか?――。」

「いえ、何んにも。」

秀子の夫の弓島は、よく似合つてゐると言つた。わたくしは洋服といふものを初めて着たのである。そしてわたしの締めてゐた襟飾は紫と白の、田舎廻りの曲馬師のそ

れのやうに派手な、とんちんかんなものであつた。そんなことの分らないわたしは平氣でそれを締め、弓島をたづねたのである。弓島は襟飾は女の半襟のやうなものであるからと言つて、箱から地味な一本をつまみ出して、お前、これを結んでお上と言つた。些細なことにも親切心を忘れないかれは、貰ひたての秀子に左う言つた。

秀子はそのとき十七だつた。——わたしの心に妙なものが沈でんゐることを、その日の歸り道に經驗した。それは何か優しげな風情といふよりも一層何か混雜した氣もちであた。そういふ優しいふわふわした温氣がわたしの襟のあたりに彷徨してゐるのを拂ひ退けられなかつた。

「可愛いゝ奥さんだね。」

誰でも左う言ふほど、小柄な、脂肪質ではあるが太らない方の脂肪質だつた。太る方はあかみを持つが、ほそりとした方は色は白く太らなかつた。

弓島は官邊の用事でよく二三週間づつ出張した。その間にほそれてゐた秀子は不思議にからだを恢復した。見ちがへるほど健康になつたが、弓島が歸宅すると間もなく又た秀子は衰弱した。——玄關に手をついて、どうぞお上りくださいましと言つて、擡げた白い顏の中に清新な朝の表情がなく、いつも夕方ごろの疲れた顏があつた、

「どうもからだがよくなくてね。」

弓島は大きいからだをどつしりと机のわきに据え、そして太い手のさきで、このごろ弓を彈くものだから胸が張つて來たと、大きい胸を張つて見せた。

そこへ秀子がお茶をもつて來たが、一さう弱々しく見えた。瞳ばかりが美しくなり顔のふちが鋭どく細い刄もののやうに見える……手を遣つてその上をすツと引いたら、或ひは刄が立つかもしれない。

「お持ちなさいまし。わたくし持ちいいやうにしておあげしますから——。」

秀子は氣さくに立つて何かの苗を庭へ下りて堀つてゐる。下宿にゐるのだが離れのやうなところだから、植えときたまへと弓島もさう言つて

「根にすこし土をつけてその上を一ぺん握るんだ。それでいい。」

と庭にゐる秀子に注意した。秀子のからだ一杯に日かげがあたつてゐる。——印刷紙のわるいのに餘り美しすぎる顔が寫されてゐるやうな、日光の中のその顔は、ひ弱くたよりなげに見えた。こんな風な親切といふものはじつくりと心にたまるものだとわたしは思ふた。ひと妻の親切氣の中に抵抗のできない誘惑はあるが、そこまで行かない普通の快よさがあつた。むしろ弱々しい淸純さがあつた。わたしは弓島をたづねるときに秀子を見るのが半ば愉しみであつたと言つてよい。獨身ものといふものはちよいとした好意にすら、靜かに女のことを考へるものである。その考は半ば尊敬をまじへてゐるものだと言つてよい。——弓島はその氣もちを知つてゐる、そしてわたしが尋ねると決つて秀子にすこし話をするといいと言つて、立てかけた膝を座らせた。弓島は他人に對して自分の好意のあるところを示さずにゐられない男であつた。かれは妙にわたしの獨身に同情した。わづかな用事にも秀子を使ひによこしたが、そんなとき用事を濟ますと手ぎわよくあつさりと歸へるのが秀子らしかつた。

獨身ものといふものは偶に女の人が來ても生活が一變するくらゐ、女にたいしては新鮮な初々しい氣もちのものである。わたしは秀子が一度くらゐ離れの縁側のそばに立つて、弓島の本を返しに來て歸つてから不思議に庭木などに一層

の眼新しさをかんじた。秀子といふ人がらにふれた庭木にも彼の女らしい徳が實つてゐるやうに思はれたのである。わたしはひそかに秀子の美しい瞬が梢の葉の間に在るくらゐの物思ひをした。それほどわたし自身すらうひうひしかつた心持ちでゐたのである。

弓島とわたしと或晩そとを歩いてゐたが、とある一軒のカフエを見つけてお茶を飲みに這入らうとした。弓島はそのときつれてゐた秀子に、

「お前はそこに待つてゐるがよい。わしらは一杯のんでくるから!」

と左う言つてわたしと卓を向ひ合せになり、ビールか何かをのんだ。弓島は田舍の言葉をつかつた。

「なぜ奥さんを入れないのだ。」

わたしは不思議な氣がして左うたづねた。弓島はわけもなく、

「こんなカフエの女なんぞにあれを見せたくない。あれがよごれるやうな氣がするから!」

さう言つてかれはビールの泡を吹いた。わたしは無頓着さうなかれが秀子に對する感情の中に、存外まだ淸々した氣もちを持つてゐることや、その氣もちに子供らしい潔癖のあることを快よく思ふた。決してわたしと同席するためから左ういふ懸念をおもんぱかつてゐないことは、平常のかれを通してよく信じてゐた。

「しかし濟まんやうな氣がする、――。」

すぐ小路の角にぼつねんと待つてゐる秀子の姿を思ひながら、わたしは謝まるやうな氣もちでさう言つた。

「あれは何とも思つてはゐない。」

わたしたちはカフェを出ると、すぐ秀子は弓島のそばへ行つた。べつに腹を立ててゐるわけでもなく、又、そのためにつんとしたところもなかつた。れいに依つて白い顔が弓島の肩のあたりに古くさい形容ではあるが、ゆうがほのやうに白く見えた。

「どうもすみません。」

わたしはその通りにあいさつをした。

「いいえ。」

秀子はかすかに笑つて見せたくらゐ、平氣でゐた。そこから二三町さきに曲馬團が來てゐたので、わたしたちはその中へ這入つた。露西亞女がそのからだに黑い服をつけ、小屋がけの天井へ達くほどぶらんこの勢を切つて、次ぎのぶらんこに乘り移つたりしてゐた。あんな大きなからだでよくああも輕々しく乘れるものだと思つた。それから七八才くらゐの少女の樽拔けの藝があつた。彼の女は苦しさうに手足を一緒めにして支那人の懸聲の下から、すつぽりと悲しさうに樽から拔けて出た。そして何か言ひながら片手を擧げて見物席へ向つて笑つて見せた。見物はみんな手を叩いて見せた。

弓島は默つて見てゐたが、出やうと言つた。かれはそんな慘酷なものに永く眼をさらすことが出來なかつたらしかつた。わたしも同樣に不愉快であつた。秀子も又寂しく疲れた表情をしてゐた。歸り途にもわたしは少女が樽からぬけ出した姿と掠れた聲で手をあげたときの、疲れた顏を思ひ出すと、ふいに起つた拍手の音まで聞えるやうでいたいたしい氣がした。

「寄つてお茶を一杯のまんか?――。」

弓島は散歩がへりには決つてお茶をのめと言つた。わたしは彼の室から見える庭草に對ふたところで、茶をのんだ。垣の向ふでおとなりの行水が見えると言つて、弓島は笑つた。垣の向ふには美しい娘さんが住んでゐることをわたしも知つてゐた。秀子はそのときおかしさうに笑つた。十時過ぎの庭草は冷却つて水のやうな夜涼が惜氣もなく椽側から坐敷一杯にこもつた。さういふ夜涼といふものは脂肪のある女の顏をよけいに白く冷たくするものらしく、秀子はあをざめた色をした。

「あれから逢つたのか、――。」

弓島はさう言つてわたしの顏を見た。

「一度會つた。」

「手紙はあれに取り次いで貰つたらいい。」

秀子は笑つてゐる。――わたしは弓島の前に宿で書いた手紙を置いて、ちやたのむと言つた。四角な封筒をわたしは人のもののやうに自分の手蹟をながめた。

「この間も日曜の朝早くやつて來て、默つて一時間ばかり坐つてかへつて行つたよ、君のところへおよりなさいと言ふと、どうなりますかぞんぢませんと言つた。變りものだね。」

弓島はちよいと肩をゆすぶつてから、「ちや、あれから君のところへ寄つたんだね。日曜の朝の十時半ころだ。」

秀子は笑つてゐる。弓島はすこし昂奮してゐるやうな氣がした

「そんな時刻だよ、だが例によつてすぐ歸つた。」

「默つて坐つてか?――。」

「うん、例によつてだよ、が、そのとき大變なものを見られた。」

「國の方の女の手紙か？」

弓島の直覺は當つた。机の上にあつた國の女からの手紙を取つて、これ何あにと言はれたときに、わたしは唯これはてがみですと答へただけだつたが、わたし自身の顔の硬ばるのがすぐ皮膚の上に感じられた。かの女はすぐおもしろいことが書いてあるんですかとわざと落ちついて言つたので、わたしは仕方なしにいやそんな面白いことなんぞ書いてないと言つたきりてれてゐると、すぐかへつて行つた。

「これで何と云つた、お龍は？——。」

「ずいぶんおきれいな手ですねと云つたきりさ。」

「そしてすぐかへつたのか。」

「うん。」

「あはははは……。」

弓島はいきなり大聲で笑つて了つた。大きなからだでわたしの考へてゐた陰氣さが吹き飛ばされてしまつた。わたしは弓島の笑つて了うまで默つてゐた。

「とにかく變りものだね。」

弓島は鳥渡さびしさうにしてゐたが、秀子に向つて、

「べつにお前に何か言ひはしなかつたかね。」

秀子は笑ひながら言ひにくさうにしてゐた。「實は昨日の夕方もいらしつたんです。そして格子の前に立つたきり、い

くらお這入りなさいましと言つても、默つて立つてゐらしやるんですもの――。」さう言つて、「わたし每度のことだから申しあげなかつたんです。あの方は妙にわたしにあひたがつてゐらつしやるやうでございます。」
「ふむ、昨日來たのか。」
弓島は何か考へながらゐたが、わたしも秀子の方を向いて。
「それでゐて何一つおつしやりさうにもなく、唯にこにこしてゐらつしやるんでございます
「君、まつたくお龍はかわりものだね。」
わたしは自分のところよりも弓島のところへ餘計にたづねるお龍の心にも、いくらか讀めるものを感じた。そのやうにお龍の心は何か寂しさうなのだと平凡なことを考へた。お龍は氣ままな女であるためにきれいに見える女だとも思つた。
「これはこんど入らつしつたときにお上げすればいいんですか。」
「ええ？」
秀子は、ではおあづかりしますと、封筒を手に取つて言つた。わたしは一寸氣まりわるい思ひをしたが、たびたびではあり慣れてもゐるやうな氣がしてゐた。わたしは立ちかけたときに少し寒いやうな氣がした。

或時ふと秀子が、こんなことを言つた。

「お龍さんに御熱心でございますね。」

ついぞそんなことを言つたことのない秀子が、靜かにわたしの顏を見詰めながら、頼んだ手紙を手に取つて呆氣なく言つた。うるさいことを甘えるやうな氣もちになり、いゝ氣になつて頼んでゐるわたしは、秀子の沈んだ顏いろを見つめ返した。これは惡い！こんなにしつこく頼むものではないと思つた。それもこの頃になつて來なくなつたお龍が、なぜか弓島の方へばかり行つてゐるのではないかとも思はれたからである。が、事實は反對であつた。お龍は弓島のところへも、わたしのところへも來なかつた。我儘なお龍はべつに何といふこともなしにわたしだちから遠退いた。それ故、手紙は秀子のところに預けられたまゝになつた。――しまひにわたしはそれを秀子から取りもどした。

「おところを知つてゐますから、おとどけしませうか？」

あとになつて秀子は左う言つて、ふさいでゐるわたしを氣の毒さうに眺めた。わたしは手紙を裂いて了つてからどうでもよい氣になつた。男女の中にも實際さういふ淡々しいことが多いものである。物好きから話し合つてそれきりになつて了ふことがしばしばあるものである。

「あんな人だからひよつこり遣つてくるかも知れない。――」

弓島もさう云つてゐたが、だんだんお龍のことはお互に口へ出さぬやうになつた。外のことばかりを話した。秀子は眞夏になると、ひどく夏痩せをわづらつた。肉や魚をたべなくて、ジヤボンだとか林檎などをお菜にたべると弓島は言つた。わたしはそれをふしぎに思はなかつた。唯、臉ばかりが美しくなつて行くのが、何か性情といふものゝ外にあるやうな女のやうな氣がした。女の中にさういふ神に近いものがあることは嘘ではないと、秀子をみるたびに思ひ出した。一つには殆絶對に肉感的であるべき分子がなく、澄み徹つてゐる一種のれいらうたる玉のやうなそれであつた。何か大

切に藏つて置きたいやうな玉の種類であつた。彼の女が肉だとか魚だとかを食べてゐるとしても、それは却つて玉を玉ならしめる所以であるのに、弓島のいふところでは林檎とかジャボンとかで食事をしてゐて、他のものは匂ひや色がさらひだと言つて退けるところが、わたしには笑ふひとは笑ふがよい、これはこの世の神らしい分子の若干かを持ち合せて來たものではないかと、心ひそかに空想しながらゐた。神といふものの全能よりもそれらしいけはひを持つてゐるのが、それを左う感じるわたしの心に素直な美しい氣もちを持たせた。わたしはちよつとしたことにも感動したがる性質のものであるが、それよりも先立つて秀子のやつれた面影をさう感じた。（これは一つには秀子が亡くなつた人だからさう思ふのかも知れない。これは割引しなければならない感動ではあるが）しかし此の世で美しい瞳をしたりよい性質をもつた人間には、その神らしい心もちをこちらから食つつけたつてよいではないか？——

「このごろあの方は妙にわたしに會ひたがつてゐらつしやるやうでございます。」

お龍のことを左う言つた秀子のことばが、わたしにはれいらうとして響いたことばであつた。弓島のいふやうに、あれは從順より外に何もない！これがあれの身上だと左う言つてゐる。弓島はわたしに秀子のことをいろいろ細かいところまで話した。その話は一々わたしに妙に頭に殘ることだらけであつた。弓島を通じて女といふものを話されるとわたしは弓島を仕合せものだと考へた。そして夏が深くなるほど秀子は透明な顏を次第にやつれさせた。夫としての弓島はむしろ不思議さうに、どうしてあんなに痩せるのだらうと言つたが、その前で、秀子はいつも笑つてゐるばかりである。座にあるときのわたしも唯、苦笑してゐるだけであつた。あまりに弱々しいためにわたしは弓島にどこか旅行でもするか、温泉へでもつれて出掛けたらどうかと言つた。

「では温泉へでも行つてみるかな。」

左う弓島が言つても、秀子はやはりこちらがよい、からだはそんなに惡くはないのだと言つてれいの細々した微かな笑ひをもらした。その笑ひの中にべつに遠慮してゐるとか、皮肉があるとか云ふことはなかつた。ただ、すうと靜かに笑つてゐるだけであつた。それが秀子の性分らしかつた。しかしその美しい瞳の中にどういふ考へが映つてゐるか？――それはわからない。と言つてもべつに弓島のことに不平を言つたこともない。――かれらは一切の結婚者のやうに靜かで物音がなく仕合せさうであつた。唯、弓島のからだの强さが目に立つた。

弓島はをりをり秀子をつれてわたしのところへ來た。秀子は自分で茶をわかして、まるでわたしが客であるやうにもてなした。そのたびに一人ぐらしのわたしの室なども取片づけられたことが屢々あつた。秀子は働くことが好きらしい、弓島の眼の色で何が必要であるかも分るらしかつた。

「來るか？――。」

「來ない、あれからずつと來ない。」

「變りものだね。」

弓島は物足りなささうにしてゐた。

「お龍から來た手紙があるだらう、見せんか？――。」

わたしは弓島にお龍からの手紙を見せた。お龍の手紙はいつも淡々とむしろ素氣なくかいてあつた。

「秀子さんにも一つ。」

わたしは秀子にも一通見せた。きれいな四角な文字で書かれてあるのを弓島はゆつくり見ながら

「このごろおたづねしても詰らないやうな氣がいたしますから、そんな氣のするときはおたづねいたしません、――なる程、こんな調子のひとだね　まだないか　かくしてあるのはないか。」

「ないよ、そんなに澤山は?」

秀子は讀み了えてから例のしんなりと笑つてゐる。あんまり物靜かでまるで竹紙のやうにそつとしてゐなければ、その笑ひがほが崩れさうに見えた。弓島はみんな讀み終えるとそれをていねいに重ね、しめて九通だなと言つた。

「わりにすくないものだね、お前のところへ來たのはもう十通を越えてゐるぢやないか。」

「えゝ、あれはお話のかわりの手紙ですもの。こちらさまとはちがつてゐますのよ。」

秀子は氣の毒さうにわたしを見て、よけい來たのは、他にも用事があつたからだと言つた。お龍がこなくなつたのは、わたしには合點のゆくことがあつた。それは弓島にまだ話をしないでゐる國の女との同棲のことであつた。國の女との手紙のゆきがかりが同棲へまで進んでしまつてゐた。お龍とはよく會つてゐながら因緣のふしぎはそんな遠隔の心と取結んでゐたのである。國の女とは一度會つたきりであつた。それにも拘はらずわたしは手紙を見て考へては返辭をしてゐるうち、それが積み重なつて噓と眞實とが次第に固まつて行つた

「いつでもかうしてお一人でゐらしつた方がいいぢやありませんか。」

「さあ、一人ぢや……。」

弓島がそばから、「國の方のひとと一しよになつたらいいぢやないか。媒介をしてやらう。」

さう言つたから、わたしは詳しく話をして彼れに媒介をたのんだ。秀子は默つてわたしの茶器で茶を淹れてゐたが、

何か考へ考へ淹れてゐるらしく、茶が濃く黄ばんで出た。その急須を持つてゐる手つきが細々しかつた。わたしはお龍はもう來ないだらうと思つた。國の女のことを知つてゐる。——それに若しご一緒におなりになつたらわたくしお伺ひしなくともいいでせうと言つた。かまわないとわたしは言つたがそんな詰らないことは止しませうと言つた。お龍の思想はあたらしいと言ふより氣の向くままの人がらである。無邪氣にも見え、故意にも見えるところがあつた。——秀子は夫に向つて言つた。

「お龍さんはもう入らつしやらないでせうね。」

「さあ——。」

弓島はわたしの顔をながめ、「おれの方へ來るかも知れない。」と言つた。その言葉がわたしに應へたが、しかたがないと思つた。秀子は何のために左う言つたのか分らない。半ば考へ惑ふたやうな屈托めかしい秀子の顔を見ると、早く何か言つて笑つてくれればよいとわたしは考へた。弓島は快活である。がわたしは何か悲哀に似たものをかんじてゐた。身の振方がじりじりと決るところへ定つてゆく呼吸づかひが、せはしく胸を往來するからであつた。

かれらが歸つてから庭へ出て、ひとところを往來して歩いた。小路の果になほかれら夫婦の足音がきこえてゐる。——

「お龍の眼だ。」

あを桐の梢にわたしを眺め下してゐる。お龍と私とはまるで用件を帶びて遊びによく來た人と懇意になつたやうに素

氣なく見えた。それにも拘はらず凝然たる光を放つてゐる。霜交じりの中を歩いて來たお龍の朝の顏のなかに、しやんとした少女の肉顏があつた。——（どうかすると不思議にお龍の盛年期の顏のなかに、も一つ、輪廓があつて、れいの少女の顏が嵌つてゐたやうにも感じた。）

靑桐の梢の上のお龍の眼はだんだん大きくまんまるくなり出した。わたしは蹲んで年老りのやうにまじまじ眺めてゐた。空しい光景とはこんなことを言ふのであらう。まるで一人言をつづけてしまつたあとに、まだ言ひたいことを言はずにゐるやうな氣もちだ。なにごともわたしにはそれが邪魔をする。——疲れたわたしの頭が不圖國の女を描いてゐる。——

「これが因緣の姿か？——。」

彼の女は田舍者らしくおどおどしてゐる。とうたう來たか、半ば嘆き半ばいそしむやうな。それで力なげにわたしは手を伸さうとする。誰でもみなかうなるのか、人生のことが次第に面倒くさくなつてしまつて最う半分ぐたぐたになつて、よろよろして行くところに因緣の姿があるのか、思ひがけない一生ではなかつたかとその時にさう顧み、これまた半ば嘆き半ばいそしむやうなうやむやな、まるで曇天に己れの眼を向けるやうな氣もちになるのだ。お前は何も知らない。わたしの三十年の暮しにお前は何の關係もないのに、因緣はこれを結び合せ、恰も三十年の暮しのそれをもお前が背負つて行かうとするのらしい。

そのときにわたしは國の方からの女を妻にもち、或る秋の晩に、弓島の書齋に秀子をも加へて坐つてゐた。どういふ

話のまぎれであつたのか、(これは唄を好きな弓島が枉げての望みで左うなつたのであらう。)わたしの妻はそこで何か西洋の唄とやらを唱はねばならなくなり、氣のよい田舍もののの、まだわたしの氣難しさになれないかれは、座つたなりで大していい聲でもない唱歌をうたつたのである。女は半ば羞かんだがしかし弓島はもう一つの唄を所望して、かれらしく悠々とかまへてゐたことであつた。唄の中程でわたしは不愉快であつたが、唄つてしまふと憐れむの情合をかんじた。その哀れみの情合のなかに依然とした不愉快がこもつてゐたが、弓島の前ではそんな色をもしなかつた。弓島は人生といふものはたまたまこんな秋夜に乘じて唄をうたつたりすべきもので、それが大なる和樂であるといふふうに話をした。

「お前も何か一つうたつたらどうか。」

秀子はだめといふやうな顔でかぶりを振つたが、興に乘つた弓島は承知をしなかつた。何か知つてゐるものをやれ。合唱をやれと言つた。わたしは意氣壯んな弓島を止めることができずに、かれのむしろ人の好い面白さうな顔の前では、どう言つていいか分らなかつたのである。

「讃美歌でもやれ。讃美歌なら知つてゐるだらう。」

「ええ。」

秀子はでも奥さんはどうか知らと言つた。女も尾くやうにこたへた。讃美歌、——これは一體どうなることだらう。わたしの嫌ひな讃美歌にはおぞ毛が立つて、しまひには何だか世の中が怨めしいやうな氣がし、早く夜が更けてくれるといいと思つた。やがて讃美歌がうたはれた。わたしは味氣ない心で妻のうたふのを聞いたが、素人らしい秀子の初々じい際がまじつて、活動の音樂のやうな厭みたらしい悲哀のかすを感じた。だが、かれらはまじめにうたつた。それほ

ど、なほわたしは冷汗をかんじた。

弓島は悲哀に選擇を持たないらしい顏付で、尤もらしく、なかんづく悲しさうな表情をしてゐた。讃美歌が了つた。しばらくみんなは默つた。わたしは弓島の前でうたつた妻の不用意をせめる氣はないが、わたしと妻との何かを安々とひろげて見せたやうな氣がして沈んだ。弓島も左う考へたであらうか？――しばらく默り込んでゐた。秀子もぼんやりと半ば惱ましげにしてゐた。

「いい晩を送つた。」

弓島はさういふ正直な、ひとの言へないことを言ふ人間である。それ故にかれを多感の士とするのは考へものである。かれは人間の考へることに好意といふものを離れた考へは成立しないと左う信じてゐるらしかつた。それを知つてゐるわたしは妻とかれの玄關を辭すときに、先刻の不愉快をだいぶうすく心から散いで行つたのである。

「そこまでお送りしませうか。」

秀子が言つた。

「それ贊成。――。」

弓島もすぐ表へ出た。

まだ大して冷えてゐないが、蟲の音色が起つてゐる。――いい晩だと弓島は言つた。秀子と妻とが何かひそひそ話をしながら歩いてゐる。隔れてゐるせいか、若い女らしい姿である。若い女らしい姿を始めてわたしは妻から發見した。

「女といふものはおえかなもんちや。」

弓島は昂然として言つた。

思想の幼稚であるわたしも同樣にさうぢやと答へた。いまから考へるとわたしどもの人生のはじまりが、あんなところから、その袋の開いた口がしだいに縮まりかけたものらしく思はれた。馬鹿らしいことのあるたけの捌け口がいつの間にか今ではついて終つてゐる。——それだのに、あのときはまだ何もなかつた。

「わたしと君とは子供のときからの友達ぢや。それがみな妻君をつれて一しよに步くといふことは何ちゆう愉快なこつちや。」

それは眞實のことである。——だが、わたしならそれを殊更らに言ひたいところでも默つてゐる。——しかし弓島はそれを最う一度はつきりと言はずに居られぬ性分を有つてゐる。又、それを自分でおし殺さうとも考へてゐない。さういふことは彼れにとつて不自然なことに思はれるからである。

「菓子を買へ！」

「え、どんなものがよございませう。」

秀子の白い顔と瞳がこちらへ向いた。忠實さうな靜かな瞳である。

「何んでもいいから買へ！」

女らはくすくす笑つた。弓島はそれが面白さうであつた。

「氷砂糖がよい。」

間もなくわたしどもは氷砂糖の一片づつを口のなかに頰張つて步いた。通りから小路へ這入つたときに女どもも氷砂糖を噛んだ。そしてくすくす笑つた。みんなの物を言ふ聲の中に、齒にあたる砂糖の一片がかちかちして感じられた。

弓島のいふやうによい晩であつた。小路から片町になつて裏通りの垣根にそふて步いた。

「まあ、櫻が咲いてゐるやうね。」

葉の落ちた枯木に、電燈が白つぽく幹をさらしてゐるのを眺め、秀子はびつくりしたやうな聲で言つた。さういへば櫻の白い花がぼおと一面に揉みあつてゐさうに思はれないでもなかつた。——唯、白いぼやぼやした何かの枯木に、射りつけた電燈の光が暗さを背後にしてぱつと咲いてゐた。

「あれを櫻だと言つたのは一寸おもしろいね。なるほど左う見える。」

弓島はさう言つてその町角を曲つた。そして十分ばかり歩いてゐるうちに、秀子は眞蒼な顔をして左の手で左の頰をおさへ、じつと何かをおし怺へてゐる樣子をした。しばらくしてそれが齒痛であることが分つた。

「家まで怺へるか、それとも、あ、さうさう、此邊に齒醫者があつた筈だ。」

通りから坂になつてゐる中途に、齒科醫院の看板が電柱に吊されてあつた。「とにかく彼處へ行つて診て貰ふとよい。氷砂糖がわるかつたのだ。」弓島はさういふと、まだ起きてゐるだらうし、寢てゐたつて起してもいいぢやないかと言つた。

「わたし怺へますわ。」

秀子は低い含み聲で、痛さうに言つた。左の手と同じい蒼さで頰が熱をふくんで見えた。

「怺へるなんて愚なことだ。すぐだから行つて來たらいいぢやないか。僕らも門の前まで行つてやる。」

「あ、行つてあげやう。」

わたしも左う言つた。

「切角のところをお氣の毒ね。すみません奥さん。」

「わたしも中へおともしますわ。」
「え、どうぞ。ぢや行つてまゐります。」
「こんなときは醫者に限るよ。」
わたしたちは小路の角に待つことにした。二人の女の姿が歯醫者の軒燈の光を浴びたが、すぐ家の中へ消えた。呼鈴がかすかに聞えて來た。明るい軒燈が片一方高臺の石垣になつてゐるのに射りついて、椎の下つた枝の葉をきらきら光らしてゐる。
「お龍はどうした。」
「あれから便りがないのだ。來年は卒業だね。」
「畫かきとしては立たないさうだよ。あれで中々引込み思案の方だから。」
弓島が溝ぎわへ蹲んだので、わたくしも蹲んだ。煙草に火をつけたときに一本きりしかなかつた。卅分ほどして又呼鈴が鳴つて、軒燈の下に二人の女の姿が見えたときに、わたしたちは立ち上つた。秀子は手を頬に當ててゐない。うまく痛みが歇んだものと見える。身輕さうに歩いてゐる姿からして左う見えた。
「なほつたか?——。」
弓島がいきなり大聲で言つたが、向ふの返辭が聞えなかつた。白い顔が近づいて來るのが此方の辿りの明りの眞正面に見えた。
「やはりお砂糖がわるかつたのでございます。」
秀子は全く神心爽やかさうに見えた。喜んでゐる色がわたしの眼を惹いた。何かわるい夢からさめたやうに白い羽ば

たきが皮膚の上にあつた。

「お待せしてすみません。もうさつぱりいたしましたの。」

「いい工合でしたね。」

坂を下りると、あちこちの店の戸がそろそろ閉められ初めてゐる。――わたしたちは其處で別れることにした。弓島夫婦は坂の上へ登りわたしたちは小路から近道をとつて、暗い通りを選んだ。

「弓島の奥さまはお腹がおほきうございますね。」

「へえ、すこしも僕には氣がつかなかつたがね。さうかね。さう言へば大きいやうな氣もするか?――」

「もう四月くらゐでせうね。」

秀子の子供は、生れてから六ケ月目に亡くなつた。やはり秋近いころであつた。小さい棺をかこんだかれら夫婦のそばに、わたしたち夫婦の花環をかざり質素な背淺い通夜をした。秀子は白い顔をし、瘠せ落ち、弓島も何から手をつけていいか分らない昏惑した顔つきをしてゐた。へいぜいのやうに弓島はあまり喋らなかつた。まだ子供のないわたしはその悲哀にそつくり這入り込んで同感はできなかつたが、棺の靜かな小ささに仄かな死をかんじた。

「清淨なもんだね。こどもの死といふものは?――。」

わたしはこれだけの實感を述べた。それより外に言葉がなかつた。

「子供ができると君にも分ることがあるよ。子供のない人には分りかねる氣がするんだ。」

かれは慍つてゐるやうな言葉づかひで言つた。(それはあとになりわたし自身子供を亡くしたときに、その言葉が解つたのだ。かれはあのときは彼應調子より外に言へなかつたのだらうと後から考へた。)が、何故、かれが誰かに當てつけて慍つてゐるやうな調子になつてゐるのか分らなかつた。

お壽司が來たが誰もたべなかつた。どうですと言つても手を出さない。ことに弓島夫婦は屈托仕盡してゐるやうに思はれた。――支那そばの笛が小路を隔てた通りで鳴つてゐる……。雜談のあとで弓島はやつと切りぬけたやうに、

「またこさへるさ。」

と、だるい聲で言つた。

秀子は白いやうな笑ひ顏を茶を入れながら浮べた。笑つてゐるより泣いてゐる顏だつた。わたしたちも笑つた。――眼に見えない一人の童兒が完全にこの家からこつそりと通りぬけた。とでも言ふやうな氣もちの凝り方が、わたしの心に起りかけた。

「明日どうする。」

わたしは弓島の顏を見て言つた。

「車にでも乘つて行くか、かんたんにこつそりとやるつもりだ。」

弓島がさう答へた。更けないうちにわたしたちは歸つた。かれら夫婦があそこにああして坐つてゐるだらうと思ひながら、それを邪魔してはならぬ氣がしたからである。――二三日して弓島がやつて來て、どうも變に寂しくていけない。秀子も泣いてばかりゐると言つた。

「いつそ子供をこさへないやうにするんだね。こんなに酷くやられるくらゐならね。」

弓島は開け放した障子のそとをぼんやり眺めてゐた。全くぼんやりとしてゐる。「生活の方針がわからなくなる。つまり錨がなくなつたやうな氣だ。」

かれは左ういふと立上つてかへらうとした。ゆつくりして行つたらどうだと言ふと、

「いや、面白くない！」

弓島はさういふと、奥さんすこしやつて來て下さいと言つて歸つて行つた。わたしは茫然とあとを見送つた。

「子供といふものはそんなに可愛いいものでせうか？」

女はふとこんなことを言つた

「口では言ひがたいものらしい。子供をもつかな。」

女はあたまを振つた。「わたし子供はきらひなんです。」

「おれも好きではない。」

（何といふ間違ひだらけの考へであつたらう。いくら若かつたと言ひながらこの考への間違つてゐることは、神だつて愛想をつかしたらうと思へた。六年後に子供が生れて又亡くなつたときに、わたしは若いころに考へてゐたこの間違ひから罰せられた思ひがしたと言つても誇張ではなかつたらう。何事も相應な年ころにならなければ解り兼ねることがあると鹿爪らしく今になると考へられた。そして子供がきらひであると言つたわたしたち夫婦は子供が亡くなつたときに、やはり目に見えぬものに怒つて見る氣になつた。）

わたしはこんなことを言つた。

「子供のできない方法といふやつがあるさうだ。」

「どんな？」

「つまりだね。」

惡魔よ。あのときあゝいふ考へをもつたばかりに、どんなにわたしは今になつて悔ひ悲しんでゐることであらう。そしてまんまと惡魔と一しよになり、くらい夜の中にどんな人生の惡辣な罪惡のそれより最つとひどい調劑をわたしはあくまと一しよに調合した。秤にかけてみては天つひかりに秤の目を讀んでみたのだ。そのあげくわたしはどんなに醜い微笑みを浮べたことだらう。あくまよ、あのときお前はそばから、

「さう、さう、そんな風にやるのだ。」

と、唖れたこゑでささやいたではないか？——わたしはそのとほりにした。神のみ心にそむいたわたくしが當然生れてくるらしかつた可愛い幾人かのこどもを闇の間に捨てた。それを善しとした。人生にはそんなことくらゐは許されると左う信じた。可哀さうなことをした。惡いことをした。謝まつても謝まりきれぬものをあの世に感じた。あくまよ、いやあくまではない。わたし自身なぜあのときに少しの隙間か、なかつたらう。そしても少し考へてゐたらこんな大祭をあげて泣き悲しむことはなかつたのだ。わたしはこの人生にこの一つの罪惡さへしなかつたら、善い人間として通れるのだつた。それをわたしはまんまと前科者となつた。兩眼に涙をうかべることが此の年になつてあるとしたら、人々は笑ふかも知れない。しかしこの年になつてこそ始めてわたしは兩眼に涙をかんじると左う人前で言へるやうになつた。——そしてわたしは行つて歸つてこない娘や子息だちを寂しくかんがへてみるのだ。電車や汽車や又は夕方の散步などにたくさんの子供だちを連れた人を見ると、わたしは後悔をあたらしくするのだ。

秀子は子供がなくなつてから元氣がなくなつた。たださへ鋭くやつれた輪廓がこのごろ一層刄もののやうになり、顔の底から沁み出る微笑は漸と無理にしたやうな微笑みであつた。そして弓島のところへ行つても餘り話さなくなり、默つて一日働くには働いてゐるが、それもやつと動いてゐるやうに思はれた。わたしは神心疲れてゐる様な樣子を見た。秀子の場合はなぜか神心疲れてゐると言つた方が適當なやうに思へるのだ。

或る夕方、弓島が湯に行つたと女中がいふので座敷へはいると、秀子は庭へ出て、倒れた草を起すために俯向いてゐる姿を見た。すぐ氣づいて、こちらを見て、すこし窮屈さうに笑つて、（瘠せてゐるために左う見えたのであらう。）いらつしやいましと言つた。夕明りの中でわたしは凄いやうな病ましげな白い顔を見た。

「顔いろがわるいやうですね。」

「ええ、しかし自分では何とも思ひませんのですけれど。」

秀子は頬を撫でて見せた。夕あかりの中に秀子の顔のまわりが一際明るいやうな氣がした。唯、沈靜してゐるだけで何も動いてゐるものがなかつた。ふしぎにわたしは此麼人といふものは長生きしないもののやうな氣がした。

その晩、弓島は何かのまぎれに秀子にこんなことを、少し叱責するやうな調子で言つた。

「元氣になれよ、すこしは？」

「ええ。」

秀子は笑つてゐるだけだつた。それは唯れいの、頬をかすめるだけの笑みにすぎなかつた。むしろ消えるに早い微笑みだと言つてよい。——

「わたしこのごろ眩惑がするのはどうしたんでございませう。」

さう言つて時として皿や茶碗をやつと二人前ならべるのにも、その數が増えると、どうしていいか分らないことがあると附け加えた。

「やはり疲れてゐるんだね。」

「わたし疲れることなんぞ一つもないんですけれど……。」

弓島はそれもそうだが變だと言つた。

わたしは秀子といふ人は、建康もすぐれないが、ただ、よい品物がもろいといふことを何故だか感じた。硝子などは質は硬いがこはれ易い、あれだ、ああいふ質が秀子にあるやうな氣がした。それに秀子は話をする時間よりも默つて笑つてゐる時間が多い、——とも思つた。何も彼も知りつくして笑つてゐるやうであり、又何も知らないで默つてゐるやうでもあつた。

始めて襟飾を結んで貰つたときの感じも、やはり此の、ひ弱さうな、女といふものの優しさでし、しなえて漸つと支へてゐる莖のやうな纖さをかんじた。しかもしなえを支へる莖があまりに纖すぎるとも思はれた。こんな人はそつと箱に入れてをいても矢張り弱くなる一方だとも思つた。——それでゐて秀子は一度も不平といふものを言つたことがない！唯、しづかに自分の暮しをつゞけてゐる外に、何の不平をもたないやうに思はれた。又、寂しがりでもない、派手でもない、——心から人生といふものを生れたときからそつくり諳誦してきた人物のやうにあきらめ切つてゐるやうでもあつた。

「わたしすぐ元氣になりさうに思はれますの。人がみんな弱い弱いつておつしやいますけれどね。」

秀子は弓島の前でこんなことを能く言つた。自分自身を外にして辯解してゐるやうだつた。秀子の性質としてさういふより外に、何も言ふことがなささうでそれ以外に彼の女の心は遊んでゐなかつた。わたしこんなに強いのですものといふよりもその言葉はふしぎに頭に殘つた。

「入院させて見やうと思つてゐるんだが……どうも産後をうつちやつて置いたのがよくないらしい。」

弓島はある時から云つて君はどう思ふかと言つた。

「その方がよいね。そして療治してもらつた方が、何より根本的でいいぢやないか？――。」

「あれはそんなことをしなくともいいと言つてゐるんだけれど、だんだん惡くなつたらあとで取り返しがつかない事になりさうだしね。一日でも早くした方がいいと思つてゐるんだ」

「是非さうしたまへ。」

間もなく秀子は入院した。そして二同目に見舞に行つたときは最う重態であつた。

「駄目だ！」

弓島はかう惱つたやうに言ふ外、なにも言はずにゐた。面會謝絶の札がかかつてゐて、病院の中は靜まりかへつてゐた。

「お乳をすこし召しあがりましたの。おいしさうに見えました。」

「さうか？」

看護婦は去つてしまつた。

わたしは秀子が自分で氣のつかないうちに、何か心魂の疲勞に惱まされてゐたことなどを考へたが、扨ていまさらそれがどうなるものではなかつた。いつか見た夕明りの中の秀子の顔が、あのひとのこの世でのおしまひの顔であらうと思へた。

「大切にしたまへ。」

「うん、ありがたう、あんな重態だから會はないでゐてくれ。」

「うむ。」

秀子は第一號の、廊下外れの角の部屋にゐた。そこの前までゆくと弓島秀子と白墨でかかれた札がかかつてゐて、中は寂乎としてゐた。廊下の窓からはすぐ看護婦學校の寄宿舍の二階が見えた。心ない風琴のうたに合した哀れぽい不愉快な俗歌がきこえてゐた。

看護婦がドアから辷り出るやうにひつそり出て來た。弓島はどうしてゐると尋ねると、

「唯今およつてでございます。」と答へ、牛乳の呑みさしの器物を持つてゐた。しかも牛乳の大半は殘つてゐたのである。先刻召し上りになりましたとは言つてゐたものの、ほんの、一とさぢか二さぢくらゐだつたらしく思はれた。

「こんなことになるとは思はなかつたが、しかしどうも仕方がないね。」

弓島も病室の前へ着て、窓に靠れながら言つた。看護婦が二階から紙切れを風に吹き飛ばしてゐる。――あどけない白い顔が笑つてこちらを見てゐる。あんな人だちに重い病人の事が解るのかナと思ひ惑はれた。紙片は烈しい風にゆられて隣の庭へ落ちた。

「あんな陽氣な女もゐるし、けふか明日かの病人もゐるし……。」

弓島はぐちのやうにさう言つた。全く何から考へていいか分らない事だらけの世の中だと思つた。

「看護婦といふものは病院にゐると美人に見えるね。」

「健康が目につきやすいからね。」

向ふでは交替の時間でもきたのか、みな窓口を放れた。わたしども自然窓を放れた。――秀子の兄にあたる人、親戚の人などが控え室に來てゐた。その人だちに默つて挨拶をする氣もちは、再び秀子がなほりさうもない事を手強く頭に印したのであつた。

わたしは先刻から言はうとしてゐたことを漸と口へ出して、弓島が廊下へ出たときに言つた。

「醫者はどう言つてゐるのか？」

「醫者はむづかしいと言つてゐる。おそくとも二三日中だと言つてゐる。何しろ衰弱がひどいからね。」

「やはり體質かナ。」

「さうらしいよ。强さうで弱いのが一番あぶないらしいね。」

わたしは草花でも買つて來やうと思つてゐたのだが、そんなものが病人を喜ばせるかどうかさへ疑はれたので控えたことが、却つてよかつたと思つた。見舞人の好みを見せつけるやうなものだとも考へた。――たとへ病人がそれを喜んだにしても、その喜びの中に何か執着しさうな氣もちが殘つてゐたら困る。わたしならそんなものは要らないと思つた。

わたしは弓島へ默つて階段を下りた。何か言つてをかうと思つたが、言ふこともなし、默つて玄關へ出た。

「おかへりですか。」

醫者がすれちがひに、「おかへりですか。」と言つた。ええと答へた。

火鉢がすこし戀しいくらゐの寒さが秋遲いあたりに迫つてゐる。――わたしは病院を出た。谷中の坂道を下りると厭なこゑで、どこかでうづらが啼いてゐた、

間もなく秀子が亡くなつた。

弓島は遺骨を國の方の山へ持つて行つた。そして歸つてからわたしと會つたときに言つた。

「停車場でお龍に會つた。」

「へえ、お龍に?」

「花輪を持つて送りにきてくれたのだ。それをとうとう國の山へまで持つて行つて埋めた。」

秀子がいつか、「あの方はわたしに會ひたがつてゐらつしやいます。」と言つたことを思ひ出した。弓島の發つ時間をどこからか聞いたのかも知れない――。

「變りものだね。」

弓島はかう言つたが何時ものやうに笑はないでゐた。わたしも默然としてゐた。しばらくして、

「僕は唯ぼんやりとしてゐるところへ、不意に目の前に立つた女がゐるんだ。見るとお龍ぢやないか?――そして默つて花輪を差し出すのだ。僕はただあり難たうと言つた。」

お龍は默つて眼に一抔泪含んでゐる、——それきり些いとあいさつをすると、すぐ待合室を出て行つた。そのときもまだ僕はぼんやり停つてゐた。すぐ何氣なしに待合室から人ごみの中へ出て行つて搜したが、もう姿はなかつた。僕はそれからあと花輪をもつたままぽかんとしてゐた。

「汽車に乘つてから一人ではじめて泣けるやうな氣がした。きまりのわるいくらゐだつた。」

弓島は泪迅い目をしてゐる。——わたしもそんなふうだつたら泣くだらうと思つた。弓島の眼を見ないやうにした。

——弓島は汽車の中で、これはあとに氣がついたのだが、香りによい匂ひがしてならない、が花の匂ひにしては餘りに細かすぎると思つたのが、やつと香水であることが分つたと言つて、

「君も知つてゐる一乘宇山の墓原へもつて行つたときまで匂つてゐるんだ。」

「では先祖代々のお墓におさめたわけなんだね。」

「うむ、東京より彼處はしづかでいいし、僕には故郷だから。」

わたしは大山脈の裾野にある清閑な松籟の中の、墓碑ばかりがつづいてゐる一乘宇山を眼にうかべた。赤松のてつぺんに春は春蟬がないてゐる。秋には何が鳴くのかしらと思つた。

「藪柑子が紅らんでゐてね。少しばかり持つて來た。」

弓島はまた秀子のかいた和歌と日記があるが、あれを印刷にして知己に分たうと思ふたが、氣がすすまないのと、本人がああいふ內氣な方だから止めると言つた。わたしは同感した。

かれの家を辭すときに、まだ秀子が襖のかげからさようならを言ひさうな氣がして、下駄を足の指に引つかけながらわたしは何かに躊躇らひ、また胸をつかれるやうな氣がしてならなかつた。北明りの玄關の間に鏡臺がまだ置いたま

ま、けさあたり弓島が誰でも剃つたのであらう、モスリンの被ひが除けられたまま寂然と片明りを光らせわたしの眼にうつつた。

「何か、忘れものか?」

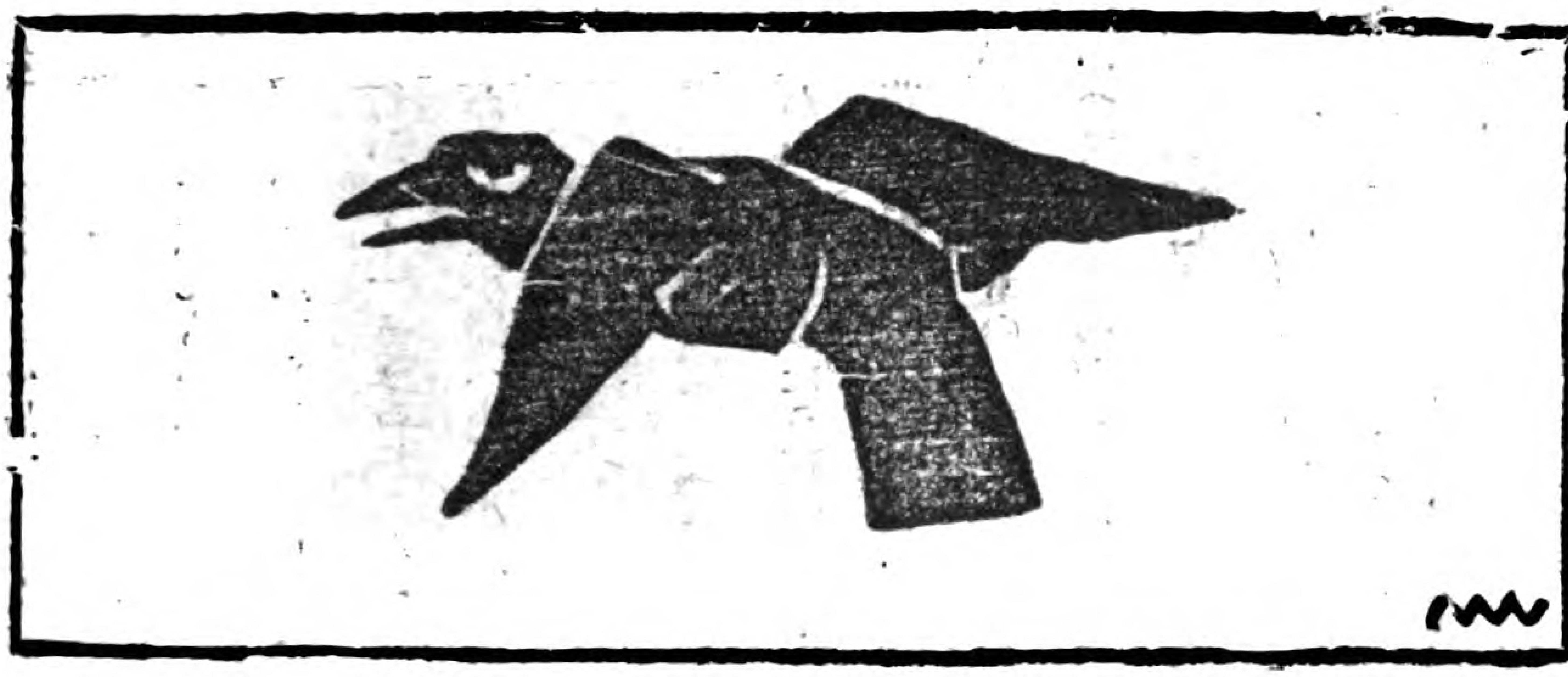
「いや、何んでもない。日曜にはやつてきてくれ。」

「行かう!」

わたしは小路へ出て小路を曲つた。そこから坂の中程へ出ると何日かの氷砂糖で歯を痛めた晩の顔を思ひ出した。

わたしはとうたう花輪を編んだ。

花には露も清氣もないかも知れない。しかしこの花輪はずきずき痛むこのごろの疲れたわたしには、やつとあえぎながら編んだものだ。これをお龍が弓島に差し出したやうに、いまは秀子に送らなければならぬ。しかも花は半ば枯れかかつて何時剪つたとも分らない凋んだ花ではあるが……。



小曲

高原挽歌

――友の死の跡を訪ねて、尚ほ一人の友に與ふ――

秋田雨雀

一

輝け、輝け、大きな太陽
この廣い高原の上を明く照して呉れ
私のセンチメンタリズムを塗りつぶして、明いなごやかな畫面にして呉れ！
未知の古驛よ、貧困と偏屈と反抗に曲められたこの小さな魂を包んで呉れ！
おゝ、靜かな淋しい古驛の道筋を自動車の塵埃で汚すものは誰だ？
憐れむべき近代――呪ふべき制度――近代國家の體形――家庭の暴虐――統制の神秘性！

友よ、お前はよく捨てゝ行つたね！
お前の後に殘るものは絶えざる人類の鬪爭だけだ！

二

靜かな古驛の道を私の車は走つて行く。
輕い羞耻を藏した靜寂に胸を波打たせながら、私は友の家に急いで行く。
七月の紫外線を浴びながら私は友の家へ急いで行く。
戰つて倒れた友の歩いて行つた暗い道を憶ひ出しながら、友の家に急いで行く。
輝け、輝け、大きな太陽、
この廣い高原の上を明く照して呉れ、
私のセンチメンタリズムを塗りつぶして、明いなごやかな畫面にして呉れ！

三

病める友は私を迎へて呉れた。
センチメンタリズムを、諧謔と怒號で隱さうとする友よ、
私はお前と故人の兄弟との間に起つてゐる爭ひを知つてゐる、
私はお前の怒りを知つてゐる、そしてその正しいことをも知つてゐる。

然し、私はお前と一緒に怒りたくはない。」
私は淋しい。
私は生れて初めてこんな大きな淋しさを感じた！
私はお前の前に行く時、何も言ふことが出來なかつた、言ふ必要がないやうな氣持さへされた。
然し、友よ、
私はこの爭ひの最初にゐたら、もつと別な道を選ぶことをすゝめたであらう。
私はきつとお前と爭つたかも知れなかつた。
だが、もう遲い！

四

高原の上に星が輝き出した。
おゝ、何んといふ、いゝ小鳥の聲だ！
禁獵區の自由を味ひ、日中の舌の疲勞をも忘れて、
永遠に眠りを知らないやうに、
夜まで鳴きつゞける小鳥達！
私達を、死んだ友の森の中へ案内して呉れるのか？
天鵞絨の森の中を縫ふ一筋の道、

芝草の上に露、
小徑の上に小石、砂利、
蟲が鳴いてゐる。
彼等は、
この道を歩いて來たのだらう。
こゝはステーションからの近道だ。
「私達は長い道を歩いたので濡れそぼちながら、最後のいとなみをしてゐる……」
と彼は書いてゐた。
おゝ、「濡れそぼちながら」！
黄金の燈火をかざす月見草の群、
何んといふ質朴な崇嚴さをお前は持つてゐるのだらう！
一年前にこゝを通つた二人の人間を見なかつたかへ？
見たら、私に話して呉れ、二人は何んな風をしてこゝを通つて行つたか？

五

友は二人の棺の置かれた場所を太いステツキで指示した。
こんもりとした林の中の小さなスロープ、

死の家を取り毀つた後の淋しい空間、
その空間の中から頭を擡げてゐる青々とした芝草、
怖しい吸血鬼を監視でもするやうに、他所から運ばれて來た寛文年間の小さな石佛の手持無沙汰さ、
さあ、月見草の燈明をお前のために燈してやらう。

友は又ステッキを擧げた。

階段――書齋――居間――食堂――ストオヴ――そのストオヴの前！

こゝだ！

彼等が最後に現世の呼吸を拒んだのは！
大きなテーブルの兩端に彼等は最後の美しさを殘して行つた！

短い沈默がその小さな方形の屋敷跡を凝視した。
私達はその地點に歩み寄つた、子供が暗い室に使ひに行くやうに。

「こゝに小さな書齋があつたよ」

と友は次ぎの空間に歩いて行つた。

「吃又の死」――貧窮と藝術に對する異狀な同情を示した質朴な藝術、
アンドレエフの「人の一生」の一節を憶ひ出させるやうな可憐な詩篇、
見えを張らない小さな一つの花束のやうな小品、
が、この小さな室で彼と反對に產聲を擧げたのだ！

「吃又の死」が、役者によつて餘りに美しくされ、華やかにされてゐるのを私は悲しむ。

六

「喜びと悲しみを、苦闘と決意を尚且つ漲ぎる哀傷と惱み、溢るゝ苦痛と愛情を語つたやうに」思はれる友の生涯を、餘りに英雄的にした世の中の人々を私は憎む。

友は最も謙遜な使徒の一人だつた。

この謙遜さは友を藝術の世界に導いたのだ。

この謙遜さは自己の破滅を是認させたのだ。

彼は高慢であつたならば、

彼は僞善者であつたならば、

決して、決して

死なゝかつたであらう。

彼は偉大ではなかつた。

彼は貧しい一個の人だつた。

もし私達が未來の人類の姿を想像し得るならば、また望み得るならば、それは確かに彼の平凡さの中にあつた。

七

…………………………
おからさまに言はう。
大千世界は瞳のなき眼だ。
みひらいたまゝ、瞬きをしない眼だ。
…………………………

八

細い、細い月が小舟のやうに浮んでゐる
怪しくも私達の後をつける人の氣配、
誰だ？
友の死靈でないことだけは事實だ。
何かの死靈なのか？
死靈よ、お前は例へ何んなものゝ死靈であつても、私は憎んではゐない。
あらゆる死靈よ、私はお前に接吻することが出來るであらう！

九

高原の上に顔が來た。

小鳥の音の驚くべき襲撃！
無數の無數の、
多種多様の舌の音樂、咽喉の音樂！
「あの友は朝の小鳥の歌を聽いて死んだらうか？」
と、病める友が私に言つたことがあつたつけ。
ほんとにこの美しい合唱を後にして、人はこの世を去れるであらうか？

十

私達は高原の上を野薔薇と山百合に迎へられながら、
友の遺骸を燒いた火葬場を探して歩いた。
小さな林を幾つか越えた、細い十字路の右手に小さな火葬場があつた。
赤く錆びた鐵板 ― 鐵條――冷酷な死籠――燒棒杭――鐵箸。
二人の遺骸を燒いた野天の死の床には、鐵道草と鬼たてが二列に并んでゐた。
おゝ、こゝに彼がゐた。
それから、こゝに彼女がゐた。
山あやめ――
みや子草――

おだまき
、から茶——
野薔薇——
何の花を摘んでやらうか？
何んでもいゝ出來るだけ多くの花を摘め、そして友の死の床を花で、花で、花で埋めてやらう！

——1a 1. an de Julio ,1924——



西行法師

上司小劍

其の一　伊勢路の問答

東から來た僧と、西から來た僧とが、伊勢路の細道で往きちがつた。釣瓶おとしに暮れて行くといふ秋の日ざしは、だいぶ傾いて、鈴鹿の山のほとりに、白雲がふはり〳〵浮んでゐる。道が細いので、二人の法師のかぶつた笠は、バツと音立てゝ摺れ合つた。

『これはごめん下されい。』西から東へ行く僧が先づさう言つて侘びた。太い咽喉から朗らかに出る聲は、相手の胸へ撞木で突かれるやうにこたへた。

『いや、なかなか。愚僧こそ。』

さう挨拶した法師の聲は、細いけれど、鋭かつた。年はいづれも同じ恰好で、まだ若い。筋骨逞ましい偉丈夫二人を、同じやうな墨染のころもの、世棄人にしておくのはもつたいないと思はれた。

『お坊はいづれへまゐられる。』

もう往き過ぎて、二人の距離が一間にあまつた時、西へ行く法師が振りかへつてから聲をかけた。東へ行く法師は、振りかへらずに歩いたまゝ、

『尾張まで越え申す。』

さう答へた聲は、前の太い聲とは、全く別の人の口から出たかと思はるゝほど、鈴を振るやうに、清く美しかつた。西へ行きかゝつた法師は、圓い頭を振り向けたまゝ、足をも遂ひにこつち向けて、草鞋の足輕くバタ〳〵と蹴り立てつつ駈けて來た。東へ行かうとする法師のころもの袖を捉へんばかりにして、西へ行かうとする法師の言ふやうは、

『愚衲ことは、一所不住の身の、圓心と申すもの。願はくは法師の御名を明かさせたまへ。世にも尊き聖と見向け申すほどに。……』

東へ行かうとする僧のそれに答へて、

『まだ若年の修行も足らず、言はど俄か道心のえせ法師、名を名乘るほどのものではござらぬが、……』と言ひかけた時、あつちの法師が網代の笠をとつたので、こつちの法師も同じ笠のやゝ新らしいのをとつて、互ひに初對面の顏と顏とを見合せた。こつちの法師は、いづれかと言へば圓形の無邪氣な顏をしてゐて、濃い眉が眼尻とゝもに下がつてゐる。あんな粗末な顏についた唇の厚い口から、どうしてあれほど威嚴のある聲が出たのか、時には太くて銅鑼の如く、時には細くて鈴の如く、まことに變通自在の音調だ。あつちの法師は細面の色白で、笠をとると、姿が俄かに華奢に見える。再びうや〳〵しく一禮すると、

『願はくは、法師の御名を。――』と、これも成るだけ朗らかな聲を出さうとした。

『愚衲は西行と申す。』

さう答へたこつちの法師の聲は、もとの太い聲にかはつた。

『西行と申されて、東へ行かるゝか。』と、あつちの僧は異なことを言つた。

『本來無東西、西行の西は方位の西でござらぬ。』

こつちの法師の聲は凛として、よく響いた。さながら鐘を鳴らすやうに。さまざまの聲音が一つの口から出るのには、あつちの僧もたゞ驚くほかはなかつた。

『今から法師の御弟子として事ふることをゆるしたまはるべきか。』

言ふことがあまりに突然であつた。しかしこつちの法師は別に驚きもしなかつた。つくづくとあつちの法師の様子を頭のてつぺんの小さな禿から、足の草鞋の爪さきの摺れやうまで眺めて、

『弟子をもつほどの身柄でもござらぬ。今申したとほりの青道心ながら、共に一所不住の修行を積まんと存ぜらるゝならば、氣の合ふ間は、影をならべて、日を暮し、夜をあかし申さう。』

こつちの法師西行は、いやに謙遜もしなければ、また高ぶることもなく、とにかく、其の圓心といふ僧と同行することを約した。そこで圓心は西へ向いてゐた足を東へ向けかへて、東へ行く西行法師の後につゞいた。

其の二　二見の浦の花籠

この時の西行の旅は、尾張までゝ後戻りをした。後戻りと言つても、一所不住の西行には往くも還るもないといふのが、ほんたうであつた。伊勢から尾張まで行くのも、實は俗の世の用事と申すものはないのであつた。歩きたいからブ

ラリを歩いて、十幾里の道に草鞋を摺り減らしたといふに過ぎなかつた。道々西行の眼に映るものは、第一に雲であつた。第二に山であつた。第三に野であつた。第四に川であつた。しかしながら、海があつたら、第一に海を見る。西行の第一に好きなものは海であつた。海がなければ海の代りに雲を見た。

第五に人を見る。西行は人間を見ることを厭ふた。彼れが都に居るのを嫌つたのも、人を見るのがうるさかつたのだ。けれども、彼れはまた決して、全く人間を見ないでくらずといふことも出来ないのであつた。人間を嫌つて、人間の臭ひに遠ざかつてゐても、時折りふと思ひ出して、人間に逢ひたくなる。彼れが和歌の會を催して、假りの庵の前に人を集めるのも、好きな和歌のため、自分の生命としてゐる和歌のためにはちがひないけれど、一つにはまた人が戀ひしくなるから、人を集める手段に用ゐるのでもあつた。もとより彼れは人間よりも、海や雲が好きにちがひなかつたけれど。

西行は海の見えない、……海のないといふことによつて都が嫌ひだつたのだ。第一に海を見るため、さうして、うぢやくした多くの人間どもから別れるために、彼れは厭離穢土欣求淨土の心で、都を棄てたのである。都を棄てた彼が第一に拾つたのは伊勢の二見の浦であつた。

『海が見えるわ、海が見えるわ。……』

恍惚として二見の浦の岸に棒立ちとなつた西行は、かう叫んで、心ゆくまで海に見入つゝ、日の暮れるのを忘れた。海を見て、雲を見て、彼れは十分に堪能した、眼までが疲れたやうに。

時しも夏の初めであつたから、夜の汐風に吹かれてゐても、肌の寒みをおぼえることはなかつた。日が暮れかゝると、海は先づ足もとの岸の方から暗くなるのをおぼえた。沖合遥かに、一條の光がいつまでも明るく横に棚引いて見えた。西

行は其の時まで岸の岩に破れ笠を敷いて、腰をかけてゐたのである。明日の朝は、あのあたりから日輪があか／＼と昇らるゝことであらう。さう思つて、西行は念珠爪繰りつゝ、兩手を合はして、東の方遙かに海の上を拜んだ。

腰をおろしてゐた岩の上を、其のまゝの夜の床として、中肉中背の西行が、手足を踏み伸ばすには十分であつた。笈の中から取り出した小さな紙帳の片隅を笈に引つかけて、笈の方を手枕に、西行の夢は、固く冷たい岩の上に結ばれたのだ。

夢に自分を見出した西行の姿には、まだ頭の上に烏帽子があつて、身には狩衣を纏ふてゐた。あゝアいやだ、いやだ、いつまでこんな身形をしてゐなければならぬかと思ふ心は、どんなに深く西行を苦しめたか、彼れは夢中で、うん／＼唸りながら、身を踠いて、三分ばかりに伸びた今道心の圓い頭をば、西瓜でも轉がしたやうに、紙帳の外へ出してゐた。うん／＼と唸るので、大きな口が少し開いて、白い齒が水晶のやうに見えてゐた。剃つた頭の毛は伸びても、衣は墨に染めてゐても、身體の部分／＼を汚なくしておく西行ではなかつた。齒や爪はいつもよく磨かれ、鼻の穴や耳の孔は、しじゆうきれいに掃除されてあつた。西行の一番嫌ひなものは、目脂を溜めてゐる人間であつた。人間といふものが嫌ひな中にも、わけて目脂を溜めてゐる人間が嫌ひであつた。

かゝるところへ、背無山の方から、のそ／＼來かゝつた一頭の野犬は、星明りに、岩の上の圓いものと、夜露にぐつしよりとなつた紙帳とを見た。ハテ變なものがあるわい、食ひ物ではないかとでも思つたらしく、饑ゑたる野犬は、鼻をひこつかせつゝ、海岸の岩の上に來て見ると、轉げてゐた圓いものは、まだ若い僧の頭で、ぐつしよりとした變な形のものは、羊でなければ食ふことを知らぬ紙だ。野犬は失望しながら、圓い頭を前脚でちよつと引ツかけてみたが、色の白い顔から大きな胴へ、しツかりと繋がつてゐるので、ビクとも動かない。手枕はいつしか外れて、圓い頭は固い岩の

上へ轉げ出しさうな恰好で蹲つてゐても頸から胴へ繋つてゐるので、玩具にもならない。もう狗兒(ちんころ)ではないのだし、殊に腹が空いてゐると來てゐるから、首を轉がして遊ぶ氣にもなれないのだらうが、それでも野犬はまだ前脚でちよツかいをして、圓い頭をちよツとやつてみた。しかし頭は動かないで、少し開いてゐた口は半分ほども開いて、圓い頭が、『むにや〳〵。』と言つた　野犬は今朝からまだ食物らしい食物を載せたことのない長い舌……今しがた路傍で人糞の新しいのをむしや〳〵やつた其の赤い舌をペロリと吐いて、それからペロ〳〵と僧の口の周圍から胸までを舐めまはした。

けれども僧は眼をさまさない。

其の時、僧――西行――の夢には、佐藤義清と名乘つた在俗の折りの苦しみと惱みとがまざ〳〵と浮んでゐた。潔癖の彼れが人糞を喰ふた犬に口を舐めらるゝのは、もとより、忌はしいことにちがひないが、それにも增して彼れは俗の世の夢を見ることが苦しく惱ましいのである。

俵藤太秀鄕九世の孫として生れた佐藤義清は、父祖の勇氣を遺傳して、腕が强く弓が巧みであつた。少年の頃から六韜三略の兵法を敎へられて、軍人(ぐにん)に仕立て上げられるために生れて來た人間だといふ形を見せてゐた。それが又彼れ自身にも得意であつた。其の得意が厭や氣と變じたのは十八九の頃からである。彼れの苦惱はこの時から始まつた。殿上人が一心不亂に戀をすることばかり考へてゐる間に、五位以下のもの、殊に北面の武士たちは、弓を射ることに精を出してゐた。六韜三略の兵法なぞといふ、愚にもつかぬむづかしいことも習はなければならなかつた。六位の藏人を除いて、五位以下の昇殿を許されぬ仲間は、先づもつて牛馬も同樣であつた。犬猫と言ひたいが、犬はとにかく、猫は自由に紫宸殿の階段を昇つて行くし、淸凉殿の簀椽で晝寢してゐるのではないか。西行の厭世は先づそこから萌した。

後鳥羽の院の北面の武士、從五位の下、左兵衛尉、藤原秀郷の裔。……そんなことが何んの誇りだ。紫宸殿の階段の一番下にさへ足一つ蹈みかくることはならぬ。それが何んだ。何がどうした。

彼れは心の不平を和歌に寄せようと思つて、それを詠み習ひはじめたが、少しばかりの和歌のことが解つてくると、もうそんな殿上人に對するあさましい不平なんか、霜に煮え湯を注いだ如く消えてしまつた。何んだつまらない。ばか〳〵しい。おれは歌さへ詠んで居ればいゝのだ。世の中に和歌ほど尊いものはあらうか。おれの足は紫宸殿の階段を跨ぐことは出來ずとも、清涼殿の床を蹈むことがならずとも、おれの歌は其の檜皮葺きの屋根を突き拔いて、雲の上までも舞ひ騰つて行く。何が何んだ。それがどうした。

和歌の道に深く入つて行くに從うて、彼れの心は、物の哀はれに痛く感動するやうになつた。おれはまだ若い、若いからなほさら哀しい。

彼れの詠む和歌は、いつしか雲の上まで聞えた。しかし、彼れはそれを嬉しいとも喜ばしいとも思はぬまでに、いちぢるしくあくが拔けた人間となつてゐた。いやいや彼れは恐らく人間となつてゐるのがいやだつたかも知れない。雲の上まで聞えやうが、地の底まで響かうが、彼れはもうそんなことに頓着しなかつた。彼れの歌は詠まんがために詠むのではなくて、ひとりでに、心の底から湧き出づる泉であつた。人の世の不平を忘れ果てゝ、ひたすらに物の哀はれを知ることの深かつた彼れは、また其の、物の哀はれさへも振り棄てゝ、枯れ果てた淡い〳〵心の中に身を置くやうになつた。置くといふよりは引ツかゝつてゆら〳〵してゐるといふのが、彼れのほんたうの氣持ちであつた。この俗の世は、たとへば笹蟹の蜘蛛の巣で、おのが身は、偶然それに引ツかゝつた散る花の一片のやうなものだ。風に吹かれてゆらゆらしてゐる間が一生涯だ。と、彼れは想つた。月に物のあはれを感じつゝ、かこち顏に涙をこぼしてみても、月の方で

は何んとも思つてゐない。……なげけとて、月やは物をおもはする、かこちがほなる我かなみだかな。……それが彼の人生觀をなした。彼は遂に冷やかなものになつた。

北面の武士に、歌詠むおのこあり、其の名を佐藤左兵衛尉義清といふ。……かういふ評判が都にいつぱい弘がつた。義清の歌は、先づ當代の歌人にも並びのないものぢや。といふ噂さもおひ〳〵に傳はつた。本職の弓を射る業や長卷を揮ふ術に秀いでたとて、なか〳〵に出世の思ひも寄らなかつた、物事のすべて停滯した、食もたれの胃囊のやうな世の中では、武門に生れて六韜三略に通ずるよりも、歌に秀でた方が出世の綱に取り付けるのであつた。彼れの歌に秀でたのが、院の叡感に入つて、檢非違使に補せらるべき旨が下つた。

北面から檢非違使になるのは、たいした榮れである。誰れでも喜び勇んで受けるにきまつてゐる。彼れの歌の德がこの出世を齎らしたのである。しかし、彼れは固く辭退した。拗ねたのでも、扳ぢけたのでもない。彼れは、强權を笠に着て、人の罪を糺すといふやうな氣になれなかつた。正直な彼れの眼には强權其のものゝ基礎さへぐらついて見えた。それを首にいたゞいて、人の罪を糺明する。……そんなことか出來るものかと、彼れは思つたのであつた。人に罪といふものがあるかないか、彼れはそれをさへ疑つた。たとへばこゝに、餓ゑたるものがあつて、人の家に忍び込んで、したゝかに飯をまゐる。…それが罪であらうか。よしんば罪であるにしてからが、其の餓ゑたるもの一人の罪であらうか。それを罪として捌かなければならぬ檢非違使とは、正しき官職なるやいかに。……さうした疑ひが彼れの胸にいツぱいであつた。

彼れは何んと勸められても、檢非違使はいやだと言つて斷つた。親族のものは皆彼れの不心得を責めるために集つて來て、くど〳〵と說き立てたけれど、彼れはどうしても、うんとは言はなかつた。「この阿呆め、たはけめ。」といふこと

に、親族會議は議決して解散した。

其の後、後鳥羽の院の新殿の普請が落成して、書障子に貼られるために、當代の歌人から歌を徵された。彼れも其の撰にあづかつた。盛んに緣故を辿つて、撰に入らんことを、血眼で望むものゝ多い中で、彼れはもとよりそんなことをろくに知らないほどであつた。そこへ歌を徵す院の使がやつて來たので、彼れは卽座に、無造作に、十首の歌を詠んで渡した。さうして、あくる日はもう其のことを忘れてゐるといふ風であつた。

ところが、其の十首の歌は、いづれも上皇の叡感に入つて、恩賞に朝日丸の寶劍を賜はり、別に當今からも恩賜の御品があつた。檢非違使の辭退で面をふくらしてゐた俗物の親族どもゝ、これを聞いて、またドツと彼れの許に押し寄せ、口々に喜びを述べるのであつた。しかし、彼れはニコリともしないで、苦り切つた顏を多くの俗物どもの顏に向けてゐた。朝日丸の寶劍は、袋に入つて箱に納められたまゝ、轉がすやうに置いてあつた。

『この身體は、昇殿を許されんが、詠んだ歌は新殿の書障子にへばり付くさうな。』

かう言つたのが、彼れの親族どもに對する挨拶であつた。一生昇殿を許されないことも、今の彼れにはもう何んでもなかつた。彼れの心では既に人間を止めてゐるのだ。紫宸殿に昇るよりは、比叡山にでも登らうかとさう思ふのであつた。しかし彼は權力に結び付いて威張らうとする當時の天臺或は眞言の職業僧侶をば、何ものよりも憎んでゐた。表から昇れないから裏へ廻るといふ風に、權勢名譽の失意者または憧憬者が、其の權勢名譽の搦手を佛門に求めて、黑い袍の代りに赤いころもを着て滿足するやうなことは、嘔吐を催すほどいやであつた。世を棄てゝしまつて、『雪の降る日は寒くこそあれ。』ぐらゐの感じを俗の世におぼえてゐる。それが彼れの願ひであつた。

彼れは、親族一門の前に、朝日丸の寶劍を拔き放つて、とツくりと見ながらさめ〴〵と泣いた。泣くことの嫌ひな彼

れの泣いたのは、これが初めの終りかも知れぬ。俗物どもは、彼れが恩賜の忝けなさに、感涙を催したものと思つて、嚴肅とやらいふ心持ちになつたらしく、謹んで彼れの一擧一動を凝視してゐた。

彼れが寶劍を見て泣いたのは、この銳い刃にかゝつて、これまで幾人の生命が絕たれたかといふことを考へたためであつた。これからもまた、この骨までブツ〳〵と斬れさうな刃で、多くの人命が奪はれることもあらうかと、それを悲んだのであつた。不祥の器兇器を錦の嚢に納めて寶とする恐ろしい人の心に慄へたのであつた。彼れは朝日丸を鞘に納め嚢に納め箱に納めて、それからどこへ持つて行つたか、其の後一人もこの寶劍を見たものがなかつた。

彼れはかくして、出家遁世の意を決したのであつた。先づすべての官職を辭さうとしたが、許されなかつたので、彼れは身に附いた垢も其のまゝにと、辭職の手つゞきをとらずに、妻子を棄てゝ、嵯峨に走り、頭髮を剃りこぼつて僧の形になつた。時に年二十三歲。

『はゝゝゝ。』と、彼れは先づ鏡を見て笑つた。心でさへ世を棄てゝ居れば、何も頭を圓めたり、わざ〳〵墨染のころにも及ばないものをと、彼れは自分のしたことが些か見戲に類したのを、自ら嘲笑つたのでもあつた。彼れの若い妻も、あとから獨りで高野の天野に入つて尼となつた。

桑門に家なし、行脚して身を終らう。とは彼れが在俗の時に考へたことであつた。それで彼れは、僧となるなり、すぐ旅に出たが、一所不住の身も、伊勢の二見浦の風光にはあこがれの心を生じて、暫らくこゝに執着することになつたのである。初めは海の岸に近く假りの庵を結んでゐたが、あまりに汐風が荒すぎるので、やゝ海岸から遠ざかつたところに移つて、そこに草を茵として坐つたり寢たりした。一日に一度は、必ず海岸に立つて、水と空との涯なし浦を心ゆくまで眺めた。尾張まで行つて、圓心といふ弟子を得たのはこの時であつた。

一人が二人になつてみれば、庵も取りひろげなければならぬ。一つの笈が二つになつて、笠も二つ並べてかけられた。其の下に古びた花筐一つ、これが彼れの都における生活と在俗の頃の姿とを偲ぶべき、唯一つの記念品のやうなものであつた。今はこれがいろ〳〵のことに使はれて、好める道の和歌の會の折には、文臺ともなる。いゝあんばいに、まん中の窪んだ手頃の石が、路傍から硯として拾はれ、ちやんと花筐の上に載つてゐる。

北面のうちでも家が有福で、君寵も世の常ならず、祖先傳來の財寶あまた蓄へた彼れの家から、彼れは出家の折り着のみ着のまゝ、何一つ持ち出さずに、後に慕ふ幼い女兒を蹴倒して、嵯峨の奥へ逃げ込んだのであつたが、其の手にどうして、この花筐を一つ持つてゐたのか、それは彼れにも不審なのである。何ものにも執着のない彼れではあるが、この花筐ばかりは、どんなに古びたとて、棄てかねるものゝ唯一つであつた。

其の三　秋の夜がたり

一人が二人になつて、西行は、二見の浦の庵の狭いのを少しづゝ取りひろげつゝ、ニコ〳〵と上機嫌であつた。

『師の御坊に窮屈をお見せ申して、恐れ入ります。』と、圓心はあやまるやうに言つた。

『いやとよ、わしの家は廣い。天から海までつゞいてゐる。何萬人の弟子が加はつても狭くはない。しかし、わしは獨りが好きぢや。一よりも二人、二人よりも三人、三人よりも五人、五人よりも十人、十人よりも百人、百人よりも千人と、人數を殖やして强がる北面武士は見るのもいやぢやつた。北面ばかりぢやない、俗の世で力を根にして繁らうとする人間は、皆さうぢや。山賊のやうに一人でも多くの手下を集めて强がらうとする。けれども其の强いのが何んぢや。鉞一本急所へ打てば死ぬ人間に何んの强さぢや。わしはもうそんなうるさい世を棄てた　わしには强いも弱いもないわ。

わしは一人ぢや、半分ぢや、四半分ぢや。いや其のわしといふものもまるでないのぢや、影法師ぢや。お前も影法師ぢやらう。二つの影法師が草の庵に映つてゐるのぢや。一人も二人も同じことぢや。三人が五人になつても、この心さへ失はなんだら、一人も同じことぢや。いや無人も同じことぢや。世を棄てた身には人の數もないわ。まア〱氣がねせずに居れよ。其のうちまた別れることもあるぢやらう。白雲の合ふては離れるやうに。おはゝゝゝゝ。』と、西行は快濶に笑つた。

秋がいよ〱深くて、蟋蟀が枕の上に鳴いてゐた。圓心はしんみりした口調になつて、

『わたくしの出家のもとは、申すも羞かしながら、女のことにござりまする。最愛のものに別れて、何を樂みに生きませうかと、一時は覺悟もいたしましたが、身を棄てるよりは世を棄てよと思ひなほして、沙門の道に入りました。しかしながら今もなほ、をなごのかたみは、しかと所持して、時折りは昔しの姿をこれに偲んで居ります。』と、涙ぐましい顏をそむけつゝ、圓心が笈の中から取り出したのは、一面の小さな鏡であつた。西行はチラと見て、ニツコリした。

『お前が、時々取り出して、泣いて見てゐたのはそれか。それもよからう。わしの花筐を見てくれい、あれはわしの昔しのかたみぢや。しかし、わしは子の愛著に出家を妨げられかゝつたが、女に心は惹かれなんだぞ。』

『うけたまはりますれば、師の御坊は、北面のうちにも家柄わけて正しく、君寵も人に超えて芽出たかりしとあるに、何を不足と思し召して、世を棄てさせたまひしか、こゝのところをよく敎へたまはりて、わたくしの愚かさを啓かせたまへ。』と、圓心は涙片手に、せがむやうな物の言ひかたをした。

『人の世の不足を言へば數々ある。慾には限りのないものぞ。それを想ふと、女一人のために世を棄てた御身よりも、このわしの方が恥かしい。しかし今ではもうそれは夢の夢ぢや。よい歌を詠まうといふよりほかに慾のない今の身に、

昔しの富や黄金や位は洗ひおとした垢のやうなものぢや。思ひ出して語るにも臭さゝをおぼえるが、秋の夜長の眠けさましに語つて聽かせやうか。聽きたくば聽いて居れ、これはわしのひとりごとぢや。』

さう言つて、西行の口から、蟲の音に合はせるやうにして、縷々と昔しの思ひ出話がくり出された。昔しと言つても古いことではない。西行はまだ若いのだ。

『わしは泣くことが嫌ひでなア。』と、西行の話は、この一句から始められた。其の長ばなしはかうだ。

北面の武士は、よく弓を射て遊んだものだ。遊び事にも人を殺す術を忘れぬのが武士といふもの。西行――其の頃の義清――もいや〳〵ながらそれにまじつて、幔幕を張りめぐらした弓場に立つた。

或る時愛娘の三歳になるのが重い病氣にかゝつたので、義清は妻とゝもに、其の枕邊に附き切りで、看護してゐた。正直にいふと、其の時の義清には娘の病氣を心配する心とゝもに、とても助からぬものなら、早く死んでしまへ、といふ鬼のやうな蛇のやうな、冷酷な心が、可なり盛んに働いてゐた。そこへ北院の北面どもが、カヤ〳〵と弓場へ行く誘ひに來たものだ。義清は、また弓か、とうるさく思はぬではなかつたけれど、日なが一日、病める娘の小さな枕頭に附いてゐるといふのも退屈で、病兒の無理を言ふのを聞くのが可なりうるさかつた。そこで、彼れは、

『やア行かう。』と、同輩の誘ひに應じて、藥煎じてゐた手に弓と矢とを持つて、勢ひよく表へ出た。其の後姿を見送つた妻は、夫が仲間の附き合ひに、心ならずも、つとめて、生得嫌ひな、嫌ひでも其の術には堪能した弓矢を手にして、いやさうにもせずに出て行つた胸の裡を察して、ハラ〳〵落涙した。弓矢を片手に無造作な摑みやうをした義清は、弓の上筈で障子を突き破つたのも知らずに、妻の泣顏をふりかへつて、涙の嫌ひな心に忌々しさを感じた。

『何故に泣く。』

さう言つて詰るやうに問ふた際は、凛として凄かつた。

『お胸の裡をお察し申しまして。……』と、妻の言葉は簡單であつたが、其の心は奥底まで讃めた。俗はそういふことを考へて、自分に同情してゐるのか、と義清は心のうちで嘲笑つた。弓を引いて、矢が的に中るのを競ふといふやうな子供じみたことに、義清はいさゝかの興味も感じないし、熱情を起しもしないし、其の上、これがむごたらしい役人の稽古で、曾つて保元の亂に、鎭西八郎の弓勢が、一矢に二人の胸を貫いて、血に染つた鏃の餘力は門の扉を穿つたといふやうな、あさましい話を美しい譚と聞かなければならぬ身の因果が、つくぐ情なくなるばかりであるけれど、さりとて、とても助かりさうもない病兒の枕頭に坐り切つて、其の苦しみを見ながら、妻の愚痴を聽いてゐるのも、たまらないことだ。其のたまらなさから遁れるがために、いやだけれども弓を引く。……まアそんなところだ。それが妻の心に買ひかぶられて、同情の涙に見送らるゝとは、かたはらいたい次第である。自分を最も理解してゐる筈の妻でさへ、自分の行動を誤つて觀察するのだもの、同じ家に住まつてゐない他人が、自分といふものを、ほんとうに知つてくれないのはあたりまへのことだ。同じ時代に生れ合はした人間にさへわからぬことを、後の世の人たちが、どうして想像し得やう　自分は一生昇殿も許されぬ北面の家に生れて、いづれは遁世出家の望みを果たすつもりだから、いづこの野か山かに草亡木卒して、後の世に名を傳ふるおそれはないが、若し過つて、歴史といふ僞りの記錄に自分の形が殘ることゝもならば、似ても似つかぬ變な姿に描かれて、いつまでも恥さらしをすることだらう。後の世人から言へば、いゝ加減な人形を紙の上に踊らして、あれはどう、これはかうと、勝手にきめたのを、まじめくさつて眺めてゐればよいので、ほんとうにあつた人間とどれだけちがつてゐやうと、それは構はぬ。大まじめで嘘を吐く。……それが國の歴史とい

ふものぢや。記録といふものぢや。

義清はそんなことをも考へ〳〵、郎等一人を具して、誘ひに來た同輩とゝもに、北面の弓場に來てみた。源次兵衛尉とて、義清と一番氣の合つたのが、喜んで迎へた。『御身はとても、わせられぬと思ふたに、ようわせられた。いざ。』とばかりに、的を譲つた。すぐに柄を着けて弓に矢を番へた義清は、厭やでも嫌ひでも、名人は名人であつた。弓矢をとつて、的に向つてみると、いかにそれを詰まらなく思ふ身にも、わざと的をはづそうといふほどの氣にはならないばかりか、やはり一筋でも多く金的を射貫かうとする功名心がそゝり立つた。

『おれも人間ぢやわい。』とつく〴〵思つて、義清は自ら其の卑しさを晒つたけれど、いくら心で晒つても、彼の確かな腕前は、百發百中であつた。鳥が啼く東の國の廣野に武を錬る坂東武士にも、これだけの弓の達者は居るまい。那須の與市が何んぢや、佐藤左兵衛門尉こそは、北面の寶なれ。』と、義清の胸裡を知らぬものは、皆其の弓の功者をば、やんややんやと譽めそやした。しかし、義清はニコリともせずに、さながら機械の如く、矢を番ふては、弦を鳴らしてゐた。的に中つた矢を抜きに行く小者の忙しさ。

其の時、郎等が小走りに走つて來て、主人義清の耳に囁いだ。それは病める娘がいよ〳〵危篤に陷つたといふ急報であつた。しかし、義清は眉根一つ動かさず、輕く頷いて、郎等を歸してから、やはり弓に矢を番へて引きつゞけた。百發百中の手なみのほどに、少しの狂ひだに出さなかつた。矢を番ふひまに、傍で立つて見てゐた親朋源次兵衛尉にちよツとした表情の眼を向けたばかりであつた。源次兵衛尉も、義清と同じく、遁世の志深く、後に西住法師となつた人であるが、世を終るまで、この時の義清の態度に感心して、よく人に語つたといふことである。けれども義清自身には、何も人に感心されるほどのものはないと思つて晒つてゐた。危篤に陷つたものを、こと〳〵しく騒いでみたとて何にな

るか、といふのであつた。彼れはいかなることにも徹底した諦めをもつ。彼れの諦めは底の底まで突き抜いて、掘りぬきの水で冷したやうな諦めである。とても他人に眞似は出來ぬ。この諦めが、勘忍の美德のやうに、西住法師の口から、後の人々に傳へられたのにも、彼れはまた、世を去るまで冷笑し且つ苦笑せずにゐられなかつた。

義淸の遁世の志は、いよ〳〵強く固くなり行くばかりであつた。今はたゞ、ひたすら其の機會を窺ひつゝ、每日〳〵詰まらない、懶い思ひをしてくらしてゐた。一族に左衞門尉憲康といふ好人物があつた。この漢は、北面の武士の家に生れたことを幸福と思ふほどのものゝ、日々の勤めにも、倦みはなかつた。義淸とても世を棄て俗を遁れたい心はやまやまながら、日々の勤めは勤めとして、怠ることの出來ぬ性分であつた。厭やではあるが、馬鹿らしくはあるが、するだけのことはちやんとした。餘計なことに毫末も手出しをしないとゝもに、しなければならぬことに、露いさゝかの怠りはなかつた。そこで、憲康の生活とは、根底的に思想の隔りの異常に遠いのは、もちろんであつたけれど、表面だけは、几帳面といふことで一致した。院への通勤にも、キチンと時刻を過らぬものは、憲康と義淸とこの二人だけであつた。退出の時刻も其のとほりキチンとして、餘分にぐづ〳〵と油を賣つてゐるやうなことはなかつた。いつも二人は連れ立つて歸つた。

『さらばまた明日。……』

『明日もいつもどほり、やつがれが誘ひに寄るほどに。』

さう言つて、憲康と義淸とは、憲康の門の前で別れた。ところで、其の夜義淸は、好める道にいそしんで、三十首の和歌を詠じ、深更に臥床へ入つたから、あくる朝は少し起きづらかつた。けれどもキチンとした性分のことゝて、定めの時に一刻たがへず、朝勤の支度とゝのへて、鳥羽殿への道すがら、約を蹈んで朝露のまだ干ぬ憲康の門に、蓉の咲い

たのを見て、表から聲をかけると、いつもの太い『おゝ。』と濁つた憲康の聲は聞えないで、妻なる女が、『義清さま。』と、泣く音を忍んで轉び出た。家の内にも哭く聲が頻りに聞える。義清はたゞもう呆ツ氣に取られて、仔細を訊くと、

『憲康は、ゆふべ、俄の病で身まかり申した。御身とまた今日の朝勤を約束して、家に入ると、いつもよりも上機嫌で、瓶子の半ばほど酒をまゐり、飯もおいしくたべて、横笛を一曲、納蘇利を吹き申したが、それがをはつて、今宵は一しほ音色がすぐれたと思ふわらはの笑顔が、餘韻の漂ふ中に浸つてゐるとき、我が夫はバツタリと俯伏して、……』

と言ひも終らず、妻なる女は泣きくづれた。

『いろ／＼と手あてをして、今一度この世の人としたさに、夜のあくるまで重秀（かゝりつけの藥師）の手で力をつくし申したが、其の甲斐もなう。……それで御身さまへのお知らせもまだいたさいで、おくれ申した。』と、他の家人が出て來て、涙片手に述べるのであつた。義清はたゞ茫然と、天を仰いで、無常迅速の理を、ひたすらに悟るばかりであつた。

それでいよ／＼義清の遁世の意は、もうどうしても動かすべからざるものとなつたばかりでなく、其の決行の期日を早むるもとゝもなつた。半年ほど後、院に願ひ上げたけれど、なか／＼お許しの出るべうもないので、いよ／＼今日こそは、官職を帶びたまゝの出家と、心をきめて、家に歸つて來ると、あの大病をして、一時は危篤にまで陷つた愛娘の、九死に一生を得て、四歳になるのが、父の歸りを喜んで、よち／＼歩み寄り、義清の狩衣の袖を捉へて、ニコ／＼と面を覗いた。其の愛くるしい顏、大病の漸く癒えた後へ衰へも、幼い者は回氣が早く、病氣前よりは、よく肉づいたのに、人の心を蕩かすやうな無邪氣な笑ひを湛へたのを見ては、たとへ夜叉であらうと、氣を和らげづにはゐられない。ましてや生みの父の。…………

けれども、義清は、つく〴〵考へた。我が出離を妨ぐるものは、これであらう。この愛らしく幼いものゝ恩愛を、眞二つに斷ち切つてこそ、我が出家は成就するなれ。なにをこんなものをと、さう咄嗟に決心した義清の魂魄は、金鐵よりもまだ固く、氷よりも更らに冷たかつた。かうと思ひ定めたら、火でも握むし、不淨に手を差し入れて糞尿を握ることすらあつた義清である。彼の胸の底には、到底他人の窺ふをさへ許さざる或る強いものがある。彼れがこれまで、其の勤勉律義を以つてして、其の溫厚柔和をもつてして、其のニコ〳〵といつも笑つてゐる愛想のよさをもつてして、折にふれては、少し拔けてゐるのではないかと思はるゝほどのお人よしを以てして、時々人から、冷酷無殘の鬼畜のやうに、罵られたことのあるのは、この胸の底に秘めたる一片の強さからであつた。かうと決心した上の義清は、もう燒くことも折ることも出來ないものである。彼れは其の強い決心の足をあげて、袂にまつはる四歳の幼兒を蹴倒した。愛娘は父が不意の暴力に驚きながらも、恐れはしなかつた。いよ〳〵ます〳〵父を慕ふて、むく〳〵と起き上るなり、またもや彼れの狩衣の袂に取縋り、腰に抱き付いた。義清は、それをも一そう邪慳に振り離して、突き飛ばし、よろ〳〵とよろめく幼い者の弱腰を、強く蹴落すと、愛娘はころ〳〵緣地まで轉がり落ちて、どこを痛めたか、頓には起き上りもせず、泣く聲さへ立てなかつた。

義清は其のまゝ、家人や郎等の驚き騒ぐ物音を後に、妻も子も祖先累代の金銀重寶も、すべてを棄てゝ、嵯峨の奥へと遁れたのである。前にも言つたとほり、まだ漸う二十三の青年。……名なんぞ無くともよいと言つたのを、無理に命けた最初の法號は圓位で、後西行と改めた。保延六年十月十五日の夕まぐれ、嵯峨野には秋草の上に、時雨が降つてゐた。

其の四　大井川の渡船

二見の浦の草枕にもそろ〳〵飽きが來たので、西行はまた東國への旅を思ひ立つた。圓心と別れて、一人で行かうと思ふのだ。西行はどうしても獨りが好きだ。しかし、圓心は強(た)つても連れて行つてくれいといふ。

『人間は二人以上集ると、どうも思ふやうには行きかねるものじや。お互につとめるといふ窮屈さが出て來て、痺れが切れることもある。獨居の樂々した境地が欲しさに遁世したわしぢやもの。』と言つて、西行は暗に東の旅への圓心の同行を斷つた。

『師の坊の御心はようわかつて居りまする。さあれ、わたくしは何事も師の坊の仰せのまゝに、影のやうにして慕ひまゐりますれば、師の坊に影が二つおはすものと思し召して、東國の旅に御供を許させたまへかし。』と、圓心は泣くやうに頼むのであつた。さばかり熱心なものを振り棄つるに忍びないといふ弱さが、氣の强いのを自負してゐる西行にもあつた。彼れの心の强さは、何かそこに異狀な機會と特殊の背景(バック)とを得て、猛然と起るのであつて、風も起らず波も立たねば、鏡の如く、靜かにおだやかに、おとなしくある。

『それほどに望むのなら、一緒に行かう。』と、西行は碎けた言葉で、圓心の同行を許した。圓心は雀躍して喜んだ

『そちは、何故にまたこの西行をさほどに慕ふか。すぐる日伊勢路の出逢ひに、一こと二こと言葉をかはしたばかりで、すぐ弟子にしてくれと言ふたはどういふわけか。わしのことが、摺れちがふ拍子に、笠をつきあてたばかりで　わかりはしさうもないに。』と、西行は先頃のことを思ひ出して、ちよツと問ふてみた。

『笠を摺り當てました時は、さほどにも思ひ申さざりしが　行きちがふてから　わたくしが振りかへつて吻まをした折

り、師の坊には向ふを向いて歩ませられたまゝ 振りかへらずに答へたまふたのに ほと〳〵感心いたいて、これは世の常の法師ならずと見きはめました。』と、圓心は今もなほ昨日のことのやうに 其の折りの西行の態度に敬服してゐる。

『異なことに感心したものぢやのう。』と、西行も多くを言はなかつた。

『それに……師の坊の御聲の太うなつたり、柔かく 鋭く、いろ〳〵に變るのにも、わたくしの心をうたれました。』と、圓心はなほもしみ〳〵した調子で言つた。西行はニツコリして、

『宮商角徴羽の五音のほかに、まだ幾つかの音のあることを知つて、ひそかに工夫をしてゐるわ。それをそちは悟つたか。』と、些か感心の樣子を見せた。

とにもかくにも、西行はこの圓心が嫌ひでなかつた。圓心はまた言つた。

『わたくしをば、師の御坊にくらべ申すも無しつけながら、同じやうに、この俗世を厭ふて出家を遂げ、樹下石上を宿とする一所不住の雲水の身にはべれど、わたくしは、女の戀に破れて 世を果敢なみましたる上、家も貧しうて、生きるに甲斐なき身の、俗世に思ひを絶つに不思議はござりませぬが、師の御坊にはお家に財寶餘りありて、內方の君も御子も健やかに美しうおはすを、つれなく振り棄てゝまで、遁世の志を遂げ給ひし、御心の强さには、ほと〳〵感じ入りまする。若しもわたくしが、この世に師の御坊御在俗の頃の身分に居りましたなら、出家どころか、今の若さで、樂しいことの限りを漁りまするでござらう。實に師の坊の遁世の御心の强さは 常人をもつて觀ることがなりませぬ。』と、お世辭でも追從でもなく、ほと〳〵感心して言ふのであつた。西行はたゞニコ〳〵して答へなかつた。

西行は出家を遂げても、よろず細心で、何事もキチンとするのが好きであつた。これに反して、圓心はやりはなしの氣まぐれもので、およそものの約束なんぞ、當てにならないことおびたゞしかつた。しかし、西行はそれを咎めやうと

もしない。自分の性癖にくらべて、人を律するのは罪だと思つてゐる。自分は自分、人は人、それだから人と交渉のある俗世の生活が嫌ひなのだ。約束なぞといふことも、他人と交渉のある世に住めばこそ結ばるゝなれ、人を嫌ふて人と絶たば、約束の必要もなくなる。約束なぞといふ窮屈なことに捉へられずに、それを振り切り踏みつぶして行く、自由自在なやりかたでは、とても圓心にかなはないと、西行はこの點で彼れに一目おいてゐた。夕かたまでに薪をおろしておけ、おきませう、と約束はしても、圓心の手でそれがしてあつたことはない。叱つたとて責めたとて、けろりとしてゐる。およそ物事の當てにならぬといふことで、圓心ほどのものはない。これだけでは先方が師の坊ぢやと、西行につく〳〵感心してゐる、

しばしがほどに住み馴れた二見の浦の庵の、柴の戸を結びもせずに、西行と圓心とは、笈を負ひ、笠をかぶつて、東國へと足を向けた。伊勢路を眞ツすぐに、師弟が初めて、ころもの袖をふり合ふたところへ來ると、二人の心はいづれも當時を追想して、ある懐かしみに打たるゝのであつた。西行はこゝで幾首かの歌を獲た。

行き〳〵て、天龍川に差しかゝつたのは、晴れた初夏の午下りであつた。渡し舟には二三人のものが、坐り込んで、船頭の漕ぎ出すのを待つてゐた。西行と圓心とも、先客に會釋して、まん中ほどに坐り込んだ。笈の紐をはづし、笠をとつて、汗を拭いたりした。其のうちに乗り合ひがだん〳〵殖えて來て、舟いッぱいになつた。「出るぞう。」と、濁聲で叫んで、船頭は棹をとつたが、あまりに客が乗りすぎて、川舟の平たい底はベタリと礫と砂との上に坐り込み、船頭がいくら力んで踏ん張つても、舟は動かない。川底に一尺の餘も突ッ込んだ水馴棹を引き抜いて、船頭は「五人ほど後から乗つた客人だけ下りてくれ。」と怒鳴つた。しかし、誰れも聞えない振りして、下りやうとはしない。「こら坊主、下りろ。人を助けるは出家の役ぢや。うぬのやうな賣僧は出家を遂げたとて、九族天に生じもすまいか

ち、せめては一人舟を下りて、乘合の衆を對岸へ渡せ。』と、よしあるものゝ成れの果てか、船頭は洒落たことを言つて、まん中の西行の圓い頭を見つめた。しかし、西行は後から乘つたものが順々に舟の輕くなるまで下りるやうに言つてゐるのだとばかり思つて、船頭の言葉なんか耳に入れずに、自分はまだ二三人しか客のなかつた折りに早く乘つたのだから、下ろされる氣づかひなしと安心して、歌など考へてゐた。スルと船頭は、西行がわざと聞えぬ振りをするのだと思ひ込んだらしく、こやつ短氣と見えて、いきなり水馴棹を揮ひ、發矢とばかり、西行の圓い頭を打つた。咄嗟の間にも身をかはすのは、在俗の頃鍛錬した拔群の武藝で、なんでもないことながら、何分込み合つた中で、乘り合ひの客人に棹のあたるのを慮り、其のまゝ頭のてツぺんに棹を受けた。棹の先きには鉛のやうに鐵が附いてゐたからたまらない。西行の頭の皮は破れ、淺くとも肉が裂けて、血がだら〱と目に染むほど流れた。圓心はもとより、乘り合ひの人々は皆驚いた。

『ざまア見やがれ。』と、船頭は第二の打撃を試むべく身構へたが、西行は自若として神色變らず、血汐の流るゝ頭の上へ笠をかぶつて、圓心を促しつゝ、ゆつたりと舟を出た。乘合ひの人たちの多くは、あまりと言へばあまりな船頭の暴擧を憎みつゝ、口々に慰めの言葉をかけてくれた。

『乞食坊主、糞坊主、奴坊主、早く下りねえか。もう一つこの棹が食らひたいか。』と、船頭は酒に醉つてゞもゐるのか、赭ら顔に凄い眼を光らして、西行を睨み付けた。西行はニツコリして、

『頭は血の氣の多いところ、世を棄てた沙門の身も、血だけはまだ赤うござる。』と、乘合の人々に戯れながら、船からを下りた。眼を瞋らして睨み付けてゐる船頭の前を摺れ〱に、亂暴者の船頭なんかまるで眼中にないといふ風で通つた。旅の伴に同情した乘り合ひの客人は、口々に船頭を罵りつゝ西行とゝもに舟を下りたから、舟は輕るすぎるほ

ど輕くなつた。

『果報のために、急ぎの用の事缺かしては。』と、西行は船頭に代はつて、客人にあやまるやうな、丁寧な物の言ひかたをした。

乘り合の客人はそれで納まつたが、をさまらぬのは、圓心であつた。『をのれ下賤な水夫め、師の坊に無禮を加へ、をつなりに創さへ出かして血汐が流るゝに、一言の詫さへ言はぬ無法者めが、この杖で打ち殺いてくれん。』とばかり喚めいた。

西行は、河原の礫が、初夏の日に燒けて、溫石のやうに暖まつた上へ、氣持ちよささうに腰を下ろしつゝ、

『いやとよ、わしは法の道を踏んで、行脚をしてゐる。こゝまで來て、舟人に辱められたに、たとへ打ち殺さるゝも憾むところはない。水夫の水馴棹なんぞ知れたもの、劍太刀弓矢の前にも、手向ひするのは出家の罪ぢや、其のいつくしみの心を持たずに、剃髮染衣の身となつて何かせん。そちの心にはまだ俗の世に未練がある。人に打たれても人を打ちかへしたとて、をのれの痛みも創もなをるものではないといふほどの損得にかゝはつた諦めも、そちの心にはまだないのぢや。餘のことなら辛抱し合つて、これからも、ともに行脚をつゞくるであらうが、さういふそちの心を看ては行末ともに空をそろしい。もう同行はかなはぬほどに、そちはそちの行きたいところに行けよ、わしはわしの志す方へ足をむけるほどに。……』と、西行は冷に言ひわたして、圓心が何んと言つて詫びせうと、決して耳を傾けずに、さッさと獨りで東の旅への道を急いだ。あの無茶な船頭も、西行の動作の、沈着か、阿呆なものか、えらいのかわからぬままに氣味わるくをぼえたと見え、面をそむけながら舟を漕いで、西行の渡るにまかせた。

其の五　西行と文覺と

東國から西國へと、行脚をつづけた西行は、しばらく生れ故郷の都に足をとゞめて、さすが都では、草の庵も結ばずに、東山は雙林寺の客となつてゐた。家出したまゝの昔の宅には多くの財寶を娘が護つて、父も母も世を逝れたあとを淋しく暮してゐる。出家の身に財寶の用はないのであろうが、祖先秀郷から傳はつた十數卷の兵書は女の身で守護するにも憚りがあるといふので、こたび俗緣の父君西行の都に入られて、東山にをはすよしを風のたよりに聞いた娘は、昔し足蹴にされた折の痛みも、今日はもう忘れてゐるし、露いさゝか怨みはせぬが、自ら出向いて、俗緣に法の修業と歌の詞想とを騷がし奉るも、心なき業であろうと、考へに考へて、わざ〳〵人を差立て、秘藏の兵書をば殘らず雙林寺まで屆けさせた。スルと、西行は大きな眼をかつと見開き、

『この罪惡の書よ、穢らはしき文よ。』と叫びもあえず、兵書を殘らず、庭に蹴おとし、自ら火をつけて、燒き棄ててしまつた。

それやこれやと、いろ〳〵西行の噂さの都に名高く、歌道の譽れの盛んなのを耳にした高雄神護寺の文覺は、彼の西行こそ、奇行を衒うて名を賣るしれ者なれ。まこと遁世の志の切なものあるならば、彼れの妻のやうに高野の天野にでも隱れていればよい。のこ〳〵都まで彷徨ひ出て、いかに昔しはおのれの藏書なりとて、世にも貴き六韜三略の卷を足蹴にした上、燒き棄つるとは、身のほどを知らずたはけ者め、佛法は王法が本ぢや。王に叛き國を亂つて、何んの佛法ぞ。いで折りあらばあの賣僧めに辛き目見せてくれやうぞ、と、文覺は文覺だけのことを言つて荒法師の拳を固めつゝ待ち構へてゐた。

文覺の弟子どもは、これをば事のほか心配した。西行は今天下の名人である。我が師の坊もまた世に傑れたる法師にましませど、軍國主義、戰鬪主義の思想が荒々しくて、徹底平和主義、無抵抗主義の西行法師との對抗は、いはゆる勝つても負ける損がある。どうかして事勿れかしと、ひたすらに無事を希ふてゐた。

さるほどに、其の年の法華會が來た。西行はぶら〳〵と高雄にまゐり、神護寺に詣でて、今を盛りの花の蔭なぞを、樂しさうに歩いてゐる。これを見つけた文覺の弟子どもは、息を呑み聲をひそめつゝ、『うちの上人に知らしてはならぬ。』と相警めてゐた。ほどなく法華會を果て、いづれも坊へ歸つて、まアよかつた上人のお目があの法師の墨染めの姿にときらなんだのは、なんといふ仕合はせであらうと、悦び合つてゐる時、坊の庭の方に、大きな聲で、『ものまう。』とおとなふものがあつた。そこは上人の居間で、弟子たちの取り次ぎも間に合はず、『誰ぞ。』と叫んで、針魚の形したる木劍片手に、障子さらりと引き開けた文覺の顏を、じろりと見て、

『身は西行と申すもの、法華結緣のためにまゐり申した。今は日も暮れなんとするほどに、この庵室の片隅を貸したまはれ、一夜を明かし候はん。まげても。』と、慇懃にさう言つた。手ぐすね引いて待ち構へてゐた文覺、

『これへ入りたまへ。』と、自ら案內して、先づおだやかに對座した。弟子どもは次ぎの間で、手に汗握りつゝ、どうなることかと、わく〳〵して、形勢を窺つてゐる。

『年ごろ御名をうけたまわり申して、早く見參に入りたく存じ居りたるに、不意にわせられて、この上の喜びはござらぬ。よくこそお尋ね下された。』と、文覺の挨拶は案外にもやさしくおだやかであつた。弟子どもは類の外に顏見合はせつゝ、あれで甘く釣つておいて、今にポカリとやるんぢやな。いづれただでは濟むわけがない。……と目に物言はせて、頷き合つた。

『わたくしこそ、早く上人の見參に入りて、お話どもうけたまはりたく思ひ居りながら、今宵まで折りを得ざりし次第念なれ。それにつけても今宵の嬉しさよ。』と、西行も負けないでお世辭を言つた。

かくして、二人の兩極を合はしたやうな物語は、火花も散らさないで、ねんごろにつゞいて、今か今かと火ぶたのを待つてゐた弟子どもをば、寧ろ失望させた。

其のうちに非時が出て、主客二人はいよ〳〵むつまじく膳に向ふた。やがて夜の床となつたので、弟子どもはいづれこれは明けの朝のことよ、と舌うちさへして、皆々眠りに就いたが、夜が明けると齋が出て、また暫らく物語をつづけた後、西行は短冊に歌書きのこして、厚く禮を述べつゝ、門まで文覺に送られて歸つて行つた。

『なんのこツチやい。』と、弟子どもは、月夜に釜をぬかれた形となつて、ぼんやりしてゐた。

『西行に出逢ひたらん節は、頭打ち砕いてくれんと、日ごろ仰せられたるに似もやらず、あのしづかな御物語は、何事に候ぞ。』と、弟子の一人は、不平らしく、文覺の側に依つて問ふた。文覺はカラ〳〵豪傑笑ひをして

『あはれ、言ひがひなき者どもよ、あの西行は文覺に頭砕かるゝ顔つきか。文覺の頭をこそ、眼に見えぬ棒で打ち砕かんずる西行なれ。』と、首を縮めつゝ言つた。こんなに物を恐るゝ風情を見せた文覺の話しぶりは、後にも先にも見ることの出來ないものであつたと。

其の六　銀の猫

西行も放浪のうちに年をとつて、文治二年八月となつた。彼れの詩想は漸く枯淡の境に入り、彼の人生觀は厭世のうちに一味の洒脱を加へて來た。俗事と聞けば唾して去り、耳を洗ふて賤つた彼れも、俊乘坊重源上人に說かれて、南都

東大寺再建の沙金勸進に奥州へ下ることゝはなつた。平泉の館に一族の秀衡入道を訪ふのが第一の目的である。俗縁を辿るといふことも、西行にはたゞ行雲流水の往くがまゝにまかせるやうなもので、今はさしていやなことゝも思はぬまでに心が枯れて來た。其の昔し出家遁世に臨みて、幼兒を蹴落したなぞの稚氣を顧みると、をかしくもまた阿呆らしかつた。

奥州への旅は格別急ぎもせぬので、好きな海を眺めつゝ下つた。鎌倉に近く大磯に暫らく足をとゞめて、鴫たつ澤に初秋の朝な夕なを樂み、そろ〳〵と鎌倉へやつて來たのは、八月十五日であつた。先づ鶴ケ岡の八幡へ參詣にと、鳥居の畔まで行つた時、後ろから、鎌倉の主、偖は天下の主、右大將賴朝が、社參の行列に追ひ付かれた。これは面倒なものが來たわいと思つて、西行は笠を傾けつゝ、鳥居の蔭に隱れたけれど、眼の早い賴朝は、それを見遁さずに、梶原源太を呼んで『何者なるか、彼の僧の名を問へ。』と命じた。西行はもう隱れることもならず、西海に滅びた平家の殘黨が賴朝を狙ふものと早合點されては迷惑なので、こツちからづか〳〵進み出で、『西行と申すもの、奥州行脚の道すがら、八幡宮に參詣いたさうと存じて、これまでまゐつた。右幕下のお目ざはりおそれ入る。』と、例の朗らかな聲で、源太を飛び越し、ぢがに賴朝の耳に入るやうに言ふと、賴朝もぢき〳〵に聲をかけて、『今名高き西行とな。奉幣の後、しづかに對面して、歌道の事ども談じたい。すぐに館へまゐれ。』と言ふなり、西行が『畏まりて候。』と承知の返答をするのを待ちもせず、さツさと社參に急いだ。西行は厄介なものにつかまつた。將軍職の閑つぶし、退屈しのぎに歌の話なんぞさせられてはたまらぬと思つたけれど、樹下石上を宿とする身の、たまには天下の主の金屋に泊り込み、柔かい茵の肌さはりを味ふてこませと、なか〳〵横着な心にもなつて、八幡宮をはじめ、多くの宮寺を、ゆツくり拜禮した上、賴朝の館へ入つて行くと、お待ちかねに候と、青侍に言はれて、すぐに御前に導かれた。上段に坐つた賴朝はニコ〳〵し

て、西行に座を與へ、

『やア法師、よう見えた。大磯に庵を結ばるゝよし、側のものから聞いたが、いづこからいづこへ行かるゝな。』と、問ふのであつた。

『奥秀衡は、俗縁の一族にもござりますれば、平泉の月を見ながら、大佛殿再建の勸進にまゐりまする心得で、當鎌倉をよぎり申した。』と、西行の言葉は、友だちに物言ふが如くであつた。

『なにさま、秀衡は、三代の榮華を一身にあつめ居る。今日入道して、佛門歸依の心もいと深いとやら、平泉は長て束稲山をひかへ、北上川は東山の裾を流れて、春は花片を浮べ、秋は月影を宿す風情の得も言はれぬとかや。秀衡めおのれの館を伽羅の御所柳の御所なぞと唱へて、奥州に黄金の花の咲かんばかり、一門の繁昌を誇り居ると聞く、ちと鎌倉の質朴に習はずば、金雞山の雞が夜啼して、北上川の魚を驚かすてふ金色堂の光に曇りのかゝることもあらうと、法師の口から、昔一族の誼を思ひ、よく〳〵秀衡に教へとらせよ。』と、頼朝はじようだんのようにしていふのであつたが、西行は忽ち武將の眼底に野心を藏めてゐるのに氣づいて、鎌倉と奥州とに、戰ひの起るも遠きにあらずと、心に悲しみながら、頼朝の顔を見詰めた。鎌倉方は敗れやうと、平泉の館が陷らうと、軍商賣の大將の興亡盛衰は、西行にとつて、朝顔の花が咲いては萎むのを見るのにひとしかつた。たゞ其の度に田畑を踏みにじられ、米麥粟稗を掠められる百姓があはれで、甲冑着けた強盜ともいふべき軍兵の、互に顔も見たことのないものどもが、敵と名づけられ、味方と呼ばれて、恩讐もないもの同志の殺しつ殺されつするのが無殘である。西行の心にはたゞもう獸といふ人間の愚劣な動作が、忌はしく呪はしいのであつた。將軍とか武將とかいふ獸が大きな面して、世にのさばつてゐるのを見苦しいと思つた。

人間の中の一番殘ましく卑しい職業にあるものと、西行の眼から見られてゐるとは知らずに、頼朝は、いよ〳〵上

機嫌で、『御坊に歌道の話を聴かう。當代の歌人が口傳は、後の世の寶ともならう。硯箱あるか、文臺取り出でて寫し取れ。』と、書記の侍臣を喚んだ。

『愚衲が歌を詠みまするは、たゞ〳〵花や月に向つて、感じの動くがまゝ、折節は三十一字を並べ候まで。歌道の奥旨なんぞ、全くもつて存じ申さず。』と、西行はきつぱり斷つた。

『折角呼んだものを、さうむげには申さぬもの。賴朝を俗中の俗人と見て、歌の話聴かすが過分なりと思ふならば、御坊が在俗の頃、奥儀を究めたといふ弓馬の道に就いて、何なりと語られよ、その話なら賴朝も些か聴く耳はもつて居る。俗物には俗な話がよからう。どうぢや法師。』と、賴朝は胸の廣いところを見せて、『あはゝゝゝ。』と大きな頭を搖ぶるやうに振つて笑つた。

『弓馬の道は、在俗のころ、なまじひに傳來はいたしましたれど、保延三年遁世の後、先祖秀鄕以來の兵書を殘らず灰にいたしました。兵家の事は諸惡の源、罪業の泉にはべれば、昔し學びたることも、いさゝか心底に殘しとゞめ候はず。さりながら、かく御問を受けて、何一つお答へもいたさゞらんこと、あまりに心なければ、弓馬の道は畢竟弓馬を棄つるが奥儀の奥儀たるところ、弓を折り、軍馬を掛作に用ゐて、こゝに其の道は完きものに候と申す。これに就き、少し委しく申し上げ候はん。』と、西行は二三寸膝を進めた。賴朝も容を正しつゝ、

『師の禮をもつて道を聽くに、高座は憚りある。それツ。』と、近侍に目くばせして立ち上ると、近侍は早速に心得て、賴朝の茵を西行の下座になほした。西行はじろりと見て、苦い顔をした。賴朝が人を懐けて人の上に立つ術はこれぢゃな、こんな小供だましをやつて、喜ばせるのぢやな。さう思つて、心に領きながら、世を棄てゝ身はなきものと思ふ身に、人の好き嫌ひなんぞしたくはない。好きぢやと言へば、唐天竺の人間まで、我が國の人間と同じやうに好きぢや

し、嫌ひと言へば、この世に生きとし生けるもの丶人臭いは皆嫌ひぢやが、其の中でも、殊に頼朝といふ人殺しの問屋の元締は蟲が好かぬと、西行はつひうッかり若かつた心の覇氣を出しかけて、さう考へたのである。一體我が國なぞといふ小さな言葉が氣にくはぬ。一天四海、唐天竺までも皆我が世界ぢや、我が國ぢや丹波、近江、山城、相模と境を限つて國を定むることもないわ。……そんなことまで西行は考へてゐるのである。

『さア、これから、いさゝか、兵法の講義を始めまする。……』と、おごそかに前觸れをして、偕高らかに、西行が朗詠したのは、大江の千里の歌であつた。

『月見ればちゞにものこそかなしけれ、わが身一つの秋にはあらねど。』

この歌をいく度か繰りかへし繰りかへして朗詠した其の聲は、一度ごとに變つて行つて、西行得意の音聲變化の妙法を極度まで現はした。

『我が身一つの秋ではない。……これが兵法の極意でござる。萬人皆一様の秋。……お解りになりましたか。』

西行に促すが如くさう言はれて、頼朝は、呆氣に取られた。烟に卷かれたやうに、ぼんやりしてゐたが、やがて中啓で一つ指貫の膝をぽんとたゝいて、

『わかり申した。御苦勞〳〵。』と言ひながら、もとの座に着いた。

星月夜鎌倉山に烏の啼く音は寂しかつた。右幕下の御館に錦の衾着せられた一夜の宿りも、西行には針の席に寢た如く心持ちがわるくて、樹木石上の草の茵が戀しかつた。折柄の名月で、幌の外には眞晝のやうに白い光が流れてゐたけれど、月を見るにさへ、營中の奥深くては、廣い廂や大きな屋根が邪魔になる。紙張から首さへ出さば、星も月もすぐそこにあるといふ自由な境地にくらぶべくもない。人間といふ阿呆は、何を苦んで、こんな大きな殿舎を建てゝ住ひた

がるか。我れから好んで窮屈をするたはけめが。

あくれば八月十六日、西行は頼朝をはじめ、北條、和田、梶原の諸侯が擧つて引き留めるころもの袖を振り拂つて午の刻に營中を辭した。其の時近侍の者が西行の前に、うや／＼しく『下されもの。』と披露したのは、廣蓋に載つた白銀製の猫であつた。西行は白銀の猫と頼朝とを見くらべて、心のうちで、『成るほどよう見立てた、あの漢は白銀の猫ぢや。化猫ぢや。』と思ひながら、引ツ摑で押しいたゞいたが、旅には用のない厄介な荷物が一つ殖えて、コロコロと持ちにくいのを、ころもの懷中ふくらまして捻ぢ込み、ほつとして表へ出た。スルとそこに遊んでゐた賤の童が二三人。其の一人に向つて西行は、懷中から銀の猫を摑み出しつゝ。

『よい、手遊品ぢや、さアこれをやらう。』

この銀の猫をば、こわ／＼貰つた童は、其の父母とゝもに、後からひどい咎めを受けたといふことは、西行もつひに知らなかつた。自分の無慾から、わざ／＼人の子を罪におとした不思議の因縁を西行に知らせたいと、鎌倉武士は語り合つてゐる。

其の七　都が戀しい

四方を行脚しては、また都に歸つて來る。人間が嫌ひぢや、人間の一番多くうぢや／＼と蛆のわいたやうに生きてゐる都は、殊に嫌ひぢやと言ひながらも、いつしか都大路に其の漂浪の姿を見せる西行であつた。やッぱり人間を離れてゐると人臭さゝが戀ひしくなるのぢや、都が戀ひしいのぢやと、都の人々は噂さしあつた。

『久しぶりで、德大寺殿をおとづれてみやうか。何十年何候せぬか、それも數へにくいほどぢや、わしの顏をおぼえ

てはおはすまいのう。』

突然ひとりごとに、西行がこんなことを言ひ出すのも、年の故でがなあらうか。

西行は在俗の時、北面にならぬ前は、堂上に仕へて、徳大寺家のものであつた。後徳大寺の左大臣は、和歌の道に通じ、もとの家人から、西行の如き歌よみの出たことを喜んでゐる。逢へば必らず喜ぶにちがひない、招いたとて來る法師でない、衣冠を泥土に委して、官位なんぞ不淨なものと思ふてゐる法師の心を察して、逢ひたいとは思ひながら、頭ごなしにやツ付けらるゝのを恐れてゐる其の左大臣の邸の門へ、ある日ひよツこりと、西行の姿が現はれた。門番の老爺は西行と知らぬので、汚い法師が、何しをるかと、一心に睨み詰めてゐた。門前から暫し、館の屋根を眺めてゐた西行は、寢殿とおぼしい建物の棟に、繩が引き廻はしてあるのを見るや、不思議にたへないで、いつまでも立ちつくした。門番はいよ／＼怪しい僧めが、今一歩踏み込みなば、これをくらはしてくれんと、太い棒を引き寄せて待つてゐる。西行はいくら考へても、寢殿の棟の繩が解せぬので、つか／＼と門を入つて、例の鋭い聲で門番を呼んだ。門番は先を越されたやうな氣がして、擲り付けてやらうと思つてゐた心も身體とゝもに竦んだ。

『なんじや、何か用か。』と、慄へ聲で問ふのが漸うであつた。

『あの家の棟の繩、あれは何をするものぢや。』と、西行は高く指さして訊くのであつた。

『何かと思ふたら、愚かなことを尋ねくさるわ。あれはなア。……』

さう言ひながら、門番の老爺は腰を伸ばしつゝ、西行の側に下りて來て、『あれはなア、あれは其の何んぢや、寢殿の棟に鳶がとまるのを厭はせらるゝ、當御館がぢき／＼の御思ひ付きぢや。御館はよろず發明にわたらせらるゝで、あんなことの御工夫にもなるのぢや。あれを見よ、鳶はあのやうに、空で輪を描いてゐるが、こゝの棟へは下りたことが

ない。』と、黒く汚ない鼻を蠢めかしつて言つた。

『偖はそんなとこか。當館の主人も思ひのほかな、うつけ者ぢやのう。』

西行は憚り氣もなく、さう言ひ放つて、豆煎るやうにカラ〳〵と笑ひつゞけた。

『なに、御館をうつけものとな。』と、門番の老爺は怒りの眼を剝いて、顏に朱を注いだ。さうして、あの手頃の棒を持つて下りなんだのが殘念さうであつた。

『うつけものぢやから、うつけものと言ふ。鳶が棟にとまつてなぜわるいのぢや。鳶でも、鴉でも、鳥はもとより。獸、蟲の類までをいつくしんで、さういふものとゝもに暮らす心にならねば、左大臣の重き役目は勤まらぬわ。西行と申す出家が、門前まで來て、さういふたと諸太夫にでも言へ、この邸の棟から鳶を追へば、鳶は他の邸の棟に行くぞ。自分さへよければ他人のことはどうでもよいといふのか、そんな心で天下の政治には携はれぬぞ。それにあの繩のかけざまはなんぢや。心の醜さをよう現はしてゐるでないか。』

さう言ひ棄てゝ、西行は、門に唾を吐きかけるなり、さツさと、立ち去つた。それから二三日して西行はまた德大寺家の門前に來たが、棟に引き廻はした繩の其のまゝなのを見ると、舌打一つして立ち去つたきり、もう決して、德大寺家の門に近寄ることはしなかつた。

其の年、西行はゆくりなくも、昔しの同心に、東山のほとりでめぐり合つた。人の嫌ひな西行も不意に舊知との再會に微笑んで、其の場から、ともに西國の旅にさまよい出ることゝなつた。月日とゝもに流るゝやうな生活をした二人は、もとの若さが、あとかたなしに消えて、汚ない老僧と成り果てゝゐる。

『法の修業は一向にまだ未熟にはべれど、歌の道ばかり少しは心得申した。』と言つて、同心は其の近詠二三を口吟

して聞かせた。西行は彼れの歌に感じもしなかつたけれど、彼れの心の殊勝さを讃めたいと思つた。

『水夫に頭を打たれても、腹立てぬだけの心の鍛錬はまだ出來ぬか。』

『まだでござりまする。』

言ふことが正直なのも、西行の氣に入つた。いやになるまでまたともに行脚をつゞくることにして、行く〳〵津の國の江口の里にさしかゝつた。頃しも治承二年九月も末の秋は深かつた。旅の笠をばら〳〵と村雨のたゝくに氣もとめないで、二人の法師は、伊勢路で別れた以來の物語に興をおぼえてゐたが、雨いよ〳〵はげしくて、ころもの袖の濡るゝのには、のんきな二人も少しまゐつた。

とある家の軒に立つて、しばし雨宿りしてゐると、其の家は古く傾いてゐて、軒にも雨が漏つた。家の内の雨漏りは殊にはげしくて、さながら瀧みたいだ。主の尼とおぼしきが、たゞ一人幅の廣い板を一枚、頭に頂いてうろ〳〵してゐる。西行何心なく、いつもの朗らかな聲のやゝ細い調子を美しく出して、

『賤が伏屋をふきぞわづらふ。』と、やつてのけた。彼の尼たちまち、身體をしやんと立てゝ、

『月はもれ雨はとまれと思ふには。』と、即吟につけた。西行も圓心もほと〳〵感じて、其のまゝ家の内へつか〳〵雨漏りも厭はずに入つて行くと、尼は喜び迎へて、すぐに連歌を催すべく、塗りの剝げた文臺を取り出した。其のうち夜に入つて、雨もやんだので、その尼の希ふとほり、屋根の破れから晩秋の月影を美しく眺めることが出來た。

この尼もとは遊女で、多くの男をだました罪の深さを思ひつゝ、こゝに精進してゐるのであつた。尼の年は四十あまり、まだどこか衿もとあたりに、昔しの江口の君が仇な色の痕をとゞめてゐる。

『世の中をいとふまでこそかたからめ、かりの宿りををしむ君かな。』

連歌が果てた後、どういふわけか、尼は二人の旅僧を泊めることだけはいやだといふので、西行も圓心も草の枕が雨に濡れたであらう、まげて一夜だけを、月の漏るこの宿に、と頼んでみても許してくれぬのだ。そこで西行が即吟にかう詠じたのである。スルと尼は笑つて、かへしの歌、

『世をいとふ人としきけばかりの宿に、心とむなと思ふばかりぞ。』

さう口吟むなり、西行の手を取つて、今まではあけなかつた奥の一室に誘ひ入れた。棄ておかれた圓心の面ふくらしつゝ、

『こゝろすまれぬ柴の庵かな。』とやると、尼はすかさず、奥から走り出で、

『都のみおもふかたとはいそがれて。』と、つけつゝ、誘ふた。奥の一室の屋根からも、もとより月が漏る。

この時の西國の旅は、冬を過ぎて、春までつゞいたが、またも都が戀ひしくなつたまゝに西行は圓心と二人で上つて來て、津の國の江口をよぎり、あの尼はと、雨が漏り月の漏つた家をたづねたけれど、一面に草茫々として、どこがどこやらわからなかつた。西行は傾いた小さな石礎を草の中に見つけて、『あはゝ。』と獨り笑つたが、圓心は笑ふことも出來ずに、悵然として立ちつくしつゝ、いつまでも動かなかつた。それなり圓心をそこへ置き去りにして、西行は都へ上つた。圓心とはもう逢ふ折りがなかつた。

都に一と月ばかりゐて、また東國に下り、大磯に鴫りたつ澤の風光を樂しんでゐると、こたび千載集の勅選があるといふ知らせが來たので、俗を忘れた身にも、歌のことは心がゝりたまゝ、急いで都をさして上る道に、はからず登蓮法師の下るのに逢ふた。

『千載集には、わしの歌が載つてゐやうか。』と、西行は先づそれを問ふた。

『早や世に披露ありて、御身の歌もあまた加へられた。御身の歌を載せずになんとしやう。』と、登蓮は自分のことのやうに、嬉しさうな顔をして答へた。

『さらば問ふが、鴫たつ澤の秋の夕ぐれ、といふ歌は載つて居るであらうか。』と、西行はきつとなつて再び問ふた。登

『其の歌は見および申さず。』と、登蓮は考へ／＼答へた。

『わしの歌から、鴫立つ澤の秋の夕ぐれ、をおとすやうでは、其の集のあたひも知らるゝ。左樣なものは見ても詮なし。』

さう言つて、西行はまた足をかへして、東國に下つたけれど、其のうちに、やはり都が戀しくなつたと見え、東山の雙林寺に立ち戻り、寺の畔りに庵を結び、花の木なぞ植ゑて、この木に花の咲くころ死にたいと言つてゐた。

『ねがはくは花のもとにて我死なん、そのきさらぎの望月のころ。』

この歌を詠んだのは、建久六年で、其の九年の二月十六日、花も咲けば月も盈ちた夜に、西行は七十三歲で往生を遂げた。

——二四、七、一〇——

三年……（一）

廣津和郎

一

『小松さん、お電話でございますよ。ミタヤマさんから』

電話係の若い女がかう叫んだ。

『なに、ミタヤマ？』と社會部兼文藝部記者の小松は、讀み耽つてゐた文藝欄の原稿から顏を上げて、小首を傾げながら立上つた。ミタヤマ？　彼にはさういふ名は思ひ出せなかつた。

『ミタヤマだね？』電話室の前に行つて、そこに立つてゐる紫色の仕事着を着た若い女に彼は訊き返した。

『えゝ、ミタヤマさんて被仰いましたよ』顏にぶつ〳〵ニキビの出てゐる電話係は、にや〳〵笑ひながら、『女の方ですよ』

『女だつて？』

『えゝ』

へんに色氣づいたやうな女事務員の笑顔に對して、態と苦り切つた顔をして見せながら、彼は電話室に這入つて、話器を耳に當てた。

『もし〳〵、僕小松ですが、あなたはどなたですか？』

『小松さんですね、もし〳〵、あなたは小松さんですね？』電話はかなり遠かつた。『わたくし△タヤマ……』

女の聲だが、どうも言葉がはつきりしない。

『もし〳〵、どうもはつきりしないんですがな。何ヤマさんですつて？』

『お解りにならなくつて？　待つていらつしやい、今まはして見ますから』さう云つて、チリ〳〵とまはして見て、『もしもし聞えますか？　わたくしキ…タ…ヤ…マ…もし〳〵、北山はつですの』

今度ははつきり聞えた。

『あゝ、解つた〳〵』と小松は元氣な聲を出した。『おはつさんなの。取次いだものがミタヤマだなんていふから解らなかつた。……暫く。よく無事だつたね。隨分心配してゐたんだが、ほんたうによく無事だつたね』

『えゝ、あなたも御無事でよござんしたわね。……それや大變だつたのよ。何とも彼とも、それや口で云へないやうな目に遭つたのよ。ほんたうに、お話にも何もならないのよ……』

『さうだらうともさ。……併し實際無事で好かつたね』

そんな事が一言二言繰返された後で、

『もし〳〵、今日お暇なら、會つて下さらなくつて？』

「あゝ、いゝよ。――一寸忙がしいので夕方まで社にゐるが、六時頃からなら暇があるんだがね」

「それぢや、六時半頃東京驛でね。あたし今神田にゐますの。……では、六時半頃東京驛に行つて待つてゐますからね」

「あゝ、いゝよ」

「東京驛の一二等待合室……よくつて、婦人待合室の方ぢやないのよ。普通の一二等待合室……」

「ああ、いいよ」

「ぢや、さよなら。……乾度よ」

小松は電話室の前に尚も立つてゐる電話係の女の手前、生眞面目な顏をして電話室を出たが、自分の机の前に歸つて行くと、自然に微笑が浮んで來ないではゐなかつた。

「何と云ふをかしな女だらう……」と彼は机の上の原稿を見ながら考へた。その原稿は小説家のXの書いた評論で、震災が藝術に及ぼす影響如何といふ事を論じたもので、震災後間もなくの今の場合、新聞の文藝欄としてはかなり重要な原稿だつた。その原稿が手に這入つた事を小松は喜んで、さういふものを手に入れた時に感ずる職業的の快感から、彼は最前までそれを面白く讀み耽つてゐたのだが、今の電話から、それがへんに無興味なものに思はれて來て、彼は電話の主の事ばかりを考へ始めた。「何と云ふをかしな女だらう。……だが、よく生きてゐたものだな。若しかしたら、死んでゐやしないかと思つてゐたのに……」

震災後間もなく、小松は社からの命令を受けて、本所深川方面の燒跡に視察に行つたことがあつた。小松は自分は山の手に住み、その朋友親戚等もみんな山の手方面に住んでゐたので、九月一日の大地震で命を失つたものは、彼の周圍

には一人もなかつた。それだから、彼はさう云ふ點では、割合に幸運な氣がしてゐたが、本所深川方面に視察に行く時になつて、ふと思ひ出したのは北山はつのことだつた。——彼は彼女が本所に住んでゐると云ふ事だけは知つてゐたが、それがどこだかは知らなかつた。それだから、その安否をたづねる手段と云ふものがなかつた。

彼は屍體が大きな蛙の腹のやうな色をして澤山浮んでゐる隅田川のへりを歩いてゐる時には、その水に浮いてゐる屍體の中に、ひよつとしたら彼女がゐはしないかなどと考へた。被服廠の跡を見た時には、そこに山をなしてゐる燒屍體の間に、やはり彼女がゐはしないかなどと考へた。

だが、時が經つにつれて、彼は彼女を忘れてゐた。——それが、地震後一ケ月半程經つた今日になつて、突然彼女から電話がかかつて來たわけなのである。

『兎に角、よく生きてゐたものだな!』と小松は再び微笑しながら呟いた。そして何と云ふをかしな女だらう?一體あの女は何と考へてゐるのだらう!——この俺を何と思つてゐるのだらう?今頃になつて又俺に電話をかけて來るとは!』

小松は彼女とのなれそめの最初からの事を思ひ出した。さうすると、益々微笑が浮んで來ずにはゐなかつた。

二

丁度三年前の冬——クリスマスに近い或晩だつた。小松は九時頃銀座通を歩いてゐた。その時分、彼は毎晩、街の灯りに何處となく歩きまはる癖がついてゐた。彼は或女と戀に落ちて、一年程前からその女と同棲してゐたが、その同棲生活に飽きが來てゐた。

一體小松は隨分若い時分——十六七の頃から遊びを知り、女を知つた男で、その女と戀に落ちる前に、一度世間並の結婚をした事もあつたが、善良で無智で、良人の云ふ事をはいはいと唯聞いてゐるその妻が、直ぐ鼻について來た。それにその善良な妻は生理的方面から云つても、甚だしく不完全だつた。寧ろ不具と云つても差支へなかつたかも知れない。その病身の女は、併しやがて死んでしまつた。——彼はその善良な、併しとても堪らなく退屈な女を死ぬまで、自分の側に置いて置けたと云ふ事を、自分の幸運に思つた。さういふ意味は、彼女の死が早く來た事を、彼女のために祝する氣持だつた。若し彼女がいつまでも生きてゐたとしたら、彼は彼女を我慢することが出來たであらうか？　あの善良な女に對して、冷淡や殘酷な仕打をせずにすんだといふ事は、彼女のためにも、彼のためにも、どんなに幸運なことだつたらう！

それから間もなく彼は『戀』に落ちたのである。一年前から彼が同棲してゐる女と。

或一派の青年文士達や、それを取りまく文學好きの女達の寄り集まつて作つてゐる會合が、月々あつた。小松は記者をしてゐる一方、二三篇の小說を發表した事もあり、又その方面で自分を築き上げて行かうと云ふ希望も持つてゐたので、よくその會合に出席した。その女はそこに出席する女だつた。

「彼女はたしかに美貌だつた。文學好きの女には、由來めつたに美人のゐないものだが、あのNは全く例外だね。」と若手の流行兒として人氣のある小說家Aが、日頃の辛辣にも似ず、さういふやうに批評したほど、それ程彼女は美貌だつた。——彼女の情熱的な眼が、ぢつと彼に注がれてゐるのに氣がついた時、彼が思はぬ幸福が自分のふところに飛び込んで來たと思つたのも無理ではない。

金持と云ふ程ではないが、併し生活に困らない程度のゆとりを親から受けついだ高商出の會社員の細君だつた彼女

は、その會社員との結婚生活に退屈を感じて、自分からその家を飛び出して來たやうな女だつた。

『あたしは、その人を愛する事は出來たのよ。それは氣の好い、深切な人だつたのよ。でもね、愛することは出來ても、尊敬する事が出來ないんですの。——尊敬出來ない人と生涯を共にするなんて、考へても堪らないことなんですもの』

彼女がさう云つた時、小松はぞくぞくする程のうれしさを感じたものだつた。

『僕には初めて人生の意義が解つて來たやうな氣がします。——自分の生れた事が、無意味でなかつたやうな氣がします。僕は幸福です』

瞬間——いや、或は一ケ月か二ケ月、彼がさう思つたのは、ほんたうだつた。

『あたしこそ、あなたによつて救はれたのよ。——あたしこそ』

そこで二人は同棲してしまつたのである。彼等は周圍から羨望の眼をもつて見られた。併しその幸福は、すくなくとも小松の心の中の幸福は、長くは續かなかつた。

『あたし、どうしても、あなたの心が自分のものになり切つてゐない氣がして、苦しくつて、苦しくつて、堪らないの。——どうしてもどうしても、苦しくつて堪らないの。あたしの氣持は、あなたに較べて、どんなに深いでせう……』

胸の豐かな彼女は、その豐かな胸を搖り上げ搖り下げるやうな形にして溜息をした。『未だ足りない、未だ足りない！』彼女は哀願するやうな、又強制するやうな調子で、日々時々、彼から愛情の誓ひを聞かうとした。

この女は眞實だ。たしかに十分眞實だ。だが眞實で俺を窒息させる！——かう彼は考へた。彼は小說にあるやうな幸福な立場に置かれた自分が、實はちつとも幸福を感じないといふ事を考へた。希望通りの戀を得て、希望通りの女の情熱

を眼の前に見て、ちつとも喜びの胸に溢れて來ない自分を見出した。

これは抑々何故だらう？——この女の神經と俺の神經との間の不調和だらうか？この女の神經に對陣するのには、俺の神經の三倍の强さをもつてしても尚足りない。——いや、これはどう考へて見ても、俺の不眞實のためではない。俺は彼女の情熱の前に、へとへとに疲れて、もう起き上ることが出來なくなつてしまふのだ……

『ね、人には一人だけの氣持になりたい時がある。一日一時間でもいいから、俺をたつた一人の氣持にしてお吳れ。ね、四六時中お前の事を考へてゐなければならないとしたら、ほんたうにそれは生き地獄だ。いいかい、さうして吳れなかつたら、俺には自分といふものを考へて見る暇もないぢやないか。第一創作をする暇もないぢやないか』

『では、あたしよりも創作の方がお大事？』

『莫迦だね、お前は。——お前のは眞實、いや、たしかに眞實だ。立派に眞實だ。眞實なことはほんたうに眞實だ。だけれどね、眞實過ぎるといふものは、何と云つたらいいかね、つまり度を過ぎると云ふ奴は、すくなくとも健全ぢやないからな。健康ぢやないからな。——病的だからな』

『あなたは、二人の心がぴつたりすると云ふ要求がないんだわ。いい加減で滿足の出來る方なんだわ。生温くて滿足の出來る方なんだわ』

『いや、物事にはゆとりが……ゆとりがあるといふことが自然なんだよ。困つたね、俺は疲れるんだ、つまり疲れるんだ……』

同棲二ケ月目頃から始まつたこの不思議な爭ひが、この哀れな小松をへとへとにさせて、そして草の上にでも何でも打たふれて休息したいと思ふ旅人のやうな心にさせてゐた。——そこで彼の散步が始まつたのである。社の歸りに、な

るたけいつまでも外をぶらついてゐたいと云ふ心持が搖して。酒のそれ程飲めなかつた彼も、毎夜さうして歩きまはつてゐる中に、だんだん醉心地の愉快さなどと云ふものを知つて來た。無論やけ酒でも何でもない。又やけ酒を飲む程、不幸だと云ふ程の不幸でもない。――だが、若し彼の散歩が、彼の休息だつたとしたら、その休息を一層酒が效果あるものにする事に役立つたには違ひない。

そんな風にして、クリスマスに近い冬の或夜、彼は銀座通を歩いてゐた。行きつけのカッフェエで、カクテエルの二三杯を引つかけた彼は、かなり好い心持になつてゐた。クリスマスと歳末とのために、銀座通は非常な賑ひだつた。飾り立てた店々の明るい燈に照らされた鋪道の上を、ほろ醉心地で歩いて行くと、擦れ違ふ女の視線が、度々彼の視線と合つたりした。――『いよう、七十點』いよう、今度のは大分いいな。一つ思ひ切つて八十點をくれてやるか』そんな風に、行き交ふ女の品さだめを、ひとり心に呟くやうな輕い氣分になつてゐた。

京橋の方から左側の鋪道の雜閙の間をぶらぶらと、さう云つた輕い氣分で通りながら、尾張町の角まで來ると、さてそのまま新橋の方まで歩いて行くか、それともライオンにでも寄つて又一杯引つかけるか、いづれにしても、未だ家に歸つて、あのN子の顏を見る時間でもないと思ひながら、そこに佇んでゐた。

すると、丁度その時、おはつ――北山はつがそこを通りかかつたのである。小松は彼の女が彼の行きつけのKカッフェエに半年ほど前までゐたので、彼女の顏をよく知つてゐた。だが、半年ほど前から彼女の姿が見えなくなつたのを思ひ出した。彼は自分の後から、彼に氣がつかずに通り越して行つた彼女を見ると、急につかつかと早足に彼女に追ひついて行つた。

『おはつさん』から聲をかけた。――無論酒が彼を元氣にしてゐたのである。

吃驚した顔をして、おはつは振向いた。

『あら……暫く』彼女は立止つて、丁寧に叩頭した。

『何處に行くんだい？』

『うちに歸りますの……』

『君のうちは何處だい？』

『本所ですの』

『送つて行つてやらうか、タクシイで』

『ほんたう？　うれしいわ』

『よし、送つて行つてやらう』

最初冗談半分に云つた言葉が、直ぐそのまゝほんたうになつてしまつたので、彼は一寸自分で狼狽した。だが、こんな風に若い女をタクシイで送つて行つてやるといふのも、彼に取つては、偶然な、そしてめづらしい經驗には違ひなかつた。『これもなか〳〵暇つぶしにはハイカラだ』そんな事を考へた。本所まで彼女を送つて行つて、それから青山まで引つ返せば、時間も丁度程よい頃になる。――彼は十二時近くにならなければ、家に歸つて行かない習慣が、いつの間にかついてしまつてゐた。

『數寄屋橋まで歩かう』

『えゝ』

二人は肩を並べて歩き出した。おはつは身長（せい）の高い女で、中丈の小松とそれ程高さが違はなかつた。美人とは無論云

へないが、併し眼鼻立も整つて、全體が痩せがたなのに、胸のあたりには外國の女のやうな豐かさがあつた。小股に、內足にちよこ〳〵と步くやうな女ではなかつた。大股に、さつさと足をはこんでゐた。――『この女には洋裝の方が似合ひさうだな』派手な飛白のお召か何かのコオトの上に、黑天鵞絨の襟卷を、首を埋めるやうに引つかけて、さつさと大股に步いて行く彼女を見ながら、彼はこんな風に考へた。Kカッフェにゐた時分には、別段彼の視線を惹きつけた女ではなかつたが、かうして見ると、一種の味のある女のやうな氣がした。

『君は大分前からKにゐないんだね』

數寄屋橋で乘つたタクシイが動き出すと、小松は直ぐにかう訊いた。

『えゝ、もう半年ばかり前に止めてしまつたのよ』

『そして今はどうしてゐるんだい?』

『暫くうちで遊んでゐたのよ。――だけれどね、遊んでゐてもつまらないから、先月から××商館に通つてゐるのよ』

『ほう、××商館に。……すつかりヂミになつてしまつたものだね』

『だつて、もうカッフェは厭になつてしまつたんですもの』さう云つたが、丁度タクシイが明るい銀座通を通り出したので、『少し明る過ぎるわね』と云つて、彼女は窓の外から射し込む街の燈を避けようとでもするやうに、身體を捻つて、『いやあね、こんな明るくつちや。もつと暗い道が通れないものか知ら……』

『人に見られるのが厭なのかい?』小松は笑ひながら、からかふやうにさう云つたが、實際彼自身だつて、かうしてこのおはつと一緒にタクシイに乘つてゐるところを、知つてゐる人に見られるのは、あんまり好い氣持もしなかつた。

『さうでもないんだけれども、でもお店の人や、Kの人達に見られたら、それや困るわ……でも好いわ。かまやしない

わ。
少し大袈裟に、さも決心したやうにさう云つて、身體を反身にするやうにして、見られたつて構はないと云ふ表情をした時、小松はそれを見て、何だか頬笑みたいやうな氣がした。――『一寸可愛らしい女だ』さう云つたやうな氣がした。

だが、タクシイは京橋を渡ると、直ぐ右へ曲つた。街の燈が急にまばらになつたやうに、あたりが薄暗い氣がした。

Kのウェートレス達の噂などが出た。――おゆきさんは未だゐて？　おきみさんは？――そんなやうな事をおはつの方から、小松にいろ／＼訊いた。

併しさういふ話が一段落つくと、もう何も話しする事がなかつた。そこで二人は暫く默つた。

『君は幾つだい？』暫くして、小松は又話のきつかけを作つた。

『二十二よ』とおはつは直ぐ答へた。『あたし幾つに見えて？』などと首を傾げて見せるやうな女で、彼女はなかつた。

『二十二なら、もうお嫁に行つたつて、いい時分だな』

『さうね。もう遅い年でもないわね』おはつは氣のないやうな調子で、さう答へたが、急におほほと笑ひ出して、『あたし、ほんたうはお嫁に行つたのよ。だけれど、つまんないから、出て來ちやつたのよ』

『ほう？』と小松はおはつのその調子に好奇心を起した。――あんまり輕く平氣でさういふ事を云つて退ける暢氣な調子に。――

『いつ頃』

『こないだよ。ほら、あたしがKを止めたでせう。それから直ぐ行つたのよ。Kでそんな噂をしてゐなくつて？』

『いや、僕は聞かなかつたよ』

『さうを』さう云つて彼女は一寸考へるやうな眼付をしたが、『もう結婚なんて、こりごりよ。二ケ月ばかり鼻をつき合はせてゐたら、つくづく厭になつて來ちやつたのよ、——だから出て來てしまつたの』

『……』小松は自分の結婚生活の事を一寸考へた。……こんな女もゐるのかな、と彼はN子と比較して見てさう思つた。

『泣蟲なのよ、男の癖に……』とおはつは云つて、おほほと笑つた、『好い人なのよ。それは……。未だ學生なの。大學生なのよ。あなたの事を知つててよ。あなたの小說を讀んだと云つてゐてよ。……あたし氣の毒になつて結婚しちやつたんだけれど、泣言ばかり云つてゐるので堪らなくなつちやつたのよ』

『やつぱりKに來た人?』

『ええ、さうよ。——でも、氣の毒と思つて結婚なんかしちや、駄目だわね、やつぱり』

『……』

小松は何とも答へずに、唯頰笑んでゐた。センチメンタルな學生が、この女に云ひ寄つて、この女と一緒になり、それからこの女から逃げられる形を想像してゐた。——だが、一體この女はどういふ女なんだらう?こんな話を他の女のやうに尻込みもせず、唯顏を知つてゐるだけの自分に平明に喋るといふのは、兎に角變つてゐる女に違ひないがと云つて、別段アバズレたと云ふやうな風でもない。身體の形やその身振りなどが、普通の日本風の女のやうなつつましやかな型からははづれてゐるが、併し決してしとやかさがないと云ふのではない。肩から胸のあたりの線などは、明るくて、軟かで、十分蠱惑的であるとさへ云つても差支へないだらう。云ふ事は割合にはつきりしてゐるが、併し深い教養

があると云ふ風でもない。そして又考へて見ると、昔Kで顔をよく知つてゐるといふだけで、途中で會つて直ぐ自動車に一緒に乘つて來るといふのは、一體どういふつもりなのだらう。――小松はKカッフェには、毎日のやうに寄つてはゐた。だから、始終彼女と顔を合はせてはゐた。だが、それだけで、何の警戒もなく、直ぐ自分と一緒にタクシイに乘らうとは。

『これは一種の自由な女なのかも知れないな。一種の新しい感じ方で生きてゐる女なのかも知れないな。――敎養からこんな風にならなくとも、時代的にこんなやうな感じ方の女が、そろそろ日本に生れて來るのかも知れないな』そんな事を小松は考へた。さう考へて見ると、男にしても、近頃は非常に物の考へ方が違つて來たやうだ。彼よりも十歳年下の青年達――二十前後の青年達と、彼と同時代――三十前後の者達との間には、物の感じ方に、著しい相違が現れて來たのは事實だ。大體今の二十前後の者達には『こだはり』と云ふものがない。小松の二十前後の時には、未だ華厳の瀧や淺間山で所謂思想自殺をするものが多かつた。思想自殺――人生がどうかかうかと云ふ事についての煩悶病が多かつた。ところが、近頃はその思想自殺と云ふ奴が實に減つて來た。彼は自分の職業柄、毎日毎日人間の自殺などと云ふものを、ペンで取扱はなければならないが、氣がついて見ると、青年男女の自殺の動機が、大概戀か金かだ。男に捨てられて自殺するとか、女に捨てられて自殺するとか、又は金を使ひ込んで自殺するとか、そんなのばかりだ。――『人生は不可解云々』と云つたやうな書置には、殆んどぶつからない。つまりそんな事が問題にならないで、近頃の青年達は生きて行ける。生きるのも死ぬるのも現世的にやれる。へんな舊式な思想のこだはりや、道德のこだはりなどにふん捉まつてはゐない。思つた通りにどんどん生きてゐる。……

小松は自分の考に、如何にも感心したと云つたやうな氣持になりながら、そんな事を考へてゐた。酒が彼のさうした

感激に一層油をそそいでゐた。

『俺などは、もう舊式な人間なのかも知れないな。始終道德と云ふ奴にこだはつてゐるからな。――そんなものを捨てて、自由に一つ生きるかな。自由に、明るく生きるかな。隨分子供の頃から遊びなどしたが、併しどうも自由にも、明るくも行かなかつたからな』

彼が默つてそんな事を考へてゐると、おはつももう喋ることがなくなつたと見えて、默つて何か考へ込んでゐるらしかつた。タクシイはがたがたと烈しく動搖しながら、廣いけれども、薄暗い町を走つてゐた。川があつたり橋があつたりするが、小松はそれが何處だか氣がつきもしなかつた。――タクシイの搖れる度に、おはつの肘や肩が彼の肘や肩にぶつかつた。オオヴアコオトの上から、彼女の肉體の柔かさと、ほのかな温みとが、彼に傳はつて來た。そして彼女の化粧の何の香か彼には解らない香が、彼の鼻に漂つて來た。

『この女も惡くはないな』ふとこんな考へが浮んで來た。彼は何となく頰笑みたくなつて來た。『この女に向つて、先づ俺は俺の「自由」を試驗するかな。――俺は遊びと云ふ奴も、結婚と云ふ奴も、それからあの面倒臭い戀愛といふ奴も知つてゐるが、あの自由な、肩のこらない、そして魅力のあるらしいアヴンツウルと云ふ奴を知らないからな。物語で讀むアヴンツウル、戀の冒險……ああ云ふ奴には今まで頓とぶつかつた事がない。……だが、ひよつとすると、今俺はそれにぶつかつてゐるのぢやないかな。この位の機會(チヤンス)から、機敏な奴は直ぐ甘い果實を摑み出せるんぢやないかな』

小松はへんに全身が顫へて來るのを感じた。『おや、俺は顫へてゐるな』と彼はそれに氣がつくと、再び頰笑んだ。

人形町の明るい灯が、タクシイの窓を暫くの間掠めて行つた。が、やがてそれも消えると、あたりが一時に暗くなつた。

『寒かあない？』

『いゝえ、そんなでもないわ』

彼の手は、臆病氣に、彼女の手を探るために、少しづつ少しづつ延ばされて行つた。そしてたう〳〵彼女の手に觸れた。手袋をはめた柔い手は、思ひがけなくも、その接觸に別段引込まうとしなかつた。彼は思ひ切つてその手を握りしめた。すると、その把握に十分なる應へがあつた……

『この邊で下りたら遲くなる？』とその成功に急に増して來た大膽さが、終に彼にこんな事を囁かした。

『阿母さんが待つてゐるのよ。あたし一寸銀座まで買物に行つて來ると云つて出て來たばかりでせう。だから……』彼女は一寸考へるやうな顏をして、言葉を杜切らしたが、やがて思ひ切つたやうに、きつぱりとした調子で『いゝわ、下りるわ、構はないわ』

そこで小松は、運轉手臺との間のしきりを開けて、姿勢も崩さず向ふ向きにハンドルを握つてゐる運轉手に向つて、かう呼びかけた。

『君、こゝで止めてくれ給へ、こゝで』

一時間後に、小松は勝利者のやうにゆつたりした氣持になりながら、青山行きの電車の一隅に腰を下ろしてゐた。今夜の偶然な出來事を思ふと全く夢のやうだつた。往來でいきなり會つて、瞬く間に、簡單に、無雜作に、行くところまで行つてしまはうとは。——思ひも設けぬ美食の味が、彼の味覺に快い餘韻を殘してゐた。豐滿な胸、彈力のある唇………

『それにしても何と云ふ不思議な女だらう！』と小松は微笑しながら考へた。何の抵抗もなく、無雜作に行くところま

で來ながら、荒んだところが少しもない。二ケ月の結婚生活をした事があると云ふ割合には、一切の事に初々しささへある。――小松は人形町の停留場で右と左に別れる前に、『小遣にしたまへ』さう云ひながら彼女の手に十圓札を渡さうとすると、

『要らなくつてよ、お金なんか！』彼女はぷつと腹立たしさうな顔をして横を向いてしまつた。――全然荒んでゐるか、それとも金でも欲しいかと云ふ以外に、唯單純に男に身を任せる女の氣持と云ふものは、小松には見當がつかなかつた。だから彼には益々おはつが解らなかつた。

だが、いづれにしても、彼はこんな場合によく感ずる道徳的な反省を少しも感じないのが何より好かつた。恐らくそれはおはつの明るい態度のために違ひない。彼は家でいつものやうにいら／＼しながら彼を待つてゐるN子の事を考へた。『N子は何も知らないんだ』と思ふと、くす／＼笑ひたいやうな快感を覺えた。――N子の執拗と重い苛立たしい神經とに對して、ひそかに輕い復讐をしてやつたやうな氣がした。しつこい味に食傷してゐる人間が、一服の清涼劑を飲んだやうなすが／＼しさを感じた。

＊　＊　＊　＊　＊

それから丁度六ケ月程經つた頃――その間に小松はN子と別れてしまつてゐた。この狂的な戀愛理想主義の女は、『どうしてもあたしにはあなたの心が掴めない』さう云つて彼女自身から別れ話を持出して、彼との同棲生活を破壞してしまつたのである。――小松がそのクリスマス近い冬の夜の冒險をすつかり忘れてしまつた時分になつて、或夕方、突然おはつから電話がかかつて來た。

『いつぞやは失禮……今夜お眼にかゝれて？』とまるで五六日前にでも會つたと云つたやうな調子だつた。

小松は彼女の指定した場所に行つた。彼女は半年前と同じ表情をし、同じ調子で彼を待つてゐた。

『別段用もないのよ。たゞ、急にお眼にかかりたくなつたの』

二人は少し散歩し、それから自然と足がクリスマス近い晩に一時間を過したあの濱町河岸近い或小路の薄暗い家の方へ向つてゐた。

おはつは六ケ月前と同じ單純と、同じ初々しさを持つてゐた。幾分でも荒んだやうな形跡は全然見えなかつた。――彼女は父に死に別れて、母や姉と一緒に住んでゐるけれども、別段生活には困らない事、彼女の××商館の報酬はそつくり彼女の小遣になるので、家を助ける必要は少しもない事、家で遊んでゐても差支へないけれども、ぽんやりしてゐても面白くないので、小遣取りかたがた退屈まぎれにKカッフェに出たり、今度の××商館につとめたりしてゐるのだといふ事、そんな事を語つたりした。

けれども、やがて薄暗い小路から出て、人形町まで來ると、この前と同じやうにあつさりと別れて行つた。

『又いつか會つて頂戴ね』

『ああ、いいとも』

小松の乘る電車の方が先に來たので、車掌臺に乘つて、そして振返ると、向う側の停留場に佇みながら、彼女は笑つてお辭儀をした。――小松は腹の底から頬笑まないではゐられなかつた『何といふ不思議な女だらう。半年も經つた今頃になつて、何だつて急に電話をかけて來たのだらう。――一體あの女は何を考へてゐるのだらう？』

小松はこの前も今度も『愛する』と云ふ言葉を一言も云はなかつた。さう云へば、彼女自身も、そんな言葉を一言も

云はなかつた。――二言目には結婚とか同棲とかを強ひる女ばかりを見てゐる小松には、結婚や同棲は愚か、『愛するろといふ言葉一つさへ要求しない彼女が、不思議に見えた。……

それから後も、五ケ月か半年ぐらゐの間を置いて、思ひ出したやうに、おはつから電話がかかつて來た。

『いつぞやは失禮……今夜お眼にかかれて？』その調子がいつでも同じだつた。

そんな風にして、かぞへて見ると、小松はあのクリスマスに近い晩以來、彼女に五度會つてゐた。そしてその五度會ふ間に、丸二年、足掛三年が經過してゐた。――けれども、二人の關係は、最初と少しも變りがなかつた。別れる時になると、あつさりと、

『又いつか會つて頂戴ね』

『ああ、いつでも』

そして小松は歸る電車の中で、『何といふ不思議な女だらう……』といつも思ふやうに思ひながら、いつも頬笑むやうに腹の底から頬笑むのであつた。……

＊　＊　＊　＊　＊

小松はチエブルに向ひながら、そんな事を思ひ出してゐた。最後に會つたのは、その年の四月頃だつた。四月から十月……その間にあの大地震があつたので、時の觀念がすつかり解らなくなつてしまつてゐるが、かぞへて見ると、やつぱり六ケ月だつた。『六ケ月目に電話をかける女……』と彼は再びひとり北叟笑んでゐた。

三

丁度何處行きかの列車の出る前で、改札口から停車場の入口近くまで、乘客の列が長くつらなつてゐた。地震後一ケ月半の東京驛の夕方は、雜閙を極めてゐた。手に手に大きな荷物を抱へた乘客達は、男も女も、災後の日に燒けた黑い顏を、未だ非常時の緊張にこはばらしてゐた。二三等待合室に來ると、ここにも人々が一杯だつた。小松は知つてゐる人にでも見つかるのを恐れたのと、それから邉りの物々しい非常時の緊張した氣分の中に、女に會ひに來たといふのが、一寸氣が引けるやうな氣がしたのとで、身體を入口の外に置き、顏だけ一寸さし入れて、待合室の中を覗いて見た。

おはつの姿を見つけるのは、割合に骨が折れなかつた。彼女は入口に最も近い左側の腰掛に、向う向きに腰をかけて、新聞を讀んでゐた。

コツコツと靴の音を高くさせて見た。内に這入つて行くのも、又聲をかけるのも氣が引けたからである。だが、その靴音に、彼女は直ぐに氣がついて、此方を振向いた。そして新聞を疊んで立上つた。

小松は停車場内の雜閙の間を、急ぎ足に通り抜けて、停車場前の廣場の薄暗いところまで來て立止つた。おはつは直ぐに追ひついて來た。彼女はげつそりと瘦せて、蒼白くなり、身丈(せい)の高いその身體が、黄昏の薄闇の中に、病上りのやうにひよろひよろして見えた。

「隨分瘦せたね。」と小松はその姿を見ると、吃驚して叫んだ。あの大災後、どんなにいろいろの事を經驗して來たのだらうと云ふ事が、直ぐ彼の頭に來た。今年は十月になつても例年よりも氣候が暑いが、併しそれにしても紺飛白の單衣

に、新しくない銘仙の縞の袷を着てゐる彼女の姿が、貧弱に、見すぼらしく見えた。――しんみりした、いとほしいやうな氣持に、彼はなつて行つた。

『これでも餘つ程肥つたのよ。ほんとに一時は骨と皮ばかりになつてしまつたのよ。でもあなたはお變りないことね』

『あゝ、僕は地震後、却つて肥つたくらゐだよ。いつもの怠け者が動きまはらせられるので、却つて身體にいゝんだね』

二人は濠端の方へ歩き出した。

『それやあ、隨分苦勞したわよ』とおはつは彼と肩を並べて歩きながら云つた。『あたし阿母さんを搜すのに、たうとう一ケ月かゝつてよ。それやあ方々歩きまはつたのよ。毎日毎日……』

いつもの通りの平明な調子ではあるが、併し彼女はかなり興奮してゐるらしかつた。――災後間もなく、本所深川に視察に行つた時に見たいろ／＼の物凄い光景が、小松の胸に蘇つて來た。

『僕本所の方に行つて見たんだけれどね、所を知らないだらう、搜しやうもないもんでね』

『あら、御免なさい。――ほんとね、番地も云はないのねえ』

二人は一緒に笑つた。――足掛三年の間に、彼は女の住んでゐる場所も訊かうとしなかつたし、彼女も亦それを男に語らうとしなかつたのだつた。――二人のそんな關係が今更ながら二人に省みられた。

『僕はおはつさんは、或は助かつてゐないかと思つたんだよ』――彼が見た時に、隅田川は丁度上げ汐だつたが、川下の方から川上の方へ向つて、仄白い蛙の腹のやうな水膨れの屍體が、夕陽に照らされながら、ぷかり／＼と逆流してゐるのを見た時、その中におはつがゐるのではないかと思つたり、被服廠の燒屍體の山の中に、彼女がゐるのではな

いかと思つたりした事は、口に出さなかつた。——川岸に引き上げられてゐる水屍體の中に、水の流で色の褪せかゝつた粗い浴衣を着てゐる若い女があつたので、もしやと思つて、それの側に近寄つて見ると、さうした屍體の懐中物を捜して歩く人間がゐると見えて、その色褪せた浴衣の襟の間から、白い肌襦袢がつまみ出されてゐた。そんな光景も彼の頭に浮んで來た。

『あたしは大丈夫だつたのよ。あたしは銀座のお店の方にゐたんですもの』とおはつは云つた。『阿母さんが心配になるので、直ぐ歸らうと思つても、マネージャーが、危い、危いつて止めるんでせう。それでもどうしてもじつとしてゐられないで、逃げ出すやうにして行つたんですけれども、兩國橋まで行く中には、一杯の火でせう。どうもかうも仕様がないの。——それから仕方がなくなつて、方々火に追はれて、銀座まで歸つて來て見ても、もうお店には誰もゐないの。みんな逃げてしまつてゐるの。……今考へると何處をどうしたのか解らないけれども、方々火から逃げのびて、たうとう此處』と彼女は濠の向う側を指さして、『宮城前に逃げて來たのよ。そして草の上に轉がつてゐると喉が乾いて仕方がないんでせう。そこに西瓜賣りが來たので、西瓜を買つたら、こんな小さいのが四圓だつて……』

おはつはさう云つたやうな語り方で、それからの彼女の經驗を語り出した。宮城前で、その西瓜一つを食べたきりで、二日二晩を過した事、そして三日目になつて、本所の自分の家まで歸つて行つたが、無論全然の燒け跡で、家人の消息は解らなかつた事……

『うちの側の溝の中にね、お隣りの小父さんが燒けただれて死んでゐるのよ。——ぞつとしたわ。もう阿母さんも姉さんも、この分ではとても駄目だと思つて、ほんたうにがつかりして、死にたくなつちやつたことよ……』

それから毎日母をたづねて歩いた事、何でも山の手だか郊外だかのお寺に避難してゐると云ふ人があるので、山の手

と郊外のお寺といふお寺を毎日毎日一軒一軒訊いて歩いた事、さうしたら、谷中の何とか云ふお寺にほんとうに母達とが避難してゐた事……

『阿母さんや姉さんの方では、もうあたしを死んだものとあきらめてゐたんですつて。……あたし嬉しくつて泣いちやつたわよ』

かなり平明な、暢氣な物の云ひ方ではあるけれども、その話の間には、強い實感の充ちてゐるものがあつた。――小松はおはつの痩せ衰へた姿を今更のやうに顧みた。

『そして今はどうしてゐるの？阿母さん達と一緒にゐるの？』

『ところがね』とおはつは急に投げ出すやうな調子になつて、『つまんないのよ。――あたしの知らない間に兄さんが出來てゐるの』

『えツ、姉さんの？』

『さうなのよ……』

『地震後に？』

『さうなんでせう。あたしが歸つたので、あんなに喜びながら、四五日經つたら、いや、[illegible]をするの。――あんた達さんぢやなかつたけれど……』

日比谷の角から、濠端づたひに、右の方へ曲つた。何處といふアテはないけれども、人通の多いところから、靜い方へと、二人の足は向いてゐた。

『それでね』と彼女は云つた。『あたし家を飛び出してしまつたのよ。――家と云つたつてお寺の部屋だけれど……』

『そしてどうしてゐるの？』

『小石川にお友達がゐるのよ。そこに今厄介になつてゐるのよ』

『……』小松は急にこの女が不憫になつて來た。兩腕で抱きしめてやりたいやうな可愛さを感じて來た。『下宿に引取つてやらうかな』そんな考へまでがチラリと浮んで來た。彼はN子と別れてから、家を疊んでしまつて、同じ青山の方へ下宿してゐたのであつた。――だが、女との同棲にはもう飽々してゐた。考へて見ても重い氣がした。――『それなら、せめてこの女の生活費を負擔してやらうかな』とこんな事も考へた。地震後どうかと思つてゐた雜誌も、どうやら大概復活する形勢を見せて來た。彼は二年程の間に、たまに小説も賣れるやうになつてゐた。童話なども月に二つ位は買つてくれるところがある。それに社の俸給を合はせれば、自分の生活費を儉めて、多少の金を彼女に送れない事はない。――そして、その位の物質的の負擔は　今の場合の彼女に對して負ふべきが、自分として當然の話だ。

『それぢや困るだらう　いろいろ……』かう云はないではゐられなかつた。『僕がどうかしてやらうか？』

『いいわよ、そんなこと』と彼女は急に横を向いてしまつた。丁度一番最初の晩、彼が小遣をやらうとしたら、ぷいと横を向いた時のやうに。

『だつて、家を離れてゐたら困るぢやないか』

『その位の事どうでもなつてよ。裁縫したつて、小遣ぐらゐ取れてよ。――それに來月になりや、又銀座のお店が出來る事になつてゐるのよ。こなひだ支配人をお訪ねしたら、さう云つてゐたから大丈夫……』

『併し當座の小遣にだつて……』

『嫌ひ。そんな話。もう！』

彼女は吐き出すやうに、顏をしかめて云つた。小松は自分の申し出の一も二もなく却けられた手持無沙汰に、一寸ぼんやりしたが、この女の一徹に驚かずにゐられなかつた。――金と云ふ問題になると、この單純な、明るい女が、何と云ふ強い誇を持つて生きてゐるのだらう。

二人は暫く默々として歩いた。公園の西角を更に左に曲つた。――そこから急に邊りが薄暗くなつた。

『もうそんな話止しませうね』と急に彼女は優しい調子で云つて、彼の身體に寄添ふやうにした。『何處に行くの？』

『何處につてアテがないんだが……』さう答へながら、小松は彼女の眼を見て、『何處かに行かうか？』

『ええ……』彼女はうなづいた。

『いつものとこは燒けてしまつたし……兎に角、今度タクシイの空車が來る迄に考へよう』

* * * * *

十一時頃二人は郊外から院線で歸つて來た。それから市内電車の停留場で別れる時、おはつはいつもと同じやうに『又いつか會つて頂戴ね』と云つた。

『ああ、いつでも……』

青山行きの電車の一隅に腰を下ろしながら、小松が『何と云ふ不思議な女だらう！』と呟いたのも、いつもと變りがなかつた。

だが、今夜は彼はいつもと同じやうに、腹の底からゆつたりと頬笑む事は何故か出來なかつた。恐らくそれは、足掛三年目に、彼が初めてこの女の生活といふものに觸れたからに違ひない。――彼は頬笑む代りに溜息をした。（終）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同 神田區通神保町	上田屋
同 京橋區銀座三丁目	東海堂
同 京橋區元數寄屋町	北隆館
同 日本橋區本石町	至誠堂
同 本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同 北區梅田町	立盛社
京都市七條停車場前	共盛社
同 四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價 金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾八錢）

冊數＼區別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請ふべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂 萬年社 告天社
正路喜社 豐國通信社 日本廣告社
信賴社 金蘭社 一星社

送金注意

一 誌代郵税は一切前金とす、前金切の[illegible]
一 振替貯金 口座番號は東京三四番 長野三三〇五番なり
一 郵券代用は謝絶す 但し郵便局に不便の地に限り割増しにて[illegible]せらるゝを拒まず
一 代金引替 小包の取扱は一切謝絶す
一 集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる御總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし 但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば新號發送せず
一 金二圓以上五圓迄 金七錢（集金手數料）
一 金拾圓迄 金八錢（及送料共）
一 中央公論及婦人公論 代金取纏め御拂込みの場合には各々相當て金額御指定を乞ふ
一 受領證請求は必ず返信料を要す

大正十三年七月廿五日印刷納本
大正十三年八月一日發行
禁轉載

發行兼編輯人 瀧田哲太郎
印刷人 高木鳥二

發行所 東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話 長丸ノ內二〇二二（當分不通）
牛込五〇八九
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正十三年七月廿五日印刷納本

中央公論 八月號（第三十九年第九號）

定價金八十錢（郵稅一錢）

東京小石川研精社印刷